文學博士 井上賴圀
熱田宮々司 角田忠行 監修

平田盛胤
三木五百枝 校訂

平田篤胤全集

東京 平田學會

天覽

台覽

二大人ヲ奉祀セル彌高神社（秋田）

佐藤信淵大人

平田篤胤大人

三易由來記序

昇平二百有餘年。
皇化浹于民。擊壤鼓腹之澤。洋溢于海內矣。當是時。賀茂本居二家。復古之學。浸々然日新月熾。苟志古學者。僉靡不沿其流。溯其源者。然而閭ヽ有蜂衙蟻垤之群。管窺蠡測之徒。動誇于異邦簒奪之王位。而議我萬古不易之
天統。豈可不慨嘆乎。蓋斯病也。數千年間。沈淫于膏肓。而雖與扁倉華復出。無之奈何耳。何則儒之所謂聖者。有眞有僞。眞則上古神聖。繼天立極之類。而堯舜且猶病之者。則謂聖謂聖之一言。有千鈞之威重。至後世不能間然也。三代以降稱聖者。則因魯叟鄒兒。一時媚稱其德。諛譽其善。而得名者。豈得爲眞聖乎。是以太昊伏羲氏之卦爻方位錯亂。遂有連山歸藏周易之三編。相傳雖多。以其道名于一世者。僉以見欺罔於姬昌之姦術。而未嘗有知其簒奪之讖記者矣。今也赫々
天極參神之嚴鑒。不容於厥隱遁。下乎天機自然之命。而致平田翁有是撰也。翁嚮所論八家之一。所與易者不知易威者。而八卦之濫輿。三易之異同。及諸家之說。其是非得失。辨如懸長川。論如轄迅雷。昭々乎。亦皆不能遁其情。三千年間之朦霧。一朝而披拂。太昊氏微妙之眞方位。燦然復明于世矣。學者讀是書。沈潛反復。一旦恍然。有以得其要領。則太昊氏之眞旨。支分節解。與我
神洲之古傳無異。豈俟余言哉。遂書爲序。嘉永元年初秋。三河國山中神祠宮司。竹尾源正胤撰。
豐前國宇佐神宮。奥並繼書。

三易由來記卷之上

大壑　平篤胤撰述
門人　駿河國　新庄道雄　同
　　　武藏國　碧川好尚
　　　常陸國　竹來道彦　校

【一】古者庖犧氏之王天下也。仰則觀象於天。俯則觀法於地。觀鳥獸之文與天地之宜。近取諸身。遠取諸物。於是始作八卦。以通神明之德。以類萬物之情。

此の第一條は。繫辭傳に採りて出せり。（普通の本には地之宜と有れど、今は宋の朱熹が本義に、與地之間、諸本多有天字、と云へるに依りて補へり）庖犧氏を。また太昊伏羲氏とも稱ふ。實には我が扶桑本州の神眞大國主神なるが。彼の赤縣州に渡り往して國を開き。彼處にしばし王と爲りて。其蠢民らに始めて三才の道を傳へむと。天地萬物の易道を觀察して。八卦を作り授け賜へる事は。赤縣太古傳及び此記の本編に委曲に說たれば。今更に云はず。（本編とは、太昊古易傳を云ふ、下これに效ふべし）是の記には其授け遺し賜へりし易法の。後に連山歸藏周易と云ふ三易に爲れる由來を論ふが故に。かく名付たり（前には思ふ旨有りて易學三千年論と號けしかど、再思ふ旨ありて、かく改めたり）さて本文の。始作八卦云々と言へるに。河より圖を出し。洛より書を出せる其の象數に則を取り。かつ仰觀俯察して。まづ八の經卦を作り。其を八節に合せて乾坤震巽坎离艮兌の名を命じて。本命本卦の定則を示し。八索しては。自然にその吉凶の應ある事。また其別卦六十四に。各々其の名を命じて。大象ノ辭をも定め。なほ其毎卦の六十四變を索めて。其時變をも稽ふべき筮法を立たる事までを。含蓄して心得べし。（此はみな本編に委曲せる事なれば、今更に委くは云はずなむ）

【二】易之乾坤。足以窮道通意也。八卦可以識吉凶知禍福矣。然而伏羲。爲之六十四變。周室增以六爻。所以原測淑清之道。而攈逐萬物之祖也。

此の第二條は。淮南子の要略に採れり。抑かの篇は。劉安既に淮南子二十篇を作り畢て後に。其書を著せる用意は。人をして凡より博に致し。粗より精に致すべく。體裁せる由を述たる自敍なり。然れば其の篇首に。夫作爲書論者。所以紀綱道德經緯人事。上考之天。下揆之地。中通諸理。雖未能抽引玄妙之中。才繁然。足以觀終始矣。總要擧凡。而語不剖判純樸。靡散太宗。懼人之惛々然弗能知也。故多爲之辭。博爲之說。又恐人之離本就末也。云々と言ひて。今の本文を出せり。著書の用意。まことに如此有るべき事にこそ。(己この三易由來記を撰ずるに、此の訓へに效ふとしも無れど、易の起原の、伏羲氏に作れる事より延きて、連山歸藏周易の三つに變轉せる次第を論じたる趣の、所思ず、劉安が著書の用意に相似たるも、甚奇くこそ)さて易之乾坤足以窮道通意也とは。唯に乾坤とのみ言へれど。此は父母を云ひて。震巽坎離艮兌の六子を含蓄せるにて。周禮に謂ゆる經卦。乃ちかの三爻小成の八卦を云へり。(易の乾鑿度には、乾とのみ云ひて、父母六子の八卦を兼たる文もあり)文の意は。其小成の八卦にて。三才の道を窮め。天下の意をも通ずるに足るとなり。○八卦可以識吉凶知禍福矣は。八卦とは。此にては。周禮に謂ゆる別卦。乃ちかの六爻大成の六十四卦を云へり。(六十四卦を、直に八卦と稱する事は、本編に已に委く說たりき。)文の意は。小成の八卦にて。道を窮め。意を通ずるに足るを。更に重卦せる六十四卦を以て。吉凶を識り禍福を知る道をも。始めしと云へるなり。○然而伏羲爲之六十四變は。高誘註に。八は變爲六十四卦。伏羲示其象と云へるは然る言にて。彼の別卦六十四を以て。吉凶を識り。禍福をも知るに足るを。又その八々六十四の卦ごとに。六十四の變象をなす法をも示せる由にて。是謂ゆる變爻法なり。(前の經卦別卦の事には、伏羲と云はず、此に始めて伏羲と云へれば、其經卦及び別卦は、伏羲の擧ならぬ如く聞ゆれども、淮南子の意もはら、每卦六十四變の法も、伏羲氏に起れる由を云むと欲する故に、名を此にいひ出たるなり)○周室增以六爻は。高誘

注に。周室謂二文王一也。と云へる如く。伏羲氏の。一卦六十四變の法あるに。周の文王が心と。また更に毎卦一爻一爻の判斷を増。始めて。其の占をさへに立たる由なり。（此のよし委くは、第五條に論ふを見て知るべし）さて是より下の文意は。しか次々に増益し來れる事は。淑清の道を原測し二。上の夫萬物の本祖を。擩遂せむ爲なりと言ひて。其の子書の作二爲書論一者云々と云へる文を結び。凡より博に致せる證例と爲たるなり。（淑は善也濬也、清は澄也潔也、擩は窮に同じ、濬澄の道を原ね測りて、萬物の本起を窮むる義なり）然れば八の經卦の作は更なり。其を重ねて。六十有四の別卦と爲して。各々其の卦名を命じ。また其別卦の。各々六十四變を爲べき筮法。及び其の大象の辭も何も。其の原は伏羲氏に出たるに疑ひ無くなむ。（なほ本編に論へる說どもを、合せ考へて、其の旨を知り辨ふべし）是を以て晉の王弼が易註に。伏羲重卦と云ひ。唐の孔穎達が正義に。其說を用ひて。重卦之人。諸儒不レ同。凡有二四說一。王輔嗣等以爲二伏羲重卦一。（王輔嗣とは王弼なり、此は必ず淮南子の說に據れるならむ）鄭玄之徒以爲二神農一（此はもと易積算法の、孔語に出たる說なり、次條に引くを見るべし）孫盛以爲二夏禹一（こは何に據れる說なるか詳ならず）史遷以爲二文王一（こは史說よりも古く、何くれの書に所見たれど、誤れる說なり、第五條に云ふを見べし）乾鑿度云。垂二皇策一者犧。用レ蓍在二六爻之後一。即伏羲已重卦。（この乾鑿度は、予が本編に引用せる、鄭玄注の書には非ず、謂ゆる乾坤鑿度と云ふ物なり、此書のこと、第九條に云ふを見べし）今依二輔嗣一と言へり。此の說を用ふべし。（王應麟が玉海に、朱震云、論二重卦一者六家、王弼、虞翻曰二伏羲一、鄭玄曰二神農一、孫盛曰二夏禹一、楊聲以レ弼爲レ是、と有るも此意なり）

【三】庖犧氏沒。神農氏作。日中爲レ市。致二天下之民一。聚二天下之貨一。交易而退。各得二其所一。

此第三條は。繫辭傳に。庖犧氏始めて八卦を作れる事を云へる條に接せるを採れり。（但し此に用なき文は、省きて擧たるなり）庖犧氏沒すと云へる

沒は。出に對せる言にて。日沒の沒に同じ。抑太昦庖犧氏は。もと皇國の神眞大國主神に坐すを。彼の國人を教導せむ爲に。暫し彼處に出現して。其の功竟て皇國に歸り給へり。其をかの方言に沒と云へるなり。（然るに秦漢以來、この古方言の由來を知らず。死亡せる事とのみ、心得たるは甚く誤れり、此等の事ども委くは、赤縣太古傳に論へれば、今更に云はず、大扶桑國攷にも、その大概を云へりき。）さて太昦氏の隱沒せるのち。追次ひて神農氏の作れるに非ず。其の間に出たる數氏あれど。然しも大き功績は無りき。然るに彼の國の國柄として。人情固より薄惡なれば。伏羲氏の教へ漸々に頽れて。また猥亂になり以來しを。神農氏は。伏羲氏の彼の國に生遺せる數子の中に。少典と云ひしが子にて。炎帝とも稱ふ。聖德の人なりし故に。祖聖の遺法を受行ひて。種々に教導を爲せり。（その教導せる事ども、及び其出自の委しき考へは太古傳に註し、また別に太古傳の系圖と云ふをも著せれば、其の書等に就て見るべし。）さて交面の如く都市を爲して。民を致し貨を聚めて。交易の道を始めし事は勿論なるが。此の交易と云ふに。是易法の交易を成せる義をも兼說たる傳へなり。是を以て司馬貞が補史記に。敎人日中爲市。交易而退。各得其所。遂重八卦。爲六十四爻と云ひ。羅泌が路史に。於是通其變。八々成卦。艮以爲始。所謂連山易也。故亦曰連山氏と云へり。（若この本文、易說を兼たるに非すと爲ては、繫辭傳に、包犧氏の八卦を作れる事を載せる次に、此の條を出せること、何の由もなき徒事なり、此の條の次に、黃帝の事を出せるには、變通の事を載せれば、易說なること云ふも更なり。）然らば其の易法の交易とは。何なる趣ならむと言ふに。王應麟が玉海に。連山首艮者。八風始於不周。實居西北之方。七宿之次。是爲東壁營室。於律爲應鍾。於時爲立冬。艮震巽离坤兌乾坎は連山之序也と見え。（此は玉海に、王洙曰くとて出せれど、決めて古連山易の遺說なり、其は艮を西北不周山の方に居すと有るが、太昦氏の古易の眞方位にて、曾て周易ありし以來の人などの、思ひ寄べき事に非ざるを以て辨ふべし、古方

位に、艮の西北なる事は、本編に委く注せるを視て察つべし。)皆の皇甫謐が帝王世紀に。夏人因二炎帝一而曰二連山一。連山易其卦以二純艮一爲レ首。夏以二十三月一爲レ正。人統艮漸二正月一。故以レ艮爲レ首など見えたり。抑太昇氏の卦順は。乾坤震巽坎离艮兌なり。然るを神農氏右の如く。唱への次第を変錯せる故に。交易すとは傳へけむ。然れど其は唯卦順の唱へを。交易せる耳こそ有れ。其の卦々の方位を易たる義には非ず。思ひ紛ふる事なかれ。(其は太昇氏の易に、艮の正位は西北の維なり、連山易にも、艮居二西北方一と有る一つを以て、餘の七卦の方位も、また易ざる事を辨ふべし、然るに玉海にまた、連山乾始二於子一、坤始二於午一、至二周易一尊レ乾卑レ坤、其體乃定、と云へるは心得ぬ事なり、)さて此の交易せる傳へを。重卦の事と思ひ誤りて。彼の京房が易積算法に。孔子曰。八卦因二乎伏羲一。暨二于神農一。重二乎八純一。聖理玄微と云へるを始め。(此文は、玉海及び困學紀聞に引たるを、再引たるなり、)周易の鄭玄註に。神農重卦と云ひ。魏志に。易博士淳于意が言に。包犧制二八卦一。神農演レ之。

爲二六十四卦一。皇甫謐が帝王世紀に。庖犧氏作二八卦一。炎帝重二八卦之數一。究二八八之體一。爲二六十四卦一など言ひ。上に引く、補史記にも。重二八卦一爲二六十四爻一と見えたれど。(また同作の史記索隱にも、此の説を出せり、)此れ等の諸説みな誤りなり。其は前本文に擧たる淮南子の文に。伏羲爲二之六十四變一と云ひ。王弼が註に。伏羲重卦と云へるが正説なること。既に委く論へる如く。また玉海に。薛氏曰。神農氏初經本二包羲八卦一。益八卦成レ列。而六十四具焉。神農氏因レ之也と有るが如し。(然るに隋志の五行類に、神農重卦經二卷と云へる目あり、此は決めて、後人の僞撰して、神農に托せるなり、)さて此の易を連山易と稱する義は。世紀に。連山易艮爲レ首。艮爲レ山。山レ上山レ下。是名二連山一と云へるが如し。然れば神農氏を。また連山氏とも稱ふは。此の易法を立たる故なり。是を以て路史にも。艮以爲レ首。所レ謂連山易也。故亦曰二連山氏一と云へり。(鄭玄が説に、連山象二山之出レ雲連々不レ絶と云ひ、世紀にまた、雲氣出二內於山一、とも云へるは共に非なり、神農氏の號をまた

連山氏とも、厲山氏とも、諸書に所見たるは、連山の轉語なるべし、此は羅泌もしか云へりき、)然るに周禮の註に。杜子春云。連山宓戲と言ひ。玉海に。王洙曰。山海經云。伏羲氏得河圖。夏后氏因之曰連山と云へるは甚じき非說なり。殊に山海經には此の文なく。かつ彼の書に有べき說とも覺えぬ事なるをや。(然れど此の說を、路史の自註にも、山海經云とて引たり、最も不審しき事なり、)さて夏后氏の世に。此の易法を用ひし事は。第四條に注すことくなるが。水經注に。連山易曰。有崇伯鯀。伏于羽山之野。世紀に。連山易曰。禹娶塗山氏之子。名曰攸女。生余など有るは。夏世の傳文の偶に存れる物なり。然して此の易法も。周の世まで用ひ來りしを。漢以來は都に廢られて。其の藝文志また隋の經籍志にも載さず。唐志に始めて。連山十卷と出せれど。其は隋の世に。劉炫と云ひし者の僞作して。賞を求めし物なりと。玉海を始め諸書に見えたり。(其が中にも委きは、胡應麟が筆叢に、連山易十卷、見唐藝文志、按班氏六經首周易、凡夏商之易絕不聞、隋牛弘購求篇內遺書、至三十七萬卷、魏玄成等修隋志、晉梁以降亡逸篇名、亡不具載、皆不聞所謂連山者、而至唐始出可乎、北史劉炫傳隋文蒐訪圖籍、炫因僞造連山及魯史記上之、馬端臨據此以爲炫作、或有然者、蓋炫後事發、除名、故隋志不錄、而其書尙傳于後、開元中盛集群書、仍入禁中耳、鄭漁仲謂、此書當時不存則宋世已無可考、今亦未能必其炫也、歸藏今亦不傳、故一書惟論其大槩、不能致詳と云へり。)

【四】神農氏沒黃帝氏作。通其變使民不倦。神而化之使民宜之。易窮則變。變則通。通則久。是以自天祐之吉无不利。

此の第四條も。繫辭傳に。前條に接續せるを採れり。(但し本書に、神農氏沒、黃帝堯舜氏作と有れど、堯舜の字は、此に要なければ省きたり。)黃帝も少典氏の子にて。神農の曾孫楡罔に代りて作れり。(國語また黃帝記の注に、神農と黃帝とは、同母兄弟にて、共に少典の子なりと有り、然れど同母には非ず、其の由は赤縣太古傳、及び三五本國

考、春秋命歴叙攷に委しく云へれば、就て見るべし。）さて爻の意は、事久しき時は弊るゝを、變通して神化すれば。民倦ずして之を利とす。故に久を持して獘せず。此れ易の變通を尚びて。天の祐を得る所以ぞと云ふ義にて。其變通せる易法を。歸藏易と謂ふ。（こは雜卦傳の孔穎達が正義に、聖人因時隨宜不必皆相襲、故歸藏名卦之次亦多異於時、と云へる意ばへなり、）連山易の出來し事も、是に准へて思ふべし、）其は黄帝傳に。帝取伏羲氏之卦象法而用之。據神農所重六十四卦之義、求其重卦之義乃名所制曰歸藏書也と見え。（此にも神農重卦と云へるは非説なり、）路史に。於是正坤乾分離坎倚象衍數。以成一代之宜坤以爲首。所謂歸藏易也。故又曰歸藏氏。と云へるにて知るべし。（二書の文みな甚く切めて引たり、委くは本書に就て見るべし、）此の易法に。坤を首と爲せる事は。帝王世紀に。殷人因黄帝曰歸藏。歸藏易以純坤爲首。坤爲地。萬物莫不歸。而藏於其中。殷以十二月爲正。地統故以坤爲首と見え。禮記の禮運に。孔子曰。我欲觀夏道之杞得夏時焉。（鄭玄云、杞夏后氏之後也、得夏四時之書也、其書存者有小正。）我欲觀殷道之宋得坤乾焉。（宋殷人之後也、得殷陰陽之書也、其書存者有歸藏。）坤乾之義。夏時之等。吾以是觀之と見えたり。（また玉海に、王洙云とて、伏羲重卦、乾上坤下、立天地之位、歸藏先坤後乾、首萬物之母、無闔則无闢、无靜則无動、此歸藏所以先坤歟など有り、）なほ周易の正義を始め、歸藏易の坤を首とせる説は、數ふるに暇あらず、（然れば變通と云ふは。伏羲氏の易に乾坤と有る卦順を。坤は地なれば。萬物之に歸藏すと云ふ義を以て。坤乾と變唱し。其の餘の卦順をも易たる由なり。是を以て黄帝氏の亦の號を。歸藏氏とも稱せること。路史に云へるが如し。（然るを歸藏氏と云ふは、元よりの號にて、其歸藏氏の易なる故に、歸藏易と云ふと釋たる説は、本末たがへり、若この説の如くは、歸藏と云へる號は、何の謂に由ると云ふこと知べからず、また是に就て思ふにも、姓とも有らぬ言なるをや、）また連山を云ふは、艮を首とするに依れる名なる事も

しるし、神農氏を列山氏と稱ふは、列山と云ふ地に生れし故なり、と云ふ說有れど、連山列山厲山は、同語の轉なれば、其は連山易をものせる故に連山氏と稱し、その連山氏の生れし地なる故に、連山とも厲山とも、列山とも云ひしと見むに、其の本末は正しくなむ、（さて玉海に。朱震云。歸藏初經者。伏羲初畫八卦。因而重之者也。其經初乾初奭。初艮初兌。初犖初離。初釐初巽。卦皆六畫。卽此八卦也。八卦既重爻在其中。（此卦名どもの事は、なほ次條の末に云ふを俟て見るべし、）周禮疏。今歸藏坤開筮。帝堯降二女。以舜妃。又見節卦云。殷王其國常毋谷。太平御覽。歸藏云。有白雲。自蒼梧入大梁。昔女媧筮。張雲幕。枚占之曰。吉。昭昭九州。日月代極。平均土地。和合四國。黃神將戰。筮於巫咸。明夷曰。昔夏后啓。乘龍飛以登于天。皐陶占之曰。吉。朱震易叢。引歸藏之乾小畜など有るを以て、其の易書の大凡を知るべし。（なほ種々の書に引たるを出せれど、文繁ければ、多くは引出ざるなり、）然れど右の卦名こそ。黃帝氏の遺法なめれ。此の文等は後に殷の世に記せる文の。偶に存れる物なり。斯て此の易法も。周の世まで用ひしを。其より後は廢られて。其精說は傳はらず。然は有れど。此の易も連山易も。後漢の世まで傳はりし事は。桓譚が新論に據てぞ知られける。（其は玉海に、桓譚新論、連山八萬言、歸藏四千三百言、と云へる文を引き、楊愼が外集に、連山藏於蘭臺、歸藏藏於大卜、此語見於桓譚新論、則後漢時、連山歸藏猶存、不可以藝文志不列其目、而疑之、至隋世之連山、則僞作求賞者耳、と云へるが如し、此の事は、なほ次條の末にも云ふべし、）然るに隋の世には。二書みな既に亡たりし故に。其の經籍志に。連山の目なく。歸藏十三卷。晉太尉參軍薛貞注と出して。末に。歸藏漢初已亡。按晉中經有之。唯載卜筮。不似聖人之旨。以本卦尚存。故。取貫於周易之首。以備殷易之缺。と見え（此文に、本卦尚存と云へるは、かの初奭初乾などを云へり、）玉海に。史記正義。七錄云。歸藏載卜筮之書雜事。中興書目。今但存初經。齊母。本著三

篇、文多缺亂。不可訓釋。崇文曰漢初有歸藏。已非古經。今書三篇不可究矣と見えたり。（又た胡應麟が筆叢に、歸藏易十三卷、晉太尉參軍薛貞、唐司馬膺各有注、按七略無歸藏、晉中經簿、始有此書、隋志因之、至宋僅存、初經、齊母、本著三篇、鄭漁仲以爲、其文質其義古、後學以其不文、則疑而棄之、連山所以亡者、要當復過于此、噫連山夏易也、歸藏商易也、禹貢之文千古敍事宗焉、商書簡潔而明肅、或有過于周者、孰謂夏殷之文不郁々也、隋志稱、此書惟載卜筮、不類聖人之旨、蓋唐世固疑其僞、若鄭以晩出爲辨、則馬端臨之說盡之矣とも云へり、）然れど右の書等に。歸藏を、漢初已亡と云へる說等は委からず。なほ次條にとり總て論ふを視るべし。

【五】宓羲氏始畫八卦。因而重之。爲六十四卦。及于三代。實爲三易。夏曰連山。殷曰歸藏。周文王作卦辭。謂之周易。周公又作爻辭。

此の第五條は、隋書の經籍志に採れり。（是より先に、前漢の藝文志に、宓戲氏始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情、至于殷周之際、紂在上位、逆天暴物、文王以諸侯順命而行道、天人之占可得而効、於是重易六爻、作上下篇、孔氏爲之彖象繫辭文言序卦之屬十篇、故曰易道深矣とも云へり、）此は宓羲氏の始めて八卦を畫し。かつ之を重ねて六十四卦と爲たるが。夏殷周の三代に及びて。分りて三易と爲れる由にて。三易の名は。周禮春官に。大卜掌三易之灋。一曰連山。二曰歸藏。三曰周易。其經卦皆八。別皆六十有四云々と有る是なり（また同書に、簭人掌三易、以辨九簭之名と有る注に、簭用三易也とも云へり、）或說に、繫辭傳に、伏羲氏始畫八卦と云ひて、作易と云はず、而して易之興也其當殷之末世、周之盛德邪と、文王に始めて易と云へれば、周禮に三易と有れど、其の連山歸藏は易に非ず、然るに三易と云へるは、周易の名を以て名くる也と云へるは、繫辭傳を讀こと麁き故なり、本編に論ふを視て知るべし、）其の經卦とは。三畫小成の

八卦を云ふ。三易ともに經卦皆八にて。別卦は皆六十有四と云へば。姫昌に至りて。始めて重卦せりと言ふ說の。無稽なること言ふも更なり。其は尙書洪範の七稽疑中に。曰貞。曰悔と有る鄭玄註に。內卦曰貞。外卦曰悔と有るを以ても。周以前に重卦有りしこと著明なり。（此の鄭玄注は、洪範の疏に引たるを再引たり、玉海に、葉氏三易辨云とて、三易經卦皆八、其別皆六十四、經者其常、別者其變也、其爲六十四者、自伏羲以來、未之有異也と見え、日知錄にも、重卦不始文王と云ふ條ありて、今の周禮の文と、左傳の穆姜が語とを引きて論へり、洪範をこそ引かね、共に予が意を得たる論なり、）さて周易正義に。三易鄭玄易贊及易論云。夏曰連山。殷曰歸藏。周曰周易。連山者象山之出雲連々不絕。歸藏者莫不歸藏於其中。周易言易道周普无所不備。案世譜等群書。神農一曰連山氏列山氏。黃帝一曰歸藏氏。並是代號。周易以文王所演故。謂之周易。猶周書周禮題周以別餘代。故易緯云。因代以題周是也と見え。（此の鄭玄が說の中に、歸藏の說のみは叶へれど、連山の說は非なること、前條に論へるにて知べし、周易の說は殊に非なり、斯て正義の案に、代號に據れりと思へるは、本末違へること、上二條に云へるを以て辨ふべきなり、）路史に。世紀云。夏人因炎帝曰連山。商人因黃帝曰歸藏。文王廣六十四卦。著九六之爻。謂之周易。或曰連山之文禹代之作。歸藏之文湯代之作。周易之文特文王之作。至於爻辭則周公。而彖象則孔子也など見えたり。（彖象とは、彖傳上下、象傳上下を作れる義なり、）さて卦辭とは。卽謂ゆる彖辭にて。每卦の下に。乾元亨利貞など有るを云ひ。爻辭とは。每爻の下に。初九潛龍勿用など有るを云ふ。王充論衡の正說篇に。古者烈山氏之王得河圖。夏后因之曰連山。歸藏氏之王得河圖。殷人因之曰歸藏。伏羲氏之王得河圖。周人因之曰周易。其卦皆六十四。文王周公因彖十八章。究六爻。世之傳と有る。彖十八章とは。六十四卦の彖辭を作れるを言ひ。究六爻とは。三百八十四爻の辭を作れるを云へり。（玉海に、姚信云、連

山氏得河圖、夏人因之曰連山、歸藏氏得河圖、商人因之曰歸藏、伏羲氏得河圖、周人因之曰周易と有るは、論衡の說に據れりと見ゆるが、共に三氏各々に、河圖を得たる趣に云へるは誤りなり、八卦の原は伏羲氏に出たるを、三代共に其の八卦を襲ひて、少か趣意を替たるなるをや、)さて文王姬昌が作れる彖辭は。總て六十四章なり。然るに其六十四章を。十八章と云ふ所以は。周易上篇の卦數三十。下篇の卦數三十四なるが。二篇の卦ともに。二卦づゝ顚對し。かつ表裏反對するも有りて。二卦一卦に約納するが故に。上篇十八卦下篇もまた十八卦と成る。其章々を彖せる故にかく言へり。(其の顚對とは、屯と蒙、需と訟の如きを云ひ、反對は上篇に六つあり、乾坤、坎離、頤大過となり、下篇に二ッあり、中孚小過となり、是にて上篇十八卦、下篇もまた十八卦に約納す、其の卦々に彖せる故に、彖十八章と云へり、上下篇共に、各十八卦と成る由ばかりは、先輩も既に心著たる人有りき、)さて爻辭を周公姬旦が作と云へるは。周易正義に。爻辭多文王後事。馬融陸績等以爲。卦辭文王。爻辭周公。今依之而用之。また鄭衆賈逵等以爲。卦下之彖辭文王所作。爻下之象辭周公所作など言へり。然れば本文の說は。もと馬融鄭衆等が遺說に據たる說と聞ゆれど委からず。其は前後に擧る古說どもを考ふるに。爻辭をも皆姬昌にかけて云へれば。爻辭も本姬昌が作り創めしを。全く作り畢ざりし故に。後に姬旦が其の擧をつぎて功畢たりけむ。是を以て其の辭に。姬昌後の事も多しと見えたり。(爻辭に、姬昌後の事多きことは、明の郝敬が、周易正解の初めに、いと委曲に記し辨へたる說あり、其說の較略は、下に抄し出るを俟て見べし、)抑周易上下篇なる彖辭爻辭の。周室に成れる事は。かの淮南子に。伏羲爲之六十四變。周室增以六爻と云へる語。及び今引き出たる文等は更なり。なほ其の古說の多かる中に。乾鑿度に。孔子曰。伏羲氏之王天下也。始作八卦。質者无文。以天言此易之意。夫八卦之變象感在人。文王因性情之宜爲之節文。鄭玄注に。九六之辭是也。(此文意は、伏羲氏始めて八卦を作れるに、質朴の世なれば、天象を

以て、變易の意を云へるまでの事にて、彖爻の辭の如きは有らず、夫は八卦の變象を感通すること、人々の識に因りて異あれば、豫て一定し難き故なり、斯て後に文王、人の性情の宜に因て、六十四卦の節文を爲れり、其は謂ゆる九六の爻辭是ぞとなり、）易緯通卦驗に。虙戲一名虙方牙。蒼精作易無書。以盡序驗曰。矩衡神五鈐。與象出亡徵應。（鄭玄曰、矩法也、鈐猶要也、虙戲時質、道樸、作易以爲政令、而不書、但以畫見其事之形象而已矣、）また虙羲作易。仲命德。維紀衡。周文增通八々之節。轉序三百八十四爻。以繫王命之瑞。謀三十五君。常其一也興亡殊方。各有其祥などゝも言へり。（仲とは四方を云ひ、維とは四角を云ふ、四方に乾坤坎離を配し、四角に震巽艮兌を配せる由にて、文の意は、伏羲四方四隅に八卦を配して、人に道德を命じ、衡行を紀せりしを、文王かの八々六十四卦の節々に、彖辭を增通し、その三百八十四爻の毎爻に、爻辭を傳序し、我に屬する三十五諸侯と相ひ謀りて、其の一を常にし、興亡の方を殊にして、各々其の祥有らしめ、

革命の時を得て、王と成べき天命の瑞を繫けて、民に信せしめたる義なり、）是等の諸說を。照し應せて攷ふるに。今の周易上下篇は。六十四卦の畫象と。其の卦名のみ古昔の眞物にて。彖辭爻辭ともに。姬昌父子が作意の文なること論ひ無し。故是を以て。其の彖爻の辭に。王命の瑞辭を係けて。殷の天下を奪はむと欲する。逆意の見ゆる危辭ども多かり。（抑姬昌が、殷の天下を奪はむと欲せる事は、一朝一夕の事に非ず、由りて來るところ漸にして、既に古人も、其の祖父古公亶父と云ひし者の時より、其意を挾めりと云へる如くにて、其の心巧は姬昌に至りて大成し、其子姬發に至りてぞ遂たりける、此の由は、第八條に論ふを見て知るべし、）其は彼の周易上下篇の。彖辭を作れる時はも。是より早く。姬昌その擬聖の姦才を以て。殷の諸侯を懷け。かの論語に。三分天下有其二と云へる如く。蠶食せる國多く。遂に事起すべき體なりし故に。殷紂王怒りて。羑里に彼を拘へ因たりし間の事なり。（此は早く荀子に、文王因於羑里、而作易と云ひ、史記の周本紀及び自序にも、

其囚羑里、蓋益易之八卦、為六十四卦と記し、朱熹が本義にも、繫辭傳の易之興也、其於中古乎、作易者其有憂患乎、と有る所の註に、夏商之末、易道中微、文王拘於羑里、而繫彖辭、易道復興とぞ云へる。)是を以て其名を周易と稱して。夏殷の易と名を異に為たり。其はまた周易の正義に。連山起於神農。歸藏起於黃帝。周易起於文王。乃周公此謂周易也と云へるを思ふべし。(鄭玄が易贊の說に、周非地號、周易以純乾為首、乾為天、天能周帀於四時、故名易為周、周以十一月為正、天統故以乾為首と云へるは、甚じき非說なり。)さて古易には。僅に大象の類なる義理の說こそ有れ。象爻辭の如き占辭は有ること無く。其の象感を。人々各々の器識に任せ在けるを。周易に至りて。始めて嚴めしき一定の占辭を。卦爻ごとに繫具たること。上に引き出たる文等にて灼然かり。(但し玉海に、張行成曰とて、伏羲始畫八卦、是為先天、有圖象而未有書、夏曰連山、天易也、商曰歸藏、地易也、有法數而未有書、文王曰周易、人易也、始有書矣、と云へるを始め、絕て占例の書の無りし趣に云へる說有れど、周易上下篇の如き、事々しき物こそ無りつれ、少かの占例を載せる、末書どもの有りし事は、連山歸藏の遺文等も彼此見え、また左傳にも往々、周易ならぬ占辭の見ゆるにても所以たり。)さて右三易の占法の趣は。春秋襄が九年の傳に。遇艮之八云々の注に。周禮太卜掌三易。然則雜用連山歸藏周易。二易皆以七八為占。故言遇艮之八。史疑古易不利。更以周易占變爻。と有る。正義に。洪範言。三人占則從二人之言。孔安國云。夏殷周卜筮各異。三法並卜。是言筮用三易之事也。七為少陽。八為少陰。其爻不變。九為老陽。六為老陰。其爻皆變。周易占九六之爻。傳之諸筮皆是占變爻。連山歸藏占七八之爻。二易並亡。不知實然以否。穆姜司空季子。並於遇八之下。別言周易。知此遇八非周易也。と有るにて。其の大凡を知るべし。(また玉海に、春秋正義、崔靈恩以為、筮必以三代之法、故太卜掌三兆三易、儀禮特牲、少牢筮皆旅占卜徒父筮之、其卦遇蠱不引易文、注云、卜

人而用筮、不能通三易之占、據所見雜占言之、劉炫云、成十六年、筮卦遇復亦是雜占、則筮法亦有雜占、不必皆取易辭と云ひ、また程迥曰、古之筮者兼用三易之法、衞元之筮遇屯、曰利建侯、是周易或以不變者占、季支之筮遇大有之乾曰、同復于父敬如君所、此固三易辭也、既之乾則用變矣、是連山歸藏或以變者占、なども見えたり、思ひ合すべし、）○上件三易の事に就て。明の楊愼が升菴外集に。周禮太卜掌三易之法。于令升注云。天地定位。山澤通氣一章。此小成之易也。帝出乎震。齊乎巽。一章。此連山之易也。初乾初奭。初艮初兌。初犖初離。初釐初巽。此歸藏之易也。（また或は、歸藏易今亡、惟存六十四卦名、而又闕其四、與周易不同、需作溽、小畜作毒畜、大畜作㝬畜、艮作狠、震作釐、升作稱、剝作僕、損作員、咸作誠、坎作犖、謙作兼、遯作遂、蠱作蜀解作荔、无妄作毋亡、家人作散家人、渙作奐人、又有瞿欽規夜分五卦咨霹林禍馬徒、復名卦不知當周易何卦也、とも見えたり、）小成者伏羲之易也。而文王因之。連山者列山氏之書也。而夏人因之。歸藏者歸藏氏之書也。而商人因之。夏得人統。故歲首建寅。而卦首艮。商得地統。故歲首建丑。而卦首坤。周得天統。故歲首建子。而卦首乾。伏羲之易小成爲先天。神農之易中成爲中天。黃帝之易大成爲後天。予按邵子之易。先天後天。其源出於此。今之讀易者。知有先天後天。而不知有中天可乎と云へり。（但し此は爲後天と云ふまでは、于令升が說にて、予按と云ふより以下は、楊愼が自說なる由なるが、于令升とは、西晉の世に、于寶字は令升と云ひし人なり、然るに此の說は于寶に非ず、宋の羅泌が路史の餘論に、論三易とて出せる說の省略にて、予案と云へる語は、やがて路史に、陳臥子曰とて載せる說の、一字を違へず出せるなり、楊愼が杜撰盜說は、今に始めぬ事ながら、此は甚しと云ふべし、次に擧る易小帖の于寶註と云へるは、此の楊愼が說に欺かれて、實に于寶が說と思へるならむかし、）さて近き世清の毛奇齡が。易小帖と云ふ物に。于寶註三易謂。連山首艮。歸藏首坤。周易首乾。而

又云天地定位。山澤通氣云々。此小成之易也。帝出乎震齊乎巽云々。此連山之易也。初乾初奐。初艮初兌。初犖初離。初釐初巽。此歸藏之易也。則連山終艮。歸藏次坤。與首艮首坤之說自相牴牾。且以大傳帝出乎震一節爲歸藏之易亦不合。且亦不知所據。（こは連山首艮と云ひつゝ、帝出乎震云々の章を、連山也と云ふは、彼の章に艮を終りに出せれば合ず、歸藏首坤と云ひつゝ、初乾初坤と坤の次に在るを何ぞと難めたる說にて、實に此の言の如し、○なほ別條に、歸藏易卦名有異字、以坤爲奐、以坎爲犖、以震爲釐、而他皆如字、家傳有歸藏鏡、八字皆異、相傳歸藏易本如是、要是後人僞爲之者、今已無是物矣、但八異字下、仍有八正字、按字書有釐犖字無奐字とも云へり、玉篇奐苦魂切、古文坤、焦氏筆乘、奐卽坤字とあり、）若又云伏羲之易小成。爲先天。神農之易中成爲中天。黃帝之易大成爲後天。此卽宋儒以伏羲爲先天以文王爲後天。以八卦爲小成。以六十四卦爲大成之所始。夫大傳祇。有八卦而小成一語。此又增中成大成。原是不妥。且其云小成者。就揲蓍者言之。謂十八變中九變。而成內卦。祇爲小成。必十八變而後引伸。觸類能事已畢。非謂伏羲祇畫八卦。至神農而後重之。八卦因重。皆伏羲事。與神農無與。大傳自明。其以小成屬羲易。固已可怪。（こは皆理れたる說なるが中に、たゞ十有八變の十有は、攙入文にして、唯八變なる事を知ざる耳は非なり、）其の由は本編及び、次卷の末條に論へる、筮法の說を視て辨ふべし、）若宋人造爲因重之法。陰陽層累加畫。指爲先天。而以先天屬伏羲。乃取說卦中羲易卦位。指爲後天。反以爲此文王易。非羲易。則悖誕極矣。小成大成。先天後天。太陽太陰。少陽少陰。皆前人已言。而更易其說。遂致懸絕。始知偶然之言。後將憑倚。不可不慎と云ひ。（なは別條に、宋人以羲易爲先天、文王易爲後天、始于陳搏、此竊干寶伏羲先天、神農中天、黃帝後天之說、而改襲之、然不及中天也、先天後天見文言、若中天、則揚雄太玄列九天之名、一曰中天非中古之謂、後有造爲陳氏中天圖者、

已可笑矣とも云へり、）また連山歸藏二易久亡。按北史劉弘奏購求天下遺書。其時劉炫頗有名。遂造僞連山易。魯史記等百餘卷。上之。已取賞去。而後有訟之者。免死除名。鄭樵謂。連山易至唐始出。皆僞書也。崇文總目。載歸藏易。晉太尉參軍薛貞註。在隋世尚存十三卷。後祇存初經。齊母。本蓍三篇。至唐世。又有司馬膺注十三卷。至宋亦亡。晁以道謂。商易爲張天覺僞作。或云卽司馬膺作。故吳澄謂。連山歸藏劉光伯。司馬膺僞書也。（此等の事は、既に前條に註せる說等と合せ考ふべし、）若衞元嵩。作元包。亦以先天後天太少陰陽。立卦一如于寶所言。此則倚傍不足道者。（元包の事は、玉海に、唐藝文志衞元嵩元包十卷、後周人、唐蘇源明傳李江註、李江序、文質更變、篇題各異、夏曰連山、殷曰歸藏、周曰周易、而唐謂之元包、其實一也、包者藏也、言善惡是非吉凶得失、皆藏其書也、晁氏志、坤爲首、因八卦世變、爲六十四卦之次、又著運蓍說原二篇、統言卦體、不列爻位、自云、周易元包一也、元包以坤爲首、乾後之義祖歸藏宋乾道中、張行成、以蘇李徒、言其理未達其數、著元包數總義二卷、と見えたり、）第桓譚新論云連山八萬言。歸藏四千三百言。連山藏于蘭臺。歸藏藏于太卜。則必漢時尚見其書。故字數鑿々如此惜不可考矣と云へるは。皆理れたる說等なり。（なほ委くは、本書につきて見るべし、）さて次條より以下は。周易のみに關かる事等の論ひなり。

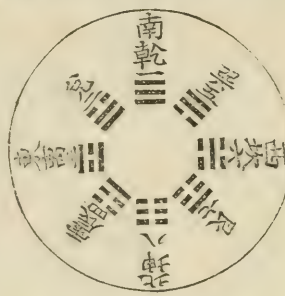
【六】帝出乎震。齊乎巽。相見乎離。致役乎坤。說言乎兌。戰乎乾。勞乎坎。成言乎艮。

（萬物出乎震、々東方也、齊乎巽、々東南也、齊也者言萬物之絜齊也、離也者明也、萬物皆相見、南方之卦也、聖人南面而聽天下、嚮明而治、蓋取諸此也、坤也者地也、萬物皆致養焉、故曰致役乎坤、兌正秋也、萬物之所說也、故曰說言乎兌、戰乎乾、々西北之卦也、言陰陽相薄也、坎者水也、正北方之卦也、勞卦也、萬物之所歸也、故曰勞乎坎、艮東北之卦也、萬物之所成終、而所成始也、故曰成言乎艮、）

此第六條は。說卦傳に採りて載せり（但し萬物出乎震、と云ふより以下は、注文なるを、古來より誤りて、本文と連書し來れり、今は其の意を得て、かく分注に記せり、）是の謂ゆる帝は天日を云ふ。其は毛詩の大雅に。皇矣上帝。臨下有赫。監觀四方。と有る上帝は。正に日を指して云へるに。易緯尙書緯などに。孔子曰。帝者天稱也。と有るを思ひ合せて辨ふべし。（また禮記の註疏に、據其在上之體謂之天、因其生育之功謂之帝也と云へるも然る言なり、然るを彼邵雍朱熹らを始め、帝者天之主宰、などのみ云るは委からず、又舊くこの帝出於震とあるを、太昊氏の東方に出たる義に、取成たる說有れど其も違へり、なほ帝とはもと天日の號なるを、王者の天地に合する德ある人に轉用せる謂、また凡て帝と稱し、王と稱する抔の委しき事は、太古傳に記せるを見るべし、）さて天日の東方卯に出て。晝夜に一周するに寓意して。八卦の方位を示せる文なり。然れど此は古說に非ず。彼の姬昌が新案せる方位說を。其子姬旦か否ぬか記し遺せるを。說卦傳を集めし時に。摭

ひ載たる者なり。（說卦傳は、易の古說を集めし一部の書なるを、十翼中に序收たる物にて、孔子の自作には非ず、其の由は、第九條に委く論ふを俟べし）然らば眞の古方位は何にと言むに、本書に此の條より前に。天地定位。山澤通氣。雷風相薄。水火相射。八卦相錯。云云と云へる條あり（諸本に水火不相射と有れど、不は衍なり、此は四言四句に押韻せる文なるをや、本編に委く論ふを見て知るべし、）此は太昊伏羲氏の傳へし。八卦方位の眞說にて、此を圖象に摸せば。斯の如なること。文義に徵し字義に徵し。天地開の實理に徵して。其の義理の著明なる由は。既に本編に委曲に記せれば。今更に云はず。抑この天地定位の章はも。太

太古眞方位圖

昇氏の古說の適に存れる。金科玉條の文なるを。周漢の世よりみな姫昌が擬方位に欺かれて。今の眞方位を察し得たる人無りしを。朱熹が本義及び啓蒙に。天地定位の章の旨に。符合する由にて。伏羲八卦方位圖と云ふを出して。先天圖とも稱せるが。其の狀かくの如くにて。其の說に。邵子曰。乾南。坤北。離東。坎西。震東北。兌東南。巽西南。艮西北。自震至乾爲順。自巽至坤爲逆と云ひ。此の圖もと。華山の道士出陳摶より出たるが。邵雍まで傳來せる由にて。所謂先天之學也と言へり。（邵子とは宋の邵雍を云ふ、其の傳來の次第は、本義に、陳摶、李之才、穆脩、邵雍なりと云へり、此の輩の傳は、共に宋史に見えて、易學者流なるが、中に陳摶は字を希夷と云ひて、道家の學に名高き人なり）今此の圖を見るに。艮

先天擬方位圖

山兌澤のみ。其の正位を得たれど。其の餘の六卦は。相ひ對せる狀こそ。天地定位の本文に合へれ。其卦位は。みな甚く違へり。（そは己が考へて、前に出せる眞方位に、合せ見て知るべし、）按ふに此は後人の。天地定位云々の古說を。尊信する心は有ながら。天地間の實理に闇く。乾天の東方なる古義を識ざるが。僞作して世を欺けるなり。（然れど其は謂ゆる後天之學、姫昌が卦位に、疑ひ有りし故なる事は。云まくも更なり、）さて其の作れる趣は。乾天に君の象あるを。帝出乎震と云ふ條の。聖人南面。而聽天下。嚮明而治と云ふ語に。思ひ合せて南方に配し。右りに竝ぶべき兌離震を左りに取り。左りに竝ぶべき巽坎艮を。右りに取れる故に。かく譌れる卦位の出來しを。其描き心に。眞の方位を悟り得つと思ふ物から。然すがに我が案と爲ては。人の信まじき事を恐れて。伏羲氏の遺圖に託して。密に人を擇びて傳授せし物なり。（此の圖もと陳摶より出たり、と云ふが實ならば、其の作者かならず、陳摶なり、又若くは、陳摶より出しと云ふは託言にて、此を傳授し來れりと云

ふ徒の中に、作者有らむも知べからず、)さて近き頃世にもて囃す。五要奇書と云ふ物の中に收たる。郭氏元經と言ふ物に。義皇卦篇といふ條あり。其の條中に。謂ゆる方位を考ふるに。今出せる先天圖の方位と同じきは。彼の元經と云ふもの。此先天圖の僞造ありし以來の僞託なるが。是の圖は。彼の元經に依りて作れるか。其の本末は詳ならず。(彼の元經と云ふもの、晉の郭璞が著せるに、其の門人趙載といふ者の注せる由なれど、注本文共に、同人の作と見ゆるが上に、穴ぐり過たる五行說にて郭璞が、餘の著述とは、似もつかぬ拙き物なり、然れど中に、少か取べき事も無きに非ず、其は別に論はむと欲るなり、)偖また朱熹の本義及び啓蒙に。文王八卦方位圖と云ふを出して。後天圖とも稱せるが。其の狀かくの如くにて。此の本文に擧た

後天擬方位圖

る帝出乎震云々。と云へる條の註までを出して。其の說に邵子曰。易者一陰一陽之謂也。震兌始交者也。故當朝夕之位。坎離交之極者也。故當子午之位。巽艮不交。而陰陽猶雜也。故當用中之偏。乾坤純陽純陰也。故當不用之位也。此文王八卦。乃入用之位。後天之學也と言へり。(此は二書なる說を合せて抄せり、委くは本書を見るべし、)抑右の帝出乎震云々の本文は。朱熹も此文王。改易伏羲之卦圖也と云へる如く。心に巧み思ふ旨有りて。太昊氏の古方位を改易せる。杜撰の方位なるが故に。都て天地の實理。造化の妙用に叶はず。然るは此の卦位の中に。眞の方位を得たるは。離火の南方にあると。坎水の北方にある耳なるが。其の餘の六卦は皆違へり。(八卦の中に、只この坎離の位のみ易ざる事は、南風來りて溫氣を催し、北風來りて、冷氣を催す趣をもて、何なる愚人も知り得べき氣行なる故に、元の儘にて措たるなるべし、)其はまづ乾天君父の卦を。西北の維に配し。坤地臣母の卦を。南西の維に配せるは。天尊地卑。陰陽上下の方位亂れし上に。艮山を東

北の維に配し。兌澤を西に配せれば。山澤の氣通
行せず。震雷を東に配し。巽風を東南の維に配せ
れば。雷風の氣激迫せず。互に生化の功を爲こと
能はず。此の如きを。豈易の實理と云むや。（さて
此の杜撰妄作の中にも、乾を西北に、艮を東北に
配せる事、その妄中に、姦意をさし挾める、第一
の曲事なるが、其の餘は然しも深く巧める卦位に
非ず、天地の實理に、合ふや合ずや省みもせで、
慢に配當せしと見えたり、乾艮の方位の姦曲なる
由は、第八條に云ふを見べし）抑姫昌が右の方位
はも。渠が當時より。既に三千年に近く。其の間
には。孔子を始め。聖賢の名を得し倫も多く出つれ
ど。此を實理に合ずと悟れる者なく。古今の儒者
ら。陰陽家など。悉その杜撰に欺かれて。其の著
せる書等に。天地の道理を說くとし言へば。此の
卦位說に依ざる書のなき故に。世に其毒を流せる
こと。實に甚大きなり。（然るは今行はるゝ方位
家の說く事ども、皆此の卦位に本づきて俗家に傳
へ、東乾に向ひて、西南震の事を爲しめ、西南震
に向ひて、西坤の事を爲しめ、西坤に向ひて、東
南兌の事を爲しめ、東南兌に向ひて、東北巽の事
を爲しめ、東北巽に向ひて、西北艮の事を爲しめ、
西北艮に向ひて、東乾の事を爲しむる故に、却り
て其の方神の祟りを受て、災禍に逢ふ者いと多か
り、周易有りし以來古今の間に此の禍を受たる人、
幾億萬人を知らず、此の毒を流せる者、姫昌に非
ずして誰ぞ、其は世俗の庸人らも、此の方位を、
天地自然の實義の如く心得て、乾をイヌヰ、巽を
タツミと訓む類ひを、其本訓の如く思ふまで、人
の心に染著たれば、今何に論ふとも、容易に止べ
きに非ず、然れども、古道に志有らむ人は、此卦
位說の、世に毒を爲ことの、淺々ならぬ謂を思ふ
べきなり）然るに邵雍朱熹など。彼の謂ゆる先天
之卦位。この謂ゆる後天之卦位ともに取りて。竝
に甚深微妙の神理ある趣に說作せるは。是また何
ちふ愚昧ぞも。（先天後天と云ふ說の由來は、前條
に引たる毛奇齡が說の如くなれば、今更に云はず）
朱熹が說に。先天者伏羲所レ畫之易也後天者文王
所レ演之易也。伏羲之易初無二文字一。只有二一圖一。以
寓二其象數一。而天地萬物之理陰陽始終之變具焉。文

王之易卽今之周易。而孔子所爲作傳者是也。伏義在前。文王作後。必欲知聖人作易之本。則當考伏義之書。若只欲知今易書文義。則但求文王之經孔子之傳足矣。兩者初不相妨。而亦不可以相雜也と云へり（此はこゝに、用ある語のみを引切めて抄せり、此の餘にも邵朱らが、兩の者相ひ妨げず、微妙の道理ある趣に演布せる愚說ども、諸書に多く所見たれど、煩ければ今は云ず）然れども先天の卦位を是と爲ときは。後天の卦位を非と爲ずは有べからず。後天の卦位を是と爲ときは。先天の卦位を非と爲ずは有べからず。兩者初不相妨と云ふ道理は。絶て無き物をや。此は文王孔子また作るとも。予が此の說を易ふること能はじを。況て邵雍朱熹らが倫をや。（あはれ古今の漢學者らの、甚く尊信する姬昌が卦位をし、かく容易げに破斥するを、鈍儒輩の見てば、決めて憎み怒るが多かるべし、若さる人有らむには予が右の說どもを論じ直して、問ひ試みよ、予はなほ其の問を俟つ者なりかし。）抑八卦の奉信すべく。尊重すべき物なる事は。その卦々に各々其々の眞象を包藏し。また各々其々に。終古に動かざる方隅の位所。自然に定まりて。三才の實理、籠罩せざる事なく。幽明の玄理。冥合せざる事なき故なり。然れば此の方位は。凡人の知力を以て、替べからぬ定位なること、山に走る獸を海に養れず、海に游ぐ魚を、山に畜れざると同じ道理なり（然るを謂ゆる先天後天の卦ともに、姬昌にまれ邵雍にまれ、其才覺を以て、杜撰に立たる方位なるは、何に嗚呼なる所爲ならずや）そは今の世に。家相方位家と稱する徒の言に。井を掘り藏を建るに。辰巳の間と戌亥の間とを吉とし、丑寅の間と未申の間とを。凶とする由云ふを。其の說く趣は、謂ゆる後天學の辰巳に巽。戌亥に乾、丑寅に艮、未申に坤を配せる方位の、空理を誣會せる說等なるに、往々その吉凶の應驗あり。（但し此の事のみならず、謂ゆる家相方位を說く徒の言にも、實に吉凶の應驗ありて捨べからぬ說も有るは、然るべき謂ある事なるが、其の說長ければ、此に著すこと能はず、別に委く論ふを待べし）此はその後天方位の。實に其所を得たる故には非ず。其の說こそ。

文王が凡意を以て立たる卦位の誣會説なれ。然る應驗の實あるは。太昦の神意を以て。觀じ定めし方象の。無窮に易らず。西北に艮山。東南に兌澤。交に通氣あるが故に。井藏及び諸事に吉く。西南に震雷。東北に巽風。互に激薄するが故に。井藏及び諸事に凶きなり。（此の道理をなほ密に云むに、もし實に辰巳に巽の德あり、戌亥に乾の德有むには、辰巳に井藏を造らば、巽風撓散の所なるが上に、相對へる乾天の威に厭れて凶なるべく、戌亥に井藏を造らば、乾天の位所を犯して、土を積み土を掘るが上に、相對へる巽風の氣に散されて凶なるべきを、此二隅に、井藏を造りて吉なるは、戌亥の隅は、元より艮山の位所にて、萬物を生じ、かつ水原なるが上に、辰巳の兌澤より、悅潤の氣通ずる故に吉く、辰巳の隅は、元より兌澤の位所にて、悅潤の德あるが上に、戌亥の艮山より、生成の氣通ずる故に吉なり、斯て丑寅また未申に、井藏を造りて凶なるは、丑寅の隅は、巽風の位所にて、元より撓散する卦德なるが上に、相對へる未申の震雷より激迫して凶く、未申の隅は、震雷の位所にて、元より振動の卦德なるが上に、相ひ對へる丑寅の巽風より、撓散して凶なり、もし後天學の卦位を以て云ふときは、丑寅は艮山なるが上に、相對へる未申より、坤地の助あれば、必す吉なるべく、未申は坤地なるが上に、相ひ對へる丑寅より、艮山の祐あれば、必す吉なるべきに、凶なるは何ぞや、凡人の立たる卦位なる故に實理に合ざること斯の如し、固執せる先入の病を忘れて、熟々に此謂を思ふべき也）誠や八卦の眞方位はも。幽冥の事宰たまふ大物主神。即稱ゆる太昦氏の。其德天地に通じて。變通方なく。萬事の終始を窮めて。庶品の自然に協ひ。其の明日月に竝べる神眞たるが。天祖の錫へる河洛の眞數に本づき。仰ぎて象を天に觀じ。俯して法を地に察し。身にとり物に取りて。定め給へる事なる故に。其の理終古に動くことなく。宇宙の間に彌綸せるが故に。右の如く應驗あり。何に忌々しき神慮ならずや。（然れば此の宇宙を、億兆に區別すれども、其理また億兆に別りて、各々相ひ離れず、一國一郡一鄉一村一戶ごとに、其理を具ふること

譬へば方解石と云ふ石の、其の質素より方形なるを、何に碎けども、皆方形に碎け、いかに細末すれども、謂ゆる顯微鏡を以て是を見るに、其の細粉みな方形を存するが如く、具はるは、何に奇しからずやも、）或人難じて言はく。後天の卦位を。謂ゆる天地の實理に合ざれば。杜撰なりと言こと。吾豈眞の聖人を侮る聖言を侮るに非ずや。答ふ。彼の姫昌は眞聖に非ず。擬聖なり。抑聖とは。孔子の語にも。所謂聖人者。德合於天地。變通無方。窮萬事之終始。協庶品之自然。敷其大道。而遂成情性。明竝日月。化行若神。下民不知其德。覩者不識其鄰。此謂聖人也と言へり。（なほ此の類なる、聖の古說ども多かれど、所狹ければ、今は目易き一說を引出たり）史記の周本紀を始め。姫昌が事蹟を取竝べて。此聖の古說に律し察よ。さる聖德いづこにか有る。此は其の傳記を引き出るまでも無く。今論ずる方位をもて言むにも。天地造化の變通を識らず。其說庶品の自然に協はず。萬物の情性に通せず。然る人の爭で萬事の終始を窮めむ。然るを豈明日月に竝ぶと云むや豈德天地に合すと云むや。予是を以て眞聖に非ず。擬聖なりとは言ふなり。（抱朴子行品に措細善以取信、陰挾毒而無親者姦人也、雖言巧、而行違實、履濁而假清者佞人也、とあり、姫昌能く此に合へり、そは虞芮の訟を止め、枯骨を藏め、紂王が炮烙の刑を諫めたる類は、細善を措て信を取れるにて、其の言は巧なりしかど其の行ひは實に違ひ、濁を履て清を假り、陰に毒を挾みて親なく、其の子姫發に遺言して、其の君紂王を亡したり、何に姦人佞人ならずや、猶委くは第八條、及び赤縣太古傳の太昊氏傳、三曆由來記、西籍慨論等に論ふを見べし）然るに俗の漢學者ども。孔子の、姫昌を。聖と稱せる言も有るを以て。頓に聖人ぞと畏惑ひて。其の言行の當否をも糺さず信じ。總て周秦の頃より。聖人と稱し來れる徒の言行をば。是聖語なり。是聖行なりと云へば。田鼠の猫聲を聞たる如く。屈敬拜伏するは。何ちふ愚昧ぞや。凡そ古今の漢學者流の。其の學に拙劣未練なること。熟々に思へば。かの聖言聖行と云ふ。聖の名に威されて。其の言行の當否を。

紏し稽へざるに依ことなり。（殊に孔子の姫昌を聖と稱せるは、時世に媚たるにて、秦漢より今に至り、後代の王どもに捧ぐる表文に、其の時王を、聖とも神とも稱するに同じ、そは孔子は、上に擧たる説の如く、聖の本説を知れる人なり、然るに、其の説に叶はざる文王を、いかで眞の聖人と思はむ、慥に時世に媚たる言なること論ひなし、また假令孔子は寔に聖人と思へるにも有れ、其の言を賴みて一向に畏ぢ尊まむは、我が心を他に奪はるるにて、其はた愚昧の心なりかし。）予は然る世俗の學者らの如く。聖の眞擬をも紏さず。其の言行の當否をも諦めず。雷同して信ずる事は得爲ずなむ。然れば聖言を侮るとも。何とも云へかし。（凡て漢籍に聖人と云へるに、眞聖と擬聖とある、その委き説は、諸書に參攷して、赤縣太古傳に、聖人の品定せる所に論へるを見るべし。）

【七】大衍之數五十。其用四十有九。分而爲二以象兩。掛一以象三。揲之以四以象四時。歸奇於扐以象閏。五歲再閏。故再扐而後掛。是故四營而成易。十有八變而成卦。八卦而小成。引而伸之。觸類而長之。天下之能事畢矣。

此第七條は繫辭傳に出て。立卦筮儀の説なるが。其の揲筮の趣は。孔穎達が正義に。每一爻有三變。謂初一揲不五則九。第二揲不四則八。第三揲亦不四則八。若三者俱多爲老陰。俱少爲老陽。兩少一多爲少陰。兩多一少爲少陽。三變既畢乃定一爻。朱熹が本義に。三變成爻。十八變則成六爻也。九變而成三畫得內卦。已成六爻而視三爻之變與不變。以爲動靜。則一卦可變。而爲六十四卦以定吉凶。凡四千九十六卦也と。鄭玄王弼より以來の諸註に悉く載して。十有八變の筮法と稱し。人普ねく信用すれど。傍に●點を施せる六字は姫昌が攙入にて。其用四十有九と有るも。般易の四十五策なりしを。彼が杜撰に增たる數なる事など。本編に委く論へるが如し。○さて本書に。此文と下の文との間に。乾之策云云と章を起して。當萬物之數也と云ふまで。四

十五字の文有れど。其は姫昌が十八變筮の。策數を通計せるにて。論ふにも足ざる章なれば。一向に捨てしるし出さず。(此は既に十八變筮を信ずる徒さへに、取るに足らずと、捨たる人の有しごと所思たり、)○或人問ふ。四十有九策。十有八變の筮法は。古來よりの法にて。人により聊の異儀こそ有れ。總て僞法なりと。捨たる人は有こと無し。然るを前に此は。絕て筮し得まじき筮法なりと云へるは。何等の說有りて言へる事ぞ。答ふ其の謂ゆる古法は。眞の古法に非ず。姫昌が新法なること。四十九策を用ふるにて。更に論ひ無き事なり。(そは既に引たる、通志玉海などに載せる古說に、歸藏用四十五策、周易用四十九策と有るにて知るべし、)斯くて其の古說中に。以象三などの字を攙入し。再扐而後卦と云ふは。重卦法を示せる語なるを。左右兩策を揲へし奇を指間に挾める後に。挂る義に翻案して掛に作り。一爻三變のいと勞煩しき擬筮法を作り。且下文に。十有八變而成レ卦ちふ僞文をさへに攙入せり。(この僞筮法の揲蓍する儀は、漢儒以來の註釋どもに普ねく出て、互に少かの異同はあれど、皆人の知れる事なれば、委くは云はず、)然るに其の筮法はも。四十九策を以て。其法の如く行ふに。過不及の數出來て。眞筮を得がたき物なり。其は此の筮法に從事せる人ながら。眞勢達富と云へる人の說に。夫蓍を揲へて得る所の策。四を奇とし八を偶とす。然るに四十九策にては。初變に。左手の策を揲へて一を得れば。必ず右の策より三を得て。掛一の策と三合して。五策の奇數と成る。(これ奇數を得るの一なり、)(○今云掛一の策とは、かの僞文の掛レ一以象レ三と有るに依りて、右手の一策を、小指間に挾めるを云へり、下これに倣ふべし、)或は二を得れば。必ず右の策より二を得て掛一の策と三合して。五策の奇と成る。(これ奇數を得るの二なり、)或は三を得れば。必ず右の策より一を得て掛一の策と三合して。五策の奇數と成る。(これ奇數を得るの三なり、)さて四を得れば。必ず右の策より四を得て掛一の策と三合して。始めて九策の偶數と成る。(○今云上には四を奇とし、八を偶とすと云ひつゝ、此には五策を奇と云ひ、九策を偶と云ることは、舊く四

十九策を用ひて、其の奇偶を斷わる說等の中にも、朱熹が說に、一變所レ餘之策、左一則右必三、左二則右亦二、左三則右必一、左四則右亦四、通二掛一之策一、不レ五則九、五以一二其四一、而爲レ奇、九以兩二其四一而爲レ偶、奇者三、偶者一也、と有るに當りて云へる說なり、)是奇數と成るもの三。偶數と成るもの一。此は奇偶三增倍の扁倚なり。豈これを公正の立法と云むやと言へるにて知るべし。(そは信に此の說の如く、扁倚なるが故に、試みに蓍を執りて、四象の過不及を驗するに、奇數の出ること甚多く、偶數の出ること、十中の三に在りて、三奇の老陽、二奇一偶の少陰おの〳〵二十反出る中に、二偶一奇の少陽の出ること、十反に過ず、三偶の老陰出ること、僅に一二反なり、是を以て、乾の卦の出ること常に多く、坤の卦の出ること甚希なり、然れば其の所屬の卦々の出るにも、過不及あること、推て知るべし、古今の易學者流、この議なきは論ふに足らず、四十九策と定めし姬昌は更なり、此を傳へたる孔丘氏も、此に心著ざりしは何ちふ事ぞも、)然るに此の人。四十九策の非を辨へたる說は宜なれど。又別に。九は八の誤字なりと言ふ說を立て。其の言に。四十八策の用數にては。初變に。左の策を揲へて一を得れば。必ず右の策より二を得て。掛一の策と三合して。四策の奇數と成る。(これ奇數を得るの一なり、)或は二を得れば。必ず右の策より一を得て。掛一の策と三合して。四策の奇數と成る。(これ奇數を得るの二なり。)或は三を得れば。必ず右の策より四を得て。掛一の策と三合して。八策の偶數と成る。これ偶數を得るの一なり、)或は四を得れば。右の策より三を得て。掛一の策と三合して。八策の偶數となる。(これ偶數を得るの二なり、)是奇數と成るもの二偶數と成るもの二なれば。奇偶等分にして。十有八變中に隻半の冗策なく。毫髮の支吾なく。眞に至正の筮法なりと云へり。(こは前說と共に、其門人松井暉星と云ふ人の著せる、象變辭占と云ふ物に見えたり、)此は古今の易學者流の說等の中には卓越たる說なれど。仍十有八變の先入。その固疾と成りて。彼の四字の攙入は更なり。掛の字は卦の字の僞字なる事をも辨へず。別にかく臆說を

工夫して。本の煩勞なる筮法に從つゝ。無證にこの新説をなも立たりける。（其は此の本書に、四十八策の本據を云る説に、古傳に云へとて、夏には三十八策を用ひ、般には四十八策を用ふと、四十八策は勿論なり、三十六策にても筮すべし、獨り四十九策にては、斷然として筮すべからずと言へり、然れど四十八策の事は、古書に絕て證文有ことなし、然れば此は上に引たる通志、及び玉海などに、四十五策と有る由を、途にきゝて閧誤れるか、或は杜撰かの二つを出ず、然ればこそ古傳にと云とて、書名をば擧ざりけれ、其の道に取りては、無上の重き事なるに、然る憶斷をしも爲べき事かは）偖しか新説を立つゝも。其の筮法の勞煩しく。かつ迂遠にして。急卒の事に施用し難き事をば自知せるが故に。十八變の筮を立る長き間には。自然に神氣一致せず。惑亂妄想の發する事あれば。其の代りに用ふる由にて。圓子とて。表裡に初二三四五上の字を刻み。朱と藍とを刺たるを十八箇作り。そを擲て。本卦及び之卦を索むる擧をしも吾も用ひ。門人らにも傳へてぞ有ける。此は必かの擲錢。また靈棋などの法よりぞ思ひ著けむ。（其の圓子と云ふもの、或人その傳を受たるを、密に見たる事あり、然して彼の擲錢法の類をば、甚く斥けて、大切至極の天命を請ひ、鬼神を驚かし奉る事に、兒戲玩具に等しき所爲にて、不敬侮慢の至なり、不敬無禮なる時は、鬼神感格せず、感格せざれば、其卦應せず、何の用をか爲さむ、聖人是が爲にこそ、蓍筮の法をば立給へれ、其の他種種の設卦法ありと言へども、都て取るに足ずと、門人その遺説を記せるは何なる事にか、予を以て是を視れば、圓子は更なり、十有八變の筮法も、兒戲に等くこそ思はるれ、然れど此の達富、及び其門人暉星ばかり、易眼を具し、稽疑判斷の法をも、辨へ知たる人はまた無くなむ）また是に就て按ふに。近く寶曆の世頃に。平澤常矩と云へる人あり。此の人の言に繫辭傳なる十八變の筮法を。孔子の言と爲れど。看來るに。變營數次にして。俄頃辨じ難く。急卒の際いと便利ならず。且註語錯亂して。聖人の全文に非ず。疑はしき者なり。次に擲錢法。心易法。また取捨なくは有べからず。

今や年來これを試みて。其の一定據るに足ざる事を悟る故に。古法を斟酌して。自己の發明を加へ。別に一家の法を立つ。惟易の活法に契ひ。應驗の過なきに賴る。世の易學者。或は予を扣きて蜂起すとも。是に答ふるに詞を以てせず。直に蓍を立て。其應驗を示さむと言へり。(此は其の著せる、卜筮經驗と云ふ物に見えたり、十有八變の筮法を看破せる、見識の高きこと、古今に類なく、是また易學者流中の、一偉人にぞ有りける。)斯て其の筮法に。五十蓍を執り。其の一策を取りて。格の中刻に置て。虛一に象どり。四十九策を。手に信せて中分して二つと爲し。右の一分を。格の右の大刻に置き。其の中の一策を取りて。左りの小指間に掛け。左手の一分を。右手を以て。四々四々と揲へ。八除して其の奇策一を乾とし。二を兌とし。餘は之に倣ひて。是を上卦とし。再總數を合せて。前式の如く。其奇策を見て下卦とし。其の變爻を取るには、復綜合して。三々三々と揲へ。六除して奇策の數を以て。初より上爻までの六位に當て。一爻變を作れり。是世に謂ゆる略筮の法なり。

(此は其の著はせる卜筮蒙節と云ふものに出せり、然して其の卜筮經驗には、初二三のみを變ずと、返す／＼論へり、松井暉星が此筮法を破れる說に、是變爻法にては、一生涯に幾千萬筮を爲すと雖ども、一卦として、不變の卦に遇ふこと無く、かつ固より易道は、變化を尙む事なる故に、二爻變もあり、又は三爻四爻五爻もあり、六爻皆變の卦もありて是易の變易爻易たる所以なり、然るに此略筮にては、卦ごとに必ず一爻變に局れる法なるを以て、不變の卦と、二爻以上の變と云ふ者は、絕て有ことなし、按ふに此は彼邦にて、感動象數易法の取扱ひは、一爻變の法なりけるを、僞りて擲錢法に轉じ、其を我か邦に傳へしを、蓍筮に移し轉じて、彼の八除の法と爲たるなり、然ればこそ上卦より卦を起せり、是感動易の遺法なればなり、尋でまた一人有りて、其の法に據りて、下卦より先に、卦を設くる法に爲たるが、卽今の俗筮式なり、と言へるは、實に然る事の論ひなりかし。)抑是の徒の然る筮法どもよ。凡て觀易の眼高からず。姫昌が僞文に欺かれて。其を批正參考す

る事を知らず。强ひて努めて荷ひ出せる愚法等にて。太昇神聖の古面目には都て契はぬ事なれば。一切に掃除して。行ひ用ふる事なかれ。○再問ふ。十八變の筮法實に僞法ならば。古くも史蘇君平が如き。筮聖の出べくも非ず。然るに渠等が如く。萬變に應接せる易者の出たるは如何ぞや。予乃答むと欲るに。傍に生田篤道あり。顧みて汝この答せよと言へば。篤道云く。師は右の如く筮法の古式を論はれ存ど。また恒に我等に誨へ給へる說有れど。筮儀は然しも泥むまじき謂あり。然るは三千年に近く。眞式は泯沒せる故に。謂ゆる十有八變の僞筮及び擲錢を始め。諸般の筮儀起れるが。其を用ふる倫。各々その占判の奇中正應して。史蘇辛廖と相竝ぶべき徒も。和漢古今に少からぬは。必しも筮儀の眞僞に依りて。占判に淑應あるに非ず。幽に神明の祐助を賜はるが故に。偶に正應あるなり。（然も有らば、前件々のごと、師の考記せられし擧はいかにと言ふに、彼の告朔の餼羊にも類すべき、其眞式のほの見ゆるを、古神易を論ひ顯はすと爲ては、筮儀は然しも泥むべきに非ずと

て、默止あるべきに非ざればなり）其の由いかにと言ふに。誰にまれ此道に心を。潭め。力を竭して熟く習慣せる人は。此の道を始め給へる。太昇氏一號扶桑太帝。また竝に立て事成し給へる。泰一小子一號東華大神。及び天地雷風水火山澤の八神。また天神地祇列仙諸靈の降臨照鑒おはし坐ば。誠意だに道に當らば。占判に正應有むこと何か疑はむ。（今擧たる諸神の名、及びその功德などの事は、師の著書あまたに、說辨へられしを見て知るべし）抑さる至聖の人は、腹中既に一部の易有りて。四千九百六變の卦も、我が丹田方寸の間に繫辭すれば。其の耳目に觸れ。其思慮に感ずる所。すべて天下の故に通じて、一として爻を生じ卦を立べからぬ物なく。疾がずして速に。行ずして至れば。何ぞも筮儀に拘はるに足らむ。實には機に臨み變に應じて環觀活用する中に。筮法の眞式は具はる事なり（但し己篤道はも、唯に此の道の一隅を聞き、此の文の一斑を窺へる耳こそ有れ、然る位域はしも、九天の上を仰ぎ、九淵の下に臨むが如くなれど、今より後習慣年を踰え、積熟功を

へ經たらむに、今の仰ぎ窺ふ物やゝ卑く、今の臨み觀る物、やゝ淺からむ事を、負氣無れど庶幾ひて、傍聞を憚らず、かくは言擧なすになも、）さて師の上に委く。辨へ給へる如く。天地の間に活とし活き。生とし生る物の盡く。各々一生本命の卦あり。年々の卦あり。節々の卦あり。細に推し。精く求むる時は一日一時一刻の卦さへに。具足兼備して。造次も離れず。顚沛も去らず。脗合密著して。火に燥あり。水に濕有るが如く。皆その性命と成る事は。即て天極に坐す太祖參神の。賦與し給ふ所にして。是ぞ謂ゆる天命なる。（この三神の由來、及び天命の本義は、我が師の諸書によりて、始めて玄の又玄、妙の又妙なる旨の、著明に成れること、今は人も普ねく知れるが如し。）然れば常に能く此の天命を知りて。其の時處位に即て。また能く其の天命を奉じて之に率ひ。之に據りて。背て悖逆乖違せざる者を成人と云ひ。其の否ざる者を小人と云ふ。是を以て大に爲こと有り。行ふ事有るに非ざれば。蓍を揲へ爻を畫して。問筮する事を用ひずして。之を我が天命に求むれば。稽疑の方備はり定り。尚占の道虧る事なく。儼然として違ふべからず。確乎として拔べからず。爭でか爲る事あり。行ふ事ある毎に。問筮して以て。眞正の德を喪ひ。鄙吝の咎を招かむや。此は世の周易學者。および卜家者流などの。能く知る所に非ざるなり。

【八】易之興也。其當殷之末世。周之盛德邪。當文王與紂之事邪。是故其辭危。危者使平。易者使傾。其道甚大。百物不廢。懼以終始。其要无咎。此之謂易之道也。

此の第八條は繫辭傳に採りて載せり。是謂ゆる易は周易を云ふ。三易を通じて云へるには非ず。抑周易の興りは。姬昌が羑里に囚はれし間の擧なる由は。既に論ふ如く諦なる事なるに。此の文にかく分明ならず云へるは。何なる由ならむと言ふに。其羑里に拘はれて作れりと言ふ事。その實事には有れど。其は史遷が謂ゆる陰謀の一術にし有れば。（周の文武が、殷の天下を奪ふに就ては、陰謀術計多かりし事、史記の周本紀、殷本紀、及び呂

望姫旦らが世家を始め、其餘の書にも、弘く照應し考へて、赤縣太古傳、春秋命歷敍玫、三曆由來記、西籍概論などに委く論へるを見るべし、）其の末世に至りてこそ。右のごと文籍に、其密說をも著せれ。其盛なりし間には。姫昌が羑里に囚はれし時の作と顯に言ふ事は。憚れる故に。態とかく引きて放たぬ文法を以て。其の作者を分明ならぬ趣に云へるなり。（但し繫辭傳は、周の末世の集書なるに、然る心配の文有るは、何にと思ふ人も有むか、其は此の傳に載せる說等みな當時に傳はれる、諸說を聚めし物なればなり、故是の文の外にも、易之興也其於中古乎、作易者其有憂患邪、稽其類其衰世之意邪、など樣に云へる語ども多かり、）然れど書名を周易と題せる上に。殷の末世周の盛德なる時と指し。當文王與紂之事邪と云へれば。其の作者は、姫昌を除きて誰か有らむと。誰にも見取るゝ文なり。其は信にも其の彖辭の危きを以ても。逆意を含める姫昌が作と。著明に知るゝ事にこそ。（然るを伊藤良胤が讀易私記に、右の語等を引きて、此人之言文王也、非文王自言也、荀子史遷及緯書、亦有其說、爻中所言、如王用亨于岐山、箕子之明夷等、此武王克商以後之事故馬融陸績等諸儒以爲、周公作爻辭、自是以來、其說一定、朱子雖知其無明據、亦姑依其說、後世學者、遵其說、而不知其有不可詳者焉と云へるは、彖爻の辭を、姫昌父子が作と爲ては、其文中に、逆意いと明に見えて、己が憲章する道の、臭汚と成るが故なり、儒を以て家業を立たる人の心配りは、實に然も有べき事にこそ、）然らば其彖爻の辭に。姫昌が逆意をさし挾める證文の。著明なる有やと言むか。其は上下篇の。乾より未濟に至る六十四卦の辭に。一卦も其の意を含まぬは無れど。其は逐一に論むは煩はし。今その尤きを云むに。まづ八卦の方位を錯置せること。其逆謀の張本に爲むとの結構なり。（是より古く、連山易には、艮を首と爲し、歸藏易には、坤を首と爲とは有れど、其は卦順を云ふ時の言にこそ有れ、其の方位を改易せるには非ず、姫昌が易には、卦順は伏羲の乾坤震巽坎離艮兌を用ひたれど、其の方位をしも、前條に云ふ如く改め

しなり。)いで其の由は。彼の國圖を檢察するに。殷王が都は。冀州と云ふ地にて。赤縣州の總國に取りては。丑寅巽の方位に在りて。謂ゆる孟津の大川。その東南西を廻り。姬昌が本國岐周の地は。雍州と云ふ域内にて。彼總國に取りては。戌亥艮の方位に在りて。孟津の南なる。豫州と云ふ邊までを領せり。然るに己が領する豫雍の西南より。冀州の東北を逆せむ事は、古說に謂ゆる神明之舍を犯す怖れあり。(東北の方を神明の舍と云ひて、古く畏み尊める事は、種々の書より證を引きて、赤縣太古傳に委しく云へれば今更に云はず。)かつ世に普ねく忌み畏るゝ。鬼門の方なれば。然る大事を擧るに宜はし非ずと。其從類の殆まむ事を思ひて。其の本國の戌亥に乾を配し。殷地の丑寅に艮を配して。乾の天位より。艮の山を厭勝する義に翻按して。民心を安むる術計にぞ有りける。(其は旣濟の九三に、高宗伐二鬼方一、三年克レ之、小人勿レ用と云ひ、未濟の九四に、震用伐二鬼方一、三年有レ賞二于大國一と爻辭せるを以ても、其の心配を察すべし、鬼方は卽ち鬼門にて丑寅なり、高宗とは、殷代中興の主にて、此の代に其の鬼方を伐て、功の遲かりし事を鑒みて、大人すら斯の如なれば、況て小人は、用ふる事勿れと誡めたるなり、震用伐二鬼方一云々も其義にて、震は古方位にては未申なり、殷の都より鬼方に向へば、其の都は未申に在るが故にかく語り傳へし古說を、周の擬方位に轉語しあへず、載せる文なり、然れば舊說に、震を進と釋せる說は非なり、予が見たる註書どもに、此の鬼方ちふ語を解し得ずて、何くれと云へる說ども有れど、都て論ふにも足らぬ說なりかし、)さて姬昌が乾の卦の彖辭に。乾元亨利貞と係たるは。羑里の拘囚を遯れて。乾位に處する用意の語にて。其文意は。朱熹が本義に。元大也。亨通也。利宜也。貞正而固也。文王以爲。乾道大通而至正。故當下得二大通一。而必利占在二正固一。然後可上以保二其終一也。と說たるが如し。(伊藤長胤が言に、王輔嗣、程伊川解、皆隨二文言首章之意一、分作二四德一、至二朱子一始解曰、大通而利、在二正固一則固、得二易象之本意一、而千古之卓見也と云へるは然る言なり、貞は說文に、卜問也、从二卜貝一、貝以爲レ贄と有りて、

神に贊して卜問をなし、純固正一に、其問ひに從ひ、その卦象を持重する義に用ふる文字なり、）斯て此の卦の象物に龍あり。故にその子姬旦。この六爻の語を作るに。龍をもて其父姬昌と。兄姬發と自吾と。三人の履歷に比喩して。其の占を示せり。其は乾元序制記に。乾元亨利貞道之用也。文王比隆興始覇。（鄭玄云、文王比德於乾之隆盛、謂其龍德長人、以始覇四方、被江漢之士也、）序錄著卦。科合謀。）序錄序王錄、著卦爲六十四卦經、科設王命之卦也、）文王用其不倦、武發修其質素、周公用其節序。三聖首乾德。各就乾元亨利貞。每遺夕惕若厲懼後戒。（文王自朝至於日昃、不遑暇食、是乾々不倦、武王承而行之、不敢有加、是乾之質素、周公制禮作樂、光文武之業、是乾之節序也、）と有るを。彖辭は更なり。其爻辭に合せ考へて知らるめり。（此の乾元序制記と云ふ書は、易のいと古き緯書にて、全書傳はり、武英殿の叢書中に收たり、）其は初九潜龍勿用とは。姬昌かの羑里を遯れて。本國に潜まり。時を待ちて。龍德を用ふる事なきを言ひ。九二見龍有田、利見大人とは。六韜また史記に。文王將田。史編布卜曰田於渭陽。將大得焉と云へるに果して。呂望を得たりと有る如く。呂望始めて。謂ゆる在上の大人。姬昌が顧養を受たるを言ひ。（見龍は呂望を指せり、田とは田獵を云ふこと、史記をも合せ考へて知るべし、古來の注はみな非なり、取用するに足らず、）九三君子終日乾々。夕惕若。厲无咎とは。序制記に。文王用其不倦と云へる如く。恒に健々と自彊して息まず。惕若と恐懼を爲し。時なほ厲ければ事を擧ず。唯その心構をなし。生涯咎なくて死れるを言へり。（此は史記の殷本紀に、西伯歸乃陰修德行善、諸侯多叛紂而往歸西伯、西伯滋大、紂由是稍失權重とあり、論衡に、周取殷之時、太公陰謀食小兒丹、敎云殷亡兵到牧野、と有るなどを合せ見て辨ふべし、）さて九四。或躍在淵。无咎とは。史記に見えたる如く。姬發かの父が遺意をつぎて。三年の服舉りて後に。姬昌が木主を車に載せて。自專にせざる心なりとて。太子發と稱し。紂を討むと師を起し。或は躍らむと欲

せれど。未天命至らずと。龍の淵に潛む如く歸りしを言ひ。(其は尙書僞古文泰誓の、孔安國が傳にも受命之年、至九年、而文王卒、武王三年服畢、觀兵孟津、以卜諸侯伐紂之心、諸侯僉同、乃退以示弱と云へり、是初度の出師なり、師の卦の六五に、長子帥師弟子輿尸、貞凶と云へるは、此の義を係たるなり、然て此の後十有三年と云ひける年に、再師を起して本意を遂たり、下の九五に謂ふ所是なり)九五飛龍在天。利見大人とは飛龍の天に在べき時を待得て、謂ゆる在下の大人呂望を用ひて。遂にその君王を滅して、父祖の素意を修め畢たるを言ふ。是を以て序制記に。武發修其質素と云へり。(大人とは、もと在上君王の稱なるを、後には、其の德に相ひ似たる在下の人をも稱する言と爲れり、九二の大人は姬昌をさし、九五の大人は呂望を指こと、是にて辨へ知べし、朱熹が注に、九二の大人を、在下之大人と爲し、九五の大人を、在上之大人と爲たるは違へり)次に上九。亢龍有悔とは。姬旦己が上を云へるにて。兄姬發が死して後に。其の姪の成王誦と云ひし八歲の兒を。輔佐する由にて王事を行ひ。其位を奪はむと欲けるに。其の兄弟の輩。かの召公奭を始め。其意を知れる故に事を遂げず。悔を爲せるを言ひ。姬旦が逆意を知りて、不安に思へるは、管叔蔡叔のみに非ず、姬奭が賢き心にも、忌恐れしこと、燕世家、魯世家を見通して知るべし、姬奭あに疑ふまじきを疑ふ人ならむや)用九見羣龍无首吉とは。其の仇せし殷の武庚。及び我が兄弟どもを誅して。我身に事无りしを言ひ。後終に其意を轉じて。文武が道を節序して爻辭を作れり。是を以て序制記に。周公用其節序と云へり。(上九の亢龍は、其の身に比し、用九の羣龍は、即ちかの管叔蔡叔、また紂が子の武庚祿父などに喩へたり)さて坤の卦の彖辭に。坤元亨利貞。君子有攸往。先迷後利。西南得朋。東北喪朋。安貞吉と云へるは。其擬方位に。坤を西南に配せる故に。此の方には得朋と云ひ。東北は殷都の在る方にて。鬼方なるが故に喪朋といひ。此卦を得ては殷侵し難ければ。貞に安ずるを吉とすと云へるなり。(本書右の文中に、牝馬之得主の五字ある

は、決めて衍文なり、其は牝馬は、坤の象物に非ず、如此だに言はゞ、書見の眼高からむ人は、自づからに知なむ物ぞ、）其は次卷筮儀の條に論ふ如く。殷世までは四十五策を用ひしを。姫昌始めて四十九策を用ひて。謂ゆる十八變筮と爲たるが。此は百筮中に一筮も。容易に坤の卦の出がたき筮法なるは。右の由よし有るが故に。此卦の出ざらむ事を欲して。殊に巧める筮法なるを。用ひ合せて辨ふべし。（此事は、なほ第七章に委しく論へれば此には唯その大凡を云なり、）また是に就て思ふに。賁復大過。恒解損益夬萃巽の彖辭に。利有攸往と云ひ。屯剝无妄の彖に。不利有攸往と云ひ。（また大有、无妄、大畜、晉損節の爻辭に、利有攸往と言ひ、遯姤などの爻にも、不利有攸往と見えたり、）中にも巽及び益の彖辭には。利有攸往。利渉大川とも言ひ。需同人蠱大畜益渙中孚の彖に。利渉大川と云ひ。訟の彖には。不利渉大川とも云へるを思ふべし。（また謙頤未濟の爻辭にも、利渉大川と見え、頤の爻に、不利渉大川とも言へり、）此はみな般に討入る決斷の讖辭なるが。大川を渉る利と不利とを云へるは。彼の都に攻至るには。謂ゆる孟津の大川を渉らでは入ること能はず。是を以て其決斷を示さむ爲に。此の辭をかく多く出せり。（抑古文は更なり、今文も恒に山川を熟語として、相對し云ふ習なるに、斯ばかり大川を渉る誡めを云むには、利越大山、また不利越大山など云ふ誡めも、无ては得有まじき事なるに、其の辭の一ツだに無きは、慥に逆意の張本に作れる彖爻の文と、忽ち知るゝ事にて、然しもの姦意に合せては、哂ふに堪たる父子の罅漏にこそ有けれ、また古今の學者に、一人も此の義に心著たるが无きは、是また何ちふ罅漏ぞも、）さて東北巽風の定位に。艮を配し。西北艮山の定位に。乾を配せる意を。なほ考ふるに。巽に艮を重ぬれば。山風蠱の卦と成り。艮に乾を重ぬれば。天山遯の卦と成るめり。こはかの羑里に拘はれし時に。國に在りける子等。及び其の臣屬ども相謀りて。紂王に美女奇物を進りて蠱惑せしめ。姫昌が罪を贖へるに。紂王甚く悦びて放還せる耳ならず。征伐を專にする事を許せ

れば。姬昌その虎の尾を履む厲きを遯れて。岐周に歸りて陰に德を修め。是に新に正朔を立て。此を受命の元年と云ふ。遯蠱の二卦この履歷に能くも符へり。(此は史記の殷周の本紀、及び齊魯燕などの世家、また尙書の太誓、及び上に引く孔安國が傳をも參考して察つべし、)然ればこそ遯卦の彖辭に。遯亨。小利貞と云ひ。蠱の卦の彖辭に。蠱元亨。利渉大川。先甲三日。後甲三日と繫けて。後に大川を渉りて攻入べき。日撰をさへに示したれ。朱熹が本義に。遯の卦の注に。其占爲君子能遯。則身雖退。而道亨。小謂陰柔之小人也と云ひ。蠱の卦の注に。蠱壞極而有事也。蠱壞之極。亂當復治。故其占爲元亨而利渉大川。甲日之始事之端也。先甲三日辛也。後甲三日丁也。前事過中。而後事方始。然更當致其丁寧之意。以監其前事之失と云へるは。粗其旨を得たる說なり。(但し蠱の卦の說は、早く、鄭玄が注に、甲者造作新令之日、先之三日而用辛也、取其改過自新之義、後之三日而用丁也、取其丁寧之義也、と云へるに據れる說なり、猶下に云ふを見るべし、)斯て姬旦が。此の二卦の爻辭を繫るに、卽その父の意を承けて。每爻にその履歷を節序して蠱の卦の初六に。幹父之蠱。有子考无咎。厲終吉と云ひ。遯の卦の初六に。遯尾厲。勿用有攸往など言へり。餘爻の辭も此に準へて知べし。(蠱の辭の意は、姬昌が羑里に囚はれしは、蠱に幹たるなり、然るに其の子ども、及び臣子ら相計りて、紂王に美女奇物を進めて、其の父を赦さしめき、有子考无咎とは是なり、偖しか厲かりしかど、末終に紂を亡ぼして吉なりき、また遯の辭の意は、虎の尾を履める如き、厲き所を遯れたる由にて、尾厲は紂に譬へたり、勿用有攸往とは、此の卦爻を得たらむには、殷の地に討入るに、用ふる事なかれと誡めたる義なり、)さて姬發が殷に攻入るに。父が示せる日取を用ひし事は。史記に。十二月戊午。師畢渡盟津と有るにて知るべし。此は甲に後るゝこと三日。丁巳の日に。丁寧の意を致して事を始め。翌日までに師みな盟津を渡り畢たるなり。(但しかく一日後れし事は、下に引く顧炎武が說に見えたる、律歷志の文

に、己日を指して庚日、を用ふる故實あるに思ひ合せて辨ふべし、盟津とは卽て孟津のことなり）斯て紂王と對陣して克たるは。二月甲子の日なりと。史記に載せり。此は曲禮に。外事以剛日と有る日撰に合へば。是また姬昌が示し遺せる日取なること。蠱の彖に。先甲三日。後甲三日と云ひて甲日を中に取り。朱熹が注に。甲日之始。事之端也と云へるに相發して辨ふべし。（呂氏春秋に、武王已に大川を涉れる時に、殷より膠鬲と云ふ者を、使はして候せけるに、武王見て、將以甲子至殷郊是報矣と云ひて歸らしめ、其より日夜雨ふりて休ず、軍勢みな休まむと請しかど、疾行しめて、果して甲子の日に殷の郊に至りしと見え、史記の二月甲子乃ち誓ふと有る所の註に、孔安國曰、癸亥夜陳、甲子朝誓之と有るも由ある事と聞えたり、〇我が徒に栗原信充とて、遁甲式を精究する人あり、此の考へを視するに、手を打ちて、此は遁甲の日撰を用ひし物ならむと云ふに、爭でこを推試みねと云へば、一と月餘り勞きて、太初曆術をもて推けるに、果して遁甲の日撰を用ひて、其の主國を厭勝せるにぞ有ける、其の說長ければ此に著さず、姬昌が讖文いかに畏るべき事ならずや、）さて革の卦の彖辭に、革己日乃孚。元亨利貞悔亡と云へるは。紂に打克て其の首を斬たる日の。甲子なるを思ふに。甲子に素懷を遂るとも。かの德に慙るとか云ふ如く。朱熹も本義に。變革之初。人未之信。故必己日而後信。所革之悔亡也と云へる如く。其の日頃に慙悔の事も亡なむと云へる讖文なり。（顧炎武が日知錄に、革己日乃孚、六二己日乃革之、朱子發讀爲戊己之己、天地之化過中則變、故易之所貴者中、十干則戊己爲中、至於己則過中而將變之時矣、故受之以庚、庚更也、天下之事當過中將變之時、然後革而人信之矣、古人有以己爲變改之義者、儀禮、少牢饋食禮、日用丁己、注内事用柔日必丁己者、取其令名、自丁寧自變改、皆爲謹敬、而漢書律歷志亦謂、理紀於己、斂更於庚是也、王弼謂卽日不孚、己日乃孚、以己爲已事遄往之已、恐未然、湯武革命、惟有慙德是有悔也、天下信之其悔亡矣と云ひ彼の易小

帖に、朱漢上震、以先後庚申推之當是戊己之己、此是確解と云るは、共に然る言なり、思ひ合すべし、）故是を以て。此の卦の彖傳に。己日乃孚。革而當其悔乃亡。天地革而四時成。湯武革命。順乎天而應乎人。革之時大矣哉と言へり。然れど湯武が革命。あに順天應人の擧と云むや。實には天命時日に託せたる。湯誓泰誓などの誣言は有るなり。（其は湯誓の、衆庶に告る言に、爾尚輔予一人、致天之罰、爾不從誓言、予則孥戮汝、云々と云ひ、太誓の衆庶に示す言に、今予發維共、行天罰、勉哉夫子、不可再不可三と云ひ、牧誓に、今予發維恭行天之罰、夫子勗哉、爾所弗勗其于爾躬有戮と云へるなどを見るべし、強ひて一を從はしめし事いと諦なるをや、斯て僞古文仲虺之誥に、成湯放桀于南巢、惟有慙德、曰予恐來世以台爲口實、仲虺乃作誥と見えたるが、果して後世これを口實として、武發また湯が子孫の紂王を弑して國を奪へり、然るにまた呂氏春秋に、武王勝殷、乃恐懼太息、命周公旦、進殷遺老、而

問衆之所說民之所欲、復盤庚之政と有るを見て、己日乃孚悔亡と云へる彖辭の意を辨ふべし、唐國史補に、高定貞公郢之子也、年七歲讀書、至牧誓問父曰、奈何以臣伐君、答曰應天順人、又問曰、用命賞於祖、不用命戮於社、豈是順人、父不能對とあり、卓見なる小兒なりけり、）上第四條に引たる。通卦驗の文に。周文增通八々之節。以繫王命之瑞。興亡殊方。各有其祥と有る語の眞實なること。是を以て知るべく。また史記の日者傳なる。史遷が語に。自古受命王者。何嘗不以卜筮決於天命哉。其於周尤甚と云へるを。熟く味ひ讀みて。斯天のわざの。周に尤甚しかりし事を辨ふべし。（卜筮を以て、受禪の天命を決せる事實は、尙書舜典の舜が禹に位を禪る所に始めて見えて、既に本編に論へるが如し、曲禮に、卜筮者先聖王之所以使民信時日、敬鬼神畏法令也、所以使民決嫌疑定猶與者也と有るは、信に古說なるを、周には此を甚しく用ひし故に、史遷はかく云へり、實然る說ならずやも、）さて其彖辭を。逆意を挾める危辭の多か

る。其尤き件々を抄さば。師の彖に。師丈人吉无咎小畜の彖に。密雲不雨自我西郊履の彖に。履虎尾不咥人亨。大過の彖に。棟橈利有攸往亨。坎の彖に。坎有孚維心亨。行有尚。明夷の彖に。利艱貞。節の彖に。節亨苦節不可貞。蹇の彖に。利西南不利東北。歸妹の彖に。征凶无攸利と有るなど。皆その子が殷を討む時の讖文に。作れる姦意の文なり。（郝敬が周易正解に、說者因大傳云作易者有憂患乎、當文王與紂之事乎、其辭危、因謂危辭多在爻、爻辭亦文王作非也と云ひて、此れ等の辭を引き出し、此皆文王彖辭、可謂不危乎、文王序易逐卦繫象、周公承考逐爻繫辭、公嘗自言、文王我師、孔子亦謂文王无憂、父作子述即此類也、今檢爻辭如隨云王用亨于西山、升云王用亨于岐山、指文王岐周也、明夷云、明夷于南狩得其大首、指武王誅紂也、箕子之明夷指箕子爲奴也、小畜履隨蠱、皆隱用文武爲象、歸妹之九五、泰之六五、引商王帝乙、是文王所親臣事者也、凡此皆足以徵爻辭之非出自文王甚明也、蓋周公相武王誅紂伐商、晩遭流言憂患與父考同、故摸寫往事眞切如此、後世過信班史、故蜀才改箕子之明夷爲其子、或援爾雅釋岐山爲二達之山非岐周、或謂帝乙爲成湯非紂父、皆以附合文王作爻辭之說、牽強固僻皆可哂也と云へるは、信に然る言なりかし、（抑姬昌が。周易上下篇の彖辭を作れる本懷。かの革命に有りて。中孚の九二に。鳴鶴在陰。其子和之と云へる如く。長子姬發その志を果し。次子姬旦その意を繼て。六爻の辭を作れり。是を以て姦意僞巧至らぬ所なく。實に叛逆邪謀の木鐸なりけり。（但し其の彖爻の辭ども、逐一に其事を行ふ時に、其の卦爻を得て而して後に、其の事迹を繫たるには非ざれど、其の爻辭に、姬發が紂に克て後の事迹も多かれば、姬旦が爻辭を繫る時に、正に其事有りしは云ふも更なり、斯て其占を得ざる事をも、僞巧に思ひ合さるゝ事をば拾ひ集めて、爻に係たる事は云ふも更なり、）繫辭傳に。解の卦の爻辭を評して。作易者其知盗乎。易曰。負且乘致寇至。負也者小人之事也。乘也者君子之器也。小人而乘君子之器。

盗思レ奪レ之矣。上慢下暴盗思レ伐レ之矣。慢藏誨レ盗。冶容誨レ淫。易曰。負且乘致二寇至一盗之招也。と云へるを思ふべし。彼の周易上下篇はも。誨盗誨淫のみに非らず。謀叛弑逆の誨へは。殊にその要旨にぞ有りける。(其はかの日者傳なる司馬季主が語に、伏義作二八卦一、周文王演二三百八十四爻一、越王勾踐効二文王八卦一、以破二敵國一霸二天下一、と有るは然る言にて、此勾踐が呉に囚はれて、呉王が糞を嘗め、國より美女財寶を贈らしめて其心を取り、遂に赦されて歸れる後に、兵を起して呉を亡せる事の、能くも姫昌を效びたるを思ふべし、故是を以て彼蒙莊は、聖人死ざれば、大盗止ずとぞ言へる、其はかの成湯、及び姫昌父子らが類なる、擬聖をこそ言へ、豈眞聖をしも然云はむや。)然れば彼の國のごと。王統に定位なき國には。然も有らば有るべし。皇統無窮に續かせ給ひ。君々たり臣々たる。皇國の人などの。信じ讀べき書には非ず。皇國の人にして。此を能く信じ效びたるは。北條義時なりき。(然るは承久の時に、前蹤なきに非ずとて、湯武がこの革命のわざを口實として、天皇に敵對し奉り、畏くも克參らせて、三柱の天皇を島に放らし奉れる是なり、何に恐るべき事ならずや。)さて本文の危者使レ平。易者使レ傾云々とは。彼の上下篇の辭を。常の占判に用ふる意定を云へるにて。其辭の危險なるをば。平易に取なし。平易なるをば。傾覆せしめ用ふる時は。其の道甚た大きに。百物また廢闕なく。衆事悉く備はるを。殊に戒懼を存して終始すれば。其の要咎なきに歸す。此周易の道ぞとなり。(今し僥倖の徒の、強ひて誇言して、季主君平に比すと稱し、十有八變の謡筮を賣りて、糊口の料を得むと計る倫は、然して此の易法を用ひむ事も。敢て咎なき事にこそ。)然れど彼の六爻占は。十有八變の手術こそ事々しけれ。實には俗に略筮とて。蓍を揲ふるに。八を以して內外卦を立て。また六を以て蓍を揲へて。變爻を立る易法に類たる拙法にぞ有りける。穴笑しや。

三易由來記卷之下

大壑　平篤胤撰述

門人　駿河國　新庄道雄
　　　武藏國　碧川好尙　同校
　　　常陸國　竹來道彥

【九】孔子晩而喜易。序彖繫象說卦文言。讀易韋編三絕曰。假我數年若是。我於易則彬彬矣。

此の第九條は。史記の孔子世家に採れり。抑孔子の晩而喜易と云ふ說は。儒者の嫌ふ事なれど。信に然有し事は。種々思ひ合さるゝ事ども有り。其は先幼より好める。禮容の事を問はむと。周に適きて。老子の門に入りたるは。莊子天運篇に。孔子行年五十一。而見老聃と有る時なり。(孔子の老子に入門せる年頃を、或は十七歳の時と云へる說の有るに依て、史記の索隱に、孔子適周訪禮之時、豈拄十七耶且孔子見老聃云甚矣道之難行也、此非十七之人語也、乃既仕之後言耳と云へるは、信然る言なり、)史記の老子傳に。其の時の事を載して。老子曰。子所言。其人與骨皆已朽矣。獨其言在耳。去子之驕氣與多欲。態色與淫志。是皆無益於子之身。吾所以告子若是而已と誨ふるに。孔子甚く畏感たる事あるが。葛洪神仙傳に。其の事を記せる次に。孔子讀書。老子見而問之曰。何書。曰易也。聖人亦讀之。老子曰。聖人讀之可也。汝曷爲讀之と叱れる事も有り。(老子かく、孔子の易を讀ことを叱れるは、易道の深理は、汝如き驕氣態色の徒の得悟る所に非す、聖ならむ人こそ、其の深理は知れと、態と憤せしめ、かつ其驕氣を抑むとの敎術なり、然れど後には、其旨をも云ひ誨せること疑なし、そは禮記また家語などに、老子に聞たる由にて、孔子の易理を語れる事も、往々所見たるにて知べし、(また論語なる孔子の自記に。加我數年。五十以學易。可以無大過矣。と云へる事あるは。五十未滿の。いまだ易の義理を。能く會得せざる頃の語なるに。思ひ合せて所知たり。(伊藤長胤が讀易私說に、孔子以義理說易論と云ふ條ありて、此語を引きて、故知、孔子之言易、不以爲卜筮之書、

而以爲義理之書、儻使之卜筮之書耶、則分挂揲歸之法、固不待假數年而學也、蓋日中則昃、月盈則虧、此理之常也、故易之爲敎、貴謙沖而戒盈滿、喜中正而忌亢極、所以謂之學也、然當時未甚盛行、不比詩書執禮之可雅言也、故假之數年、領會其敎、則應事接物、豈有悔尤之至、此所以爲無大過也、然則今日爲易者、當據夫子言、以爲義理之書可矣と云へり、此は通解の首にも記せるが諸なる說なり、）斯て同書に。十有五歲より學に志して。次々に上達せる事を云ひて。五十而知天命と云るは。此の齡にして創めて易を學び。其の易學の力に賴りて。天命を知れる義なること著し。其は本編に記す如く。天命を知ること。易學の本旨たればなり。（此の語の解は、朱熹も既く、天命卽天道之流行而賦於物者、乃事物所以當然之故也、知此則知極其精、而不惑、又不足言矣、と云へるが如し、）また易緯坤鑿度に。孔子參人生不知易。偶筮其命得旅。請益於商瞿氏。曰子有聖智。而無位。孔子泣而曰。天也。命也。鳳鳥不來。河無圖至。嗚呼天命之也。嘆訖而後停讀禮。止史削。五十究易作十翼也と言ひ。其の易法は。師於姫昌。法旦とも見えたり。（此の全書は、武英殿の聚珍板と云ふに出し、首に其の提要ありて云へる如く、晩く世に顯はれたる書ながら、此說を始め、古說と思はるゝ條々も少からず、）偶筮其命とは。人各々本命行年の天命は定れるを。偶に時命の變を知む爲に筮を立たる義なること。既に本編に委曲せるを考へ合すべし。抑旅の卦は。所住を去りて處ざる覊旅の象にて。其好む禮樂はも。聖智ありとも位无き。東西南北の人にては。行ひ得まじき道なる由を。商瞿に問ひて之を解り。其の天命の。何とも爲べからぬ事を嘆じて。其より見を改めて。禮書を讀ことを停廢し。春秋の史削に止まり。五十の齡にして。始めて易を究めて。十翼を作れる由なり。（然れば史記の自序に、孔子曰我欲載之空言、不如見之行事之深切著明也、と有るは、史削に就て云へる語、また說苑に、孔子曰、成人之行達乎情性之理、通乎物類之變、知幽明之故、睹遊氣之源、若此而可謂成人、既知天道、行

躬以仁義飾身以禮樂、夫仁義禮樂成人之行也、窮神知化、德之盛也と有るは、易學に就ての語と聞ゆるを思ふに、此は共に五十而知天命より、後の語なるべし、然ればこそ每に替りて、其旨いと高尙に聞えたれ）十翼とは。本文に。序彖繫象說卦文言とある。彖傳上下。繫辭上下。象傳上下。說卦文言の八傳に。序卦雜卦の二篇を加へて十翼と云ふ。史記には。序卦雜卦の名を漏せり。序とは孔子以前より在りける。右の傳等を摭ひ聚め。序次を立て十傳と爲たる由なり。（漢書の藝文志に、易經十二篇と有る師古が注に、上下經及十翼、故十二篇と云ひ、孔穎達が正義に、十翼者上彖一、下彖二、上象三、下象四、上繫五、下繫六、文言七、說卦八、序卦九、雜卦十とあり、此は然る言なれど、楊雄曰、宓犧氏綿絡天地、經以八卦、文王附六爻、孔子錯其象、而彖其辭と云へる文王以下の說は非なり）然るに隋志に。孔子爲彖象繫辭。文言序卦。說卦雜卦と記し。今の坤鑿度にも。孔子作十翼と云ひ。諸書に十翼の文を引用するに。孔子曰など云へるは。悉誤りなり。序と云へるを。豈うち任せて作と云むや。（然れど漢以來誰も、十翼を孔子の自作と云ざるは無く、唯こを孔子の作ならずと云へるは、歐陽脩が周易童子問と、伊藤長胤が讀易私說となり、然れど其また未だ盡さゞる說ども多かり、其は下に論ふを見るべし）偖しか序次を爲むと喜み讀めるに。韋編を三まき絕損つれど。心に應ふ如く。序を爲得ざりし故に。なほ我に數年の假ありて。是の如く勞きなば。我が易學に於て彬々たらむと。意に快からぬ由を嘆きしなり。（孔子の易を敍づるに甚く勞せる事は、論語緯比考讖にも、孔子讀易韋編三絕、鐵撾三折、漆書三滅とも見えたり、史記の文は是に依れるならむ）さて上の坤鑿度に。孔子の易學は。姬昌を師とし。姬旦に法とる。と有るに就て思ふに。尙書の孔安國が序に。古者伏羲氏之王天下也。始畫八卦。八卦之說謂之八索。求其義也。先君孔子生於周末。讚易道以黜八索と有る八索は。本編に云へる如く。本命行年の八卦。各々年々に八索して。八々六十四卦と成り。その六十四卦。また每年の八節に變化して。六十

有四と成る古法なり。（そは此の文の正義に、以二易ノ八卦一爲レ主、六十四卦三百八十四爻、皆出二於八卦一、就二八卦一求二其理一、則萬有一千五百二十策、天下之事得、故謂二之索一、非二一索再索而已一、とあるにても知るべし。）然るを孔子。かの姬昌父子が。六爻判斷の周易を讃して。八索の古法をば廢黜せる由なり。其は論語に。信じて古へを好むと言る語は有れど。其の性元より古道を好まず。常道を好む學僻なれば。此は學ぶまじき非事にこそ。（かく言ふを不審み思はむ人は、後に問へ答ふべし。）さて其の序次たりと云ふ十翼の中に。彖傳上下は。姬昌が彖辭の傳。象傳。上下は。姬旦が爻辭の傳なるが。其彖爻の辭ともに。採用すまじき上は。況て其の傳は云も更なれど。彼の彖傳は實に孔子の自作にやと思ふ由あり。其は大哉乾元萬物資始。至哉坤元萬物資生。など樣の讃語多きが。讃二易道一と有るに叶ひ。かつ湯武らの擬聖に。善を誣たる說の有るが。此の人の學風に合へばなり。（湯武らに善を誣たりとは、彼の革の卦の傳に、渠らが君を放らし、君を弑せる事をし、順レ天應レ人と云へる類を云ふ、なほ論語を始め諸書に、此の人の成湯文武らに、善を誣たる語は數ふるに暇あらず、猶不審くは後に問へ答ふべし。）次に象傳上下。是また彖傳と同口氣なるは。孔子の作なるべく所思る中に。大象とて乾に。天行乾。君子以自强不レ息と云ひ。坤に地勢坤。君子以厚レ德載レ物と云る類の六十四章は。疑なく太昊氏以來の象辭を。轉傳口誦し來れるを。いと古き世に筆記せる物なり。其は姬昌が彖辭の危厲なるとは、似も著ぬ溫雅の文にて、法象を云ふこと易簡にして、其の趣意の善く諦に通え、かの彖爻の文等の、謎を解くが如き類ならず、質直平和の文なるを以て、古象辭の遺訓なること先所知たり）いで其の由は。まづ彼の六十四章を大象と云ふは。一卦の大象を云へる文なる故の名なるが。謂ゆる象傳中に。錯出せる由來。いかにと稽ふるに。姬昌かの彖辭を作りて。卦々の下に載し。姬旦その爻辭を作れる後は。其周易のみを用ひし故に。大象の辭の古なるは。自然に廢れたるを。孔子の象傳上下篇を作る時しも。其を惜しみて。彼の象傳の每首章に。標し出せる

物と見えたり。(然るは彼の象傳はも、爻の辭を釋せる傳なれば、爻傳と號くべきに、象傳と號けしは、其の首章に標出せる大象の文を、舊く象と唱へ來れるに、隷ぜる故の名と聞ゆるをも、思ひ合すべきなり。)然らば此の大象は。孔子以前に在りし古文なりと云ふこと。何を以て知ると言はむに。春秋昭公が二年の左傳に。晉の韓宣子が魯に來聘せる時の事を載して。觀二書於大史氏一。見二易象一曰。吾乃知二周公之德一。與三周之所二以王一也。と有る易の象は。乃ちこの大象の文を見たる義にて。今の謂ゆる姫旦が爻辭。及び其の傳を謂ふには非ず。(但し是の言に、吾乃知二周公之德一與三周之所二以王一也と云へるは大象の辭の温柔にして危厲ならず、皆修齊治平の道なるを以て、周の王たる所以を知たる義なるが、此を周公が作と思へる樣なるは非なり。)然れば伊藤長胤が周易通解にも。今と相ひ似たる說を出して。右の左傳を引き。孔子時に年十歲。象之作蓋在二孔子之先一矣。と云へるは信然る說なり。(また後に、その讀易私說を見れば、先儒以二十翼一爲二孔子之作一、故以二韓宣子所レ觀象者一爲レ指二爻辭一、然爻辭之流二行于諸國一久矣、列國士大夫皆能言レ之、載在二左氏傳一、晉獻公嫁二伯姬于秦一、史蘇占レ之引二歸妹亡羊之辭一、僖十五年秦卜偃筮、秦伯將レ納、王曰公用亨二于天子一之卦也、襄二十五年、齊崔武子筮取二棠姜一、陳文子引下困二于石一據中于蒺藜上之辭一可レ見爻辭於二諸國一久矣、何得レ謂下到二宣子一始觀上之哉と云へり、是も通えたる說なり、)然らば此の大象の辭かの周易ありし後の物かと言ふに。夫より遙に以前の物なり。其は何を以て云ふなれば。本編に註せる如く。象の字もと南越の大獸の名なるを。想像の義に假借せるにて。八卦の作れる當昔。遠からぬ世より。用ひけむと所思ゆる文字なれど。彖は然らず。此は疑なく姫昌が。其の作れる卦辭の名に。始めて假れる名と聞えたり。(然云ふ由は、有ゆる古書ども、周易上下篇の彖辭より外に、形容に擬する事などに、彖と云へる言は、一つだに有ること無きを、象の字は今に至るまで、普く形容の義に用ひ來れるを以ても辨ふべきなり。)抑、彖の字は。說文に彖豕走也从レ彑从レ豕省。韻會に。徐曰。象形。繫辭曰。彖者材

也。謂卦中剛柔之材。陸氏曰。彖者斷也。毛氏曰。从彑彙頭也。象其銳而上見と見え。楊愼が外集に。彖亦曰茅犀。狀如犀而小角。善知吉凶。交廣有之。土人名曰猯神。犀形獨角知幾知祥。是則彖者取其幾也と言へり。（また留青日札に、彖者修豪之獸豕類也、頭銳而上見、故彖居卦爻之首、豕走斷然不疑、故彖能決斷一卦之體、或曰、彖名茅犀、形小獨角、善知吉凶、故曰猯神、出于南荒とも言へり、）是等の說に依れば。舊來の大象に。象の字を假借せるより思ひ著て。此の獸の名を借て。己が新作せる。辭の名とは爲たるなり。然れど假令彖と名けたるも。語こそ革れ。その卦德の大體を云へるは。卽ち象辭なるが故に。繫辭傳にまた。彖者言乎象者也とも見えたり。是何に。大象の彖辭より古き明證ならずや。（長胤が通解に、先子謂、彖既解卦辭、故象不復解卦、別就上下二象取義、如天行健地勢坤、然則象之作其在於彖之後乎と云へるは、深く右の謂を思はざるなり、）然らば大象は。般の世の辭なるかと言ふに。尙夫よりも以前の物なり。

其は何を以て云なれば。般に用ひたる歸藏易の卦名は。既に云ふ如く。今の卦名とは大抵異なれば。大象の辭もし般の世に記さむには。其の卦名を用ふべきに。然らぬは。決めて夏の世の筆記なり。（上の第四條に引たる路史の說に、連山之文禹代之作、歸藏之文湯代之作、周易之文文王之作、と有をも思ひ合すべし、）其は夏に用ひたる連山易は。今の卦名と全同じきに。大象い卦名に。そを用ひたるを以て著明なるが上に。その六十四章の文に。君を大人と稱し。或は君子と稱し。或は后とも先王とも。稱せるを以て。疑なく夏の世の筆記と推量られたり。（大象の文、凡て六十有四章の中に、七章は、先王と稱して事業を擧げ、二章は后と稱し、一章は大人と稱せるが、其の餘の五十四章は、みな君子以て云々と云へり、是を以て其世を量れり、）然るは君子と云ひ大人と云ふは。赤縣太古傳に云へる如く。皇國の故實より起りて。太昊氏の當昔より。王侯の通稱に云ひ效へる言なれば。大象の辭の口授なりし閒は。君子とも大人とも誦し傳へけむを。夏の世より後に。先王后など云ふ語を

も交へて傳へけむ。（大象の辭の古く、口授にて傳へけむ事は、既に引きたる乾鑿度に、伏羲氏始作八卦、質者无文、以天言此易之意、とあるを始め、數の書にさる意ばへの、見えたるにて知るべし。）其は彼の大象の先王以云々と有る事業どもを觀るに。多くは夏禹以前の王者の履歷に合へるを以て。夏の世の筆記に疑無しとは言ふなり。（其の先王と稱せる條々は、先王以建萬國親諸侯、先王以作樂崇德、殷薦之上帝、以配祖考、先王以省方觀民設敎、先王以明罰勅法、先王以至日閉關商旅不行、先王以茂對時育萬物、先王以享于帝立廟など見え、后と稱せる條々は、后以裁成天地之道、輔相天地之義、以左右民、后以施命誥四方など見え、大人と云へるは、大人以繼明照于四方と見えて、此は皆禹王以前の王者の事業に係る辭等なり。）偖その君子以云々。と有る五十四章を觀るに。みな王侯に涉る訓誡なるが。引伸しては。成人の學に志を立る。士庶にも用ふべき辭等なり。是に因て思ふに。孔子晩に易を學びて後は。能くこの大象を翫じ。熟く其の

辭を玩びて。其の雅の言行をも。此辭に本づけし事著なり。（抑君子といふ語は、もと右の如く重き語なるを、孔子の雅に、大象に本づきて士庶を訓ふるに、君子に比へて語を成せるより後、終に庶人に廣く云ふ言と成れる故に、君子てふ語輕くなりて、今しは少く漢語などして、儒者貌なるは、村學究の卑人らさへに、誇かに君子の氣どり坏すめるは、傍痛き事にこそ、此は孔子以來の事なること、論語に、孔子の自から、君子と稱せる語の許多あるを以て知るべく、實は君子とは王侯の稱なること、大象の文は更なり、左傳以上の古書を熟視て辨ふべきなり。）然るは論語は。多く五十歲より後の言行を。集記せる物と見ゆるに。其の開卷第一なる。學而篇の首章に。學而時習之。不亦說乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不慍。不亦君子乎と云へるは。兌の大象に。麗澤兌。君子以朋友講習と有るに本づける語なり。（然るは兌は恒に悅懌を德とし、慍悶する事なきを、主と爲る卦なるに效ひて、學びて時に之を習ふをも悅び、其の學によりて、學友の遠方より訪

來て、講習するも樂みなり、又然しも遠方より訪來て、講習を爲す朋も有るに、此の學の尊き事を都ても知らず、我を知る人無きを慍悶せざるも、亦君子の風に不らめやと、兌の卦の象を觀じ、其の辭を玩びて、自から寓意せる語なり、見む人心を潜めて思ふべきなり、）此を始めと爲て。論語中に。こは信にも言ひ得たりと所思ゆる語ども。熟視れば大象の辭を敷演し。或は翻案して云へるが半を過ぎて。かの一以貫レ之と稱し。其第一義と立る仁と云ふも。乾坤二卦の大象より。説出たる物なり。是にても五十以學レ易可三以無二大過一矣と云ひ。晩にして易を喜み。韋編を三絶し。鐵擿を三折せりと云ふ説の。實然る言なるを思ふべし。（論語中なる孔子の語どもに、大象の辭を敷演翻案せるが多かる由を、今逐一に諭さむも、最易き事には有れど、所狹く煩ければ、別に古易大象經傳と云ふ物を著はして、其の毎章の注に、引出るを見るべし、）斯て第二十堯曰の篇の終章なる。不レ知レ命無二以君子一也と云ふ語は。澤水困の大象に。澤无レ水困。君子以致レ命遂レ志と有るに本づける語にて。知命は易學の第一義なり。其はかの陳蔡の間に。困厄せる時の樣にても知べし。（此時しも子路が慍りて、君子も亦窮すること有やと問へるに、君子固より窮す、小人窮すれば是に濫ると云へる語を思ふべし、既に自から君子を許せり、然て此の時に琴を鳴し、歌ひて在りしは、易の大象に因りて命を致め、五十にして天命を知れる驗にぞ有ける、）然るに此の語を終章に出し。首章に兌澤の大象に據れる。講習の語を出せるは。道を學ぶこと。講習に始まりて。知命に終る義を明せるにて。論語の撰者は誰か知らねど。能くも孔子の志學より成學までを。窺ひ識たる撰者なりけり。（論語の撰者を、有若曾參らが門人の撰と云ひ、或は閔損が弟子の撰なりと云ひ、猶くさぐさの説等あれど、皆詳ならぬ説等なり、）さて論語なる語ども。多く大象の辭に。本づけりと言ふ事は。古今の學者のつゆ知ざる事なるを。始めて言ひ出たれば。今忽に諾ふ人は有まじく。却りて之が辨を作りて。大象の辭と。論語と相ひ似たるは。共に孔子の語なる故なりと言ふも有むか。然れど其説立がたき由あ

り。其は彖辭爻辭は、姬昌父子の作にて、互に異義なく。其を釋せる彖傳象傳は。共に孔子の作にて。本辭と其の義の違はざる中に。唯かの大象の辭のみ。彖爻の辭及び其の傳と。義理の相違せるが多かるは、是のみ古辭なる明證ならずや。(今その相背ける事をし一二云むに、剝の卦の大象に、山附於地剝君子以厚下安民と有れば、是安重の卦なり、彖辭には剝々也、柔變剛也、不利有所往と有りて、吉卦に非ず、また履の卦の大象に、上天下澤履、君子以辨上下定民志と有りて、專と禮を說たるに、彖の辭にて、履柔履剛也と云へれば、危厲の慮ある卦なり、此の餘に彖と象と、其の旨の異なる、今盡く擧るに暇あらず、かつ彖辭爻辭は更なり、其の彖傳爻傳ともに、吉凶相間せるに、大象の六十四章、みな之を人事に推て、敎ふるに善道を以し、一も不善に涉る者なきは、是のみ周易に關かる事なく、はた象傳と同作ならぬ事も、またいと諦なるに非ずや、)斯て後に。顧炎武が日知錄を見れば。其の一卷に。孔子論易見於論語者二章而已。曰加我數年五十以學易可以無大過矣。曰南人有言曰。人而無恒不可以作巫醫美夫。不恒其德或承之羞。子曰不占而已矣。(文の意は人として恒の心なき者は、巫醫を作べからずと、南人の言へるは、信然る言なり、其は恒の卦の九四の辭に、其德を恒にせざる者は、或は之が羞を承くと云へりと證して、恒の心なき者は、占はざらむ而已と誡めたるなり、)記者於夫子學易之言而卽繼之曰。子所雅言詩書執禮皆雅言也。是知孔子平日不言易。而其言詩書執禮者。皆言易也。人苟循乎詩書執禮之常。而不越焉。則自天祐之吉无不利矣。大象所言。凡其體之自。施之於政者。無非用易之事。(以上の說ども、古今に人の云ざる事にて、信に然る言なり、是より以下も、繫辭傳を直に孔子の作、と思へるのみ非なれど、其餘はみな理れたる說なり、偖是に就て案ふに論語に其門人らの言に、夫子之文章可得聞也、言性與天道、弗可得聞也、また子罕言利與命與仁など有るも、皆易道の深理に涉る事なる故に、容易に云ざりし事と聞えたり、)故其作繫辭

傳。於悔吝无咎之旨特諄々焉。然辭本於象。故曰。君子居則觀其象。而玩其辭。觀之者淺。玩之者深矣。其所以與民同患者。必於辭焉著之。故曰聖人之情見乎辭。又曰出入以度。无有師保。如臨父母。是孔子之易也と云へるは。予が意を得たる説なれば。今の要ある語どもを摭ひて抄しつ。（此に替りて長胤が通解、及び私説などに、稽魯論所載、子所雅言、詩書執禮、乃曰、興於詩、立於禮、成於學、此夫子平日所爲教者也、其言及于易者、僅有可以無大過之言耳、又且曰加我數年、則其事似緩、觀十翼所言、易之於人道、極其深奧、極其切近、不可斯須離、非詩書之可比、此其旨不同、吾寧捨繋辭而從論語と云へるは、論語を宇宙第一之書と思へる維楨が子にして、其の父の言に從ふを、生涯の意と爲たる故なれど、顧炎武が説には比すべくも非ぬ狹見なり。然は有れど、皇國の儒者に、此の人ばかり精學なるは無りしかば、此の人の説のみは、かく往々に論らふなれど、其餘は大かた論らふにも足らずかし。）さて繋辭より以下の諸篇をも。孔子の作なりと云ふこと。漢以來宋に至るまで異論无りしを。歐陽脩が周易童子問と云ふ物に。童子問曰。係辭非聖人之作乎。曰。何獨係辭焉。文言說卦而下。皆非聖人之作。而衆說淆亂。亦非一人之言也。昔之學易者。雜取以資其講說。而說非一家。是以或同。或異。或是或非。然其傳已久矣。故雖有明智之士。或貪其雜博之辨。溺其富麗之辭。莫得究其所從來。而覈其眞僞と言ひて。まづ其の繁衍叢脞なる數說を出し。（其一は乾の初九に、潛龍勿用と有るにて通ゆるを、文言に、潛之爲言隱而未見と云ひ、其二は係辭に、乾以易知、坤以簡能、云々と有るにて足るを、同傳にまた、易簡之善配至德云々、或は夫乾確然示人易矣、坤隤然示人簡矣云々、また夫乾天下之至健也云々といひ、其の三は同傳に、六爻之動三極之道也と云るにて足るを、また易之爲書也、有天道有人道有地道、兼三才而兩之云々といひ、また說卦にも同說を出し、其四は係辭に、聖人設卦觀象係辭焉、而明吉凶云々と有るにて足るを、同傳に、

また辨吉凶者存乎辭、また係辭焉以斷吉凶云々、或は易有四象、所以示也、係辭焉所以告也云々、また設卦以盡情僞、係辭焉以盡其言云々と有る杯を擧たり、)凡此數說者其略也。其餘辭雖少異而大旨則同者。不可以勝擧也謂其說出於諸家而昔之人雜取以釋經故擇之不精則不足怪也。謂其說出於一人則是繁衍叢脞之言也。其遂以爲聖人之作則又大繆矣と言ひて。次に乖戾相容ざる說をも出せり。(但し中には、實に能く論ひ得たる說も、無きに非ねど論ひ得ざる說等は、殊に多かれば、今し其文は引き出ずなむ、)斯て其の下に係辭者。漢初謂之易大傳也。至後漢已爲係辭矣。謂之聖人之作則僭僞之書也、蓋夫使學者知大傳爲諸儒之作而敢取其是而捨其非。則三代之末。去聖未遠老師名家之世學。長者先生之餘論。雜於其間者在焉未必无益於學也。と云へるは信然る言なり。(此文に、繫辭傳を、漢の初めに易の大傳と謂ふと云へるは、史記の自序に、易大傳天下一致、而百慮同歸而殊途、と有る正義に、張晏云、謂易繫辭也、と云へる說に據りてかく言へり、經典釋文にも、大史公論六家要旨、引此文、謂之易大傳、班固謂、孔子晚而好易、讀之韋編三絕、而爲之傳、傳卽十翼也と云ひ、前漢郊祀志に、劉向が語に、易大傳曰、誣神者殃及三世、と云へる語も有り、然れど此は今の繫辭傳に見えず、)抑繫辭傳は。實にも名家の遺說餘論を聚めし物にて。全くは孔子の語に非ず。中に太昊以來の古易の說あり。姬昌以來の周易の說あり。珠玉砂礫混淆して。其文の序次いと猥雜なるは。孔子その遺說を集めて。序を調へむと欲せる物から。彼の彖象二傳の作に、專と力を用ひて。いまだ序次を爲畢ざりしを。其門葉の後人。草稿に言加へ杯して。世に傳へし物なり。是を以て其の文中に。顏氏之子など言ひ、子の曰と云へる條々も多かり。然れば繫辭傳は。元より其の新古の取捨なくて叶はぬ書なり。(讀易私說に系辭曰、顏氏之子其殆庶幾乎、有不善未嘗不知、知之未嘗復行也、此非孔子之言也、禮父前子名、君前臣名、弟子之於師亦然、故夫子之呼諸

弟子、必稱其名、曰參曰回、曰由曰賜、而未嘗稱其字、亦未嘗稱某氏之子、若使系辭爲夫子之作耶、必不稱顏氏之子、史記載孔子之言曰、顏氏之子使爾多財、吾爲爾宰者、亦依系辭附會其稱焉耳、不足據也、且翼易而稱其門人之德、尤可疑也、蓋戰國儒者、習聞顏子之德、牽合回也屢空、及不貳過等語、以發明不遠復之義耳と云ひ、通解の釋例に、十翼之興、或先於孔子、或後於孔子、後世湊合以附經耳とも言へり、實に此の說等の如く、繫辭文言など、若孔子の精撰ならむに、自語に、子曰と云ふべくも非ず、是を以て說者或は、此を講師の言とし、或は子は男子の通稱なれば、何人を指とも、詳ならず抔も云ふめり、然れど其は、上の件の謂を思はざる非說なり。）次に文言傳は。長胤も云へる如く。首章の元者善之長也より。故曰乾元亨利貞。と云ふまで六十四字は。左傳なる穆姜が語なり。斯て爻辭を解し畢たる後に。乾元者始而亨者也云々。雲行雨施天下平也。と云ふ六十六字あり。此は彖辭と同旨なるは。本これ文言首章の錯簡なり。是を以て元者善之長也の章と其の旨自づから相牟盾せり。然れば元者善之長也と云へる首章は。後來の攙入なること明けし。（歐陽脩が童子問にも、早く首章の元者善之長也、といふ文を擧て、此穆姜之語、在襄公之九年、後十有五年、而孔子始生、又數十年而始贊易、然則四德非乾之德、文言不爲孔子之言矣、と云へるも然る言ながら、委からず）また是に依て思ふに。此は三易有りし以來の古說を。孔子の集記せるが中に。後來また其の門葉の徒など。孔子の遺說。また左傳中の語をも加へて。撰次せる物なる事疑なし。然れば童子問に。首章の元者善之長也云々の語を以て。文言を一向に。孔子以前の物と云へる說は委からず。（また同書に、童子曰、或謂左氏之傳春秋也、竊取孔子文言、以上附穆姜之說、是左氏之過也、然乎曰、不然、彼左氏者胡爲而傳春秋、豈不欲其書之信於世也、乃以孔子晚而所著之書、爲孔子未生之前之說也、此雖甚愚者之不爲也云々とも言へり、此の說は能く叶へり。）次に說卦傳は。隋の經籍志に。秦焚書。周易獨

以卜筮得存。唯失説卦三篇後河内女子得之と有れど。今唯一篇あり。其れすら玉礫相半して。全篇その儘には用ひ難き物なり。(清の毛奇齡が易小帖に、説卦在漢時已亡、至孝宣時、河内女子發老屋得之、至後漢荀爽集解、又得八卦逸義三十有一、今諸家所傳則皆逸義也、此非可意造者故朱氏本義已補入荀氏集解于説卦傳下、と云へるをも思合すべし、)其の採用すべき條々は。昔者聖人之作易也と云へる二章。天地定位の章。雷以動之の章。乾健也。坤順也の章。乾天也故稱乎父の章などなり。(此六章の中にも、天地定位の一章は、眞の古説にて、金科玉條にも比すべき物なり、其は本篇に註せるを視て知べし、)其の餘の數章は。みな蕪雜猥瑣なるが中に。帝出乎震云々の章は。既に云ふ如く。姫昌が僞方位の説なれば。故曰成言乎艮と云ふまで。一切に掃除すべし。餘は訂正補綴を加へて。擇び用ふべき事も無きに非ず。(朱熹が本義に、此の篇の乾爲天爲圜、爲君爲父、爲玉と云へるより、兌爲澤爲少女、爲巫爲口舌云々と云ふまでを、此の章廣八卦之象、其間多不可曉者、求之於經、亦不盡合也と云ひ、長胤が通解にも、此の章を評して、考諸經及彖象之間、或見或不見至於旁取庶物、則煩猥鄙瑣、多不可曉者、蓋前世筮史之所傳、觸類而敷衍焉耳、以此爲夫子之所作則吾所未悉と云へり、信に然る言等にこそ、)次に序卦傳は、六十四卦の敍を論じ。大象の辭を相合みて。説を爲たる物なるが。早く王弼が弟子らの言に。序卦非易之緼と云ひ。序卦非聖人之書とも云へる如く、信用に足ざること。長胤が通解及び私説に。論辨せる事なれば。今更に云はず。朱熹が本義に。此篇のみ。一字の註をも下さゞるは此に思ふ旨有りし事なるか。(然れど中に、卦名を釋たる説などは、少か取べき事も无きには非ず、)次に雜卦傳は。六十四卦みな。陰陽反對相ひ偶して。敍を爲し相ひ雜へて説を爲せる故に。雜卦と云ふ。此は彼の童子問及び。讀易私説に云へる如く。筮家の占書と見ゆるが。周易上下篇よりは。却りて古説なるを。取收たる物と見えたり。(是を以て採用して大象の不足を補ふべき語も

少からず。）偖かく思ひ續くれば。十翼をみな。孔子の自作なりと云ふは非なる事。また絕て孔子の手を經し物に非ずと云ふも。深く思はざる繆なる事を辨ふべし。（古今僞書考と云ふ物に、宋王景、開祖儒志編曰、或曰、易繫辭果非聖人之言乎、曰其原出于孔子、而後相傳于易師、其末也遠、其傳也久、其間失墜而增加者不能無也と云へれど、其失墜增加は、繫辭のみには非ずかし。）さて隋志に。孔子の十翼を爲れる事を言ひ畢て。子夏爲之傳と云へる說を記し。周易二卷。卜子夏傳殘缺。梁六卷と有れど。此は僞作なること。卷末に論ふを視て知るべし。

【十】自魯商瞿子木受易孔子。以授魯橋庇子庸。子庸授江東馯臂子弓。子弓授燕周醜子家。子家授東武孫虞子乘。子乘授齊田河子裝。及秦禁學。易爲筮卜之書。獨不禁。故傳受者不絕也。

此十條は。前漢書の儒林傳に採れり。（史記の仲尼弟子列傳には、商瞿魯人字子木、少孔子二十九歲、孔子傳易於瞿、瞿傳楚人馯臂子弘、弘傳江東人矯子庸疵、疵傳燕人周子家豎、豎傳淳于人光子乘羽、羽傳齊人田子莊何、云々と有り、猶その儒林傳をも合せ見て知べし。）孔子より田河に至りて。七世の傳來なり。凡て此徒の傳記は。史記と漢書に。右の如く載せる耳にて。他書に所見なし。中に子弓が事は。史記の正義に。師古云。馯姓也。漢書及荀卿子皆云字子弓。作弘蓋誤也。應邵云。子弓子夏門人とあり。（信にも子弓は、荀卿が師なると聞えて、其の著せる荀子の書に、聖人を語れば、孔子子弓と稱せり、其の書に就て見べし。）及秦禁學云々とは、始皇本紀に。其の世の儒者どもに。古を以て今を非るが多かる故に。博士官ならぬ者の。詩書を藏せるを。皆取て燒しめ。醫藥卜筮種樹の書のみを去ず。斯て其の禁を犯せる儒者。四百六十餘人を生ながら坑に埋めて。殺せりと有る時を云ふ。（漢書の儒林傳師古が注に、其の坑の所、また埋めたる事も委しく見えたり、始皇が此の擧を、徒に謂なき惡逆のごと、世

世に誹れど、實には子細有りし事なり、其は西籍慨識に云ふを見るべし)さて商瞿がこと。史記漢書には。かく孔子に易の傳を受たりと有るを。易緯坤鑿度の傳へは此と甚く異にして。前條に注する如く。孔子生不知易偶筮其命得旅。請益於商瞿。曰子有聖智而無位。孔子泣而曰。天也命也。鳳鳥不來。河無圖至。嗚呼天命之也云々と有りて。是より後。五十の齢にして。易を究めたる由を載せれば。易學に於ては。商瞿却りて孔子より先進なること焫く。史記と易緯と其說の是非は決め難し。故その二た方に考ふるに。先史記を捨て。易緯を取むには。商瞿は孔子に易學を導ける師にこそ有れ。弟子には非ざるを。強ひて其弟子傳に出せりと言はむか。(其は史記の孔子世家に、弟子蓋三千焉、身通六藝者七十有二人と有れど、三千人は更なり、六藝に通ずる者七十有二人と云ふも、實事には非ず、然るは彼の弟子列傳なる三十五人は史遷が文に、闕見于書傳と云へるを能く視れば、顏路、公伯僚を始め、弟子ならぬ者も數人有りて商瞿も其の中に入たるが、總ては十人計りも信られぬ名字あり、況て其の下に擧たる四十二人は、已に史遷も不見書傳とて、只其の名字をのみ列せり、然て家語の七十二弟子解は、史記の弟子傳を取れる事、疑ひ無れど、人名互に出入ありて、史記に疑はしく思ゆる、公伯僚が類をば省けり、然れば史記の弟子傳は、強て七十餘人の數を得むとて、謾りに諸書より拾ひ集めたる名にぞ有ける、然れば商瞿も實は易學の師なりしを、弟子の列に取られたるも亦知べからず、其は孔子世家に、顏濁鄒を受業の門人と稱し、後の文翁孔廟圖と云ふ物には、林放、蘧伯玉を入れて、七十二人の數を合せたるをも思ふべし、實に三千の弟子有なむに、七十二人に、然しも事缺べくも非ずかし、抑三千と云へる數は、宮女三千、威儀三千など云ふ類ひに千の大數を云ふ時の語、七十有二と云る數は、もと八節に象れる八卦に、六十四卦を合せて、七十二卦なるを、年中の七十二候に配せるより起りて、五十を多く過ぎ、百に多く足らざる數を云ふ時の語にて、女媧氏七十二變すと云ひ、神農七十二毒に當ると云ひ、伊尹が湯に七十

二說すと言ひ、或は七十二國に周流すと云ひ、或は七十二戰すと云ひ、或は漢の高祖が股に七十二の黑子ありと云る類ひに、孔子の弟子の七十人ほど有りしと云ふことを、然は云へるなり、然れば實事より云むには、必ず三四十人の弟子有けむを、推て七十二弟子と云へること知べし、然るにしばし宿れる顏濁鄒、遽伯玉、或は林放、公伯僚などをさへに拾ひ收れて、強て七十有餘人を擧たるは、何に可笑き事ならずや、然れば商瞿を弟子と云ふことも、疑はしき事にこそ、）また或は今の本文なる。史記の說を助けて。易緯と。和會して說を爲さむに。孔子その易學は商瞿よりも後進にて。此學に入たる頃こそ。益を商瞿に請へる事も有つれ。固より師德秀才相ひ兼たる人なる故に。其の晚學に慨み。韋編三絕。鐵擿三折して大きに學び。終に却りて。商瞿に其道を傳ふる計りの精學に至れりと言むか。（其は師の知ざる事をし、弟子の能く知れる有りて、却りて其事を、弟子より師に傳ふる類ひも、常有る事なり、人は知らず、己は其の本弟子より習ひ得て、後には却りて、己其の道に精く成りて、其弟子に敎へ反せる事も少からず、故今は我が身の然る事實より、思ひ相してかく云ふなり。）右二說のうち。見む人擇びて用ふべし。今人の情に適はむは。必ず後の說なるべし。然てもし此の考へ當りなば。十翼は。前に孔子の序たりし稿を。商瞿が受て。その己が說をも加へし故に。子曰など云ふ語。また顏氏之子など云へる語も有るか。此は後人なほ能く考ふべし。）家語の七十二弟子解なる商瞿が傳に、特好易孔子傳之志焉とあり、此の說もし正くは、志とは十翼などを云ふにも有るべし。）惜また隋書の經籍志に。孔子の十翼を爲れる事を記し畢て。子夏爲之傳と云へる說を記し。周易二卷。卜子夏傳殘缺梁六卷と擧たり。然れば漢書の藝文志に此の目なく。後に傳はる十卷の僞書なる由は。古人旣く辨へたり。（そは古今僞書考に、子夏易傳、漢志無、隋志始有子夏易二卷、崇文總目曰、此書篇第略依王弼、決非子夏之文、其言近而不篤、然學者尙異頗傳習之、晁子止、公武讀書志曰、景迂云、張弧僞作、陳直齋曰、隋唐時久殘缺、宋安得有十卷、陸氏

釋文所引、隋子夏易傳、今本皆無之、豈直非漢世書、併非隋唐之書矣、と云へるが如し、)抑子夏は。孔門の謂ゆる十哲の一人にて。卜商字子夏と云ひし人なるが。此の人の易學を傳へしと云ふこと諦なる所見なし。劉向が說苑の敬愼篇に。孔子讀易至於損益則喟然而歎。子夏避席而問曰。夫子何爲歎。孔子曰夫自損者益。自益者缺吾是以歎也云々とて。損益の卦象に托して。學者の損益ある義を訓へしかば。子夏曰善請終身誦之。と云へる事を載たれど。此は易傳を受たりと云ふ計りの事に非ず。是を以て史記の弟子傳にも。其事を載さず。(但し其の索隱に、子夏文學著於四科、序詩傳易、云々と有れど、傳易の事は詳ならぬ事なり、)孔子家語の執轡篇に、子夏問於孔子曰。商聞。易之生人及萬物。鳥獸昆蟲各有奇偶。氣分不同云々と易理を述て。敢問其然乎と云ふに。孔子答へて。然吾昔聞諸老聃。亦如汝之言と云へる說有りて。易に精しき趣なれど。此は大戴禮に據るに。孔子の語にて。子夏には非ず。(凡て今傳はる孔子家語は、禮記の諸篇及び大戴禮、また劉向が新序、說苑などに出たる說ども、或は他書よりも、孔子の語を拾ひて、魏の王肅が僞作せる書なれば、此說は大戴禮を取りて、翻案せる說にや有らむ、)倩かく彼此を推て考ふるに。子夏が易を傳せりと云ふ說は。商瞿が事實を謬れるには非ざるか。其は商瞿字は子木と云ひ。卜商字は子夏と云ふ名字の。ほゞ相似たるをも思ふ可きなり。

【十一】漢初傳易者有田何。何授丁寬。寬授田王孫。王孫授沛人施讎。東海孟喜。琅邪梁丘賀。由是有施孟梁丘之學。又有東郡京房。自云受易於梁國焦延壽。別爲京氏學。嘗立後罷。

此の第十一條は。隋書の經籍志に採れり。然るに此は皆漢書に據れる說なり。其は儒林傳に漢興田何授東武王同子中。雒陽周王孫。丁寬。齊服生。皆著易傳數篇。(師古曰、田生授王同、周王孫、丁寬、服生四人、而四人皆著易傳也、子中王同字也、藝文志に、周氏易傳二篇の註に、字王孫也、服氏二篇の注に、劉向別錄云、服氏齊人號服光、王

氏二篇の注に、名は同、丁氏八篇の註に、名は寛と見えたり。）同授ニ淄川楊何字叔元一。元光中徵爲ニ太中大夫一。（藝文志に、楊子二篇の註に、名何字叔元菑川人とあり。）齊卽墨成至ニ城陽相一。（師古曰、姓卽墨名成。）廣川孟但爲ニ太子門大夫一。魯周霸莒衡胡。（師古曰、莒人姓衡名胡也。）臨淄主父偃。皆以レ易至ニ大官一。要言レ易者本ニ之田何一。（史記の儒林傳も同說なるが、終めを、要言レ易者、本ニ於楊何之家一と有り、こは漢書を正と爲べし。）丁寬字子襄梁人也。從ニ田何一受レ易。精敏學成東歸。何謂ニ門人一曰。易以東矣。（師古曰、言丁寬得ニ其法術一以去。）寬至ニ雒陽一復從ニ周王孫一受ニ古義一。號ニ周氏傳一。作ニ易說三萬言一。訓故擧ニ大誼一而已。（師古曰、故謂ニ經之旨趣一也、它皆類レ此。）今小章句是也。寬授ニ同郡碭田王孫一。王孫授ニ施讐一。孟喜。梁丘賀。繇レ是易有ニ施孟梁丘之學一。（師古曰、繇與レ由同、後類レ此。）施讐字長卿沛人也。爲ニ童子一從ニ田王孫一受レ易。與ニ孟喜梁丘賀一竝爲ニ門人一。謙讓常稱ニ學廢一不ニ敎授一。及ニ梁丘賀爲ニ少府一事多。迺遣ニ子臨門人張禹等一從レ讐問。讐自匿不ニ肯見一。賀固請不レ得レ已。

乃授ニ臨等一。於レ是賀薦レ讐結髮事レ師數十年。賀不レ能レ及。詔拜レ讐爲ニ博士一云々。（此になほ其の門に出たる數人の、易學に係りて高官に至れる事どもを、載たれど、其は略きて抄さず。）○梁丘賀字長翁。琅邪人也。以レ能ニ心計一爲ニ武騎一。從ニ太中大夫京房一受レ易。房者淄川楊何弟子也。（師古曰、自別一京房、非ニ焦延壽弟子爲課吏法者一、或書字誤耳、不レ當レ爲ニ京房一。）房出爲ニ齊郡太守一。賀更事ニ田王孫一。宣帝時聞ニ京房爲レ易明一。求ニ其門人一。得レ賀。賀時爲ニ都司空令一。以ニ筮有レ應繇レ是近幸爲ニ太中大夫給事中一。至ニ少府一。爲レ人小心周密。上信ニ重之一。年老終レ官云々。（此に其の子及び門人らの、易學に由りて、官に至れる事を載せれど、其は抄さず。）○孟喜字長卿。東海蘭陵人也。父號ニ孟卿一。（師古曰、時人以レ卿呼レ之者言レ公矣。）孟卿以ニ禮經多春秋煩雜一。乃使ニ喜從ニ田王孫一受上レ易。（孟卿が傳、別に儒林傳中に出たり。）喜好自稱譽。得下易家候ニ陰陽災變一書上。詐言。師田生且レ死時枕レ喜傳。同門梁丘賀疏通。證ニ明之一曰。田生絕ニ於施讐手中一。時喜歸ニ東海一安得ニ此事一。（師古曰、同門同レ師學者也、

疏通猶言分別也、證明明其僞也、)博士缺衆人薦喜。上聞改師法。遂不用喜。喜授同郡白光少子。沛翟牧子況。皆爲博士。（藝文志に、章句施孟梁丘氏各二篇とあり、並に易傳を云なり、）（又有東郡京房云々は。京房列傳に。京房字君明。東郡頓丘人也。治易事梁人焦延壽。延壽字贛。（師古曰、延壽其字名贛、）贛貧賤以好學。得幸梁王。王共其資用。令極意。學既成爲郡史。察擧補小黄令。以候司先知姦邪。盜賊不得發。（師古曰、以其常先知姦邪故、欲爲盜賊者、不敢起發、）卒於小黄。贛常曰。得我道以亡身者京生也。其說長於災變。分六十卦。更直日用事。以風雨寒温爲候。（孟康曰、分卦直日之法、一爻主一日、六十四卦、爲三百六十日、餘四卦震離兌坎爲方伯監司之官、所以震離兌坎者、是二至二分用事之日、又是四時各專主之氣、各卦主時、其占法各以其日觀其善惡也、師古曰、更工衡反、）各有占驗。房用之尤精。好鍾律知音聲。初元四年以孝廉爲郎云々。（初元は、昭帝が年號なり、此間に、京房が一世の履歴、

その譖誅に遇ふまでの記事有れど、略しつ、）房本姓李推律自定爲京氏。死時年四十一。儒林傳に。京房受易梁人焦延壽。延壽云。嘗從孟喜問易。會喜死房以爲。延壽易即孟氏學。翟牧白生不肯。皆曰非也。至成帝時劉向校書。考易說以爲。諸易家說。皆祖田何楊何丁寛。唯京氏爲異。黨焦延壽獨得隱士之說。託之孟氏。不相與同。房以明災異得幸。爲石顯所譖誅。自有傳。（こは即ち上に擧たる京房列傳を云ふ、）房授東海殷嘉。河東姚平。河南乘弘。皆爲郎博士。繇是易有京氏之學と云へり。（藝文志に、孟氏京房十一篇、災異孟氏京房六十六篇、五鹿充宗略說三篇、京氏段易十二篇と有る註に、嘉東海人爲博士、即京房所從受易者也、見儒林傳及劉向別錄と云へり、但し傳には殷嘉とあり、孰か是なる事を知らす、）さて今世に焦贛が易林。また京房が易傳と稱ふ物傳はりて。共に漢魏叢書中に收たるが。易林のこと。王謨が跋に。焦贛易林四卷。通考本作十六卷。凡六十四卦變。每卦變六十四。總四千九十六首。皆爲韻語。與左氏所

載漢書所載相類。今案延壽事具漢書儒林傳。及京房傳中。而本傳及藝文志皆不言著有易林。故或有疑爲東漢後人假託者。（今按ずるに、顧炎武が日知錄に、易林疑是東漢以後人撰、延壽在昭帝之世、時左氏未立學官、今易林引左氏語多、又往々用漢書中事云々と言ひて、漢書中の語を多く引きて論へり、）然考東觀漢記孝明帝永平五年。少雨。上御雲臺自爲卦遇蹇。以京氏易林占之。繇曰蟻封穴戶。大將下雨沛然。京房延壽弟子。今書蹇繇實在震林。則在東漢之初已用易林占驗。但未著焦氏名耳。（今易林の本文を按ずるに、震林の蹇に、蟻封戶穴、大雨將集と有りて、語句やゝ異なり、何なる由にか、若くは、此の跋文に引たるは、異本にや有らむ、）本漢諸易家說。皆祖田何。惟京氏爲異。黨延壽獨得隱士之說。託之孟氏。故藝文志易有孟氏京房諸篇。而焦氏之名反不著。若隋唐志則固皆題焦贛易林也。經義考云。漢易惟焦氏獨至。而今叢書本祇作四卷。則又不知孰爲合并云。と言へるは然る說ながら委しからず。其は上の京房傳に據りて。焦贛が易法の趣を知り。今の易林を考ふるに。其の旨甚く異なるは。此はもと焦贛京房らが易法ならず。周の代より漢に至るまで。世々の占者に傳へ來つる。八索法の繇文を集めし書なるを。東漢の頃よりして。焦京などの易法と僞り來れる物と見えたり。（八索法とは、上に云へる如く、每卦六十四變する易法を云ふ、易林よく其の趣に合へり、然るに焦贛が易法は、上なる京房傳の注に見えし如く、直日の法にて、災變を專と爲つればなり、其は玉海に、易卦之位、震東離南、兌西坎北爲一說、十二辟卦分屬十二辰爲一說、焦延壽爲卦氣直日之法、合二說而一之、旣以八卦之震離兌坎二十四爻直四時、又以十二辟直十二月、分四十八卦爲公侯卿大夫、而六日七分之說生焉、楊雄大玄次第、乃全用焦法、其八十一首蓋亦去震離兌坎、而但擬六十卦耳、と云へるを思ひ合せても知るべし、）偖また京房が易傳のこと。其の書の末に附錄せる晁公武が說中に。昔魯商瞿受易孔子。五傳而至漢田何。何授丁光。光授田王孫。王孫授孟喜。喜授焦

贛。贛授京房。房授河東姚平。河南乘宏。由是易有京房之學。而傳盛矣。有翟牧白生者。不肯曰京氏學。京非孟氏學也。劉向亦疑京託之。(以上は、凡て漢書に所見たる事どもにて、既に出せるが如し、)孟氏不知當時爲何說也。今以當時之書驗之。蓋有孟子京房十一篇。以大異孟氏京房六十六篇。與夫京氏殷嘉十二篇。同爲一家之學。則其源委孰可誣哉。此亦學者不可不知也。と云ひ。(此は藝文志に、孟氏京房十一篇、また孟氏京房六十六篇など云へる書の有るに據りて、翟牧白生劉向などが、京房學の孟喜に出たり、と云へるを非と爲たる說なるが、實に焦贛京房が、孟喜に出たりと聞えて、同く直日法なりしと思はれたり、)其の王謨が跋にも此說を稱して。但考漢書儒林傳。有兩京房。其一爲楊何弟子。梁丘賀所從受易者。其一爲頓丘人受易梁人焦贛者也。未知此京房易傳孰爲之也。今按五行志所引京房易傳六十八條。皆言災異與洪範五行相應。延壽學之京房所作易傳。無疑。如五行志所引易傳。學者亦不可不參考也

と云へるが如し。(なほ此の跋に、今一人の京房なるらむか、と云ふ考をも記せれど、其の說允當ならねば抄し出さず、)さて此の易傳に。孔子曰。易有四易。一世二世爲地易。三世四世爲人易。五世六世爲天易。游魂歸魂爲鬼易。鬼爲繫爻。財爲制爻。天地爲義爻。福德爲寶爻。同氣爲專爻。と有るは。謂ゆる世應の法にて。飛伏納甲五行の生死を以て占ふ事は。後世謂ゆる斷易法の祖法なり。孔子の易は。八索を紬けて。姬昌父子が六爻占を用ひしかば。其變化の博からぬ故に。斯の如き一法を案じ遺せるを。正傳の外に。孟喜焦贛京房まで。傍傳し來れる物と見えたり。然れど此は大人の易に非ず。日者の易なり。(孔子の、早く此の易法を用ひし事は、史記の仲尼弟子列傳に、商瞿年長無子、其母爲取室、孔子使之齊、瞿母請之、孔子曰無憂、瞿年四十後、當有五丈夫子、已而果然と有る下の正義に、中備云、魯人商瞿使向齊國、瞿年四十、今後使行遠路、思慮恐絕無子、夫子正月與瞿母筮告曰、後有五丈夫子、子貢曰、何以知、子曰卦遇大畜、艮之二世、九二

甲寅木爲世、六五丙子水爲應、世生外象、生象來爻生互内象、艮丙子口有五子、一子短命、顔回云、何以知之、内象是本子一艮變爲二、醜三易爻五、於是五子一子短命、何以知短命、他以故也と有るを見て知るべし、然て弟子傳なる事實、孔子家語にも見えたり、)さて次々の條に論ふ如く。唐隋より唐に至り。費氏の學大きに用ひられて。唐の國學には其の王弼注を立たるが。其は學業の上こそ有れ。筮には京房易をぞ用ひたりける。是を以て六典大卜署に。凡易之策四十有九と有る本注に。用四十九算分而揲之。其變有四。一曰單爻。二曰析爻。三曰交爻。四曰重爻。凡十八變而成卦。又視卦之八氣。王相囚死胎沒休廢。及飛伏世應而使焉云々とあり。(是より後に、斷易天機など云ふ陋しき易法の起れるは、皆此の法に因れる事なるを、古今の易學者流は、みな信じて、其の俗法に從事して、其を俗法としも知らず有るは、憐むべき事にこそ、)彼の郝敬が讀易瑣言に。夫易聖人所以精義窮理利用安身。以崇德者也。操心制行隨時處中。懼則思占疑則思斷。即是聖人所以無大過者。舍此無餘術矣。若夫占天測地按節數時。雖算極微塵。虛徹精神何所用之。蓋天下唯理可御數。數不能達理。京房郭璞非不精也。而挾智用數。竟以滅身。故得其要雖一奇一偶。而消息已具。不得其要雖以焦贛之四千九十六。何益于成敗之數哉と云へるは信に然る事なり。

【十二】漢初又有東萊費直傳易。其本皆古字。號曰古易文。以授琅邪王璜。璜授沛人高相。相以授子康及蘭陵毋將永。故費氏之學。行於人間。而未得立。

此の第十二條は。隋志に。聽て前條に連續せる文なり。此の徒の事も。前漢の儒林傳に。費直字長翁。東萊人也。治易爲郎至單父令。長於卦筮。亡章句。徒以彖象。系辭。文言。十篇。解說上下經。琅邪王璜能傳之。高相沛人也。治易與費公同時。其學亦亡章句。專說災異。自言出於丁寬。傳至相。相授子康及蘭陵毋將永。康以明易爲郎。永至豫章都尉。繇是易有高氏學。高

費皆未レ嘗立ニ於學官一と見え。また藝文志に。漢興田何傳レ之。訖ニ于宣元一有ニ施孟梁丘京氏一。列ニ於學官一而民間有ニ費高二家之說一。(宣元とは漢の宣帝元帝をいひ、費高とは、費直と高相とを云へり、)劉向以ニ中古文易經一。校ニ施孟梁丘經一或脫去。(師古曰、中者天子之書也、言レ中以別ニ於外一耳、)唯費氏之經與ニ古文一同とあり。此の高相が子の高康と云ひしは。彼の王莽が時に。東郡と云ふ處に。兵災の起るべき由を豫に私語ぎて。衆を惑はすちふ咎を受て。斬殺せられし者なり。抑かく陰陽易學に長たる徒。災異の事に坐して。誅を受るが多かるは。他の災異はまだきに知れども。己が身の災異をば。豫に知ること能はざるか。然れば諺に。陰陽師わが身の事を知ずと言ふは。此れ等の事より云ふにも有るべし。(其は上に出せる京房、この高康は更なり、彼の董仲舒と云ひしも、災異を語れる咎を受けて、牢獄に囚はれ、既に命を失はむと爲けるを、幸くして助かり、晉の世に郭璞と云へる人なども、其事ゆゑに殺されき、此は幽に故ある事にこそ、)さて後漢の儒林傳に。前書云。田何傳易授ニ丁寛一。丁寛授ニ田王孫一。王孫授ニ沛人施讎一。東海孟喜。瑯邪梁丘賀。由レ是易有ニ施孟梁丘之學一。又東郡京房。受ニ易於梁國焦延壽一。別爲ニ京氏學一。(前條の本文は、此の文に據りて記せりと見えたり、)又有ニ東萊費直傳易一。授ニ瑯邪王璜一。爲ニ費氏學一。(注云、前書橫作レ璜字平仲、)本以ニ古字一號ニ古文易一。又沛人高相傳易。授ニ子康及蘭陵毋將永一。爲ニ高氏學一。施孟梁丘京氏四家。皆立ニ博士一。費高二家未レ得レ立と。今の本文は是の文を取れるなり。(然るに此の文前書に云々とは有れど、前書の文は上に抄する如く、費直が本を、中古文易と校せるに、文の同じかりし由にて、其の本の古文なりしと云ふには非ざるを、此の文に、本以ニ古字一號ニ古文易一と云へるは違へり、隋志もやがて其の誤を受たり、又費直と高相とは、元より別學なるを、隋志に、費直より王璜に傳へ、王璜より高相に傳へたりと云へるも、前後漢書を、麁略に見たる誤なりかし、)

【十三】後漢施孟梁丘京氏。凡四家並立。而

傳者甚衆。陳元鄭衆皆傳費氏學。馬融爲其傳。以授鄭玄。玄作易注。荀爽又作易傳。

此の第十三條も。隋書の經籍志に採れるが。其は後漢の儒林傳。易學者流の條の終りに。建武中范升傳孟氏易。以授楊政。而陳元鄭衆皆傳費氏易。其後馬融亦爲其傳。融授鄭玄。玄作易注。荀爽又作易傳。自是費氏興。而京氏遂衰と有るに據れる文と見えたり。（こは范楊陳鄭馬鄭荀七人が傳は、並に後漢書に載たり、中にも馬融鄭玄は、傑出の人なるが、鄭玄は馬融が弟子にて、十餘年從ひて、其の國に歸らむと爲る時に、馬融その門生らに謂りて、鄭生今去、吾道東矣と喟きし人なり、七十四歳の春、夢に孔子の靈これに告て、起起今年歳在辰、來年歳在巳と云ふと見て、旣に寤て讖を以て之を合せて、當年に命の終るべき事を知りて、其年の六月に至りて、七十四歳にて死たる事など、其傳に見えたり、其委しき事は、後漢書に就て見べし、）なほ其の儒林傳に。洼丹世傳孟氏易。建武初爲博士。作易通論七篇とあり。（建武は、光武帝が世の年號なり、）さて東觀漢紀に。馬融著易解。頗生異說。爽著易傳。據文象承應陰陽變化之義。以十篇之文。解說經意。由是袞豫之言易者咸傳荀氏學。而馬氏亦頗行於世と見え。隋志に。漢司空荀爽注十一卷。荀爽九家注十卷。（梁有馬融注一卷、）鄭玄注九卷など見えたり。（九家の事は、玉海に、序錄云、荀爽九家集注十卷、不知何人所集、稱荀爽者以爲主故也、其序有荀爽、京房、馬融、鄭玄、宋衷、虞翻、陸績、姚信、翟子、元爲易義注、內又有張氏朱氏、並不詳何人と有るにて知るべし。）孔穎達が正義に。易緯乾鑿度云。易一名而含三義。鄭玄依此義。作易贊及易論と有る如く。鄭玄は緯書を好める人にて。乾鑿度を始め。易緯はみな其の注を作たり。其は玉海に。中興書目を引きて。易緯案隋志八卷。鄭玄注。（梁九卷、）舊唐志九卷。宋均注。（唐志、宋衷注崇文目九卷、）康成或引解經。今篇次具存。（宋均不傳、）李淑書目九卷。凡乾鑿度稽覽圖通卦驗各二卷。辨終備。是類謀。坤靈

圖各一卷。今館所藏乾鑿度。通卦驗。皆別出爲一書。而易緯止有鄭氏注七卷。稽覽圖第一。辨終備第四。是類謀第五。乾元序制記第六。坤靈圖第七。二卷三卷無標目。と載せるが如し。（此は今みな全書傳はりて、武英殿の叢書中に出たり。）抑この易緯の書類は。周の末世。孔子の易學に入りし以來。その傳受せる輩の次々に。記し傳へし內書と見えて。何れも作者詳ならず。中に孔語も多く有れど。信られぬ說は殊に多く。また中に正しき古說も少からねば。熟く視て擇び取べき書等なるを。舊く劉向父子が七錄。及び班固が藝文志に其目なきを以て。俗の固頑なる儒者など。一向に捨て取ざる倫も有るは。凡て緯書類には往々に。其の立る道の破綻となる說等の有るが故に諱惡ふなれば。其は拘るまじき事にこそ。（此を少か云はむに、上に引たる通卦驗に、彖爻の辭に、王命の瑞を繫たりと云ひ、乾元序制記に、乾の卦の爻辭に、姬昌父子二人が履歷を繫たりと有る類は、皆彼らが奸意の破綻と成べき秘說を、書傳へし文等なり、是を以て、劉向班固らは此を採らず、然れば其目錄に、緯書類の目なきが故に、其の世に無りしと思ふは、固陋心なり、其は史遷が記に出せる事實に、班固らが出せる書目に見えざる事跡の多かるを、熟く視れば、多くは緯書類に出たる說等なるは、史遷が狭く見て採撰せるなり、其は自序に、紬史記石室金匱之書、と云へるにても知べく、彼の連山歸藏の書目も、藝文志に見えざれど、漢の世に在りし事は、既に始めに、桓譚が新論を引きて論へる如くなるを、思ひ合せても辨ふべきなり、猶緯書類の事は、赤縣太古傳にも往々云へりき。）また經籍志に。魏代王肅王弼並爲之注。自是費氏大興。高氏遂衰。梁丘施氏高氏並亡於西晉。孟氏京氏有書無師。梁陳鄭玄王弼二注列於國學。齊代唯傳鄭義。至隋王注盛行。鄭學浸微。今殆絕矣。とも有り。なほ易の由來に就ては。是より後の事も。歷史の志類は更なり。諸書に多く見えて。少か論はま欲しき事もあれど。易學先生等の既く辨へたるのみならず。古易にはさまで用なき所爲なれば。是にて筆を閣くになむ。

三暦由來記巻之上

大壑　平篤胤撰述

男　平　鐵　胤　同
門　某
人　碧　川　好　尙　校

三暦とは夏殷周三代の暦法を謂ふ。夏暦は卽ち天皇氏太昊氏以來の眞法にして。我が取る所の古暦是なり。殷暦は其法全古暦の隨にて。唯正朔の易れる耳なれば。古暦の參攷に甚だ益あり。周暦も其の本術は古暦なるが。是も正朔を改め。かつ古暦の節首を一日退けて。殊に八十一分の日法を立て。謂なく古法を攪せる暦なり。然るに前漢の代に至りて。太初三統の二暦あり。後漢に四分暦あり。是れ等の暦も。皆かの古暦を襲用したれど。其の用法いと拙く。古暦の眞法悉く亂れて。其の眞面目を知らず成ぬるを。今其の由來を攷明して。古法を世に顯さむと欲する故に。此記を著せり。然れば此は。太昊古暦傳の序說と視て在るべし。

【初】太昊伏義氏。以木德王。天下之人。未有室宅。未有水火之利。于是乃仰觀天文。俯察地理。立周天歷度。以二十八星。用於圓穹之度。以麗十二位。始畫八卦。定天地之位。分陰陽之數。推列三光。建分八節。作二畫。以象二十四氣。始有甲暦五運。然則觀象設卦。成文歷數之源存此也。

此の條は春秋內事。また晉隋二代の天文志。晉の歷志。唐の馬總が通暦を合せて記せり。(太昊より地理までは春秋內事、立周より十二位までは晉隋二代の天文志、始畫より二十四氣までは、春秋內事前文の連き、其以下は晉の歷志と、通暦とを併せ記しつ)○太昊伏義氏は。我が扶桑祖州の神眞大國主神にして。彼國を開き敎ふと。此木德の國より渡りて。取戎せる時しも。木運の時に當れる故に。以木德王とは傳へたり。斯て其頃の蕃民。なほ穴居野處して。物と群せるを。未有室宅と云ひ。火食水餐の道をも知ざりしを。未有水火

之和とは言へり。（此等の事は、既に赤縣太古傳に委く説たるを見べし、春秋命歷序考の第十二條にも粗言へりき。）○于是乃仰觀天文云々は。易の繫辭傳。及び乾鑿度を始め。諸書に出たる文なるが。天文とは。渾天九野の文を觀じて。曜宿の轉度を知るを云ひ。地理とは。渾地八荒の理を察して。節氣の往來を知るを云ふ。（凡て古書どもに地理と有るは、大抵此の義なり、然るを前漢の地理志ありて以來は、地象また地形など云べきを、並べて地理といふ事となりぬ、此事は天柱五岳餘論に委曲に辨ふるを見るべし。）○立周天歷度と云ふ文は。早く周髀に。古へ包犧氏。立周天歷度と有りて。其趙注に。包犧立周天歷度。運蓍之法。易曰。古者包犧氏之王天下也。仰則觀象於天。俯觀法於地。此之謂也と云へり。（こゝは今在る繫辭傳の文とは、小異なるは、古くかゝる本も有けるにこそ。）此は七曜運行の數を測量して。周天の歷度を立定せる由也。其の度は乃ち謂ゆる三百六十五度四分度之一なり。（此度數をかく定め給ひし起原は、次條を見て知べし。）○以二

十八星用於圜穹之度とは。圜穹は即ち大虛空なり。仰ぎ觀れば。八方は下りて中高く。圓形に見ゆる故にかく云へり。二十八星は二十八宿なり。文の意は。二十八宿を大虛の度に配用して。七曜轉度の目的と爲たる由なり。○以轉十二位とは。十二位は。子より亥に至る十二方位を云ふ。以轉とは。乃ちかの二十八宿を。十二方位に配當せる義なり。（其は周髀算經に、立二十八宿、以周天歷度之法、と有るをも思ふべし。）禮記月令の鄭玄注に。日月之行。一歲十二會。蓋周天三百六十五度四分度之一。日行遲。一日經一度。一歲一周天。月行速。一日經十三度。一月一周天。更行二十九度半。方與日相會也と云へり。（また尙書に、十二次以求月之晦朔、而歲成矣とある所の疏に、十二次亦曰十二辰、日月之所會也とも有り、日月の會し次る所なる故に、十二會とも十二次とも云ひ、十二支の位宿する所なる故に、十二辰とも十二位とも云ふと知べし、）抑是十二次のこと。諸書に多く所見たる中に。晉書の天文志に。班固十二次。配十二野。其言最詳也。（實にも此言の如く、十

二次のこと、前漢の歷志ばかり詳に記せるは無れば、今は晉志に出せる其文を採り、かつ五行大義の說も委ければ、其をも注に合せて記し出たり、）

自危十六度至奎四度爲娵訾。於辰在亥。（五行大義云、支合者、日月行次之所合也、正月日月會於娵訾之次、娵訾亥也、斗建在寅、故寅與亥合、娵訾者陰盛陽伏、萬物愁哀也、）自奎五度。至胃六度爲降婁。於辰在戌。（二月日月會於降婁之次、降婁戌也、斗建在卯、故卯與戌合、降婁者降下也、婁曲也、陰氣上侵、萬物委曲也、）自胃七度。至畢十一度爲大梁。於辰在酉。（三月日月會於大梁之次、大梁酉也、斗建在辰、故辰與酉合、大梁者強也、白露已降、萬物堅強也、）自畢十二度至井十五度爲實沈。於辰在申。（四月日月會於實沈之次、實沈申也、斗建在巳、故巳與申合。實沈者陰氣沈重、降實於物也、）自井十六度至柳八度爲鶉首。於辰在未。（五月日月會於鶉首之次、鶉首者未也、斗建在午、故午與未合、鶉首者南方之宿形其象鳥、以井爲冠以柳爲口也、）自柳九度。至張十六度爲鶉火。於辰在午。（六月日月會於鶉火之次、鶉火午也、斗建在未故午與未合、鶉火者陽氣盛大、火星昏中、在七星朱鳥之處也、）自張十七度。至軫十一度。爲鶉尾。於辰在巳。（七月日月會於鶉尾之次、鶉尾巳也、斗建在申、故申與巳合、鶉尾者南方朱雀之宿、以軫爲尾也、）自軫十二度。至氐四度爲壽星。於辰在辰。（八月日月會於壽星之次、壽星辰也、斗建在酉、故酉與辰合、壽星者萬物始達、各任其命也、）自氐五度至尾九度。爲大火。於辰在卯。（九月日月會於大火之次、大火卯也、斗建在戌、故戌與卯合、大火者東方木也、心宿在卯、火出木心也、）自尾十度至斗十一度。爲析木。於辰在寅。（十月日月會於析木之次、析木寅也、斗建在亥、故亥與寅合、析木者萬物始萌分別水木也、）自斗十二度。至女七度爲星紀。於辰在丑（十一月日月會於星紀之次、星紀者丑也、斗建在子、故子與丑合、星紀者紀統也、領萬物所終始也、）自女八度。至危十五度爲玄枵。於辰在子。（十二月日月會於玄枵之次、玄枵子也斗建在丑、

故北與レ子合、玄枵者玄黑也、枵耗也、陰氣盛故萬物始動猶未二出生一、天下空虛、謂二之曰一レ耗也、）此班固所レ志也と有る是なり。但し此娵訾。降婁。大梁。實沈など謂ふ名等は。太昊氏の當昔は更なり。決めて五帝たちの設けし名には非ず。そは既に十二支の名にて事足るを、殊に煩はしく。斯の如き名を設くべき由無ければなり。然れど此名ども。左傳を始め。周代の書等に舊く記し傳へて。天度の議には。必云ひ出る事なる故に。知らでは在まじき事なれば。如此は抄しつ。（然は有れ、此は必ず後の擬聖らの、彼意より出たる理屈にこそ、）○始畫二八卦一とは。天文地理の大象を始めて八卦の爻に畫し著せるを云ふ。其は河洛の圖書に本づきて。天皇太帝の行ひ給ふ易威の象を摸せる物なり。（河洛の圖書の事は、既に太昊古易傳に說著はし、易威の事は、赤縣太古傳に說たれば、其の書等を披き見て知るべし、）○定二天地之位一とは。（易の說卦傳に。天地定レ位。山澤通レ氣。雷風相薄。水火相射と有る。天地及び八方の位を定めたるを言ひ。分二陰陽之數一とは。繫辭傳に謂ゆる天一地二。天三地四。天五地十。また九宮の數原は更なり。かの少陽七。少陰八。太陽九。大陰六及び五行の數をも分たるを云ふ。（都て此類の、八卦に屬する事どもは、古易傳に委く說たれば、此には其の大略を云ふなり、）さて今の文面は更なり。彼の古三墳といふ書にも。彼國に王たりし三十二年に。河圖を得て八卦を作り。後二十二年に天書を作り。後一年ありて甲曆を作ると有りて。易は先に成り。曆は後に成れり。事・次第まことに如此有べき事なり。其は易と曆とは名こそ異れ。其に彼の易威より起る道なるが故に。其理互に相離れず。易とは繫辭傳に。生々之曰レ易と有る如く。四時に陰陽五氣行はれて。生長收藏あるを謂ふ言なるを。其の象を八卦に摸して。其をやがて易と名け。曆は古く歷と通用して 生長收藏の變易ありつゝ。年季日時の經歷するを言ふ語なるを以て知るべし。（說文に歷過也、从レ止厤聲、厤曆象也从レ日厤聲、史記通用レ歷と見え、古今韻會に、歷の字を廣韻、經歷也、爾雅數也、注云歷歷數也、曆の字を增韻、曆數也、尙書曆象曆數通作レ歷など云ひ、史記前漢

書など皆歴の字をのみ用ひしを、後漢書よりして、暦法には暦の字を用ひ、經歴には歴の字を用ひたり、今は其の定めに效へり。)然れば易は本なり躰なり。暦は末なり。用なり。また暦の暦たる本は易なれば。易は母の如く暦は子の如し。是をもて易を云へば暦法必ずこれに從ひ。暦を云へば易法必ずこれに應ず。故に易を學ぶ者は必ず暦をかね學び。暦を學ぶ者は。必ず易を兼學びて。參互致究せでは。其の微妙を知ること能ざるなり。(但し易とは云へど、周文以來の擬易を謂ふに非ず、太昊氏の古易を云ふなり、暦とは云へど、周文以來の後暦を謂ふに非ず、太昊氏の古暦を云なり、ゆめ彼の劉歆一行僧らが易暦相兼て暦法を説たると、同じ類とな思ひ過りそ、)さて推ニ列三光ニと云ふより以下は。即易暦相兼たる説にて。日月星を三光と謂ふ。其三光の行列を推歩して。一卦三爻に象り。八方の風氣を察して。立春春分。立夏夏至。立秋秋分。立冬冬至の八節を建分し。かつ其の八節を八卦に象どり。八卦各々三畫にて。凡て二十四爻なるは。二十四氣を象れる由なり。(なほ卦象には、象れること多かれど・其は此に盡すべくも非ず、)○始有ニ甲暦五運ニ。甲暦とは。太昊氏の作れる暦法を云ふ。其は古易傳に云へる如く。干支もと靈龜の甲より出て。六甲その首なるが。此を本として六十花甲を作り。其を歳月日時に配して。古往今來を知べく定めし暦法なる故にかく稱ふなり。(羅泌が路史、孫穀が古微書などに、按ニ漢歴志、伏羲有ニ甲子元歴ニ、是太昊已有ニ甲子ニと云へるは然る言なれど、己が見たる本どもには其事見えず、)五運をまた五德とも云ふ。五行の德の更運る義なり。前漢書の歴志に。太昊帝爲ニ百王ノ先首ニ。德始ニ於木ニ。故爲ニ帝太昊ニ。帝王年代圖に。伏羲爲ニ百王首ニ。即帝王五運起レ自ニ太昊ニ也など有るにて知るべし。(是の年代圖は、事物紀原に引たるを再引たるなり、)孔子家語に。古之王者。易レ代改レ號。取ニ法五行ニ。五行更王相生。太皥配レ木。炎帝配レ火。黃帝配レ土。少皥配レ金。顓頊配レ水。五行用レ事。先起ニ於木ニ。木東方之初。皆出レ焉。是故王者則レ之。而以ニ木德ニ。王ニ天下ニ。其次則以ニ所生之行ニ。轉相承也とあり。(此は本書を約して、今の用ある文のみ

を出せるなり。）なほ第二十條に論ふを合せ考ふべし。（然則云々。）觀象とは。天文地理を仰觀俯察せるを言ひ。設卦とは。始めて八卦を設けしを云ひ。成文とは。河洛の圖書に本づきて。始めて文字を成せるを云ひ。曆數は委曲に下の條々に記せるが如し。大凡天下の大義。この四件に洩たる事は有まじくこそ。

【二】天地開闢甲子冬至。自開闢後。五緯各居其方。曜滿舒光。元曆紀名。月首甲子冬至日月五星俱起牽牛初。仰觀天形如車蓋。日月若合璧。五星如編珠。衆星粲々如連貝。青龍甲戌。至伏羲氏乃始合故曆。以爲之元。合朔章蔀之制作於此焉。

此條は古說を撮集して。赤縣太古傳の太昊氏傳に載せる一條なるが。此は曆道の大本に係る事等なる故に。まづ此に標出せるなり。斯て發端の八字は。唐の徐堅が初學記に。尙書中候云と引たる文に取り。（尙書中候は孔子の撰なる由、諸書に見えたるが如し、）自開闢より其方まで十字は。明の孫瑴が古微書に。春秋內事とて。自開闢後。五緯各居其方。至伏羲乃始合之以爲元と有るに取り。曜滿舒光と云ふより。甲戌と云までは。尙書考靈曜に。天地開闢曜滿舒光云々と有るを取り。（但し考靈曜も、其の全書は傳はらず、今は初學記、玉燭寶典、周髀算經の趙注、古微書などに引たるを校合して、其宜きを取れり、其が中に甲戌の字は、本書どもに、或は攝提格とも、甲寅とも有るは、共に誤寫なり、其由は下に論ふを俟べし、）至字より下十三字は。說郛に。易稽覽圖とて。天地開闢五緯各在其方至伏羲氏乃合故曆以爲之元と有ると。上の春秋內事とを併せ取り。（按ずるに稽覽圖、春秋內事の文共に、方至の間に、考靈曜なる曜滿舒光、元曆紀名、月首甲子冬至云と云へる文無ては、至伏羲氏乃合故曆云々と云へる文に應はず、さて其は五緯のみを故曆に合せて、曆元と爲たる事と成れば、然る事の有べくも非ず、また考靈曜に、五緯各居其方至伏羲氏

云々の文なきは引洩せるなり、思ふに此はいと舊き一書の古傳なりしを、右の三書を始め、諸書に引用すとて、章を斷ち句を摘みし間に、本書は亡びて、錯亂誤脫の出來し故に、右の文等の如く異說と見ゆる計りには成にけむ、）合朔より下十字は。周髀算經に。如合朔。古者包犧制作爲歷度元之始。其趙注に。開包犧。立周天曆度。運章蔀之法。など有るに依りて載せり。（天地開闢甲子冬至は。即盤古氏の元年なること。已に春秋命歷序考。に述たるが如し。抑太初に天と云ひしは。天日の事にて。天地の開闢すと謂ふは。天日と大地と分判せるを云ふ語なれど。後には天と日とを別物と爲て。天と云へば。圓穹を云ふ語とのみ成れり。（天とはもと日を云ふ語なる由も、既に太古傳また太昊古易傳に辨へたるを見るべし。）さて其の開闢せる日は。甲子冬至の日なりしと云ふ義には有れど。盤古氏の當昔。已に日に甲子と名け。冬至など云ふ名の有りしには非ず。天地混成の一物。その凝結の極に至れるが。忽爾に分判せる當昔。かの六微旨大論に。天氣始於甲。地氣始於子。子

甲相合。命曰歲立。と有る如く。風甲の初運に應じ。天日かつ子に建して開けし故に。神眞次々にかく語り傳へしを。後に太昊氏の甲曆を作るに。即其日を甲子と名け。冬至の時と知れるにて。是乃曆元なり。（然るは天地混沌鷄子の如く、その凝結の極み、やがて陰氣の妊養せる極なるが、陽氣忽に其の中に起り、熟破して天地と分成せるなれば、誠に此時ぞ陽氣發生の初めなる、然れば是時しも實に冬至なりしこと知べし、此事なほ太古傳開闢の條に論へるをも合せ考ふべし。）斯て其歲は甲寅なりき。其は何を以て知るなれば。春秋命歷序に。天地開闢盤古氏の元年より。其の一世を一萬八千歲と有りて。次に天地初立有天皇氏。以木德王。歲起甲寅。萬八千歲と有るに就て。其の甲寅の前年癸丑より。盤古氏の一世萬八千歲の元年を逆推するに。其歲首冬至の日は甲子に當り。歲は甲寅に當りて。今の本文は更なり。易乾鑿度に。歷元名握先紀。日甲子。歲甲寅と有るに。符合するを以て是を知れり。其は是の時天氣。甲に始まる事は勿論にて。歲星寅に建して開けし故な

り。（握先紀は本書の鄭玄注に、握先爲歷始名言無前也、と云へるは然る言にて、天地開闢の歲は甲寅。日は甲子冬至を、曆元に立たれば、是より前なき由の名と聞えたり、）さて是歲より。盤古氏の一世萬八千歲の間に。天地成竟たるが。其の末年は癸丑の歲にて。其歲の冬至は甲子に當り。次甲寅の歲の首なるが。是やがて天皇氏の元年なり。（是をもて命歷序に、天地初立有天皇氏以木德王、歲起甲寅とは云へり、此は其の元年の甲寅なる由なり、）然るに是一世また萬八千歲にて。其の末年は癸丑の歲なるが。其の歲の冬至また甲子にて。次甲寅の歲の首なるが。是やがて人皇氏の元年なり。是より狟神。黃神。次民。辰放。離光五氏の世を合せて。四千八百五十四年を經て。柏皇氏の世に至り。其百八十六年に當る歲は癸丑にて。甲子冬至なるが。次甲寅の歲は。太昊氏の甲曆を作れる年なり。斯て盤古の元年より。天地未分。混沌如鷄子なりし間。万八千歲を逆推するに。其の混沌たる一物の生出たる初年も。日甲子。歲甲寅の運に當れり。（是等の事どもは既に命歷序考に委く考證せり、披き見て知るべし、）然れば是の曆元は。紫宮の太祖太一の。爲こと無して爲たまふ。謂ゆる天常の大曆元にして。凡人などの絕て動かし更まじき眞の握先紀にぞ有りける。（然るを後世の曆家識に此の深旨を知得たる者なく、漢の武帝が時に丁丑を甲寅と更めて曆元に立たるを始め、妄意に其の元を定むるからに、古曆の眞義は廢れ果て、世に知る人なくぞ成にける、其は予が曆書類に著はす旨を熟く察して、史記已來の曆書どもを能く見む人は、自づから知なむかし、）自開闢後。五緯各居其方。曜滿舒光とは。五星をまた五緯とも謂ふ（そは日月を經に取り、五星を緯に取りて曆度を立ればなり、）さて自開闢後云と有るを思ふに。天地未分なりし時は。五星も俱に彼の一物に混成して在けるが。天地已に分判せる後に。五星も與に分りて各々其の在位の定りて曜光の滿舒たる義と聞えたり。（なほ此の五星の委き事は古曆傳に就て見るべし、）○元歷紀名とは。元歷は卽ち上の日は甲子。歲は甲寅に立たる曆なり。然して其を握先紀と紀名せる耳ならず。命

歴序に。次民氏の下に。天地易レ命以レ地紀と有るは。其の以前は天紀なりしが。地紀に易れる義なれば。天地人の三紀を以て。易々名けしこと所知たり。紀名とは卽ち是の義にぞ有りける。(然れば漢代の暦に、天紀地紀人紀の名あるは、卽ち是の名を襲用せるなり。)然らば其の紀法の趣は何に立たる物ぞと言ふに。此は淮南の天文に。甲寅元。日行一度。而歳有二奇四分度之一。故四歳而積千四百六十一日而復合。故舍八十歳而復レ故と有る如く。一日三十二分の法を以て推歩するに。凡て節炁は冬至を始め八十年二萬九千二百二十日にして餘分なく。必ず故に復すれば。其を一舍と爲し。十九舍千五百二十年を一紀と爲たり。(其一舍八十年は初は日は甲子、歳は甲寅に始りて癸酉に終り、次は日は甲子歳は甲戌に始りて癸巳に終り、次は日は甲子、歳は甲午に始りて癸丑に終り、斯の如く三次して故の日は甲子、歳は甲寅に復し、凡て十九次にして千五百二十年と爲る、委くは古暦傳を見て知べし。)偖しか八十年を十九つゝ積もて行けば。自然に三紀と爲りて。第一紀は。日は甲子。歳は甲寅に始りて。癸酉に終るを天紀と云ひ。第二紀は。日は甲子歳は甲戌に始りて。癸巳に終るを地紀と言ひ。第三紀は。日は甲子歳は甲午に始りて。癸丑に終るを人紀と云ひ。三紀都て四千五百六十年を一元と云ふ。一元竟れば。故の日は甲子歳は甲寅の元に復る法なり。(偖また其天紀を天元とも上元とも言ひ、地紀を地元とも中元とも云ひ、人紀を人元とも下元とも言ふ、是を以て三紀をまた三元とも云ふなり、但し此の三元を天地人を以て名けはすれど、後儒の謂ゆる天は子に開け地は丑に開け人は寅に開けたりと云ふが如き小理屈を以て云へるに非ず、只三紀に分るが故に天地人の三を以て名と爲たる耳なり、其は天紀は甲寅に始まり、地紀は甲戌に始まり、人紀は甲午に始まるを以て知べきなり。)偖かく紀名の然る所以を知りて後に。天地開闢盤古氏の元年。日は甲子歳は甲寅より。伏羲氏作暦甲寅の前年癸丑まで。都て四萬一千四百四十年なるを。右の紀法千五百二十年を以て除ふに。二十七紀にして人紀に竟れば。其作暦の歲より。天紀に入こと言ふも更なり。(此の

事は既に命暦序考の第十口條に謂へれば、委くは彼考を披き見て知るべし、）〇月首甲子冬至。日月五星。倶起牽牛初とは。上の元暦紀名と云ふまでは日歩の元始の日は甲子歳は甲寅に起れる由の傳へ。是より下は月歩の元始の日は甲子歳は甲戌に起れる由の傳にて。其時しも日月五星倶に北宿牽牛の初度に起れる義なり。抑日月は更なり。五星も既にその各位の轉度定まれる後は。何れも其の定位を離れずば。同宿にかく集會する道理とては。絶て無きことなれど。此の時月始めて。大地より分判して。運り始まる時なる故に。かく會せるにや有らむ。然れば此は常理をもて論ずべき事には非ずかし（また按ずるに、天地開闢とは、日と地と分判せる義なるを。我が神典の古傳に據るに、月もと大地の根底に付成れるが、天日と大地と分りて遙後に分りし物なり、然るに此の傳に日月五星倶云々と有るは、元これ同根に判りし故に、是の時倶にかく集へるか、若さも有らば、爾雅に、十二次の星紀を釋して、斗牽牛也とある、郭注に、日月五星之所終始、故謂之星紀と云ふは其謂なき事には非ず、月のもと大地より分判せる物なる由は、服部中庸が三大考、また予が著書どもにも考證せる如くなれど、其の運り始まれる時分の事は、古典に漏たるを、今此に取れる彼の國の古傳に依りて知る丶事は、いとも歡ばしき事にこそ、其の歳は下に謂ゆる甲戌なり、）。仰觀天形如車蓋とは。周髀に。天象蓋笠。地法覆盤と有る趙註に。見謂之象。形謂之法。在上故準蓋。在下故擬盤。象法義同。蓋盤形等。互文異器。以別尊卑。仰象俯法。名號殊矣。と有るに同く此は謂ゆる蓋天の説なり。（周髀の書のこと、漢世以來今に至りて、眞僞の論紛々たるを、委曲に之を考定するに、昔者榮方問於陳子曰と云ふより以下は、太古の神眞より、黄帝に至るまでの、古説を傳へし本文にて、開巻に昔者周公問於商高曰くと云ふより、周公曰善哉と云までは、自づから別書なりしを、後人その類を以て、合せて一書と爲たる物なること疑なし、然るに其本文また、呂氏曰云云と有るを始め、後の注文の錯簡せるも少からず、此書のこと尚委き考へ有れど、所狹き事なれば此

には洩しづ〕其の蓋天のこと。唐の徐堅が初學記に。晉の劉智が正歷問を引きて。黃帝爲蓋天。顓頊造渾天儀と云へるは。古說に本づける言なるが。蓋天は。天地の打見たる。中帶以上の半形を說きて。中帶以下の得見ざる半形を準へ知しめ。渾天は。中帶上下の全形を說たる物にて。固より相悖れる說には非ず。然るを漢の楊雄が法言に。請問蓋天。曰。蓋哉蓋哉。應難未幾。(宋咸註、蓋天卽周髀也〕蔡邕天文志に。言天體者三家。一曰周髀。二曰宣夜。三曰渾天。宣夜絕無師說。周髀之術考驗天象多所違失と云へるより。後の天學家多く之に雷同して。蓋天說は廢れけるを。近き世に淸の梅文鼎と云へるが。其相悖らざる義を能く辨へてぞ有りける。(そは其の曆算全書と云ふ物に、右の楊雄蔡邕らが說を擧て、諸人主渾天排蓋天、而蓋說遂詘、由今觀之、固可並存、且其說實相成而不相悖也、何也渾天雖立兩極以言天體之圓、而不言地圓、直謂其正平焉耳、若蓋天之說具周髀、其說以天象蓋笠、地法覆盤、極下地高滂沲四隤而下、則地非正平而有圓象明矣となほ精く辨へたる說あるを、周髀圖解と云ふ物に引て、此書に云へる事も有り就て見べし〕抑蓋天は更なり。渾天も天地の渾圓より測量し出たる說なるが。其古說は。素問の五運行大論に。黃帝坐明堂。始正天綱。臨觀八極。考建五常。(張註、明堂王者朝會之堂也、正天綱者、天之大綱在於斗、正斗綱之建以占天也、八極八方之輿極也、觀八極之理以志地也、五常五行氣運之常也〕請天師而問之曰。地之爲下否乎。(此欲詳明上下之義也〕岐伯曰。地爲人之下。大虛之中者也。(人在地之上、天在人之上、以人之所見言、則上爲天、下爲地、以天地之全體言則天包地之外、地居天之中、故曰大虛之中者也、由此觀之則地非天之下矣〕帝曰馮乎。(馮憑同、言地在大虛之中、而不墜者、果亦有所依憑否也〕岐伯曰。大氣擧之也。(大氣者大虛之元氣也、萬物無不賴之以立、故地在于大虛中之中、亦惟元氣在持之耳〕と有る是始めなり。大地かく渾圓なるが故に四時に遊旋あり。其は尙書考靈曜に。地有四遊。冬至。地上行北。而西三萬里。

夏至地下行南。而東亦三萬里。春秋二分其中矣。地恒動不止。而人不知。譬如人在大舟中閉牖而坐。舟行而人不覺也と有るは謂ゆる地轉の古説なるにて知べし。（此文の鄭玄が注に、春分之時、地當正中、自此地漸々而下、至夏至之時、地下遊萬五千里、地之上畔、與天中平、夏至之後、地漸々向上、至秋分地正當天之中央、自此地漸々而上、至冬至上遊萬五千里、地之下畔與天中平、自冬至後漸々而下とあり、本文注ともに、今の測量と少差へる事も有るなれど、いと早く地轉の説の有けるは、古神眞の遺説なること云まくも更なり。）猶言はゞ本文の仰觀天形如車蓋と云ふも。今引出たる地有四遊と云る説も共に考靈曜の説なり。是にても蓋天やがて渾圓と異説ならぬ事は知べきなり。（また按ずるに、宣夜のこと絕て師説なき由なれど、是また疑なく渾圓の説なり、其義は次條に註ふを俟べし。）偖また同書に。天從上臨下八萬里。天以圓覆。地以方載と有るを始め。他書にも是の類語あるを以て。天圓地方と云ふ説を。張行する倫も有れど。此は天地の道の行はるゝ趣をこそ言へ。其の形狀を云へるには非ず。其は呂氏春秋に。何以説天道之圓也。精氣一上一下。圓周復雜。無所稽留。故曰天道圓。何以説地道之方也。萬物殊類殊形。皆有分職。不能相爲。故曰地道方と有るにて知るべし。（また大戴禮記に孔子曰、天道曰圓、地道曰方と有るも此義なり、然るに學者おほく天地の形狀を圓方なりと執するは何に僻事ならずやも、）さて次々に出す本文。及び注に引出る諸書に有る語等は。常に視る有も。日を周行する物と爲たる趣を以て云へるにて。實には日の周行するに非ず。大地の日を中におきて右旋しつゝ。浮沈するが故に。日輪及び斗星などの左旋する如く視ゆるなり（此等の事ども既に天柱五岳考に諸書を引きて説著せれば、今更に委くは云はず、）然らば古昔より天文暦法を傳へたる書ども。何どて地轉の説を專と爲ざると云ふに。此は神聖の祕策にして。地動の説は尋常の人の。容易に其の實義を曉り得まじき事なる故に。姑く視動の趣をもて説傳へし物なり。（史記天官書に、天道命傳其人

不待告、非其人雖言不著と云へる意はへにて、日輪に旋行なく、大地の旋行すと云ふ說は、其人に非ずては、忽に承引まじき說なればなり。）故是の書も古人の然る用意に倣ひて。前後の注說みな其本文のまゝに。日の行る義をもて說を成たれば。此の全編もはら其の意を得て見るべし。（其は日行の說にても、地旋の說にても、歲時の推步に至りて、然しも違ひの無ればなり。）〇日月若合璧とは。其相對せる樣の璧を合せ懸たる若きを言ひ。五星若編珠は。俱に珠を編たる若く見出せるを云ひ。衆星絫々如連貝は。絫は纍の古字なり。二十八宿を始め衆星の纍々と散見せる狀を連貝に譬へしなり。（此中に日月を合璧の若しと云へるのみは、是合朔の始なれば意ある文なれど、編珠連貝など云へるは互文の格にて、然しも深き意あるに非らず、拘はる事なかれ。）〇靑龍甲戌は。鄭玄宋均らが注に靑龍歲也とあり。然れば月の始めて分判して合朔せる初歲は甲戌なりしと言ふ古說にて。其は今より六千四百四十年前。狛神氏の百四十一年と云ふ歲なるが是謂ゆる朔旦冬至の權輿なり。（然るを本書に、是の甲戌を甲寅とも攝提格とも有るは誤寫なり是の由は下に論ふを俟べし。）〇至伏羲氏乃始合故歷以爲之元は。まづ故歷とは。彼紀名を以て立たる。日甲子歲甲寅の元歷を云ふ。文意は。月は甲戌の歲の甲子冬至に當る日より行り首りて在れど。伏羲以前は其の合朔を察て月名を立て節氣に合する事は無りしを。伏羲氏の暦法を作る時に至りて。乃始めて五緯及び月の行りを故歷の紀法に合せて。其の暦元と爲たる由なり。（偖是よりして紀名の法少しく違へり、そは下に委く辨ふるを見るべし。）〇合朔章蔀之制作於此は。まづ合朔とは。前條に說たる十二次にして日月の合會有るを言ふ。其は彼の甲戌の歲甲子朔旦冬至の權輿より推步し始むるに。其の十九年め壬辰の歲の仲冬癸卯の日に至りて朔旦冬至に當り。此より又十九年め辛亥の歲の仲冬癸未の日に至りて。朔旦冬至に當る。斯の如く每十九年にして必ず朔旦冬至なる其の十九年を一章と云ふ。（後漢書の曆志に、歲首至也、月首朔也至朔同日謂之章と見え、周髀算經の十九歲爲一

章とある趙注に章條也と云へり、）さて四章を都て七十六年。月數九百四十月。日數二萬七千七百五十九日にして。毫も餘分なき是を一蔀と云ふ。此は謂ゆる朔策を。二十九日と。九百四十分日の四百九十九に定めて得たる數にて。其の妙また言む方なき神策なり。（周髀算經の四章爲一蔀七十六歳と有る所の趙注に、蔀之言、齊同日月之分爲一蔀也と見えたり。）偖かく一蔀七十六年に都つゝ。二十蔀を合せて千五百二十年。月數萬八千八百月。日數五十五萬五千一百八十日是を一紀と言ひ。三紀に都て四千五百六十年。月數五萬六千四百月。日數百六十六萬五千五百四十日是を一元と云ふ。茲に於て節氣朔望は更なり。歳月日時の干支も盡く其の元に復るなり。（後漢書の歷志に、日以實之、月以閏之時以分之、歳以周之、章以明之、蔀以部之、紀以記之、元以原之と有るは、今論ふ古暦の事には非ざれども。大凡かゝる有趣なりかし）なほ其元歷に。合朔法を合せたる趣は。次條の末に其大約を云ふを俟べし。

【三】昔自在古歷。建正作於孟春。於時冰泮發蟄。百草奮興。物廼歳具生於東。次順四時卒于冬。分時雞三號卒明。撫十二節卒于丑。政不率天。不由人。則凡事易壞而難成矣。

此條は史記の歷書に。神農以前の歷と爲て。初章に出せるを抄錄せしなり。（大戴禮記にも相似たる文有りて、丘聞周大史曰、政不率天不由人則凡事易壞而難成、虞史伯夷曰とて虞夏の暦と爲たり、虞夏の暦やがて太昊以來の古暦なれば、然言むも難無れど、史記に此の次節に、神農以前尙矣、蓋黃帝考定星辰云々と記して、神農以前に係て云へるぞ暦の沿革に叶へる說なる）さて昔自在古歷と云へる文義は。天地開闢の昔より自在る古歷の有りしと言ふ義は勿論にて。其は太昊以前より有ける。彼の紀名の元歷。及び太昊氏の始めし合朔の暦をも係て云へるなり。（是を以て次は、神農以前尙矣と云へり、然れば索隱に、按古歷者謂黃帝調歷以前と云へるは實然る言なりか

し。)〇建正作ニ於孟春ニとは。太昊氏の歴は更なり。其より以前の元歴にも斗柄の寅に建す孟春の節を年の正始に作たる由なり。(爾雅に、正長也、增韻に、歳之首月曰ニ正月一、初學記に、月令曰、正月一日是謂ニ正日一、玉燭寶典云、正月爲ニ端月一、春秋傳曰、履ニ端於始一、其一日爲ニ元日一、元原也、始也、首也、晉書曰、履ニ端元日正始之初一云々など有るにて正の元始なる義を辨ふべし。)〇於レ時冰泮云々は。其の春時を知るに。冰泮て蟄蟲發出し。百草の奮興する等を候ひて知れる由にて。夏秋冬の節も各々其候ある事を准へ知しむる文なり。(其委しき事は夏小正を始め、周書の時訓解、禮の月令、また呂氏春秋、淮南子などを見て知るべし。)〇物廼歳具云々は。大戴禮に。廼を乃。具を俱と作り。其の補注に。言萬物與レ歳俱起ニ于春一盡ニ于冬一也と云へる如く。四時の氣次第に行はれて。生長收藏あるを言ふ。東は乃ち春と云ふが如く。春は東より興る故にかく言へり。(そは尙書大傳に、東方者動方也、動何以謂ニ之春一、春者出也、出也者物之出、故曰東方春也と有るを思ひ合すべし。)〇分時

鷄三號卒明云々は。一日一夜の時を分るに。鷄の三號く寅時を平明とし。一日夜の始めと爲て。丑時を卒とす。其は建寅孟春。卯仲春。辰季春。巳孟夏。午仲夏。未季夏。申孟秋。酉仲秋。戌季秋。亥孟冬。子仲冬。丑季冬。と十二節に定めたる次第に循ひて。一日夜の時をも十二に定たる由也。(史記の正義に撫猶レ循也、自ニ平明寅一、至ニ鷄鳴丑一凡十二辰盡レ丑、又至ニ明朝寅一使ニ一日一夜一と云るも乃ち此の義なり。)〇政不レ率レ天以下は。道理灼然く。文意能く通ゆれば注するに及ばず。斯て是の說大戴禮に出たるも同文なれど。共に古書より拾ひ載せるにて。史記なるも決めて史遷が自文に非ず。古語の殘缺なるが故に。少か之足らずぞ聞ゆめる。(但し本書なほ丑政の間に、日月成故明也、明者孟也、幽幼也云々と云ふ文あり、大戴禮も同けれど、共に後人の書加へし例の空理談にて、暦の實用に係る事なき文なれば抄し出ず。)さて古暦法の年時の定。まづ右の如くにて。前條に注せる如く。冬至より冬至まで太歳太陰二星の一周する間を一歳となし。一日三十二分に法を以て二十

四氣の間を十五日七分づゝに取り。四歳を積みて餘分なき八十歳を一舍と爲し。十九舍千五百二十歳を一紀と爲て。三紀を一元と爲す法なるが。此は彼太初上元より自在りし眞暦にて。四時を各々孟仲季に分けて。十二節とは爲たれど。洹神氏の世まで未だ月の運行なく。其百四十一年より其行り有れど。太昊氏の世まで。合朔の法なく元より干支の名も無りしなり。(然るを今の本文に建正と云ひ、卒ル于丑ニと言ひ、既に引たる文等に、甲寅甲戌など云へるを始め、太昊以前の年歴に干支を以て云へる事の有るは、有名の後に。其名を無名の昔へも及ぼし云へるにて、和漢に然るためし多かる事なり、古今原始に、かの閼逢攝提格など云ふ名等を、天皇氏の設けたる干支の古名と爲たれど信られぬ事は、初條に云ふが如く、況て地皇氏定ニ三辰一、分ニ晝夜一、以ニ三十日一爲ニ一月一、按三辰日月星也、三辰既分晝夜以判、消長盈虚、朔望相繼、而遂以ニ三十日一爲ニ一月一焉と有るは、緯書の類にも然る事の有るに依れる説なれど、絕て信られぬ訛説なり、然るは天地二皇の當昔、いまだ月の行りは無りしかばなり、)さて天皇、地皇、人皇及び六皇の世々を歴て柏皇氏の時まで此の眞暦にて在けるを。太昊氏敷戎の當時は月已に運れる故に。此の時よりぞ月名をも立たりける。(月はかく開闢より甚く後れて分判せる物ぞと云ふこと、漢才のみならむ人は、決めて不審み思ふべし、此の分判せる時分の事は、皇國の古傳に據りて知るより外なし、其由は古史傳に委く說き、其の大意は弘仁歷運記考にも云へり、就て見るべし、)其は古三墳と云ふ書に。伏羲氏因レ風而生。故風姓。皇策辭曰。上ニ升君位一。三十二易ニ草木一。惟天至仁。於草生月雨降日河汎時龍馬負レ圖。神開ニ我心一始畫ニ八卦一。自レ上而下。咸安ニ其居一。圖出後二十二易ニ草木一。木枯月作ニ天書一。後草木一易。木王月始作ニ甲暦一。々起ニ甲寅一と云へる說あり。(今傳はる本に此文二所に出たるが、互に文の精粗あり、後の妄誕も多く錯れるを、路史玉海、餘冬序錄などに引たる文を校合して、古說と聞ゆる限りを引出たり、胡元瑞筆叢に、此の書を論へる說ども其の大旨は然る言なれど、其所レ言、二十二易ニ草木一等語、皆庸人孺子所ニ緝綴

而不肯言也と云へるは、深く古へを考へざる例の偏見なり、拘はる事勿れ。）是の傳へに據るに。太吳氏作暦の當時。既に斯の如き月名を立たる事所知たり。易草木とは餘冬序錄に。太古未造暦前。亦以草木爲記と云へる如く。歲の易れる義にて。木王月とは。孟春の頃に當るべく。木枯月とは孟冬の頃に當るべく。草生月とは季春の頃に當るべし。（皇國の上古に、大國主神の名け給ひけむと覺ゆる月名の、萠月、彌生、枯空月など云へるに最よく相類たるは、太吳氏やがて大國主神なること、太古傳に考へ著せる如くなれば、三墳に謂ゆる木王草生木枯など云ふ月名は、卽ちもと皇國にて物し給へる名を、少く變て用ひたるも亦知るべからず、然るに唯この三月の名のみにて、其餘の月名の傳はらざるは甚をしき事なり。）羅泌が路史に。歲暦未著烏從而紀之哉。三墳書以一歲爲一易草木。蓋以草木周禪爲之紀辨爾。今都波之人莫知四時之候。女貞之俗不知正朔紀年。但云已見草青幾度。琉球之國以月生死辨時。以草木榮枯爲歲。儋崖觀禽獸產乳識時。古諸芋成熟紀歲。土蕃以麥熟爲歲首。宕昌黨項。皆候草木以記時序。太古之世。中國之俗。有以與蠻夷同焉と云へり。（また餘冬序錄にも、松漠紀聞、女眞、其民不知紀年。問之則曰、我見草青幾度矣、蓋以草一青爲一歲也、蒙古錄韃靼初無庚甲。其俗每以草青爲一歲。人有問其歲則曰幾草矣、每見月滿一以爲一月。每見草青遲々。方知是月有閏也、記其年春秋則曰、草生草枯。記其月朔望則曰、月滿月缺。古三墳所謂易草木記其歲數也、太古未造暦前亦以草木爲記と見えたり。）是等の說を思ひ合するにも。昔自在の古暦の朴略なりしかば。其暦法に月をも合せて其名をし三墳の如くは設たりけむ。然は有れど。月の行りは年に必ず十二行ならず。節日の行りとは。固より遲速の異有れば。節季を主となし月をば客と爲けむこと。師の眞暦考に。我が古へに節季の運りと。月の旋りとを別にして。某月某月とて數來れる事の有ける由を論はれたるに。思ひ合せて辨ふべし。（然る

は節日の旋りと、月の運りとは固より日數の多少ありて、時氣の十二節なるに、月の運りを合すと爲ては、孟春正月と云ふに、なほ季冬十二月の節を殘し、或はまだきに、仲春二月の節を收もせでは、合すこと能はず、然てしか合せたらむも、授時農業の事には。然しも益なき事なればなり、）術かい孟春等の十二節に干支を配して　孟春を建寅。仲春を建卯など定め。每歲及び日時にも干支を配し。かつ其の本年は日行の節氣に從ふ定法なればっ孟春は立春の日を初日と數始めて。雨水の終までを其節と定め。季冬は小寒の日を初日と數始めて。大寒の終までを其節と定たりけり（但しこは其の例を一つ二つ示すのみ、餘の節炁みな是に准へて知べし。）抑元歷の日法は三十二分にて。八十歲を一舍とし。十九舍を一紀と爲すを。太昊の制は九百四十分の日法にて。七十六年を一蔀とし。二十蔀を一紀と爲せば。互に矛盾を爲べき事と思ふに。合朔節炁倶に密合して。千五百二十歲にして。其紀の故に復する事は。是ぞ太昊伏羲氏の彼の元歷に合せたる章蔀の制の神妙なる。（なほ其妙所は

中々こゝに其の百分一をも述ること能はず、今の前後に言ふ所は實に其の大略なり、委くは古曆傳に述るを視て知るべし、）

【四】逮乎神農氏。始治農功。正節氣審寒溫。爲早晩之期。暨于黃帝。班示文章。重黎記注。象應著名。綜始相驗。準度追元。推分星次。起消息正閏餘。述而著焉。謂之調歷。

此の第四條。その大段は。後漢書及び晉書の二歷志を合せ取り。楊泉が物理論の文を補ひて記せり。（其は晉志には、逮乎神農分八節以治農功とのみ有れど、物理論には、神農始治農功、正節氣審寒溫、爲早晩之期、故立曆日とあり、但し分八節、また立曆日などの文を取ざるは、既に太昊氏の物せる事にて、神農氏の事に非ざればなり。）○太昊氏の子を少典と云ふ。黃帝神農は兄弟にて共に是少典氏の子なるが。神農の所生は火德なりし故に。太昊氏の木德を相生して其次に立ち。黃帝は兄なれど。其所生の土德なりし故に。

神農の火德を相生して其次に立たり。(此等の事委くは赤縣太古傳及び春秋命歷序考に論へるを見べし。)さて神農氏始めて農功を治むるに。太昊氏の曆法に賴りて節氣を正し敎へ。寒溫の候を審にして種蓺の早晩を示せる由なり。(周髀算經に、如合朔、古者包犧神農制作爲歷度元之始と云ふ事あれど、諦ならぬ說なり。)〇暨于黃帝班示文章は。伏羲氏より神農の世に至るまで。歷法なほ書契に著す事は無りしを。黃帝に暨びて始めて文章に記して蒼生等に班示せる義なり。(是を以て後漢志の論に、皇犧氏之有天下未有書計。暨于黃帝云々とは云へり。)〇重黎記注とは。史記の索隱に。按左傳。重爲勾芒木正。黎爲祝融火正。益二人。元是木火之官。兼司天地職と云へる如く二人なり。乃ち下なる象應終始等を記注せるを言ふ。〇象應著名とは。時令象應を名に著はすを言ひ。(かの夏小正月令などに載たる時候の類を云ふべし。)終始相驗とは。歲節の終始を如何と驗むるを言ひ。準度追元とは。天度を失へず隨循せるを言ふ。(追は字書どもに、隨也と云へる義なり。)

〇起消息正閏餘とは。月に六大六小の消息を起して十二月を立るに。歲日なほ餘り有れば。日法を立て閏餘を正せる由なり。〇述而著焉謂之調歷とは。右の件々は黃帝の始めて作れる事には非ず。皇犧氏の創草せる事等なるを。述て方策に著はし調へし故に。調歷と謂ふ義なり。是を以て晋歷志に。董巴議に。伏羲氏の始めて八卦を畫し歷を作れる事を言ひて。黃帝因之初作調歷と云へり。(然るに史記索隱に、系本及び律歷志、黃帝使羲和占日、常儀占月、臾區占星氣、伶倫造律呂、大橈作甲子、隸首作算數、容成綜此六術而著調歷也とあり、此は調歷を著述するに依りて、其事々に任用せる由なり、然るを右の事ども皆此輩の始めて制作し出せる事の如く載せる書等あるは、新古を云はず悉訛れる說なり、能くことの始末を糺し辨へて紛紜の說に惑ふこと勿かれ。)さて史記の歷書に。古歷の大約を載せる次に。神農以前尙矣。蓋黃帝考定星歷。建立五行。起消息。正閏餘。於是有天地神祇物類之官。是謂五官。各司其序不相亂也(正義に、黃帝

置二五官一各以二物類一名二其職掌一也と云へり、皇帝は乃ち黄帝なり、皇黄同音なる故に通用せり、古書に例多かり。）前漢の郊祀志に。黄帝得二寶鼎神策一。是歳己酉。朔旦冬至。得二天之紀一。終而復始。於レ是黄帝迎レ日推レ策。後率二十歳復朔旦冬至。凡二十推。晋灼注に。迎數レ之也。讃曰。日月朔望未レ來而推レ之。故曰二迎日一也と有などをも思ひ合すべし。（但し是の郊祀志の文は、もと史記封禪書の文なるが、玉海に史記黄帝迎日推策注とて、策數也、未レ來而推レ之曰レ迎、黄帝得レ蓍以推二蓍歴數一、於レ是逆知二節氣日辰之將來一、故曰二推策迎日一と云へる説有れど、神策を蓍と見たるは甚く誤れる事なり、迎日は別に古式ありて秋巻に委く述るが如し、蓍筮の術の能く知る所には非ざる物をや。）然るは黄帝の得たる寶鼎は小縁の物に非ず。太昊伏羲氏の早く造り遺せる物にて。其表に迎日の神策を鑄付たりし鼎にぞ有りける。其は右本文の上に。昔泰帝興二神鼎一一。一者一統。天地萬物所レ繫レ象也。師古注に。泰帝者即泰昊伏羲氏也と有るにて知るべし。（史記封禪書に同文の出たるには、象を誤りて終に作れり、）

【五】洎二于少昊一則鳳鳥司レ歴。少昊氏之末九黎亂レ德。民神雜擾。不レ可レ放レ物。顓帝受レ之。乃命二南正重一司レ天。火正黎司レ地。使レ復二舊常一。以二乙卯一爲レ元。人正己巳。朔旦立春。日月倶起二於營室五度一。冰凍始泮。蟄蟲始發。鷄始三號。天曰二作時一。地曰二作昌一。人曰二作樂一。鳥獸萬物莫レ不二應和一。故顓帝爲二歴宗一也。

此條は史記。後漢書。晋書の三歴志。及び後漢の張衡傳の説を合せ取りて載せり。○黄帝の第五子を清と呼ふ。少昊氏は乃ち其子なり。能く太昊氏の道を修めし故に。少昊と稱ひしとぞ。（大戴禮及び史記漢書などに、黄帝之子少昊曰レ清と有るは、路史に云る如く非なり、委くは太古傳に就て見るべし。）鳳鳥司レ歴とは。春秋昭公十七年の左傳に。郯子曰。我高祖少皞之立也。鳳鳥適至。故終二於鳥一。鳳鳥氏歴正也。と見えたり。蓋鳥名を以て職

號と爲こと此の世の制度なりしかば。鳳鳥氏と稱ひしは決めて彼木正重が子孫にぞ有けむ。（其は路史に、乙鳥氏司分、伯鳥氏司至、蒼鳥氏司啓、丹鳥氏司閉、而鳳鳥氏董之以爲歷正と有る所の注に、燕以春分來、秋分去、故司分、鴟以夏至鳴、冬至止、故司至、鷃以立春來、立夏去、故司啓、鷩以立秋來、立冬去、故司閉、鳳知天時、故歷正と有るをも思ひ合すべし、）少昊氏之末とは。其の在世の末を謂ふ。其の子孫の世を云ふには非ず。（諸書に其裔數代世を有てる趣に云へる說あるは非なること、春秋命歷序考に旣に論へりき、）九黎亂德とは史記注に諸侯作亂者とあり。民神雜擾とは。黃帝の時に能く序たりし民神のまた雜擾せるなり。不可放物は。索隱に。放音昉依也と云へり。（此等のこと後漢の張衡傳には、少昊之末人神雜揉、元黎亂德不可方物と云へり、委くは太古傳に就て見るべし、）〇顓帝受之とは。少昊氏の末世の然ばかり雜擾せる世を。帝顓頊の受治めたる由なり。（）乃命南正重云々。此重黎は乃黃帝の時に重黎と聞えし勾芒祝融二人

が裔の祖職を嗣げる者なること知べし。（斯てまた堯舜の世に羲和と稱せる二官に居たる輩は、みな此の子孫にぞ有ける其は冬卷に云ふべし、）使復舊常とは。黃帝の世の舊常に復せる由なり。（）以乙卯爲元は。後漢の歷志に。顓頊元用乙卯とある注に。顓帝歷術曰。正月己巳朔旦立春。日月俱起於營室五度。今月令孟春之月。日在營室と見え。（こは本文注ともに蔡邕が說なり、）また本文劉洪が言に。乙卯之元人正己巳。朔旦立春。三光聚天廟五度とあり。此の乙卯は。顓頊の世を治れる六十九年に當る歲にて。今傳ふる古曆を以て推步するに。實に己巳の朔旦立春なり。〇人正己巳云云。人正とは卽今の正月建寅の月を謂ふ。そは十一月建子を天正と云ひ。十二月建丑を地正と云ふに相對せる文にて。三統と云ふも卽ちこれなり。（其は前漢の歷志に、天統之正始施於子半、地統受之於丑初、人統受之於寅初云々と有るにて知るべし、

【六】其後三苗亂德二官咸廢。而閏餘乖

次。暦數失序。堯復育重黎之後。使纂其
業。故書曰。迺命羲和欽若昊天歴象日
月星辰。敬授民時。禪舜申戒文祖云。天
之暦數在爾躬。允執其中。舜亦以命禹。
由是觀之王者所重也。

其後とは顓頊より後を云こと勿論なるが。此は帝嚳の代畢りて帝摯と云るが世を謂ふべし。（其は史記に、帝嚳崩而摯代立、不善崩と云ひ、帝王世紀に、摯於兄弟最長、得登帝位、封異母弟放勛爲唐侯、摯在位九年政微弱而唐侯德盛、諸侯歸之、摯服其義、乃率群臣造唐而致禪、唐侯自知有天命、乃受帝禪、乃封摯於高辛、今定州唐縣也と有にて知べし、）三苗亂德は。尚書の傳及び漢書の師古注に。三苗國名。縉雲氏之後爲諸侯者。卽饕餮也と云へり。亂德とは亂を作せるを謂ふ。（神異經に、西荒中有人焉、面目手足皆人形、而胳下有翼不能飛、爲人饕餮淫逸無理、名曰苗民、山海經に、大荒北經黑水之北有人有翼名曰苗民也とも見えたり、）（二官咸廢云々は。諸家の注等に、二官卽重黎也。以歳之餘日爲閏。故曰閏餘、次十二次也。史推暦失閏則斗建與月名乖錯不與正歳相值、暦數失序也と云るが如し。）堯復重黎之後云々史記には。遂重黎之後不忘舊者使復典之、而立羲和之官明時正度とあり。抑堯の卽位及び暦を治めたる歳は。竹書紀年に。元年丙子。帝卽位居冀。命羲和歴象と有る是正說なり。（諸書に紀年を引たるに、多く干支を漏せる中に、隋の律歴志また路史後紀の注に引たるには、帝堯元年丙子とあり、今本と同じ、）○故書曰は、堯典に。乃命羲和。欽若昊天歴象。日月星辰。敬授人時。（孔安國傳に、重黎之後、羲氏和氏、世掌天地四時之官、故堯命之、星四方中星、辰日月所會、此舉其目下別序之也、とあり昊天は卽天帝なり、其は古暦傳を見て知るべし、昊天言元氣廣大と云へる說は取ず、）分命羲仲宅嵎夷曰暘谷。（史記注に禹貢青州云、嵎夷既略、按青州之地也と云へり、暘谷は日の出る所にして扶桑州に在り、今嵎夷を其地に準ふ是を以て曰暘谷とは云へり）

寅賓出日、平秩東作。（安國云、歲起於東而始就耕、謂之東作、東方之官、敬導出日、平均次序東作之事、以務農也と云へり、）日中星鳥、以殷仲春。（安國云、日中謂春分之日、鳥南方朱鳥七宿、春分之昏、鳥星畢見、以正仲春之氣節、轉以推季孟則可知と云り、）申命羲叔、宅南交。（史記索隱に、南方地有名交趾者、或古文略擧一字名地、南交則是交趾不疑也と云へり、申は重なり、）平秩南訛、敬致。（安國云訛化也、掌夏之官、平序南方化育之事、敬行其敎、以致其功、四時同之、亦擧一隅也と云り、）日永星火、以正仲夏。（安國云、永長也、謂夏至之日、火蒼龍之中星、擧中則七星見可知、以正仲夏之氣節、季孟亦可知と云へり、）分命和仲、宅西土、曰昧谷。（昧谷は荒西の地名日の沒る方なり、淮南の地形訓を見て知べし、和仲を赤縣の域内西極の地に宅しめて、乃其地を昧谷に準へしなり、是を以て曰昧谷とは云へり、）寅餞納日、平秩西成。（安國云、餞送也、日出言導、日入言送、因事之宜也、秋西方萬物咸成、平序其政、助成物也と云へり、）宵中星虛、以殷仲秋。（安國云、宵夜也、春言日、秋言夜、互相備、虛玄武之中星、亦言七星皆以秋分日見、以正三秋と云へり、）申命和叔、宅朔方、曰幽都。（安國云、北稱朔とあり、和叔を赤縣の域内北極の地に宅しめて、乃其地を幽都に準へしなり、山海經に北極之内有山名幽都と有にて知べし、）平在朔易。（安國云、易謂改易於北方、平均在察其政、以順天常也と云へり、）日短星昴、以正仲冬。（安國云、日短冬至之日、昴白虎之中星、亦以七星並見、以正冬之三節と云へり、）帝曰咨汝羲暨和、朞三百有六旬有六日。以閏月定四時成歲。（史記索隱に、夫周天三百六十五度四分度之一、是天度數也、而日行遲、一歲一周天、月行疾、一月一周天、日一日行一度、月一日行十三度、十九分度之七、至二十九日半強、月行天一匝又逐及日、而與會、一年十二會、是爲十二月、毎月二十九日過半、年分出小月六、是毎歲餘六日、又大歲三百六十六日、小歲三百六十五日、擧全數云三百六十六日、其實一歲唯餘十一日弱、未滿三歲已成一月、則置閏、若

三年不レ置レ閏則正月爲二二月一、九年差二三月一則以レ春爲レ夏、十七年差二六月一則四時皆反、以レ此四時不レ正歲不レ成矣、故傳曰、歸二餘於終一事則不レ悖是也と云るが如し。）允釐二百工一庶績咸凞と有る是なり。（以上今の要となき文を略して引たり、史記の正義に、羲仲主二東方一之官若二周禮春官卿一、羲叔主二南方一官、若二周禮夏官卿一、和仲主二西方一之官、若二周禮秋官卿一、和叔主二北方一官、若二周禮冬官卿一と云るは然る言にて、謂ゆる四岳は即是四人なり、そは安國註に四岳即上羲和之四子也、分二掌四岳一之諸侯、故稱焉と云ひ五行大義に、堯以二羲和四子一分二掌四時方嶽之職一謂二之四嶽一也と云へるが如し。）なほ此件は。史記の堯本紀に、敬二順昊天數法日月星辰一敬二授民時一と記せる索隱に。尚書作二曆象一則此言二數法一。是訓二曆象二字一。謂命二羲和一以二曆數之法一。觀二察日月星辰之早晩一。以敬二授人時一也。また正義に。尚書考靈曜云。主レ春者張昏中。可二以種一レ稷。主レ夏者火昏中。可三以種二黍菽一。主レ秋者虛昏中。可二以種一レ麥。主レ冬者昴昏中。可二以收斂一也。視二四星之中一知二民緩急一。故云二敬授二民時一也と有をも思ひ合すべし。（然れど堯本紀に曆象を數法と爲たるは信がたき由あり、其は古曆傳の第□條に、今の本文を引きて委く辨ふるを視るべし。）さて河圖緯の握河紀に。堯即レ政十七年仲月甲日至二于稷一、沈二璧于河一龍馬負レ河而出。甲似レ龜廣九尺、有レ文乃寫二其文一藏二之東序一と云ひ。尚書中候にも此事を記して。其文に有二列星之分。斗正之度一。と見え。春秋命歷序には。壇二于河一作二握河紀一。逮二虞舜夏商一咸亦受レ焉と言へり。（此文どもの事は春秋命歷序考に委く言へりき、彼考につきて見るべし。）此は曆法を作たる義の說等なれば。元年丙子より草創めて十七年に成覺り。其歲の仲冬甲の日に河に壇して天を祭り。其の曆法の天意に合ひて河圖を錫へる故に。其の曆法を握河紀と號けたる義と通ゆ。然れば握河紀の十七年仲月甲日は疑なく十八年仲冬甲子なり。其は古曆を以て之を推すに。堯の十八年は癸巳の歲にて。乃甲子冬至に當ればなり。是を以て乾鑿度なる孔子の語にも。堯以二甲子一受二天元一爲二推術一と云へり。（但し此孔語に、こを天元と云るは

違へり、其は天元とは日は甲子歳は甲寅に起るをこそ言へ、癸巳の歳の冬至は甲午の歳の首なれば、此は日は甲子歳は甲午なる人元の始と云はゞ言ひもすべけれど、是の時は人元壬子蔀の第四十八年に當る歳なれば、實は元と稱ふべきには非ずかし。）〇禪舜申戒文祖云は。舜典に。堯の禪を受る時の文に。正月上日受終于文祖在璿璣玉衡以齊七政と有りて。上日は朔日なり。文祖とは尙書帝命驗に謂ゆる五府の一にて。堯は火德と稱する故に。五行の赤帝を祠りて文祖と稱せる其廟前に誓ひて。堯の終を受しむる時に戒めたる義なり。（蓋こは史記の諸注を折衷して記せるなり。）〇天之曆數云々は。逸書の文にて。論語堯曰篇に見えたり。文義は天の曆數を齊ふること專汝の躬に在れる事なり。能く其の中氣を執りて勿論りそと言へるなり。但し允執其中の四字は史漢共に洩せるを。己が意を以て補へり。（史記の頭注に、柯維騏云堯舜禹以天之曆數相告戒、朱熹謂帝王相繼之次序、猶歲時氣節之先後、史遷班固直以此爲造曆之事非也と有れど、此は例の朱熹流として、其中と云ふを彼中庸の中に爲まく欲する故の說にて、此は在璿璣玉衡齊七政とある文の照を知ざる者なり。）〇舜亦以命禹とは。舜の位を禹に禪る時もまた右の如く命戒せる由なるが。禹の固く其の旨を守りて。夏の代凡て四百三十一年が間。其曆法を用ひ來りし事は更にも言はず。其の末代なりし桀王を逆して世を簒へりし商湯も。其の正朔をこそ替つれ。曆法をば其の隨に受用ひてぞ有ける。是を以て上に引たる命歷序に。逮虞舜夏商咸亦受焉とは言へり。（此事なほ次條に論ふをも合せ考ふべし。）〇由是觀之王者所重也は。その文義聞えたるが如し。

【七】夏數得天百王所同。湯用師于夏。除民之災。順天革命。改正朔。變服殊號。一文一質。示不相沿。以建丑之月爲正。易民之視。若天時大變。一代之事亦越我。周王致伐于商。改正異械。以垂三統。至於敬授民時。巡狩祭享。猶自夏焉。

此一條は汲冢周書の周月解に取れり。（但し是より

前に、仲冬建子之月冬至の節は、日短の極なるが、微陽黄泉に動き始め、日月俱に牽牛の初に起り、合宿の權輿なる故に、周暦の第一月に立たる由を記し、其より四時の歳を成すに春夏秋冬あり、各各孟仲季ありて、中氣を主とし、中氣なきを閏に立る夏暦の法なる由を述たるが、其は皆古暦の道なるが故に、古暦傳に載せれば、此には洩しつゝ、凡て周書に、其の正月建子の月を正月と云へる事なく、一月とのみ數所に見え、建丑の月を二月、建寅の月を三月とやうに次々云へり、其の正月を正月と云はざるは唯に當時の云ひ慣のみにて、殊に謂ある事には非ずかし）さて夏數は夏暦と謂ふに同じ、其は爾雅に。歷數也。増韻に。曆數也など有るにて知べし。得レ天とは是より前に。萬物春生。夏長。秋收。冬藏。天地之正。四時之極。不易之道也と云ふ文有りて。夏暦は天道の正を得たる義なり。百王所レ同とは。其を夏暦とこそ言へ。太古より夏の代まで。百王の同く因循し來れる不易の暦數ぞと云へる義なり。（下に引く孔叢子なる子思の語には、夏數得レ天、堯舜所レ同也とも云へり）

○湯用二師于夏一とは。竹書紀年に。夏桀王が三十一年の文に。商征レ夏戰二于鳴條一。夏師敗績。桀出二奔三朡一。商師征二三朡一。獲二桀于焦門一。放二之于南巣一と有る是なり。（桀王が三十一年は壬戌の歳に當る、史記には此年暦を記さず、）さて除二民之災一と有れど。桀王が惡行に苦めるは。唯其の近く侍ふ者ども。或は其の近き國邊の者等こそ有れ。天下の民に渉る大惡には非ざりしを。天下の民盡く苦める其の災を除ける如く言へるは。商湯が惡逆の罪を蔽はむと欲して。桀王が惡を甚しく云へる文なり。（周に至りて殷紂が惡を甚しく云ふも、文王父子が弑逆の罪を覆はむと欲するより出たる事にて之に同じ、是を以て論語なる子貢が言にも紂之不善也、不レ如二是之甚一也、是以君子惡レ居二下流一、天下之惡皆歸レ焉とは云へり、）然れば順二天革命一と云ふも實の天命に非ず。湯が惡逆を天命に誣たる物なり。斯て夏暦の正朔を改め建丑の月を以て正月と爲し。服色を變じ。國號を殊にし。一文一質も夏政を相沿はずと世に示して。民の視聽を易たる由なり。（後の簒奪を行ふ者ども、文武莽操を

始め、天々命々と稱する誣言は實に殷湯その基を開きてぞ有ける〔さて殷代に治暦ありし事は。春秋命歷序に。殷之故暦と云ふ有りて。孔子の春秋を治むる時に。其の殷暦をもて校正せる由見え。後漢の歷志蔡邕議に。馮光陳晃各以庚申爲非。甲寅爲是。案暦法黄帝。顓頊。夏殷周魯。凡六家。各自有元。光晃所據則殷暦元也と有れば。元を甲寅に起せる暦なり。〔以庚申爲非とは、謂ゆる四分暦の元は庚申なるを非と爲て甲寅を元と爲たる殷暦を是と爲たる由なり、此の文の意なほ末に委く論ふを俟べし〕抑甲寅は天地初發の大暦元にして。天皇氏太昊氏も是より暦數を起し。其の後次々に黄帝顓帝唐堯に至るまで。其の治暦の時ごとに。其推步の長遠を厭ひて上を略き。或は辛卯。或は乙卯。或は甲午など其の世の紀年に改元しつれど。其握先の甲寅元に於ては動き無れば。其を襲用せる。殷暦も當世の紀年に改元せむ事は然も有べき事なるに。甲寅元と稱ふが不審きに就て尚熟く思へば。其の世に天紀上元の復り周れる時に會ひて。卽ち其の元を用ひし故に甲寅元とは

云ふ也けり。〔黄帝顓帝唐堯など、其の治暦の時ごとに改元しつる事は、既に上の條々に論へるを能く心留おきて此條を見ずは心得かぬる節ありて必ず思ひ惑ひなむものぞ〕其は既に次々記せる如く。柏皇氏の百七年甲午の歳より、人紀下元の甲子蔀に入り。夏桀王が二十二年癸丑の歳に至りて其の紀の乙酉蔀終れるが。其の歳の冬至は甲子朔旦にて。翌二十三年甲寅の歳の歳首たること勿論にして。是より天紀上元に復すれば卽ち是の歳を當代の暦元と爲したること著し。其は竹書紀年に桀王が二十二年の文に。商侯履來朝。命囚履于夏臺と見え。二十三年の文に。釋商侯履と有るを思ひ合するに。其の夏臺に囚られし間の巧夫なること是又疑なし。〔商侯履とは乃殷湯王なり、元の國號を商と云ひ、其の名を履とも天乙とも云へり、是の以前より反逆の隱謀ありし事を桀王が知れりし故に囚へしなり、囚獄を夏代には夏臺と云ひ、殷には羑里と云へり、紀年に桀王が元年を壬辰とあり、二十三年の甲寅なると能く符へるをも思ふべし〕さて其の暦術は以前の古暦に因循し。

かつ是の時天紀上元に復せる甲子蔀の首に會へれば。殊に古暦に修し調へて。節氣天度に密合ならしめ。且かの逆意あるが故に。唯其の正朔は夏暦に因らず。別に新意を用ひて建丑の月を取り。其の服色を易たる耳なり。（路史發揮なる三正論の自注に、孔安國云自古帝王皆以建寅爲正、殷革夏命而建用丑、周革殷命而建用子、蓋以爲革命者必新制度、以變天下之耳目也と云ひ、六經天文編に、革正之事、古未嘗有、蓋始於湯而武王因之、遂以建子爲正と云へり、倶に然る言なり、）若天時大變一代之事亦越我とは。周人固より夏暦の正き事を知れる故に。殷代に夏の正朔を改めし事を竊に誹りて天時の大變の若しと云ひ。一代之事また我に越たりと云へるも。我が世に殷代の事を革むるに越りて。殷には夏代の事を改めたりと言へる義なり。（或説に周書は疑なく周公旦が撰と見ゆと云へり、もし此言の如くは、此の謂ゆる我は周公旦自から云へる我なり、よし此の説違ひたらむも周代の人の姫旦が遺語を集めて作れる書なる事は疑なし、）さて此語氣につきて思ふに。孔叢子に。縣子問曰。顏回問爲邦。夫子曰。行夏之時。若是殷周異正爲非乎。子思曰。夏數得天。堯舜之所同也。殷周之王征伐革命以應乎天。因改正朔。若云天時改耳。故不相因也。夫受禪於人者。則襲其統。受命於天者。則革之。所以神其事。如天道之變然也。三統之義。夏得其正。是以夫子云と有るは。今の本文に自來せる說と聞えたり。（然れば周書は更なり、孔叢子も宋儒らが云ふ如く棄べき書には非ずかし、）〇周王致伐于商は。竹書紀年に殷紂王が五十二年の文に。冬十有二月周師伐殷と有るは武王が十一年庚寅の歳なるが。其の翌辛卯の歳の文に伐殷敗之坶野。王親禽受于南單之臺とある是なり。（此文に王と云へるは武王なり、受とは紂王が名なり、史記には此年暦をも記さず、）さて正朔を改め。器械を異にし。始めて三統の義を垂たる由なるが。三統とは乃謂ゆる三正の元にて。此は實にも武王始めて律數より記せる事なり。其は五行大義に。外傳解云。武王尅商歲有鶉火。日在天駟。鶉去天駟凡七宿。地辰日在甲子。

從子至午又七。天象地辰其數皆七。故以七音樂。以七律配七始。故以定三元。(七音の事も同書に、樂緯云、黃鐘爲宮、林鐘爲徵、大簇爲商、南呂爲羽、姑洗爲角、應鐘爲變宮、蕤賓爲變徵、以次配之、五音備矣、凡有七音と云へり、武王始めて五音に變宮變徵と云ふ二音を增して七音と爲たる由なり、國語を春秋外傳と云へば、外傳解とは疑なく國語の韋昭が解を云へり、)凡三元者周以建子月爲天正。故黃鐘之管配之。殷以建丑月爲地正。以林鐘之管配之。夏以建寅月爲人正。故大簇之管配之。十一月乾之初九。故黃鐘爲天元。律長九寸。六月坤之初六。故林鐘爲地元。律長六寸。正月乾之九三。故大簇爲人元。律長八寸。是爲三元。律之始也。(以上は附會の說を皆略きて今の用ある文のみを抄せるなり、)春秋感精符云。十一月建子。天始施之端。謂之天統。周正。服色尙赤也。十二月建丑地始化之端。謂之地統。殷正。服色尙白也。正月建寅人始化之端。謂之人統。夏正。服色尙黑也。孔子云。夏正得天。此謂天道四時之氣。應八節生殺之期也と有るにて知るべし。(また同書に受天命而王者改正朔易服色法三正之道也、周以天統服色尙赤者陽道尙左、周以木德王、火是其子。故左行用其赤色也、殷以地統服色尙白者陰道尙右、殷以水德王。金是其母。故右行用其白色也、夏以人統服色尙黑者、人亦尙左、夏以金德王、水是其子、故左行用其黑色也とも云へり、上の件の說等みな子思が謂ゆる其事を神にして、天道の變の如く然せる者にて、實は誣會なり、見高からむ人は、自づからに知るも有りなむ、)斯て巡狩祭享猶自夏焉と云へるまでを通じて之を考ふるに。上文に。殷代に夏曆を革めし事を天時の大變の若しとは云へれど。周代また改革せる非事を文らむと欲して。我が周王も正朔を改め。器械を異に爲たれど。始めて三統の義を垂れ。敬して民時を授くるに至り。巡狩祭享には猶夏正を自ひて。天に順ひ人に應ずと言善く云へる文意なり。但し此言に據れば。殷代には享祭巡狩等にも夏正は用ひずと聞えたり。(然れど乾鑿度に、孔子曰とて三王之郊、一用夏正。此四時

之正、不易之道也とも、三王之郊、一用二夏正一、所下以順二四時一法中天地之道上也とも有れば、殷も郊祭には夏正をぞ用たりけむ〔〕さて周人は右の如く其世の暦を善様に云へど、其實は殷暦より異に大變なる改革にて。律數を牽強して。新に三統の妄誕を搆へ。正朔は更なり、合朔節氣の推法月分をさへに古法を悉改めたる新暦にぞ有ける。是を以て春秋命暦序に。堯の時に治めし古歷の事を云ひて。逮二虞舜夏商一咸亦受レ焉とは言へれど。周亦受レ焉とは云ざりけり。其は次々に考證するを視て知るべし。

【八】夏正以二正月一。殷正以二十二月一。周正以二十一月一。至二武王一訪二箕子一。箕子言二大法九章一。而五紀明二歷法一。故自二殷周一皆創業改制。咸正二歷紀一。服色從レ之。

此條は史記の歷書と前漢の歷志とを併せ取れり。〔〕是謂ゆる三正の事は。既に第七條に注せれど。長文を厭ひて尚言ひ漏せる事も多かれば、亦茲に取總て論はむに。其の得失の和漢の人は議論粉々たれど。大抵愚論なる中に。獨中根元圭が三正俗解と云ふ物のみぞ論じ得たる趣なる。然るは其の說にまづ三正とは。夏殷周三代の正月といふ義は勿論にて、此は一歲の首なれば。古書は一月とも言へり。其は尚書の武成に惟一月壬辰と有るにて知るべし。〔正の字もと去聲に云へるを秦始皇が名を政と云ひ、正政同音なれば之を避けて端月と云ひしを後遂に正の音を改めて平聲に從ひ、後世これに因りて平聲と爲たり〕さて夏代に建寅の月を以て正月と爲とは。古法のまゝに。即ち今の正月を年首に立て建丑十二月を尾と爲たり。是を人正と云ひ。次に殷代に建丑の月をもて正月と爲とは。即ち今の十二月を年首に立て建子十一月を尾と爲たり。是を地正と言ひ。次に周代に建子を以て正月と爲とは。即ち今の十一月を年首に立て建亥十月を尾と爲たり。是を天正と云ふ。〔諸の暦書に天正冬至と云へるは乃此謂なり〕右何れも正二三の三月を春と云ひ。四五六の三月を夏と言ひ。七八九の三月を秋と云ひ。十十一十二の三月を冬と云ふ。此三正中に夏代の春夏秋冬は今時に異ること

		夏	殷	周	秦
春	建寅月	正月	二月	三月	四月
	建卯月	二月	三月	四月	五月
	建辰月	三月	四月	五月	六月
夏	建巳月	四月	五月	六月	七月
	建午月	五月	六月	七月	八月
	建未月	六月	七月	八月	九月
秋	建申月	七月	八月	九月	十月
	建酉月	八月	九月	十月	十一月
	建戌月	九月	十月	十一月	十二月
冬	建亥月	十月	十一月	十二月	正月
	建子月	十一月	十二月	正月	二月
	建丑月	十二月	正月	二月	三月

無れば正けれど。殷周二代の四時は春夏秋冬の字義に叶はで正からず。（說文解字に、春从艸从日、艸春時生也云々、夏中國之人也云々、秋禾穀熟也云々、冬四時盡也云々、古文の終の字など有るを見て知べし、夏の字はもと上聲なるを假りて春夏の夏とすれば、去聲なり、中國之人也と有る字を假たるは、夏は萬物盛大なること、中國の人の盛なるに比して假りしならむ）然るは殷代は今時の冬季一箇月と春の孟仲二箇月併せて春とし。今の春季と夏の孟仲とを併せて夏とし。今の夏季と秋の孟仲とを併せて秋とし。今の秋季と冬の孟仲とを併せて冬とせり。周代は今時の冬の仲季二箇月と春孟とを併せて春とし。今の春の仲季と夏孟とを併せて夏とし。今の夏の仲季と秋孟とを併せて秋とし。今の秋の仲季と冬孟とを併せて冬と爲したり。是を以て周の春は甚寒。夏は微熱秋は甚熱。冬は微寒なり。（篤胤云二代の暦の四時の字義に應ざること誠に此の說のごとし、抑々四時は斗柄寅に建して後にこれを春と云ひ、巳に建して後にこれを夏と云ふ、これ不易の道なり、今や冬を以て春と爲し、夏をもて秋と爲せば、四時反易して其の位を失ふ事斯の如し、豈これを暦法としも云むや）夏時の能く春夏秋冬の字義に應ずるを以て。其の暦法の夏代に始めて起れるに非ず。唐虞の代

に已に有りしを承傳へし事も所知たり。其は堯典に。日中星鳥。以殷仲春。日永星火。以正仲夏。宵中星虚。以殷仲秋。日短星昴。以正仲冬と有るが今行はるゝ夏正と全同きを以ても知べし。（また舜典に、歳二月東巡守至于岱宗、五月南巡守至于南岳、八月西巡守至于西岳、十有一月朔巡守至于北岳と云へり、此の文四方を四時に配當す其の理察然たり、）凡そ周代に記せる書の歳時は皆悉く周の時にて有べきを。公私に就て夏時と周時とを交へ用ひし事多かり。此は民間久しく夏時に慣へる故ならむ。詩の豳風七月篇は正しく夏時を用ひし故に。其詩中の授衣觱發栗烈。于耜など皆今時と異ならず、其の一之日。二之日。三之日。四之日と云へるは周時を用ひたり。（朱注に一之日謂斗建子一陽之月。二之日謂斗建丑二陽之月也、變月言日言是月之日也、蓋周之先公已用此以紀候、故周有天下遂以爲一代之正朔也と云へり、）其の一之日栗烈無衣無褐。何以卒歳と云へる歳は未た夏時を用ひ。其の十月蟋蟀入我牀下。穹窒熏鼠。塞向墐戸。嗟我婦子。日爲改歳入此室處。（其の註に東萊呂氏曰、十月而曰改歳。三正之通于民俗尚矣、周特擧而迭用之耳と云へり、）また小雅十月之交篇に。十月之交。朔日辛卯。日有食之。亦孔之醜と云へるは周時なり。（朱注に、十月以夏正言之、建亥之月也、今以暦法推考幽王六年乙丑周正十月建酉之月也と云へり、（篤胤云元圭この十月之交の詩を夏時としたるは誤なり、今改めて周時に出せり、然るは此の十月は建酉月にて、古暦の八月なるが、其の朔は庚寅なるを周暦には一日進めて辛卯と爲たるなり、朱注は實に非なり、）周頌臣工篇に。嗟々保介維莫之春。亦又何求。如何新畬。於皇來牟。將受厥明。論語先進篇に。暮春者春服成など有るは夏時なるが。春秋桓公十四年春正月無冰。莊公七年秋大水無麥苗。成公元年二月無冰。襄公二十八年春無冰、定公元年冬十月隕霜殺菽。左傳僖公五年春王正月辛亥朔日南至。昭公二十年春王正月己丑日南至。（其註に當言正月己丑朔日南至、時史失閏閏更在二月後と云へり、）禮雜記に。孟獻子曰。正月日至。可以有事

於上帝。七月日至。可以有事於祖。孟子梁惠王篇に。七八月之間。旱則苗槁矣など有るは皆周時なり。（此等の文に由りて察るに、二十四氣の名は夏殷周ともに變ずること無して、正月二月また春夏秋冬の配次は周暦に至りて甚く變じたると知られたり。）偖また論語衛靈公篇に。孔子曰行夏時。朱注云。夏時謂以斗柄初昏建寅之月為歲首也。天開於子。地闢於丑。人生於寅。故斗柄建此三辰之月。皆可以為歲首。而三代迭用之。夏以寅為人正。商以丑為地正。周以子為天正也。然時以作事則歲月自當以人為紀。故孔子嘗曰。吾得夏時焉と云へるは鑿なり。此は殷周の正を用ふる時は二十四氣と春夏秋冬と矛盾するが故にかく云へるのみ。更に他義有べからず。（假令ば周正に從へば、春正月と云ふに冬至あり、夏四月と云ふに春分あり、秋七月といふに夏至あり、冬十月と云ふに秋分ありて名實乖戾し、寒暑反易して春夏秋冬の字義にも符ざる故なり。）また是の行夏之時と云るに據りて、春秋の正月は寅月なりと言へる說あり。甚く誤れり。春秋の正月は。周の代なれば。子月なり。是の故に左傳に。正月日南至と云へり。夏の正月に日の南至する事は決して無き事なりと云へるは實然る言なり。（但し此は元書の文を甚く約め引直して、義理の通じ難く覺ゆる事どもは訂補を加へて出せるなり、本書の文と稍異なるを怪む事なかれ。）是に就て尙思ふに。尙書甘誓篇に。有扈氏威侮五行。怠棄三正と云る文あり。此は孔安國が傳に。威虐侮慢五行。怠惰棄廢天地人之正道。言亂常と云へる如くにて。夏世に有りし事なれば。固より三正月の事とは別なるを。馬融が註に。建子建丑建寅三正也と誤れるより。三代以前既に三正の月とて重せし事の有し如く論ずる輩有れど。若其の說の如くは夏代の歲時を載たる古書に必ず然る語の無て叶はぬ事なるに。然思ひ合さるゝ文は絕て有こと無れば。此は安國が注せる義なること論ひ無し。（路史發揮なる三正論に、昔孔子作春秋書王正月、而古之王必存二代所以通三統也、怠棄三正扈氏之所以為不恭者、何至於禹而後革之哉、三統合于一元、故春秋書春王正月者

九十三、王二月者二十一、王三月者一十九、明此乃時王之正月所以通三統也、故漢宣詔曰、春秋于正月書王重三正謹三微也、高堂降云、三春稱王明三統也と云へるは牽強なり、其の辨は煩ければ洩しつ、）また是より延きて伊訓篇なる惟元祀十有二月乙丑伊尹祠于先王（安國注此湯崩踰月太甲即位、奠殯而告、）と有るも殷周の二代に月數を改めたるに非ず。三正月其の古昔より有りしと云ふ證と爲す輩多かり。其は六經天文編に。並べ載せる中に。蔡氏曰とて。元祀者太甲即位之元年。十二月者商以建丑爲正。故以十二月爲正也。乙丑日也。不繫以朔者非朔日也。（此は今本の安國が謂ゆる古文尚書に就て云ふときは是の説の如くなれど、前漢の歴志なる劉歆が三統曆に引たる文には、惟太甲元年十有二月乙丑朔伊尹祀于先王と有り、然れど此の三統曆に引たる文には別に論ひ有り、三統歷譜辨に云ふを俟べし。）三代雖正朔不同。然皆以寅月起數。蓋朝覲會同。班曆授時則以正朔行事。至於紀月之數則皆以寅爲首也。改正朔而不改月數。則於經史尤可考。周建子矣。而詩言四月維夏六月徂暑則寅起數。周未嘗改也。（是人偶に此の詩一を見得たる耳にて、上に元圭が引たる詩等は更なり、春秋禮記論語孟子などに、夏正周正相混じたる文の數多あるをば知ざりしか笑ふべし。）秦建亥矣。而史記始皇三十一年。十二月更名臘曰嘉平。夫臘必建丑月也。秦以亥正則臘爲三月。云十二月者則寅月起數秦未嘗改也漢仍秦正。亦書曰元年冬十月。則正朔改而月數不改亦已明矣とあり。（なほ別に朱熹の説を擧たるも同じ略説なり、是の蔡氏と云るは朱熹が弟子なれば、其師説を演せるにや有らむ。）羅泌が三正論も同説にて。惟元祀十有二月太甲之正月也と言へれど。殷に建丑。周に建子を正月に立つゝ。其の紀月に前代の月數を用ひむ物かは。若是等の説の如くは正朔を改めしを何の用とかせむ、此は即ち殷の十二月建子月なりと爲て害なき物をや。（羅泌が論に、春秋書王正月、説者爲周正月、周正建子天道然也、雖然天道始於子、而春必寅卯辰、若以周之正月二月、豈得爲之春哉、故如周

官所言春夏秋冬皆爲夏時、小雅豳風、亦皆夏正、毛鄭之說皆然、蓋春秋方以尊周、何得不用時王之正、大傳云改正朔易服色、此其所以與民變革也、疏正謂年始、朔謂月初、言王者得政示從我改始、故朔隨新正、唐彭偃所謂王者之政以變人心爲上是也と云へり、斯ばかりの心着は在れど仍右の說を取れるは何ぞや、故其の三王論は大率雞肋にこそ有けれ、）また史記の文に。秦漢の歲時の違へるを猶數引出て目數を改ざる證と爲たるは殊に陋し。然るは殷周は更なり。秦漢の代にも其の新正を普ねく世に布むとは欲すれど行はれず。我が記す紀年も其制意の如く改め敢ずて夏正新正打交れるなる事。上に出せる豳風の詩に一首の中に夏正周正の相錯せるにても知べき物をや。（三正論に、商以建丑革夏正而不能行之於周、周以建子革商正、固不可行之於夏、秦以亥建此何等時耶、其不可行而謂之閏位也。漢室承之不能之改、至孝武而始克用夏、魏初寅建、至其子叡乃建用丑、及孫齊芳始復從夏、唐至永昌尚猶行子、旣而用夏上元初載、爰復以子、又年而復寅、紛更膠葛之如此雖然繇漢訖今千有餘載惟夏、王者卒莫能易豈非文可革而本者不可革歟と云へり、誠に此の言のごとし、）○さて本文の至武王訪箕子云々は。尚書洪範に。武王勝殷殺受。立武庚以箕子歸。作洪範。惟十有三祀。王訪于箕子と序して。箕子が大法九章を說たる語中に。四曰協用五紀と云ひ。下に五紀一曰歲。二曰月。三曰日。四曰星辰。五曰曆數と有るを云ふ。（顏師古云く、大法九章卽洪範九疇也と云へり、受とは紂王を云ふ、武庚は卽其子なり、武王が十三祀は壬辰の歲なり、）○故自殷周皆創業改制とは。曆法は洪範にも然言ばかりの重事なる故に。殷周より皆創業して改制せる物ぞと云へる文意なり。咸正曆紀と有るは。殷曆までは然も言ふべけれど。周曆は然らず。其は次條に殷周二代の曆を對攷するを視て知べし。（服色の事は巳に第七條に云へれば、今更に云はず、）

三曆由來記卷之中

男　平　鐵胤　同

大壑　平篤胤選述　門人　碧川好尚　校

【九】孔子曰。大衍之數五十。所以成變化。而行鬼神也。故曰日十者五音也。辰十二者六律也。星二十八者七宿也。凡五十。所以大閡物出之者也。陽析九。陰析六。陰陽二析。各一百九十二。合之三百八十四爻。萬一千五百二十析也。故卦當歲。爻當月。析當日。故六十四卦。三百八十四爻。各有所繫焉。

此より十七條迄。周易乾鑿度に。周暦の大體を記せる一聯の文にて。衍文誤寫の多かる中に。此の條と次條は。錯亂も殊に多く。本書の隨にては。絕て讀得まじく。鄭玄が注に。粗訂正せる說有れど。其も仍通えぬ事も有れば。今は孫星衍が。孔子集語に引たる文を校合し。繫衍叢脞の文をば皆删り去て抄出せり。（見む人、本書の體と異に見ゆるを以て、訝ること勿れ。）○大衍之數云々は易繫辭傳に。大衍之數五十。其用四十有五。分而爲二。象兩掛一。揲之以四。以象四時。歸奇於扐。以象閏月。五歲再閏。故再扐。而後卦。天數五。地數五。五位相得而各有合。天數二十有五。地數三十。凡天地之數。五十有五。此所以成變化。而行鬼神也と有る。首尾の十七字を取れる文なり。（今引く繫辭傳の文、世に有る本等に異なるは、此の文もと疑なく、太昊氏の策儀を傳へし古說なるを、今本等は、周人の加筆あれば、其は删り去て、予が訂正せる文なり、其の說は三易由來記に記せるを見るべし。）さて此の大衍の數を。まづ引出たるは周曆に。律度を強會せる張本にて。取總たる文義は。鄭玄が注本に。大衍之數五十。所以成變化。而行鬼神也。（行猶閼也、）日十者五音也。（甲乙角也、丙丁徵也、戊己宮也、庚辛商也、壬癸羽也、）辰十二者六律也。（六律益六呂合二十二辰也、）星二十八者七宿也。（四方各七、四七二

十八周天也、）凡五十所以大閡レ物而出レ之者也。（鄭亦出也、日辰七宿繫於易象也、）と有る如くなるが。大衍之數五十を。日辰星の數を。合衍せる數と爲たるは固より本文の誣會なり。（然るに鄭玄、こを誣會としも知ざりし故に、かくは注せるなり、）抑大衍數の五十なる由は。河圖の五十五數なる。中宮の五を以て。八卦を作れるに。其の大きに衍れる數五十あり。此を蓍策に用ふる故に。大衍之數と謂ふに社有れ。右の諸數を。合衍せる義には非ざる物をや。此等の由よし、周暦を作れる殷の西伯豈知ざらむや。知りつゝかく他事を強會せるを。孔子も其に左袒せる物なり。（乾鑿度は、多く孔子の易說を集記せる書にて、今の本文も、孔子曰とある語中に有れば、鄭玄まづ、大衍の古義を愆りて、右の如く注し、後世の學者また一人も、此の衍字を、合衍の義に取ざる者は有こと無し、委くは三易由來記に論へるを見るべし、）陽柝九、陰柝六云々は。是また繫辭傳に。乾之策二百一十有六。坤之策百四十有四。凡三百有六十。當期之日。二篇之策。萬有一千五百二十。當萬物之

數也と有るを相發して辨ふべし。其は陽柝は。乾之策と云ふに同じ。陰柝は坤之策と云ふに同じ。（柝は、說文に、判也、本作レ㭊と云ひ㭊を判也、从レ木𣂺聲と見えたり、）陽柝を九と云ふは老陽の數。陰柝を六と云ふは老陰の數なり。陰陽の爻數。共に百九十二づゝ有る故に。各とは言へり。是の二を合すれば。實に三百八十四爻あり。萬一千五百二十柝と云ふ數は。まづ繫辭傳に。乾之策二百十六云々と有るは。彼の筮法の一爻三變して。乾の六爻各々三十六を得れば。積二百十六と爲るを。其の本數の。百九十二に乘ずれば。六千九百十二策となり。坤の六爻各々二十四を得れば。積百四十四と爲るを。其の本數の。百九十二に乘ずれば。四千六百八策となる。其の乾坤二篇の策を合せて。萬一千五百二十と爲る由なるが。本文に。萬一千五百二十柝と有るは。乃ち是の數なり。（然るに、彼の繫辭傳なる右の文は、西伯始めて四十九策を用ひて、十有八變の筮法を作れる時に、書加へし文なること、三易由來記に、委曲に考證せる如くなれば、今の本文も、其の作意を本とせる說なる

こと著なり）故卦當歳と云ふより以下は。下の求主歳卦備に見えたるが如し。

【十】天道左旋。地道右遷。二卦十二爻。而期一歳。乾坤並治。而交錯行。乾貞於十一月子左行。陽時六。坤貞於六月未右行。陰時六。成其歳次從於屯蒙。屯貞於十二月丑其爻左行。蒙貞於正月寅。其爻右行。歳終則從其次卦。泰否之卦。獨各貞其辰。共北辰左行相隨也。

此の條は。古く天道左旋。地道右遷。と云ふ事の有るに本づきて。一歳に陰陽二卦つゝ。配當せる由を述て。其の例を出せるなり。◯二卦十二爻。而期一歳とは二卦の爻十二あるを。十二月に配して。一歳を期る由なり。（乾坤並治而交錯行とは。まづ其の初歳は。乾坤の二卦並び治めて。下文の如く。交左右に錯行する由なり。◯乾貞於十一月子左行云々は。鄭玄注に。貞正也。初爻以此爲正。次爻左右者。各從次數之。一歳終則從其次。屯蒙需訟也と云へるが如し。◯泰否之卦。獨各貞其辰云々。鄭玄注に。貞其辰。謂泰貞於正月。否貞於七月。北辰左行。謂泰從正月至六月皆陽爻。否從七月至十二月皆陰爻。泰否各自相從也とあり。

【十一】法於乾坤。三十二歳期。而周六十四卦。三百八十四爻。萬一千五百二十析。復從於貞。歷以三百六十五日四分度之一爲一歳。陽以三百六十析當期之月。此律歷數也。五歳再閏。故再扐而後卦。以應律歷之數。

法於乾坤とは。前條の乾坤並治。而交錯行云々と有る。乾坤の行りに法ひて。三十二歳期に。六十四卦みな周り竟て。復乾坤の貞に從ふ由なり。歷云々と言ふより以下は。聞ゆる儘の文なるが。此を律歷の數に應ずと言ふは強言なり。其の由は下に推歩するを見て知るべし。（但し此の章の五歳再閏、故再扐而後卦と有るも繫辭傳の文なるが、卦

の字を諸本に掛に作り、諸注家みな其に從りて注せるを、今の文に卦と作るは、古本の眞面目にて、說文に引たる文にも、卦と有るに符ひて、此ぞ是の周曆說中の賜物の一なる。）

【十二】曆元名握先紀。日甲子。歲甲寅。求卦主歲術曰。常以太歲紀歲。七十六爲一蔀。二十蔀爲一紀首。卽置積紀首歲數。加所入蔀歲數。以三十二除之。餘不足者。以乾坤始。數一卦。而得一歲末算卽主歲之卦也。

是の曆元は。周曆の曆元のみに非ず。天地開闢の大曆元にして。卽ち盤古氏の元年なるが。其の日は甲子。歲は甲寅なりし事既に說たるが如し。握先紀とは。本書の鄭玄注に。握先爲曆始名。言無前也。と云へるは然る言にて。天地開闢の日甲子。歲甲寅を曆元に立つる故に。是より前なき義を以て。かくは名けしなり。（天地の開闢は、甲子冬至と云ふこと、尙書中候に見え、其の歲の甲寅なりし事も、諸書を參考して知るれども、斯の如く日甲子歲甲寅と、詳に開闢の曆元を傳へし文は、此の書を除ては有こと無し。然れば是また周曆說中の大なる賜物にぞ有ける。）○求卦主歲術曰は。六十四卦の。各々に主る歲を。推求むる術と云ふ義は勿論にて。其の術に。常以太歲紀歲と云ふより以下は。般西伯姬昌が語を孔子の引て著せるなり。其は何を以て知るなれば。是より十七條迄。一連の文なるが。其の十七條の首句に。今入天元云々と有る今字は。其の當今を云へる語なるに。況て昌以西伯受命と云へる語あり。此は姬昌以來の周人の語格なるを以て所知たり。（また是に據りて思へば、上件三條の孔語は、姬昌が曆術を受傳へて、そを演述せる說なる事も疑なくなむ。）さて易と曆とは左右の如く。凡人の配當を俟ずして。歲節日時に。自然に密合せる道なること。太昊古曆傳に著せる如くなるを。是の主歲卦を求むる術はしも。其の古義に因らず。姬昌が狡意をもて。六十四卦の卦爻析を。強ひて配せる擬術なり。（然るに此の術、早く皇國

に傳へて、古き年代記の類、近くは循環暦と云ふ物に、其の式を載せれど出所なく、古暦便覽の舊刻、中根元圭が凡例に、凡以二六十四卦一每年配當之說、未レ考レ所レ由來一、然不レ加二自己妄意一、只隨二舊例一而已と云ひ、再刻の本には、推古天皇御宇、聖德太子演二說之一矣、見二于先代舊事本記一と云へり、然れば此の人も乾鑿度に其の本術ある事を知らず、舊事大成經の僞書なる事をも知らで據とせしなり、偖てしか其の出所を知ざれども、舊く世に流布するからに、俗の日者ら陰陽家など、皆此の僞術に本づきて、歲の災厄、人の年卦の吉凶を斷わるに、妖言誣說の多かるを見るに得堪ねば、今周暦を論ずる因に、其の本來をも知らしめむと欲るなり、見む人煩はしとて等閑に見過すこと勿れ）○常以二太歲一紀レ歲云々。太歲とは太歲星を云ふこと勿論なるが。紀歲は。其の歲星の周りに因りて。六十干支を以て號くる故に。歲々の六十干支を。直に太歲と云ふ例なり。文の意は。每歲の干支を以て歲紀と爲す由なり。○七十六爲二一蔀一。二十蔀爲二一紀首一を。本書に七十六爲二一紀一。二十紀爲二一蔀首一と有れど。後の誤寫なれば改めつ。其は七十六歲を一蔀と云ひ。二十蔀千五百二十歲を。一紀と云ふこと。古暦の大法なればなり。下の文も之に效ふべし。（前には、古法に七十六歲を蔀と云ひ、二十蔀を紀と云へるを、姬昌が意と、其の名目を轉倒せるならむと思へれど、未に戊午蔀と有るは七十六歲を蔀といふ古法の如なれば、此の蔀紀轉倒せるは、後の誤寫なること疑なし、假令此の考へ然らずとも、總てかゝる類の名目は、しか二樣に云ひては、末つひに甚き混亂の出來ればなり）○卽置二積紀歲數一云々は。第十七條に。天元甲寅より。西伯が受命の歲まで。二百七十五萬。九千二百九十八歲と有るを。二十蔀一紀の。千五百二十年つゝにて除へは。千八百十五紀二百七十五萬八千八百年の除り。四百九十八年あり。此を蔀法七十六にて除へば。六蔀四百五十六年の餘り四十二年あり。（謂ゆる六蔀は、般湯王が暦法を立たる、甲寅元の甲子蔀に始まり、癸卯、壬午、辛酉、庚子、己卯、凡て六蔀四百五十六年にて、餘四十二年は卽ち戊午蔀にかゝるなり、）積紀と

は。此の千八百十五紀を云ひ。所入蔀歳數とは。姫昌が當時。戊午蔀に入たる迄の歳數にて。四百九十八年なり。千八百十五紀の歳數と合せて。二百七十五萬。九千二百九十八歳なるを。三十二にて除ふなり。（三十二を以て除ふ故は、六十四卦を、一歳に二卦つゝ配すればなり。）其は三十二を。八萬六千二百二十八にて。二百七十五萬。九千二百九十六歳除かり。二年餘る。餘不足の者とは即ち是なり。餘不足者。以乾坤始云々。其の餘れる二年は。戊午蔀の四十一年。四十二年に當るを。其の四十一年は。乾坤の二卦に當り。四十二年は屯蒙の二卦に當る。謂ゆる末算とは即ち是にて。乃ち其の歳の主歳卦なるが。此は紂王が三十三年辛未の歳にて。即ち西伯が謂ゆる受命の歳なり。（故其の辛未歳より、四百四年目なる甲寅歳は、周惠王が十年、わが神武天皇東征の初年なり、其の四百四年に、屯蒙より次々二卦つゝ配もて行けば、東征甲寅歳は損益に當り、其の元年辛酉歳は豐旅の二卦に當れり、然るに彼古暦便覽循環暦など、皆其の辛酉の歳に、困井の二卦を配し始めて、次第に配しつゝ今に至れり、故訝くて、循環暦なる推法を檢るに、此の本文とは、粗異れる推法なるは、早く傳へ訛れる物か。然れど此は、彼も此も共に、古暦古易に用ふる事なき譌術にし有れば、斯までは論はでも在りぬべくこそ、）

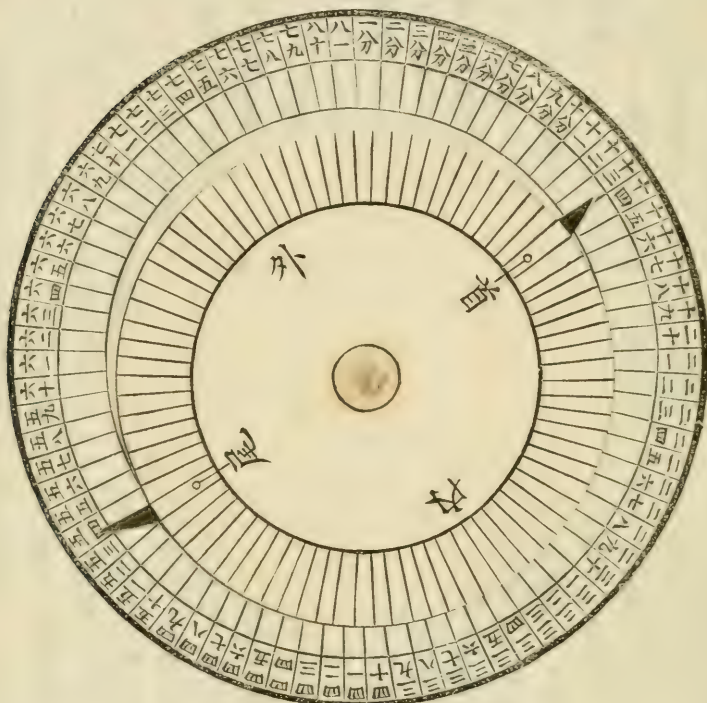
【十三】即置一歳積日。法二十九日。與八十一分日四十三除之。得一命日月。得積月十二與十九分月之七。一歳也以七十六乘之。得積月九百四十。積日二萬七千七百五十九。此一蔀也。以二十乘之。得積歳千五百二十。積月萬八千八百。積日五十五萬五千一百八十。此一紀也。

此の一節は。即ち周暦の本術を著せる文なればこ殊に心を潭めて讀辨ふべし。其はまづ一歳の積日とは。既に云へる。三百六十五日四分日之一なり。四分日之一とは。古法に一日を三十二分と立たる。其の四分一と云事にて。乃ち八分なり（周代にも一年三百六十五日四分日之一、一日三十二分とい

ふ古法をば其の隨に用ひしこと、上の文に歷以三百六十五日四分度之一爲一歲と云ひ、易の通卦驗に、日法を三十二分と有るにて知べし、)〇法二十九日。與八十一分日四十三除之とは。月朔を求むる法にて。卽ち後世に朔策と云ふ者なり。(本書に、四十三を、四十二と有るは誤寫なり、今は前後漢書の歷志に依りて訂しつ、)抑是の八十一分と云ふ日法は。律の謂ゆる三統の中に、黃鐘の管の長九寸なる。其の九に九を乘ずれば。八十一なるを。其の曆の朔策に。用ひたる趣に謂るにて。此は姬昌に始まれる新法なり。(殷以前の古法は然らず、卽ち太昊氏の眞策にて、其の策は、九百四十分日の四百九十九を法として、除ふ策なること、古曆傳に委く論へるを見て知るべし、)さて文の意は。一歲の積日。三百六十五日。四分日の一を置きて。そを二十九日と。一日を八十一分に立たる其の四十三とを。求策の法として除ふ。これ一月ぞとなり。〇得一命日月とは。右の如くして。次々に月を得て。正月二月三月など云ふ名を命じ。その朔の。或は甲子。或は乙丑と云ふ干支を推して。日の名を命ずる義なり。〇得積月十二與十九分月之七。一歲也とは。一歲三百六十五日。四分日の一より。十二月を除へる餘り。一月を十九に分たる。其の七分ある由なるが。此の數違へり。然るは先。八十一分の日法をもて。一歲三百六十五日。四分日の一を算するに。二萬九千五百八十五分二半あり。(そは十日の分、八百十分なれば、百日の分八千百分、三百日の分、二萬四千三百分、六十日の分、四千八百六十分、五日の分四百五分、一日を四分せるが、二十分零二半なり、總て二萬九千五百八十五分二半となるめり、)右より十二月の分。二萬八千七百零四分を除へば。餘り八百八十一分二半あり。此を日に直して。十日と七十一分二半なり。(そは一月二十九日、八十一分日の四十三にて、一月の分二千三百九十二分、これに十二を乘ずれば、二萬八千七百零四分とぞ成るめる、)然るに其の餘りを。十九分月之七と云ふときは。一月の分。二千三百九十二分を。十九に分たる七なれば。此を日に直して。十日と七十一分。二六三一五八弱となる故に。此の數違へりとは云

ふなり。其は十二月の分を算して餘れる數と。かく謂ふ數と密合せずは。有まじき道理なればなり。(十二月の分を算して餘れる二年と、此の二六三一五八弱と、いと少けき相違には有れど、其の少違なるも、一年に一秒三分一五八弱なれば、一蔀七十六年にて一分違ひ、八十一蔀、六千百五十六年にては、八十一分に滿れば、則一日の違となるめり、末つひに大違となること、是れにて知るべし)然れば此の餘りは。諦に得二十日七十一分二年一と云べきに。古法の。餘十日。九百四十分日之。八百二十七を得ると謂ふに趣を易へ。月行を十三度。十九分度之七といひ。或は十九年に七閏ある由などを思ひて。十九分月之七とは云へるならむ。其はとまれ。此の十九分月の七を積て。三年に一閏月を置き。十九年に七閏。七十六年に。二十八閏を爲すと云ふ意なること。古曆の法に准へて知るべし。(そは下の積月九百四十と云ふ數は、十二月に、七十六を乘れば、九百十二月なるに、二十八閏を總たる數なればなり) ○以二七十六一乘レ之云云。此れ一蔀也とは。一歲の積月十二と。餘り十九分月の七に。七十六を乘て。積月閏共に九百四十。積日二萬七千七百五十九を得るを。一蔀と爲すと云ふ義には有れど。其の古法の。九百四十分日の。四百九十九と云ふ眞策を用ひてこそ。然る數は出れ。八十一分日の四十三の策にては。絕て此の數の出來る事なし。抑古法の朔策は。實に本文の如く。積月積日を得て。其の第七十六年の冬至に至るごとに。毫秒も不盡なく推步し切られ。終古に其の弊なき法なるを。八十一分の策は然らず。古法の九百四十分と並べて。推驗むるに一蔀に一分の不足あり。是を以て八十一蔀に。一日の不足を生せり。(是を以て、下に姬昌が謂ゆる、積歲二十九萬一千八百四十と云ふには、三千八百四十分の不足にて、此を日數に約すれば、四十七日と二十七分日の十一の不足なり)故茲に一術を巧夫して。この旋式を制作し。頻にこを循環して驗むるに。其の揣策いと諦に知られたり。其はまづ此の地盤は。一晝夜十二時を。子の中より始めて。法の如く八十一分せるなり。然れば此を二十九周にて二十九日なり。其の三十日に當る日は子の中

なる系へ。天盤の首字ある所の針先を當れば。乃ち第一分より四十三分まで內となる。是二十九日八十一分日の四十三にて。乃ち小の月なり。次は四十三。四十四の間なる系へ。首字の針先を當て。二十九周すれば二十九日なるが。其の三十日と云ふ日は。四十四より子を越して。五分まで內となる。是大の月なり。(但し推步の煩しきを厭はむには、二十九周する事を止めて、唯心にのみ、二十九周せりと思ひ定めむも、亦害なくこそ。)次は六分より。四十八まで內となる是小の月なり。次は四十九より子を越して。十分まで內となる。是大の月なり。二十九日。八十一分日の。四十三と云ふ日分は。每月同けれど。唯子の中刻を越すと。越ざるとに依りて。大小の別る事なり。此の末幾月にても。此に例ひて推步すべし。(蓋こは、此の推法のみに非ず、古曆の二十九日、九百四十分日の、四百九十九分といふ月策も、其の日分こそ異れ、其の推步の術に於ては、異なきこと、古曆傳を見て知るべし。)さて如此推步しもて往くに。初月の小より。第八十一月の小まで。古曆の大小に異る事なきを。其の第八十一月は。三十九分より。八十一分まで係りて。其の分皆盡る故に。第八十二月は。また更に小月より始まること。右に同じければ。第八十一。第八十二の兩月。まづ連小となり。七十六歲九百四十月の間に。古曆にては大なる月の。十一箇月小と變れば。積日二萬七千七百五十九とは云へど。十一日足らず。積月九百四十と云へど。其の第九百四十に當る月の。朔と云ふ日に。空なる月を見れば望に近く。節悉また隨ひて亂るれば。絕て用ひ得まじき拙策なり。(古曆の推步にては、小大小大と連きて、十六七箇月め每に必ず連大と成れど、連小と云ふ月は、絕て有こと無き故に、大四百九十八月、小四百四十二月、一蔀總て九百四十月にして、日數二萬七千七百五十九を得て、少も餘分は無れど、八十一分の策にては、大四百八十八月、小四百五十二月となる故に、前後の本文に謂ゆる積日は、絕て得ること能はざるなり、意を深めて考ふべし。)斯て後。また熟々想ふに。姬昌が例の狡黠なるに。此の如き拙策の。實に應ざる事をし。知らで在べき事とも所

八十一分律曆

思ねは。尚故こそ有らめと考ふるに。此の人始めて。古暦を改革するに就て。律の三統など。尤々しき説を立て。此の朔策を設けつれど。心には厭まで。此策の實に合ざる事は知れる故に。竊に古暦の積月積日を盗襲して。己が朔策に評會して。世を欺けるには非じかと心着て。また更に本文の義を攷ふるに。右の法をもて一歳を得たるに。七十六を乗じて。積月九百四十。積日二萬七千七百五十九を得たるを一蔀とし。其の七十六に二十を乘じて。件の積歳積月積日を得たるが。一紀なる由なれば。毎歳に此の分をもて推すに非ず。たゞ一歳を推して。其の一推歩を乗ずる耳にて。此の暦を用ふる限り。幾歳を經るとも。是の乗法の外なき趣なり。(故是を以て、其の積月積日の數共に、古暦の數を用ひむも、事に於て害無れば、乃ち竊みて、己が新暦の數と爲たる也けり。)然れば二十九日。八十一分日の四十三と稱せる月策は。たゞ口實のみにて。其の本術は古法なるが。其の正朔を變じ。かつ世々に晦朔閏月などを。進退消息せしむる迄の相違なりけり。其は姫昌が此の暦法を作たる當時は。上下に註ふ如く。古暦の戊午蔀なるに。下なる昌が語に。今入二戊午蔀一四十二年。云々と云へるを以て。古法の蔀名を襲用せること知らる。此の蔀名どもを襲用する上は。其の本術の古暦法なる事は。更に論ひを俟まじき物なり。(然るを漢代に太初三統の二暦を作れる徒この義を得知らず、此の周暦の朔策を祖法と爲て、なほ殊にいと煩しき僻算を設けて、推歩を誤れるより、後人次々に其の誤りを承て、古法は遂に廢たりけり、然れど末に引く、尚書堯典の正義に、六歴與二周髀一皆云ふとて、毎月二十九日、九百四十分日之四百九十九云々と云へり、六歴とは、黄帝、顓帝、夏殷周魯の暦を謂ふこと、後漢の歴志に所見たり、然れば、其の歴書どもの、唐代まで傳はりし事しるく、且漢以前の諸暦、すべて同策同蔀なりし事も明白に知られ、八十一分日の四十三と云へる策の實用ならざりし事も、いと諦に所知たりけり。)偖また後漢の歴志なる。蔡邕が議中に。周代の歴元は。丁巳を用ふと見えたるを、前には必得がたき事に思へるを。今しも攷ふるに。此は歳

月の議には非ず。節蔀の元を謂へり。そは姫昌が作暦の當時は。戊午蔀にて。其の初年は庚寅なるが。其の歳首朔旦冬至の。戊午なること勿論なり。(此の庚寅歳は、殷帝乙が元年、西伯昌が三年と云ふ年なり)然るを一日前に引上げて。丁巳日をもて。朔旦冬至と定めて。節蔀の歴元と爲たるを謂ふ。そは何を以て知るなれば。既に論ふ如く。春秋僖公が五年は。周惠王二十二年丙寅歳にて。壬子蔀の初年なれば。其の歳首は。壬子の朔旦冬至なるを。是の歳の左傳に。春王正月。辛亥朔日南至と有り。然れば姫昌が當昔。戊午を一日引き上げて。丁巳と爲たる以來。その法を易ざること著明なり。尙言はゞ。昭公二十年己卯の歳の傳に。春王の二月己丑。日南至すと有るも。辛卯蔀の第四章首にて。庚寅の朔旦冬至なるが。一日退きて己丑の冬至なり。(然るを左傳に、正月と云はで二月と有るは、此の前年の十二月に閏あるを、置過りて五月と爲せる故に、正月は却りて二月と爲れるなり、凡て古暦は、朔旦冬至ある月の前月は、必ず閏月にて、一蔀に朔旦冬至四つゝ有り、そは一章十九年を、四章總たるが一蔀にして、毎十九年の歳首は、必ず朔旦冬至に相當すれば、周の年代凡て十二蔀に渉る間に。朔旦冬至すべて四十八ありと知るべし)冬至のかく一干支退ける上は。其の餘の節蔀の。隨ひて一日退けること。亦更に論ふ迄も無き事なり。然も有らば。姫昌が作暦の當時に節氣の行りに。しか一日の差を生ぜし事を。測量し得て物せる事かと言ふに。然には非ず。此の擬聖の僻として。天下の耳目を新にすとか何事も。先代まで用ひし故實を改めて。古聖に勝れる由を。世に示さむ事を好む性なりし故に。天下の萬事の起本たる。易曆ともに古法を變じて。杜撰に然る新法を設けし物なり。然れば周曆の退蔀は。いとも無益の事にこそ。(然るは、天地開闢の當昔より、漢代に至るまで、唯一暦にて、氣の運行に、一刻も差は有ること無く、漢の中世よりして、始めて蔀朔に差を生じたれば、漢以前に退蔀を立るは、都て眞暦を知ざる者にて、天皇太昊二氏の罪人なり、其は太昊古暦傳に委く論ふ旨を能く見む人は、自づから曉りなむものぞ)

【十四】更置二一蔀一。以二六十四一乘レ之。得二積日百七十七萬。六千五百七十六一。又以二六十一乘レ之。得二積紀百九十二一。得二積蔀三千八百四十一。得二積歳二十九萬。一千八百四十一。以二三十二一除レ之。得二九千一百二十周一。此謂二卦當レ歳者一。

一蔀とは七十六年なり。此の日數二萬七千七百五十九日なること既に云へり。是に六十四を乘れば。四千八百六十四年にて。其積日百七十七萬六千五百七十六日と成るなり。〇又以二六十一乘レ之云々。上の四千八百六十四年に六十を乘れば。二十九萬千八百四十年なり。此を千五百二十にて割れば。百九十二紀あり。〇得二積蔀三千八百四十一とは。二十九萬一千八百四十年は。三千八百四十蔀なる由なり。〇得二積歳二十九萬。一千八百四十一云々とは。此の積歳の初年を甲寅として。乾坤二卦を配て。三十二にて除へば。六十四卦九千百二十周して。また乾坤に復る由なり。(但し此は、上第十二條の求術と同じ術にして其の法や丶異れる耳なり、然れば此は彼の條の又法と云ふべくこそ、)

【十五】得二積月三百六十萬九千六百月一。其十萬七千五百二十月者閏也。即三百八十四爻除レ之。得二九千四百周一。此謂二爻當レ月者一。

二十九萬千八百四十年は。三千八百四十蔀なるを。一蔀九百四十月として。是に三千八百四十を乘れば。三百六十萬九千六百月なり。然るに。一蔀九百四十月の内に。二十八は閏月なれば。三千八百四十蔀にては。十萬七千五百二十の閏なり。〇即三百八十四爻除レ之得二九千四百周一云々。(諸本に百周の間に、日之卄と云ふ三字あるは、衍文なれば删り去つ、)其の三百六十萬九千六百月を。三百八十四爻にて除へば。九千四百周するなり。(其は假令ば、神武天皇元年辛酉歳は、二百七十五萬、九千六百十八年なれば、積月二千四百十三萬二千百十七月あり、之を三百八十四爻にて除へば、八萬八千八百八十五周の餘り、二百七十七月有り、之を乾より始めて、次々に配すれば、困卦の初六

に至りて、二百七十七、爻を盡す、乃ち困の九二を以て、去年十一月とし、六三を十二月、九四正月、九五二月、上六三月、井の卦の初六四月、九二五月、九三六月、六四七月、九五八月、上六九月、革の初九十月となる、是より後の歳々も之に准ふべし。）偖この爻當レ月と云ふ法。道理に於きて通せぬ事あり。然るは凡て閏月は中氣なき故に。前月に屬する例なるに。右の積月は。閏を込たる數なり。然れば假令。爻を月に當るとも。閏は除きて配爻の數に入まじき道理なるを。娜呂その義を思はず。本月と別なく並て配爻せるは。疏漏と言ふべし。

【十六】得二積日万六百五十九万四千五百六十一。以二万一千五百二十析一除レ之。得二九千二百五十三周一。此謂二析當レ日者一。而易一大周。律歷相得焉。

本書に以字を八に誤れり。今之を改めたり。然るは。上第十四條に。積歲二十九萬。一千八百四十とある。其の積日は。一萬零六百五十九萬。四千五百六十日なり。此を析數の萬千五百二十にて除へば。九千二百五十三周を得ればなり。蓋し曆は。一蔀七十六年。一紀千五百二十年。易は六十四卦。三百八十四爻なるを。强ひて相配して。互に齊整しめむ爲にかく爲し者なり。（是も假令ば神武天皇元年、周恵王十七年辛酉歲は、天元より二百七十五萬、九千六百十八年に當れば、積日十億零々七百九十五萬、零四百七十四日半あり、之を萬一千五百二十析にて除へば、八萬七千四百九十五析の餘り、八千零七十四日半あり、之を其辛酉歲首冬至、己酉日より次第に配して、其の日の析と爲す由なり、是より後の歳々も、之に准へて知べし。）さて二十九萬一千八百四十年は。元法四千五百六十年を。六十四なる故に。此の日數實に萬六百五十九萬四千九百六十日有れど。其は九百四十分日の。四百九十九の日法を用ひてこそ。然る不盡なき日數は出れ。八十一分日の四十三と云ふ日法にては。既に論ふ如く。一元四千五百六十年に。六十分の不足なれば。二十九萬一千八百四十年に都ては。三千八百四十分の不足にて。此を日數に約す

れば。四十七日と。八十一分日の三十三の不足なり。旋式術にて合ざる事も。上に論へるが如し。然るに律歴相得焉と云へるは。誣妄の語ならずや。(○篤胤いと稚かりし時に、本生の父の、庭訓に聞たる旨ありて、今日まで算術を知らず、其は人の三と五とを合せては何と問へば、速に、八と答ふる事は知れども、其を算盤には、いかに置くと云ことは、習はざれば知らず、唯に九々と云ふ事を闇記せる耳なり、是をもて、上の件々に論へる數說どもは、皆謂ゆる心算を以てこれを定め、然して後に、善算の門人らに問ひて、違ひ無しと云ふを、頼みに記せるなり、然れど、もと心算より出たる事なれば、猶少の相違有らむも知らず、見む人もし、己が失算を見出たらむには、告知しめ給へとなむ〔)〕抑律數はも。四正四維の八風より起る。音聲の起原にこそ有れ。暦には然しも由なき事なるを。周暦に始めて。右のごと強會せるより。後生凡て。西伯父子らの始めし事をば。何にまれ微妙の理ある事と信奉する習なる故に。淮南の劉安が俊秀なるも。其の天文訓にこれを用ひ。司馬遷。鄧平。洛下閎らも襲用して。其の太初歴を。八十一分律歴と稱し。劉歆が三統歴。殊にその說を主張し。班固が律歴志を作れるも。亦其の說を本と爲しかば。況て其の後の世は更なり。然れど予は。遠く其の源を探ねて。暦法に於きて。律說は都て採用する事なし。見む人異むこと勿れ。(なほ此等の事ども委くは太昊古暦傳に論へるを見るべし、)

【十七】今入天元。一百七十五萬。九千一百九十八歲。(本作八十歲誤也、今改之)昌以西伯受命。入戊午蔀四十二年。本誤作二十九年。今改之)伐崇侯。作靈臺。改正朔。而布王號於天下。受籙應河圖。

今とは。上の件周暦及び。主歲卦を求むる術を作れる。姬昌が當今を云ひ。入天元とは。天地開闢の。日甲子。歲甲寅の。暦元に入りたるを云ふ。其の歲より姬昌が受命の歲に至りて。斯計りの積歲なりと云へるにて。此は固より妄誕なるが。(其よしは下に委く論ふを俟つべし、)其ながらに。古年歷を推考ふるに益有れば、今其の由を論はむ

に。先是の九十八歳と。四十二年とを。本書に。八十歳。二十九年と有るは。共に轉寫の誤なり。其の由は。まづ受命とは。姫昌固より殷の祚を傾けむと欲る。隱謀有りしかは。其の君紂王之を察りて。其の二十三年と云ひける歳に。羑里に囚へ。二十九年と云ふ歳に之を釋し。三十三年辛未歳にっ征伐を專にする事を錫せり。此を姫昌が受命の元年と云ふ。此は竹書紀年に出たる年歴の正説なり。(史記を始め諸書に、此等の事どもは出たれど、其の年歴は詳ならず、前漢の歴志に、劉歆が考へたる說は有れど、據るに足らず、是の紀年は、晉の太康二年に、周代の古墳を發きて得たる書にて、史遷を始め、漢儒らの知ざる物なり、世に之を疑ふ人も有るは、史歴の學に疎き故なり、但し此は近く渡れる平津舘叢書中の本を證本に取るべし。)さて紂王が前代。帝乙と云へるが元年。庚寅歳より戊午蔀に入りて。姫昌が受命の年は。乃ち是の蔀の四十二年に當れり。然れば二十九年と有るは。四十二年の誤寫なること論なく。是四十二年の誤なる上は。總數の八十歳。又九十八歳の誤りなる

こと言ふも更なり。故今の本文。已が決斷を以て。右の如く訂正せり。(其は上の件、求主歳卦術曰と云ふより、此の章まで一連きの文にて、此の術を作れる姫昌が當昔は、然る不算なく記しけむを、後人の寫し傳ふる間に、右の如く謬りし物なり、漢魏以來の學者、凡て年歴の推法を知らず、鄭玄が注本、及び其の後の校本どもにも、右の誤りに心著ざりし故に、殷周の間の年歴、今日に至るまで、詳ならす過來れり、いとも傍いたき事にこそ。)備しか訂正し竟て後に。此の謂ゆる二百七十五万九千二百九十八歳を。既に第十二條の考說に引きて計せる如く。二十蔀一紀の千五百二十年づつを以て除へば。千八百十五紀にて。年數二百七十五万八千八百年の除ひ餘り。四百九十八年あり。故また此を蔀法七十六にて除へば六蔀の年數。四百五十六年の除ひ餘り。四十二年ありて。其の末年は謂ゆる受命の歳に當るなり。(其の千八百十五紀、二百七十五万八千八百年を、元法四千五百六十年にて除へば六百五元にて、其の末年は夏桀王が二十二年癸丑歳にあたり、其の謂ゆる六蔀は、

桀王が二十三年、殷湯王が暦法を治めたる、天紀上元の首、甲寅歳の甲子蔀に始まり、癸卯、壬午、辛酉、庚子、己卯凡て四百五十六年にて、餘り四十二年は即ち戊午蔀に係りて、其の初年庚寅歳は、殷帝乙が元年、また西伯が其の父季歴の世を繼たる元年なる故に、其の謂ゆる受命の元年は、紂王が三十三年、西伯が代の四十二年辛未歳にして、かつ戊午蔀の四十二年に當れり、其の委き趣は、別に著せる夏殷周年表の圖を見て知るべし）斯て後にまた思ひ出れば。後漢の歴志に。靈帝が時に五官郎中馮光。沛相陳晃と云へる二人が上書して。當代の四分歴に。庚申元を用ふるを非とし。甲寅元を用ふべしと論へるに。群臣に命じて詳議せしむる時の。蔡邕が議中に。元命苞。乾鑿度。皆以テ爲ス下開闢至リテ獲麟ニ。二百七十六万歳ト上。而光晃以テ爲ス下開闢至リテ獲麟ニ。二百七十五万九千八百八十六歳ト上。と云る文あり。（元命苞の全書今傳はらねば知らず、乾鑿度の今本には、本文の如くこそ見えたれ、二百七十六万歳とはなし、蔡邕が說心得がたし、）抑是の蔡邕が說。また馮光陳晃等が說共に。もと同原に出て。末にかく派れし說なること疑無れば。まづ試に蔡邕が用ふる。二百七十六万歳と云へる說を取りて獲麟の歳より上。受命の歳の次年。壬申歳まで五百八十九年を引き。（如此する由は、二百七十六万歳と云へるは、開闢より獲麟の年までの年數なる由なれば受命の次年より獲麟までの年數をまづ省き捨ずては、開闢より受命までの年數に符ざる謂なればなり）二百七十五万。九千四百十一歳と爲れるを。右の如く紀法をもて。千五百二十年つゝ千八百十五紀。其の年數二百七十五万八千八百年除へば。其の餘り六百十一年あり。是よりまた六蔀四百五十六年除ひて。四十二年餘るときは。今の本文と符合するを。六蔀除へば百五十五年餘る故に。受命の歳に百十三年多かり。然れば蔡邕が用ひし。二百七十六万歳と云ふ說は。其の本色に非ず。（そは六百十一年は、八蔀六百八年と三年にて、其の八蔀は、甲子、癸卯、壬午、辛酉、庚子、己卯、戊午、丁酉の蔀を越して、其の三年は丙子蔀に係ればなり）故また次なる馮光陳晃等が傳へし。二百七十五万九千八百八十六歳

と有る說を取り。右の如く受命の次年壬申歲より獲麟に至る五百八十九歲を引きて。二百七十五万九千二百九十七年と爲れる中より。例の千八百十五紀。二百七十五万八千八百年と。六蔀四百五十六年を引くに。四十一年餘りて戊午蔀に係る受命の歲にたゞ一年足らず。然れば此は蔡邕が議に據りに。今の本文に符へる說なり。(又これを以て、今の本文を、予が訂正せる說の、誤らざる事をも、相證すべき事にこそ。)然るを光晃ら。蔡邕に甚く難斥せられて。答ふる辭も無り。は論者議者共に。此義に昧かりし故なり。(なほ宋の世に記せる、命期經と云ふ物に、自二天元甲寅一至二本朝承元四年庚午一積年二百七十六萬、一千六百三十七と有り、また此方にも、小泉松卓が循環曆に、周易本卦算術云とて、假令正德三癸巳歲卦、求二豐旅一則自二天元甲寅一至二正德三癸巳一其積本置二二百七十六萬二千一百四十一云々と云へる說あり、共に同說の分流なれど、煩ければ今は推算を加へずなむ。)さて是の戊午蔀の四十二年は。辛未歲にて紂王が世の三十三年なるを。己が受命の元年と稱して崇侯を伐ち。靈臺を作り。正朔を建子の月に改め。王號を天下に布たる事は受錄の河圖に應ずる。天命を受たる故ぞと言へる意なり。(崇侯は、名を虎と云ひし人にて、史記に所見たる如く、姬昌が陰謀を疾く知りて、紂王に告たるを憎みて之を伐ち、靈臺は、王者ならでは作ざる制なるに、之を作り、殷の正朔を奉ぜず、別に其の正を改め王號を天下に布告せるなど、皆其の君紂王を蔑如せる僣上の所爲なり。)斯て其の受たりと謂ふ錄命河圖は。然る僣上の所爲を。天命に託する口實の僞物なり。其は受錄の事は。尙書帝命驗に。季秋之月。甲子有二赤爵一銜二丹書一入二于酆一止二于昌戶一。其書云。敬勝レ怠者吉。怠勝レ敬者滅。義勝レ欲者從。欲勝レ義者凶。凡事不レ强則枉。不レ敬則不レ正。枉者廢滅。敬者萬世。以レ仁得レ之。以レ仁守レ之。其量百世。以二不仁一得レ之。以レ仁守レ之。其量十世。以二不仁一得レ之以二不仁一守レ之。不レ及二其世一と見え。(古微書に、此の文を諸書より引きて、三章擧たるが、各々小同大異なり、また帝王世紀の文を擧たるには、昌拜稽首受二其文一、要曰、

姫昌蒼帝子、亡殷者紂王、と見えたり、）洛書靈准聽に。有鳳皇。銜書游文王之都。書文曰。殷帝無道。虐亂天下。皇命已移。不復將久。靈祇遠離。百神吹去。五星聚房。昭理四海など所見たる類にて。史記を始め諸史に。周代赤雀の瑞と稱する事本是なり。（孫㲉云、周室丹書灼々七十八字、使在後世、則以爲魚腹書、狐鳴書、甚則爲天書之謂而已矣、古之世、帝王何其神、而民何其愚易惑也、然以雁帛書燕足書推之則此丹書亦、當時有幻術畸人、繫書赤爵、偶炫其奇、而此爵偶集于昌之戸、遂以爲神聖之符、未可知也、又不然、便佞臣皆能爲之耳、と云へるは實に然る言なり、其は王充論衡に、周取殷之時、太公陰謀、食小兒丹、教云殷亡兵到牧野、と有るをも思ひ合せて辨ふべし、）また姫昌が河圖を得たる事は。他書に未見當らねど。呂自かく言ふ耳ならず。乾鑿度に。今の本文の下に。孔子曰。洛書摘六辟曰。建紀者歲也成姫蒼。有命在河聖と見え。初學記に引たる尙書中候に玄龜負圖出。周公援筆。以時文寫之とも有れば。然る事も

有りつらめど。其はた幻術にぞ有けむ。（然るは孔子の此の語等も、姫昌父子が事には信を取がたし、其は此の父子が事とし云へば、一向に憲章する、孔子の常の意なればなり、）また其の靈准聽に。武王伐紂度孟津。中流白魚躍入王舟。王俯取魚。長三尺。目下有赤文。成字言。紂可伐。王寫以世字。魚文消。燔魚以告天。有火自天止于王屋。流爲赤烏。烏銜穀焉。天火流下應以吉也と有るも。同じ類の幻術にて。周代の謂ゆる赤烏の瑞とは是なり。（白魚とは決めて鯔魚なり、此は能く躍りて、舟にも入る魚なればなり、此の魚の躍り入れるに思ひ著て、武王自から然る幻をば行へるなり、其は王俯取魚と云ひ、王寫以世字、魚文消と有る文の趣にて知らる、また漢書の王莽傳なる種々の祥瑞も、みな同じ類の幻術と聞ゆるをも思ひ合すべし、）然れば周の文武父子が世の。祥瑞と云ふ物。みな此の類にて。其は殷滅びて周興る命期の由して。其の世は更なり、今の世までを誑惑せるなり。然して其暦法を作るに。易と律とを誣會せる趣。右の如くにて、古暦の都法を類して。

節烝晦朔を進退し。古易の乾東坤西なる。方位を亂りし故に。易曆ともに。姫昌よりして。其の古法は悉廢れ果たり。是を以て前に古易を考證し。今また古曆を考證するに。本文の姫昌が謂ゆる入天元より。受命の年に至る。二百七十五萬九千二百九十八歳と云ふ年曆は。昌が姦意の張本に設けし數にて。固より實數ならぬ事いと炳焉に知られたり。(其の古易を變じたる事の趣は、既に三易由來記に說明せれば、此には唯曆法に關かる事のみを論ふなり)其は謂ゆる入天元。天地開闢の日甲子。歳甲寅より。太昊氏馭戎の元年。庚申歳まで。四萬九百八十六年なるに。其の庚申歳より。姫昌が受命の年まで。千九百九十二年なれば。合せて僅に四萬二千九百七十八年。これ動なき實年數なりかし。(是の歳數の然る由よしは、既に春秋命曆序攷の第十二條に委く論へりき)然らば右の長年數は。何の用に設たる事ぞと云ふに。其の受命の年を屯蒙の二卦に配し。其より二十年のち。庚寅歳を。損益の二卦に當て。其の子の代に伐商せしむる。懸記に爲むと欲するに。易の爻析。律曆までを符合せしめて。予思が謂ゆる其事を神にし、民に信を取らむが爲に。始めて然る長年數の妄誕を作り構へて。世を欺ける物なり。(姫昌より以前に、右の長年數の古說の決して無りし事は、春秋命曆叙考を能く見む人は疑ひ有まじく、此の年數は、後に伐商せしむる未來記を種々作る、其の張本の設なる事も、自づからに知なむかし)其は屯卦の彖辭に。勿レ用レ有レ攸レ往。利ニ建侯一と懸け。蒙卦に匪ニ我求ニ童蒙一。童蒙求レ我と繫たるが。受命の年の創業に符合し。(凡て周易なる彖象の辭に、攸レ往の利不利、渉ニ大川一の利不利を斷れるは、皆伐商の懸記なるが、屯卦の辭は、未伐商の時至ざれば、建て君と爲りて、正朔を改め、王號を天下に布て、屯し在る意、蒙卦の辭は、其の時王を童蒙と觀て、我がかく受命せるは、我その童蒙に求めたるに非ず、童蒙の我を受命せしめ、王號を天下に布べき事を求めしなれば、別に王統を垂れ、孔子の蒙以養レ正聖功也と云へる如く、時の至るを待べき由の辭なり、淮南子に、文王爲ニ玉門一、築ニ靈臺一、以待ニ紂之失一と有るをも思ひ合すべ

し、（また武王伐商の歳に當る損卦の彖辭に。有レ孚元吉。无レ咎可レ貞。利レ用レ攸レ往と繫け。益卦に。利レ用レ攸レ往。利レ渉二大川一。と懸たるは。其の子が伐商の年を。決斷せしむる辭なるを以て悟るべし。是を以て其子姬發。果して此の二卦を配せる。庚寅歳をもて孟津を渉り。殷都に攻入りて。其君王を逆殺せるなり。（淮南子人間訓に、孔子讀レ易、至二損益一、未嘗不二憤然、而歎一、曰損益者、其王者之事歟、事或欲二以利レ之、適足二以害レ之、或欲レ害レ之、乃反以利レ之、利害之反、禍福之門戶、不レ可レ不レ察也とあり、此孔語は、家語にも所見て、少異あれど、己を損すれば反て益あり、己を益すれば反て損あり、是を以て、周には損を用ひし故に、大益を成し、殷には益を取れる故に、反りて大損を爲たる義に象れり、其の彖象の傳、及び繫辭傳に、此の二卦を論へるも、共に此の義なり、但し孔子の此の二卦の象に憤れる事は、其の身周代に生れし故に、周々と云ひこそすれ、其の出自を尋ぬれば、殷人の後胤なる故に其亡びたる歳の、主卦を見るごとに、然すがに心宜からず、憤然と歎きけ

むは、實然も有べき事なりかし。）抑其の周易は。かの羑里に。七歳因はれし間の作なれば。其の周曆も共に其の時の作なるを。世に布告せるは受命の歳にて。右の長年數の妄誕も。其の易曆を作れる時の說なること論ひなく。また是に就て思へば。命曆序の初發なる長年數を始め。實數に符ざる。諸書の年數は。皆此姬昌が妄說に權輿せる事も。亦更に論ひ有まじくなむ。（猶右の事どもは、三易由來記、春秋命歷序攷などに論る說等をも併せ見て知るべし、哀れ予や小人にして、今世薦紳大家の學風の、如何にと云ふ事を知らず、然れど皇國人にして、彼國籍を學ぶには、固より彼の尊內卑外の義理は更なり、眞聖擬聖を分別して、擬聖の誣妄には惑ふまじき、恒の學則なくて叶はぬ事なるを、俗の周代學者たち、然る規律ある事なく、周人にして周制を奉ずる如く、姬昌父子らが物せる事は、絕て今の世人などの、言加ふべき事に非ずと偏執して、適にも我が如く、其の非を辨ずる者有れば、甚く驚きかつ怒りて、其の說の當否をも論せず、邪說の如く云ひ讚るは、最も固陋しき

事にこそ、然る固陋なるが故に、夏の時を行へと有る、眞暦は更にも云ず、周代に成れる易暦ともに然る姦意に起れる、由來をも知らで在るなり、爭で眞好古の見の高尙ならむ、薦紳大家の公議を經て、俗學者流の、心を洗ひ、耳を澄さむ由もがな。)

【十八】天下有レ道則不レ失二紀序一。無レ道則正朔不レ行二於諸侯一。幽厲之後周室微。史不レ記レ時。君不レ告レ朔。故疇人子弟分散。或在二夷狄一。然其所レ記。有二黃帝顓頊夏殷周及魯歷一。

初發の文意は。天下有道の世にしては。疇人よく其の素業を傳へて紀曆の次序を失つこと無れど。無道なる世には。疇人其職を失ひ。かつ正朔を諸侯に布告すること能はず。亦行れずと言へるなり、(不レ行は卽ち諸侯の其の正朔を奉せざるなり、然るは魯一變せば道に至らむと稱せる國すらも、別に魯曆と云ふが有しかば、其の餘の諸侯らの用ひざりけむ事は然も有べし、)〇幽厲之後周室微とは。武王より第十世の王を厲王と云ふ。國民の爲に襲はれて出奔し。是より三世の王を幽王と云ふ。此は犬戎と云ふ寇に襲はれて殺されき。是より周室衰微せる由なり。(周本紀にも、幽王太子爲二平王一、以奉二周祀一、立東遷二于雒邑一、辟二戎寇一、平王之時、周室衰微諸侯彊幷レ弱、齊楚秦晉始大、政由二方伯一、とあり、是より以來を東周と云ふ。)〇史不レ記レ時とは。疇人其の職を失へる故に史官等の。事を錄するに。時日を記すこと能ざる由なり。〇君不レ告レ朔一は。漢志の劉歆が論に。自二文公一閏月不レ告朔。至レ此百有餘年。莫レ能レ正二曆數一。故子貢欲レ去二其餼羊一。孔子愛二其禮一。(顏師古注に、餼生牲也、禮人君每月告二朔於廟一有二祭事一、謂二之朝享一故用レ牲、子貢見二其禮廢一、而欲レ去二其羊一、孔子曰、賜也汝愛二其羊一我愛二其禮一、事見二論語一と云へり、此は月步の法を失し、閏月を立る道を知ざる故の廢政なり、)而著二其法於春秋一。經曰。冬十月朔。日有レ食レ之。傳曰。不レ書レ日官失レ之也。天子有二日官一。諸侯有二日御一。日官居レ卿以底二日禮一也。日御不レ失レ日。以授二百官於朝一言二告朔一也とあり。(師古

云々、劉家本有此語と云へり、告朔は上に注せる如くなるが、此の劉歆が家に本より有りし說ぞと云へる意なり〕〔故疇人子弟分散云々は。史記注に。家業世々相傳。各從其父學明曆者也と云へり。周室衰微して。治歷明時の事なき故に。其職を守ること能はず。亂を避けて夷狄に分散せるなり。〕〔然其所記云々は。後漢の歷志蔡邕が議に。案曆法黃帝。顓頊。夏殷周魯凡六家。各自有元と見え。宋の論に。黃帝造曆。元起辛卯。而顓頊用乙卯。虞用戊午。夏用丙寅。殷用甲寅。周用丁巳。魯用庚子と見えたり。(前漢の藝文志に、黃帝五家歷三十三卷、顓頊歷二十一卷、顓頊五星歷十四卷、夏殷周魯歷十四卷など有り、思ひ合すべし〕さて右六家の曆元の各々別なる由を。論に天道誠とし難き故に通用せず。五帝三王より來今に迄まで各改作ありと言へれど。此は來今の天道に誠なき世の意を以て。誠有りし往古を推量れる非說にて。實は既に黃帝顓頊虞夏殷の曆を論へる條々に云へる如く。太昊氏の當昔より。殷に至るまで同じ握先の甲寅元を通用せる物から。其の歷元より甚く長遠なれば。上を省きて當時々くの密合なる時を明して。其の代の曆元と爲して推步を容易に爲たる迄の事なり。(太昊の世より漢代に至る往古は、天道誠ありと云ふべきか、日月の差無りし故に、節炁合朔違はず、一曆元にて足けるを、漢代より來今に至りては、天道誠し難しと云べきか、日月の差を生じて、節炁合朔違へれば、玆に於て、始めて元を改めずは、得有るまじく成にたり、其の由は、第二十口條に論ふを俟つべし〕但し其は殷曆以上の事にこそ有れ。周魯の二曆は然らず。然るは殷代までの諸曆は。皆彼九百四十分の日法を用ひし故に同きを。周代始めて八十一分の日法に改たれば。節炁合朔盡く齟齬を生じて正しからず。魯曆また是の法を因襲せりと聞ゆれば其の不正准へて知るべし。(魯曆の事は、なほ次條に論ふを見て知べし〕

【十九】周襄王二十六年。閏三月。而春秋非之。先王之正時也。履端於始。舉正於中。歸邪於終。履端於始。序則不愆。舉正

於中。民則不惑。歸邪於終。事則不悖。其後戰國並爭。在於彊國救急而已。豈遑念斯哉

周襄王二十六年は。魯文公が元年乙未歲なり。春秋左傳に、於是閏三月非禮也。（杜注於歷法、閏當在僖公末年、誤於今年三月置閏、蓋時達歷者所譏、）先王之正時也。履端於始。擧正於中。歸餘於終。（步歷之始、以爲術之端首、朞之日、三百六十六日、日月之行、又有遲速、而必分爲十二月、擧中氣以正月、有餘日則歸之於終、積而爲閏、故、言歸餘於終、）履端於始。序則不愆。（四時無愆過、）擧正於中。民則不惑。（斗建不失其次、寒暑不失其常、故無疑惑、）歸餘於終。事則不悖。（四時得所、則事無悖辭、）と有る是なり。此は閏は歲末に置く禮なるに。三月に置たりと刺りしなり。（但し此の事春秋の本經には見えず、履字より下三句は。素問にも。立端於始。表正於中。推餘於終。而天度畢矣と有りて古語と聞ゆれば。古曆の法に合せ考ふるに。前蔀の餘分皆盡たる朔旦冬至を。後蔀の端首と爲て。初月を立て。其より每月の正を中氣に表しつゝ。餘日を終に歸して一月に積れば閏を置く由にて。其は必しも歲末に限るに非ず。（古法に依りて推步するに、月の大小固より定格あり、一章十九歲に七閏ありて、入章より三年は七月、六年は三月、九年は十二月、十一年は九月、十四年は五月、十七年は正月、十九年は十月に閏あり、閏後の月は中氣必ず朔に在り、是を以て十九年めは必ず朔旦冬至なり、閏前の月は中氣必ず晦に在り、委くは古曆傳を見るべし、然るに周曆は彼の蔀法を廢せる故に月の大小に定格なく。慢に推法を得たり貌に中氣を定め。右の古語を穪案して閏を必ず歲末に置たるは。嗚呼とも愚の所爲なるを。左傳を作れる人。其を當代の正禮と爲て。適に三月に閏せるを非禮と刺れり。（實には此の襄王が二十六年は甲午蔀に入れる二年めにて、閏年には非ざりしを周曆の濫なる故に、此の歲に閏を置ざりしなり、然るを左傳の撰者は更なり、史遷劉歆班固杜預等を始め、後世の儒者みな古曆を知らず、此

を宜なる事に雷同せるこそ可笑けれ、）是に就て案ふに。餘冬序錄に。周達觀眞獵風土記云。眞獵每用中國中月爲正月。國人亦有通天文者。日月薄蝕皆能推算。置閏但只閏九月殊不可曉。春謂如周所云乃是用秦曆。以十月爲歲首。當置閏之歲無問何月。秦歸餘歲終爲後九月是也。漢紀表及史記自高祖至文帝其書後九月皆同。是未嘗推時定閏也。至太初元年改用夏正。以建寅爲歲首。然猶歷十四年至征和二年始于四月後書閏月。達觀乃不曉此可笑と云へるは然る說にて、其の源は周曆より起れる事なり。（此文も瑯邪代醉編に引たるを再引たり）

【二十】是時獨有鄒衍。明於五德之傳。而敬消息之分。以顯諸侯。秦兼天下升至尊之日淺。未遑暇也。而頗推五勝。而自以爲獲水德之瑞。乃以十月爲正。色上黑。然歷度閏餘未能睹其眞也。

史記列傳に。騶衍睹有國者益淫侈。不能尙德。若大雅整之於身。施及黎庶矣。乃深觀陰陽消息。而作怪迂之變。終始大聖之篇。十餘萬言。其語閎大不經。必先驗小物。推而大之。至於無垠。先序今以上至黃帝。學者所共術。大並世盛衰。（索隱云言其大體、隨代盛衰、觀時而說事、）因載其禨祥度制。推而遠之至天地未生。窈冥不可考而原也。稱引天地剖判以來。五德轉移。治各有宜。而符應若茲。此間に赤縣內の小九州、また海外大九州の說有れど、其は旣に大古傳三皇紀の末に委く論へれば此には漏しつ、其術皆此類也。然要其歸必止乎仁義節儉君臣上下六親之施。始也濫耳。（索隱云、濫即江原之初始、故此文以濫爲初也、言衍之術、君臣上下六親之際、行事之所施所治。皆可以爲後代之宗本、故云濫耳、）是以騶子重於齊。適梁惠王郊迎。執賓主之禮。適趙。平原君側行襒席。（索隱云襒拂也、謂側行而衣襒席、爲敬不敢正坐、當賓主之禮也、）如燕。昭王擁彗先驅。請列弟子之座而受業。築碣石宮。身親往師之。作主運。其游諸侯見尊禮如此。（索隱云、彗帚也、謂爲之埽

地、以衣袂擁帚而却行。恐壓埃之及長者、所以爲敬也、劉向別錄云、鄒子書有主運篇、)豈與仲尼菜包陳蔡、孟軻困於齊梁同乎哉とあり。(なほ此の人のこと、齊田敬仲魏燕などの世家、また平原君が傳にも見えたり、)さて此の傳に。終始大聖之篇と云へるは。天地剖判以來。五德轉移。治各有宜。而符應若茲と稱引せる由なれば、主運と云へるも其の說にて。卽ち本文に五德之傳と有るも。同說にぞ有りける。其は封禪書及び郊祀志に。自齊威宣之時、騶子之徒。論著終始五德之運、及秦帝、而齊人奏之。故始皇采用之と有るにて知べし。斯て此を五德といひ。主運と稱せれば。五行の說は勿論なるが。其の五運に生克の二樣あり。生とは木火土金水の次第に相生せる運を云ひ。(其は五帝三王の次々に相生をもて代り來れるは卽ち是の五運なり、)克とは古曆蔀法の五德にて。木金火水土の次第に相克せる運を云ふ。(こは古曆傳の下卷に委く說著すを見て知るべし、命歷序考にも其圖を出せり、)然れば騶衍この二樣なる五德運の終始を定めて。右の論者を爲たりけむ。

然るに始皇その說を聞傳へて。謾に五勝の義を推て。周を火德を得たりと爲し。我その周に代るは水德の始なりと強ひて自定めしなり。(其は始皇本紀に、始皇推終始五德之傳、以爲周得火德、秦代周德從所不勝、方今水德之始、改年始、朝賀皆自十月朔、衣服旄旌節旗皆上黑。數以六云と見え、正義に、秦以周爲火德、能滅火者水也、故稱從其所不勝於秦と云ひ、索隱に、封禪書曰、秦文公獲黑龍、以爲水瑞、始皇因自謂、爲水德也、以水德屬北方、故上黑と有るを合せ考ふべし、)然れど實は諸書に、周を木德とここで稱へ。火德とは云ざる物をや。其は漢書の曆志。五帝の帝嚳を木德。唐堯を火德。虞舜を土德。夏禹を金德。殷湯を水德と記して。武王伐商紂水生木。故爲木德。天下號曰周室とあるにても知べし。但し秦を水德と謂ふは。始皇が自の定めなれど。佗よりは金德とぞ稱ひける。其は近く五行大義五帝論の所に。五德之依五行。子母相傳也。非其次者。必有剋伐而不終也。秦以金德代周二世而亡。漢以火行繼周代秦僞金。

故其祚長遠若是甚行次者則有符瑞也と云へる是なり。（秦を金德とし僞代とする事は、既く漢儒より云ひ出たる說にて、春秋繁露また白虎通などにも見えたるが、實は王者の五德運の次に世を承ると云ふことは、古五帝に限る事にて、其の後の代々に謂ゆる五運はみな諦ならぬ事なる故に、符瑞と云ふ事の議いと喧がし、然るに其の符瑞と云ふ事、また多くは世に信を取らむと欲して、構へ出る詐僞幻術なること、上に論へる周初の祥瑞、また秦末に事を起せる陳勝が符應、或は新莽が時の應驗などに准へて悟るべし、然れば其の符瑞によりて定めたる五帝より後の五德は、都て取るに足らずと知るべし。）さて始皇かく德を定め。色は黑を尙び。正朔をも改めたれど。曆度はなほ周代よりの疏闊なるを用ひし故に。閏餘を置ことの眞式をも知ざりしとなり。

【二十一】漢興高祖曰。北時待我而起。亦自以爲獲水德之瑞。雖明習曆及張蒼等咸以爲然。是時天下初定。方綱紀大基。庶事草創故襲秦正朔。以北平侯張蒼言用顓頊曆。比於六曆疏闊中最爲微近。然正朔服色。未覩其眞也。

此の高祖が事を封禪書には殊に委く。漢興高祖之微時。嘗殺大蛇。有物曰。蛇白帝子也。而殺者赤帝子。（本紀に、蛇を斬たる事を記せる次に、後人來至蛇所、有一老嫗、夜哭、人問何哭、嫗曰人殺吾子、故哭之、人曰嫗子何爲見殺、嫗曰吾子白帝子也、化爲蛇當道、今爲赤帝子斬之故哭、人乃以嫗爲不誠欲笞之、嫗因忽不見、後人告高祖、高祖乃心獨喜自負とあり。）高祖初起禱豐枌楡社。（註に枌白楡也、社在豐東北十五里、或曰高祖里社也と云へり、同書の下文に、民里社各自財以祠、と云へる事も有れば、産土祠にこそ有ける。）徇沛爲沛公。遂以十月至霸上。與諸侯平咸陽。立爲漢王。因以十月爲年首。而色上赤。（本紀に始めて兵を擧る時の事を載して、旗幟皆赤由所殺蛇白帝子、殺者赤帝子、故上赤と云へり。）二年東擊項籍而還。入關問故秦時上

帝祠何帝也。對曰。四帝有白靑黃赤帝之祠。高祖曰。吾聞天有五帝。而有四何也。莫知其說。（此より前、雍四時上帝爲尊とある所の索隱に、按四時據秦舊而言、秦德公卜居雍、而後宣公作密時祠靑帝、靈公作上時祠黃帝、下時祠赤帝、獻公作畦時祠白帝。是爲四、後高祖增黑帝而五也と云へり、）於是高祖曰。吾知之矣。乃待我而具五也。乃立黑帝祠命曰北時。有司進祠。後四歲天下已定。詔御史。令豐謹治枌楡社常以四時祠之と有り。此に依れば。軍を興す初は火德と定めて赤色を用ひたるが。關に入れる時に。五帝の中に黑帝の祀なきを見て。北時を建しより。自こを水德の瑞を獲たりと爲るに。曆法に明なる者ども。及び張蒼なども。然る事に以爲へる由なり。（張蒼は漢代の初に律曆の學を好める人なりしこと、其の傳また佗卷々にも往々見えたり、是をもて此の人の名をのみ出せりと見えたり、）然るに是の時しも天下初めて定まり。庶事草創の時なりし故に改曆に及ばず。秦の正朔を其の儘に襲用せるが。なほ張蒼が言に以りて顓頊曆を用ふ。此は六曆の疏闊中に比ぶれば最も微近なる由なり。（其の六曆の事は、既に上の條々に出たれば。其所に云へりき、）但し此の文に據れば是の時始めて顓帝曆を用ひたる趣に聞ゆれど。秦は顓帝の苗裔とし謂へば。舊より其の曆を用ひ來れるを。始皇が時に唯其の正朔をのみ易たりしを。漢興りて乃ちそを襲用せるは張蒼が言にぞ因けむ。然るは是の時もし新に顓帝曆を用ひむには。彼の曆は朔旦立春を曆元として。建寅の正月なること。第五條に云へる如くなるを其正月を用ひず。其勝國たる秦の正朔を用ひむ物かは。深く此の謂れを思ふべし。（また按ずるに、顓頊は古五帝の第五にて水德の君なり、是をもて其の服は黑なり、然るに秦は其の苗裔にて其曆を用ひしかば、舊より水德と稱し黑色を尙べるを、始皇が周及び六國を亡して後に、周を火德に准へ、自は黑龍の瑞に因りて水德と稱し、黑色を上びしと云へるは史傳の誤ならむも知るべからず、又是に依りて想ふに、漢代の初に水德と稱せるも、秦の正朔服色を其の儘に用ひし故の事なりけむ、其の顓帝曆を用ひしめ

たる張蒼が、殊に水德に執せるをも、思ひ合せて推量るべし、

【二十二】其後文帝十三年。魯人公孫臣上書曰。始秦得水德。今漢受之。推終始傳則漢當土德。土德之應黃龍見。宜改正朔易服色上黃。是時丞相張蒼好律歷。以爲漢乃水德之始。故河決金堤。其符也。年始冬十月。色外黑內赤。與德相應。如公孫臣言非也。罷之。後三歲黃龍見成紀。文帝乃召公孫臣拜爲博士。與諸生草改歷服色事。其夏始郊見雍五時祠衣皆上赤。

此條は主と封禪書を採りて。歷書をも按せり。○秦を水德と云ふことは。始皇が自の定めなること。既に前々條に見え。漢をも水德と云ふことは。高祖が自の定なること。前條に所見たるが如し。然れども此の上書に。今漢受之と云ひ。前條に襲秦の正朔服色と有れば。實は秦制を其の儘に襲用せしこと疑なし。(然れば高祖が兵を興す初めに、かの白蛇を斬りて、赤帝の子なりと云ふ瑞を得しかば、赤色を尚び用ひしと、其の本紀また封禪書などに記せるも、覺束なき事なり、そは當時すでに然る瑞應ありて、定めたる事ならむには、是時までなほ如此區々なる說の有べきに非ねばなり)○推終始傳則云々。此はかの騶衍が終始五德の傳を云ふ。實にも彼部法の五德に據りて。秦を水德と定むる時は。土剋水の終始にて。漢は土德と稱し。黃色を尚むべき謂なり。然は有れど其の應に。黃龍見ゆべしと言へる事は。少か疑なきに非ず。其の由は下に云ふべし。○是時丞相張蒼云々。此人の議は。かの高祖が水德と定めたる旨を執りて。漢は水德の始なるが故に。河決金堤其符也。然れば冬十月を年始となし。色は外を黑く內を赤にして。水德に相應せり。公孫臣が言非なりと云ふに。其の議を用ひて。臣が言を罷けたる由なり。(此議の中に、河決金堤と云ふこと、索隱に、謂河決乃水德之應也と有る耳にて、諸家の注なし、

故考ふるに、河渠書に、漢興三十九年孝文時、河決酸棗、東潰金堤と有りて、正義に、括地志云、金堤一名千里隄、在白馬縣東五里と見え、溝洫志の師古注には、潰横決也、金隄河隄名也と云へり。)(後三歳黃龍見成紀云々。公孫臣が上言。右の張蒼が議に罷られけるを。其の後しも黃龍の見はれし故に。前言の空からぬ事を思ひて。博士の職に拜して。諸生と與に改歷服色の事を草稿せしめたる義なり。然れど此は決めて公孫臣が前に云へる言を實にせむと欲して。蛇類の黃色なるを見出むには。告べき由をいひ觸れて。言しめたる事にて。此を黃龍としも云へれど。其は例の文飾にこそ有れ。實は凡蛇の黃色を帶たる物にぞ有けむ。(かく云ふ由は、此の謂ゆる黃龍、もし實に天の示せる符瑞にて有らましかば、是の後相續して、漢は土德なるべきに、唯此の時さる物の見えたりと云ふのみにて、終には土德の說行はれざるを以てかくは論ふなり、此も欺きなるべき事は、此の後間なく新垣平と云へるが符應をつくりて、其の事發覺して、誅せられたる事をも思ひ合するに、

其の詐りの覺と不覺の幸不幸こそ有れ、共に僞符瑞なる事は疑なくなむ、また此に就ても、彼の赤帝の子といふ符瑞も信がたく、また彼張蒼が河決金堤と云る符應などは、殊に徵驗なき無稽の說とぞ云ふべき。)(其夏始郊見雍五時云々。此は前條に引たる封禪書の文に。雍四時と有るに。高祖が祠れる北時を加へて五時なるが。是謂ゆる郊祀なり。(此祀りの由來は、太古傳の三皇紀の末に、委く注せるを見るべし。)さて此の時の衣服に。赤色を用ひたるは。公孫臣が上言せる土德の黃色。張蒼が謂ゆる水德の黑色をも用ひざるなり。然れば服色の說は決らねど。先は火德の說を取れるにや。(此事漢書の郊祀志も同じ趣なり。)なほ封禪書に。此間に新垣平が欺ありし以後は。文帝その正朔服色を改むる事を怠れるが。次代景帝が時にも興せる事のなき由見えたり。

【二十三】其後武帝元封七年。冬十一月甲子朔旦冬至。推歷者以本統。上親至太

山。以十一月甲子朔旦冬至日。祀上帝于明堂。其贊饗曰。天增授皇帝太元神策。周而復始。十二月甲午朔親禪高里。祠后土。夏五月正歴。以正月為歳首。而色上黄。官更印章以五字。招致方士唐都。分其天部。而巴落下閎。運算轉歴。然後日辰之度與夏正同乃改元。

此條も封禪書と歴書とを合せ採りて錄せり。〇是の時なほ今の十月建亥の月を以て歳首とせし故に。其の十一月十二月と謂ふは。第二月第三月に在れど。實は建子建丑の月にて。前元封六年の十一月十二月なり。(乃ち今の十一月十二月に同じ、)故其の十。十一。十二の三月を。まづ其の前年に復して。其の歳月を古歴に據て攷ふるに。此の元封六年は。終紀乙酉蔀の第十九年丙子歳にて。其の十一月は甲子朔なるが。實にも朔旦冬至にて。乙酉蔀の第二章首なり。斯て其の十二月また實に甲午朔なるは密合なり。然れば本文に。推歴者以本統と有るは。夏歴の本術を以て推定たる義と通えたり。(夏歴やがて唐虞の歴にて其れ又やがて古歴なること、春秋命歴序考の第十口條に、既に、委く記せるを見るべし、)〇上親至太山云々。太山は泰山とも書きて。赤縣域内の謂ゆる五岳の東岳にて徐州といふ地に在る山なり。扨豫て撰べる朔旦冬至の日を以て。上帝を明堂に祠れるは。此は無く重き祠なればなり。(王者の太一、天帝、五帝を祀り、祖先をも配祭する堂を明堂と謂ふ、是より前に、此の明堂を建たる事など、委く本書封禪書及び郊祀志に見えたり、)〇其贊饗曰云々。索隱に。漢書儀云。贊饗秩六百石是也。饗祀詞也。とあり。但し是より前元鼎五年に。十一月辛巳朔旦冬至なりとて。太一を郊祀せる事あり。其時の贊饗に。天始以寶鼎神策授皇帝。朔而又朔終而復始と有り。(索隱に贊饗之辭、言得寶鼎神策、又言天授皇帝太元神策、周而復始、則太元者古昔上皇創歴之號、故此云太元神策者、周而復始也と云へるは聊か通えがたし、)然るに其の元鼎五年の辛巳朔旦冬至と云ふもの眞の朔旦冬至に

非ず。此は乙酉蔀の第十二年己巳歳なるが。歳首十月は大にて辛亥朔。十一月は小にて辛巳朔なれど。冬至は壬午にて二日にあり。然るを時の日官しひて合せて朔旦冬至と爲たるなり。是を以て古暦の本式には合ざるなり。(其の本式は是より前、元朔六年戊午歳、これ乙酉蔀の初年なるが、其十一月と云ひし月の朔は、卽乙酉朔旦冬至にて、是より二十年のち、元封七年の十一月と云へる月の朔、乃甲子朔旦冬至にて、第二章首なること、既に云へる如くなればなり。)然れど武帝が當時。この本式を知ざりし故に。其の元鼎五年の。辛巳冬至と云ふものを。實の朔旦冬至と信じ。其より間なく元封七年に。本統の甲子朔旦冬至を推得たるを以て。本文の祀をなし。且其の贊饗に。天増授皇帝太元神策。周而復始と云へり。然れども此甲子朔旦冬至は。既に云へる如く。乙酉蔀の第二章首なれば。周而復始と云ふべき朔旦冬至に非ず。況て太元神策などは謂ふべくも非ず。(そは太元神策とは、三紀の初年なる甲寅、甲戌、甲午などの歳の甲子朔旦、冬至をこそ云べけれ、其の餘の朔旦冬至は、太元と云ふに足らず、是等の名目だに允當ならぬを以ても、當時古暦の眞式を知らざる事は著明なり。)○十二月甲午朔云々。此の朔も古曆式に密合なること。上に謂ふが如し。后土とは社稷の神を謂ふ。○夏五月正曆云々。是時よりして。今の正月建寅の月を歳首となし。文帝が世の黄龍の瑞と謂ふを用ひて。服色は黄を上び。官の印章をも更めて。土數の五字と爲たる由なり。(注に、張晏曰、漢據土德土數五、故用五爲印文也、若丞相曰、丞相之印章、諸卿及守相印文不足五字者、以之足也と見えたり、)○招致方士唐都云々は漢書曆志の注に。師古曰。姓唐。名都。方術之士也と云ひ。其の音義に。謂分部二十八宿爲距度也とあり。○巴落下閎云々は。曆志の師古注に。姓落下。名閎。巴郡人也と見え。曆書の注には。徐廣曰。徵士巴郡落下閎也。索隱曰。益部耆舊傳云。閎字長公。明曉天文。隱於落下。武帝徵待詔太史。於地(地字は池の誤りなるべし、)中轉渾天。改顓頊曆作太初曆。拜侍中不受也とあり。○然後日辰之度云々とは。唐都

、落下閎二人が右の如く歷法を正せるより。日辰の度も何も。夏暦に同く調へる故に。乃改元せしとなり。其は次條に詳なり。

【二十四】因詔御史曰。乃者有司言。星度之未定也廣延宣問。以理星度。未能詹也蓋聞昔黄帝合而不死。名察度驗定清濁起五部。建氣物分數然蓋尙矣。書缺樂弛朕甚閔焉。朕唯未能循明也。紬績日分。率應水德之勝。今日順夏正。十一月甲子朔旦冬至已詹。其更以七年爲太初元年。

此條は全く史記の歷書にて。乃改元と云へるに接ける文なり。因詔御史曰は御史大夫の官人に。此の事云出せる由なり。此時の官人は兒寛と云へる人なり。○乃者有司言云々は漢志に。是より前に太中大夫公孫卿。壺遂。太史令司馬遷等言。歷紀壊廢。宜改正朔と上言せる事あり。史記には此の事漏たれど。今の乃者有司言云々は。此の事なるも知るべからず。(漢志なほ其の上言の次に、是時御史大夫兒寛明經術。上迺詔寛曰、與博士共議云々、寛與博士賜等議皆曰、云々とこて、三統の歷を作べき由を上言せる事を載せれど、決めて僞説なると思ふ由あり、其は次條の末に論ふを俟べし、)星度之未定也云々は聞えたる文なれば。注するに及ばず。(但し詹は諸注家の說に、一作僋也、漢志作鐖、鐖即僋也、韋昭云、鐖比校也、鄭德云相應爲鐖也と云へり、)○蓋聞と云ふより以下。黄帝の故事は是より前に公孫卿に聞きて。武帝が常に慕ひ羨む所なる故に言出たるなり。(是の黄帝の故事は、第四條に、封禪書と郊祀志とを引きて既に委く說たりき、)さて黄帝合而不死云々は。諸注家の言に。黄帝聖德。與神靈合契。升龍登仙。故曰合不死。名節會。察寒暑。致啓閉分至。定清濁。起五部。清濁律聲之清濁也。五部木火土金水也。建氣物分數。皆敍歷之意也と云へり。○然蓋尙矣云々は。黄帝の歷法を調へ。清濁をも定めしは。然しも尙しき事なる故に。書缺け樂弛たり。朕甚閔ひ惟ふ

に。未循明むること能はずとなり。○紬績日分云々とは。注家の言に。紬績者女工紬絹之意。以言造歷算運者。猶若女工緝而織之也。應水德之勝者。蓋以爲。應土德。土勝水也と云へり。然れば此もかの終始五德の日分を紬績して五運を推算ふるに我が漢は。秦の水德に勝つ土德運に應ると云へる意と通えたり。（然れど終始五德傳の本書、世に傳はらざれば、委くは知がたし。）今日順夏正は。今より十月建亥之月を歲首とする事を停めて。夏正建寅之月を歲首に定めむとなり。（本書に、夏正を夏至と有るは、誤寫なれば改めつ、索隱に、謂夏至冬至也と云へれど通え難き說なり。）さて本書こゝに。黃鐘爲宮。林鐘爲徵云々と謂へる。五十一字の律說あれど。其は律書の文の錯亂と見ゆれば取らず。（漢志に其の文なきは、錯亂を知りて削れるなるべし。）○其以七年爲元年とは。元封七年を改めて太初元年と爲むと謂ふ義なり。

【二十五】歷術甲子篇。太初元年。歲名焉逢攝提格。月名畢聚。日得甲子。夜半朔旦冬至。正北。十二。（篤胤云。二當作三。）無大餘。無小餘。無大餘。無小餘。

歷術甲子篇とは。索隱に。以十一月朔旦冬至得甲子。甲子是支干之首。故以甲子命歷術爲篇首。非謂此年歲在甲子也と云るが如し。○歲名焉逢攝提格は、索隱に。爾雅云。歲在甲曰焉逢。寅曰攝提格。則此甲寅之年。十一月甲子朔旦夜半冬至也。而漢志以爲其年在丙子。當是班固用三統。與太初歷不同。故與太史公說有異。而爾雅近代之作。所記年名。又皆不同也。焉逢漢書作閼逢亦音焉と云へり。（また同書に、漢志太初元年、歲在丙子、據此則甲寅歲、爾雅釋天云、歲陽者、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸、十干是也、歲陰者子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥十二支是也、歲陽在甲云焉逢、謂歲干也、歲陰在寅云攝提格、謂歲支也とも云へり。）今按ずるに。既に論へる天地開闢の。日甲子歲甲寅より年次の干支を追て推下れば。元封六年は丙子歲。元封七年

は丁丑歳に當れり。然るに是の時かの十一月甲子朔旦冬至を得たるを。終りて復始まる太元の神策なりと惟ひ誤まり。太元に復れる上は。歳また甲寅なりと非心得して。元封六年七年の。丙子丁丑なる二年を。強ひて甲寅と名けたり。（其は歳名焉逢攝提格と有る名の字を以ても、強ひたる歳名なる事いと著明なりかし、）然れば漢志に。太初元年。歳在丙子と云へるは。乃ち此の本文なる太初元年と同く。實は元封六年丙子歳にて。次に焉逢攝提格太初元年と有るは。元封七年丁丑歳なり。其は何を以て知なれば。此の太初元年と云ふには。氣朔ともに大小餘なしと有るが。蔀首の前年には餘分皆盡る式なるに符合し。次の太初元年と云ふには。氣朔ともに大小餘あり。かつ其の餘數の。蔀首歳の餘數に。符合するを以て所知たり。（其の餘數の符合する事は、下に出す古曆と太初歷との、合成圖を見て知るべし、）然らば太初元年と稱ふを二年重ねたるは。何の由なると云に。改元以前は今の十月建亥之月を歳首と爲たる故に。今の九月建戌之月迄は元封六年成しを。改元よりして元封七年の十一月。謂ゆ

る朔旦冬至の入る。夜半子の五刻以前を六年に復し、子の五刻以後を。元封七年の歳運とせし故に。同じ甲寅歳を。二つに分たる意を以て。六年七年共に。太初元年と稱せるにや有らむ。然れど此は甚胡亂しく拙き定なりけり。（其は元封六年のよし月數は加たりとも、本のまゝ元封六年と稱せむに、子細なき事なればなり、）〇月名畢聚とは。索隱に。謂月値畢及陬訾也。月雄在畢。雌在訾。々則陬訾之宿也と云り。畢は畢星にて□に當り。聚は陬訾にて寅に當る。乃ちその正月を□寅之月と爲たる義也。（但し此正月の干支を□寅と爲たるは、強事に非ず、古曆式を以て推下るも、實に此正月は□寅に運り合たり、）〇日得甲子とは。索隱に。謂十一月冬至朔旦得甲子也と云へるが如し。〇夜半朔旦冬至とは。索隱に以建子爲正。故以夜半爲朔。其至與朔同日。故云夜半朔旦冬至。若建寅爲正則以平旦爲朔也と云へり。（夜半は卽子の正五刻なり、）〇正北とは。索隱に。謂蔀首。十一月甲子朔旦。時加子爲冬至。故云正北也。然毎歳行周天。全度外餘有四分一。以十二辰

分之。冬至常居四仲。故子年在子。丑年在卯。寅年在午。辰年在酉。至後十九年章首在酉。故云正西。其正南正東並準此と云るが如し。(なほ委くは古暦傳三巻蔀法の所を見て知るべし、)十二とは本文に謂ゆる太初元年。實は元封六年丙子歳の月數十二なる由なり。閏ある年は閏十三と謂へり。然るに此年に十二と有るは決めて十三の誤寫なり。然云ふ故は。既に謂ふ如く此の丙子歳は。本術乙酉蔀の第十九年にて。實に十一月甲子朔旦冬至なれば。前十月に閏ありて。十三月の年なること。古暦傳の朔策氣策二編に著せるを見て知べし。(無大餘無小餘とは本書の篇末に。右歴書。大餘者日也。小餘者分也と有る是なり。(分也を今本に月也と有るは誤寫なり、今は下に引く正義の言に據りて改正せり、)大餘とは日の餘を云ひ。小餘とは分の餘りを謂ふ。此年は月に日餘も分餘も無き由也。(無大餘無小餘とは。索隱に。上大小餘。朔之大小餘。此大小餘謂冬至大小餘。冬至亦與朔同日。並無餘分。至與朔法異。故重列之と云へるが如し。然るに此大小餘のこと。實に紀蔀の末年なれば如此くなれど。既に云へる如く此の丙子歳は乙酉蔀の第十九年にて。第二章首に入る際なる故に。氣朔朔策共に大小餘多かるを。大小餘なしと謂へるは。終りて復始まる太元蔀首の神策と思ひ誤れるが故なり。其由は次條に論ずるを見て知るべし。

【二十六】焉逢攝提格。太初元年 十二。大餘五十四。小餘三百四十八。大餘五。小餘八。

本書此の條の頭注に。重提太初元年。明此是正月建寅以後也と有るは。然も有べき説なれど然らず。其は前條に氣朔ともに。大小餘なしと斷りたれば。建亥十月の閏月晦の夜半。子の四刻までを限れること著し。然れば是の年は其の謂ゆる十一月甲子朔旦冬至の夜半。子の正五刻より推始めて。月は十月建亥。氣は大雪の終までを數へたる大小餘なること疑なし。(もし頭注の說の如く、此は正月建寅以後を明せる數ならむには、前年は閏月晦の夜半、子の四刻にて止たれば、十一月建子、十二月建丑の二月は數へずとやせむ、然る事の有

さくも非ず、よく此の謂を思ふべきなり。）さて是の太初元年の干支は丁丑なるを。甲寅と云ふは。強たる歲名なること上に云へるが如し。〇十二は。此の年の月數。實に六大六小十二月なり。〇大餘五十四。小餘三百四十八とは。索隱正義などに云へる如く。太初曆の朔策は。一月の日數。二十九日。九百四十分日之四百九十九と謂ふ法なり。（本書の注に引たる索隱の文に、九百の二字を脫せり、補ふべし、但し此の朔策を索隱などに太初曆の法と云へる故に、今もしばらく然は稱ふなれど、實は古曆の法なること、上第十三條に既に云へるが如し。）さて大餘五十四條とは。六大六小の十二月の日數。合せて三百五十四なるを。彼の甲子朔旦より始まる故に。六甲をもて五六三百日を除ふに。餘五十四日ありて六十日に滿たず。此を大餘五十四とは謂へり。（是を以て本文に、大餘者日也と斷れり。）小餘三百四十八のことは。正義に。小餘者。未レ滿レ日之分數也。其分每レ滿二九百四十一則成二一日一即歸レ上成二五十五日一矣。（本書に引たる正義の文に、下の五字を脫せり補ふべし。）小餘四十八者其大數五十四之外。更餘分三百四十八。故稱二小餘三百四十八一也。是太初元年奇日奇分也と云へるが如し。〇大餘五。小餘八とは。太初曆の氣策は歲法三百六十五日四分日之一にて。氣法十五日三十二分日之七と謂ふ法なり。（是れ亦しばらく太初曆の注とは云へるなれど、實は古曆法なること上に同じ。）さて大餘五とは。三百六十五日四分日之一を。かの甲子朔旦冬至の日より六甲をもて除ふに。六六三百六十日にて。餘五日と四分日の一あり。此五日を大餘とは謂ふなり。（本文に大餘者日也と云へるは此の事にも係れり。）小餘八とは。氣策の日法三十二分の四分一にて。每蔀の初年に五日と四分一を餘し。次年に十日と二八十六分を餘し。次年に十五日と三八二十四分を餘し。第四年には。四八三十二分を得て一日と成るが故に。小餘なく。大餘二十一と成る。是を以て第四年は三百六十六日の年なり。如此く十九結七十六年にして。大餘小餘皆盡く。是を一蔀と謂ふなり。（正義に、小餘者、未レ滿レ日之分數也、其分每レ滿二三十二一、則成二一日一、即歸レ上成二六日一

矣、大餘五者、毎歳三百六十五日、除二六甲三百六十日一猶除二五日一、故稱二大餘五日一也、小餘八者毎歳三百六十五日四分日之一、則一日三十二分、是一歳三百六十五日八分、故稱二小餘八一也、此是太初元年奇日奇分也と云へるも同じ義なれど、初學の爲に今なほ精く釋著せるなり、)本書なほ此の條より列ねて。其の一蔀七十六年の大小餘を。悉記し出せるを。今逐一に其義を釋かむ事は煩はし。故例の目易く。譜圖に著はし示すこと左の如し。

(譜圖缺)

三暦由來記卷之下

男　平銕胤　同
大壑　平篤胤撰述　門　某
人　碧川好尚　校

【二十七】其後二十七年。元鳳三年。太史令張壽王。上書言。歷者天地之大紀。上帝所レ爲レ傳。黃帝調二律曆一。漢元年以來用レ之。今陰陽不レ調。宜レ更レ歷之過一也。詔下二主歷使者。鮮于妄人一詰問。壽王不レ服。妄人請與二治歷大司農中丞麻光等二十四人一。雜二候日月晦朔弦望八節二十四氣一鈞二校諸歷用狀一。奏可。按漢元年不レ用二黃帝調歷一。壽王非二漢歷一逆二天道一非レ所レ宜レ言。大不敬。有レ詔勿レ劾。

其後とは太初元丁丑年より二十七年のち昭帝が元鳳三年と云へるなり。太史令張壽王上書言。歷者天地之大紀は。聞えたるが如し。上帝所レ爲レ傳とは。其の起原は昊天上帝の傳へ賜ひし道なる由と

聞えたり。(其は上第二條に釋たる天皇太帝の古曆のことと思ひ合すべし。)○黄帝調律歷。この事は既に第□條に說たりき。○漢元年以來用之とは。高祖が元年より元封七年まで。百二年の間用ひ來れる歷は秦歷にて。其は顓帝歷なること。既に云へるが如し。然るに壽王そを黄帝の調歷と謂へるは。上に論ふ如く。其の歷元の歲と消息の法の易れる故に。名を異に稱せれど。實は同じ太昊古歷にて。黄帝顓帝ともに用ひし歷なるが故に。古きに就て黄帝とは言へるなり。○今陰陽不調云々は節氣の陰陽調はざる事は。歷を更めたる過に因る事ならむと云へるなり。(但し此ほど節氣の陰陽のしか調はざりし事は、歷を更めたる故のみに非ず、舊より用ひ來れる歷を用ひたらむも、天地の機運すでに差を生せし時にて氣朔ともに其憲を改めずは有まじき時なりき、其は下に論ふを俟つべし、)○詔下主歷使者。鮮于妄人云々。鮮于妄人は。主歷使者たる人の姓名なり。此の輩命を受けて壽王が言を詰問ふに。壽王服せざるなり。○妄人詰。云々とは。妄人が詰問に壽王を理に服せしむること能はず。是を以て治歷の者ども數十人と。諸歷の用狀を鉤校して仍詰問せむと請ふに可せる由なり。(本志この間に、丞相府、大將軍、右將軍の史等、及び右の主歷治歷の者ども、力を合せて雜候ひて、諸歷の疏密凡十一家を課せしむるに、各々第ありて、壽王が課疏遠なりと謂へる事も有れど、實は壽王が課のみ疏遠なるに非ず、其の諸人の課も皆疏遠なり、是の由も次條に論ふを俟つべし、)○按漢元年。不用調歷云々。此の按は是の時の處分を爲せる者。右の歷者等が口を揃へて。壽王が課を疏遠なりと聚訟せるを素より其道を知らざる耳に。げに然る事に聽容れて。壽王が罪を定めたる上言なり。其は漢の元年に黄帝の調歷を用ひずと云へるは。顓帝歷をこそ用ひつれと謂ふ意なるが。此はむげに古歷の由來を知ざる者なり。(然るは上に云ふ如く、顓頊歷やがて黄帝の調歷と同歷なればなり、)また壽王非漢歷云々と云へる言も訟を聽く者の意に非ず。さるは壽王元より太史の令なれば。當時の歷に過失あるを知得たらむに。其の由を上言すべき任に當れば何の罪か有ら

む。能く其の職を守る者と云ふべし。然るを非所宜言。大不敬と云へるは。不當の處分ならずや。（其は既に同志に、漢の元年より用ひ來れる歷を止めて、太初歷に易たる事は、太史令司馬遷が、歷紀壞廢宜改正朔と上言せるより起れりと有るをも思ふべしまた假令其の任ならずとも、實にも歷者天地の大紀なれば過失は更なり、惟ひ得たらむ事の有るを上言せむに其の取捨はともあれかくまれ、大不敬などの重き罪に處分すべき事とは所思ずなむ。）○有詔勿劾とは。劾は字書どもに。推窮罪人也と注せり。是時の漢主昭帝と云ひしが十六歲の時なりき。明亮なる性質なりしかば。是の處分の允當ならざりしを思ひて。如此宥めけるにや。（此昭帝と云ひし王の最も賢かりし事は、上官桀桑弘羊等、霍光を退けむと奏せし時其を背はざる一事を以ても辨ふべし、委くは漢書霍光が傳に就て見るべし、）

【二十八】壽王及待詔李信。治黃帝調歷。課皆疏闊。壽王歷廼太史官殷歷也。壽王猥、曰。安得五家歷。又妄言。太初曆虧四分日之三。去小餘七百五分。以故陰陽不調。謂之亂世。劾壽王吏。作妖言欲亂制度不道。奏可。壽王候課。比三年下。終不服。再劾死。更赦勿劾。遂不更言。誹謗益甚。竟以下吏。故歷本之驗在於天。自漢歷初起。盡元鳳六年三十歲而是非堅定。

當時黃帝の調歷を治むる者。獨張壽王のみに非ず待詔たる李信と云へる者も。其の歷法を治めしなり。○課皆疏闊とは。當時の例の治歷者流の言にて。是亦公平の言には非ず。予を以て之を察れば。壽王李信等が治むる古歷は當時すでに氣朔の差を生じたれば。古法の儘には用ひ難きを強に用ひむと欲するは其術に拙く。かの治歷家が奉ずる漢歷は。當時の氣朔に合せむと。蔀首を引上たることは巧なるに似て其の術甚猥なり。彼此概して其の得失を定めむには。共に疏闊は免れねど。猥ならむよりは。拙なりとも古式を守れるを勝れりとぞ云

ふべき。(〇本志此の間に、壽王が言に、黄帝より元鳳三年に至りて、六千餘歳と云へるを始め、帝王錄と云錄によりて、舜禹の年歳を云へる事などを載して、經術に合ずと論へる文あり、其また互に得失あれど。今の要にも非ざれば此には漏しつ。)〇壽王歷廼太史官般歷也とは。壽王が黄帝の調歷なりとて治むる歷は。太史官に藏する所の般歷ぞとなり。此の一語に依りても。時の治歷者等が古歷の本來を知らず。壽王ひとり古歷の本來を知れる事は著明なり。其は既に謂ふ如く。當時六歷とて。黄帝。顓帝。夏。殷。周。魯の歷名あれど。唯其紀元と消息の法の各異なる耳にて。其の本術は全同じ太昊氏の古歷なれば。壽王が黄帝歷と稱せる歷の。殷歷と同かりしは。然も有べき事なり。(また漢の元年より元封七年まで用ひしは、顓帝歷なるを前の壽王が言に、黄帝の調歷と云へるも卽ち是の故なり。)然れば壽王猥曰。安得五家歷と云へる語の意は。六家の歷の名を稱すれど。實は黄帝歷の一家なる物を、安ぞその餘の五家の歷名を稱する事を得むと云へる義なり。豈これを猥曰と云むや。時の治歷者等が。古義をえ知らで猥曰せるなるをや。(猥は師古が注に、曲也と有れど、ミダリと訓むも難なくこそ。)〇又妄言。太初歷。虧四分日之三。去小餘七百五分。云々。是また妄言に非ず。其の由は既に論ふ如く。元封七年の十一月甲子朔旦冬至は。乙酉蔀の初章終りて。第二章に入る際なれば。十九年を經て僅に四分日之一を經たる所にて。なほ二三四の三章。五十七年を全く經ずては。四分日之三と小餘七百五分の盡ざる所なるを。彼の唐都落下閎など古義に闇く。謾に此甲子冬至をも終りて復始まる太元の神策也と非心得して口元甲子蔀の初章甲子朔旦冬至を此所に當て口其蔀の日分を用ひしかば。彼の乙酉蔀の二三四の三章五十七年を經て盡べき日の小餘四分日之三と。月の小餘七百五分は虧去たる謂なる故にかく言へり。(是の日の小餘四分日之一と、月の小餘七百五分の虧去せる由は、前々條に著せる譜圖の第十九年始元元年正西と有る所に、月小餘七百五、日小餘二十四と有るを見て知べし、既にも云ふ如く、古歷太初歷ともに氣策の日法は三

十二分と立たれば、四分日之一は八分、四分日之三年、三八二十四分なる故に、小餘二十四と有るが、壽王が言に虧二四分日之三一と云へるに合ひ、朔策の日法は九百四十分日之四百九十九と立たれば、此の年の月小餘七百五なるが、壽王が言に、去二小餘七百五分一と云へるに合へり、但し此の日月小餘は甲子蔀のみに非ず、何蔀にても同じ數なり、斯て唐都落下閎等が虧去たるは乙酉蔀なりしかば、壽王が言ふ所は乃ち其の乙酉蔀の二三四の三章を虧去たりと謂ふ意なること言まくも更なり。)扨しか當時の日分を虧去て五十七年後の十一月朔旦冬至に。來るべき日分を引上たれど。其は曆術の上にこそ有れ。日月の實の來經は。虧去べくも非ざれば。彼の日の小餘四分日之三と。月の小餘七百五分は。其儘に存るを。其長き日分に。甲子蔀首の歳の。日の小餘八。月の小餘三百四十八なる短き日分を當始めて。次第のまゝに推來れば。實の來經と。曆術と相背けて。氣朔共に合ず成ぬるを。壽王熟く此謂を知れる故に。以レ故陰陽不レ調。謂二之亂一レ世とは云へるなり。信に尤なる言にこそ。(古曆の眞式を知ざらむ、俗の曆算家などの議論は聞くに足らず、畏きや我が大神の造らし、謂ゆる太昊古曆の由來正式を問ねむ人は、此の壽王が言をまづ深く味ふべし。)然るを彼の治曆者ども。己等元より固陋にして。古曆の眞式を知ざれど。其の醜を覆すとして。其の衆口に金を鑠かし。謂ゆる浸潤の讚。膚受の愬をも用ひしを。例の固より其の道を知ざる有司等なれば。其の讚愬をしも讚愬なりと聞別たず。卽ち其の言に據りて。壽王が罪を處分するに。儒衣を服して不祥の辭を誦し。妖言を作りて制度を亂らむと欲す。不道なりと劾せる由なり。(佛法の書類に、頑僻にして、義理に闇く、國王有司の力を恃み、議論鬪諍に威勢を振ひて、正良を害する者どもも有るを龍象衆と謂ふよし見えたるは、是時の治曆者どもの所爲相類たる事なり、)○壽王候課。比二三年一下。終不レ服云々。師古が注に。比頻也。下下レ獄也。更經也と云へり。壽王が候課を議すること。既に三年に比びて。獄に下にせども服せず。再死罪に劾せしを。赦を經て其の事に及ばず。然れど遂に其の言を

更ず。誹謗すること益甚しき故に。竟には更に下せる由なり。孔子の謂ゆる。篤信好學。守死善道といふ者か。憐むべし。（抑此の議論の起れる漢の元鳳三年より我が此天保四年に至りて、已に二千年に垂むか、然るに皇國は更なり、彼邦にも是の時の治歴者の衆人非にして、壽王が是なる由を論へる者、世々に一人も有ること無きは、元より古暦の眞式、及び其の由來を知る人なく、また史漢の歴書歴志を熟讀み得たる人の無りし故なるが、是非の隱顯また其の時あるか、思ひきや、愚が古暦を發明せる力に因りて、今しも壽王が二千歳の寃を、かく明め雪がむとは、故少か其の由を記して、其の寃魂を慰め弔すること斯くの如し。）○故歴本之驗在於天云々とは。撰者の文にて。歴法は天に驗在るを本とすれば。壽王が論は有れど。漢歴初めて起れるより。元鳳六年を盡すまで三十歳にして。太初歴の是なること。堅く定れりと云へるなり。（三十歳を本志に三十六歳と有れど、太初元年より元鳳六年まで、實に三十歳なれば訂しつ。）然れど此は班固　その太初歴の是非を。予が上に論ふ如くは知らず。其の由來をも辨へざる故に。一向に壽王が言を非とのみ思ひ誤れる説なりけり。

【二十九】自太初元年。始用三統暦。施行百有餘年。暦稍後天。朔先暦朔。或有晦月見。考其行。日有退無進。月有進無退。建武八年中。太僕朱浮。太中大夫許淑等。數上書言。暦不正。宜當改更時分度。覺差尚微。上以天下初定。未遑考正。

本志の注に。司馬彪曰。太初元年　。始用三統暦。施行百有餘年。曾不憶劉歆之生。不逮太初。幾乎不知。而妄言者歟と有るは。實に然る言にて。此は既に論ふ如く。班固元より暦法を知らず。太初三統二暦の差別をも攷へず。俺忽に劉歆が遺書の欺きを受けて。前志に太初暦を。三統暦に混へ記せる故に後志も亦かく記せれど。此は自太初元年。始用太初暦。施行百有餘年。其後自王莽天鳳間。用三統暦。十有餘年と有べき事實なり。（其は次條に引出る文等の如く、太初暦を其儘

に用ひしは、太初元丁丑年より、王莽が建國五癸酉年まで百十七年の間なれば、之を百有餘年と云べく、三統暦を用ひしは、天鳳よりの事にて、建武八壬辰年まで十九年なれば、此を十有餘年と云べき謂なればなり）〇暦稍後レ天。朔先二暦朔一云云は。譬へば暦術の朔は乙丑なるに。天の眞朔は其に先ちて甲子に在り。是を以て或は暦面に晦とある夜に。月の見ゆる事あり。此は暦術の天に後るゝ故ぞとなり。〇考二其行一云々とは。其運行の樣を考ふるに。天の眞暦日は退きて進むこと無く、暦術の月朔は進みて退くこと無しとなり。〇建武八年中云々。此は後漢の光武帝と云ひしが年號なり。朱浮許叔二人が上言に。暦不レ正云々と云へるは。三統暦の術正からねば。時の分度の差の尚微なる間に。改更ふべしと云へるを。彼の王莽を亡して。天下初めて定まりし時なれば。事繁くて。暦法を考正するに遑無りしとなり。（本志なほ此の間に、至二永平五年一、官暦署二七月十六日食一、待詔楊岑見二時月食多先一レ暦、即縮二用算上一爲レ日、上言、月當二十五日食一官暦不レ中、詔書令二岑 普與レ官課一、起二七月一盡二十一月一、弦望凡五、官暦皆失、岑皆中、庚寅詔曰、令下岑署二弦望月食一、官復令下待詔張盛、景防、鮑鄴等、以二四分法一與レ岑課上歳餘、盛等所レ中多レ岑六事、十一年十一月丙子、詔書、令下盛防、代レ岑署中弦望月食加時上、四分之術、始頗施行、是時盛防等未レ能下分二明暦元一綜中校分度上、故但用二其弦望一而已、先レ是九年、太史中待詔董萌、上二言暦不正事一下二三公太常、知レ暦者一雜議、訖二十年四月一、無下能分二明據一者上と云へる事等ありて、次條に移れり）

【三十】至二元和二年一。太初失レ天益遠。冬至之日。日在二斗二十一度一。未レ至二牽牛五度一。而以爲二牽牛中星一。從レ天四分日之三。晦朔弦望。差レ天一日。宿差五度。章帝知二其謬錯一。以問二史官一。雖レ知二不合一。而不レ能レ易。故召二治暦編訢。李梵等一綜二校其狀一。

元和二年は。後漢の第三代章帝が世なり。〇太初とは。乃ち前條に謂ゆる三統暦なり。建武八年よ

り此年に至りて。又五十年を越つれば。失レ天益
遠は。しか有べき謂なり。○冬至之日。日在二斗
二十一度一云々とは。此暦は冬至日に。日在二牽牛
中星一と立たる法なるに。其の冬至の日に。斗星
の二十一度に在りて。牽牛の五度には至らざるを。
牽牛中星に至ると爲せど。天に從へば四分日之三
にて全日ならずと云へるなり。○晦朔弦望。差レ
天一日は。謂ゆる朔差といふ物にて。朔差一日な
れば。晦弦望ともに一日の差あり。○宿差五度と
は。牽牛の五度に至ると云ふ暦なるに。斗星の二
十一度に在れば。其の間に五度の差あるを謂ふ。
○章帝知二其謬錯一云々。史官は卽ち太史の官なり。
其の太史官の徒も暦の合ざる事は見て知れども。
其の暦を易ふべき道は知ざる由なり。○故召二治
暦編訢。李梵等一。編訢李梵は。治暦者二人の名な
り。（本志の注に、蔡邕議云、梵清河人也と云へ
り。）さて此の徒に其の狀を綜校せしめて。四分暦
を作れる趣は、是より後順帝が漢安二年に。尚書
侍郎邊韶が上言に委く見えたり。其の文に。世微
於レ數虧。道盛於レ得常。數虧則物衰。得常則國

昌。孝武皇帝。據二發聖思一。因二元封七年。十一月
甲子朔旦冬至一。乃詔二太史令司馬遷。治曆鄧平等一。
更建二太初一。改レ元易レ朔。行二夏之正一。乾鑿度。八
十一分之四十三爲二日法一。設二淸臺之候一。驗二六異一。
課效觕密。太初爲レ最。（以上の文は、此の人も史
記の暦書を熟讀せず、唯に前漢の暦志をのみ見て、
劉歆班固が誣言に欺かれて、乃ち其の暦志を約め
て書たる説なれば、非なるが中に、其の暦の日法
を八十一分之四十三と定めしを、乾鑿度に取れり
と云ふ説は、受る所ある説なり、但し本書に八十
一の一の字を脱せり、今は己が意をもて補へり、
さて六異とは六暦の異といふ事なり、）其後劉歆。
研幾極レ深。驗二之春秋一。參以二易道一。以二河圖帝覽
嬉。雒書甄曜度一。推二廣九道一。百七十一歲進退六十
三分。百四十四歲一超レ次。與レ天相應。少有二闕
謬一。（以上は前志三統曆の文を約めて記せる説な
り、）至二永平十一年一。百七十歲。進退餘分。六十
三。治曆者不レ知レ處レ之。推二得十二度一。弦望不レ
效。挾二廢術一者。得レ竄二其說一。至二元和二年一。小終
之數寖過。餘分稍增。月不レ用レ晦。朔而先見。（此

の趣は既に上に說たるが如し、元和を本書に永和と誤れり、今改めて、記せり、）孝章皇帝以保乾圖三百年斗曆改憲。就用四分。以太白復樞甲子為癸亥。引天從算。耦之目前。更以庚申為元。既無明文託之。於獲麟之歲。之不與感精符。單閼之歲同。史官相代。因成習疑少。能鉤深致遠。按弦望。足以知之。詔書下三公百官。雜議。（保乾圖、感精符ともに春秋の緯書の名なり、單閼とは卯の異名なる事已に出たり、）太史令虞恭。治曆宗。訢等議。建曆之本。必先立元。元正然後定日法。法定然後度周天以定分至。三者有程則曆可成也。四分曆仲紀之元。起於孝文皇帝後元三年。歲在庚辰。上四十五歲。歲在乙未則漢興元年也。又上二百七十五歲。歲在庚申則孔子獲麟。二百七十六萬歲。尋之上行。復得庚申歲。歲相承從下尋上。其執不誤。此四分曆元明文。圖讖所著也と有る是なり。（太史令と云へるより以下、四分曆の要文なり、此文に治曆の宗、訢と有るは、本文の編訢が事と聞えたり、治曆の宗と云へば、當時の治曆家の中に宗たる人なるべし、）此事なほ本志の末論にも。太初曆到章帝元和旋復疏濶。徵能術者課校諸曆。定朔稽元追漢四十五年庚辰之歲。追朔一日。乃與天合。以為四分曆。（四十五年を本書に三十五年と作るは誤寫なり、今これを改む、）元加六百。五元一紀。上得庚申。有近於緯。而歲不攝提。以辨曆者得開其說。而其元㪽與緯同。同則或不得於天然。曆之興廢。以疏密課。固不主於元とも所見たり。なほ次條に注ふを俟べし。

【三十一】當漢高皇帝受命四十五歲。陽在上章。陰在執徐。冬十有一月。甲子夜半。朔旦冬至。日月閏積之數。皆自此始。立元正朔。謂之漢曆。又上兩元。而月食五星之元。並發端焉。

漢の高祖が受命とは。秦の三世子嬰を降せる乙未歲にて。乃ち漢元年なり。是より四十五歲は。文帝が後元三庚辰の年なり。（陽在上章とは庚に在るを云ひ、陰在執徐とは、辰に在るを云ふ、陰陽は謂ゆる歲陰歲陽にて、乃庚辰年と云ふ事なり、）

其は前條に引たる邊韶が上言に。四分曆仲紀之元。起於孝文皇帝後元三年。歲在庚辰。上四十五歲。歲在乙未。則漢興元年也と有るにて知るべし。（冬十有一月。甲子夜半。朔旦冬至云々。此の庚辰の年は太昊の古曆を以て攷ふるに。丙午蔀の第三十八年に當り。其の冬十一月は。乙丑朔午冬至にて。此の蔀の第三章首にこそ有れ。蔀首には非ざるに强ひて甲子に退けて曆元と爲たるなり。其は前條に引たる本志の末論に。追漢四十五年。庚辰之歲。追朔一日。乃與天合。以爲四分曆と有る是なり追朔一日とは。朔を一日退けたる義なれば。本術は乙丑なりしを。甲子と爲たること論ひなし。（此一事を以ても舊く黃帝、顓帝、虞、夏殷周など六曆の名有れど、皆實は太昊古曆なりと云ふ己が攷への誣ざる事を曉るべし、然るは文帝が後元の頃は、全顓帝曆を用ひし時なるに、其の曆日また〳〵太昊曆に同ければなり、又是に就ても彼の壽王が言に、其の顓帝曆を黃帝曆なりと云へるが妄ならぬ事しるく、且其の時の治曆者が書に、壽王が謂ゆる黃帝曆は乃ち殷曆なりと云へるも實然る事なるを證すべし、）然れば此の曆術もまた四分日之二を虧き。小餘四百七十分を去たる曆にて。前に經過ぎし初章二章の四分日之二の天に係る餘分は盡ること無き拙策なりけり。（其は次條に太初曆有餘分一と有るは、初章一を過たる故に、四分日之一餘なる由なるが、此の四分曆は、初章と第二章とを過して、第三章を元とする故に、上二章の餘分四分日之二の殘る謂なること推て知べく、また四百七千分を去たりと云ふゆへは、上の第二十口條に出せる譜圖の第三十八年地節三年正南と有るは第三章首なるに、小餘四百七十分と有にて知るべし、）○日月閏積之數。皆自此始云々は。日とは節氣をいひ。月とは月朔を云ふ。そは氣策は冬至に始まるを。此の謂ゆる甲子夜半の朔旦冬至より數を起し。朔策また此の夜半の朔旦より數を起して。置閏の數をも知り。曆元を立て朔を正して。之を漢曆と謂ふ由なり。○又上三南元而云々とは。先文帝が後元三庚辰の年冬十一月甲子夜半朔旦冬至を曆元に定めて、後來の紀千五百二十歲の曆法を立て地紀となし。然して其の上

世天紀。また其の上の人紀開元を推し。合せて三紀四千五百六十歳に調へて。日食五星の推歩も。皆其元より發端せる由なり。（前々條に引たる邊詔が上言に記せる此の時の治曆編訢等が議に、上二百七十五歳、歳在庚申、則孔子獲麟、二百七十六萬歳、尋之上行、復得庚申歳、歳相承從下尋上、其執不誤、此四分曆元明文、圖讖所著也と云ひ、また彼末論に、元加六百上得庚申云々など云へるは、乃此事の論ひなり。）斯て其の天紀の首歳は庚申。其人紀の首歳は庚子に當る。是の四分曆を庚申元と謂ふことは。其の天紀の首歳い庚申なるが故なりかし。

【三十二】元和二年。二月甲寅。遂下詔曰。朕聞。古先聖王。先天而天不違。後天而奉天時。春秋保乾圖曰。三百年斗曆改憲。史官用太初鄧平術。有餘分一。在三百年之域。行度轉差。寖以謬錯。冬至之日。日在斗二十一度。而曆以爲牽牛中星。先立春一日則四分數之立春日也。於氣已迕。用望平和。曆時之義蓋亦遠矣。今改行四分。冀百君子。以明予祖之遺功。於是四分施行。

此の元和二年二月の詔に曰は。故事どもを數引並たる長文なるを。其は上條々に往々引出せる事等にて。今の要に非ざれば。多く略きて擧たるなり。〇春秋保乾圖は。春秋有りて後の。緯書なること云ふも更なり。其の書今傳はらざれば。委しき趣は知ねども。〇當昔世に尊み用ひし書なる故に。四分曆を作るに。此讖文を其の則とは爲たるなり。〇史官用太初鄧平術云々。太初曆を鄧平術と云ふ事は。史記に言ざる事なるを。此は前漢曆志の誤を受たる言なること上に謂ふが如し。（然れば此文は鄧平の二字を去りて、用太初術と謂へる意に見て在るべし）さて其太初曆術に。有餘分一と云へるは。四分日之一の餘ある由なり。其は彼壽王が論に。太初曆虧四分日之三と云へるは。彼の條に論ふ如く。太初曆は乙酉蔀の初章を過ぎ

て。第二章に入る日分に。甲子蔀首の日分を當たる故に。乙酉蔀の。二三四の三章に經べき。四分日之三を虧たること。壽王が言の如くなるが。其の初章の次へ。また蔀首初章を當たるは暦面こそ調ひて見ゆれ。彼の過たる初章の四分日之一は。天に係る餘分なれば其結び盡べき時なきを。有ㇾ餘分一ㇾと云へるなり。是にても前の壽が言の妄ならず。妄人等が妄なる事は悟りつべし。（凡て古暦を進退する術、よし其日の干支は合たりとも、其の餘分の合ざること、皆これに准へて知るべし、但し諸蔀氣朔ともに、其の日分並同じければ、蔀首に蔀首を合すれば、其の日分密合すれども、然ては日時の干支一つも合はず、是を以て太初、三統四分、乾象等の諸暦皆正からざるなり。）〇在ㇾ三百年之域ㇾ云々文意は。保乾圖の讖文に。暦法は。初立より三百年にして。其の憲を改むと云へるに。太初暦の作たる丁丑の歳より。此の元和二丁丑年に至りて百八十一年にて。三百年の域内なるに。行度に轉差を生じ。寖もて謬錯の出來しと訝しく思ふ由なるが。此は太初三統の元を。實に太元の神策なりと尊信し、かつ右の讖文を謬解せる意にぞ有ける。（此暦元を太元の神策なりと謂ふは、武帝が當時の誤なること、第□十□條に云へれば、今更に云はず。）抑是の讖文は。都て暦法は。三百年にして其憲を改易すべき物ぞと云へる義には非ず。春秋の世を稍過たる後世に達人ありて。既に氣朔に差を生せし機運を初めて仰觀俯察して。此後三百年にして。古暦の憲を改むべき時來らむと。懸記せる讖文なること疑なし。然るは太昊氏以前の太古暦は更なり。太昊以後の合朔暦も。其の往昔より春秋の世の稍遙後の世まで。差のなく相續し來れば、其を毎三百年にして憲を改むと云ふべきに非ず。且しか改むる後より言むには讖文に非ず。是の謂をも惟ふべし。（なは此の讖文の事、また太古より春秋の世の遙後まで、氣朔に差の無りし事など、和漢の暦算家の絶て知ざる事なれば、訝かる人も多かるべし、古暦傳の終條に委く說たるを見て知るべし。）「冬至之日。日在ㇾ斗二十一度ㇾ云々は。既に前條に說たるに同じ。〇先ㇾ立春ㇾ一日云々とは。斗の二十一度に日の在る

は。立春の一日前にて。乃ち四分暦の立春日なり。暦時氣はかゝ迕ひつゝ。聲を平和に用ふる故に。暦時また天に遠しと云へるなり。(冬至と立春との間に、小寒大寒の二氣あり、然るに其の三統暦に、冬至とする日の、四分暦にては、立春日なりと云ふは、三十日餘の迕なり、いかに迕ふとも然る大迕は有まじき事と思へど、文にかく有る上はさる事なけむとは諍ひ難くなむ)〇今改行四分云云。文は通えたるが如し。予か祖とは。高祖劉邦が事なり。扨是の暦を四分暦と謂ふ由は下に見えたり。

【三十三】暦法之生也。乃立儀表以校日景。景長則日遠天度之端也。日發其端。日行一度。三百六十五日四分日之一。周而爲歳。然其景不復。四周千四百六十一日而景復初。是則日行之終也。察日月倶發度端。日行十九周。月行二百三十五周復會于端。是則月行之終也。

此の條及び次條は。至四分の暦法を述たるにて。表を立て景を測りて。冬至の入を知るを始とす。日景の長き極みは。日遠く天度の端に至る是冬至なり。(なほ本志に、斗之二十一度、去極至遠也、日在焉、而冬至、群物於是乎生、故律首黄鐘、暦始冬至、月先建時夜半と云へるは、即ち謂ゆる天度之端なり、)日其の端を發し周りて歳を爲すに三百六十五日と四分日之一を行く是一歳なり。然れども其の景復せず。斯の如く四周千四百六十一日にして景初めに復す。これ日の一行にて四年の日數なり。是を以て三百六十五日の年三とせ。三百六十六日のとし一年にて。日法四分の數餘分なし。是四分暦といふ事本なり。(察日月倶發度端云々とは。日月の謂ゆる天度の端より發るを察るに。日の三百六十五日四分日之一づゝ十九周する間に。月は二百三十五周して。復度端に會するが。月行の終ぞと云へるにて。是乃ち一章十九年なり(月行二百三十五を、本志に二百五十四と有るは誤寫なれば改めつ、また此の條、本志の文に少か通え難き事あり、其も引直して記せるなり、)

【三十四】置十二中以定月位。有朔而無中者爲閏月。閏七而盡其歳十九。名之曰章。章首分盡。四之俱終。名之曰蔀。以甲子命之。二十而復其初。是以二十蔀爲紀。紀歳青龍未終。三終歳後。復青龍爲元。元法四千五百六十。紀法千五百二十。蔀法七十六。章法十九。周天千四百六十一。日法四。

十二中とは。冬至。大寒。雨水。春分。穀雨。小滿。夏至。大暑。處暑。秋分。霜降。小雪の十二中氣なり。年々の二十四氣と月周とを合せて。中氣の當る月を本月と定め。中氣なき月は前月に隷して閏月と爲せば。七閏ありて十九歳の月數二百三十五を盡す。こを章と名け。四章を積みて餘分皆盡る章首に至るを蔀と名く、七十六歳なり。○以甲子命之。二十而復其初云々は。甲子朔旦冬至より數ふる故に。初蔀七十六年を甲子蔀と命け。次々二十蔀にして其の初に復するを一紀と云ふ由なり。○紀歳青龍未終云々とは。紀歳は二十蔀千五百二十歳なり。青龍とは歳の干支を謂ふ。一紀の年數にては。歳の干支初に復せず。三紀四千五百六十年終りて。初發の干支に復するを。一元と謂ふ義なり。(是の暦は庚辰の年より始めたる故に其より一紀終りて庚子の年に至り、此の紀終りて庚申の年に至り、かく三紀終りて、また庚辰年に復するなり。)斯て其の日法の四分は更なり。章蔀紀元の日數月數また蔀名も何も我が執る古暦法に異ること無ければ。氣策の十五日と三十二分日の七分なること。朔策の二十九日九百四十分日の四百九十九なる事も著明に所知たり。故今本志に出たる三紀の譜の誤を正し示すこと左の如し。

	天紀歳名	地紀歳名	人紀歳名	朔旦冬至
甲子蔀	庚子	庚申	庚辰 文帝後元三年	甲子 癸卯 癸未 癸亥
癸卯蔀	丙辰	丙子	丙申	癸卯 壬午 壬戌 壬寅
壬午蔀	壬申	壬辰	壬子	壬午 辛酉 辛丑 辛巳

蔀					
辛酉蔀	戊子	戊申	戊辰	辛酉	庚子 庚辰 庚申
庚子蔀	甲辰	甲子	甲申	庚子	己卯 己未 己亥
己卯蔀	庚申	庚辰	庚子	己卯	戊午 戊戌 戊寅
戊午蔀	丙辰	丙子	丙申	戊午	丁酉 丁丑 丁巳
丁酉蔀	壬申	壬辰	壬子	丁酉	丙子 丙辰 丙申
丙子蔀	戊子	戊申	戊辰	丙子	乙卯 乙未 乙亥
乙卯蔀	甲辰	甲子	甲申	乙卯	甲午 甲戌 甲寅
甲午蔀	庚申	庚辰	庚子	甲午	癸酉 癸丑 癸巳
癸酉蔀	丙子	丙申	丙辰	癸酉	壬子 壬辰 壬申
壬子蔀	壬辰	壬子	壬申	壬子	辛卯 辛未 辛亥
辛卯蔀	戊申	戊辰	戊子	辛卯	庚午 庚戌 庚寅
庚午蔀	甲子	甲申	甲辰	庚午	己酉 己丑 己巳
己酉蔀	庚辰	庚子	庚申	己酉	戊子 戊辰 戊申
戊子蔀	丙申	丙辰	丙子	戊子	丁卯 丁未 丁亥
丁卯蔀	壬子	壬申	壬辰	丁卯	丙午 丙戌 丙寅
丙午蔀	戊申	戊子	戊申	丙午	乙酉 乙丑 乙巳
乙酉蔀	甲申	甲辰	甲子	乙酉	甲子 甲辰 甲申

本志誤りて蔀首名の甲子癸卯等を天紀歳名と題し。庚辰丙申等を地紀歳名と題し。庚子丙辰等を人紀歳名と題し。庚申丙子等を蔀首と題せり。そは此の本志の成れる蔡邕劉洪等が當時の誤には非ず。後漢書を集記せし范曄よりして誤り來れるか。其後の誤寫なるか知らず。今訂正して私に章蔀朔日冬至を補ひ記しつ。命歴序考に出せる古暦の讖圖と合せ見て。其の歳名こそ異なれ。同じ暦法なるを。唯時々に進退消息せる者なる事を辨ふべし。(其の進退消息の趣は煩はしければ此に載さす、本志に就て見べし、)さて此の暦を施行せる元

和二年より九十三年のち靈帝が光和二年と云ける歳に至りて。郎中劉洪と云ふ者。この暦法の疏闊なる事を知り。始めて月行に遲速ある事を悟りて。乾象暦といふを作れり。然るに其の暦また此の四分暦に本づける物なり。（此等の事また本志の末論に、光和元年中議郎蔡邕郎中劉洪、補續暦志、邕能著文、清濁鐘律、洪能爲算、述敍三光、今考論其業、義指博通、術數略擧、是以集錄爲上下篇、放續前志、以備一家と見え其の上篇の注に、劉洪字元卓、泰山蒙陰人也、洪善算當世無偶、作七曜暦、及在東觀、與蔡邕共述律暦記、考驗天官、及造乾象術、十餘年、考驗日月、與象相應、皆傳于世と云へり、其の乾象暦術の事は委しく晉書の暦志に所見たり）斯て此の後の代々に種々の暦法あれど。我が執る太昊古暦に關る事なく。世の暦算家の普く知る所にして。我が論ふべき事にも非ねば。唯我が知れる古暦の説をのみ述て。其の知ざる所をば闕如すること斯の如し。（然れば此の書を讀覧たらむ後は、古暦傳に就て其眞式をよく知り辨ふべきものなりかし）○玆に或人問ふて曰く。杜預が長歴の發端に。自古已來。諸論春秋者。多述謬誤。或造家術。或用黃帝以來諸歴。以推經傳朔日。皆不得諸合。日食于朔。此乃天驗。經傳又書其朔日食。可謂得天。而劉賈諸儒說。皆以爲月二日或三日。並公違聖人明文。其蔽在于守一元不與天消息也。（劉とは、前漢の劉向父子、後漢の劉洪などを指し、賈とは、後漢の賈逵を指すと聞ゆ、其の說等は並に歴志に見えたり、聖人の明文とは乃ち春秋の之を指せり）余感春秋之事。嘗著歴論。極言歴之通理。其大指曰。天行不息。日月星辰。各運其舍。皆動物也。物動則不一。雖行度有大量。可得而限。累日爲月。累月爲歳。以新故相序。不得不有毫末之差。此自然之理也。故春秋。日有頻月而食者。有曠歳而不食者。理不得一。而算守恒數。故歴無有不差失也。始失于毫末。而尚未可覺。積而成多。以失弦望朔晦。則不得不改憲以從之。書所謂。欽若昊天歴象。日月星辰。易所謂。治歴明時。言當順天以求

合。非苟合以驗天者也。推此論之。春秋二百餘年。其治歷通變多矣。（以上の文は、宮板の釋例と、後漢書歷志の注に引たるとを校して、其の宜きに從へり、堯典の文を普通には、欽若昊天、歷象日月星辰と句讀すれど、予は近き西土人のかく句讀せるに從れり、其は誰に有けむ忘れたり）雖數術絶滅。還尋經傳微旨。大量可知。時之違謬。則經傳有驗。學者固當曲循經傳月日日食。以致晦朔。以推時驗。而見皆不然。各據其學。以推春秋。此無異度己之跡。而欲削他人之足也と言ひ。古今の十歷を幷攷して。春秋と驗するに。乾度殊勝なりと。其の法に依りて春秋長歷を作り。是春秋當時之歷也と言るを。和漢の先達甘心して。後漢書の劉昭注を始め。諸書に引用せり。然るに今の歷論は。是の說と甚く異りて。信難きに似たり。尙論辨あらば聞まほし。

答。遠を尊びて近を卑むるは。俗學者の通蔽なれば元より論ふに足ねど。杜說是に似て皆非なり。然るは黃帝以來の諸歷と云へば。其の中に夏殷の曆も有ること。勿論なるが其の二曆やがて古曆にて。周曆の本術なるに。春秋なる月朔の半を過ぎて合する上は。皆不得諧合とも謂べからず。（且其の合ざる月朔も、姫昌が進退消息だに無らましかば、皆諧合を得けむこと、言ふも更なり、もし杜預が見たりし夏殷の曆、實に皆諧合を不得ましかば、其は夏殷の眞曆には非ざりけむ、其の世に六曆の僞本も有しこと既に第十一條に論ふ如くなれば就て見るべし、）殊に日食于朔。此乃天驗。云々と云へるも。後世曆家の俗意にこそ叶へ。古曆の眞旨には合はぬ說なり。然るは古曆もと。節炁をこそ主とすれ。合朔を主と爲たる道には非ず。抑節炁の來經は。古曆傳に出せる本文の如く。太一紫宮に斗を執りて左旋せしめ。其の八節に。八宮に移居するに因る事にて。日月の交會より起るに非ず。民に時を授くと云ふは。節炁を知しむる義にて。合朔は末なれば。況て交食には。不拘し事なり。（そは天經或問など、凡て天文書類に、上推帝堯之時、冬至初昏昴中、日躔虛七度、夏不降時、冬至日退女十一度、商武乙時、冬至日退牛七度、周簡王丁亥、冬至日退斗二十三度、

漢太初元年丁丑、日退斗二十度、など有れども、天地開闢より、漢太初の後までも、只一古曆にて、節氣の干支、定法に差はざりしを以て節氣の來經と、日月の纏度と別なること知らるゝ、また太初以後、近時に至るまでの、日躔をも出せるを觀るに、其の差夥しき事なれど、節氣に然はかりの、相違なきをも思合せて辨ふべし、）然るに杜預。春秋の經傳に。某朔日食と書せるを以て。春秋時歷の。天を得たる徵と爲たるは甚陋し。其は前漢の天文志に。古人有言。曰。天下太平。月不食朔。月不食望と載せる。古曆の要義を知らざるなり。周曆諶に天を得むには。孔子も爲邦の大事を敎ふる語に。行夏之時とは云ふべきに非ず。（また周書に、夏數得天、百王所同、と有るも同義にて、共に夏曆の周曆に勝りて、正しき故なること、上下に論ふが如く、其は正朔のみの事に非ず、節氣合朔交食の事も何も、夏時の法のまに〳〵行ふべき由なり、是信に然る事なり、抑殷湯周文ら、思ふ旨ありて新曆を立ると、其の正朔を易つれど、心には厭まで夏曆の善を知れる故に、郊祀には每も夏正を用ひしなり、其は易緯の通卦驗、また乾鑿度に、三王之郊、一用夏正と有るにて知べし、故こゝに己近頃、二句の漢語を作りて、「古曆恢恢、疎而不失、後曆碎々、頻而能跌」とぞ云ふなる、其は夏曆疎に似て、熟く其の憲を知り得れば百王これを同くして、終古に用ひむも弊なく、周代より以來の曆は、朱熹が語に、愈精愈密而愈多差と云へる如く、其隨にては、十年も用ひ難きを以てかくは謂ふなり、元の授時曆、其の世に八十年用ひて、差忒無りしと云ふ事も聞ゆれど、實には一年も、不盡なき年は無りし物をや、そは何を以て知るなれば、日法の一萬なるを以てこれを知れり、）また諸儒說。皆以爲月二日。或三日。並公違聖人明文と云へるは。經傳中に某朔となく。唯に某日食と記せるも許多あるを。前儒の或は二日或は三日など云へるを非とし。朔と云ざるも。日食は必ず朔なる、孔聖の明文に違へりと言ふ意なれど。公羊傳に。日食或言朔。或不言朔。或日。或不日。或失之前。或失之後。失之前者。朔在前也。失之後者朔在後也と有

れば。諸儒の說。その實を得たりと云べし。（春秋に日食凡て三十六ある中に、朔と書ざるが八ありゝ左傳に、某不レ書レ朔、官失レ之也と云へれど、此の說をのみ信むべきに非ず、然れど穀梁傳に、不レ言レ朔者、食晦也と云へるは信られず、其は僖公十五年、己卯晦、成公十六年甲午晦、みな晦なるに、某日食、と書たればなり）抑、春秋に某朔と云ざる食は。周代の曆は。日食を必ず朔に出して其の曆の天を得たりと云ふ。證に爲むと欲して晦朔を進退せしかど。時の日官その食限を失して。或は晦。或は二日などに食せる故に。史官ら。例の國惡を諱みて。其の日を記さず。其となく。其の失策を介知しを。孔子も。其の本史に效へると見えたり。（但しかく言はゞ、彼の僖公十五年己卯晦、成公十六年甲午晦などの食に、其の日を書たるは、何と云ふも有ぬべし、此は其の時々の史官の、然しも諱あへず、晦なる日を、適に記し存せるも有りしを、經には、其の本史のまゝに記せりと見むに難なし、もし杜預が說の如く、孔子實に、或は朔と書し、或は朔なるを、朔と書せざる事も有なむには、春秋とも有らぬ、文法の不律と云べし。）また或は予が說に。時の日官。その食限を失せる故に。或は晦。或は二日に食ありと云ふを難めて。周の世頃には。未食限の推步は。無りし物をと論ふも有むか。其はなほ。思慮の委からざるなり。抑日月食のこと。大戴禮記誥志篇に。孔子曰。古之治二天下一者。必聖人。聖人有レ國。則日月不レ食。星辰不レ孛と有るは。此の前文に據るに老子に聞たる語と聞ゆるを。夏の世以往の古說に。交食の事の所見なきと。思ひ合すれば。是の說誠に然るべし。（然るに、大戴禮の補注に、日月之道、經緯同レ度、於レ是有レ食、曆象之常、可二推而知一、然人事德二于下一、天譴見二于上一、則有二頻食一、有レ不二以レ朔食一、有下不レ入二交限一而食上、聖人有レ國日月不レ食者、非レ無レ食也、七政順行、二儀貞明、無下不レ當レ食而食一者上耳、と云へるは、後に交食限の數の、已に定まれる世の義を以て、古へを思へる說なれば取るに足らず。）斯て日食の始めは。竹書紀年に。禹王より四世に當る。仲康が五年癸巳歲に。秋九月庚辰朔。日有レ食レ之。命二胤侯一帥レ

師征義和と有る是なり。（庚辰を本書に、庚戌と有るは、誤寫なれば改めつ、其は此の年は、八月大、庚戌朔、九月小、庚辰の朔なり、予が古暦月歩式を見て知べし、明末に記せし、古今交食考と云ふものに、次に引く胤征の文を擧て、按唐大衍暦、作仲康五年、癸巳歳、九月庚戌朔日食在房二度、元授時暦亦稱仲康五年癸巳九庚戌朔交泛二十六日云々、と有るは、今引く紀年の傳へを取りて、推歩に得たる如く記せるなり、然るに庚戌と有るが語字なる事を知ざるは、大衍授時二暦の作者ともに、古暦法を知ざればなり、）是事を夏書胤征に。羲和湎淫。廢時亂日。胤往征之。作胤征。惟仲康肇位四海云々。乃季秋月朔。辰弗集于房。（孔傳、辰日月所會、房所舍之次、集合也、不合、即日食可知、）瞽奏鼓嗇夫馳。庶人走。（瞽樂官、樂官進鼓、則伐之、嗇夫主幣之官、馳取幣、禮天神、衆人走供救日食之百役也、）羲和尸厥官。罔聞知。（主其官、而無聞知於日食之變異、所以罪重、）昬迷于天象。以干先王之誅云々と有り。此は交食の始めなりし故に。人々かく驚き。羲和も聞知すること罔りしなり。然るに厥官に尸なりとて。征伐せるは。后羿無道と謂ふべし。（索隱するに、此の時しも、后羿と云ふ者逆威を振ひて、太康と云へる君を廢して、仲康は其の弟なるを、羿が立て君と爲たるにて、政事は羿が攝れる頃なりき、羲和とは、羲氏和氏とて、其の官を世々にし威勢もあり舊家なれば、羿が所爲を惡み、謗れる事など有けむ故に、此の時の日食を、知ざりし事を罪に託して、羿が心と、胤侯に誅伐しめて、宜々しく胤征を作れるなるべし。）さて仲康よりのち。夏の世三百八十九年。殷世五百八年の間に。日食ありし事を記せる物なし。然れども。已に一度あり始ては。漸々に間近かるべき道理なれば。殷の世の長き間に。數度有けむ事は。云ふも更なり。然れど元より推歩の術なく。此を變事として。人主の誡となし。晦にまれ。二日にまれ。暦日には然しも拘らず。在けむかし。（此は何を以て云ふなれば、夏暦は更なり、殷暦も、其の晦朔に、進退なきを以て知られたり、其は既に論ふ如く、日月の食元より、民

に節氣を授くるに、用なき事なればなり、此義は今の清國の時憲書とて、民に授くる頒曆に節氣を主となし日食を擧ざるにても辨ふべし。）斯て周代に至りて。始めて交食の事の所見たるは。竹書紀年に。武王より第十二代。幽王が六年。乙丑歲の下と。冬十月辛卯朔。日有レ食レ之と有る是なり。此の王を刺れる小雅の詩にも。十月之交。朔日辛卯。日有レ食レ之。亦孔之醜とあり。（按するに是歲は甲午蔀の第三十二年に當る歲にて、十月は古曆の八小建酉月なり、斯て其の朔は庚寅なるを、周曆に、進めて辛卯と爲たるなり、安井算哲が書詩禮曆考に、唐志云、十月之交以レ曆推レ之、在二幽王六年一、按幽王六年乙丑、十月辛卯、此用二周正一也、朱傳、謂二夏正一誤也と云へるは然る言なり、但し唐志の說は、また紀年の傳へを取りて、例の推步に託せるなり。）紀年なほ是より後は。平王が五十一年辛酉歲の下に。二月己巳。日有レ食レ之とあり。此は春秋魯隱公が三年と云ふ年にて。乃ち經に。春王二月己巳。日有レ食レ之と記せり。（紀年の、諸本に、己巳を乙巳に誤れり、然るに、隋の曆志に、

今以二甲子元曆一推二算是朔日一、隱公三年二月乙巳日有レ食レ之、推二合乙巳朔一云々と云へるは、紀年の傳へを取りて、推步に託せれど乙巳の誤寫なる事を知らず、春秋の己巳をさへに、乙巳と爲せるなり、曆家の後より推たる說等の、大抵は信られぬこと、是にても知べし。）但し此は癸酉蔀の第十二年に當る歲にて。謂ゆる二月は建寅月なるが。古曆の正月小。周曆本術の三月にて。其の朔は其に戊辰なり。然るに時の日官失りて。此を二月と爲たる耳ならず。己巳に進朔する事をも忘れて。二日に日食せし故に。紀年春秋共に。其の失策を諱みて。朔と云ざりし也けり。然れば是條の公羊傳に。不レ言レ朔者二日也と云へるは信に然る說なり。（穀梁傳に、言レ日不レ言レ朔、食二晦日一也と、言へれど二日なるも有ること是にて辨ふべし。）さて是よりして。春秋二百四十年の間に三十六食あり。隱公三年より以前は幽王が六年十月の食より外に記し傳へたる物は無れど僅に二百四十年の間に。右の如く有りしかば。彼仲庸の時より打續きて。繁くなり以來し故に。姬昌が作曆の當時。すでに其

の食限をも粗知りて。朔に合さむと欲たること疑なし。然らでは。朔の進退を爲べき謂無きを思ふべし。然らば其の交食の時に朝に鼓を打ち。社に幣を捧げなど。馳り騒げるは。何の由なると言ふに。其食限は知りつゝも。日を人君の象とすれば。仍古例の如く變事と爲し時王の誡となし來れること。孔穎達が十月之交の詩の正義に云へるが如し。（藤原明遠の學山録に、古者不精推步而不豫知之、故臨其蝕時見而知之、始以爲災、雖聖人亦不深窮其理耳と云ひ、伊藤長胤も此に似たる說あり、俗の漢學者たち、恒に文武周孔などの通識せざる事はなき如く誇り云ふを、近く西洋學する徒など、傍痛がりて、其の聖人ら、日月の交食に、常限の推步ある事をだに得知ずて、畏り驚けるは、天文歷數の眞理を都て知ざりしなり、此の道の眞理を知ざる倫、いかで萬事の眞を知らむと嘲けるに、儒者この義に至りては、面を伏せて、應ふること能はざるを、往々に見聞に及ぶ事なれど、己が右の說は、聊かその面を興さしむる說と云ふべし、尙是の上に力を加へむには、

太初三統の二曆とともに、其の本術は周曆なるが、其に、食限推步の術あるは、疑なく其の原は周曆の舊術を取れるなり、然るは其術もし、漢代の人の創めし事ならむには、必ずその由を云ずば、在るまじき事なるに、史記にも漢書にも、其由見えざれば周の古法たること、又更に論ひ無るべくこそ）さて杜說に其蔽在于守一元不與天消息也と云へるは。其の謂ゆる黃帝以來の諸曆。及び諸儒說の議なるが。漢の初元以來の儒說は然も有るべし。殷以前の諸曆は。太昊の古曆。その本術なるが故に。唯一元にて。消息を用ふる事なく天を得て。合朔節氣密合なりしを。周曆は。當時氣朔の差は未無き頃なるに。無益に元を易へて消息せる故に。甚く亂雜なること。上に論ふが如し。然るに杜預是の義を覺らず。聖文と云ふに眩惑して。天を得たりと之を信じ。さる曲曆に古曆の直なるを諳せて合ざるを。却りて。古曆の一元を守れる蔽と思へるは。此人の當時。已に氣朔の差を生じ。改元消息するを。曆道の本道とせる後の蔽を。蔽としも知ざる故の非說なり。（そは日の

始めて分判して、旋り初たる日は甲子、歳は甲寅にして、八十年に節氣本復し、月の分判して運り初たる日は甲子、歳は甲戌にして、七十六年に合朔一周し、四千五百六十年平氣にして、冬至朔旦密合せるが、其の歳數竟りて、漢の元帝が、初元二年甲戌歳より、始めて節氣合朔の差を生じて、今日に至れる趣は、中々に此に盡すべくも非ず、既に春秋命歷敘攷の第十八條に論る本意を思ひ合せ、なほ委くは［　］に論ふを見るべし、）然ればं。余感二春秋之事一。嘗著二暦論一。極言二暦之通理一。其大指曰と云ふより。推レ此論レ之。春秋二百餘年其治歷通レ變多矣と云ふまでの論も。既に歳差の出來し後の暦論には。粗叶へる說なれど。漢代以往の。未歳差無りし世の暦にも。概して是の論を及ぼせるは。謂ゆる杓子定規なり。往古も其の憲を改めたる證に。堯典また易大象の文などを引たれど。此は舊來の曆元を改むる義には非ず。元より節氣の差なきが故に。堅固に一元の恒數を守りて在れど。只當時々に。古法の亂るゝ事もや有ると修治點檢を加へし迄の事にて。堯典の文意も。昊天上帝の往世より。傳承し來れる曆數、その日月星辰の法數に欽み若ひて。民に時を授くる由にこそ有れ。杜預が謂ゆる順天求合の義には非ざる物をや。（其は命歷序に、堯曆の事を、虞舜夏商咸亦受レ焉と云へる、その殷曆の古曆と吻合するを以て、唐虞及び夏代の曆ともに、同じ殷曆なること、亦更に論を俟まじき事なるを、春秋時曆の如く、變通せる物と思へるは、何に杜氏が非ならずや、但し堯典の語に就ては、別に論べき旨ありて第六條に記せれば、立却り見て知るべし、）さて雖二數術絶滅一。還尋二經傳微旨一。大量可レ知云々とは。周曆の本數術の絶滅せる由なれど。實に曆然と存する事。命歷序の魯僖公五年。正月壬子。朔旦冬至云云の條。また孔子治二春秋一。退修二殷之故曆一云々の條。及び乾鑿度の數術にて著明なるを。杜預是らの古書を見ざりしか。將見つゝも。緯書を嫌ふ例の儒意に。等閑に見て解し得ざりしか。最と不審しき事にこそ（命歷序乾鑿度ともに漢書白虎通などに引たる程の古書なれば、晉人なる杜預が見ざるべき由なければ、實には見つゝも右等

の文義を、解し得ざりしにや有らむ）斯て經傳の微旨を尋ね。時驗を推して。知りたりと有るは。襄公三十年戊午歲。二月癸未日の傳なる。絳縣の老人が。其の生年を語るに。正月甲子朔。四百有四十五甲子矣。其季於今三之一也。と云へる其の日數を計すれば。二萬六千六百四十日にて。之を逆推するに。文公十一年乙巳歲に當ること。傳の說の如くにて。襄公三十年二月癸未日に至りて。七十四歲なるが。其の謂ゆる正月は建寅月にて。周曆の三月なり。然るに正月と云へるは夏正なりと。（但しこは杜氏より早く、前漢曆志なる劉歆が三統曆譜にも然云へり）この傳に據りて閏を置ことを覺れる由にて。雖不知春秋時曆本術。今則用此。驗衆閏云々と言ひて。其の長曆に置たる閏を視るに十に八九は錯置にて。其の一二本術に相應せるも。無きに非ざれど。其は皆偶當なるは。是もと置閏の定法を知らず。苟合以て春秋時曆に驗せむと欲せる故なり。（かく論ふ精義を知むと欲せば、別に著す春秋曆本術編を見て知るべし、然れど近き一二の端緒を云はゞ、文公元年乙

未歲の傳に、于是閏三月、非禮也、先王之正時也、履端于始、舉正于中、歸餘于終、履端于始、序則不愆、舉正于中、民則不惑、歸餘于終、事則不悖、と有る所の杜說に、閏當在僖公末年、誤于此年三月置閏、故時達曆者譏之、と云へる僖公末年は、文公元年の前年甲子午歲なるが、其は閏年に非ず、文公元年實に閏年にて、其十一月に閏を置べきを、失りて三月に閏せる故に非禮とし、先王正時の論は有るなるを、杜預此の義を知ざるなり、又文公十二年丙午歲は、九月に閏ある年なるに、杜預錯りて十一月に置き、其十三・十四、十五の三年を經て、十六年庚戌歲の、五月に閏を置たれど、十二年十一月の閏より、此の五月に至りて、四十四月なり、斯の如き置閏の法は、絕て無き事にて、實には十五年の六月と爲たる月ぞ閏月なる、是らを以て、杜氏が閏法を知ざること最著なるに非ずや、孔穎達が正義に、杜爲長曆約準春秋日月、與常曆不同、故置閏遠近不定、と云へるは阿黨と云ふべし、閏を置く定法の委き趣は、太昊古曆傳に、

其の本文を擧て注し、其の概略は、既に第十四條に論へれば今更に云はず。）抑かの絳縣の老人が謂ゆる正月甲子朔は。實も夏時なるが。建寅月にて。周曆の三月なること杜說の如くなれど。此は冬至の朔旦ならねば。數原と爲て。置閏の法を得べき朔に非ず。もし左傳中に於て。其の法を得むと欲せば。僖公五年正月辛亥朔旦冬至を。數原と爲べかりしを。實は周曆も。其の本術は。蔀法なる事を知ざる故に。こゝに法を求べき事をも知ざりしなり。（此の人むげに、蔀法を知ざる事は、その著せる春秋左傳の集解、及び釋例ともに、一言も、章蔀等の事に及ざるにて所知たり、苟も章蔀紀元の法を知らで、三代の曆法を談ずるは、九宮の規矩ある事を知ずして、傳敎の臺を創建せむと欲るが如し、豈これを匠人としも云むや、）斯く其の朔策を既に歲差を生ぜし後に作れる。謂ゆる乾度曆の。其術合二日行四分之數一。而微增二月行一。用二三百歲一改レ憲之意。一元相推。七十餘歲。承以二強弱一。強弱之差。蓋少。而適足三以遠通二盈縮一。と云へる悳曆を以て。經傳の月日に強會し整へて。此を春

秋當時之曆也とは。何ちふ誣言ぞも（そは日行を四分に立て、三百年にして憲を改むるといふ策は春秋保乾圖を謬解して、後漢の章帝が世に用ひたる四分曆の法なり、然れば其の謂ゆる乾度曆は、四分曆を本術として、月行を增し、強弱消息せる物なるを、遠く盈縮を通ずるに足るとて、春秋時曆の推步に用ひたるは、強會に非ずして何ぞ、）然して爾前の諸曆を能も知ずして。之を譏斥し。かつ諸曆學者の。其の學に據りて。春秋を推ことを。無レ異下度二己之跡一。而欲上削二他人之足一也。と言ひ。三統曆を最疎也と云へれど。予を以て之を視れば。杜氏が長曆を以て、春秋時曆を推たるこそ僬僥の跡を度りて龍伯の足を削れる也けれ。（其は三統曆の非は、別にその辨を作りて論じたれば、此に云はねど、杜氏が長曆よりは、大きに勝れり、そは劉歆、章蔀の首歲を、粗知れる故に、節氣は凡て其の實に近きを、長曆は都に節氣の議に及ばず、只合朔交食を主と爲たる故に、閏月の定法をさへに知らず、是を以て其の集解、及び長曆ともに聊も、節氣の議に及べる事なし、此は合朔交食

だに合へば、天驗を得たりとする、暦道の末弊に、拘泥せる故の非なり、然れば斯ばかり俊傑なる人も、人の寸非は見ゆれど、己が尺非の見えぬ物とぞ思はるゝ)さて因に云む。我が寛文の頃に。安井算哲源春海と聞えし。授時暦學の達者ありて。其の頃いまだ。杜氏が長暦の渡來なく。春秋の釋例共に。彼國にも。既く亡たりと聞ゆるを歎き。松田順承と云ふ人と相議りて。春秋述歴といふ物を作り。また別に杜氏が集解の説に依りて。春秋杜歴考と云ふ物をも作れり。(述歴自序の略に、上古之暦書、不傳今時、漢劉歆作三統歴、後世因此、更改法者、凡數十家、而皆攷春秋傳所載之日至、日食、而驗其合與不合、爲之證也、朱晦庵、曰、古之暦書亦必有一定之法、而今亡矣、三代而下、造暦者紛々、莫有定議、愈精愈密、而愈多差、由不得古人一定之法也、元之授時暦、驗古今不差者也、予學之有年于茲矣、因考春秋、用天正以述其歴云々、漢集七歴以考春秋其詳 無聞于後世、晋集十三歴、參校疎密、長歴爲密、然杜氏合經

傳所載之支干、無推算之法、則日食不能攷之也、於是作春秋述暦、與同志議之云、また凡例に、求月朔術周代遼遠、而歴書不傳、今竊以堯典註疏之法、步算之、三光躔度、日食等、以元授時暦推求之と云ひ、杜歴考の自跋に、有客曰、古人集暦書考春秋、以杜預長歴爲密矣、然今吾子所述之歴、與杜歴相違者何哉、請聞其説、曰、所據不同、其説概見述歴序、且往歳依杜氏之説、作其歴藏于函底、後世雖使有長歴出焉、恐不過如是、以是書參校之于述暦、則是非不辨、自可知耳と云ひ、其の述暦に、林祭酒家の、杜氏が長暦の、當時に傳はらざる事を惜みて、二人が功を稱譽せられし序あり、是の安井氏、後に澁川氏を稱して、司天家の天文生に用ひられし人なり)然るに近く文化の頃に。舶來せる杜氏が釋例の中に。長歴も存しかば。世人始めて。此の書の亡佚せざる事を知れり。(但し釋例、その全書にては傳はらず、明の永樂大典中に、三十篇存れるに、孔穎達が正義、及び諸書に引たるを、清の乾隆中に、集めて、四十四篇と

爲たる中に、長暦は全く異はれり、此を近く昌平の官板にも爲られたり）故茲に、安井氏が著せる二書を取り。まづ其の杜歴考と。長歴と合ふや。否と試むるに。隱公元年の大小朔。正月より六月まで合ひ。七八九十の四月合はず。十一十二の兩月また合へり。二百四十年の暦。大抵かくの如く齟齬すれば。算哲が自跋に。後世雖使有長歴出焉。恐不過如是と云へる語は信られず。（但し長歴と、杜歴考と、孰か本術に近きと云へば、杜暦考ぞ近かりける、此のみ算哲が手柄と云べし）さて其の述暦の月朔を求むる術は。堯典註疏の法を以て。歩算せりと云へるは。孔穎達が正義に。六歴與周髀皆云。日行一度。月行十三度。十九分度之七。毎月二十九日。九百四十分日之四百九十九。卽二十九日半强。爲十二月。有餘十日九百四十分日之八百二十七。是爲毎歳之實餘。以二十九乘八百二十七分。得一萬五千七百一十三。以日法九百四十除之得十六日。以算一百九十日。爲二百六日。不盡六百七十三分爲日餘。今爲閏月得七云々と有る推法なるが。（本書正義に、此の推法を記せる文、殊に迂遠にして、容易に通え難ければ、今は其の繁衍の文を去りて、目易く抄纂せるなり）此は唯求朔の日分こそ古暦と合へれ。章蔀の首歳を得る本傳に非ざる故に。此の法に據りて歩算せる述暦はも。毎月の分度の合へる耳にて。都て經傳の文に諧合せず。其の杜暦考よりは却りて拙なり。其は經傳に。某月辛丑。某月庚申など云へる日を。述暦にては。此月無辛丑。此月無庚申など謂れるが。二百に近きを觀て察つべし。（但し經傳中に、實に誤れるも、十數日は無きに非ざれど、豈かく二百に近き誤日あらむや、此は職として、章蔀の本術を知らず、只其の朔策の日法をのみ註疏に得て、春秋時暦の當否を攷せず、慢に歩算せるが故に、かく某時歴と相背けて、汝は汝たれ、我は我たらむと云ふ如き、述暦の出來しものなり）其が中にも。甚しき非事を一つ云むに。左傳に。僖公五年。正月辛亥朔。日南至と有るは。建子月にて。既に論ふ如く。春秋時歴の。歴本とも云つべき。朔旦冬至なるに。此正朔を廢して。正小癸未朔となし。日

南至。二十九日辛亥と云ひ。却りて傳文を誤りと爲たるは。算哲とも非ぬ不算の所爲ならずや。(また此の一つに准へて、其の述曆なる日南至の、多く、春秋時曆に當らず、中に當れるが有るも、偶中なれば、總て信ずるに足ざる事を辨ふべし、)偖また三光の躔度日食等は。元の授時曆を以て。推求めたりと有るも。俺忽の所爲なり。然るは此の事も既に云へる如く。三光の躔度は更なり。日食の推步も。民に時を授くる。眞曆の本旨に非ざるに。況て當昔交食も少く。三光の躔度も。元代頃とは。甚く異なりし世を。其の後代の測量を以て推定め。當昔かくの如しと誣るとも。識神ある者誰かは諾はむ。其は春秋の經傳に無き交食を。有りとせる臆度なればなり。(なほ近く隴坻顧元と云ふ人の授時曆議なる、春秋の日食を、推步せる文を採りて、和解を加へし、春秋左傳魯歷考、と云ふ物も有れど、同じ類の臆說なれば、論ずるに足らず、)また安井氏の。別に著せる書詩禮歷考と云ふ物もあり。是はた謂ゆる。己が跡を度りて。他人の足を削らむと欲る類を免れず。其は篤胤が。春秋命歷序攷の附錄とせる。春秋歷本術編を見ば然る書等の非は。自然に知なむかし。(凡て往古の歷日を知らむと欲するには、能く其の時曆の本術を探ねて、年月閏朔節氣を正整し、然して當世の古書に散見する、歲月時日を得るに隨せて傍書しつゝ、其の正不正を攷證し、古書に見得ざる歷日は、只に其の本術を守りて在るより外なき物なり、其は强ひて其曆日を具へむと欲すれば、必ずかの長歷述曆などに類せる、苟合を求むる陋しき曆術と成ればなり、眞好古の學者、まさに此の旨を思ふべし、)なほ右古曆術の事につきて。予が殊に著せる書ども。太昊古曆傳。春秋命歷敍攷は更なり。古曆日步式。古曆月步式。三統歷譜辨。夏殷周年表。また古今日契曆。天朝無窮曆など。數部あるが中に此三曆由來記は。夏殷周三代曆術の沿革。因に其を襲用せる漢世の諸曆の事を論へるのみなれば。猶言足らず思ふ倫も在ぬべし。若さも有らば。上の件の書等を次々に讀み見て知るべし。

夏殷周年表

大壑　平田篤胤撰

男　鐵胤
孫　延胤　同校

○凡例

○此編者。爲下讀二三暦由來記之第二十九條以下一。劉歆三統歴譜之論者上作焉。

○下暦者。乃據二三統歴譜一而所レ表之僞年暦也。然後世之編年書無レ有下不二信而用一レ之者上。皆非也。

○上暦者。併二考竹書紀年。及史記一。所レ表之眞年暦也。見者須三上暦下暦相照而知二其有一レ違。讀二由來記一。識二其論旨一云爾。

眞年暦

歳	紀年	冬至
癸卯	三二　夏帝芒○	丙戌
甲辰	三三	辛卯
乙巳	三四	丁酉

○篤胤云、夏禹王九世、帝芒三十二年癸卯歳、據二太昊古歴及殷歴一而推レ之、當二於

僞年暦

紀年	冬至
○	乙酉
	庚寅
	丙申

○篤胤云、據二周歴及三統歴一推レ之、此癸卯歳、當二于季統第七十六章首乙

人紀第十八丁卯蔀之第三十八年ニ、乃第三章首、丙戌朔旦冬至也、

丙午	三五		壬寅			辛丑
丁未	三六		丁未			丙午
戊申	三七		壬子			辛亥
己酉	三八		戊午	元	殷湯王	丁巳
庚戌	三九		癸亥	二		壬戌
辛亥	四		戊辰	三		丁卯
壬子	四一		癸酉	四		壬申
癸丑	四二		己卯	五		戊寅
甲寅	四三		甲申	六		癸未
乙卯	四四		己丑	七		戊子
丙辰	四五		甲午	八		癸巳
丁巳	四六		庚子	九		己亥
戊午	四七		乙巳	一〇		甲辰
己未	四八		庚戌	一一		己酉
庚申	四九		乙卯	一二		甲寅
辛酉	五〇		辛酉	一三		庚申
壬戌	五一	○	丙寅	元	太甲 ○	乙丑
癸亥	五二		辛未	二		庚午
甲子	五三		丙子	三		乙亥

酉冬至ニ也、

○劉歆云、夏后氏繼世十七王、四百三十二歲、三統上元至ニ伐桀之歲ニ、十四萬一千四百八十歲、々在ニ大火房五度ニ、故傳曰大火閼伯之星也、

○劉歆云、實紀ニ商ニ人後爲ニ成湯ニ、方ニ即ニ世崩、沒之時爲ニ天子用ニ事十三年矣、商十二月乙丑朔旦冬至、故書序曰、成湯既沒、太甲元年使ニ伊尹作ニ伊訓ニ、伊訓篇曰、惟太

人紀第十九

丙午蔀

干支	年	帝				
乙丑	五四		壬午			辛巳
丙寅	五五		丁亥			丙戌
丁卯	五六		壬辰			辛卯
戊辰	五七		丁酉			丙申
己巳	五八		癸卯			壬寅
庚午	五九		戊申			丁未
辛未	元	帝泄	癸丑			壬子
壬申	二		戊午			丁巳
癸酉	三		甲子			癸亥
甲戌	四		己巳	一三		戊辰
乙亥	五		甲戌			癸酉
丙子	六		己卯			戊寅
丁丑	七		乙酉			甲申
戊寅	八		庚寅			己丑
己卯	九		乙未			甲午
庚辰	一〇		庚子			己亥
辛巳	一一	○	丙午		○	乙巳
壬午	一二		辛亥			庚戌
癸未	一三		丙辰			乙卯

甲元年十有二月乙丑朔、伊尹祀二于先王一、誕資有牧方明一、言雖レ有二成湯太丁外丙之服一、以二冬至一越テ茀祀二先王于方明一、以配二上帝一、是朔旦冬至之歳也、

甲申	一四		辛酉	二三		庚申
乙酉	一五		丁卯			丙刁
丙戌	一六		壬申			辛未
丁亥	一七		丁丑			丙子
戊子	一八		壬午			辛巳
己丑	一九		戊子			丁亥
庚寅	二〇		癸巳			壬辰
辛卯	二一		戊戌			丁酉
壬辰	二二		癸卯			壬刁
癸巳	二三		己酉			戊申
甲午	二四		甲寅			癸丑
乙未	二五		己未			戊午
丙申	二六		甲子			癸亥
丁酉	二七		庚午			己巳
戊戌	二八		乙亥			甲戌
己亥	元	帝不降	庚辰			己卯
庚子	二	〇	乙酉		〇	甲申
辛丑	三		辛卯			庚刁
壬寅	四		丙申			乙未

癸卯	五		辛丑		庚子
甲辰	六		丙午		乙巳
乙巳	七		壬子		辛亥
丙午	八		丁巳		丙辰
丁未	九		壬戌		辛酉
戊申	一〇		丁卯		丙刁
己酉	一一		癸酉		壬申
庚戌	一二		戊寅		丁丑
辛亥	一三		癸未		壬午
壬子	一四		戊子		丁亥
癸丑	一五		甲午		癸巳
甲寅	一六		己亥		戊戌
乙卯	一七		甲辰		癸卯
丙辰	一八		己酉		戊申
丁巳	一九		乙卯		甲刁
戊午	二〇		庚申		己未
己未	二一	〇	乙丑	〇	甲子
庚申	二二		庚午		己巳
辛酉	二三		丙子		乙亥

壬戌	二四		辛巳			庚辰
癸亥	二五		丙戌			乙酉
甲子	二六		辛卯			庚寅
乙丑	二七		丁酉			丙申
丙寅	二八		壬寅			辛丑
丁卯	二九		丁未			丙午
戊辰	三〇		壬子			辛亥
己巳	三一		戊午			丁巳
庚午	三二		癸亥			壬戌
辛未	三三		戊辰			丁卯
壬申	三四		癸酉			壬申
癸酉	三五		己卯			戊寅
甲戌	三六		甲申			癸未
乙亥	三七		己丑			戊子
丙子	三八		甲午			癸巳
丁丑	三九		庚子			己亥
戊寅	四〇	○	乙巳		○	甲辰
己卯	四一		庚戌			己酉
庚辰	四二		乙卯			甲寅

乙酉蔀

年	年數	記事	干支	干支
辛巳	四三		辛酉	庚申
壬午	四四		丙寅	乙丑
癸未	四五		辛未	庚午
甲申	四六		丙子	乙亥
乙酉	四七		壬午	辛巳
丙戌	四八		丁亥	丙戌
丁亥	四九		壬辰	辛卯
戊子	五〇		丁酉	丙申
己丑	五一		癸卯	壬寅
庚寅	五二		戊申	丁未
辛卯	五三		癸丑	壬子
壬辰	五四		戊午	丁巳
癸巳	五五		甲子	癸亥
甲午	五六		己巳	戊辰
乙未	五七		甲戌	癸酉
丙申	五八		己卯	戊寅
丁酉	五九	○	乙酉 ○	甲申
戊戌	元	帝扃	庚寅	己丑
己亥	二		乙未	甲午

(一)劉歆云、成湯沒後九十五歲、商十二月甲申朔旦冬至、亡ニ餘分一、是爲ニ

庚子	三		庚子		己亥
辛丑	四		丙午		乙巳
壬寅	五		辛亥		庚戌
癸卯	六		丙辰		乙卯
甲辰	七		辛酉		庚申
乙巳	八		丁卯		丙寅
丙午	九		壬申		辛未
丁未	一〇		丁丑		丙子
戊申	一一		壬午		辛巳
己酉	一二		戊子		丁亥
庚戌	一三		癸巳		壬辰
辛亥	一四		戊戌		丁酉
壬子	一五		癸卯		壬寅
癸丑	一六		己酉		戊申
甲寅	一七		甲寅		癸丑
乙卯	一八		己未		戊午
丙辰	一九	○	甲子	○	癸亥
丁巳	二〇		庚午		己巳
戊午	二一		乙亥		甲戌

孟統ト方ニ此丁酉之歲也、

干支	年	事項		
己未	二二		庚辰	己卯
庚申	二三		乙酉	甲申
辛酉	二四		辛卯	庚刁
壬戌	二五		丙申	乙未
癸亥	二六		辛丑	庚子
甲子	二七		丙午	乙巳
乙丑	二八		壬子	辛亥
丙寅	二九		丁巳	丙辰
丁卯	三〇		壬戌	辛酉
戊辰	三一		丁卯	丙刁
己巳	元	帝孔甲	癸酉	壬申
庚午	二		戊寅	丁丑
辛未	三		癸未	壬午
壬申	四		戊子	丁亥
癸酉	五		甲午	癸巳
甲戌	六		己亥	戊戌
乙亥	七	○	甲辰	○ 癸卯
丙子	八		己酉	戊申
丁丑	九		乙卯	甲刁

○劉歆云、甲子府首入ニ伐桀ニ後、百二十七歳

按、三代世表作二帝皐一、

按、三世表作二帝履癸一、所謂桀王也、

戊寅	一〇		庚申		己未
己卯	一一		乙丑		甲子
庚辰	元	帝昊	庚午		己巳
辛巳	二		丙子		乙亥
壬午	三		辛巳		庚辰
癸未	四		丙戌		乙酉
甲申	五		辛卯		庚寅
乙酉	元	帝發	丁酉		丙申
丙戌	二		壬寅		辛丑
丁亥	三		丁未		丙午
戊子	四		壬子		辛亥
己丑	五		戊午		丁巳
庚寅	六		癸亥		壬戌
辛卯	七		戊辰		丁卯
壬辰	元	帝癸	癸酉		壬申
癸巳	二		己卯		戊寅
甲午	三	○	甲申	○	癸未
乙未	四		己丑		戊子
丙申	五		甲午		癸巳

天紀上元
甲子蔀

年	數		干支	年	記事	干支
丁酉	六		庚子			己亥
戊戌	七		乙巳			甲辰
己亥	八		庚戌			己酉
庚子	九		乙卯			甲刁
辛丑	一〇		辛酉			庚申
壬寅	一一		丙寅			乙丑
癸卯	一二		辛未			庚午
甲辰	一三		丙子			乙亥
乙巳	一四		壬午			辛巳
丙午	一五		丁亥	元	殷湯王	丙戌
丁未	一六		壬辰	二		辛卯
戊申	一七		丁酉	三		丙申
己酉	一八		癸卯	四		壬刁
庚戌	一九		戊申	五		丁未
辛亥	二〇		癸丑	六		壬子
壬子	二一		戊午	七		丁巳
癸丑	二二	○	甲子	八	○	癸亥
甲寅	二三		己巳	九	湯囚夏臺	戊辰
乙卯	二四		甲戌	一〇		癸酉

○劉歆云、殷歷ニ曰、當ニテ成湯方ニ即ニテ世ニ用レ事十三年ニ、十一月甲子朔旦冬至、

按、従レ禹至レ桀十七世、従ニ禹即位壬子歳一至ニ夏亡壬戌歳一、凡四百三十一年、

干支	年		干支	年		干支
丙辰	二五		己卯	一一		戊刁
丁巳	二六		乙酉	一二		甲申
戊午	二七		庚寅	一三		己丑
己未	二八		乙未	一四		甲午
庚申	二九		庚子	一五		己亥
辛酉	三〇		丙午	一六		乙巳
壬戌	三一	夏亡	辛亥	一七		庚戌
癸亥	一八		丙辰			乙卯
甲子	一八		辛酉			庚申
乙丑	二〇		丁卯			丙刁
丙寅	二一		壬申			辛未
丁卯	二二		丁丑			丙子
戊辰	二三		壬午			辛巳
己巳	二四		戊子			丁亥
庚午	二五		癸巳			壬辰
辛未	二六		戊戌			丁酉
壬申	二七	○	癸卯		○	壬刁
癸酉	二八		己酉			戊申
甲戌	二九		甲寅			癸丑

終ルトニ六府首一、當ルニ周ノ公五年一、則爲下距ルコトニ伐桀一四百五十八歳上、少ニ百七十一歳一、不レ盈ニ六百二十九一、又以テニ夏時乙丑ヲ爲ニ甲子一、計ニ其年一迺孟統後五章、癸亥朔旦冬至也、以テスル爲ニ甲子府首一トニ、皆非レ是、

干支	年	王	干支		干支
乙亥	元	外丙	己未		戊午
丙子	二		甲子		癸亥
丁丑	元	仲壬	庚午		己巳
戊寅	二		乙亥		甲戌
己卯	三		庚辰		己卯
庚辰	四		乙酉		甲申
辛巳	元	太甲	辛卯		庚寅
壬午	二		丙申		乙未
癸未	三		辛丑		庚子
甲申	四		丙午		己巳
乙酉	五		壬子		辛亥
丙戌	六		丁巳		丙辰
丁亥	七		壬戌		辛酉
戊子	八		丁卯		丙寅
己丑	九		癸酉		壬申
庚寅	一〇		戊寅		丁丑
辛卯	一一		癸未		壬午
壬辰	一二		戊子		丁亥
癸巳	元	沃丁	甲午		癸巳

干支	年	王	上欄	注	下欄
甲午	二		己亥		戊戌
乙未	三		甲辰		癸卯
丙申	四		己酉		戊申
丁酉	五		乙卯		甲刁
戊戌	六		庚申		己未
己亥	七		乙丑		甲子
庚子	八		庚午		己巳
辛丑	九		丙子		乙亥
壬寅	一〇		辛巳		庚辰
癸卯	一一		丙戌		乙酉
甲辰	一二		辛卯		庚寅
乙巳	一三		丁酉		丙申
丙午	一四		壬寅		辛丑
丁未	一五		丁未		丙午
戊申	一六		壬子		辛亥
己酉	一七		戊午		丁巳
庚戌	一八	〇	癸亥	〇	壬戌
辛亥	一九		戊辰		丁卯
壬子	元	小庚	癸酉		壬申

按、史記作太庚

癸卯蔀

癸丑	二		己卯			戊刁
甲寅	三		甲申			癸未
乙卯	四		己丑			戊子
丙辰	五		甲午			癸巳
丁巳	元	小甲	庚子			己亥
戊午	二		乙巳			甲辰
己未	三		庚戌			己酉
庚申	四		乙卯			甲刁
辛酉	五		辛酉			庚申
壬戌	六		丙寅			乙丑
癸亥	七		辛未			庚午
甲子	八		丙子			乙亥
乙丑	九		壬午			辛巳
丙寅	一〇		丁亥			丙戌
丁卯	一一		壬辰			辛卯
戊辰	一二		丁酉			丙申
己巳	一三	〇	癸卯		〇	壬刁
庚午	一四		戊申			丁未
辛未	一五		癸丑			壬子

干支	年	帝				
壬申	一六		戊午			丁巳
癸酉	一七		甲子			癸亥
甲戌	元	雍己	己巳			戊辰
乙亥	二		甲戌			癸酉
丙子	三		己卯			戊刁
丁丑	四		乙酉			甲申
戊寅	五		庚寅			己丑
己卯	六		乙未			甲午
庚辰	七		庚子			己亥
辛巳	八		丙午			乙巳
壬午	九		辛亥			庚戌
癸未	一〇		丙辰			乙卯
甲申	一一		辛酉			庚申
乙酉	一二		丁卯			丙刁
丙戌	元	太戊	壬申			辛未
丁亥	二		丁丑			丙子
戊子	三	○	壬午		○	辛巳
己丑	四		戊子			丁亥
庚寅	五		癸巳			壬辰

辛卯	六		戊戌			丁酉
壬辰	七		癸卯			壬刁
癸巳	八		己酉			戊申
甲午	九		甲寅			癸丑
乙未	一〇		己未			戊午
丙申	一一		甲子			癸亥
丁酉	一二		庚午			己巳
戊戌	一三		乙亥			甲戌
己亥	一四		庚辰			己卯
庚子	一五		乙酉			甲申
辛丑	一六		辛卯			庚刁
壬寅	一七		丙申			乙未
癸卯	一八		辛丑			庚子
甲辰	一九		丙午			乙巳
乙巳	二〇		壬子			辛亥
丙午	二一		丁巳			丙辰
丁未	二二	○	壬戌		○	辛酉
戊申	二三		丁卯			丙刁
己酉	二四		癸酉			壬申

庚戌	二五		戊寅		丁丑
辛亥	二六		癸未		壬午
壬子	二七		戊子		丁亥
癸丑	二八		甲午		癸巳
甲寅	二九		己亥		戊戌
乙卯	三〇		甲辰		癸卯
丙辰	三一		己酉		戊申
丁巳	三二		乙卯		甲寅
戊午	三三		庚申		己未
己未	三四		乙丑		甲子
庚申	三五		庚午		己巳
辛酉	三六		丙子		乙亥
壬戌	三七		辛巳		庚辰
癸亥	三八		丙戌		乙酉
甲子	三九		辛卯		庚寅
乙丑	四〇		丁酉		丙申
丙寅	四一	○	壬寅	○	辛丑
丁卯	四二		丁未		丙午
戊辰	四三		壬子		辛亥

壬午蔀

己巳	四四		戊午			丁巳
庚午	四五		癸亥			壬戌
辛未	四六		戊辰			丁卯
壬申	四七		癸酉			壬申
癸酉	四八		己卯			戊刁
甲戌	四九		甲申			癸未
乙亥	五〇		己丑			戊子
丙子	五一		甲午			癸巳
丁丑	五二		庚子			己亥
戊寅	五三		乙巳			甲辰
己卯	五四		庚戌			己酉
庚辰	五五		乙卯			甲刁
辛巳	五六		辛酉			庚申
壬午	五七		丙寅			乙丑
癸未	五八		辛未			庚午
甲申	五九		丙子			乙亥
乙酉	六〇	○	壬午		○	辛巳
丙戌	六一		丁亥			丙戌
丁亥	六二		壬辰			辛卯

戊子	六三		丁酉		丙申
己丑	六四		癸卯		壬刁
庚寅	六五		戊申		丁未
辛卯	六六		癸丑		壬子
壬辰	六七		戊午		丁巳
癸巳	六八		甲子		癸亥
甲午	六九		己巳		戊辰
乙未	七〇		甲戌		癸酉
丙申	七一		己卯		戊刁
丁酉	七二		乙酉		甲申
戊戌	七三		庚寅		己丑
己亥	七四		乙未		甲午
庚子	七五		庚子		己亥
辛丑	元	仲摩	丙午		乙巳
壬寅	二		辛亥		庚戌
癸卯	三		丙辰		乙卯
甲辰	四	○	辛酉	○	庚申
乙巳	五		丁卯		丙刁
丙午	六		壬申		辛未

丁未	七		丁丑		丙子
戊申	八		壬午		辛巳
己酉	九		戊子		丁亥
庚戌	元	外壬	癸巳		壬辰
辛亥	二		戊戌		丁酉
壬子	三		癸卯		壬寅
癸丑	四		己酉		戊申
甲寅	五		甲寅		癸丑
乙卯	六		己未		戊午
丙辰	七		甲子		癸亥
丁巳	八		庚午		己巳
戊午	九		乙亥		甲戌
己未	一〇		庚辰		己卯
庚申	元	河亶甲	乙酉		甲申
辛酉	二		辛卯		庚寅
壬戌	三		丙申		乙未
癸亥	四	○	辛丑	○	庚子
甲子	五		丙午		乙巳
乙丑	六		壬子		辛亥

干支	年				
丙寅	七		丁巳		丙辰
丁卯	八		壬戌		辛酉
戊辰	九		丁卯		丙刁
己巳	元	祖乙	癸酉		壬申
庚午	二		戊寅		丁丑
辛未	三		癸未		壬午
壬申	四		戊子		丁亥
癸酉	五		甲午		癸巳
甲戌	六		己亥		戊戌
乙亥	七		甲辰		癸卯
丙子	八		己酉		戊申
丁丑	九		乙卯		甲刁
戊寅	一〇		庚申		己未
己卯	一一		乙丑		甲子
庚辰	一二		庚午		己巳
辛巳	一三		丙子		乙亥
壬午	一四	〇	辛巳	〇	庚辰
癸未	一五		丙戌		乙酉
甲申	一六		辛卯		庚刁

按史記作沃甲

辛酉蔀

歲次	年	事	干支		干支
乙酉	一七		丁酉		丙申
丙戌	一八		壬寅		辛丑
丁亥	一九		丁未		丙午
戊子	元	祖辛	壬子		辛亥
己丑	二		戊午		丁巳
庚寅	三		癸亥		壬戌
辛卯	四		戊辰		丁卯
壬辰	五		癸酉		壬申
癸巳	六		己卯		戊刁
甲午	七		甲申		癸未
乙未	八		己丑		戊子
丙申	九		甲午		癸巳
丁酉	一〇		庚子		己亥
戊戌	一一		乙巳		甲辰
己亥	一二		庚戌		己酉
庚子	一三		乙卯		甲刁
辛丑	一四	○	辛酉	○	庚申
壬寅	元	開甲	丙寅		乙丑
癸卯	二		辛未		庚午

甲辰	三		丙子	乙亥
乙巳	四		壬午	辛巳
丙午	五		丁亥	丙戌
丁未	元	祖丁	壬辰	辛卯
戊申	二		丁酉	丙申
己酉	三		癸卯	壬寅
庚戌	四		戊申	丁未
辛亥	五		癸丑	壬子
壬子	六		戊午	丁巳
癸丑	七		甲子	癸亥
甲寅	八		己巳	戊辰
乙卯	九		甲戌	癸酉
丙辰	元	南庚	己卯	戊寅
丁巳	二		乙酉	甲申
戊午	三		庚寅	己丑
己未	四		乙未	甲午
庚申	五	○	庚子	己亥
辛酉	六		丙午	乙巳
壬戌	元	陽甲	辛亥	庚戌

癸亥	二		丙辰			乙卯
甲子	三		辛酉			庚申
乙丑	四		丁卯			丙刁
丙寅	元	盤庚	壬申			辛未
丁卯	二		丁丑			丙子
戊辰	三		壬午			辛巳
己巳	四		戊子			丁亥
庚午	五		癸巳			壬辰
辛未	六		戊戌			丁酉
壬申	七		癸卯			壬刁
癸酉	八		己酉			戊申
甲戌	九		甲寅			癸丑
乙亥	一〇		己未			戊午
丙子	一一		甲子			癸亥
丁丑	一二		庚午			己巳
戊寅	一三		乙亥			甲戌
己卯	一四	○	庚辰		○	己卯
庚辰	一五		乙酉			甲申
辛巳	一六		辛卯			庚刁

干支	年	王	月朔		月朔
壬午	一七		丙申		乙未
癸未	一八		辛丑		庚子
甲申	一九		丙午		乙巳
乙酉	二〇		壬子		辛亥
丙戌	二一		丁巳		丙辰
丁亥	二二		壬戌		辛酉
戊子	二三		丁卯		丙刁
己丑	二四		癸酉		壬申
庚寅	二五		戊寅		丁丑
辛卯	二六		癸未		壬午
壬辰	二七		戊子		丁亥
癸巳	二八		甲午		癸巳
甲午	元	小辛	己亥		戊戌
乙未	二		甲辰		癸卯
丙申	三		己酉		戊申
丁酉	元	小乙	乙卯		甲刁
戊戌	二	○	庚申	○	己未
己亥	三		乙丑		甲子
庚子	四		庚午		己巳

庚子蔀

干支	年	記事		記	
辛丑	五		丙子		乙亥
壬寅	六		辛巳		庚辰
癸卯	七		丙戌		乙酉
甲辰	八		辛卯		庚寅
乙巳	九		丁酉		丙申
丙午	一〇		壬寅		辛丑
丁未	元	武丁	丁未		丙午
戊申	二		壬子		辛亥
己酉	三		戊午		丁巳
庚戌	四		癸亥		壬戌
辛亥	五		戊辰		丁卯
壬子	六		癸酉		壬申
癸丑	七		己卯		戊寅
甲寅	八		甲申		癸未
乙卯	九		己丑		戊子
丙辰	一〇		甲午		癸巳
丁巳	一一	○	庚子	○	己亥
戊午	一二		乙巳		甲辰
己未	一三		庚戌		己酉

干支	年	備考	干支		備考	干支
庚申	一四		乙卯			甲寅
辛酉	一五		辛酉			庚申
壬戌	一六		丙寅			乙丑
癸亥	一七		辛未			庚午
甲子	一八		丙子			乙亥
乙丑	一九		壬午			辛巳
丙寅	二〇		丁亥			丙戌
丁卯	二一		壬辰			辛卯
戊辰	二二		丁酉			丙申
己巳	二三		癸卯			壬寅
庚午	二四		戊申			丁未
辛未	二五		癸丑			壬子
壬申	二六		戊午			丁巳
癸酉	二七		甲子			癸亥
甲戌	二八		己巳			戊辰
乙亥	二九		甲戌			癸酉
丙子	三〇	○	己卯		○	戊寅
丁丑	三一		乙酉			甲申
戊寅	三二		庚寅			己丑

己卯	三三		乙未		甲午
庚辰	三四		庚子		己亥
辛巳	三五		丙午		乙巳
壬午	三六		辛亥		庚戌
癸未	三七		丙辰		乙卯
甲申	三八		辛酉		庚申
乙酉	三九		丁卯		丙寅
丙戌	四〇		壬申		辛未
丁亥	四一		丁丑		丙子
戊子	四二		壬午		辛巳
己丑	四三		戊子		丁亥
庚寅	四四		癸巳		壬辰
辛卯	四五		戊戌		丁酉
壬辰	四六		癸卯		壬寅
癸巳	四七		己酉		戊申
甲午	四八		甲寅		癸丑
乙未	四九	○	己未	○	戊午
丙申	五〇		甲子		癸亥
丁酉	五一		庚午		己巳

干支	年	王		干支		干支
戊戌	五二			乙亥		甲戌
己亥	五三			庚辰		己卯
庚子	五四			乙酉		甲申
辛丑	五五			辛卯		庚寅
壬寅	五六			丙申		乙未
癸卯	五七			辛丑		庚子
甲辰	五八			丙午		乙巳
乙巳	五九			壬子		辛亥
丙午	元	祖庚		丁巳		丙辰
丁未	二			壬戌		辛酉
戊申	三			丁卯		丙寅
己酉	四			癸酉		壬申
庚戌	五			戊寅		丁丑
辛亥	六			癸未		壬午
壬子	七			戊子		丁亥
癸丑	八			甲午		癸巳
甲寅	九		○	己亥	○	戊戌
乙卯	一〇			甲辰		癸卯
丙辰	一一			己酉		戊申

按國語史記並作帝甲

己卯 萜

干支	年	帝	上欄	下欄	下欄干支
丁巳	元	祖甲	乙卯		甲寅
戊午	二		庚申		己未
己未	三		乙丑		甲子
庚申	四		庚午		己巳
辛酉	五		丙子		乙亥
壬戌	六		辛巳		庚辰
癸亥	七		丙戌		乙酉
甲子	八		辛卯		庚寅
乙丑	九		丁酉		丙申
丙寅	一〇		壬寅		辛丑
丁卯	一一		丁未		丙午
戊辰	一二		壬子		辛亥
己巳	一三		戊午		丁巳
庚午	一四		癸亥		壬戌
辛未	一五		戊辰		丁卯
壬申	一六		癸酉		壬辰
癸酉	一七	○	己卯	○	戊寅
甲戌	一八		甲申		癸未
乙亥	一九		己丑		戊子

按史記作廩辛

丙子	二〇		甲午			癸巳
丁丑	二一		庚子			己亥
戊寅	二二		乙巳			甲辰
己卯	二三		庚戌			己酉
庚辰	二四		乙卯			甲刁
辛巳	二五		辛酉			庚申
壬午	二六		丙寅			乙丑
癸未	二七		辛未			庚午
甲申	二八		丙子			乙亥
乙酉	二九		壬午			辛巳
丙戌	三〇		丁亥			丙戌
丁亥	三一		壬辰			辛卯
戊子	三二		丁酉			丙申
己丑	三三		癸卯	元	周文王	壬刁
庚寅	元	馮辛	戊申	二		丁未
辛卯	二		癸丑	三		壬子
壬辰	三	○	戊午	四	○	丁巳
癸巳	四		甲子	五		癸亥
甲午	元	庚丁	己巳	六		戊辰

乙未	二		甲戌			七		癸酉
丙申	三		己卯			八		戊寅
丁酉	四		乙酉			九		甲申
戊戌	五		庚寅			一〇		己丑
己亥	六		乙未			一一		甲午
庚子	七		庚子			一二		己亥
辛丑	八		丙午			一三		乙巳
壬寅	元	武乙	辛亥			一四		庚戌
癸卯	二		丙辰			一五		乙卯
甲辰	三		辛酉			一六		庚申
乙巳	四		丁卯			一七		丙寅
丙午	五		壬申			一八		辛未
丁未	六		丁丑			一九		丙子
戊申	七		壬午			二〇		辛巳
己酉	八		戊子			二一		丁亥
庚戌	九		癸巳			二二		壬辰
辛亥	一〇		戊戌			二三	〇	丁酉
壬子	一一		癸卯			二四		壬寅
癸丑	一二		己酉			二五		戊申

干支	年	記	干支	年	記	干支
甲寅	一三		甲寅	二六		癸丑
乙卯	一四		己未	二七		戊午
丙辰	一五		甲子	二八		癸亥
丁巳	一六		庚午	二九		己巳
戊午	一七		乙亥	三〇		甲戌
己未	一八		庚辰	三一		己卯
庚申	一九		乙酉	三二		甲申
辛酉	二〇		辛卯	三三		庚寅
壬戌	二一		丙申	三四		乙未
癸亥	二二		辛丑	三五		庚子
甲子	二三		丙午	三六		乙巳
乙丑	二四		壬子	三七		辛亥
丙寅	二五		丁巳	三八	受命	丙辰
丁卯	二六		壬戌	三九		辛酉
戊辰	二七		丁卯	四〇		丙寅
己巳	二八		癸酉	四一		壬申
庚午	二九	○	戊寅	四二	○	丁丑
辛未	三〇		癸未	四三		壬午
壬申	三一		戊子	四四		丁亥

○劉歆云、春秋歷、周文王四十二年、十二月丁丑、朔旦冬至、孟統之二會首也、後八歲而武王伐紂、書序曰、惟十有一年武王伐紂、大誓八百諸侯會、還歸二年、乃遂伐紂、克殷以箕子歸十三年也、故洪範曰、惟十有三

按史記作太丁

戊午蔀

癸酉	三二		甲午			四五		癸巳
甲戌	三三		己亥			四六	卒	戊戌
乙亥	三四		甲辰			元	武王	癸卯
丙子	三五		己酉		戊申	二	度孟津	
丁丑	元	文丁	乙卯			三		甲寅
戊寅	二		庚申			四	克殷	己未
己卯	三		乙丑			五		甲子
庚辰	四		庚午			六		己巳
辛巳	五		丙子			七		乙亥
壬午	六		辛巳			八		庚辰
癸未	七		丙戌			九		乙酉
甲申	八		辛卯			一〇		庚寅
乙酉	九		丁酉			一一	殂	丙申
丙戌	一〇		壬寅		辛丑	元	周公攝政	
丁亥	一一		丁未			二		丙午
戊子	一二		壬子			三		辛亥
己丑	一三	○	戊午			四	○	丁巳
庚寅	元	帝乙	癸亥	元	西伯昌	五		壬戌
辛卯	二		戊辰	二		六		丁卯

祀、王訪于箕子、自文王受命而至此十三年、○劉歆云、文王十五而生武王、受命九年而崩、崩後四年而武王克殷、克殷之歲八十六矣、後七歲而崩、故禮記文王世子曰、文王九十七而終、武王九十三而終、凡武王即位十一年、○劉歆云、自伐桀至武王伐紂、六百二十九歲、(百二十一年多シ、實ハ五百八年ナレバ也)故傳曰、殷載祀六百、○劉歆云、周公攝政五年、正月丁巳朔日冬至、殷曆以爲戊午、距煬公七十六歲、入孟統二十九章首也、後二歲周公以反政、誕保文武受命、惟七年、○丁巳蔀

按所謂紂王也

干支	年		干支	年		年		干支
壬辰	三		癸酉	三		七		壬申
癸巳	四		己卯	四	戊刁	元	魯伯禽	
甲午	五		甲申	五		二		癸未
乙未	六		己丑	六		三		戊子
丙申	七		甲午	七		四		癸巳
丁酉	八		庚子	八		五		己亥
戊戌	九		乙巳	九		六		甲辰
己亥	元	受辛	庚戌	一〇		七		己酉
庚子	二		乙卯	一一		八		甲刁
辛丑	三		辛酉	一二		九		庚申
壬寅	四		丙寅	一三		一〇		乙丑
癸卯	五		辛未	一四		一一		庚午
甲辰	六		丙子	一五		一二		乙亥
乙巳	七		壬午	一六		一三		辛巳
丙午	八		丁亥	一七		一四		丙戌
丁未	九		壬辰	一八		一五		辛卯
戊申	一〇	○	丁酉	一九		一六	○	丙申
己酉	一一		癸卯	二〇		一七		壬刁
庚戌	一二		戊申	二一		一八		丁未

○劉歆云、成王元年正月己巳朔、此命伯禽俾侯于魯之歲也、後三十年四月庚戌朔、乙丑成王崩、

○周本紀云、公季卒、子昌立、是爲西伯、西伯遵后稷公劉之業、則古公公季之法、篤仁敬老慈少、禮下賢者、以待士、士以此多歸之、崇侯虎譖西伯於殷紂曰、西伯積善累德、諸侯皆嚮之、將不利於帝、帝紂乃囚西伯於羑里、閎夭之徒患之、乃求有莘氏美女、驪戎文馬、有熊九駟、他奇物、因殷嬖臣費仲、獻之紂、紂大說、以釋西伯、賜之弓矢斧鉞、使西伯得征伐、曰、譖西伯者崇侯虎也、西伯陰行善、諸侯皆來決平、於是伐犬戎、伐密須、敗耆國、伐邘、伐崇侯、

辛亥	一三		癸丑	二二		一九		壬子
壬子	一四		戊午	二三		二〇		丁巳
癸丑	一五		甲子	二四		二一		癸亥
甲寅	一六		己巳	二五		二二		戊辰
乙卯	一七		甲戌	二六		二三		癸酉
丙辰	一八		己卯	二七		二四		戊寅
丁巳	一九		乙酉	二八		二五		甲申
戊午	二〇		庚寅	二九		二六		己丑
己未	二一		乙未	三〇		二七		甲午
庚申	二二	囚西伯于羑里	庚子	三一		二八		己亥
辛酉	二三		丙午	三二		二九		乙巳
壬戌	二四		辛亥	三三		三〇		庚戌
癸亥	二五		丙辰	三四		三一		乙卯
甲子	二六		辛酉	三五		三二		庚申
乙丑	二七		丁卯	三六		三三		丙寅
丙寅	二八		壬申	三七		三四		辛未
丁卯	二九	釋西伯 ○	丁丑	三八		三五	○	丙子
戊辰	三〇		壬午	三九		三六		辛巳
己巳	三一		戊子	四〇		三七		丁亥

○劉歆以爲康王元年ト、是ヨリ八百二十一年

而作豐邑、自岐下而徙都豐、明年西伯崩、太子發立、是爲武王、西伯蓋即位五十年、受命之年稱王、而斷虞芮之訟、後十年而崩、諡爲文王、改法度、制正朔矣。

○乾鑿度云、昌以西伯受命、入戊午蔀四十年、伐崇侯、作靈臺、改正朔、布王號於天下。

○周本紀云、武王即位、修文王緒業、九年武王上祭于畢、東

庚午	三二		癸巳	四一		三八		壬辰
辛未	三三		戊戌	四二	受命	三九		丁酉
壬申	三四		癸卯	四三		四〇		壬寅
癸酉	三五		己酉	四四		四一		戊申
甲戌	三六		甲寅	四五		四二		癸丑
乙亥	三七		己未	四六		四三		戊午
丙子	三八		甲子	四七		四四		癸亥
丁丑	三九		庚午	四八		四五		己巳
戊寅	四〇		乙亥	四九		四六		甲戌
己卯	四一		庚辰	五〇	卒	元	考公	己卯
庚辰	四二		乙酉	元	武王	二		甲申
辛巳	四三		辛卯	二		三		庚寅
壬午	四四		丙申	三		四		乙未
癸未	四五		辛丑	四		元	煬公	庚子
甲申	四六		丙午	五		二		乙巳
乙酉	四七		壬子	六		三		辛亥
丙戌	四八		丁巳	七		四		丙辰
丁亥	四九		壬戌	八		五		辛酉
戊子	五〇		丁卯	九	始伐殷	六		丙寅

○劉歆云、魯公伯禽推即位四十六年、至康王十六年而薨、故傳曰、燮父禽父並事康王、言晉公燮、魯公伯禽、俱事康王也、子考公乾立、酋、考公世家即位四年、及煬公熙立、伯禽一年少。

觀丘至于盟津、是時諸侯不期、而會盟津者八百、諸侯皆曰、紂可伐矣、武王曰、女未知天命、未可也、乃還師歸、居二年、遂東伐紂、十一年十二月己亥朔戊午周师師畢渡盟津、諸侯咸會、二月廿七日甲子昧爽、至商郊牧野、紂師皆崩、紂自燔于火而死、武王遂入、至紂死所、自以黃鉞斬紂頭、縣太白之旗、武王已克殷、後二年問箕子、以天道、○按商書洪範序、惟十有三祀、王訪于箕子是也、

○魯世家云、其後武王既崩、成王少在強葆之中、周公乃踐阼、代成王攝行政當國、使其子伯禽代就封於魯、成王七年、周公乃還政於成王、

丁酉蔀

己丑	五一		癸酉	一〇		七		壬申
庚寅	五二	殷亡	戊寅	一一	伐紂	八		丁丑
辛卯	一二		癸未			九		壬丑
壬辰	一三	訪箕子	戊子			一〇		丁亥
癸巳	一四	王有疾	甲午			一一		癸巳
甲子	一五		己亥			一二		戊戌
乙未	一六		甲辰			一三		癸卯
丙申	一七		己酉			一四		戊申
丁酉	元	成王	乙卯	元	魯伯禽	一五		甲寅
戊戌	二		庚申	二		一六		己未
己亥	三		乙丑	三		一七		甲子
庚子	四		庚午	四		一八		己巳
辛丑	五		丙子	五		一九		乙亥
壬寅	六		辛巳	六		二〇		庚辰
癸卯	七	周公復政于王	丙戌	七		二一		乙酉
甲辰	八		辛卯	八		二二		庚寅
乙巳	九	○	丁酉	九		二三	○	丙申
丙午	一〇		壬寅	一〇		二四		辛丑
丁未	一一		丁未	一一		二五		丙午

○篤胤按從商湯伐桀之歲、至殷亡庚寅歲、五百八年、凡二十九世也、

○丙申蔀
○劉歆云、煬公二十四年、正月丙申朔旦冬至、殷歷以爲丁酉、距微公七十六歲、

戊申	一二		壬子	一二		二六		辛亥
己酉	一三		戊午	一三		二七		丁巳
庚戌	一四	・	癸亥	一四		二八		壬戌
辛亥	一五		戊辰	一五		二九		丁卯
壬子	一六		癸酉	一六		三〇		壬申
癸丑	一七		己卯	一七		三一		戊寅
甲寅	一八		甲申	一八		三二		癸未
乙卯	一九		己丑	一九		三三		戊子
丙辰	二〇		甲午	二〇		三四		癸巳
丁巳	二一	周公卒于豐	庚子	二一		三五		己亥
戊午	二二		己巳	二二		三六		甲辰
己未	二三		庚戌	二三		三七		己酉
庚申	二四		乙卯	二四		三八		甲寅
辛酉	二五		辛酉	二五		三九		庚申
壬戌	二六		丙寅	二六		四〇		乙丑
癸亥	二七		辛未	二七		四一		庚午
甲子	二八	〇	丙子	二八		四二	〇	乙亥
乙丑	二九		壬午	二九		四三		辛巳
丙寅	三〇		丁亥	三〇		四四		丙戌

○魯世家云、魯公伯禽卒、子考公酋立、考公四年卒、立二弟熙一、是爲二煬公一

干支	年		干支	年		年		干支
丁卯	三一		壬辰	三一		四五		辛卯
戊辰	三二		丁酉	三二		四六		丙申
己巳	三三		癸卯	三三		四七		壬寅
庚午	三四		戊申	三四		四八		丁未
辛未	三五		癸丑	三五		四九		壬子
壬申	三六		戊午	三六		五〇		丁巳
癸酉	三七	王殂	甲子	三七		五一		癸亥
甲戌	元	康王	己巳	三八		五二		戊辰
乙亥	二		甲戌	三九		五三		癸酉
丙子	三		己卯	四〇		五四		戊寅
丁丑	四		乙酉	四一		五五		甲申
戊寅	五		庚寅	四二		五六		己丑
己卯	六		乙未	四三		五七		甲午
庚辰	七		庚子	四四		五八		己亥
辛巳	八		丙午	四五		五九		乙巳
壬午	九		辛亥	四六		六〇		庚戌
癸未	一〇	〇	丙辰	四七		元	幽公	乙卯
甲申	一一		辛酉	元	考公	二		庚申
乙酉	一二		丁卯	二		三		丙寅

○劉歆云、世家煬公卽位六十年、子幽公宰立、五十四年多シ

○世家云、煬公卒、子幽公宰立、

干支	年		干支	年		年		干支
丙戌	一三		壬申	三		四		辛未
丁亥	一四		丁丑	四		五		丙子
戊子	一五		壬午	元	煬公	六		辛巳
己丑	一六		戊子	二		七		丁亥
庚寅	一七		癸巳	三		八		壬辰
辛卯	一八		戊戌	四		九		丁酉
壬辰	一九		癸卯	五		一〇		壬寅
癸巳	二〇		己酉	六		一一		戊申
甲午	二一		甲寅	元	幽公	一二		癸丑
乙未	二二		己未	二		一三		戊午
丙申	二三		甲子	三		一四		癸亥
丁酉	二四		庚午	四		元	微公	己巳
戊戌	二五		乙亥	五		二		甲戌
己亥	二六		庚辰	六		三		己卯
庚子	元	昭王	乙酉	七		四		甲申
辛丑	二		辛卯	八		五		庚寅
壬寅	三	○	丙申	九		六	○	乙未
癸卯	四		辛丑	一〇		七		庚子
甲辰	五		丙午	一一		八		乙巳

○劉歆云、幽公世家、卽位十四年、及微公弟立、㵲

○魯世家云、幽公十四年幽公弟潰、殺幽公而自立、是爲魏公、○劉歆所謂微公、乃魏公也、

丙子蔀

歲	周			魯				
乙巳	六		壬子	一二		九		辛亥
丙午	七		丁巳	一三		一〇		丙辰
丁未	八		壬戌	一四	宰辛	一一		辛酉
戊申	九		丁卯	元	魏公	一二		丙刁
己酉	一〇		癸酉	二		一三		壬申
庚戌	一一		戊寅	三		一四		丁丑
辛亥	一二		癸未	四		一五		壬午
壬子	一三		戊子	五		一六		丁亥
癸丑	一四		甲午	六		一七		癸巳
甲寅	一五		己亥	七		一八		戊戌
乙卯	一六		甲辰	八		一九		癸卯
丙辰	一七		己酉	九		二〇		戊申
丁巳	一八		乙卯	一〇		二一		甲刁
戊午	一九		庚申	一一		二二		己未
己未	元	穆王	乙丑	一二		二三		甲子
庚申	二		庚午	一三		二四		己巳
辛酉	三	○	丙子	一四		二五	○	乙亥
壬戌	四		辛巳	一五		二六		庚辰
癸亥	五		丙戌	一六		二七		乙酉

○乙亥蔀
○劉歆云、微公二十六年、正月乙亥朔旦冬至、殷歷以爲丙子、距献公七十六歲、

甲子	六		辛卯	一七		二八		庚刁
乙丑	七		丁酉	一八		二九		丙申
丙寅	八		壬寅	一九		三〇		辛丑
丁卯	九		丁未	二〇		三一		丙午
戊辰	一〇		壬子	二一		三二		辛亥
己巳	一一		戊午	二二		三三		丁巳
庚午	一二		癸亥	二三		三四		壬戌
辛未	一三		戊辰	二四		三五		丁卯
壬申	一四		癸酉	二五		三六		壬申
癸酉	一五		己卯	二六		三七		戊刁
甲戌	一六		甲申	二七		三八		癸未
乙亥	一七		己丑	二八		三九		戊子
丙子	一八		甲午	二九		四〇		癸巳
丁丑	一九		庚子	三〇		四一		己亥
戊寅	二〇		乙巳	三一		四二		甲辰
己卯	二一		庚戌	三二		四三		己酉
庚辰	二二	○	乙卯	三三		四四	○	甲刁
辛巳	二三		辛酉	三四		四五		庚申
壬午	二四		丙寅	三五		四六		乙丑

○魯世家云魏公五十年卒、子厲公擢立、

干支	年		干支	年		年		干支
癸未	二五		辛未	三六		四七		庚午
甲申	二六		丙子	三七		四八		乙亥
乙酉	二七		壬午	三八		四九		辛巳
丙戌	二八		丁亥	三九		五〇		丙戌
丁亥	二九		壬辰	四〇		元	厲公	辛卯
戊子	三〇		丁酉	四一		二		丙申
己丑	三一		癸卯	四二		三		壬寅
庚寅	三二		戊申	四三		四		丁未
辛卯	三三		癸丑	四四		五		壬子
壬辰	三四		戊午	四五		六		丁巳
癸巳	三五		甲子	四六		七		癸亥
甲午	三六		己巳	四七		八		戊辰
乙未	三七		甲戌	四八		九		癸酉
丙申	三八		己卯	四九		一〇		戊寅
丁酉	三九		乙酉	五〇	濞卒	一一		甲申
戊戌	四〇		庚寅	元	厲公	一二		己丑
己亥	四一	○	乙未	二		一三	○	甲午
庚子	四二		庚子	三		一四		己亥
辛丑	四三		丙午	四		一五		乙巳

○劉歆云、世家、微公即位五十年、子厲公翟立擢、

年	年数	注	干支	数	数	注	干支
壬寅	四四		辛亥	五	一六		庚戌
癸卯	四五		丙辰	六	一七		乙卯
甲辰	四六		辛酉	七	一八		庚申
乙巳	四七		丁卯	八	一九		丙子
丙午	四八		壬申	九	二〇		辛未
丁未	四九		丁丑	一〇	二一		丙子
戊申	五〇		壬午	一一	二二		辛巳
己酉	五一		戊子	一二	二三		丁亥
庚戌	五二		癸巳	一三	二四		壬辰
辛亥	五三		戊戌	一四	二五		丁酉
壬子	五四		癸卯	一五	二六		壬子
癸丑	五五		己酉	一六	二七		戊申
甲寅	元	共王	甲寅	一七	二八		癸丑
乙卯	二		己未	一八	二九		戊午
丙辰	三		甲子	一九	三〇		癸亥
丁巳	四		庚午	二〇	三一		己巳
戊午	五	〇	乙亥	二一	三二	〇	甲戌
己未	六		庚辰	二二	三三		己卯
庚申	七		乙酉	二三	三四		甲申

○魯世家云、厲公三十七年卒、魯人立二其弟具一、是爲二献公一、

一乙卯蔀

辛酉	八		辛卯	二四		三五		庚寅
壬戌	九		丙申	二五		三六		乙未
癸亥	一〇		辛丑	二六		三七		庚子
甲子	一一		丙午	二七		元	献公	乙巳
乙丑	一二		壬子	二八		二		辛亥
丙寅	元	懿王	丁巳	二九		三		丙辰
丁卯	二		壬戌	三〇		四		辛酉
戊辰	三		丁卯	三一		五		丙寅
己巳	四		癸酉	三二		六		壬申
庚午	五		戊寅	三三		七		丁丑
辛未	六		癸未	三四		八		壬午
壬申	七		戊子	三五		九		丁亥
癸酉	八		甲午	三六		一〇		癸巳
甲戌	九		己亥	三七	擢卒	一一		戊戌
乙亥	一〇		甲辰	元	獻公	一二		癸卯
丙子	一一		己酉	二		一三		戊申
丁丑	一二	○	乙卯	三		一四	（	甲寅
戊寅	一三		庚申	四		一五		己未
己卯	一四		乙丑	五		一六		甲子

（劉歆云、厲公世家、即位三十七年、及献公具立、

（甲寅蔀

○劉歆云、献公十五年、正月甲寅朔旦冬至、殷曆以爲二

干支	年	王	干支	年		年		干支
庚辰	一五		庚午	六		一七		己巳
辛巳	一六		丙子	七		一八		乙亥
壬午	一七		辛巳	八		一九		庚辰
癸未	一八		丙戌	九		二〇		乙酉
甲申	一九		辛卯	一〇		二一		庚寅
乙酉	二〇		丁酉	一一		二二		丙申
丙戌	二一		壬寅	一二		二三		辛丑
丁亥	二二		丁未	一三		二四		丙午
戊子	二三		壬子	一四		二五		辛亥
己丑	二四		戊午	一五		二六		丁巳
庚寅	二五		癸亥	一六		二七		壬戌
辛卯	元	孝王	戊辰	一七		二八		丁卯
壬辰	二		癸酉	一八		二九		壬申
癸巳	三		己卯	一九		三〇		戊寅
甲午	四		甲申	二〇		三一		癸未
乙未	五		己丑	二一		三二		戊子
丙申	六	○	甲午	二二		三三	○	癸巳
丁酉	七		庚子	二三		三四		己亥
戊戌	八		乙巳	二四		三五		甲辰

乙卯、距二懿公一七十六歲、

〇魯世家云、献公三十二年卒、子眞公濞立、

〇史記十二侯表云、

干支	年	王	干支	年	公	年	公	干支
己亥	九		庚戌	二五		三六		己酉
庚子	元	夷王	乙卯	二六		三七		甲刁
辛丑	二		辛酉	二七		三八		庚申
壬寅	三		丙寅	二八		三九		乙丑
癸卯	四		辛未	二九		四〇		庚午
甲辰	五		丙子	三〇		四一		乙亥
乙巳	六		壬午	三一		四二		辛巳
丙午	七		丁亥	三二	具卒	四三		丙戌
丁未	八		壬辰	元	愼公	四四		辛卯
戊申	元	厲王	丁酉	二		四五		丙申
己酉	二		癸卯	三		四六		壬刁
庚戌	三		戊申	四		四七		丁未
辛亥	四		癸丑	五		四八		壬子
壬子	五		戊午	六		四九		丁巳
癸丑	六		甲子	七		五〇		癸亥
甲寅	七		己巳	八		元	愼公	戊辰
乙卯	八	〇	甲戌	九		二	〇	癸酉
丙辰	九		己卯	一〇		三		戊刁
丁巳	一〇		乙酉	一一		四		甲申

〇劉歆云、世家ニ、献公即レ位五十年、子愼公執立嗚、献公十八年多シ

慎公十五年、一云十四年庚申、共和元年、以宣王少、大臣共和行政、按十五年非也、十四年爲是、

○十二侯表云、宣王元年甲戌、與竹書合、

○魯世家云、眞公三

戊午	一一		庚寅	一二		五		己丑
己未	一二		乙未	一三		六		甲午
庚申	一三	共和攝政	庚子	一四		七		己亥
辛酉	一四		丙午	一五		八		乙巳
壬戌	一五		辛亥	一六		九		庚戌
癸亥	一六		丙辰	一七		一〇		乙卯
甲子	一七		辛酉	一八		一一		庚申
乙丑	一八		丁卯	一九		一二		丙刁
丙寅	一九		壬申	二〇		一三		辛未
丁卯	二〇		丁丑	二一		一四		丙子
戊辰	二一		壬午	二二		一五		辛巳
己巳	二二		戊子	二三		一六		丁亥
庚午	二三		癸巳	二四		一七		壬辰
辛未	二四		戊戌	二五		一八		丁酉
壬申	二五		癸卯	二六		一九		壬刁
癸酉	二六		己酉	二七		二〇		戊申
甲戌	元	宣王 ○	甲寅	二八		二一	○	癸丑
乙亥	二		己未	二九		二二		戊午
丙子	三		甲子	三〇		二三		癸亥

十年卒、弟敖立、是爲㆓武公㆒、
〇十二侯表、以㆓宣王三年㆒、爲㆓武公元年㆒者、與㆓魯世家㆒不㆑合、非也、
〇魯世家云、武公九年、春武公、與㆓長子括、少子戯㆒、西朝㆓周宣王㆒、宣王愛㆑戯、爲㆓魯太子㆒、夏武公歸而卒、戯立是爲㆓懿公㆒、
〇十二侯表云、宣王十三年丙戌、魯懿公元年、
〇魯世家云、懿公九年、懿公兄括之子、伯

甲午蔀

干支	年		干支	年	公	年	公	干支
丁丑	四		庚午	元	武公	二四		己巳
戊寅	五		乙亥	二		二五		甲戌
己卯	六		庚辰	三		二六		己卯
庚辰	七		乙酉	四		二七		甲申
辛巳	八		辛卯	五		二八		庚寅
壬午	九		丙申	六		二九		乙未
癸未	一〇		辛丑	七		三〇		庚子
甲申	一一		丙午	八		元	武公	乙巳
乙酉	一二		壬子	九		二		辛亥
丙戌	一三		丁巳	元	懿公	元	懿公	丙辰
丁亥	一四		壬戌	二		二		辛酉
戊子	一五		丁卯	三		三		丙寅
己丑	一六		癸酉	四		四		壬申
庚寅	一七		戊寅	五		五		丁丑
辛卯	一八		癸未	六		六		壬午
壬辰	一九		戊子	七		七		丁亥
癸巳	二〇	〇	甲午	八		八	〇	癸巳
甲午	二一		己亥	九		九		戊戌
乙未	二二		甲辰	元	柏御	元	伯御	癸卯

武公七年少シ
〇劉歆云、愼公世家、卽位三十年、乃武公敖立、武公世家、卽位二年、子懿公被立戯、(凡テ七十二年加ヘテ八年減ジタリ然レバ六十四年增タル也)

〇癸巳蔀
〇劉歆云、懿公九年正月癸巳朔旦冬至、殷歷以爲㆓甲午㆒距㆓惠公㆒七十六歲、

與₂魯人₁攻殺₂懿公₁、而立₂伯御₁爲君、

○十二侯表云、宣王二十二年乙未、魯孝公稱元年、伯御立爲レ君、稱爲₂諸公子₁云、伯御武公孫、

○魯世家云、伯御即位十一年、周宣王伐レ魯、殺₂其君伯御₁、而乃立₂稱於夷宮₁、是爲₂孝公₁、

○十二侯表云宣王三十二年乙巳周宣王誅₂伯御₁立₂其弟稱₁是爲孝公、

丙申	二三		己酉	二	二	戊申
丁酉	二四		乙卯	三	三	甲寅
戊戌	二五		庚申	四	四	己未
己亥	二六		乙丑	五	五	甲子
庚子	二七		庚午	六	六	己巳
辛丑	二八		丙子	七	七	乙亥
壬寅	二九		辛巳	八	八	庚辰
癸卯	三〇		丙戌	九	九	乙酉
甲辰	三一		辛卯	一〇	一〇	庚寅
乙巳	三二		丁酉	一一	一一	丙申
丙午	三三		壬寅	元孝公	元孝公	辛丑
丁未	三四		丁未	二	二	丙午
戊申	三五		壬子	三	三	辛亥
己酉	三六		戊午	四	四	丁巳
庚戌	三七		癸亥	五	五	壬戌
辛亥	三八		戊辰	六	六	丁卯
壬子	三九	〇	癸酉	七	七 〇	壬申
癸丑	四〇		己卯	八	八	戊寅
甲寅	四一		甲申	九	九	癸未

○劉歆云、世家₂懿公即位九年、兄子栢御立、

○劉歆云、栢御世家即位十一年、叔父孝公稱立、

○十二侯表云、幽王元年庚申、與二竹書一合、

○十二侯表云、幽王十一年庚午、王爲二大戎一所レ殺、

○又云、平王元年辛未、東徙二雒邑一、與二竹書一合、

○魯世家云、二十七年孝公卒、子弗湟立、

干支	年	王	干支	年	公	年	公	干支
乙卯	四二		己丑	一〇		一〇		戊子
丙辰	四三		甲午	一一		一一		癸巳
丁巳	四四		庚子	一二		一二		己亥
戊午	四五		乙巳	一三		一三		甲辰
己未	四六		庚戌	一四		一四		己酉
庚申	元	幽王	乙卯	一五		一五		甲寅
辛酉	二		辛酉	一六		一六		庚申
壬戌	三		丙寅	一七		一七		乙丑
癸亥	四		辛未	一八		一八		庚午
甲子	五		丙子	一九		一九		乙亥
乙丑	六		壬午	二〇		二〇		辛巳
丙寅	七		丁亥	二一		二一		丙戌
丁卯	八		壬辰	二二		二二		辛卯
戊辰	九		丁酉	二三		二三		丙申
己巳	一〇		癸卯	二四		二四		壬寅
庚午	一一		戊申	二五		二五		丁未
辛未	元	東周平王 ○	癸丑	二六		二六	○	壬子
壬申	二		戊午	二七	稱卒	二七		丁巳
癸酉	三		甲子	元	惠公	元	惠公	癸亥

○劉歆云、孝公世家、卽位二十七年、

是爲二惠公、（十二侯表云、平王三年癸酉、魯惠公弗湟元年、

干支	年	記事	干支	年	記事	年	記事	干支	記事
甲戌	四		己巳	二		二		戊辰	子惠公皇立、
乙亥	五		甲戌	三		三		癸酉	
丙子	六		己卯	四		四		戊寅	
丁丑	七		乙酉	五		五		甲申	
戊寅	八		庚寅	六		六		己丑	
己卯	九		乙未	七		七		甲午	
庚辰	一〇		庚子	八		八		己亥	
辛巳	一一		丙午	九		九		乙巳	
壬午	一二		辛亥	一〇		一〇		庚戌	
癸未	一三		丙辰	一一		一一		乙卯	
甲申	一四		辛酉	一二		一二		庚申	
乙酉	一五		丁卯	一三		一三		丙寅	
丙戌	一六		壬申	一四		一四		辛未	
丁亥	一七		丁丑	一五		一五		丙子	
戊子	一八		壬午	一六		一六		辛巳	
己丑	一九		戊子	一七		一七		丁亥	
庚寅	二〇	○	癸巳	一八		一八	○	壬辰	
辛卯	二一		戊戌	一九		一九		丁酉	
壬辰	二二		癸卯	二〇		二〇		壬寅	

癸酉部

癸巳	二三		己酉	二一		二一		戊申
甲午	二四		甲寅	二二		二二		癸丑
乙未	二五		己未	二三		二三		戊午
丙申	二六		甲子	二四		二四		癸亥
丁酉	二七		庚午	二五		二五		己巳
戊戌	二八		乙亥	二六		二六		甲戌
己亥	二九		庚辰	二七		二七		己卯
庚子	三〇		乙酉	二八		二八		甲申
辛丑	三一		辛卯	二九		二九		庚寅
壬寅	三二		丙申	三〇		三〇		乙未
癸卯	三三		辛丑	三一		三一		庚子
甲辰	三四		丙午	三二		三二		乙巳
乙巳	三五		壬子	三三		三三		辛亥
丙午	三六		丁巳	三四		三四		丙辰
丁未	三七		壬戌	三五		三五		辛酉
戊申	三八		丁卯	三六		三六		丙寅
己酉	三九	○	癸酉	三七		三七	○	壬申
庚戌	四〇		戊寅	三八		三八		丁丑
辛亥	四一		癸未	三九		三九		壬午

○壬申蔀

○劉歆云、惠公三十八年、正月壬申朔旦冬至、殷曆以爲癸酉、距惠公

○魯世家云、四十六年惠公卒、長庶子、息、攝當國、行二君事一、是爲二隱公一、

○十二侯表云、平王四十九年己未、魯隱公息元年、

○十二侯表云、桓王元年壬戌與二竹書一合、

○魯世家云、隱公十一年冬、公子揮使三

壬子	四二		戊子	四[illegible]		四〇		丁亥
癸丑	四三		甲午	四一		四一		癸巳
甲寅	四四		己亥	四二		四二		戊戌
乙卯	四五		甲辰	四三		四三		癸卯
丙辰	四六		己酉	四四		四四		戊申
丁巳	四七		乙卯	四五		四五		甲寅
戊午	四八		庚申	四六	弗湟卒	四六		己未
己未	四九		乙丑	元	隱公	元	隱公	甲子
庚申	五〇		庚午	二		二		己巳
辛酉	五一		丙子	三		三		乙亥
壬戌	元	桓王	辛巳	四		四		庚辰
癸亥	二		丙戌	五		五		乙酉
甲子	三		辛卯	六		六		庚寅
乙丑	四		丁酉	七		七		丙申
丙寅	五		壬寅	八		八		辛丑
丁卯	六		丁未	九		九		丙午
戊辰	七	○	壬子	一〇		一〇	○	辛亥
己巳	八		戊午	一一		一一		丁巳
庚午	九		癸亥	元	桓公	元	桓公	壬戌

七十六歲、

○劉歆云、世家二惠公卽位四十六年、子隱公息立、凡伯禽至二春秋一、三百八十六年、

○劉歆云、春秋隱公、春秋卽位十一年、及桓公軌立、此元年上距二伐紂一二

人弑二隱公一、而立二公子允一爲レ君、是爲二桓公一、十二侯表同、○十二侯表云、桓王九年、庚午、魯桓公元年、

○魯世家云、十八年春、公與二夫人一如レ齊、齊襄公通二桓公夫人一、使三人殺二桓公一、魯立二太子同一、是爲二

辛未	一〇		戊辰	二		二		丁卯
壬申	一一		癸酉	三		三		壬申
癸酉	一二		己卯	四		四		戊寅
甲戌	一三		甲申	五		五		癸未
乙亥	一四		己丑	六		六		戊子
丙子	一五		甲午	七		七		癸巳
丁丑	一六		庚子	八		八		己亥
戊寅	一七		乙巳	九		九		甲辰
己卯	一八		庚戌	一〇		一〇		己酉
庚辰	一九		乙卯	一一		一一		甲寅
辛巳	二〇		辛酉	一二		一二		庚申
壬午	二一		丙寅	一三		一三		乙丑
癸未	二二		辛未	一四		一四		庚午
甲申	二三		丙子	一五		一五		乙亥
乙酉	元	莊王	壬午	一六		一六		辛巳
丙戌	二		丁亥	一七		一七		丙戌
丁亥	三	〇	壬辰	一八		一八	〇	辛卯
戊子	四		丁酉	元	莊公	元	莊公	丙申
己丑	五		癸卯	二		二		壬寅

四百歲、△篤胤今計レ之、四百十二年也、

○劉歆云、桓公春秋卽位十八年、子莊公同立、

莊公、

○十二侯表云、莊王元年乙酉、同四年戊子、魯莊公元年、

○十二侯表云、釐王元年庚子、與竹書合、

○十二侯表云、惠王元年乙巳、與竹書合、

干支	年	王	干支	年		年		干支
庚寅	六		戊申	三		三		丁未
辛卯	七		癸丑	四		四		壬子
壬辰	八		戊午	五		五		丁巳
癸巳	九		甲子	六		六		癸亥
甲午	一〇		己巳	七		七		戊辰
乙未	一一		甲戌	八		八		癸酉
丙申	一二		己卯	九		九		戊寅
丁酉	一三		乙酉	一〇		一〇		甲申
戊戌	一四		庚寅	一一		一一		己丑
己亥	一五		乙未	一二		一二		甲午
庚子	元	釐王	庚子	一三		一三		己亥
辛丑	二		丙午	一四		一四		乙巳
壬寅	三		辛亥	一五		一五		庚戌
癸卯	四		丙辰	一六		一六		乙卯
甲辰	五		辛酉	一七		一七		庚申
乙巳	元	惠王	丁卯	一八		一八		丙寅
丙午	二	○	壬申	一九		一九	○	辛未
丁未	三		丁丑	二〇		二〇		丙子
戊申	四		壬午	二一		二一		辛巳

○魯世家云、三十二年八月癸亥莊公卒、子開立、是爲ニ湣公一、湣公二年、哀姜與ニ慶父一謀殺ニ湣公一、季友奉ニ公子申一立レ之、是爲ニ釐公一、釐公亦莊公少子、

○十二侯表云、惠王十六年庚申、魯湣公元年、

○又云、惠王十八年壬戌、魯僖公元年、

壬子蔀

己酉	五		戊子	二二		二二		丁亥
庚戌	六		癸巳	二三		二三		壬辰
辛亥	七		戊戌	二四		二四		丁酉
壬子	八		癸卯	二五		二五		壬刁
癸丑	九		己酉	二六		二六		戊申
甲寅	一〇		甲寅	二七		二七		癸丑
乙卯	一一		己未	二八		二八		戊午
丙辰	一二		甲子	二九		二九		癸亥
丁巳	一三		庚午	三〇		三〇		己巳
戊午	一四		乙亥	三一		三一		甲戌
己未	一五		庚辰	三二		三二		己卯
庚申	一六		乙酉	元	閔公	元	愍公	甲申
辛酉	一七		辛卯	二		二		庚刁
壬戌	一八		丙申	元	僖公	元	釐公	乙未
癸亥	一九		辛丑	二		二		庚子
甲子	二〇		丙午	三		三		乙巳
乙丑	二一	○	壬子	四		四	○	辛亥
丙寅	二二		丁巳	五		五		丙辰
丁卯	二三		壬戌	六		六		辛酉

○劉歆云、莊公、春秋即位三十二年、子愍公啓方立、愍公春秋即位二年、及釐公申立、

○辛亥蔀

○劉歆云、釐公五年、正月辛亥朔旦冬至、殷歷以爲ニ壬子一、距ニ成公一七十

○十二侯表云、襄王元年庚午、與竹書合、

歲	年	記事					
戊辰	二四		丁卯	七	七		丙寅
己巳	二五		癸酉	八	八		壬申
庚午	元	襄王	戊寅	九	九		丁丑
辛未	二		癸未	一〇	一〇		壬午
壬申	三		戊子	一一	一一		丁亥
癸酉	四		甲午	一二	一二		癸巳
甲戌	五		己亥	一三	一三		戊戌
乙亥	六		甲辰	一四	一四		癸卯
丙子	七		己酉	一五	一五		戊申
丁丑	八		乙卯	一六	一六		甲寅
戊寅	九		庚申	一七	一七		己未
己卯	一〇		乙丑	一八	一八		甲子
庚辰	一一		庚午	一九	一九		己巳
辛巳	一二		丙子	二〇	二〇		乙亥
壬午	一三		辛巳	二一	二一		庚辰
癸未	一四		丙戌	二二	二二		乙酉
甲申	一五	○	辛卯	二三	二三	○	庚寅
乙酉	一六		丁酉	二四	二四		丙申
丙戌	一七		壬寅	二五	二五		辛丑

六歲、此歲距上元、十四萬二千五百七十七歲、得孟統五十三章首、故傳曰、五年春王正月辛亥朔、日南至、

〇魯世家云、三十三年釐公卒、子興立、是爲二文公一、

〇十二侯表云、襄王二十六年乙未、魯文公元年、

〇十二侯表云、頃王元年癸卯、與二竹書一合、

丁亥	一八		丁未	二六		二六		丙午
戊子	一九		壬子	二七		二七		辛亥
己丑	二〇		戊午	二八		二八		丁巳
庚寅	二一		癸亥	二九		二九		壬戌
辛卯	二二		戊辰	三〇		三〇		丁卯
壬辰	二三		癸酉	三一		三一		壬申
癸巳	二四		己卯	三二		三二		戊寅
甲午	二五		甲申	三三		三三		癸未
乙未	二六		己丑	元	文公	元	文公	庚子
丙申	二七		甲午	二		二		癸巳
丁酉	二八		庚子	三		三		己亥
戊戌	二九		乙巳	四		四		甲辰
己亥	三〇		庚戌	五		五		己酉
庚子	三一		乙卯	六		六		甲寅
辛丑	三二		辛酉	七		七		庚申
壬寅	三三		丙寅	八		八		乙丑
癸卯	元	頃王・〇	辛未	九		九	〇	庚午
甲辰	二		丙子	一〇		一〇		乙亥
乙巳	三		壬午	一一		一一		辛巳

〇劉歆云、春秋釐公卽位三十三年、子文公興立、文公元年、距二辛亥朔旦冬至一二十九歲、

○十二侯表云、匡王元年己酉、與竹書合、

○魯世家云、十八年二月文公卒、子俀立、是爲宣公、

○十二侯表云、匡王五年癸丑、魯宣公元年、

○十二侯表云、定王元年乙卯、與竹書合、

丙午	四		丁亥	一二		一二		丙戌
丁未	五		壬辰	一三		一三		辛卯
戊申	六		丁酉	一四		一四		丙申
己酉	元	匡王	癸卯	一五		一五		壬寅
庚戌	二		戊申	一六		一六		丁未
辛亥	三		癸丑	一七		一七		壬子
壬子	四		戊午	一八		一八	卒	丁巳
癸丑	五		甲子	元	宣公	元	宣公	癸亥
甲寅	六		己巳	二		二		戊辰
乙卯	元	定王	甲戌	三		三		癸酉
丙辰	二		己卯	五		五		戊寅
丁巳	三		乙酉	四		四		甲申
戊午	四		庚寅	六		六		己丑
己未	五		乙未	七		七		甲午
庚申	六		庚子	八		八		己亥
辛酉	七		丙午	九		九		乙巳
壬戌	八	○	辛亥	一〇		一〇	○	庚戌
癸亥	九		丙辰	一一		一一		乙卯
甲子	一〇		辛酉	一二		一二		庚申

○劉歆云、春秋卽位十八年、子宣公倭立、

〇魯世家云、十八年宣公卒、子黑肱立、是爲二成公一、

〇十二侯表云、定王十七年辛未、魯成公元年、

〇十二侯表云、簡王元年丙子、與二竹書一合、

辛卯蔀

年	周	周	干支	魯	魯	魯	魯	干支
乙丑	一一		丁夘	一三		一三		丙刁
丙寅	一二		壬申	一四		一四		辛未
丁卯	一三		丁丑	一五		一五		丙子
戊辰	一四		壬午	一六		一六		辛巳
己巳	一五		戊子	一七		一七		丁亥
庚午	一六		癸巳	一八		一八		壬辰
辛未	一七		戊戌	元	成公	元	成公	丁酉
壬申	一八		癸卯	二		二		壬刁
癸酉	一九		己酉	三		三		戊申
甲戌	二〇		甲寅	四		四		癸丑
乙亥	二一		己未	五		五		戊午
丙子	元	簡王	甲子	六		八		癸亥
丁丑	二		庚午	七		七		己巳
戊寅	三		乙亥	八		八		甲戌
己卯	四		庚辰	九		九		己卯
庚辰	五		乙酉	一〇		一〇		甲申
辛巳	六	〇	辛卯	一〇		一一	〇	庚刁
壬午	七		丙申	一二		一二		乙未
癸未	八		辛丑	一三		一三		庚子

〇劉歆云、春秋宣公即位十八年、子成公黑肱立、

〇庚寅蔀

〇劉歆云、成公十二年、正月庚寅、朔旦冬至、殷歷以爲二辛卯一、距二定公一七

〇十二侯表云、簡王十四年己丑、魯襄公元年、

〇魯世家云、十八年成公卒、子午立、是爲二襄公一、是時襄公三歲也、

〇十二侯表云、靈王元年庚寅、與二竹書一合、

干支	周年	王	干支	魯年	公	魯年	公	干支
甲申	九		丙午	一四		一四		乙巳
乙酉	一〇		壬子	一五		一五		辛亥
丙戌	一一		丁巳	一六		一六		丙辰
丁亥	一二		壬戌	一七		一七		辛酉
戊子	一三		丁卯	一八		一八		丙寅
己丑	一四		癸酉	元	襄公	元	襄公	壬申
庚寅	元	靈王	戊寅	二		二		丁丑
辛卯	二		癸未	三		三		壬午
壬辰	三		戊子	四		四		丁亥
癸巳	四		甲午	五		五		癸巳
甲午	五		己亥	六		六		戊戌
乙未	六		甲辰	七		七		癸卯
丙申	七		己酉	八		八		戊申
丁酉	八		乙卯	九		九		甲寅
戊戌	九		庚申	一〇		一〇		己未
己亥	一〇		乙丑	一一		一一		甲子
庚子	一一	〇	庚午	一二		一二	〇	己巳
辛丑	一二		丙子	一三		一三		乙亥
壬寅	一三		辛巳	一四		一四		庚辰

十六歲、

〇劉歆云、春秋成公卽位十八年、子襄公午立、

〇十二侯表云、景王元年丁巳、與竹書合、
〇魯世家云、三十一年六月襄公卒、子稠立、是爲昭公、昭公年十九猶有童心、

干支	周		干支	魯				干支
癸卯	一四		丙戌	一五		十五		乙酉
甲辰	一五		辛卯	一六		十六		庚寅
乙巳	一六		丁酉	一七		十七		丙申
丙午	一七		壬寅	一八		十八		辛丑
丁未	一八		丁未	一九		十九		丙午
戊申	一九		壬子	二〇		二〇		辛亥
己酉	二〇		戊午	二一		二一		丁巳
庚戌	二一		癸亥	二二		二二		壬戌
辛亥	二二		戊辰	二三		二三		丁卯
壬子	二三		癸酉	二四		二四		壬申
癸丑	二四		己卯	二五		二五		戊寅
甲寅	二五		甲申	二六		二六		癸未
乙卯	二六		己丑	二七		二七		戊子
丙辰	二七		甲午	二八		二八		癸巳
丁巳	元	景王	庚子	二九		二九		己亥
戊午	二		乙巳	三〇		三〇		甲辰
己未	三	〇	庚戌	三一		三一	〇	己酉
庚申	四		乙卯	元	昭公	元	昭公	甲寅
辛酉	五		辛酉	二		二		庚申

〇劉歆云、春秋襄公即位三十一年、子昭公稠立、

○十二矦表云、景王四年庚申、魯昭公元年、

壬戌	六		丙寅	三		三		乙丑
癸亥	七		辛未	四		四		庚午
甲子	八		丙子	五		五		乙亥
乙丑	九		壬午	六		六		辛巳
丙寅	一〇		丁亥	七		七		丙戌
丁卯	一一		壬辰	八		八		辛卯
戊辰	一二		丁酉	九		九		丙申
己巳	一三		癸卯	一〇		一〇		壬刁
庚午	一四		戊申	一一		一一		丁未
辛未	一五		癸丑	一二		一二		壬子
壬申	一六		戊午	一三		一三		丁巳
癸酉	一七		甲子	一四		一四		癸亥
甲戌	一八		己巳	一五		一五		戊辰
乙亥	一九		甲戌	一六		一六		癸酉
丙子	二〇		己卯	一七		一七		戊刁
丁丑	二一		乙酉	一八		一八		甲申
戊寅	二二	○	庚寅	一九		一九	○	己丑
己卯	二三		乙未	二〇		二〇		甲午
庚辰	二四		庚子	二一		二一		己亥

○劉歆云、昭公二十年、春王正月、距テ辛亥ニ百三十三歲、是辛亥後八章首也、

〇十二侯表云、敬王元年壬午、與竹書合、

〇魯世家云、三十二年昭公卒、魯人共立昭公弟宋、爲君、是爲定公、

〇十二侯表云、敬王十一年癸巳、魯定公元年、

庚午蔀

歲	周			魯				
辛巳	二五		丙午	二二		二二		乙巳
壬午	元	敬王	辛亥	二三		二三		庚戌
癸未	二		丙辰	二四		二四		乙卯
甲申	三		辛酉	二五		二五		庚申
乙酉	四		丁卯	二六		二六		丙寅
丙戌	五		壬申	二七		二七		辛未
丁亥	六		丁丑	二八		二八		丙子
戊子	七		壬午	二九		二九		辛巳
己丑	八		戊子	三〇		三〇		丁亥
庚寅	九		癸巳	三一		三一		壬辰
辛卯	一〇		戊戌	三二		三二	卒	丁酉
壬辰	一一		癸卯	元	定公	元	定公	壬寅
癸巳	一二		己酉	二		二		戊申
甲午	一三		甲寅	三		三		癸丑
乙未	一四		己未	四		四		戊午
丙申	一五		甲子	五		五		癸亥
丁酉	一六	〇	庚午	六		六	〇	己巳
戊戌	一七		乙亥	七		七		甲戌
己亥	一八		庚辰	八		八		己卯

正月己丑朔旦冬至、失閏故傳曰、二月己丑日南至、

〇劉歆云、春秋昭公卽位三十二年、及定公宋立、

〇己巳蔀

〇劉歆云、定公七年、正月己巳朔旦冬至、殷歷以爲庚午、距元公七十

○魯世家云、十五年定公卒、子將立、是爲二哀公一、
○十二侯表云、敬王二十六年丁未、魯哀公元年、

干支	年		干支	年	年	干支	注
庚子	一九		乙酉	九	九	甲申	六歲、
辛丑	二〇		辛卯	一〇	一〇	庚刁	
壬寅	二一		丙申	一一	一一	乙未	
癸卯	二二		辛丑	一二	一二	庚子	
甲辰	二三		丙午	一三	一三	乙巳	
乙巳	二四		壬子	一四	一四	辛亥	
丙午	二五		丁巳	一五	一五	丙辰	○劉歆云、春秋定公卽位十五年、子哀公將立、
丁未	二六		壬戌	元 哀公	元 哀公	辛酉	
戊申	二七		丁卯	二	二	丙刁	
己酉	二八		癸酉	三	三	壬申	
庚戌	二九		戊寅	四	四	丁丑	
辛亥	三〇		癸未	五	五	壬午	
壬子	三一		戊子	六	六	丁亥	
癸丑	三二		甲午	七	七	癸巳	
甲寅	三三		己亥	八	八	戊戌	
乙卯	三四		甲辰	九	九	癸卯	
丙辰	三五	○	己酉	一〇	一〇	戊申	
丁巳	三六		乙卯	一一	一一	甲刁	
戊午	三七		庚申	一二	一二	己未	

〇十二侯表云、四十三年甲子敬王崩、按十二侯表止ニ于此一、故以ニ六國表一繼レ之、云元王元年、徐廣注云、乙丑魯哀十九年也、

〇六國表云、定王元年、徐廣注癸酉、左傳盡レ此、

〇魯世家云、二十七年哀公卒、子寧立、是爲ニ悼公一〇按六國表云、定王元年徐廣注、癸酉二年魯哀公

己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌	乙亥	丙子	丁丑
三八	三九	四〇	四一	四二	四三	元	二	三	四	五	六	七	八	元	二	三	四	五
						元王								貞定王		〇		
乙丑	庚午	丙子	辛巳	丙戌	辛卯	丁酉	壬寅	丁未	壬子	戊午	癸亥	戊辰	癸酉	己卯	甲申	己丑	甲午	庚子
一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	元	二	三
	西狩獲麟														卒	悼公		
一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	元	二	三	四
															悼公	〇		
甲子	己巳	乙亥	庚辰	乙酉	庚寅	丙申	辛丑	丙午	辛亥	丁巳	壬戌	丁卯	壬申	戊寅	癸未	戊子	癸巳	己亥

劉歆云、自リ春秋一盡テ哀公十四年一凡二百四十二年、

〇劉歆云、六國春秋、哀公後十三年ニ遜ニ于邾一、哀公卽位二十七年、子悼公曼立、寧、

卒三年魯悼公元年今取レ之、

戊寅	六		乙巳	四	五		甲辰
己卯	七		庚戌	五	六		己酉
庚辰	八		乙卯	六	七		甲刁
辛巳	九		辛酉	七	八		庚申
壬午	一〇		丙寅	八	九		乙丑
癸未	一一		辛未	九	一〇		庚午
甲申	一二		丙子	一〇	一一		乙亥
乙酉	一三		壬午	一一	一二		辛巳
丙戌	一四		丁亥	一二	一三		丙戌
丁亥	一五		壬辰	一三	一四		辛卯
戊子	一六		丁酉	一四	一五		丙申
己丑	一七		癸卯	一五	一六		壬刁
庚寅	一八		戊申	一六	一七		丁未
辛卯	一九		癸丑	一七	一八		壬子
壬辰	二〇		戊午	一八	一九		丁巳
癸巳	二一		甲子	一九	二〇		癸亥
甲午	二二	○	己巳	二〇	二一	○	戊辰
乙未	二三		甲戌	二一	二二		癸酉
丙申	二四		己卯	二二	二三		戊刁

○六國表云、考王元年、徐廣注辛丑、

○魯世家云、三十七年悼公卒、子嘉立、是爲二元公一、○按六國表、考王十二年魯悼公卒、十三年魯元

己酉蔀

干支	周			魯				
丁酉	二五		乙酉	二三		二四		甲申
戊戌	二六		庚寅	二四		二五		己丑
己亥	二七		乙未	二五		二六		甲午
庚子	二八		庚子	二六		二七		己亥
辛丑	元	考王	丙午	二七		二八		乙巳
壬寅	二		辛亥	二八		二九		庚戌
癸卯	三		丙辰	二九		三〇		乙卯
甲辰	四		辛酉	三〇		三一		庚申
乙巳	五		丁卯	三一		三二		丙寅
丙午	六		壬申	三二		三三		辛未
丁未	七		丁丑	三三		三四		丙子
戊申	八		壬午	三四		三五		辛巳
己酉	九		戊子	三五		三六		丁亥
庚戌	十〇		癸巳	三六		三七		壬辰
辛亥	十一		戊戌	三七		元	元公	丁酉
壬子	十二		癸卯	三八		二		壬寅
癸丑	十三	〇	己酉	元	元公	三	〇	戊申
甲寅	十四		甲寅	二		四		癸丑
乙卯	十五		己未	三		五		戊午

○劉歆云、世家悼公即位三十七年、子元公嘉立、

○戊申蔀

○劉歆云、元公四年、正月戊申朔旦冬至、殷歷以爲二己

公元年、今取レ之、○六國表云、威烈王元年、徐廣注丙辰、

○魯世家云、元公二十一年卒、子顯立、是爲二穆公一○按六國表云、威烈王十九年、魯穆公元年、

丙辰	元	威烈王	甲子	四		六		癸亥
丁巳	二		庚午	五		七		己巳
戊午	三		乙亥	六		八		甲戌
己未	四		庚辰	七		九		己卯
庚申	五		乙酉	八		[illegible]		甲申
辛酉	六		辛卯	九		一一		庚寅
壬戌	七		丙申	一〇		一二		乙未
癸亥	八		辛丑	一一		一三		庚子
甲子	九		丙午	一二		一四		乙巳
乙丑	一〇		壬子	一三		一五		辛亥
丙寅	一一		丁巳	一四		一六		丙辰
丁卯	一二		壬戌	一五		一七		辛酉
戊辰	一三		丁卯	一六		一八		丙寅
己巳	一四		癸酉	一七		一九		壬申
庚午	一五		戊寅	一八		二〇		丁丑
辛未	一六		癸未	一九		二一		壬午
壬申	一七		戊子	二〇		元	穆公	丁亥
癸酉	一八		甲午	二一		二		癸巳
甲戌	一九		己亥	元	穆公	三		戊戌

酉ト、距二康公一七十六歲、

○劉歆云、元公世家即位二十一年、子穆公衍立、顯

○六國表云、安王元年、徐廣注庚庚、

乙亥	二〇		甲辰	二		四		癸卯
丙子	二一		己酉	三		五		戊申
丁丑	二二		乙卯	四		六		甲刁
戊寅	二三		庚申	五		七		己未
己卯	二四		乙丑	六		八		甲子
庚辰	元	安王	庚午	七		九		己巳
辛巳	二		丙子	八		一〇		乙亥
壬午	三		辛巳	九		一一		庚辰
癸未	四		丙戌	一〇		一二		乙酉
甲申	五		辛卯	一一		一三		庚刁
乙酉	六		丁酉	一二		一四		丙申
丙戌	七		壬寅	一三		一五		辛丑
丁亥	八		丁未	一四		一六		丙午
戊子	九		壬子	一五		一七		辛亥
己丑	一〇		戊午	一六		一八		丁巳
庚寅	一一		癸亥	一七		一九		壬戌
辛卯	一二	〇	戊辰	一八		二〇	〇	丁卯
壬辰	一三		癸酉	一九		二一		壬申
癸巳	一四		己卯	二〇		二二		戊刁

○魯世家云、穆公三十三年卒、子奮立、是爲共公、○按六國表、安王二十六年、魯共公元年、今取之、
○六國表云、烈王元年、徐廣注丙午年、

干支	周			魯		魯		
甲午	一五		甲申	二一		二三		癸未
乙未	一六		己丑	二二		二四		戊子
丙申	一七		甲午	二三		二五		癸巳
丁酉	一八		庚子	二四		二六		己亥
戊戌	一九		乙巳	二五		二七		甲辰
己亥	二〇		庚戌	二六		二八		己酉
庚子	二一		乙卯	二七		二九		甲寅
辛丑	二二		辛酉	二八		三〇		庚申
壬寅	二三		丙寅	二九		三一		乙丑
癸卯	二四		辛未	三〇		三二		庚午
甲辰	二五		丙子	三一		三三		乙亥
乙巳	二六		壬午	元	共公	元	恭公	辛巳
丙午	元	烈王	丁亥	二		二		丙戌
丁未	二		壬辰	三		三		辛卯
戊申	三		丁酉	四		四		丙申
己酉	四		癸卯	五		五		壬寅
庚戌	五	○	戊申	六		六	○	丁未
辛亥	六		癸丑	七		七		壬子
壬子	七		戊午	八		八		丁巳

○劉歆云、穆公世家即位、三十三年、子恭公奮立、

○六國表云、顯王元年、徐廣注癸丑、

○魯世家云、共公二十二年卒、子屯立、是爲康公、○按六國表云、顯王十七年、魯康公元年、今取之、

戊子蔀

歲次	周		朔	魯				朔
癸丑	元	顯王	甲子	九		九		癸亥
甲寅	二		己巳	一〇		一〇		戊辰
乙卯	三		甲戌	一一		一一		癸酉
丙辰	四		己卯	一二		一二		戊寅
丁巳	五		乙酉	一三		一三		甲申
戊午	六		庚寅	一四		一四		己丑
己未	七		乙未	一五		一五		甲午
庚申	八		庚子	一六		一六		己亥
辛酉	九		丙午	一七		一七		乙巳
壬戌	一〇		辛亥	一八		一八		庚戌
癸亥	一一		丙辰	一九		一九		乙卯
甲子	一二		辛酉	二〇		二〇		庚申
乙丑	一三		丁卯	二一		二一		丙寅
丙寅	一四		壬申	二二		二二		辛未
丁卯	一五		丁丑	二三		元	康公	丙子
戊辰	一六		壬午	二四		二		辛巳
己巳	一七	○	戊子	元	康公	三	○	丁亥
庚午	一八		癸巳	二		四		壬辰
辛未	一九		戊戌	三		五		丁酉

○劉歆云、恭公世家、即位二十二年、子康王毛立、

○劉歆云、康公四年、正月丁亥朔旦

〇魯世家云、康公九年卒、子匽立、是爲二景公一、〇按六國表、顯王二十六年魯景公偃元年、

干支	年		干支	年		年		干支
壬申	二〇		癸卯	四		六		壬寅
癸酉	二一		己酉	五		七		戊申
甲戌	二二		甲寅	六		八		癸丑
乙亥	二三		己未	七		九	卒	戊午
丙子	二四		甲子	八		元	景公	癸亥
丁丑	二五		庚午	九		二		己巳
戊寅	二六		乙亥	元	景公	三		甲戌
己卯	二七		庚辰	二		四		己卯
庚辰	二八		乙酉	三		五		甲申
辛巳	二九		辛卯	四		六		庚寅
壬午	三〇		丙申	五		七		乙未
癸未	三一		辛丑	六		八		庚子
甲申	三二		丙午	七		九		乙巳
乙酉	三三		壬子	八		一〇		辛亥
丙戌	三四		丁巳	九		一一		丙辰
丁亥	三五		壬戌	一〇		一二		辛酉
戊子	三六	○	丁卯	一一		一三	○	丙寅
己丑	三七		癸酉	一二	一	一四		壬申
庚寅	三八		戊寅	一三		一五		丁丑

冬至、殷曆以爲二戊子一、距二繆公一七十六歲、

○劉歆云、康公世二家即位九年、子景公偃立、

○六國表云、慎靚王元年、徐廣注辛丑、

○魯世家云、景公二十九年卒、子叔立、是爲平公、○按六國表、赧王元年、魯平公元年、徐廣注丁未、

干支	年	王	干支	年	公	年	公	干支
辛卯	三九		癸未	一四		一六		壬午
壬辰	四〇		戊子	一五		一七		丁亥
癸巳	四一		甲午	一六		一八		癸巳
甲午	四二		己亥	一七		一九		戊戌
乙未	四三		甲辰	一八		二〇		癸卯
丙申	四四		己酉	一九		二一		戊申
丁酉	四五		乙卯	二〇		二二		甲寅
戊戌	四六		庚申	二一		二三		己未
己亥	四七		乙丑	二二		二四		甲子
庚子	四八		庚午	二三		二五		己巳
辛丑	元	慎靚王	丙子	二四		二六		乙亥
壬寅	二		辛巳	二五		二七		庚辰
癸卯	三		丙戌	二六		二八		乙酉
甲辰	四		辛卯	二七		二九	卒	庚寅
乙巳	五		丁酉	二八		元	平公	丙申
丙午	六		壬寅	二九		二		辛丑
丁未	元	赧王〇	丁未	元	平公	三		丙午
戊申	二		壬子	二		四		辛亥
己酉	三		戊午	三		五		丁巳

○劉歆云、景公世家、即位二十九年、子平公旅立、

〔〕按竹書紀年、盡于赧王十六年壬戌歲、〇魯世家云、三十二年平公卒、子賈立、是爲二文公一〇按六國表、赧王二十年魯文公元年、徐廣注一作レ湣、今從レ之、

干支	年		干支	年		年		干支
庚戌	四		癸亥	四		六		壬戌
辛亥	五		戊辰	五		七		丁卯
壬子	六		癸酉	六		八		壬申
癸丑	七		己卯	七		九		戊刁
甲寅	八		甲申	八		一〇		癸未
乙卯	九		己丑	九		一一		戊子
丙辰	一〇		甲午	一〇		一二		癸巳
丁巳	一一		庚子	一一		一三		己亥
戊午	一二		乙巳	一二		一四		甲辰
己未	一三		庚戌	一三		一五		己酉
庚申	一四		乙卯	一四		一六		甲刁
辛酉	一五		辛酉	一五		一七		庚申
壬戌	一六		丙寅	一六		一八		乙丑
癸亥	一七		辛未	一七		一九		庚午
甲子	一八		丙子	一八		二〇		乙亥
乙丑	一九		壬午	一九		元	緡公	辛巳
丙寅	二〇		丁亥	元	湣公	二	〔〕	丙戌
丁卯	二一		壬辰	二		三		辛卯
戊辰	二二		丁酉	三		四		丙申

〔〕劉歆云、平公世家、即位二十年、緡公賈立、

丁卯蔀

己巳	二三		癸卯	四		五		壬刁
庚午	二四		戊申	五		六		丁未
辛未	二五		癸丑	六		七		壬子
壬申	二六		戊午	七		八		丁巳
癸酉	二七		甲子	八		九		癸亥
甲戌	二八		己巳	九		一〇		戊辰
乙亥	二九		甲戌	一〇		一一		癸酉
丙子	三〇		己卯	一一		一二		戊刁
丁丑	三一		乙酉	一二		一三		甲申
戊寅	三二		庚寅	一三		一四		己丑
己卯	三三		乙未	一四		一五		甲午
庚辰	三四		庚子	一五		一六		己亥
辛巳	三五		丙午	一六		一七		乙巳
壬午	三六		辛亥	一七		一八		庚戌
癸未	三七		丙辰	一八		一九		乙卯
甲申	三八		辛酉	一九		二〇		庚申
乙酉	三九	○	丁卯	二〇		二一	○	丙刁
丙戌	四〇		壬申	二一		二二		辛未
丁亥	四一		丁丑	二二		二三		丙子

○劉歆云、緡公二十二年、正月丙寅、朔旦冬至殷歷以爲二丁卯一、距二漢高祖一八年七十六歲、
○劉歆云、緡公世家、即位二十三年、子頃公雖立、

○魯世家云、二十三年文公卒、子讎立、是爲頃公、按六國表、赧王四十三年、魯頃公元年、

○六國表云、赧王五十七年卒、徐廣注乙巳、○按周、自武王至赧王三十四

戊子	四二		壬午	二三		元	頃公	辛巳
己丑	四三		戊子	元	頃公	二		丁亥
庚寅	四四		癸巳	二		三		壬辰
辛卯	四五		戊戌	三		四		丁酉
壬辰	四六		癸卯	四		五		壬寅
癸巳	四七		己酉	五		六		戊申
甲午	四八		甲寅	六		七		癸丑
乙未	四九		己未	七		八		戊午
丙申	五〇		甲子	八		九		癸亥
丁酉	五一		庚午	九		一〇		己巳
戊戌	五二		乙亥	一〇		一一		甲戌
己亥	五三		庚辰	一一		一二		己卯
庚子	五四		乙酉	一二		一三		甲申
辛丑	五五		辛卯	一三		一四		庚寅
壬寅	五六		丙申	一四		一五		乙未
癸卯	五七		辛丑	一五		一六		庚子
甲辰	五八	○	丙午	一六		一七	○	乙巳
乙巳	五九	降于秦卒周亡	壬子	一七		一八		辛亥
丙午	五二	秦昭王	丁巳	一八		一九		丙辰

○劉歆云、六國表、頃公十八年、秦昭王之

世、自二伐紂庚寅歳一至二周亡乙巳歳一凡七百九十六年、

○魯世家云、二十四年、楚考烈王伐滅レ魯、頃公亡遷二于卞邑一、爲二家人一、魯絶レ祀、頃公卒二于柯一、魯起二周公一至二頃公一凡三十四世、

○徐廣注、昭王五十九年丙午、孝文王元年辛亥、莊襄王元年壬子、始皇帝元年乙卯、

干支	年	王	干支	年	事	年	事	干支
丁未	五三		壬戌	一九		二〇		辛酉
戊申	五四		丁卯	二〇		二一		丙寅
己酉	五五		癸酉	二一		二二		壬申
庚戌	五六		戊寅	二二		二三		丁丑
辛亥	元	孝文王	癸未	二三		二四	魯亡	壬午
壬子	元	莊襄王	戊子	二四	魯亡			丁亥
癸丑	二		甲午	二				癸巳
甲寅	三		己亥	三				戊戌
乙卯	元	始皇帝	甲辰	元	始皇帝			癸卯
丙辰	二		己酉	二				戊申
丁巳	三		乙卯	三				甲寅
戊午	四		庚申	四				己未
己未	五		乙丑	五				甲子
庚申	六		庚午	六				己巳
辛酉	七		丙子	七				乙亥
壬戌	八		辛巳	八				庚辰
癸亥	九	○	丙戌	九	○			乙酉
甲子	一〇		辛卯	一〇				庚寅
乙丑	一一		丁酉	一一				丙申

五十一年也、秦始滅レ周、凡二十六王、八百六十七歳、

昭王本紀無二天子一五年、

實ハ七百九十六年ナレバ七十一年多シ、殷ノ多年ト合セテ百九十二年多シ

○劉歆云、秦孝文王本紀、即位一年、元年楚考烈王滅レ魯、頃公爲二家人一、周滅後六年也、

丙寅	一二		壬寅	一二		辛丑
丁卯	一三		丁未	一三		丙午
戊辰	一四		壬子	一四		辛亥
己巳	一五		戊午	一五		丁巳
庚午	一六		癸亥	一六		壬戌
辛未	一七		戊辰	一七		丁卯
壬申	一八		癸酉	一八		壬申
癸酉	一九		己卯	一九		戊寅
甲戌	二〇		甲申	二〇		癸未
乙亥	二一		己丑	二一		戊子
丙子	二二		甲午	二二		癸巳
丁丑	二三		庚子	二三		己亥
戊寅	二四		乙巳	二四		甲辰
己卯	二五		庚戌	二五		己酉
庚辰	二六	始稱皇帝	乙卯	二六	稱始皇帝	甲寅
辛巳	二七		辛酉	二七		庚申
壬午	二八	○	丙寅	二八	○	乙丑
癸未	二九		辛未	二九		庚午
甲申	三〇		丙子	三〇		乙亥

○史記秦楚月表云、二世元年壬辰、三年八月、趙高殺二二世一、九月子嬰爲レ王、○六國表云、二世三年趙高反、二世自殺、高立二二世兄子嬰一、子嬰立刺殺二趙高一夷二三族一、諸侯入レ秦、嬰降爲二項羽一所レ殺、尋誅レ羽、天下屬レ漢、○自二漢高祖一以下、據二于史記漢書之本紀一表レ之、

丙午部

歲次	年	帝	干支	年	帝	干支
乙酉	三一		壬午	三一		辛巳
丙戌	三二		丁亥	三二		丙戌
丁亥	三三		壬辰	三三		辛卯
戊子	三四		丁酉	三四		丙申
己丑	三五		癸卯	三五		壬寅
庚寅	三六		戊申	三六		丁未
辛卯	三七	始皇殂	癸丑	三七		壬子
壬辰	元	二世皇帝	戊午	元	二世皇帝	丁巳
癸巳	二		甲子	二		癸亥
甲午	三		己巳	三		戊辰
乙未	元	漢高祖	甲戌	元	漢高祖	癸酉
丙申	二		己卯	二		戊寅
丁酉	三		乙酉	三		甲申
戊戌	四		庚寅	四		己丑
己亥	五		乙未	五		甲午
庚子	六		庚子	六		己亥
辛丑	七	○	丙午	七	○	乙巳
壬寅	八		辛亥	八		庚戌
癸卯	九		丙辰	九		乙卯

○劉歆云、二世本紀即位三年、凡秦伯五世、四十九歲、○漢高祖天下號曰レ漢、距二上元年一、十四萬三千二十五歲、○劉歆云、八年十一月乙巳朔旦冬至、殷歷以爲二丙午一、距二元朔一七十六歲 ○按八年當レ作二七年一、

干支	年	帝		干支	年	帝		干支
甲辰	一〇			辛酉	一〇			庚申
乙巳	一一			丁卯	一			丙寅
丙午	一二			壬申	二			辛未
丁未	元	惠帝		丁丑	元	惠帝		丙子
戊申	二			壬午	二			辛巳
己酉	三			戊子	三			丁亥
庚戌	四			癸巳	四			壬辰
辛亥	五			戊戌	五			丁酉
壬子	六			癸卯	六			壬寅
癸丑	七			己酉	七			戊申
甲寅	元	高后		甲寅	元	高后		癸丑
乙卯	二			己未	二			戊午
丙辰	三			甲子	三			癸亥
丁巳	四			庚午	四			己巳
戊午	五			乙亥	五			甲戌
己未	六			庚辰	六			己卯
庚申	七		○	乙酉	七		○	甲申
辛酉	八			辛卯	八			庚寅
壬戌	元	文帝		丙申	元	文帝		乙未

(一)劉歆云、著紀高帝即位十二年、惠帝著紀即位七年、高后著紀即位八年、

干支	年		干支	年		干支
癸亥	二		辛丑	二		庚子
甲子	三		丙午	三		乙巳
乙丑	四		壬子	四		辛亥
丙寅	五		丁巳	五		丙辰
丁卯	六		壬戌	六		辛酉
戊辰	七		丁卯	七		丙寅
己巳	八		癸酉	八		壬申
庚午	九		戊寅	九		丁丑
辛未	一〇		癸未	一〇		壬午
壬申	一一		戊子	一一		丁亥
癸酉	一二		甲午	一二		癸巳
甲戌	一三		己亥	一三		戊戌
乙亥	一四		甲辰	一四		癸卯
丙子	一五		己酉	一五		戊申
丁丑	一六		乙卯	一六		甲寅
戊寅	後元		庚申	一七		己未
己卯	二	○	乙丑	一八	○	甲子
庚辰	三		庚午	一九		己巳
辛巳	四		丙子	二〇		乙亥

○劉歆云、文帝前十六年後七年、著紀即位二十三年、

壬午	癸未	甲申	乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳	甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子
五	六	七	前元	二	三	四	五	六	七	中元	二	三	四	五	六	元	二	三
			景帝													○		
辛巳	丙戌	辛卯	丁酉	壬寅	丁未	壬子	戊午	癸亥	戊辰	癸酉	己卯	甲申	己丑	甲午	庚子	乙巳	庚戌	乙卯

二一	二二	二三	元	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六
			景帝													○		
庚辰	乙酉	庚寅	丙申	辛丑	丙午	辛亥	丁巳	壬戌	丁卯	壬申	戊寅	癸未	戊子	癸巳	己亥	甲辰	己酉	甲寅

○劉歆云、景帝前七年、中六年、後三年、著紀即位十六年、

乙酉蔀

干支	年		干支	年		干支
辛丑	建元 武帝		辛酉	建元 武帝		庚申
壬寅	二		丙寅	二		乙丑
癸卯	三		辛未	三		庚午
甲辰	四		丙子	四		乙亥
乙巳	五		壬午	五		辛巳
丙午	六		丁亥	六		丙戌
丁未	元光		壬辰	元光		辛卯
戊申	二		丁酉	二		丙申
己酉	三		癸卯	三		壬刁
庚戌	四		戊申	四		丁未
辛亥	五		癸丑	五		壬子
壬子	六		戊午	六		丁巳
癸丑	元		甲子	元朔		癸亥
甲寅	二		己巳	二		戊辰
乙卯	三		甲戌	三		癸酉
丙辰	四		己卯	四		戊刁
丁巳	五	○	乙酉	五	○	甲申
戊午	六		庚寅	六		己丑
己未	元狩		乙未	元狩		甲午

○劉歆云、武帝建元、元光、元朔、各六年、元朔六年十一月甲申、朔旦冬至、殷歴以爲二乙酉一ト、距二初元一七十六歲、○按元朔六年當レ作二五年一也、

干支	年		干支	年		干支
庚申	二		庚子	二		己亥
辛酉	三		丙午	三		乙巳
壬戌	四		辛亥	四		庚戌
癸亥	五		丙辰	五		乙卯
甲子	六		辛酉	六		庚申
乙丑	元鼎		丁卯	元鼎		丙寅
丙寅	二		壬申	二		辛未
丁卯	三		丁丑	三		丙子
戊辰	四		壬午	四		辛巳
己巳	五		戊子	五		丁亥
庚午	六		癸巳	六		壬辰
辛未	元封		戊戌	元封		丁酉
壬申	二		癸卯	二		壬寅
癸酉	三		己酉	三		戊申
甲戌	四		甲寅	四		癸丑
乙亥	五		己未	五		戊午
丙子	六	○	甲子	六	○	甲子
丁丑	太初		庚午	太初		己巳
戊寅	二		乙亥	二		甲戌

○劉歆云、元狩、元鼎、元封各六年、漢歷太初元年、距㆓上元㆒十四萬三千一百二十七歲、前十一月甲子朔旦冬至、歲在㆓星紀婺女六度㆒、

干支	年		干支
己卯	三		庚辰
庚辰	四		乙酉
辛巳	天漢		辛卯
壬午			丙申
癸未			辛丑
甲申			丙午
乙酉			壬子
丙戌			丁巳
丁亥			壬戌
戊子			丁卯
己丑			癸酉
庚寅			戊寅
辛卯			癸未
壬辰			戊子
癸巳			甲午
甲午			己亥
乙未		○	甲辰
丙申			己酉
丁酉			乙卯

年		干支
三		己卯
四		甲申
天漢		庚寅
二		乙未
三		庚子
四		乙巳
太始		辛亥
二		丙辰
三		辛酉
四		丙寅
征和		壬申
二		丁丑
三		壬午
四		丁亥
後元		癸巳
二		戊戌
始元	昭帝 ○	癸卯
二		戊申
三		甲寅

○劉歆云、太初、天漢、太始、征和、各四年、後元二年、著紀即位五十四年、

戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯	甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬子	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰
																○		
庚申	乙丑	庚午	丙子	辛巳	丙戌	辛卯	丁酉	壬寅	丁未	壬子	戊午	癸亥	戊辰	癸酉	己卯	甲申	己丑	甲午
四	五	六	元鳳	二	三	四	五	六	元平	本始	二	三	四	地節	二	三	四	元康
										宣帝						○		
己未	甲子	己巳	乙亥	庚辰	乙酉	庚寅	丙申	辛丑	丙午	辛亥	丁巳	壬戌	丁卯	壬申	戊寅	癸未	戊子	癸巳

〔劉歆、昭帝始元、元鳳、各六年、元平一年、著紀即位十三年、

歳次							
丁巳			庚子	二			己亥
戊午			乙巳	三			甲辰
己未			庚戌	四			己酉
庚申			乙卯	神爵			甲刁
辛酉			辛酉	二			庚申
壬戌			丙寅	三			乙丑
癸亥			辛未	四			庚午
甲子			丙子	五鳳			乙亥
乙丑			壬午	二			辛巳
丙寅			丁亥	三			丙戌
丁卯			壬辰	四			辛卯
戊辰			丁酉	甘露			丙申
己巳			癸卯	二			壬刁
庚午			戊申	三			丁未
辛未			癸丑	四			壬子
壬申			戊午	黄龍			丁巳
癸酉		○	甲子	初元	元帝	○	癸亥
甲戌			二				
乙亥			三				

○劉歆云、宣帝本始、地節、元康、神爵、五鳳、甘露、各四年、黄龍一年、著紀即位二十五年、

○劉歆云、元帝初元二年十一月癸亥朔旦冬至、殷曆以爲甲子、以爲紀首、是歳也、十月日食、非合辰之會、不得爲紀首、距建武七十六歳、○按初元二年當作初元元年也、

甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥

春秋曆本術編序

蓋聞。

我神州者。三皇五帝之本國。大八君子之靈域也。九州之既立。八極之斯張也。乃其仰望我。猶扶桑之懸日也。其服事我。猶暘谷之歸流也。若夫赤縣小人之國。則世代數革。年歷漸移。放伐一興。大道終廢。於是能知古始者。曠世而不有。反以我爲東夷倭奴。而彼自稱中國華夏。比之乎子孫之悖祖先。臣僕之叛君上也。僭上可惡。莫甚焉。吾大壑平先生。爲之慷慨痛歎。蓋有年矣。好尙不敏。面牆固陋。而辱門人名。恒操几杖。奉灑掃。雖似小鮮不解靈蚪之遠規。竟驚不知鴻鵠之非匹。謹竊察其爲人。沈勇無倫。英武絶類。志淩厲九霄。氣騰躙玄極。目窮萬卷。手著百部。抑亦莫未嘗吐其慷慨痛歎之氣者焉。其所雅言。夫

我國者。日出之本域也。故以神武爲骨髓。以華文爲皮毛。與彼日沒之末縣。尊文卑武者。大異也。爾等造次勿忘赤心報國之志。顚沛勿忽尊內卑外之義焉。好尙一日。與聞春秋時曆之談。先生乃謂曰。當時二百四十二年。曾無一曆史哉。其置閏有舛錯。晦朔有進退。節氣之參差。時曆之紛糅。一無提綱擧目。執古御今之人矣。爾來二千三百餘年。論之愈暗。議之益誤。嗚呼眞曆之不明。本術之不講。如此。是亦無古曆學哉。且夫春秋之世。亂臣跋扈。賊子猖獗。名分不立。天壤易位。今也。其赤縣小人之。於我神州。亦殆似是。吾其如之何乎。乃出其所著之。春秋命歷序考。及此編。以示曰。溥天之下。莫非我

天皇之土。率土之濱。莫非我

天皇之臣。吾冀敎之以君師之道。諭之以臣子之禮。彼乃崩角稽首。名正言順。則已矣。若夫獨夫不服。一言有犯。則薄之如風。陵之如波。若天墮。若地出。其破陣也。猶昆劍之試朝菌。沸湯之消飛雪。其攻城也。猶迅雷不及塞耳。疾霆不暇掩目。乃伸肘摑其禿魁。嘗

掌撫其脅從。遂使彼長奉
正朔。無闕朝貢。上輝
靑華之靈光。下褫赤縣之僭號。則豈不亦愉快乎。
是吾志也。雖然。方今
朝廷御運。惠及禽獸。澤被無外。
聖化之全盛。千載所未値焉。豈動干戈之時矣哉。
況乎予也。是草莽之一夫。素非其任焉。於是
乎。退以几上爲戰場。筆管爲兵器。外攻戎
籍。內守
神典。而撰述之書皆將成焉。此二編亦其一也。女擇
序之。好尙不敢以不敏固辭。拜而受之。退而
讀之。其考徵之懇切。議論之該博。寔古今所未
聞也。信乎。格言不吐庸人之口。高文不墜頑
夫之手也。(庸上頑上蓋脫於字也)几上之戰亦盡
勝矣。蓋此本術編之爲書也。後之攻春秋及傳
者。以爲旌旗。以爲金鼓。則將不血及。而
土崩瓦解矣。然則後世豈不有古曆學哉。或
外之。而佗求。恐號令無統。隊伍無律。而勝敗
未可逆知焉。抑先生之於此書。僅々一小編。
不足強稱撰述焉。亦几上獻捷之一爾。好尙嘗
聞。夫曆者。聖人所以揆天行。而紀萬國也。卽
是我神聖。太皞氏之所作也。復聞書爲曉者
傳。事爲識者。若夫沈滯於小康之術。而不
知大道之徒。或讀此編。以爲標紀。以爲階
式。則至知登玄臺入金闕焉。至知登玄
臺入金闕。則至知
皇國之。所以君師于彼焉。至知
皇國之。所以君師于彼。則又應知萬國盡是
榑桑祖州之臣藥焉。所謂盈乎萬鈞。必起于錙銖。
竦秀淩霄。必生於分毫。是也。揆天行而紀
萬國之道。於是乎。可謂全備矣。若偶有出
管見竅理之窟中。知眞聖擬聖之殊別。訪三皇五
帝之墳典。觀
天神地祇之靈門者。則當知此編亦欲竟叢宇宙
蒼生之類。以獻於
枎桑大樹之下之奇術也。唯恨不使孔丘氏面
覽此書。而有我後生知夏時者。獨有此人哉
之歎也。用兵有言。百戰百勝。非善之善者
也。不戰而屈人之兵。善之善者也。其此之謂乎
謹敍。于時

天保五年歲在甲午十一月二十二日

伊豫國新谷藩　碧川好尚

春秋曆本術編

凡例

一春秋曆者。所謂周曆魯曆也。蓋其本術。卽殷曆。卽夏曆。夏曆。卽太昊古曆也。夏后氏以前。以建寅之月爲正月。殷以建丑之月爲正月。周以建子之月爲正月。唯以是爲異焉。至於氣策之推步。則無異。既詳于本編春秋命歷序考。

一古曆者。所謂蔀法也。歲法三百六十五日四分日之一。日法三十二分。氣策十五日三十二分日之七分。朔策二十九日九百四十分日之四百九十九也。歲有零餘十日九百四十分日之八百二十七。故五歲再閏。十九歲而七閏。十九歲爲一章。四章爲一蔀。而章首。必朔旦冬至也。左氏傳中可徵者。唯有一焉。僖五年云。正月辛亥朔日南至。昭二十年云。二月己丑日南至。是也。然今比校之於本術。其爲一日前。則據退朔耳。是所謂時曆也。

一春秋時曆者。當時曆官。以其意進退晦朔者。而經傳中晦朔之不與本術合者。卽是也。蓋是

本出於殷西伯姫昌發意矣。亦既詳于本編。

○如此編書云正大丙子庚戌丙子月建。庚戌朔也。與冬至庚申十一日合是本術也。經傳共不書其他節氣。此編亦略之。

○此編傍書云時曆正月。或二月者。是時曆也。然而細書云某月某干支幾日者。皆鈔錄經傳文者也。其他國語所出。亦間採焉。

○本術閏月。各隷于其本月之閏。時曆閏月。則考其前後晦朔而定之。亦姑隷于其月之下。

○日食。唯書經傳所出。其他不敢採襲焉。先輩或有以後曆術推求之者。非是也。亦既詳于本編。

○晉杜預著春秋長曆。其總論云。不知春秋時曆本術。又云。數術絶滅。宋朱熹亦云。古之曆書。亦必有一定之法。而今亡矣。三代而下。造曆者。紛々莫有定議。愈精愈密。而愈多差。由不得古人一定之法也。彼二人。其是由無眞古學。故以爲無眞古曆。嗚呼。天豈喪斯本術乎。孔丘氏以來。既二千三百有餘年。天下一無能知之者。而獨余始得知其不傳之眞式矣。於是爲後來讀春秋及傳者。著此編。以明古曆之實徵。曉時曆之亂雜如左。

天保四癸巳年十一月　大壑平篤胤

自此年至僖四年乙丑六十七年以二月爲正月

春秋暦本術編

大壑平篤胤著

門人

上野國 生田國秀
越後國 上椙篤輿
武藏國 碧川好尚 同校

魯隱公元己未年

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	大	丙子	庚戌	冬至庚申十一日　時暦前年十二月	○是元年乃當于本術上元癸酉蔀之初章第十年
二	小	丁丑	庚辰	時暦正月	○按自此前年誤增一閏故建子月爲十二月建丑月爲正月至于僖四乙丑年六十七年間也
三	大	戊寅	己酉	二月	
四	大	己卯	己卯	三月	
五	小	庚辰	己酉	四月	
六	大	辛巳	戊寅	五月	五月辛丑二十四日
七	小	壬午	戊申	六月	
八	大	癸未	丁丑	七月	
九	小	甲申	丁未	八月	
十	大	乙酉	丙子	九月	
十一	小	丙戌	丙午	十月	十月庚申十五日
十二	大	丁亥	乙亥	十一月	

隱二庚申年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	戊子	乙巳		冬至乙丑廿一日 時曆前年十二月
二	大	己丑	甲戌	正月	
三	小	庚寅	甲辰	二月	
四	大	辛卯	癸酉	三月	
五	小	壬辰	癸卯	四月	
六	大	癸巳	壬申	五月	
七	大	甲午	壬寅	六月	
八	小	乙未	壬申	七月	
九	大	丙申	辛丑	八月	八月庚辰此月無庚辰 本文必有誤也
十	小	丁酉	辛未	九月	
十一	大	戊戌	庚子	十月	閏小庚午 時曆十一月
十二	大	己亥	己亥		十二月乙卯十七日

隱三辛酉年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	庚子	己巳		冬至庚午二日 時曆前年閏十二月
二	大	辛丑	戊戌	正月	
三	小	壬寅	戊辰	二月	二月己巳日食二日
四	大	癸卯	丁酉	三月	三月庚戌十四日壬戌二十六日
五	小	甲辰	丁卯	四月	四月辛卯二十五日
六	大	乙巳	丙申	五月	
七	小	丙午	丙寅	六月	
八	大	丁未	乙未	七月	
九	小	戊申	乙丑	八月	八月庚辰十六日
十	大	己酉	甲午	九月	
十一	大	庚戌	甲子	十月	
十二	小	辛亥	甲午	十一月	冬庚戌有日無月此月十七日也

隱四壬戌年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	壬子	癸亥		冬至丙子十四日 時曆前年十二月 十二月癸未廿一日
二	小	癸丑	癸巳	正月	
三	大	甲寅	壬戌	二月	
四	小	乙卯	壬辰	三月	戊申有日而無月此月十七日也
五	大	丙辰	辛酉	四月	
六	小	丁巳	辛卯	五月	
七	大	戊午	庚申	六月	
八	小	己未	庚寅	七月	
九	大	庚申	己未	八月	
十	小	辛酉	己丑	九月	
十一	大	壬戌	戊午	十月	
十二	小	癸亥	戊子	十一月	

隱五癸亥年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	甲子	丁巳		冬至辛巳廿五日 時曆前年十二月
二	小	乙丑	丁亥	正月	
三	大	丙寅	丙辰	二月	
四	大	丁卯	丙戌	三月	
五	小	戊辰	丙辰	四月	
六	大	己巳	乙酉	五月	
七	小	庚午	乙卯	六月	閏大甲申 時曆閏六月
八	小	辛未	甲寅	七月	
九	大	壬申	癸未	八月	
十	小	癸酉	癸丑	九月	
十一	大	甲戌	壬午	十月	
十二	小	乙亥	壬子	十一月	

隱六甲子年

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	大	丙子	辛巳	時暦前年十二月	冬至丙戌六日　十二月辛巳一日
二	小	丁丑	辛亥	正月	
三	大	戊寅	庚辰	二月	
四	小	己卯	庚戌	三月	
五	大	庚辰	己卯	四月	
六	大	辛巳	己酉	五月	五月庚申十二日　辛酉十三日
七	小	壬午	己卯	六月	
八	大	癸未	戊申	七月	
九	小	甲申	戊寅	八月	
十	大	乙酉	丁未	九月	
十一	小	丙戌	丁丑	十月	
十二	大	丁亥	丙午	十一月	

隱七乙丑年

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	小	戊子	丙子	時暦前年十二月	冬至辛卯十六日
二	大	己丑	乙巳	正月	
三	小	庚寅	乙亥	二月	
四	大	辛卯	甲辰	三月	
五	小	壬辰	甲戌	四月	
六	大	癸巳	癸卯	五月	
七	小	甲午	癸酉	六月	
八	大	乙未	壬寅	七月	七月庚申十九日
九	小	丙申	壬申	八月	
十	大	丁酉	辛丑	九月	
十一	大	戊戌	辛未	十月	
十二	小	己亥	辛丑	十一月	

隱八丙寅年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	大	庚子	庚午	冬至丁酉廿八日 時曆前年十二月	十二月壬申三日 辛巳十二日
二	小	辛丑	庚子	正月	
三	大	壬寅	己巳	二月	閏小己亥 時曆閏二月
四	大	癸卯	戊辰	三月	三月庚寅二十三日
五	小	甲辰	戊戌	四月	四月甲辰七日 辛亥十四日 甲寅十七日
六	大	乙巳	丁卯	五月	
七	小	丙午	丁酉	六月	六月己亥三日 辛亥十五日
八	大	丁未	丙寅	七月	七月庚午五日
九	小	戊申	丙申	八月	八月丙戌此月無丙戌 本文必有誤也
十	大	己酉	乙丑	九月	九月辛卯二十七日
十一	小	庚戌	乙未	十月	
十二	大	辛亥	甲子	十一月	

隱九丁卯年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	大	壬子	甲午	冬至寅九日 時曆前年十二月	
二	小	癸丑	甲子	正月	
三	大	甲寅	癸巳	二月	
四	小	乙卯	癸亥	三月	三月癸酉十一日 庚辰十八日
五	大	丙辰	壬辰	四月	
六	小	丁巳	壬戌	五月	
七	大	戊午	辛卯	六月	
八	小	己未	辛酉	七月	
九	大	庚申	庚寅	八月	
十	小	辛酉	庚申	九月	
十一	大	壬戌	己丑	十月	
十二	小	癸亥	己未	閏十月	

隱十戊辰年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	大	甲子	戊子	冬至丁未二十日 時曆前年十一月	十一月甲寅廿七日
二	小	乙丑	戊午	十二月	
三	大	丙寅	丁亥	正月	正月癸丑二十七日
四	小	丁卯	丁巳	二月	
五	大	戊辰	丙戌	三月	
六	大	己巳	丙辰	四月	
七	小	庚午	丙戌	五月	六月戊申六月無戊申必此月二十三日也
八	大	辛未	乙卯	六月	壬戌八日○庚午十六日○辛未十七日庚辰二十六日 辛巳有日無月必此月二十七日也
九	小	壬申	乙酉	七月	七月庚寅六日
十	大	癸酉	甲寅	八月	八月壬戌九日 癸亥十日
十一	小	甲戌	甲申	九月	九月戊寅此月無戊寅日月必有誤也
十二	大	乙亥	癸丑	十月	十月壬午三十日 閏小癸未 時曆十一月

隱十一己巳年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	大	丙子	壬子	朔旦冬至 癸酉蔀第二章 時曆前年十二月	
二	小	丁丑	壬午	正月	
三	大	戊寅	辛亥	二月	
四	小	己卯	辛巳	三月	
五	大	庚辰	庚戌	四月	
六	小	辛巳	庚辰	五月	五月甲辰二十五日
七	大	壬午	己酉	六月	
八	小	癸未	己卯	七月	七月庚辰二日 壬午四日
九	大	甲申	戊申	八月	
十	大	乙酉	戊寅	九月	
十一	小	丙戌	戊申	十月	十月壬戌十五日
十二	大	丁亥	丁丑	十一月	十一月壬辰十六日

桓公元年庚午

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	小	戊子	丁未	時曆前年十二月	冬至戊午十二日
二	大	己丑	丙子	正月	
三	小	庚寅	丙午	二月	
四	大	辛卯	乙亥	三月	
五	小	壬辰	乙巳	四月	四月丁未三日
六	大	癸巳	甲戌	五月	
七	小	甲午	甲辰	六月	
八	大	乙未	癸酉	七月	
九	小	丙申	癸卯	八月	
十	大	丁酉	壬申	九月	
十一	小	戊戌	壬寅	十月	
十二	大	己亥	辛未	十一月	

桓二年辛未

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	庚子	辛丑	時曆前年十二月	冬至癸亥二十三日
二	小	辛丑	辛未	閏十二月	
三	大	壬寅	庚子	正月	正月戊申九日
四	小	癸卯	庚午	二月	
五	大	甲辰	己亥	三月	
六	小	乙巳	己巳	四月	
七	大	丙午	戊戌	五月	戊申納ニ于太廟ニ有レ日而無レ月此月十日也
八	小	丁未	戊辰	六月	
九	大	戊申	丁酉	七月	閏小丁卯　時曆八月
十	大	己酉	丙申	九月	
十一	小	庚戌	丙寅	十月	
十二	大	辛亥	乙未	十一月	

桓三　壬申　年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	壬子	乙丑	時曆前年十二月	冬至戊辰四日
二	大	癸丑	甲午	正月	
三	小	甲寅	甲子	二月	
四	大	乙卯	癸巳	三月	
五	大	丙辰	癸亥	四月	
六	小	丁巳	癸巳	五月	
七	大	戊午	壬戌	六月	
八	小	己未	壬辰	七月	七月壬辰朔日有レ食レ之既一日也
九	大	庚申	辛酉	八月	
十	小	辛酉	辛卯	九月	
十一	大	壬戌	庚申	十月	
十二	小	癸亥	庚寅	十一月	

桓四　癸酉　年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	大	甲子	己未	時曆前年十二月	冬至癸酉十五日
二	小	乙丑	己丑	正月	
三	大	丙寅	戊午	二月	
四	小	丁卯	戊子	三月	
五	大	戊辰	丁巳	四月	
六	小	己巳	丁亥	五月	
七	大	庚午	丙辰	六月	
八	大	辛未	丙戌	七月	
九	小	壬申	丙辰	八月	
十	大	癸酉	乙酉	九月	
十一	小	甲戌	乙卯	十月	
十二	大	乙亥	甲申	十一月	

桓五年甲戌年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	丙子	甲寅	時曆前年十二月	冬至己卯二十六日
二	大	丁丑	癸未	正月	正月甲戌前十二月二十日也。杜云書于正月從ㇾ赴也 己丑七日
三	小	戊寅	癸丑	二月	
四	大	己卯	壬午	三月	
五	小	庚辰	壬子	四月	閏大辛巳 時曆閏四月
六	小	辛巳	辛亥	五月	
七	大	壬午	庚辰	六月	
八	小	癸未	庚戌	七月	
九	大	甲申	己卯	八月	
十	小	乙酉	己酉	九月	
十一	大	丙戌	戊寅	十月	
十二	大	丁亥	戊申	十一月	

桓六年乙亥年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	戊子	戊寅	時曆前年十二月	冬至甲申七日
二	大	己丑	丁未	正月	
三	小	庚寅	丁丑	二月	
四	大	辛卯	丙午	三月	
五	小	壬辰	丙子	四月	
六	大	癸巳	乙巳	五月	
七	小	甲午	乙亥	六月	
八	大	乙未	甲辰	七月	
九	小	丙申	甲戌	八月	八月壬午九日
十	大	丁酉	癸卯	九月	九月丁卯二十五日
十一	小	戊戌	癸酉	十月	
十二	大	己亥	壬寅	十一月	

桓七丙子年

月	大小	月建	朔日	周正月	附記
正	小	庚子	壬申		冬至己丑十八日 時曆前年十二月
二	大	辛丑	辛丑	正月	
三	小	壬寅	辛未	二月	二月己亥二十九日
四	大	癸卯	庚子	三月	
五	大	甲辰	庚午	四月	
六	小	乙巳	庚子	五月	
七	大	丙午	己巳	六月	
八	小	丁未	己亥	七月	
九	大	戊申	戊辰	八月	
十	小	己酉	戊戌	九月	
十一	大	庚戌	丁卯	十月	
十二	小	辛亥	丁酉	十一月	

桓八丁丑年

月	大小	月建	朔日	周正月	附記
正	大	壬子	丙寅		冬至甲午二十九日 時曆前年十二月
二	小	癸丑	丙申	閏十二月	閏大乙丑 時曆正月 正月己卯十五日
三	小	甲寅	乙未	二月	
四	大	乙卯	甲子	三月	
五	小	丙辰	甲午	四月	
六	大	丁巳	癸亥	五月	五月丁丑十五日
七	大	戊午	癸巳	六月	
八	小	己未	癸亥	七月	
九	大	庚申	壬辰	八月	
十	小	辛酉	壬戌	九月	
十一	大	壬戌	辛卯	十月	
十二	小	癸亥	辛酉	十一月	

桓九戊寅年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	大	甲子	庚寅		冬至庚子十一日 時暦前年十二月
二	小	乙丑	庚申	正月	
三	大	丙寅	己丑	二月	
四	小	丁卯	己未	三月	
五	大	戊辰	戊子	四月	
六	小	己巳	戊午	五月	
七	大	庚午	丁亥	六月	
八	小	辛未	丁巳	七月	
九	大	壬申	丙戌	八月	
十	小	癸酉	丙辰	九月	
十一	大	甲戌	乙酉	十月	
十二	大	乙亥	乙卯	十一月	

桓十己卯年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	小	丙子	乙酉		冬至乙巳二十一日 時暦前年十一月
二	大	丁丑	甲寅	正月	正月庚申七日
三	小	戊寅	甲申	二月	
四	大	己卯	癸丑	三月	
五	小	庚辰	癸未	四月	
六	大	辛巳	壬子	五月	
七	小	壬午	壬午	六月	
八	大	癸未	辛亥	七月	
九	小	甲申	辛巳	八月	
十	大	乙酉	庚戌	九月	
十一	小	丙戌	庚辰	十月	閏大己酉 時暦十一月
十二	小	丁亥	己卯	十二月	丙午二十八日

桓十一庚辰年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	大	子戊	戊申		冬至庚戌三日　時曆前年閏十一月
二	大	丑己	戊寅	正月	
三	小	寅庚	戊申	二月	
四	大	卯辛	丁丑	三月	
五	小	辰壬	丁未	四月	
六	大	巳癸	丙子	五月	五月癸未八日
七	小	午甲	丙午	六月	
八	大	未乙	乙亥	七月	
九	小	申丙	乙巳	八月	
十	大	酉丁	甲戌	九月	九月丁亥十四日　己亥二十六日
十一	小	戌戊	甲辰	十月	
十二	大	亥己	癸酉	十一月	

桓十二辛巳

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	子庚	癸卯		冬至乙卯十三日　時曆前年十二月
二	大	丑辛	壬申	正月	
三	小	寅壬	壬寅	二月	
四	大	卯癸	辛未	三月	
五	小	辰甲	辛丑	四月	
六	大	巳乙	庚午	五月	
七	大	午丙	庚子	六月	六月壬寅三日
八	小	未丁	庚午	七月	七月丁亥十八日
九	大	申戊	己亥	八月	八月壬辰七月二十四日。杜云書于八月從赴也
十	小	酉己	己巳	九月	
十一	大	戌庚	戊戌	十月	
十二	小	亥辛	戊辰	十一月	十一月丙戌十九日

桓十三年壬午年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	大	壬子	丁酉	冬至辛酉廿五日 時暦前年十二月	十二月丁未十一日
二	小	癸丑	丁卯	正月	
三	大	甲寅	丙申	閏正月	
四	小	乙卯	丙寅	二月	二月己巳四日
五	大	丙辰	乙未	三月	
六	小	丁巳	乙丑	四月	
七	大	戊午	甲午	五月	閏小甲子 時暦六月
八	大	己未	癸巳	七月	
九	小	庚申	癸亥	八月	
十	大	辛酉	壬辰	九月	
十一	大	壬戌	壬戌	十月	
十二	小	癸亥	壬辰	十一月	

桓十四年癸未年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	大	甲子	辛酉	冬至丙寅六日 時暦前年十二月	
二	小	乙丑	辛卯	正月	
三	大	丙寅	庚申	二月	
四	小	丁卯	庚寅	三月	
五	大	戊辰	己未	四月	
六	小	己巳	己丑	五月	
七	大	庚午	戊午	六月	
八	小	辛未	戊子	七月	
九	大	壬申	丁巳	八月	八月壬申十六日 乙亥十九日
十	小	亥酉	丁亥	九月	
十一	大	甲戌	丙辰	十月	
十二	小	乙亥	丙戌	十一月	

桓十五年甲申

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	丙子	乙卯	時曆前年十二月	冬至辛未十七日 / 十二月丁巳三日
二	大	丁丑	乙酉	正月	
三	小	戊寅	乙卯	二月	
四	大	己卯	甲申	三月	三月乙未十二日
五	小	庚辰	甲寅	四月	四月己巳十六日
六	大	辛巳	癸未	五月	
七	小	壬午	癸丑	六月	六月乙亥二十三日
八	大	癸未	壬午	七月	
九	小	甲申	壬子	八月	
十	大	乙酉	辛巳	九月	
十一	小	丙戌	辛亥	十月	
十二	大	丁亥	庚辰	十一月	

桓十六年乙酉

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	小	戊子	庚戌	時曆前年十二月	冬至丙子廿七日
二	大	己丑	己卯	正月	
三	小	庚寅	己酉	二月	
四	小	辛卯	戊申	三月	
五	大	壬辰	丁丑	四月	
六	大	癸巳	丁未	五月	
七	小	甲午	丁丑	六月	
八	大	乙未	丙午	七月	
九	小	丙申	丙子	八月	閏大戊寅 時曆閏二月
十	大	丁酉	乙巳	九月	
十一	小	戊戌	乙亥	十月	
十二	大	己亥	甲辰	十一月	

桓十七年丙戌

月	大小	月建	朔	時曆	記事
正	小	庚子	甲戌	冬至壬午九日 時曆前年十二月	
二	大	辛丑	癸卯	正月	正月丙辰十四日
三	小	壬寅	癸酉	二月	二月丙午 此月無丙午日月必有誤
四	大	癸卯	壬寅	三月	
五	小	甲辰	壬申	四月	
六	大	乙巳	辛丑	五月	五月丙午六日
七	小	丙午	辛未	六月	六月丁丑七日
八	大	丁未	庚子	七月	
九	大	戊申	庚午	八月	八月癸巳二十四日
十	小	己酉	庚子	九月	
十一	大	庚戌	己巳	十月	冬十月朔日有食之 傳曰不書日官失之也 十月辛卯二十三日
十二	小	辛亥	己亥	十一月	

桓十八年丁亥

月	大小	月建	朔	時曆	記事
正	大	壬子	戊辰	冬至丁亥二十日 時曆前年十二月	
二	小	癸丑	戊戌	正月	
三	大	甲寅	丁卯	二月	
四	小	乙卯	丁酉	三月	
五	大	丙辰	丙寅	四月	四月丙子十一日
六	小	丁巳	丙申	五月	丁酉公之喪至自齊 此月二日也有日無月
七	大	戊午	乙丑	六月	
八	小	己未	乙未	七月	七月戊戌四日
九	大	庚申	甲子	八月	
十	小	辛酉	甲午	九月	
十一	大	壬戌	癸亥	十月	
十二	小	癸亥	癸巳	十一月 閏大壬戌 時曆十二月	十二月己丑 此月無己丑日月必有誤

莊公元戊子年

月	大小	月建	朔	注
正	大	甲子	壬辰	朔旦冬至　癸酉蔀第三章
二	小	乙丑	壬戌	
三	大	丙寅	辛卯	
四	小	丁卯	辛酉	
五	大	戊辰	庚寅	
六	小	己巳	庚申	
七	大	庚午	己丑	
八	小	辛未	己未	
九	大	壬申	戊子	
十	小	癸酉	戊午	十月乙亥十八日
十一	大	甲戌	丁亥	
十二	小	乙亥	丁巳	

莊二己丑年

月	大小	月建	朔	注
正	大	丙子	丙戌	冬至丁酉十二日
二	小	丁丑	丙辰	
三	大	戊寅	乙酉	
四	小	己卯	乙卯	
五	大	庚辰	甲申	
六	大	辛巳	甲寅	
七	小	壬午	甲申	
八	大	癸未	癸丑	
九	小	甲申	癸未	
十	大	乙酉	壬子	
十一	小	丙戌	壬午	十一月乙酉四日
十二	大	丁亥	辛亥	

莊三庚寅年

月	大小	朔干支	日	時暦	備考
正	小	戊子	辛巳		冬至癸卯廿三日 時暦前年閏十二月
二	大	己丑	庚戌	正月	
三	小	庚寅	庚辰	二月	
四	大	辛卯	己酉	三月	
五	小	壬辰	己卯	四月	
六	大	癸巳	戊申	五月	
七	小	甲午	戊寅	六月	
八	大	乙未	丁未	七月	
九	大	丙申	丁丑	八月	閏小丁未 時暦九月
十	大	丁酉	丙子		
十一	小	戊戌	丙午		
十二	大	己亥	乙亥		

莊四辛卯年

月	大小	朔干支	日	時暦	備考
正	小	庚子	乙巳		冬至戊申四日 時暦前年十二月
二	大	辛丑	甲戌	正月	
三	小	壬寅	甲辰	二月	
四	大	癸卯	癸酉	三月	
五	小	甲辰	癸卯	四月	
六	大	乙巳	壬申	五月	
七	小	丙午	壬寅	六月	六月乙丑二十四日
八	大	丁未	辛未	七月	
九	小	戊申	辛丑	八月	
十	大	己酉	庚午	九月	
十一	小	庚戌	庚子	十月	
十二	大	辛亥	己巳	十一月	

莊五壬辰年

月	大小	月建	朔	時曆
正	大	子壬	己亥	冬至癸丑十五日 時曆前年十二月
二	小	丑癸	己巳	正月
三	大	寅甲	戊戌	二月
四	小	卯乙	戊辰	三月
五	大	辰丙	丁酉	四月
六	小	巳丁	丁卯	五月
七	大	午戊	丙申	六月
八	小	未己	丙寅	七月
九	大	申庚	乙未	八月
十	小	酉辛	乙丑	九月
十一	大	戌壬	甲午	十月
十二	小	亥癸	甲子	十一月

莊六癸巳年

月	大小	月建	朔	時曆
正	大	子甲	癸巳	冬至戊午廿六日 時曆前年十二月
二	小	丑乙	癸亥	正月
三	大	寅丙	壬辰	二月
四	大	卯丁	壬戌	三月
五	小	辰戊	壬卯	四月
六	小	巳己	辛卯	
七	大	午庚	庚申	
八	小	未辛	庚寅	
九	大	申壬	己未	
十	小	酉癸	己丑	
閏	大		辛酉	時曆五月
十一	大	戌甲	戊午	
十二	小	亥乙	戊子	

莊七年甲午年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	丙子	丁巳	冬至甲子八日
二	小	丁丑	丁亥	
三	大	戊寅	丙辰	
四	小	己卯	丙戌	四月辛卯六日
五	大	庚辰	乙卯	
六	小	辛巳	乙酉	
七	大	壬午	甲寅	
八	大	癸未	甲申	
九	小	甲申	甲寅	
十	大	乙酉	癸未	
十一	小	丙戌	癸丑	
十二	大	丁亥	壬午	

莊八年乙未年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	小	戊子	壬子		冬至己巳十八日 時暦前年閏十二月
二	大	己丑	辛巳	正月	正月甲午十四日
三	小	庚寅	辛亥	二月	
四	大	辛卯	庚辰	三月	
五	小	壬辰	庚戌	四月	
六	大	癸巳	己卯	五月	
七	小	甲午	己酉	六月	
八	大	乙未	戊寅	七月	
九	小	丙申	戊申	八月	
十	大	丁酉	丁丑	九月	
十一	小	戊戌	丁未	十月	
十二	大	己亥	丙子	十一月	十一月癸未八日

莊九丙申年

月	大小	月建	朔	注
正	大	庚子	丙午	冬至甲戌廿九日 時暦前年十二月
二	小	辛丑	丙子	正月
閏	大		乙巳	時暦二月
三	小	壬寅	乙亥	
四	大	癸卯	甲辰	
五	小	甲辰	甲戌	
六	大	乙巳	癸卯	
七	小	丙午	癸酉	七月丁酉廿五日
八	大	丁未	壬寅	八月庚申十九日
九	小	戊申	壬申	時暦閏八月
十	大	己酉	辛丑	九月
十一	小	庚戌	辛未	十月
十二	大	辛亥	庚子	十一月

莊十丁酉年

月	大小	月建	朔	注
正	小	壬子	庚午	冬至己卯十日 時暦前年十二月
二	大	癸丑	己亥	正月
三	大	甲寅	己巳	二月
四	小	乙卯	己亥	三月
五	大	丙辰	戊辰	四月
六	小	丁巳	戊戌	五月
七	大	戊午	丁卯	六月
八	小	己未	丁酉	七月
九	大	庚申	丙寅	八月
十	小	辛酉	丙申	九月
十一	大	壬戌	乙丑	十月
十二	小	癸亥	乙未	十一月

莊十一年戊戌

月	大小	建	朔	時暦	備考
正	大	甲子	甲子	時暦前年十二月	冬至乙酉廿一日
二	小	乙丑	甲午	正月	
三	大	丙寅	癸亥	二月	
四	小	丁卯	癸巳	三月	
五	大	戊辰	壬戌	四月	
六	小	己巳	壬辰	閏五月	
七	大	庚午	辛酉	五月	五月戊寅十八日
八	大	辛未	辛卯	六月	
九	小	壬申	辛酉	七月	
十	大	癸酉	庚寅	八月	
十一	小	甲戌	庚申	九月	閏大己丑 時暦十月
十二	小	乙亥	己未	十一月	

莊十二年己亥

月	大小	建	朔	時暦	備考
正	大	丙子	戊子	時暦前年十二月	冬至庚寅三日
二	小	丁丑	戊午	正月	
三	大	戊寅	丁亥	二月	
四	小	己卯	丁巳	三月	
五	大	庚辰	丙戌	四月	
六	小	辛巳	丙辰	五月	
七	大	壬午	乙酉	六月	
八	小	癸未	乙卯	七月	
九	大	甲申	甲申	八月	八月甲午十一日
十	大	乙酉	甲寅	九月	
十一	小	丙戌	甲申	十月	
十二	大	丁亥	亥丑	十一月	

莊十三年庚子年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	小	戊子	癸未		冬至乙未十三日 時曆前年十二月
二	大	己丑	壬子	正月	
三	小	庚寅	壬午	二月	
四	大	辛卯	辛亥	三月	
五	小	壬辰	辛巳	四月	
六	大	癸巳	庚戌	五月	
七	小	甲午	庚辰	六月	
八	大	乙未	己酉	七月	
九	小	丙申	己卯	八月	
十	大	丁酉	戊申	九月	
十一	小	戊戌	戊寅	十月	
十二	大	己亥	丁未	十一月	

莊十四年辛丑年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	小	庚子	丁丑		冬至庚子廿四日 時曆前年十二月
二	大	辛丑	丙午	正月	
三	大	壬寅	丙子	二月	
四	小	癸卯	丙午	三月	
五	大	甲辰	乙亥	四月	
六	小	乙巳	乙巳	五月	
七	大	丙午	甲戌	閏五月	閏小甲辰 時曆六月 六月甲子廿一日
八	大	丁未	癸酉	七月	
九	小	戊申	癸卯	八月	
十	大	己酉	壬申	九月	
十一	小	庚戌	壬寅	十月	
十二	大	辛亥	辛未	十一月	

莊十五壬寅年

月	大小	建	朔	時曆
正	小	壬子	辛丑	冬至丙午六日 時曆前年十二月
二	大	癸丑	庚午	正月
三	小	甲寅	庚子	二月
四	大	乙卯	己巳	三月
五	小	丙辰	己亥	四月
六	大	丁巳	戊辰	五月
七	大	戊午	戊戌	六月
八	小	己未	戊辰	七月
九	大	庚申	丁酉	八月
十	小	辛酉	丁卯	九月
十一	大	壬戌	丙申	十月
十二	小	癸亥	丙寅	十一月

莊十六癸卯年

月	大小	建	朔	時曆
正	大	甲子	乙未	冬至辛亥十七日 時曆前年十二月
二	小	乙丑	乙丑	正月
三	大	丙寅	甲午	二月
四	小	丁卯	甲子	三月
五	大	戊辰	癸巳	四月
六	小	己巳	癸亥	五月
七	大	戊午	壬辰	六月
八	小	辛未	壬戌	七月
九	大	壬申	辛卯	八月
十	大	癸酉	辛酉	九月
十一	小	甲戌	辛卯	十月
十二	大	乙亥	庚申	十一月

莊十七甲辰年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	小	子丙	庚寅		冬至丙辰廿七日 時暦前年十二月
二	大	丑丁	己未	正月	
三	小	寅戊	己丑	二月	
四	小	卯己	戊子	三月	
五	大	辰庚	丁巳	四月	
六	小	巳辛	丁亥	五月	
七	大	午壬	丙辰	六月	
八	小	未癸	丙戌	七月	
九	大	申甲	乙卯	八月	閏大戊午 時暦閏二月
十	小	酉乙	乙酉	九月	
十一	大	戌丙	甲寅	十月	
十二	小	亥丁	甲申	十一月	

莊十八乙巳年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	大	子戊	癸丑		冬至辛酉九日 時暦前年十一月
二	大	丑己	癸未	正月	
三	小	寅庚	癸丑	二月	
四	大	卯辛	壬午	三月	三月日有食之不書日官失之
五	小	辰壬	壬子	四月	
六	大	巳癸	辛巳	五月	
七	小	午甲	辛亥	六月	
八	大	未乙	庚辰	七月	
九	小	申丙	庚戌	八月	
十	大	酉丁	己卯	九月	
十一	小	戌戊	己酉	十月	
十二	大	亥己	戊寅	十一月	

莊十九年丙午年

月	大小	月建	朔	時曆	附記
正	小	庚子	戊申	時曆前年十二月	冬至丁卯二十日
二	大	辛丑	丁丑	正月	
三	小	壬寅	丁未	二月	
四	大	癸卯	丙子	三月	
五	大	甲辰	丙午	四月	
六	小	乙巳	丙子	五月	
七	大	丙午	乙巳	六月	六月庚申十六日
八	小	丁未	乙亥	七月	
九	大	戊申	甲辰	八月	
十	小	己酉	甲戌	九月	
十一	大	庚戌	癸卯	十月	
十二	小	辛亥	癸酉	十一月	
閏	大		壬寅	時曆閏十一月	

莊二十年丁未年

月	大小	月建	朔	時曆	附記
正	小	壬子	壬申	時曆前年十二月	朔旦冬至 癸酉蔀第四章
二	大	癸丑	辛丑	正月	
三	小	甲寅	辛未	二月	
四	大	乙卯	庚子	三月	
五	小	丙辰	庚午	四月	
六	大	丁巳	己亥	五月	
七	小	戊午	己巳	六月	
八	大	己未	戊戌	七月	
九	大	庚申	戊辰	八月	
十	小	辛酉	戊戌	九月	
十一	大	壬戌	丁卯	十月	
十二	小	癸亥	丁酉	十一月	

莊廿一戊申年

月	大小	朔	干支	時暦	注
正	大	甲子	丙寅	時暦前年十二月	冬至丁丑十一日
二	小	乙丑	丙申	正月	
三	大	丙寅	乙丑	二月	
四	小	丁卯	乙未	三月	
五	大	戊辰	甲子	四月	
六	小	己巳	甲午	五月	五月辛酉廿八日
七	大	庚午	癸亥	六月	
八	小	辛未	癸巳	七月	七月戊戌六日
九	大	壬申	壬戌	八月	
十	小	癸酉	壬辰	九月	
十一	大	甲戌	辛酉	十月	
十二	小	乙亥	辛卯	十一月	

莊廿二己酉年

月	大小	朔	干支	時暦	注
正	大	丙子	庚申	時暦前年十二月	冬至壬午廿三日
二	大	丁丑	庚寅	正月	
三	小	戊寅	庚申	二月	
四	大	己卯	己丑	三月	
五	小	庚辰	己未	四月	
六	大	辛巳	戊子	五月	五月癸丑廿六日
七	小	壬午	戊午	六月	
八	大	癸未	丁亥	七月	七月丙申十日
九	小	甲申	丁巳	八月	閏大丙戌　時暦九月
十	小	乙酉	丙辰		
十一	大	丙戌	乙酉		
十二	小	丁亥	乙卯		

莊廿三年　庚戌

月	大小	月建	朔	備考
正	大	戊子	甲申	冬至戊子五日
二	小	己丑	甲寅	
三	大	庚寅	癸未	
四	大	辛卯	癸丑	
五	小	壬辰	癸未	
六	大	癸巳	壬子	
七	小	甲午	壬午	
八	大	乙未	辛亥	
九	小	丙申	辛巳	
十	大	丁酉	庚戌	
十一	小	戊戌	庚辰	
十二	大	己亥	己酉	十二月甲寅六日

莊廿四年　辛亥

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	小	庚子	己卯	時曆前年閏十二月	冬至癸巳十五日
二	大	辛丑	戊申	正月	
三	小	壬寅	戊寅	二月	
四	大	癸卯	丁未	三月	
五	小	甲辰	丁丑	亖月	
六	大	乙巳	丙午	五月	
七	小	丙午	丙子	六月	
八	大	丁未	乙巳	七月	
九	大	戊申	乙亥	八月	八月丁丑三日 戊寅四日
十	小	己酉	乙巳	九月	
十一	大	庚戌	甲戌	十月	
十二	小	辛亥	甲辰	十一月	

莊廿五壬子年

月	大小	月建	朔	注
正	大	壬子	癸酉	冬至戊戌廿六日　時曆前年十二月
二	小	癸丑	癸卯	正月　文十七年傳二月壬戌此月廿日也
三	大	甲寅	壬申	二月
四	小	乙卯	壬寅	三月
五	大	丙辰	辛未	四月　閏小辛丑一時曆五月　五月癸丑十三日
六	大	丁巳	庚午	時曆辛未進朔　六月辛未朔日食
七	小	戊午	庚子	
八	大	己未	己巳	
九	小	庚申	己亥	
十	大	辛酉	戊辰	
十一	大	壬戌	戊戌	
十二	小	癸亥	戊辰	

莊廿六癸丑年

月	大小	月建	朔	注
正	大	甲子	丁酉	冬至癸卯七日
二	小	乙丑	丁卯	
三	大	丙寅	丙申	
四	小	丁卯	丙寅	
五	大	戊辰	乙未	
六	小	己巳	乙丑	
七	大	庚午	甲午	
八	小	辛未	甲子	
九	大	壬申	癸巳	
十	小	癸酉	癸亥	
十一	大	甲戌	壬辰	
十二	小	乙亥	壬戌	時曆癸亥退朔　十二月癸亥朔日有食之

莊廿七甲寅年

月	大小	月建	朔		備考
正	大	丙子	辛卯		冬至己酉十九日 時曆前年閏十二月
二	小	丁丑	辛酉	正月	
三	大	戊寅	庚寅	二月	
四	大	己卯	庚申	三月	
五	小	庚辰	庚寅	四月	
六	大	辛巳	己未	五月	
七	小	壬午	己丑	六月	
八	大	癸未	戊午	七月	
九	小	甲申	戊子	八月	
十	大	乙酉	丁巳	九月	
十一	小	丙戌	丁亥	十月	
十二	大	丁亥	丙辰	十一月	

莊廿八乙卯年

月	大小	月建	朔		備考
正	小	戊子	丙戌		冬至甲寅廿九日 時曆前年十二月
二	大	己丑	己卯	正月	
三	大	庚寅	甲寅	二月	三月甲寅一日
四	小	辛卯	甲申	四月	四月丁未廿四日
五	大	壬辰	癸丑		時曆閏四月
六	小	癸巳	癸未	五月	
七	大	甲午	壬子	六月	
八	大	乙未	壬午	七月	閏小乙酉 時曆二月
九	小	丙申	壬子	八月	
十	大	丁酉	辛巳	九月	
十一	小	戊戌	辛亥	十月	
十二	大	己亥	庚辰	十一月	

莊廿九年丙辰

月	大小	月建	朔	時曆	註
正	小	庚子	庚戌	時曆前年十二月	冬至己未十日
二	大	辛丑	己卯	正月	
三	小	壬寅	己酉	二月	
四	大	癸卯	戊寅	三月	
五	小	甲辰	戊申	四月	
六	大	乙巳	丁丑	五月	
七	小	丙午	丁未	六月	
八	大	丁未	丙子	七月	
九	小	戊申	丙午	八月	
十	大	己酉	乙亥	九月	
十一	大	庚戌	乙巳	十月	
十二	小	辛亥	乙亥	十一月	

莊三十年丁巳

月	大小	月建	朔	時曆	註
正	大	壬子	甲辰	時曆前年十二月	冬至甲子廿一日
二	小	癸丑	甲戌	正月	
三	大	甲寅	癸卯	二月	
四	小	乙卯	癸酉	三月	
五	大	丙辰	壬寅	四月	四月丙辰十五日
六	小	丁巳	壬申	五月	
七	大	戊午	辛丑	六月	
八	小	己未	辛未	七月	
九	大	庚申	庚子	八月	八月癸亥二十四日
十	小	辛酉	庚午	九月	九月庚午朔日有食 一日
十一	大	壬戌	己亥	十月	閏小己巳 時曆閏十月
十二	大	癸亥	戊戌	十一月	

莊卅一年　戊午年

冬至庚午二日　時暦前年十二月

月	大小		朔	時暦
正	小	子甲	戊辰	
二	大	丑乙	丁酉	正月
三	大	寅丙	丁卯	二月
四	小	卯丁	丁酉	三月
五	大	辰戊	丙寅	四月
六	小	巳己	丙申	五月
七	大	午庚	乙丑	六月
八	小	未辛	乙未	七月
九	大	申壬	甲子	八月
十	小	酉癸	甲午	九月
十一	大	戌甲	癸亥	十月
十二	小	亥乙	癸巳	十一月

莊卅二年　己未年

冬至乙亥十四日　時暦前年十二月

月	大小		朔	時暦	
正	大	子丙	壬戌		
二	小	丑丁	壬辰	正月	
三	大	寅戊	辛酉	二月	
四	小	卯己	辛卯	三月	
五	大	辰庚	庚申	四月	
六	大	巳辛	庚寅	五月	
七	小	午壬	庚申	六月	
八	大	未癸	己丑	七月	七月己巳五日
九	小	申甲	己未	八月	八月癸亥五日
十	大	酉乙	戊子	九月	
十一	小	戌丙	戊午	十月	十月己未二日
十二	大	亥丁	丁亥	十一月	

閔公元年　庚申年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	戊子	丁巳		至冬庚辰廿四日　時曆前年十二月
二	大	己丑	丙戌	正月	
三	小	庚寅	丙辰	二月	
四	大	辛卯	乙酉	三月	
五	小	壬辰	乙卯	四月	
六	大	癸巳	甲申	五月	
七	小	甲午	甲寅	六月	六月辛酉八日
八	小	乙未	癸丑		
九	大	丙申	壬午		
十	大	丁酉	壬子		
十一	小	戊戌	壬午		
十二	大	己亥	辛亥		

閏大癸未　時曆七月

閔二年　辛酉年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	庚子	辛巳		冬至乙酉五日
二	大	辛丑	庚戌		
三	小	壬寅	庚辰		
四	大	癸卯	己酉		
五	小	甲辰	己卯		五月乙酉七日
六	大	乙巳	戊申		時曆閏五月
七	小	丙午	戊寅	六月	
八	大	丁未	丁未	七月	
九	小	戊申	丁丑	八月	八月辛丑二十五日
十	大	己酉	丙午	九月	
十一	小	庚戌	丙子	十月	
十二	大	辛亥	乙巳	十一月	

僖公元年壬戌

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	小	壬子	乙亥		冬至辛卯十七日 時曆前年十二月
二	大	癸丑	甲辰	正月	
三	大	甲寅	甲戌	二月	
四	小	乙卯	甲辰	三月	
五	大	丙辰	癸酉	四月	
六	小	丁巳	癸卯	五月	
七	大	戊午	壬申	六月	
八	小	己未	壬寅	七月	七月戊辰二十七日
九	大	庚申	辛未	八月	
十	小	辛酉	辛丑	九月	
十一	大	壬戌	庚午	十月	十月壬午十三日
十二	小	癸亥	庚子	十一月	十一月丁巳十八日

僖二年癸亥

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	甲子	己巳		冬至丙申廿八日 時曆前年十二月
二	小	乙丑	己亥	正月	
三	大	丙寅	戊辰	二月	
四	大	丁卯	丁卯	三月	
五	大	戊辰	丁酉	四月	
六	小	己巳	丁卯	五月	五月辛巳十五日
七	大	庚午	丙申	六月	
八	小	辛未	丙寅	七月	
九	大	壬申	乙未	八月	閏小戊戌 時曆閏二月
十	小	癸酉	乙丑	九月	
十一	大	甲戌	甲午	十月	
十二	小	乙亥	甲子	十一月	

僖三年甲子年

月	大小	月建	朔	時暦
正	大	子丙	癸巳	冬至辛丑十九日 時暦前年十二月
二	小	丑丁	癸亥	正月
三	大	寅戊	壬辰	二月
四	小	卯己	壬戌	三月
五	大	辰庚	辛卯	四月
六	小	巳辛	辛酉	五月
七	大	午壬	庚寅	六月
八	小	未癸	庚申	七月
九	大	申甲	己丑	八月
十	大	酉乙	己未	九月
十一	小	戌丙	己丑	十月
十二	大	亥丁	戊午	十一月

僖四年乙丑年

月	大小	月建	朔	時暦
正	小	子戊	戊子	冬至丙午十九日 時暦前年十二月
二	大	丑己	丁巳	正月
三	小	寅庚	丁亥	二月
四	大	卯辛	丙辰	三月
五	小	辰壬	丙戌	四月
六	大	巳癸	乙卯	五月
七	小	午甲	乙酉	六月
八	大	未乙	甲寅	七月
九	小	申丙	甲申	八月
十	大	酉丁	癸丑	九月
十一	小	戌戊	癸未	十月
十二	大	亥己	壬子	十一月
閏	大	壬午		時暦十二月 小

按此歳應十二月之閏為十一月小而以建子月為正月於是復本術至于文十七辛亥年四十五年間也

自ニ此年一至ニ文十七年辛亥一四十五年台ニ于本術一

僖五丙寅年

月	大小	月建	朔	注
正	小	庚子	壬子	朔旦冬至 壬子蔀第一章 春秋命歴序云、魯僖公五年正月壬子朔旦冬至是本術也然左傳云ニ僖公五年春王正月辛亥朔日南至一則時曆之退朔而竄ニ于壬子蔀一者其說具ニ於命歴序考一
二	大	辛丑	辛巳	
三	小	壬寅	辛亥	
四	大	癸卯	庚辰	
五	小	甲辰	庚戌	
六	大	乙巳	己卯	
七	小	丙午	己酉	
八	大	丁未	戊寅	八月甲午十七日
九	小	戊申	戊申	九月戊申朔日食一日
十	大	己酉	丁丑	
十一	小	庚戌	丁未	
十二	大	辛亥	丙子	十二月丙子朔一日

僖六丁卯年

月	大小	月建	朔	注
正	小	壬子	丙午	冬至丁巳十二日
二	大	癸丑	乙亥	
三	小	甲寅	乙巳	
四	大	乙卯	甲戌	
五	大	丙辰	甲辰	
六	小	丁巳	甲戌	
七	大	戊午	癸卯	
八	小	己未	癸酉	
九	大	庚申	壬寅	
十	小	辛酉	壬申	
十一	大	壬戌	辛丑	
十二	小	癸亥	辛未	

僖七　戊辰　年

月	大小	月建	朔	注
正	大	甲子	庚子	冬至壬戌廿三日
二	小	乙丑	庚午	
三	大	丙寅	己亥	
四	小	丁卯	己巳	
五	大	戊辰	戊戌	
六	小	己巳	戊辰	
七	大	庚午	丁酉	
八	小	辛未	丁卯	
九	大	壬申	丙申	
閏	大		丙寅	左傳有二閏月惠王崩之文一此月也
十	小	癸酉	丙申	
十一	大	甲戌	乙丑	
十二	小	乙亥	乙未	

僖八　己巳　年

月	大小	月建	朔	注
正	大	丙子	甲子	冬至丁卯四日
二	小	丁丑	甲午	
三	大	戊寅	癸亥	
四	小	己卯	癸巳	
五	大	庚辰	壬戌	
六	小	辛巳	壬辰	
七	大	壬午	辛酉	
八	小	癸未	辛卯	
九	大	甲申	庚申	
十	小	乙酉	庚寅	
十一	大	丙戌	己未	
十二	大	丁亥	己丑	十二月丁未十九日

僖九年庚午年

月	大小	月建	朔	注
正	小	戊子	己未	冬至癸酉十五日
二	大	己丑	戊子	
三	小	庚寅	戊午	三月丁丑二十日
四	大	辛卯	丁亥	
五	小	壬辰	丁巳	
六	大	癸巳	丙戌	
七	小	甲午	丙辰	七月乙酉此月無乙酉八月朔也日月必有誤
八	大	乙未	乙酉	
九	小	丙申	乙卯	九月甲子十日九月戊辰十四日公羊作甲戌甲戌此月廿日
十	大	丁酉	甲申	
十一	小	戊戌	甲寅	
十二	大	己亥	癸未	

僖十年辛未年

月	大小	月建	朔	注
正	小	庚子	癸丑	冬至戊寅廿六日
二	大	辛丑	壬午	
三	小	壬寅	壬子	
四	大	癸卯	辛巳	
五	大	甲辰	辛亥	
六	大	乙巳	庚戌	
七	小	丙午	庚辰	
八	大	丁未	己酉	
九	小	戊申	己卯	
十	大	己酉	戊申	
十一	小	庚戌	戊寅	閏小辛巳
十二	大	辛亥	丁未	

僖十一年壬申

月	大小	月建	朔	注
正	小	壬子	丁丑	冬至癸未七日
二	大	癸丑	丙午	
三	小	甲寅	丙子	
四	大	乙卯	乙巳	
五	小	丙辰	乙亥	
六	大	丁巳	甲辰	
七	小	戊午	甲戌	
八	大	己未	癸卯	
九	大	庚申	癸酉	
十	小	辛酉	癸卯	
十一	大	壬戌	壬申	
十二	小	癸亥	壬寅	

僖十二年癸酉

月	大小	月建	朔	注
正	大	甲子	辛未	冬至戊子十八日
二	小	乙丑	辛丑	
三	大	丙寅	庚午	三月庚午朔日食一日
四	小	丁卯	庚子	
五	大	戊辰	己巳	
六	小	己巳	己亥	
七	大	庚午	戊辰	
八	小	辛未	戊戌	
九	大	壬申	丁卯	
十	小	癸酉	丁酉	
十一	大	甲戌	丙寅	
十二	大	乙亥	丙申	十二月丁丑此月無二丁丑一杜云十一月十二日也書二于十二月一從レ赴也如二是言一

僖十三甲戌年

月	大小	朔	日	注
正	小	丙子	丙寅	冬至甲午廿九日
二	大	丁丑	乙未	閏小乙丑　時暦三月
三	大	戊寅	甲午	四月
四	小	己卯	甲子	五月
五	大	庚辰	癸巳	六月
六	小	辛巳	癸亥	七月
七	大	壬午	壬辰	八月
八	小	癸未	壬戌	九月
九	大	甲申	辛卯	十月
十	小	乙酉	辛酉	十一月
十一	大	丙戌	庚寅	十二月
十二	小	丁亥	庚申	次年正月

僖十四乙亥年

月	大小	朔	日	注
正	大	戊子	己丑	冬至己亥十一日　時暦二月
二	小	己丑	己未	三月
三	大	庚寅	戊子	四月
四	大	辛卯	戊午	五月
五	小	壬辰	戊子	六月
六	大	癸巳	丁巳	七月
七	小	甲午	丁亥	八月　八月辛卯五日
八	大	乙未	丙辰	閏八月
九	小	丙申	丙戌	
十	大	丁酉	乙卯	
十一	小	戊戌	乙酉	
十二	大	己亥	甲寅	

僖十五年丙子

月	大小	月建	朔	注
正	小	庚子	甲申	冬至甲辰廿一日
二	大	辛丑	癸丑	
三	小	壬寅	癸未	
四	大	癸卯	壬子	
五	小	甲辰	壬午	
六	大	乙巳	辛亥	
七	大	丙午	辛巳	
八	小	丁未	辛亥	
九	大	戊申	庚辰	時曆閏八月
十	小	己酉	庚戌	九月 九月壬戌十三日 己卯晦三十日
十一	大	庚戌	己卯	閏小己酉時曆十一月 十月 十一月壬戌十四日 丁丑二十九日
十二	大	辛亥	戊寅	

僖十六年丁丑

月	大小	月建	朔	注
正	小	壬子	戊申	冬至己酉二日 正月戊申朔一日
二	大	癸丑	丁丑	
三	小	甲寅	丁未	三月壬申二十六日
四	大	乙卯	丙子	四月丙申二十一日
五	小	丙辰	丙午	
六	大	丁巳	乙亥	
七	小	戊午	乙巳	七月甲子二十日
八	大	己未	甲戌	
九	小	庚申	甲辰	
十	大	辛酉	癸酉	
十一	大	壬戌	癸卯	十一月乙卯十三日
十二	小	癸亥	癸酉	

僖十七年戊寅

月	大小	月建	朔	備考
正	大	甲子	壬寅	冬至乙卯十四日
二	小	乙丑	壬申	
三	大	丙寅	辛丑	
四	小	丁卯	辛未	
五	大	戊辰	庚子	
六	小	己巳	庚午	
七	大	庚午	己亥	
八	小	辛未	己巳	
九	大	壬申	戊戌	
十	小	癸酉	戊辰	十月乙亥八日
十一	大	甲戌	丁酉	
十二	小	乙亥	丁卯	十二月乙亥九日 辛巳十五日

僖十八年己卯

月	大小	月建	朔	備考
正	大	丙子	丙申	冬至庚申廿五日
二	小	丁丑	丙寅	
三	大	戊寅	乙未	
四	大	己卯	乙丑	
五	小	庚辰	乙未	五月戊寅此月無戊寅日月必有誤
六	大	辛巳	甲子	
七	小	壬午	甲午	閏大癸亥一時曆八月 八月丁亥十三日
八	小	癸未	癸巳	閏八月
九	大	甲申	壬戌	
十	小	乙酉	壬辰	
十一	大	丙戌	辛酉	
十二	小	丁亥	辛卯	

僖十九庚辰年

月	大小	月建	朔	注
正	大	戊子	庚申	冬至乙丑六月
二	小	己丑	庚寅	
三	大	庚寅	己未	
四	小	辛卯	己丑	
五	大	壬辰	戊午	
六	大	癸巳	戊子	六月己酉二十二日
七	小	甲午	戊午	
八	大	乙未	丁亥	
九	小	丙申	丁巳	
十	大	丁酉	丙戌	
十一	小	戊戌	丙辰	
十二	大	己亥	乙酉	

僖二十辛己年

月	大小	月建	朔	注
正	小	庚子	乙卯	冬至庚午十六日
二	大	辛丑	甲申	
三	小	壬寅	甲寅	
四	大	癸卯	癸未	
五	小	甲辰	癸丑	時曆閏四月
六	大	乙巳	壬午	五月　五月乙巳二十四日
七	小	丙午	壬子	六月
八	大	丁未	辛巳	七月
九	小	戊申	辛亥	八月
十	大	己酉	庚辰	九月
十一	大	庚戌	庚戌	十月
十二	小	辛亥	庚辰	十一月

僖廿一壬午年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	壬子	己酉	冬至丙子廿八日　時曆前年十二月
二	小	癸丑	己卯	正月
三	大	甲寅	戊申	二月
閏	小		戊寅	時曆三月
四	大	乙卯	丁未	
五	小	丙辰	丁丑	
六	大	丁巳	丙午	
七	小	戊午	丙子	
八	大	己未	乙巳	
九	小	庚申	乙亥	
十	大	辛酉	甲辰	
十一	小	壬戌	甲戌	
十二	大	癸亥	癸卯	十二月癸丑十一日

僖廿二癸未年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	甲子	癸酉	冬至辛巳九日
二	小	乙丑	癸卯	
三	大	丙寅	壬申	
四	小	丁卯	壬寅	
五	大	戊辰	辛未	
六	小	己巳	辛丑	
七	大	庚午	庚午	
八	小	辛未	庚子	八月丁未八日
九	大	壬申	己巳	
十	小	癸酉	己亥	
十一	大	甲戌	戊辰	謂十一月己巳朔者進朔也　丙子八日　丁丑九日
十二	小	乙亥	戊戌	

僖廿三年 甲申年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	丙子	丁卯	冬至丙戌二十日
二	小	丁丑	丁酉	
三	大	戊寅	丙寅	
四	小	己卯	丙申	
五	大	庚辰	乙丑	五月庚寅二十六日
六	大	辛巳	乙未	
七	小	壬午	乙丑	
八	大	癸未	甲午	
九	小	甲申	甲子	
十	大	乙酉	癸巳	
十一	小	丙戌	癸亥	
十二	大	丁亥	壬辰	閏小壬戌　時曆次年正月大

僖廿四年 乙酉年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	戊子	辛卯	朔旦冬至　壬子蔀第二章　時曆二月小　二月甲午三日〇辛丑十日壬寅十一日〇丙午十五日丁未十六日〇戊申十七日
二	小	己丑	辛酉	三月　三月己丑晦廿九日
三	大	庚寅	庚寅	閏三月
四	小	辛卯	庚申	
五	大	壬辰	己丑	
六	小	癸巳	己未	
七	大	甲午	戊子	
八	小	乙未	戊午	
九	大	丙申	丁亥	
十	大	丁酉	丁巳	
十一	小	戊戌	丁亥	
十二	大	己亥	丙辰	

僖廿五丙戌年

月	大小	月建	朔	記事
正	小	庚子	丙戌	冬至丁酉十二日　正月丙午二十一日
二	大	辛丑	乙卯	
三	小	壬寅	乙酉	三月甲辰二十日
四	大	癸卯	甲寅	四月丁巳四日　戊午五日　癸酉二十日
五	小	甲辰	甲申	
六	大	乙巳	癸丑	
七	小	丙午	癸未	
八	大	丁未	壬子	
九	小	戊申	壬午	
十	大	己酉	辛亥	
十一	小	庚戌	辛巳	
十二	大	辛亥	庚戌	十二月癸亥十四日

僖廿六丁亥年

月	大小	月建	朔	時曆	記事
正	大	壬子	庚辰		冬至壬寅廿三日　時曆前年閏十二月
二	小	癸丑	庚戌	正月	正月己未十日
三	大	甲寅	己卯	二月	
四	小	乙卯	己酉	三月	
五	大	丙辰	戊酉	四月	
六	小	丁巳	戊申	五月	
七	大	戊午	丁丑	六月	
八	小	己未	丁未	七月	
九	大	庚申	丙子	八月	閏小丙午　時曆九月
十	大	辛酉	乙亥		
十一	小	壬戌	乙巳		
十二	大	癸亥	甲戌		

僖廿七戊子年

月	大小	月建	朔	注
正	小	甲子	甲辰	冬至丁未四日
二	大	乙丑	癸酉	
三	小	丙寅	癸卯	
四	大	丁卯	壬申	
五	大	戊辰	壬寅	
六	小	己巳	壬申	六月庚寅十九日
七	大	庚午	辛丑	
八	小	辛未	辛未	八月乙未二十五日
九	大	壬申	庚子	乙巳此月六日也有レ日而無レ月也
十	小	癸酉	庚午	
十一	大	甲戌	己亥	
十二	小	乙亥	己巳	十二月甲戌六日

僖廿八己丑年

月	大小	月建	朔	注
正	大	丙子	戊戌	冬至壬子十五日 正月戊申十一日
二	小	丁丑	戊辰	
三	大	戊寅	丁酉	三月丙午十日
四	小	己卯	丁卯	四月戊辰二日 己巳三日 癸酉七日 甲午二十八日
五	大	庚辰	丙申	五月丙午十一日 丁未十二日 己酉十四日 癸丑十八日 癸亥廿八日○杜云、經書ニ癸丑ー傳書ニ癸亥ー經傳必有レ誤也
六	小	辛巳	丙寅	六月壬午十七日
七	大	壬午	乙未	七月丙申二日
八	大	癸未	乙丑	
九	小	甲申	乙未	
十	大	乙酉	甲子	冬壬申十月九日也十二月十一日亦有ニ壬申ー丁丑十月十五日也共有レ日無レ月無ニ以折レ正也
十一	小	丙戌	甲午	
十二	大	丁亥	癸亥	

信廿九 庚寅年

月	大小	朔干支	干支	西暦	備考
正	小	戊子	癸巳		冬至戊午廿六日
二	大	己丑	壬戌		
三	小	庚寅	壬辰		
四	大	辛卯	辛酉		
五	小	壬辰	辛卯		
六	小	癸巳	庚寅	七月	
七	大	甲午	己午	八月	
八	小	乙未	己丑	九月	
九	大	丙申	戊午	十月	
十	小	丁酉	戊子	十一月	
十一	大	戊戌	丁巳	十二月	閏大庚申 時暦六月
十二	大	己亥	丁亥	次年正月	

信三十 辛卯年

月	大小	朔干支	干支	西暦	備考
正	小	庚子	丁巳		冬至癸亥七日 時暦二月
二	大	辛丑	丙戌	三月	
三	小	壬寅	丙辰	四月	
四	大	癸卯	乙酉	五月	
五	小	甲辰	乙卯	六月	
六	大	乙巳	甲申	七月	
七	小	丙午	甲寅	八月	
八	大	丁未	癸未	九月	九月甲午十二日
九	小	戊申	癸丑	閏九月平	
十	大	己酉	壬午		
十一	小	庚戌	壬子		
十二	大	辛亥	辛巳		

信卅一壬辰年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	壬子	辛亥	冬至戊辰十九日
二	大	癸丑	庚辰	
三	小	甲寅	庚戌	
四	大	乙卯	己卯	
五	大	丙辰	己酉	
六	小	丁巳	己卯	
七	大	戊午	戊申	
八	小	己未	戊寅	
九	大	庚申	丁未	
十	小	辛酉	丁丑	
十一	大	壬戌	丙午	
十二	小	癸亥	丙子	

信卅二癸巳年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	甲子	乙巳		冬至癸酉廿九日
二	小	乙丑	乙亥		閏大甲辰 時曆三月
三	小	丙寅	甲戌	四月	四月己丑十六日
四	大	丁卯	癸卯	五月	
五	小	戊辰	癸酉	六月	
六	大	己巳	壬寅	七月	
七	大	庚午	壬申	八月	
八	小	辛未	壬寅	九月	
九	大	壬申	辛未	十月	
十	小	癸酉	辛丑	十一月	
十一	大	甲戌	庚午	十二月	十二月己卯十日 庚辰十一日
十二	小	乙亥	庚子	次年正月	

僖卅三甲午年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	大	丙子	己巳	二月	冬至己卯十一日
二	小	丁丑	己亥	三月	
三	大	戊寅	戊辰	四月	四月辛巳十四日 癸巳二十六日
四	小	己卯	戊戌	五月	
五	大	庚辰	丁卯	六月	
六	小	辛巳	丁酉	七月	
七	大	壬午	丙寅	八月	八月戊子二十三日
八	小	癸未	丙申	九月	
九	大	甲申	乙丑	十月	
十	小	乙酉	乙未	十一月	十二月乙巳此月十一日也杜云經書十二月誤也如二是言一
十一	大	丙戌	甲子	十二月	
十二	大	丁亥	甲午		時曆爲二文元年之正月小一故次月癸亥之退朔也

文公元乙未年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	戊子	甲子	時曆二月大癸亥朔	冬至甲申廿一日 二月癸亥日食一日
二	大	己丑	癸巳	三月	
三	小	庚寅	癸亥	閏三月	于二僖三十二年一失レ閏誤于二此年三月一置閏故左傳作者譏之
四	大	辛卯	壬辰		四月丁巳二十六日
五	小	壬辰	壬戌		時曆以二四月大一爲小月以二此月一爲レ大故其朔辛酉也 五月辛酉朔一日
六	大	癸巳	辛卯		六月戊戌八日
七	小	甲午	辛酉		
八	大	乙未	庚寅		
九	小	丙申	庚申		
十	大	丁酉	己丑		十月丁未十九日
十一	小	戊戌	己未		閏大戊子
十二	小	己亥	戊午		

文二丙申年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	庚子	丁亥	冬至己丑三日
二	大	辛丑	丁巳	二月甲子八日 丁丑二十一日
三	小	壬寅	丁亥	三月乙巳十九日
四	大	癸卯	丙辰	四月己巳十四日
五	小	甲辰	丙戌	
六	大	乙巳	乙卯	
七	小	丙午	乙酉	
八	大	丁未	甲寅	八月丁卯十四日
九	小	戊申	甲申	
十	大	己酉	癸丑	
十一	小	庚戌	癸未	
十二	大	辛亥	壬子	

文三丁酉年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	壬子	壬午	冬至甲午十三日
二	大	癸丑	辛亥	
三	小	甲寅	辛巳	
四	大	乙卯	庚戌	四月乙亥二十六日
五	小	丙辰	庚辰	
六	大	丁巳	己酉	
七	大	戊午	己卯	
八	小	己未	己酉	
九	大	庚申	戊寅	
十	小	辛酉	戊申	
十一	大	壬戌	丁丑	
十二	小	癸亥	丁未	十二月己巳廿三日

文四戊戌年

月	大小	月建	朔	注
正	大	甲子	丙子	冬至庚子廿五日
二	小	乙丑	丙子	
三	大	丙寅	乙亥	
四	小	丁卯	乙巳	
五	大	戊辰	甲戌	
六	小	己巳	甲辰	
七	大	庚午	癸酉	閏小癸卯 時暦八月
八	大	辛未	壬申	九月
九	小	壬申	壬寅	十月
十	大	癸酉	辛未	十一月
十一	大	甲戌	辛丑	十一月 十二月壬寅二日
十二	小	乙亥	辛未	閏十一月

文五己亥年

月	大小	月建	朔	注
正	大	丙子	庚子	冬至乙巳六日
二	小	丁丑	庚午	
三	大	戊寅	己亥	三月辛亥十三日
四	小	己卯	己巳	
五	大	庚辰	戊戌	
六	小	辛巳	戊辰	
七	大	壬午	丁酉	
八	小	癸未	丁卯	
九	大	甲申	丙申	
十	小	乙酉	丙寅	十月甲申十九日
十一	大	丙戌	乙未	
十二	小	丁亥	乙丑	

文十甲辰年

月	大小	月建	朔	注
正	大	丙子	辛未	朔旦冬至 壬子蔀第三章
二	小	丁丑	辛丑	
三	大	戊寅	庚午	三月辛卯二十二日
四	小	己卯	庚子	
五	大	庚辰	己巳	
六	小	辛巳	己亥	
七	大	壬午	戊辰	
八	小	癸未	戊戌	
九	大	甲申	丁卯	
十	小	乙酉	丁酉	
十一	大	丙戌	丙寅	
十二	小	丁亥	丙申	

文十一乙巳年

月	大小	月建	朔	注
正	大	戊子	乙丑	冬至丙子十二日
二	小	己丑	乙未	
三	大	庚寅	甲子	襄三十年傳絳人稱正月甲子朔者乃此月而以夏正月數也
四	小	辛卯	甲午	
五	大	壬辰	癸亥	
六	大	癸巳	癸巳	
七	小	甲午	癸亥	
八	大	乙未	壬辰	
九	小	丙申	壬戌	
十	大	丁酉	辛卯	十月甲午四日
十一	小	戊戌	辛酉	
十二	大	己亥	庚寅	

文十二丙午年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	庚子	庚申	冬至壬午廿三日
二	大	辛丑	己丑	二月庚子十二日
三	小	壬寅	己未	
四	大	癸卯	戊子	
五	小	甲辰	戊午	
六	大	乙巳	丁亥	
七	小	丙午	丁巳	
八	大	丁未	丙戌	
九	大	戊申	丙辰	閏小丙戌
十	大	己酉	乙卯	
十一	大	庚戌	乙酉	
十二	大	辛亥	甲寅	十二月戊午五日

文十三丁未年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	壬子	甲申	冬至丁亥四日
二	大	癸丑	癸丑	
三	小	甲寅	癸未	
四	大	乙卯	壬子	
五	小	丙辰	壬午	五月壬午一日
六	大	丁巳	辛亥	
七	小	戊午	辛巳	
八	大	己未	庚戌	
九	小	庚申	庚辰	
十	大	辛酉	己酉	
十一	小	壬戌	己卯	
十二	大	癸亥	戊申	十二月己丑 此月無ニ己丑日一月必有レ誤

文十四年戊申年

月	大小	月建	朔	注
正	大	甲子	戊寅	冬至壬辰十五日
二	小	乙丑	戊申	
三	大	丙寅	丁丑	
四	小	丁卯	丁未	
五	大	戊辰	丙子	五月乙亥四月二十九日杜云書于五月從赴也
六	小	己巳	丙午	六月癸酉二十八日
七	大	庚午	乙亥	七月乙卯此月無乙卯上有六月下有九月則誤在日
八	小	辛未	乙巳	
九	大	壬申	甲戌	九月甲申十一日
十	小	癸酉	甲辰	
十一	大	甲戌	癸酉	
十二	小	乙亥	癸卯	

文十五年己酉年

月	大小	月建	朔	注
正	大	丙子	壬申	冬至丁酉廿六日
二	小	丁丑	壬寅	
三	大	戊寅	辛未	
四	大	己卯	辛丑	
五	小	庚辰	辛未	閏大庚子　時曆六月　六月辛丑日食一日戊申八日
六	小	辛巳	庚午	閏六月
七	大	壬午	己亥	
八	小	癸未	己巳	
九	大	甲申	戊戌	
十	小	乙酉	戊辰	
十一	大	丙戌	丁酉	
十二	小	丁亥	丁卯	

文十六年庚戌

月	大小	月建	朔	備考
正	大	戊子	丙申	冬至癸卯八日
二	小	己丑	丙寅	
三	大	庚寅	乙未	
四	小	辛卯	乙丑	
五	大	壬辰	甲午	
六	小	癸巳	甲子	六月戊辰五日
七	大	甲午	癸巳	
八	大	乙未	癸亥	八月辛未九日
九	小	丙申	癸巳	
十	大	丁酉	壬戌	
十一	小	戊戌	壬辰	十一月甲寅廿三日
十二	大	己亥	辛酉	

文十七年辛亥

月	大小	月建	朔	備考
正	小	庚子	辛卯	冬至戊申十八日
二	大	辛丑	庚申	
三	小	壬寅	庚寅	
四	大	癸卯	己未	四月癸亥五日
五	小	甲辰	己丑	
六	大	乙巳	戊午	六月癸未二十六日
七	小	丙午	戊子	
八	大	丁未	丁巳	
九	小	戊申	丁亥	
十	大	己酉	丙辰	
十一	小	庚戌	丙戌	
十二	大	辛亥	乙卯	

自此年至宣八年庚申八年以正月爲二月

文十八年壬子年

月	大小	干支	朔	時暦	注
正	大	壬子	乙酉		冬至癸丑廿九日
二	小	癸丑	乙卯		二月丁丑二十一日 閏大甲申時暦三月 按時暦刻失此閏爲三月故建亥月爲正月建子月爲二月至于宣八年九年閏也
三	小	甲寅	甲申	四月	
四	大	乙卯	癸未	五月	五月戊戌十六日
五	小	丙辰	癸丑	六月	六月癸酉二十一日
六	大	丁巳	壬午	七月	
七	小	戊午	壬子	八月	
八	大	己未	辛巳	九月	
九	小	庚申	辛亥	十月	
十	大	辛酉	庚辰	十一月	
十一	小	壬戌	庚戌	十二月	
十二	大	癸亥	己卯	次年正月	

宣公元年癸丑年

月	大小	干支	朔	時暦	注
正	小	甲子	己酉	時暦二月	冬至戊午十日
二	大	乙丑	戊寅	三月	
三	大	丙寅	戊申	四月	
四	小	丁卯	戊寅	五月	
五	大	戊辰	丁未	六月	
六	小	己巳	丁丑	七月	
七	大	庚午	丙午	八月	
八	小	辛未	丙子	九月	
九	大	壬申	乙巳	十月	
十	小	癸酉	乙亥	十一月	
十一	大	甲戌	甲辰	十二月	
十二	小	乙亥	甲戌	次年正月	

宣二甲寅年

月	大小	干支	朔	註
正	大	丙子	癸卯	冬至甲子廿二日 時曆二月 二月壬子十日
二	小	丁丑	癸酉	三月
三	大	戊寅	壬寅	四月
四	小	己卯	壬申	五月
五	大	庚辰	辛丑	六月
六	小	辛巳	辛未	七月
七	大	壬午	庚子	八月
八	大	癸未	庚午	閏八月
九	小	甲申	庚子	九月乙丑二子六日壬申。杜云十月五日也既有日無月冬又在壬申下明傳文無較例
十	大	乙酉	己巳	十月乙亥七日
十一	小	丙戌	己亥	閏大戊辰 時曆十二月
十二	小	丁亥	戊戌	次年正月

宣三乙卯年

月	大小	干支	朔	註
正	大	戊子	丁卯	冬至己巳三日 時曆二月
二	小	己丑	丁酉	三月
三	大	庚寅	丙寅	四月
四	小	辛卯	丙申	五月
五	大	壬辰	乙丑	六月
六	小	癸巳	乙未	七月
七	大	甲午	甲子	八月
八	小	乙未	甲午	九月
九	大	丙申	癸亥	十月 十月丙戌二十四日
十	大	丁酉	癸巳	十一月
十一	小	戊戌	癸亥	十二月
十二	大	己亥	壬辰	次年正月

宣四丙辰年

月	大小		朔		
正	小	庚子	壬戌	冬至甲戌十三日	時暦二月
二	大	辛丑	辛卯	三月	
三	小	壬寅	辛酉	四月	
四	大	癸卯	庚寅	五月	
五	小	甲辰	庚申	六月	六月乙酉二十六日
六	大	乙巳	己丑	七月	七月戊戌十日
七	小	丙午	己未	八月	
八	大	丁未	戊子	九月	
九	小	戊申	戊午	十月	
十	大	己酉	丁亥	十一月	
十一	小	庚戌	丁巳	十二月	
十二	大	辛亥	丙戌	次年正月	

宣五丁巳年

月	大小		朔		
正	小	壬子	丙辰	冬至己卯廿四日	時暦二月
二	大	癸丑	乙酉	三月	
三	大	甲寅	乙卯	四月	
四	小	乙卯	乙酉	五月	
五	大	丙辰	甲寅	六月	
六	小	丁巳	甲申	七月	
七	大	戊午	癸丑	八月	閏小癸未 時暦閏八月
八	大	己未	壬子	九月	
九	小	庚申	壬午	十月	
十	大	辛酉	辛亥	十一月	
十一	小	壬戌	辛巳	十二月	
十二	大	癸亥	庚戌	次年正月	

宣六戊午年

月	大小	月建	朔	冬至・時曆
正	小	甲子	庚辰	冬至乙酉六日 時曆一月
二	大	乙丑	己酉	三月
三	小	丙寅	己卯	四月
四	大	丁卯	戊申	五月
五	小	戊辰	戊寅	六月
六	大	己巳	丁未	七月
七	大	庚午	丁丑	八月
八	小	辛未	丁未	九月
九	大	壬申	丙子	十月
十	小	癸酉	丙子	十一月
十一	大	甲戌	乙亥	十二月
十二	小	乙亥	乙巳	次年正月

宣七己未年

月	大小	月建	朔	冬至・時曆
正	大	丙子	甲戌	冬至庚寅十七日 時曆二月
二	小	丁丑	甲辰	三月
三	大	戊寅	癸酉	四月
四	小	己卯	癸卯	五月
五	大	庚辰	壬申	六月
六	小	辛巳	壬寅	七月
七	大	壬午	辛未	八月
八	小	癸未	辛丑	九月
九	大	甲申	庚午	十月
十	大	乙酉	庚子	十一月
十一	小	丙戌	庚午	十二月
十二	大	丁亥	己亥	次年正月

宣十壬戌年

月	大小		朔	時暦	注
正	小	壬子	丁亥	三月	冬至丙午二十日
二	大	癸丑	丙辰	四月	四月丙辰日食一日 己巳十四日
三	小	甲寅	丙戌	五月	五月癸巳八日
四	大	乙卯	乙卯	六月	
五	大	丙辰	乙酉	七月	
六	小	丁巳	乙卯	八月	
七	大	戊午	甲申	九月	
八	小	己未	甲寅	十月	
九	大	庚申	癸未	十一月	
十	小	辛酉	癸丑	十二月	
十一	大	壬戌	壬午	次年正月	
十二	小	癸亥	壬子	二月	

閏大辛巳 時暦閏二月

宣十一癸亥年

月	大小		朔	時暦	注
正	小	甲子	辛亥	三月	朔旦冬至 壬子蔀 第四章
二	大	乙丑	庚辰	四月	
三	小	丙寅	庚戌	五月	
四	大	丁卯	己卯	六月	
五	小	戊辰	己酉	七月	
六	大	己巳	戊寅	八月	
七	小	庚午	戊申	九月	
八	大	辛未	丁丑	十月	十月丁亥十一日
九	大	壬申	丁未	十一月	
十	小	癸酉	丁丑	十二月	
十一	大	甲戌	丙午	次年正月	
十二	小	乙亥	丙子	二月	

宣十二年甲子年

月	大小	月建	朔	周正	備考
正	大	丙子	乙巳	三月	冬至丙辰十二日　時曆三月
二	小	丁丑	乙亥	四月	
三	大	戊寅	甲辰	五月	
四	小	己卯	甲戌	六月	六月乙卯、丙辰、辛未此月無二此三辰一或五月或七月之誤也
五	大	庚辰	癸卯	七月	
六	小	辛巳	癸酉	八月	
七	大	壬午	壬寅	九月	
八	小	癸未	壬申	十月	
九	大	甲申	辛丑	十一月	
十	小	乙酉	辛未	十二月	十二月戊寅八日
十一	大	丙戌	庚子	次年正月	
十二	小	丁亥	庚午	二月	

宣十三年乙丑年

月	大小	月建	朔	周正	備考
正	大	戊子	己亥	三月	冬至辛酉廿三日　時曆三月
二	大	己丑	己巳	四月	
三	小	庚寅	己亥	五月	
四	大	辛卯	戊辰	六月	
五	小	壬辰	戊戌	七月	
六	大	癸巳	丁卯	八月	
七	小	甲午	丁酉	九月	
八	大	乙未	丙寅	十月	
九	小	丙申	丙申	十一月	閏大乙丑　時曆同
十	小	丁酉	乙未	十二月	
十一	大	戊戌	甲子	次年正月	
十二	小	己亥	甲午	二月	

宣十四丙寅年

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	大	庚子	癸亥	二月	冬至丁卯五日
二	小	辛丑	癸巳	四月	
三	大	壬寅	壬戌	五月	五月壬申十一日
四	大	癸卯	壬辰	六月	
五	小	甲辰	壬戌	七月	
六	大	乙巳	辛卯	八月	
七	小	丙午	辛酉	九月	
八	大	丁未	庚寅	十月	
九	小	戊申	庚申	十一月	
十	大	己酉	己丑	十二月	
十一	小	庚戌	己未	次年正月	
十二	大	辛亥	戊子	次年二月	

宣十五丁卯年

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	小	壬子	戊午	三月	冬至壬申十五日
二	大	癸丑	丁亥	四月	
三	小	甲寅	丁巳	五月	
四	大	乙卯	丙戌	六月	六月癸卯十八日 辛亥二十六日
五	小	丙辰	丙辰	七月	七月壬午二十七日
六	大	丁巳	乙酉	八月	
七	小	戊午	乙卯	九月	
八	大	己未	甲申	十月	
九	大	庚申	甲寅	十一月	
十	小	辛酉	甲申	十二月	
十一	大	壬戌	癸丑	次年正月	
十二	小	癸亥	癸未	次年二月	

宣十六戊辰年

月	大小	朔	干支	周正	注
正	大	甲子	壬子		冬至丁丑廿六日　時暦閏二月
二	小	乙丑	壬午	三月	三月戊申二十七日
三	大	丙寅	辛亥	四月	
四	小	丁卯	辛巳	五月	
五	大	戊辰	庚戌	六月	
閏	小		庚辰		時暦七月
六	大	己巳	己酉	八月	
七	小	庚午	己卯	九月	
八	大	辛未	戊申	十月	
九	小	壬申	戊寅	十一月	
十	大	癸酉	丁未	十二月	
十一	大	甲戌	丁丑	次年正月	正月庚子二十四日
十二	小	乙亥	丁未	次年二月	〔丁未有レ日而無レ月　也此月一日

宣十七己巳年

月	大小	朔	干支	周正	注
正	大	丙子	丙子		冬至壬午七日　時暦三月
二	小	丁丑	丙午	四月	
三	大	戊寅	乙亥	五月	
四	小	己卯	乙巳	六月	六月癸卯日食○己未此月無二此二日一必月有レ誤也
五	大	庚辰	甲戌	七月	
六	小	辛巳	甲辰	八月	
七	大	壬午	癸酉	九月	
八	小	癸未	癸卯	十月	
九	大	甲申	壬申	十一月	十一月壬午十一日
十	小	乙酉	壬寅	十二月	
十一	大	丙戌	辛未	次年正月	
十二	小	丁亥	辛丑	次年二月	

宣十八庚午年

月	大小	月建	朔日	時暦	備考
正	大	戊子	庚午	冬至戊子十九日 時曆三月	
二	小	己丑	庚子	四月	
三	大	庚寅	己巳	五月	
四	大	辛卯	己亥	六月	
五	小	壬辰	己巳	七月	七月甲戌六日
六	大	癸巳	戊戌	八月	
七	小	甲午	戊辰	九月	
八	大	乙未	丁酉	十月	十月壬戌二十六日
九	小	丙申	丁卯	十一月	
十	大	丁酉	丙申	十二月	
十一	小	戊戌	丙寅	次年正月	
十二	大	己亥	乙未	次年二月	二月辛酉二十八日

成公元辛未年

月	大小	月建	朔日	時暦	備考
正	小	庚子	乙丑	冬至癸巳廿九日 時曆三月	三月癸未十九日
二	小	辛丑	甲午	四月	閏小甲子一時曆同
三	大	壬寅	癸巳	五月	
四	小	癸卯	癸亥	六月	
五	大	甲辰	壬辰	七月	
六	小	乙巳	壬戌	八月	
七	大	丙午	辛卯	九月	
八	大	丁未	辛酉	十月	
九	小	戊申	辛卯	十一月	
十	大	己酉	庚申	十二月	
十一	小	庚戌	庚寅	次年正月	
十二	大	辛亥	己未	次年二月	

成二壬申年

月	大小	朔	日	時曆	注
正	小	壬子	己丑	三月	冬至戊戌十日 時曆三月
二	大	癸丑	戊午	四月	四月丙戌二十九日
三	小	甲寅	戊子	五月	
四	大	乙卯	丁巳	六月	六月壬申十六日 癸酉十七日
五	小	丙辰	丁亥	七月	七月己酉二十三日
六	大	丁巳	丙辰	八月	八月壬午二十七日
七	小	戊午	丙戌	九月	庚寅有ㇾ日而無ㇾ月此月五日也
八	大	己未	乙卯	十月	
九	小	庚申	乙酉	十一月	十一月丙申十二日
十	大	辛酉	甲寅	十二月	
十一	大	壬戌	甲申	次年正月	正月辛亥二十八日
十二	小	癸亥	甲寅	次年二月	二月甲子十一日乙亥二十二日

成三癸酉年

月	大小	朔	日	時曆	注
正	大	甲子	癸未	三月	冬至癸卯廿一日 時曆三月
二	小	乙丑	癸丑	四月	
三	大	丙寅	壬午	五月	
四	小	丁卯	壬子	六月	
五	大	戊辰	辛巳	七月	
六	小	己巳	辛亥	八月	
七	大	庚午	庚辰	九月	
八	小	辛未	庚戌	十月	
九	大	壬申	己卯	十一月	十一月丙午廿八日 丁未廿九日
十	小	癸酉	己酉	十二月	十二月甲戌廿六日
十一	大	甲戌	戊寅	閏月	閏小戊申 時曆次年正月
十二	大	乙亥	己丑	次年二月	

成四甲戌年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	小	丙子	丁未	冬至己酉三日 時暦三月	三月壬申二十六日
二	大	丁丑	丙子	四月	四月甲寅此月無二甲寅一月日有レ誤也
三	大	戊寅	丙午	五月	
四	小	己卯	丙子	六月	
五	大	庚辰	乙巳	七月	
六	小	辛巳	乙亥	八月	
七	大	壬午	甲辰	九月	
八	小	癸未	甲戌	十月	
九	大	甲申	癸卯	十一月	
十	小	乙酉	癸酉	十二月	
十一	大	丙戌	壬寅	次年正月	
十二	小	丁亥	壬申	次年二月	

成五乙亥年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	大	戊子	辛丑	冬至甲寅十四日 時暦三月	
二	小	己丑	辛未	四月	
三	大	庚寅	庚子	五月	
四	小	辛卯	庚午	六月	
五	大	壬辰	己亥	七月	
六	大	癸巳	己巳	八月	
七	小	甲午	己亥	九月	
八	大	乙未	戊辰	十月	
九	小	丙申	戊戌	十一月	十一月己酉十二日
十	大	丁酉	丁卯	十二月	十二月己丑二十三日
十一	小	戊戌	丁酉	次年正月	
十二	大	己亥	丙寅	次年二月	二月辛巳十六日

成六丙子年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	小	庚子	丙申	三月	冬至己未廿四日 時曆三月
二	大	辛丑	乙丑	四月	四月丁丑十三日
三	小	壬寅	乙未	五月	
四	大	癸卯	甲子	六月	六月壬申九日
五	小	甲辰	甲午	七月	
六	大	乙巳	癸亥	八月	
七	小	丙午	癸巳	九月	閏大壬戌一時曆十月
八	小	丁未	壬辰	十一月	
九	大	戊申	辛酉	十二月	
十	大	己酉	辛卯	次年正月	
十一	小	庚戌	辛酉	次年二月	
十二	大	辛亥	庚寅	次年三月	

成七丁丑年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	小	壬子	庚申	四月	冬至甲子五日 時曆四月
二	大	癸丑	己丑	五月	
三	小	甲寅	己未	六月	
四	大	乙卯	戊子	七月	
五	小	丙辰	戊午	八月	八月戊辰十一日
六	大	丁巳	丁亥	閏月	
七	小	戊午	丁巳	九月	
八	大	己未	丙戌	十月	
九	小	庚申	丙辰	十一月	
十	大	辛酉	乙酉	十二月	
十一	小	壬戌	乙卯	次年正月	
十二	大	癸亥	甲申	次年二月	

成八年戊寅

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	甲子	甲寅	三月	冬至庚午十七日
二	大	乙丑	癸未	四月	
三	大	丙寅	癸丑	五月	
四	小	丁卯	癸未	六月	
五	大	戊辰	壬子	七月	
六	小	己巳	壬午	八月	
七	大	庚午	辛亥	九月	
八	小	辛未	辛巳	十月	十月癸卯二十三日
九	大	壬申	庚戌	十一月	
十	小	癸酉	庚辰	十二月	
十一	大	甲戌	己酉	次年正月	
十二	小	乙亥	己卯	次年二月	

成九年己卯

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	大	丙子	戊申	三月	冬至乙亥廿八日
二	小	丁丑	戊寅	四月	
三	大	戊寅	丁未	五月	閏小丁丑 時曆六月
四	大	己卯	丙午	七月	七月丙子此月無丙子疑丙午之誤也雖有杜說不取
五	大	庚辰	丙子	八月	
六	小	辛巳	丙午	九月	
七	大	壬午	乙亥	十月	
八	小	癸未	乙巳	十一月	十一月戊申四日 庚申十六日
九	大	甲申	甲戌	閏月	城中城杜云閏月城之在十一月之後十二月之前故傳云書時也
十	小	乙酉	甲辰	十二月	
十一	大	丙戌	癸酉	次年正月	
十二	小	丁亥	癸卯	次年二月	

成十庚辰年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	戊子	壬申	三月	冬至庚辰九日 時曆三月
二	小	己丑	壬寅	四月	
三	大	庚寅	辛未	五月	五月辛巳十一日
四	小	辛卯	辛丑	六月	丙午有日無月此月之六日也 六月戊申八日
五	大	壬辰	庚午	七月	
六	小	癸巳	庚子	八月	
七	大	甲午	己巳	九月	
八	小	乙未	己亥	十月	
九	大	丙申	戊辰	十一月	
十	大	丁酉	戊戌	十二月	
十一	小	戊戌	戊辰	次年正月	
十二	大	己亥	丁酉	次年二月	

成十一辛巳年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	小	庚子	丁卯	三月	冬至乙酉十九日 時曆三月 三月己丑二十三日
二	大	辛丑	丙申	四月	
三	小	壬寅	丙寅	五月	
四	大	癸卯	乙未	六月	
五	小	甲辰	乙丑	七月	
六	大	乙巳	甲午	八月	
七	小	丙午	甲子	九月	
八	大	丁未	癸巳	十月	
九	小	戊申	癸亥	十一月	
十	大	己酉	壬辰	十二月	
十一	小	庚戌	壬戌	次年正月	
十二	大	辛亥	辛卯	次年二月	
閏	大		辛酉	次年三月	

成十二壬午年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	小	壬子	辛卯	四月	朔旦冬至　辛卯蔀第一章
二	大	癸丑	庚申	五月	五月癸亥四日
三	小	甲寅	庚寅	閏月	
四	大	乙卯	己未	六月	
五	小	丙辰	己丑	七月	
六	大	丁巳	戊午	八月	
七	小	戊午	戊子	九月	
八	大	己未	丁巳	十月	
九	小	庚申	丁亥	十一月	
十	大	辛酉	丙辰	十二月	
十一	小	壬戌	丙戌	次年正月	
十二	大	癸亥	乙卯	二月	

成十三癸未年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	小	甲子	乙酉	三月	冬至丙申十二日
二	大	乙丑	甲寅	四月	四月戊午五日
三	小	丙寅	甲申	五月	五月丁亥四日
四	大	丁卯	癸丑	六月	六月丁卯十五日　己巳十七日
五	大	戊辰	癸未	七月	
六	小	己巳	癸丑	八月	
七	大	庚午	壬午	九月	
八	小	辛未	壬子	十月	
九	大	壬申	辛巳	十一月	
十	小	癸酉	辛亥	十二月	
十一	大	甲戌	庚辰	次年正月	
十二	小	乙亥	庚戌	二月	

成十四甲申年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	丙子	己卯	三月	冬至辛丑廿三日　時曆三月
二	小	丁丑	己酉	四月	
三	大	戊寅	戊寅	五月	
四	小	己卯	戊申	六月	
五	大	庚辰	丁丑	七月	
六	小	辛巳	丁未	閏月	
七	大	壬午	丙子	八月	八月戊戌二十三日　庚子二十五日
八	小	癸未	丙午	九月	
九	大	甲申	乙亥	十月	十月庚寅十六日　閏大乙巳　時曆十一月
十	小	乙酉	乙亥	十二月	
十一	大	丙戌	甲辰	次年正月	
十二	小	丁亥	甲戌	二月	

成十五己酉年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	戊子	癸卯	三月	冬至丙午四日　時曆三月　三月乙巳三日　癸丑十一日
二	小	己丑	癸酉	四月	
三	大	庚寅	壬寅	五月	
四	小	辛卯	壬申	六月	
五	大	壬辰	辛丑	七月	
六	小	癸巳	辛未	八月	八月庚辰十日
七	大	甲午	庚子	九月	
八	小	乙未	庚午	十月	
九	大	丙申	己亥	十一月	十一月辛丑三日
十	小	丁酉	己巳	十二月	
十一	大	戊戌	戊戌	次年正月	
十二	大	己亥	戊辰	二月	

成十六丙戌年

月	大小	月建	朔	周月	記事
正	小	庚子	戊戌	時曆三月	冬至壬子十五日
二	大	辛丑	丁卯	四月	四月辛未五日 戊寅十二日
三	小	壬寅	丁酉	五月	
四	大	癸卯	丙寅	六月	六月丙寅朔日食 癸巳二十八日 甲午晦二十九日
五	小	甲辰	丙申	七月	七月戊午二十三日
六	大	乙巳	乙丑	八月	
七	小	丙午	乙未	九月	
八	大	丁未	甲子	十月	十月乙亥十二日
九	小	戊申	甲午	十一月	
十	大	己酉	癸亥	十二月	十二月乙丑三日 乙酉二十三日
十一	小	庚戌	癸巳	次年正月	
十二	大	辛亥	壬戌	二月	

成十七丁亥年

月	大小	月建	朔	周月	記事
正	小	壬子	壬辰	時曆三月	冬至丁巳廿六日
二	大	癸丑	辛酉	四月	
三	小	甲寅	辛卯	五月	
四	大	乙卯	庚申	六月	六月戊辰九日 乙酉二十六日
五	大	丙辰	庚寅	七月	七月壬寅十三日
					閏小庚申 時曆八月
六	大	丁巳	己丑	九月	九月辛丑十三日
七	小	戊午	己未	十月	十月庚午十二日
八	大	己未	戊子	十一月	十一月壬申、此月無壬申、必誤日也
九	小	庚申	戊午	十二月	十二月丁巳朔日食 退丁巳以爲朔也 下退朔效之 壬午二十六日
十	大	辛酉	丁亥	閏月	閏月乙卯晦三十日
十一	小	壬戌	丁巳	次年正月	正月庚申五日 庚午十五日 辛巳二十六日 甲申晦二十九日
十二	大	癸亥	丙戌	二月	二月乙酉朔一日

成十八年戊子

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	小	甲子	丙辰	三月	冬至壬戌七日
二	大	乙丑	乙酉	四月	
三	小	丙寅	乙卯	五月	
四	大	丁卯	甲申	六月	
五	小	戊辰	甲寅	七月	
六	大	己巳	癸未	八月	八月己丑七日
七	小	庚午	癸丑	九月	
八	大	辛未	壬午	十月	
九	大	壬申	壬子	十一月	
十	小	癸酉	壬午	十二月	十二月丁未廿六日
十一	大	甲戌	辛亥	次年正月	正月己亥此月無己亥一必癸亥也十三日
十二	小	乙亥	辛巳	二月	

襄公元年己丑

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	大	丙子	庚戌	三月	冬至丁卯十八日
二	小	丁丑	庚辰	四月	
三	大	戊寅	己酉	五月	
四	小	己卯	己卯	六月	
五	大	庚辰	戊申	七月	
六	小	辛巳	戊寅	八月	
七	大	壬午	丁未	九月	九月辛酉十五日
八	小	癸未	丁丑	十月	
九	大	甲申	丙午	十一月	
十	小	乙酉	丙子	十二月	
十一	大	乙戌	乙巳	次年正月	
十二	大	丁亥	乙亥	二月	

襄二庚寅年

月	大小	月建	朔	時暦	記事
正	小	戊子	乙巳	三月	冬至癸酉廿九日 時暦三月
二	大	己丑	甲戌	四月	
三	大	庚寅	癸酉	五月	五月庚寅十八日
四	小	辛卯	癸卯	六月	經云六月庚辰此月無二庚辰一必七月誤也
五	大	壬辰	壬申	七月	傳云七月庚辰九日己丑十八日
六	小	癸巳	壬寅	八月	
七	大	甲午	辛未	九月	
八	小	乙未	辛丑	十月	閏小甲辰 時暦四月閏
九	大	丙申	庚午	十一月	
十	小	丁酉	庚子	十二月	
十一	大	戊戌	己巳	次年正月	
十二	小	己亥	己亥	二月	

襄三辛卯年

月	大小	月建	朔	時暦	記事
正	大	庚子	戊辰	三月	冬至戊寅十一日 時暦三月
二	小	辛丑	戊戌	四月	四月壬戌二十五日
三	大	壬寅	丁卯	五月	
四	大	癸卯	丁酉	六月	六月己未二十三日戊寅七月十二日也杜云據レ傳盟在レ秋經誤也如二是言一
五	小	甲辰	丁卯	七月	
六	大	乙巳	丙申	八月	
七	小	丙午	丙寅	九月	
八	大	丁未	乙午	十月	
九	小	戊申	乙丑	十一月	
十	大	己酉	甲午	十二月	
十一	小	庚戌	甲子	次月正月	
十二	大	辛亥	癸巳	二月	

襄四壬辰年

月	大小	月建	朔	夏正	注
正	小	壬子	癸亥	冬至癸未廿一日　時曆三月	三月己酉此月無己酉二月十七日也經書己酉傳書三月誤也
二	大	癸丑	壬辰	四月	
三	小	甲寅	壬戌	五月	
四	大	乙卯	辛卯	六月	
五	小	丙辰	辛酉	七月	七月戊子二十八日
六	大	丁巳	庚寅	八月	八月辛亥二十二日
七	大	戊午	庚申	九月	
八	小	己未	庚寅	十月	
九	大	庚申	己未	十一月	
十	小	辛酉	己丑	十二月	
十一	大	壬戌	戊午	次年正月	閏小戊子　時曆正月閏
十二	大	癸亥	丁巳	二月	

襄五癸巳年

月	大小	月建	朔	夏正	注
正	小	甲子	丁亥	冬至戊子二日　時曆三月	
二	大	乙丑	丙辰	四月	六年傳有四月甲寅之文指此年然此月無甲寅必日月有誤也
三	小	丙寅	丙戌	五月	
四	大	丁卯	乙卯	六月	
五	小	戊辰	乙酉	七月	
六	大	己巳	甲寅	八月	
七	小	庚午	甲申	九月	九月丙午二十三日
八	大	辛未	癸丑	十月	
九	小	壬申	癸未	十一月	十一月甲子十二日
十	大	癸酉	壬子	十二月	十二月辛未二十日
十一	大	甲戌	壬午	次年正月	
十二	小	乙亥	壬子	二月	

襄六甲午年

月	大小	干支	干支	月	備考
正	大	丙子	辛巳	三月	冬至甲午十四日 時曆三月 三月壬午二日 乙未十五日 丁未二十七日
二	小	丁丑	辛亥	四月	
三	大	戊寅	庚辰	五月	
四	小	己卯	庚戌	六月	
五	大	庚辰	己卯	七月	
六	小	辛巳	己酉	八月	
七	大	壬午	戊寅	九月	
八	小	癸未	戊申	十月	
九	大	甲申	丁丑	十一月	
十	小	乙酉	丁未	十二月	十二月丙辰十日
十一	大	丙戌	丙子	次年正月	
十二	小	丁亥	丙午	二月	

襄七乙未年

月	大小	干支	干支	月	備考
正	大	戊子	乙亥	三月	冬至己亥廿五日 時曆三月
二	小	己丑	乙巳	四月	
三	大	庚寅	甲戌	五月	
四	大	辛卯	甲辰	六月	
五	小	壬辰	甲戌	七月	
六	大	癸巳	癸卯	八月	
七	小	甲午	癸酉	九月	閏大壬寅 時曆十月 十月庚戌九日 壬戌二十一日
八	小	乙未	壬申	十一月	
九	大	丙申	辛丑	閏月	
十	小	丁酉	辛未	十二月	十二月丙戌十六日
十一	大	戊戌	庚子	次年正月	
十二	小	己亥	庚午	二月	

襄八丙申年

月	大小	朔	干支	時月	記事
正	大	庚子	己亥	時暦三月	冬至甲辰六日
二	小	辛丑	己巳	四月	四月庚辰十二日 庚寅二十二日
三	大	壬寅	戊戌	五月	五月甲辰七日
四	小	癸卯	戊辰	六月	
五	大	甲辰	丁酉	七月	
六	大	乙巳	丁卯	八月	
七	小	丙午	丁酉	九月	
八	大	丁未	丙寅	十月	
九	小	戊申	丙申	十一月	
十	大	己酉	乙丑	十二月	
十一	小	庚戌	乙未	次年正月	
十二	大	辛亥	甲子	二月	

襄九丁酉年

月	大小	朔	干支	時月	記事
正	小	壬子	甲午	時暦三月	冬至己酉十六日
二	大	癸丑	癸亥	四月	
三	小	甲寅	癸巳	五月	五月辛酉二十九日
四	大	乙卯	壬戌	六月	
五	小	丙辰	壬辰	七月	
六	大	丁巳	辛酉	八月	八月癸未二十三日
七	小	戊午	辛卯	九月	
八	大	己未	庚申	十月	十月庚午十一日 甲戌十五日
九	小	庚申	庚寅	十一月	十一月己亥十日。有二十二月己亥之文一孔穎達云以二一ノ字一誤爲レ二一也信如二是言一
十	大	辛酉	己未	十二月	十一月癸亥一當レ作レ二一此月之五日也 ○有二閏月戊寅文一者誤也杜孔既善辨レ之
十一	大	壬戌	己丑	次年正月	
十二	小	癸亥	己未	二月	

襄十戊戌年

月	大小	月建	朔	周正	注
正	大	甲子	戊子	冬至乙卯廿八日 時暦三月	三月癸丑二十六日
二	小	乙丑	戊午	四月	四月戊午一日 丙寅九日
三	大	丙寅	丁亥	五月	五月庚寅四日 甲午八日 閏小丁巳 時暦六月 六月庚午十四日
四	大	丁卯	丙戌	七月	
五	小	戊辰	丙辰	八月	八月丙寅十一日
六	大	己巳	乙酉	九月	九月己酉二十五日
七	小	庚午	乙卯	十月	十月戊辰十四日
八	大	辛未	甲申	十一月	十一月己亥十六日 丁未二十四日
九	小	壬申	甲寅	十二月	
十	大	癸酉	癸未	閏月	
十一	小	甲戌	癸丑	次年正月	
十二	大	乙亥	壬午	二月	

襄十一己亥年

月	大小	月建	朔	周正	注
正	大	丙子	壬子	冬至庚申九日 時暦三月	
二	小	丁丑	壬午	四月	四月己亥十八日
三	大	戊寅	辛亥	五月	
四	小	己卯	辛巳	六月	
五	大	庚辰	庚戌	七月	七月己未十日 丙子二十七日
六	小	辛巳	庚辰	八月	
七	大	壬午	己酉	九月	九月甲戌二十六日
八	小	癸未	己卯	十月	十月丁亥九日
九	大	甲申	戊申	十一月	
十	小	乙酉	戊寅	十二月	十二月戊寅一日 庚辰三日 壬午五日 己丑十二日
十一	大	丙戌	丁未	次年正月	
十二	小	丁亥	丁丑	二月	

襄十二庚子年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	戊子	丙午	三月	冬至乙丑二十日
二	小	己丑	丙子	四月	
三	大	庚寅	乙巳	五月	
四	小	辛卯	乙亥	六月	
五	大	壬辰	甲辰	七月	
六	大	癸巳	甲戌	八月	閏小辛丑 時曆同
七	小	甲午	甲辰	九月	
八	大	乙未	癸酉	十月	
九	小	丙申	癸卯	十一月	
十	大	丁酉	壬申	十二月	
十一	小	戊戌	壬寅	次年正月	
十二	大	己亥	辛未	二月	

襄十三辛丑年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	庚子	庚午	三月	朔旦冬至 辛卯蔀第二章
二	小	辛丑	庚子	四月	
三	大	壬寅	己巳	五月	
四	小	癸卯	己亥	六月	
五	大	甲辰	戊辰	七月	
六	小	乙巳	戊戌	八月	
七	大	丙午	丁卯	九月	九月庚辰十四日
八	小	丁未	丁酉	十月	
九	大	戊申	丙寅	十一月	
十	大	己酉	丙申	十二月	
十一	小	庚戌	丙寅	次年正月	
十二	大	辛亥	乙未	二月	二月乙未朔日食

襄十四年壬寅

月	大小	月建	朔	時曆	附記
正	小	壬子	乙丑	三月	冬至丙子十二日
二	大	癸丑	甲午	四月	西月己未二十六日
三	小	甲寅	甲子	五月	
四	大	乙卯	癸巳	六月	
五	小	丙辰	癸亥	七月	
六	大	丁巳	壬辰	八月	
七	小	戊午	壬戌	九月	
八	大	己未	辛卯	十月	
九	小	庚申	辛酉	十一月	
十	大	辛酉	庚寅	十二月	
十一	小	壬戌	庚申	次年正月	
十二	大	癸亥	己丑	二月	二月己亥十一日

襄十五年癸卯

月	大小	月建	朔	時曆	附記
正	大	甲子	己未	三月	冬至辛巳廿三日
二	小	乙丑	己丑	四月	
三	大	丙寅	戊午	五月	
四	小	丁卯	戊子	六月	
五	大	戊辰	丁巳	七月	
六	小	己巳	丁亥	八月	八月丁巳日食。此月無二丁巳一七月一日也日月必有レ誤
七	大	庚午	丙辰	九月	
八	小	辛未	丙戌	十月	
九	大	壬申	乙卯	十一月	十一月癸亥九日　閏小乙酉　時曆十二月
十	大	癸酉	甲寅	次年正月	
十一	小	甲戌	甲申	二月	
十二	大	乙亥	癸丑	三月	三月戊寅二十六日

襄十六年甲辰年

月	大小	干支	朔	周正	備考
正	小	丙子	癸未	四月	冬至丙戌四日 時暦四月
二	大	丁丑	壬子	五月	五月甲子十三日
三	小	戊寅	壬午	六月	六月庚寅九日
四	大	己卯	辛亥	閏月	
五	大	庚辰	辛巳	七月	
六	小	辛巳	辛亥	八月	
七	大	壬午	庚辰	九月	
八	小	癸未	庚戌	十月	
九	大	甲申	己卯	十一月	
十	小	乙酉	己酉	十二月	
十一	大	丙戌	戊寅	次年正月	
十二	小	丁亥	戊申	二月	二月庚午二十三日

襄十七年乙巳年

月	大小	干支	朔	周正	備考
正	大	戊子	丁丑	三月	冬至辛卯十五日 時暦三月
二	小	己丑	丁未	四月	
三	大	庚寅	丙子	五月	
四	小	辛卯	丙午	六月	
五	大	壬辰	乙亥	七月	
六	小	癸巳	乙巳	八月	
七	大	甲午	甲戌	九月	
八	大	乙未	甲辰	十月	
九	小	丙申	甲戌	十一月	十一月甲午廿一日
十	大	丁酉	癸卯	十二月	
十一	小	戊戌	癸酉	次年正月	
十二	大	己亥	壬寅	二月	

襄十八年丙午

月	大小	月建	朔	周正	附記
正	小	庚子	壬申	冬至丁酉廿六日 時曆三月	
二	大	辛丑	辛丑	四月	
三	小	壬寅	辛未	五月	
四	大	癸卯	庚子	六月	
五	小	甲辰	庚午	七月	閏大己亥 時曆八月
六	小	乙巳	己巳	九月	
七	大	丙午	戊戌	十月	十月丙寅晦廿九日
八	小	丁未	戊辰	十一月丁卯退朔	十一月丁卯朔一日 己卯十三日 乙酉十九日
九	大	戊申	丁酉	十二月	十二日戊戌二日 己亥三日 壬寅六日 甲辰八日
十	小	己酉	丁酉	次年正月	
十一	大	庚戌	丙申	二月	二月甲寅十九日
十二	大	辛亥	丙寅	三月	

襄十九年丁未

月	大小	月建	朔	周正	附記
正	小	壬子	丙申	冬至壬寅七日 時曆四月	四月丁未十二日
二	大	癸丑	乙丑	五月甲子退朔	五月壬辰晦廿九日
三	小	甲寅	乙未	六月	
四	大	乙卯	甲子	七月	七月辛卯二十八日
五	小	丙辰	甲午	八月	八月甲辰十一日 丙辰二十三日
六	大	丁巳	癸亥	閏月	
七	小	戊午	癸巳	九月	
八	大	己未	壬戌	十月	
九	小	庚申	壬辰	十一月	
十	大	辛酉	辛酉	十二月	
十一	小	壬戌	辛卯	次年正月	正月辛亥二十一日
十二	大	癸亥	庚申	二月	

襄二十戊申年

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	小	甲子	庚寅	三月	冬至丁未十八日
二	大	乙丑	己未	四月	
三	小	丙寅	己丑	五月	
四	大	丁卯	戊午	六月	六月庚申三日
五	大	戊辰	戊子	七月	
六	小	己巳	戊午	八月	
七	大	庚午	丁亥	九月	
八	小	辛未	丁巳	十月丙辰退朔	十月丙辰朔日食
九	大	壬申	丙戌	十一月	
十	小	癸酉	丙辰	十二月	
十一	大	甲戌	乙酉	次年正月	
十二	小	乙亥	乙卯	二月	

襄廿一己酉年

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	大	丙子	甲申	三月	冬至壬子廿九日
二	小	丁丑	甲寅	四月	閏大癸未 時暦五月
三	小	戊寅	癸丑	六月	
四	大	己卯	壬午	七月	
五	小	庚辰	壬子	八月	
六	大	辛巳	辛巳	閏月	
七	大	壬午	辛亥	九月庚戌退朔	九月庚戌朔日食
八	小	癸未	辛巳	十月庚辰退朔	十月庚辰朔日食
九	大	甲申	庚戌	十一月	
十	小	乙酉	庚辰	十二月	
十一	大	丙戌	己酉	次年正月	
十二	小	丁亥	己卯	二月	

襄廿二庚戌年

月	大小	干支	朔	時暦	記事
正	大	戊子	戊申	時暦三月	冬至戊午十一日
二	小	己丑	戊寅	四月	
三	大	庚寅	丁未	五月	
四	小	辛卯	丁丑	六月	
五	大	壬辰	丙午	七月	六月辛酉十六日
六	小	癸巳	丙子	八月	
七	大	甲午	乙巳	九月	九月己巳二十五日
八	小	乙未	乙亥	十月	
九	大	丙申	甲辰	十一月	
十	小	丁酉	甲戌	十二月	十二月丁巳此月無二丁巳一十一月十四日也日月必有レ誤也
十一	大	戊戌	癸卯	次年正月	
十二	大	己亥	癸酉	二月	二月癸酉朔日食

襄廿三辛亥年

月	大小	干支	朔	時暦	記事
正	小	庚子	癸卯	時暦三月	冬至癸亥廿一日　三月己巳二十七日
二	大	辛丑	壬申	四月	
三	小	壬寅	壬寅	五月	
四	大	癸卯	辛未	六月	
五	小	甲辰	辛丑	七月	
六	大	乙巳	庚午	八月	八月己卯十日
七	小	丙午	庚子	九月	
八	大	丁未	己巳	十月	十月乙亥十日
九	小	戊申	己亥	十一月	
十	大	己酉	戊辰	十二月	
十一	小	庚戌	戊戌	次年正月	閏大丁卯　時暦同
十二	小	辛亥	丁酉	二月	

襄廿四壬子年

月	大小	月建	朔	周正	注
正	大	壬子	丙寅	冬至戊辰三日 時暦三月	
二	大	癸丑	丙申	四月	
三	小	甲寅	丙寅	五月	
四	大	乙卯	乙未	六月	
五	小	丙辰	乙丑	七月甲子退朔	七月甲子朔日食既
六	大	丁巳	甲午	八月癸巳退朔	八月癸巳朔日食
七	小	戊午	甲子	九月	
八	大	己未	癸巳	十月	
九	小	庚申	癸亥	十一月	
十	大	辛酉	壬辰	十二月	
十一	小	壬戌	壬戌	次年正月	
十二	大	癸亥	辛卯	二月	

襄廿五癸丑年

月	大小	月建	朔	周正	注
正	小	甲子	辛酉	冬至癸酉十三日 時暦三月	
二	大	乙丑	庚寅	四月	
三	小	丙寅	庚申	五月	五月甲戌十五日 乙亥十六日 丁丑十八日 辛巳二十二日 丁亥二十八日
四	大	丁卯	己丑	六月	六月壬子二十四日
五	小	戊辰	己未	七月	七月己巳十一日
六	大	己巳	戊子	八月	八月己巳此月無己巳必七月己巳之誤也
七	大	庚午	戊午	九月	
八	小	辛未	戊子	十月	十月甲午七日
九	大	壬申	丁巳	十一月	
十	小	癸酉	丁亥	十二月	
十一	大	甲戌	丙辰	次年正月	
十二	小	乙亥	丙戌	二月	二月庚寅五日 辛卯六日 甲午九日

襄廿六甲寅年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	大	丙子	乙卯	三月	冬至己卯廿五日 三月甲寅朔一日
二	小	丁丑	乙酉	四月	
三	大	戊寅	甲寅	五月	
四	小	己卯	甲申	六月	
五	大	庚辰	癸丑	七月	
六	小	辛巳	癸未	八月	八月壬午退朔 八月壬午一日
七	大	壬午	壬子	九月	
八	大	癸未	辛亥	十一月	
九	小	甲申	辛巳	十二月	十二月乙酉五日
十	大	乙酉	庚戌	閏月	
十一	大	丙戌	庚辰	正月	
十二	小	丁亥	庚戌	二月	

閏小壬午　時暦十月

襄廿七乙卯年

月	大小	月建	朔	時暦	備考
正	大	戊子	己卯	三月	冬至甲申六日
二	小	己丑	己酉	四月	
三	大	庚寅	戊寅	五月	五月甲辰二十七日 丙午二十九日
四	小	辛卯	戊申	六月丁未退朔	六月丁未朔一日 戊申二日（　）甲寅八日 丙辰十日（　）壬戌十六日 丁卯廿一日（　）戊辰廿二日 庚午廿四日（　）壬申廿六日
五	大	壬辰	丁丑	七月	七月戊寅二日 庚辰四日 辛巳五日 壬午六日 乙酉九日
六	小	癸巳	丁未	八月	
七	大	甲午	丙子	九月	九月庚辰五日 辛巳六日
八	小	乙未	丙午	十月	
九	大	丙申	乙亥	十一月	
十	小	丁酉	乙巳	閏月	
十一	大	戊戌	甲戌	後閏月	
十二	小	己亥	甲辰		

按經書十二乙亥朔日有食之傳曰十一月乙亥朔日有食之辰在申司暦過也再失閏矣杜云乙亥十一月朔也若是十二月朔則爲一失閏傳不得言再失閏也經文誤矣閏月無中氣斗建斜指兩辰之間也時之司暦漸失其閏至此年食之日以儀審望知斗建之在申斗建在申乃是周家九月也而其時暦稱十一月故知再失閏也于是始覺其謬遂頓置兩閏以應天正以叙事期然則前閏月爲建酉後閏月爲建戌十二月爲建亥而歲終焉信如是言也從是而后復于本衡焉

自二此年一至二哀二十七年癸酉七十八年一合二于本術一以終編

襄廿八丙辰年

月	大小	月建	朔	注
正	大	庚子	癸酉	冬至己丑十七日
二	大	辛丑	癸卯	
三	小	壬寅	癸酉	
四	大	癸卯	壬寅	
五	小	甲辰	壬申	
六	大	乙巳	辛丑	
七	小	丙午	辛未	
八	大	丁未	庚子	
九	小	戊申	庚午	
十	大	己酉	己亥	十月丙辰十八日
十一	小	庚戌	己巳	十一月乙亥七日 丁亥十九日 癸巳二十五日
十二	大	辛亥	戊戌	十二月乙亥朔此月無二乙亥一疑己亥朔而進朔也 甲寅十七日 乙未此月無二乙未一日誤也

襄廿九丁巳年

月	大小	月建	朔	注
正	小	壬子	戊辰	冬至甲午廿七日
二	大	癸丑	丁酉	二月癸卯七日
三	小	甲寅	丁卯	
閏	大		丙申	時曆四月
四	小	乙卯	丙寅	時曆五月　五月庚午五日
五	大	丙辰	乙未	六月
六	大	丁巳	乙丑	七月
七	小	戊午	乙未	八月
八	大	己未	甲子	閏月
九	小	庚申	甲午	九月乙未二日
十	大	辛酉	癸亥	十月庚寅二十八日
十一	小	壬戌	癸巳	十一月乙卯廿三日
十二	大	癸亥	壬戌	十二月己巳八日

襄三十年戊午年

月	大小	月建	朔	記事
正	小	甲子	壬辰	冬至庚子九日
二	大	乙丑	辛酉	二月癸未二十三日晉絳縣老人語二其生年之日數一者乃此日也
三	小	丙寅	辛卯	
四	大	丁卯	庚申	四月己亥此月無己亥十六日乙亥之誤也 戊子二十九日
五	小	戊辰	庚寅	五月癸巳四日 甲午五日
六	大	己巳	己未	
七	小	庚午	己丑	七月庚子十二日 辛丑十三日 壬寅十四日 癸卯十五日 乙巳十七日 癸丑二十五日
八	大	辛未	戊午	八月甲子七日 己巳十二日
九	大	壬申	戊子	
十	小	癸酉	戊午	
十一	大	甲戌	丁亥	
十二	小	乙亥	丁巳	

襄卅一年己未年

月	大小	月建	朔	記事
正	大	丙子	丙戌	冬至乙巳二十日
二	小	丁丑	丙辰	
三	大	戊寅	乙酉	
四	小	己卯	乙卯	
五	大	庚辰	甲申	
六	小	辛巳	甲寅	六月辛巳廿八日
七	大	壬午	癸未	
八	小	癸未	癸丑	
九	大	甲申	壬午	九月癸巳十二日 己亥十八日
十	小	乙酉	壬子	十月癸酉廿二日
十一	大	丙戌	辛巳	
十二	小	丁亥	辛亥	閏大庚辰一時曆正月 正月乙未十六日

昭公元年庚申年

月	大小	建	朔	時暦	注
正	大	戊子	庚戌	二月	朔旦冬至 辛卯蔀第三章
二	小	己丑	庚辰	三月	三月甲辰二十五日
三	大	庚寅	己酉	四月	
四	小	辛卯	己卯	五月	五月庚辰二日 癸卯二十五日
五	大	壬辰	戊申	六月	六月丁巳十日
六	小	癸巳	戊寅	七月	
七	大	甲午	丁未	八月	
八	小	乙未	丁丑	九月	
九	大	丙申	丙午	十月	
十	小	丁酉	丙子	十一月	十一月己酉十二月 有二甲辰朔一則十一月不レ得レ有二己酉一經傳言二十一月一誤也
十一	大	戊戌	乙巳	十二月甲辰退朔	十二月甲辰朔一日 己酉六日 庚戌七日
十二	小	己亥	乙亥	閏月	

昭二辛酉年

月	大小	建	朔	注
正	大	庚子	甲辰	冬至乙卯十二日
二	小	辛丑	甲戌	
三	大	壬寅	癸卯	
四	小	癸卯	癸酉	
五	大	甲辰	壬寅	
六	大	乙巳	壬申	
七	小	丙午	壬寅	七月壬寅一日
八	大	丁未	辛未	
九	小	戊申	辛丑	
十	大	己酉	庚午	
十一	小	庚戌	庚子	
十二	大	辛亥	己巳	

昭三壬戌年

月	大小	朔		備考
正	小	壬子	己亥	冬至辛酉廿三日　正月丁未九日
二	大	癸丑	戊辰	
三	小	甲寅	戊戌	
四	大	乙卯	丁卯	
五	小	丙辰	丁酉	
六	大	丁巳	丙寅	
七	小	戊午	丙申	
八	大	己未	乙丑	
九	大	庚申	乙未	
十	大	辛酉	甲午	
十一	小	壬戌	甲子	
十二	大	癸亥	癸巳	

閏小乙丑

昭四癸亥年

月	大小	朔		備考
正	小	甲子	癸亥	冬至丙寅四日
二	大	乙丑	壬辰	
三	小	丙寅	壬戌	
四	大	丁卯	辛卯	
五	小	戊辰	辛酉	
六	大	己巳	庚寅	六月丙午十七日
七	小	庚午	庚申	
八	大	辛未	己丑	八月甲申此月無甲申誤在日也
九	小	壬申	己未	
十	大	癸酉	戊子	
十一	小	甲戌	戊午	
十二	大	乙亥	丁亥	十二月癸丑廿七日乙卯二十九日

昭五甲子年

月	大小	朔		注
正	大	丙子	丁巳	冬至辛未十五日
二	小	丁丑	丁亥	
三	大	戊寅	丙辰	
四	小	己卯	丙戌	
五	大	庚辰	乙卯	
六	小	辛巳	乙酉	
七	大	壬子	甲寅	七月戊辰十五日
八	小	癸未	甲申	
九	大	甲申	癸丑	
十	小	乙酉	癸未	
十一	大	丙戌	壬子	
十二	小	丁亥	壬午	

昭六乙丑年

月	大小	朔		注
正	大	戊子	辛亥	冬至丙子廿六日
二	小	己丑	辛巳	
三	大	庚寅	庚戌	七年傳壬子此月三日壬寅七年正月二十八日也
四	大	辛卯	庚辰	
五	小	壬辰	庚戌	閏大己卯 時曆六月　六月丙戌八日
六	小	癸巳	己酉	閏　月
七	大	甲午	戊寅	
八	小	乙未	戊申	
九	大	丙申	丁丑	
十	小	丁酉	丁未	
十一	大	戊戌	丙子	
十二	小	己亥	丙午	

昭七年丙寅

月	大小	月建	朔	記事
正	大	庚子	乙亥	冬至壬午八日 正月癸巳十九日 壬寅二十八日
二	小	辛丑	乙巳	二月戊午十四日
三	大	壬寅	甲戌	
四	小	癸卯	甲辰	四月甲辰朔日食
五	大	甲辰	癸酉	
六	小	乙巳	癸卯	
七	大	丙午	壬申	
八	大	丁未	壬寅	八月戊辰二十七日
九	小	戊申	壬申	
十	大	己酉	辛丑	十月辛酉二十一日
十一	小	庚戌	辛未	十一月癸未十三日
十二	大	辛亥	庚子	十二月癸亥廿四日

昭八年丁卯

月	大小	月建	朔	記事
正	小	壬子	庚午	冬至丁亥十八日
二	大	癸丑	己亥	
三	小	甲寅	己巳	三月甲申十六日
四	大	乙卯	戊戌	四月辛丑四日 辛亥十四日
五	小	丙辰	戊辰	
六	大	丁巳	丁酉	
七	小	戊午	丁卯	七月甲戌八日 丁丑十一日
八	大	己未	丙申	八月庚戌十五日
九	小	庚申	丙寅	
十	大	辛酉	乙未	十月壬午此月無壬午蓋十一月之誤乎
十一	小	壬戌	乙丑	十一月壬午十八日
十二	大	癸亥	甲午	

昭九戊辰年

月	大小	月建	朔	注
正	大	甲申	甲子	冬至壬辰廿九日
二	小	乙丑	甲午	二月庚申二十七日
三	小	丙寅	癸巳	
四	大	丁卯	壬戌	
五	小	戊辰	壬辰	
六	大	己巳	辛酉	
七	小	庚午	辛卯	
八	大	辛未	庚申	閏大癸亥
九	小	壬申	庚寅	
十	大	癸酉	己未	
十一	小	甲戌	己丑	
十二	大	乙亥	戊午	

昭十己巳年

月	大小	月建	朔	注
正	小	丙子	戊子	冬至丁酉十日
二	大	丁丑	丁巳	
三	大	戊寅	丁亥	
四	小	己卯	丁巳	
五	大	庚辰	丙戌	五月庚辰此月無庚辰四月廿四日也日月必有誤也
六	小	辛巳	丙辰	
七	大	壬午	乙酉	七月戊子四日
八	小	癸未	乙卯	
九	大	甲申	甲申	
十	小	乙酉	甲寅	
十一	大	丙戌	癸未	
十二	小	丁亥	癸丑	十二月甲子十二日

昭十一年庚午

月	大小	月建	朔	備考
正	大	戊子	壬午	冬至癸卯廿二日
二	小	己丑	壬子	
三	大	庚寅	辛巳	三月丙申十六日
四	小	辛卯	辛亥	四月丁巳七日
五	大	壬辰	庚辰	五月甲申五日
六	小	癸巳	庚戌	
七	大	甲午	己卯	
八	大	乙未	己酉	
九	小	丙申	己卯	九月己亥二十一日
十	大	丁酉	戊申	
十一	小	戊戌	戊寅	十一月丁酉二十日
閏	大		丁未	
十二	小	己亥	丁丑	

昭十二年辛未

月	大小	月建	朔	備考
正	大	庚子	丙午	冬至戊申三日
二	小	辛丑	丙子	
三	大	壬寅	乙巳	三月壬申二十八日
四	小	癸卯	乙亥	
五	大	甲辰	甲辰	
六	小	乙巳	甲戌	
七	大	丙午	癸卯	
八	小	丁未	癸酉	八月壬午十日
九	大	戊申	壬寅	
十	大	己酉	壬申	十月壬申朔一日 丙申二十五日 丁酉二十六日
十一	小	庚戌	壬寅	
十二	大	辛亥	辛未	

昭十三壬申年

月	大小	建	朔	注
正	小	壬子	辛丑	冬至癸丑十三日
二	大	癸丑	庚午	
三	小	甲寅	庚子	
四	大	乙卯	己巳	
五	小	丙辰	己亥	五月乙卯十七日 丙辰十八日 癸亥二十五日
六	大	丁巳	戊辰	
七	小	戊午	戊戌	七月丙寅二十九日
八	大	己未	丁卯	八月辛未五日 壬申六日 癸酉七日 甲戌八日
九	小	庚申	丁酉	
十	大	辛酉	丙寅	
十一	小	壬戌	丙申	
十二	大	癸亥	乙丑	

昭十四癸酉年

月	大小	建	朔	時曆	注
正	小	甲子	乙未		冬至戊午廿四日
二	大	乙丑	甲子		
三	大	丙寅	甲午		
四	小	丁卯	甲子		
五	大	戊辰	癸巳		
六	小	己巳	癸亥		
七	大	庚午	壬辰		閏小壬戌 時曆八月
八	大	辛未	辛卯	九月	九月甲午四日
九	小	壬申	辛酉	十月	
十	大	癸酉	庚寅	十一月	
十一	小	甲戌	庚申	十二月	
十二	大	乙亥	己丑	次年正月	

昭十五甲戌年

月	大小	干支	朔	時暦	備考
正	小	丙子	己未	時暦二月	冬至甲子六日／二月癸酉十五日
二	大	丁丑	戊子	三月	
三	小	戊寅	戊午	四月	
四	大	己卯	丁亥	五月	
五	小	庚辰	丁巳	六月	六月丁巳朔日食乙丑九日
六	大	辛巳	丙戌	七月	
七	大	壬午	丙辰	八月	八月戊寅二十三日
八	小	癸未	丙戌	閏月	
九	大	甲申	乙卯		
十	小	乙酉	乙酉		
十一	大	丙戌	甲寅		
十二	小	丁亥	甲申		

昭十六乙亥年

月	大小	干支	朔	備考
正	大	戊子	癸丑	冬至己巳十七日
二	小	己丑	癸未	二月丙申十四日
三	大	庚寅	壬子	
四	小	辛卯	壬午	
五	大	壬辰	辛亥	
六	小	癸巳	辛巳	
七	大	甲午	庚戌	
八	小	乙未	庚辰	八月己亥二十日
九	大	丙申	己酉	
十	大	丁酉	己卯	
十一	小	戊戌	己酉	
十二	大	己亥	戊寅	

昭十七丙子年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	庚子	戊申		冬至甲戌廿七日
二	大	辛丑	丁丑		
三	小	壬寅	丁未		
四	小	癸卯	丙午	五月	
五	大	甲辰	乙亥	六月建閏	六月甲戌朔日食
六	小	乙巳	乙巳	七月	
閏大丙子				時曆四月	
七	大	丙午	甲戌	八月	
八	小	丁未	甲辰	九月	九月丁卯二十四日 庚午二十七日
九	大	戊申	癸酉	閏月	
十	小	己酉	癸卯		
十一	大	庚戌	壬申		
十二	小	辛亥	壬寅		

昭十八丁丑年

月	大小	月建	朔	注
正	大	壬子	辛未	冬至己卯九日
二	大	癸丑	辛丑	二月乙卯十五日
三	小	甲寅	辛未	
四	大	乙卯	庚子	
五	小	丙辰	庚午	五月丙子七日 戊寅九日 壬午十三日
六	大	丁巳	己亥	
七	小	戊午	己巳	
八	大	己未	戊戌	
九	小	庚申	戊辰	
十	大	辛酉	丁酉	
十一	小	壬戌	丁卯	
十二	大	癸亥	丙申	

昭十九戊寅年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	甲子	丙寅		冬至乙酉二十日
二	大	乙丑	乙未		
三	小	丙寅	乙丑		
四	大	丁卯	甲午		
五	大	戊辰	甲子		五月戊辰五日 乙亥十二日 己卯十六日
六	小	己巳	甲午	閏大庚申 時曆正月	
七	大	庚午	癸亥		七月丙子十四日
八	小	辛未	癸巳		
九	大	壬申	壬戌		
十	小	癸酉	壬辰		
十一	大	甲戌	辛酉		
十二	小	乙亥	辛卯		

昭二十己卯年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	丙子	庚寅		朔旦冬至辛卯蔀第四章 時曆二月退朔 二月己丑日南至一日也
二	大	丁丑	己未	三月	
三	小	戊寅	己丑	四月	
四	大	己卯	戊午	五月	
五	小	庚辰	戊子	六月	六月丙申九日 癸卯十六日 丙辰二十九日 丁巳晦三十日
六	大	辛巳	丁巳	七月進朔	七月戊午朔一日
七	小	壬午	丁亥	八月	八月辛亥二十五日
八	大	癸未	丙辰	閏月	閏月戊辰十三日
九	大	甲申	丙戌		
十	小	乙酉	丙辰		十月戊辰十三日
十一	大	丙戌	乙酉		十一月辛卯七日
十二	小	丁亥	乙卯		

昭廿一庚辰年

月	大小	月建	朔	記事
正	大	子戊	甲申	冬至乙未十一日
二	小	丑己	甲寅	
三	大	寅庚	癸未	
四	小	卯辛	癸丑	
五	大	辰壬	壬午	五月丙申十五日 壬寅二十一日
六	小	巳癸	壬子	六月庚午十九日
七	大	午甲	辛巳	時曆壬午進朔　七月壬午朔日食
八	小	未乙	辛亥	八月乙亥二十五日
九	大	申丙	庚辰	
十	小	酉丁	庚戌	十月丙寅十七日
十一	大	戌戊	己卯	十一月癸未五日 丙戌八日
十二	小	亥己	己酉	

昭廿二辛巳年

月	大小	月建	朔	記事
正	大	子庚	戊寅	冬至庚子廿三日
二	大	丑辛	戊申	二月甲子十七日 己巳二十二日
三	小	寅壬	戊寅	
四	大	卯癸	丁未	四月乙丑十九日 戊辰二十二日
五	小	辰甲	丁丑	五月庚辰四日
六	大	巳乙	丙午	六月丁巳十二日 壬戌十七日 癸亥十八日 乙丑二十日 丙寅二十一日 辛未二十六日 乙亥三十日
七	小	午丙	丙子	七月戊寅三日 辛卯十六日 壬辰十七日
八	大	未丁	乙巳	八月辛酉十七日 己巳二十五日 庚午二十六日 辛未二十七日
九	小	申戊	乙亥	閏大甲辰　時曆十月　十月丁巳十四日 庚申十七日
十	小	酉己	甲戌	十一月　十一月乙酉十三日 己丑十六日
十一	大	戌庚	癸卯	十二月　十二月庚戌八日
十二	小	亥辛	癸酉	閏月　謂十二月癸酉朔日食者卽此月也 閏月辛丑二十九日

昭廿三壬午年

月	大小	月建	朔	記事
正	大	子壬	壬寅	冬至丙午五日 正月壬寅朔一日 癸卯二日 丁未六日 庚戌九日 癸丑十二日
二	小	丑癸	壬申	
三	大	寅甲	辛丑	
四	大	卯乙	辛未	四月乙酉十五日
五	小	辰丙	辛丑	
六	大	巳丁	庚午	六月壬午十三日 癸未十四日 丙戌十七日 己丑二十日 庚寅二十一日 甲午二十五日
七	小	午戊	庚子	七月戊申九日 丙辰十七日 甲子二十五日 丙寅二十七日 戊辰晦二十九日
八	大	未己	己巳	八月乙未二十七日 丁酉二十九日
九	小	申庚	己亥	
十	大	酉辛	戊辰	十月甲申十七日
十一	小	戌壬	戊戌	
十二	大	亥癸	丁卯	

昭廿四癸未年

月	大小	月建	朔	記事
正	小	子甲	丁酉	冬至辛亥十五日 正月辛丑五日 戊午二十二日
二	大	丑乙	丙寅	二月丙戌二十一日
三	小	寅丙	丙申	三月庚戌十五日
四	大	卯丁	乙丑	
五	小	辰戊	乙未	五月乙未朔日食
六	大	巳己	甲子	六月壬申九日 丁酉九月五日也
七	小	午庚	甲午	
八	大	未辛	癸亥	
九	大	申壬	癸巳	
十	小	酉癸	癸亥	十月癸酉十一日 甲戌十二日
十一	大	戌甲	壬辰	
十二	小	亥乙	壬戌	

昭廿九戊子年

月	大小	干支	朔	注
正	小	子甲	戊辰	冬至丁丑十日
二	大	丑乙	丁酉	
三	小	寅丙	丁卯	三月己卯十三日
四	大	卯丁	丙申	四月庚子五日
五	小	辰戊	丙寅	五月庚寅廿五日
六	大	巳己	乙未	
七	小	午庚	乙丑	
八	大	未辛	甲午	
九	小	申壬	甲子	
十	大	酉癸	癸巳	
十一	大	戌甲	癸亥	
十二	小	亥乙	癸巳	

昭三十己丑年

月	大小	干支	朔	時暦	注
正	大	子丙	壬戌		冬至壬午廿一日
二	小	丑丁	壬辰		
三	大	寅戊	辛酉		
四	小	卯己	辛卯		
五	大	辰庚	庚申		
六	小	巳辛	庚寅		時暦閏五月
七	大	午壬	己未	六月	六月庚辰二十二日
八	小	未癸	己丑	七月	
九	大	申甲	戊午	八月	
十	小	酉乙	戊子	九月	
十一	大	戌丙	丁巳	十月	閏小丁亥 時暦十一月
十二	大	亥丁	丙辰		十二月己卯廿四日

昭卅一年庚寅

月	大小	朔		注
正	小	戊子	丙戌	冬至戊子三日
二	大	己丑	乙卯	
三	大	庚寅	乙酉	
四	小	辛卯	乙卯	四月丁巳三日
五	大	壬辰	甲申	
六	小	癸巳	甲寅	
七	大	甲午	癸未	
八	小	乙未	癸丑	
九	大	丙申	壬午	
十	小	丁酉	壬子	
十一	大	戊戌	辛巳	
十二	小	己亥	辛亥	十二月辛亥朔日食庚午日始有ㇾ譎十月十九日也

昭卅二年辛卯

月	大小	朔		注
正	大	庚子	庚辰	冬至癸巳十四日
二	小	辛丑	庚戌	
三	大	壬寅	己卯	
四	小	癸卯	己酉	
五	大	甲辰	戊寅	
六	大	乙巳	戊申	
七	小	丙午	戊寅	
八	大	丁未	丁未	
九	小	戊申	丁丑	
十	大	己酉	丙午	
十一	小	庚戌	丙子	十一月己丑十四日
十二	大	辛亥	乙巳	十一月己未十五日

定公元年壬辰年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	壬子	乙亥		冬至戊戌廿四日 正月辛巳七日 庚寅十六日
二	大	癸丑	甲辰		
三	小	甲寅	甲戌		
四	大	乙卯	癸卯		
五	小	丙辰	癸酉		
六	大	丁巳	壬寅		六月癸亥二十二日 戊辰二十七日
七	小	戊午	壬申		七月癸巳二十二日
閏	大		辛丑	時曆八月	
八	小	己未	辛未	九月	
九	大	庚申	庚子	十月	
十	大	辛酉	庚午	十一月	
十一	小	壬戌	庚子	十二月	
十二	大	癸亥	己巳	次年正月	

定二癸巳年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	小	甲子	己亥	時曆二月	冬至癸卯五日
二	大	乙丑	戊辰	三月	
三	小	丙寅	戊戌	四月	四月辛酉二十四日
四	大	丁卯	丁卯	五月	五月壬辰廿六日
五	小	戊辰	丁酉	閏月	
六	大	己巳	丙寅		
七	小	庚午	丙申		
八	大	辛未	乙丑		
九	小	壬申	乙未		
十	大	癸酉	甲子		
十一	小	甲戌	甲午		
十二	大	乙亥	癸亥		

定三甲午年

月	大小	月建	朔	注
正	小	丙子	癸巳	冬至己酉十七日
二	大	丁丑	壬戌	二月辛卯三十日
三	大	戊寅	壬辰	
四	小	己卯	壬戌	
五	大	庚辰	辛卯	
六	小	辛巳	辛酉	
七	大	壬午	庚寅	
八	小	癸未	庚申	
九	大	甲申	己丑	
十	小	乙酉	己未	
十一	大	丙戌	戊子	
十二	小	丁亥	戊午	

定四乙未年

月	大小	月建	朔	時曆	注
正	大	戊子	丁亥		冬至甲寅廿八日
二	小	己丑	丁巳		二月癸巳正月七日也 書二于二月一從レ赴也
三	大	庚寅	丙戌	閏小丙辰 時曆四月	四月庚辰二十五日
四	大	辛卯	乙酉	五月	
五	大	壬辰	乙卯	六月	
六	小	癸巳	乙酉	七月	
七	大	甲午	甲寅	八月	
八	小	乙未	甲申	九月	
九	大	丙申	癸丑	十月	
十	小	丁酉	癸未	閏十月	
十一	大	戊戌	壬子		十一月庚午十九日 己卯二十八日 庚辰二十九日
十二	小	己亥	壬午		

定五丙申年

月	大小	月建	朔	注
正	大	庚子	辛亥	冬至己未九日
二	小	辛丑	辛巳	
三	大	壬寅	庚戌	三月辛亥朔日食時曆之進朔也
四	小	癸卯	庚辰	
五	大	甲辰	己酉	
六	小	乙巳	己卯	六月丙申十八日
七	大	丙午	戊申	七月壬子五日
八	小	丁未	戊寅	
九	大	戊申	丁未	九月乙亥二十九日
十	大	己酉	丁丑	十月丁亥十一日　己丑十三日　庚寅十四日
十一	小	庚戌	丁未	
十二	大	辛亥	丙子	

定六丁酉年

月	大小	月建	朔	注
正	小	壬子	丙午	冬至甲子十九日　正月癸亥十八日
二	大	癸丑	乙亥	
三	小	甲寅	乙巳	
四	大	乙卯	甲戌	四月己丑十六日
五	小	丙辰	甲辰	
六	大	丁巳	癸酉	
七	小	戊午	癸卯	
八	大	己未	壬申	
九	小	庚申	壬寅	
十	大	辛酉	辛未	
十一	小	壬戌	辛丑	
十二	大	癸亥	庚午	

閏大庚子　時曆正月

定七戊戌年

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	小	甲子	庚午	二月	朔旦冬至 庚午蔀 第一章
二	大	乙丑	己亥	三月	
三	小	丙寅	己巳	四月	
四	大	丁卯	戊戌	五月	
五	小	戊辰	戊辰	六月	
六	大	己巳	丁酉	七月	
七	小	庚午	丁卯	八月	
八	大	辛未	丙申	九月	
九	小	壬申	丙寅	十月	
十	大	癸酉	乙未	十一月	十一月戊午廿四日
十一	小	甲戌	乙丑	十二月	己巳有日無月十一月五日也
十二	大	乙亥	甲午	次年正月	

定八己亥年

月	大小	月建	朔	時暦	注
正	小	丙子	甲子	二月	冬至乙亥十二日 二月己丑二十六日 辛卯二十八日
二	大	丁丑	癸巳	閏二月	
三	小	戊寅	癸亥		
四	大	己卯	壬辰		
五	大	庚辰	壬戌		
六	小	辛巳	壬辰		
七	大	壬午	辛酉		七月戊辰八日
八	小	癸未	辛卯		
九	大	甲申	庚申		
十	小	乙酉	庚寅		十月辛卯二日 壬辰三日 癸巳四日
十一	大	丙戌	己未		
十二	小	丁亥	己丑		

定九年庚子

月	大小	月建	朔	注
正	大	戊子	戊午	冬至庚辰廿三日
二	小	己丑	戊子	
三	大	庚寅	丁巳	
四	小	辛卯	丁亥	四月戊申二十二日
五	大	壬辰	丙辰	
六	小	癸巳	丙戌	
七	大	甲午	乙卯	
八	小	乙未	乙酉	
九	大	丙申	甲寅	
十	小	丁酉	甲寅	
十一	大	戊戌	癸未	
十二	小	己亥	癸丑	
閏	大		甲申	

定十年辛丑

月	大小	月建	朔	注
正	大	庚子	壬午	冬至乙酉四日
二	小	辛丑	壬子	
三	大	壬寅	辛巳	
四	小	癸卯	辛亥	
五	大	甲辰	庚辰	
六	小	乙巳	庚戌	
七	大	丙午	己卯	
八	小	丁未	己酉	
九	大	戊申	戊寅	
十	小	己酉	戊申	
十一	大	庚戌	丁丑	
十二	大	辛亥	丁未	

定十一年壬寅

月	大小	月建	朔	注
正	小	壬子	丁丑	冬至辛卯十五日
二	大	癸丑	丙午	
三	小	甲寅	丙子	
四	大	乙卯	乙巳	
五	小	丙辰	乙亥	
六	大	丁巳	甲辰	
七	小	戊午	甲戌	
八	大	己未	癸卯	
九	小	庚申	癸酉	
十	大	辛酉	壬寅	
十一	小	壬戌	壬申	
十二	大	癸亥	辛丑	

定十二年癸卯

月	大小	月建	朔	注
正	小	甲子	辛未	冬至丙申廿六日
二	大	乙丑	庚子	
三	小	丙寅	庚午	
四	大	丁卯	己亥	
五	大	戊辰	己巳	
六	大	己巳	戊辰	七月
七	小	庚午	戊戌	八月
八	大	辛未	丁卯	九月
九	小	壬申	丁酉	十月　十月癸亥二十七日
十	大	癸酉	丙寅	十一月　十一月丙寅朔日食
十一	小	甲戌	丙申	閏月　閏小己亥　時暦六月
十二	大	乙亥	乙丑	

定十三年甲辰年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	丙子	乙未	冬至辛丑七日
二	大	丁丑	甲子	
三	小	戊寅	甲午	
四	大	己卯	癸亥	
五	小	庚辰	癸巳	
六	大	辛巳	壬戌	
七	小	壬午	壬辰	
八	大	癸未	辛酉	
九	大	甲申	辛卯	
十	小	乙酉	辛酉	
十一	大	丙戌	庚寅	十一月丁未十八日
十二	小	丁亥	庚申	十二辛未十二日

定十四年乙巳年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	戊子	己丑	冬至丙午十八日
二	小	己丑	己未	二月辛巳二十三日
三	大	庚寅	戊子	
四	小	辛卯	戊午	
五	大	壬辰	丁亥	
六	小	癸巳	丁巳	
七	大	甲午	丙戌	
八	小	乙未	丙辰	
九	大	丙申	乙酉	
十	小	丁酉	乙卯	
十一	大	戊戌	甲申	
十二	大	己亥	甲寅	

定十五年丙午年

月	大小	月建	朔	附記
正	小	庚子	甲申	冬至壬子廿九日 時曆前年閏十二月
二	大	辛丑	癸丑	閏小癸未一時皆二月 正月 二月辛丑十九日
三	大	壬寅	壬子	
四	小	癸卯	壬午	
五	大	甲辰	辛亥	五月辛亥一日 壬申二十二日
六	小	乙巳	辛巳	
七	大	丙午	庚戌	七月壬申二十三日
八	小	丁未	庚辰	八月庚辰朔日食
九	大	戊申	己酉	九月丁巳九日 戊午十日 辛巳有日無月此月三日也
十	小	己酉	己卯	
十一	大	庚戌	戊申	
十二	小	辛亥	戊寅	

哀公元年丁未年

月	大小	月建	朔	附記
正	大	壬子	丁未	冬至丁巳十一日
二	小	癸丑	丁丑	
三	大	甲寅	丙午	
四	大	乙卯	丙子	四月辛巳六日
五	小	丙辰	丙午	
六	大	丁巳	乙亥	
七	小	戊午	乙巳	
八	大	己未	甲戌	
九	小	庚申	甲辰	
十	大	辛酉	癸酉	
十一	小	壬戌	癸卯	
十二	大	癸亥	壬申	

哀二戊申年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	甲子	壬寅	冬至壬戌廿一日
二	大	乙丑	辛未	二月癸巳二十三日
三	小	丙寅	辛丑	
四	大	丁卯	庚午	四月丙子七日
五	小	戊辰	庚子	
六	大	己巳	己巳	六月乙酉十七日
七	大	庚午	己亥	
八	小	辛未	己巳	八月甲戌六日
九	大	壬申	戊戌	
十	小	癸酉	戊辰	
十一	大	甲戌	丁酉	閏小丁卯
十二	大	乙亥	丙申	

哀三己酉年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	丙子	丙寅	冬至丁卯二日
二	大	丁丑	乙未	
三	小	戊寅	乙丑	
四	大	己卯	甲午	四月甲午一日
五	小	庚辰	甲子	五月辛卯二十八日
六	大	辛巳	癸巳	六月癸卯十一日
七	小	壬午	癸亥	七月丙子十四日
八	大	癸未	壬辰	
九	小	甲申	壬戌	
十	大	乙酉	辛卯	十月癸卯十三日 癸丑二十三日
十一	大	丙戌	辛酉	
十二	小	丁亥	辛卯	

哀四庚戌年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	戊子	庚申	冬至癸酉十四日
二	小	己丑	庚寅	二月庚戌二十一日
三	大	庚寅	己未	
四	小	辛卯	己丑	
五	大	壬辰	戊午	
六	小	癸巳	戊子	六月辛丑十四日
七	大	甲午	丁巳	七月庚午十四日
八	小	乙未	丁亥	八月甲寅二十八日
九	大	丙申	丙辰	
十	小	丁酉	丙戌	
十一	大	戊戌	乙卯	
十二	小	己亥	乙酉	

哀五辛亥年

月	大小	月建	朔	時曆	備考
正	大	庚子	甲寅		冬至戊寅廿五日
二	小	辛丑	甲申		
三	大	壬寅	癸丑		
四	大	癸卯	癸未		
五	小	甲辰	癸丑		
六	大	乙巳	壬午		
七	小	丙午	壬子		閏大辛巳　時曆八月
八	小	丁未	辛亥	九月	九月癸酉二十三日
九	大	戊申	庚辰	十月	
十	小	己酉	庚戌	閏月	
十一	大	庚戌	己卯		
十二	小	辛亥	己酉		

哀六壬子年

月	大小	月建	朔	注
正	大	壬子	戊寅	冬至癸未六日
二	小	癸丑	戊申	
	大	甲寅	丁丑	
四	小	乙卯	丁未	
五	大	丙辰	丙子	
六	大	丁巳	丙午	六月戊辰二十三日
七	小	戊午	丙子	七月庚寅十五日
八	大	己未	乙巳	
九	小	庚申	乙亥	
十	大	辛酉	甲辰	十月丁卯二十四日
十一	小	壬戌	甲戌	
十二	大	癸亥	癸卯	

哀七癸丑年

月	大小	月建	朔	注
正	小	甲子	癸酉	冬至戊子十六日
二	大	乙丑	壬寅	
三	小	丙寅	壬申	
四	大	丁卯	辛丑	
五	小	戊辰	辛未	
六	大	己巳	庚子	
七	小	庚午	庚午	
八	大	辛未	己亥	八月己酉十一日
九	小	壬申	己巳	
十	大	癸酉	戊戌	
十一	大	甲戌	戊辰	
十二	小	乙亥	戊戌	

哀八甲寅年

月	大小	朔	日	注
正		丙子	丁卯	冬至甲午廿八日
二	小	丁丑	丁酉	
三	大	戊寅	丙寅	
四	大	己卯	乙丑	
五	小	庚辰	乙未	
六	大	辛巳	甲子	
閏	小		丙申	
七	小	壬午	甲午	
八	大	癸未	癸亥	
九	小	甲申	癸巳	
十	大	乙酉	壬戌	
十一	小	丙戌	壬辰	
十二	大	丁亥	辛酉	十二月癸亥三日

哀九乙卯年

月	大小	朔	日	注
正	大	戊子	辛卯	冬至己亥九日
二	小	己丑	辛酉	二月甲戌十四日
三	大	庚寅	庚寅	
四	小	辛卯	庚申	
五	大	壬辰	己丑	
六	小	癸巳	己未	
七	大	甲午	戊子	
八	小	乙未	戊午	
九	大	丙申	丁亥	
十	小	丁酉	丁巳	
十一	大	戊戌	丙戌	
十二	小	己亥	丙辰	

哀十丙辰年

月	大小	月建	朔	注
正	大	庚子	乙酉	冬至甲辰二十日
二	小	辛丑	乙卯	
三	大	壬寅	甲申	三月戊戌十五日
	小	癸卯	甲寅	
五	大	甲辰	癸未	
六	大	乙巳	癸丑	
七	小	丙午	癸未	
八	大	丁未	壬子	
九	小	戊申	壬午	
十	大	己酉	辛亥	
十一	小	庚戌	辛巳	
十二	大	辛亥	庚戌	閏小庚辰

哀十一丁巳年

月	大小	月建	朔	注
正	大	壬子	己酉	朔旦冬至 庚午部 第二章
二	小	癸丑	己卯	
三	大	甲寅	戊申	
四	小	乙卯	戊寅	
五	大	丙辰	丁未	五月壬申二十六日 甲戌二十八日
六	小	丁巳	丁丑	
七	大	戊午	丙午	七月辛酉十六日
八	小	己未	丙子	
九	大	庚申	乙巳	
十	大	辛酉	乙亥	
十一	小	壬戌	乙巳	
十二	大	癸亥	甲戌	

哀十二年戊午

月	大小	月建	朔	備考
正	小	甲子	甲辰	冬至乙卯十二日
二	大	乙丑	癸酉	
三	小	丙寅	癸卯	
四	大	丁卯	壬申	
五	小	戊辰	壬寅	五月甲辰三日
六	大	己巳	辛未	
七	小	庚午	辛丑	
八	大	辛未	庚午	
九	小	壬申	庚子	
十	大	癸酉	己巳	
十一	小	甲戌	己亥	
十二	大	乙亥	戊辰	十二月丙申廿九日

哀十三年己未

月	大小	月建	朔	備考
正	大	丙子	戊戌	冬至庚申廿三日
二	小	丁丑	戊辰	
三	大	戊寅	丁酉	
四	小	己卯	丁卯	
五	大	庚辰	丙申	
六	小	辛巳	丙寅	六月丙子十一日 乙酉二十日 丙戌二十一日 丁亥二十二日
七	大	壬午	乙未	七月辛丑七日
八	小	癸未	乙丑	
九	大	甲申	甲午	閏小甲子　時曆十月
十	大	乙酉	癸巳	時曆十一月
十一	小	丙戌	癸亥	十二月　十二月螽杜云此年猶未置閏故十二月螽也
十二	大	丁亥	壬辰	次年正月

哀十四年庚申年

月	大小	月建	朔	注
正	小	戊子	壬戌	冬至乙丑四日　時曆二月
二	大	己丑	辛卯	三月
三	小	庚寅	辛酉	閏三月
四	大	辛卯	庚寅	四月庚戌二十一日
五	大	壬辰	庚申	五月庚申朔日食壬申十三日　庚辰二十一日
六	小	癸巳	庚寅	六月甲午五日
七	大	甲午	己未	
八	小	乙未	己丑	八月辛丑十三日
九	大	丙申	戊午	
十	小	丁酉	戊子	
十一	大	戊戌	丁巳	
十二	小	己亥	丁亥	

哀十五年辛酉年

月	大小	月建	朔	注
正	大	庚子	丙辰	冬至庚午十五日
二	小	辛丑	丙戌	
三	大	壬寅	乙卯	
四	小	癸卯	乙酉	
五	大	甲辰	甲寅	
六	小	乙巳	甲申	
七	大	丙午	癸丑	
八	大	丁未	癸未	
九	小	戊申	癸丑	
十	大	己酉	壬午	
十一	小	庚戌	壬子	
十二	大	辛亥	辛巳	

哀十六年壬戌

月	大小	月建	朔	備考
正	小	壬子	辛亥	冬至丙子廿六日　正月己卯二十九日
二	大	癸丑	庚辰	
三	小	甲寅	庚戌	
四	大	乙卯	己卯	四月己丑十一日
五	小	丙辰	己酉	閏大戊寅
六	小	丁巳	戊申	
七	大	戊午	丁丑	
八	小	己未	丁未	
九	大	庚申	丙子	
十	小	辛酉	丙午	
十一	大	壬戌	乙亥	
十二	大	癸亥	乙巳	

哀十七年癸亥

月	大小	月建	朔	備考
正	小	甲子	乙亥	冬至辛巳七日
二	大	乙丑	甲辰	
三	小	丙寅	甲戌	
四	大	丁卯	癸卯	
五	小	戊辰	癸酉	
六	大	己巳	壬寅	
七	小	庚午	壬申	七月己卯八日
八	大	辛未	辛丑	
九	小	壬申	辛未	
十	大	癸酉	庚子	
十一	小	甲戌	庚午	十一月辛巳十二日
十二	大	乙亥	己亥	

哀十八年甲子年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	丙子	己巳	冬至丙戌十八日
二	大	丁丑	戊戌	
三	小	戊寅	戊辰	
四	大	己卯	丁酉	
五	大	庚辰	丁卯	
六	小	辛巳	丁酉	
七	大	壬午	丙寅	
八	小	癸未	丙申	
九	大	甲申	乙丑	
十	小	乙酉	乙未	
十一	大	丙戌	甲子	
十二	小	丁亥	甲午	

哀十九年乙丑年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	戊子	癸亥	冬至辛卯廿九日
二	小	己丑	癸巳	
三	小	庚寅	壬辰	
四	大	辛卯	辛酉	
五	小	壬辰	辛卯	
六	大	癸巳	庚申	
七	大	甲午	庚寅	
八	小	乙未	庚申	閏大壬戌
九	大	丙申	己丑	
十	小	丁酉	己未	
十一	大	戊戌	戊子	
十二	小	己亥	戊午	

哀二十丙寅年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	庚子	丁亥	冬至丁酉十一日
二	小	辛丑	丁巳	
三	大	壬寅	丙戌	
四	小	癸卯	丙辰	
五	大	甲辰	乙酉	
六	小	乙巳	乙卯	
七	大	丙午	甲申	
八	小	丁未	甲寅	
九	大	戊申	癸未	
十	小	己酉	癸丑	
十一	大	庚戌	壬午	
十二	大	辛亥	壬子	

哀廿一丁卯年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	壬子	壬午	冬至壬寅廿一日
二	大	癸丑	辛亥	
三	小	甲寅	辛巳	
四	大	乙卯	庚戌	
五	小	丙辰	庚辰	
六	大	丁巳	己酉	
七	小	戊午	己卯	
八	大	己未	戊申	
九	小	庚申	戊寅	
十	大	辛酉	丁未	
十一	小	壬戌	丁丑	閏大丙午
十二	小	癸亥	丙子	

哀廿二戊辰年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	甲子	乙巳	冬至丁未三日
二	大	乙丑	乙亥	
三	小	丙寅	乙巳	
四	大	丁卯	甲戌	
五	小	戊辰	甲辰	
六	大	己巳	癸酉	
七	小	庚午	癸卯	
八	大	辛未	壬申	
九	小	壬申	壬寅	
十	大	癸酉	辛未	
十一	小	甲戌	辛丑	十一月丁卯廿八日
十二	大	乙亥	庚午	

哀廿三己巳年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	丙子	庚子	冬至壬子十三日
二	大	丁丑	己巳	
三	小	戊寅	己亥	
四	大	己卯	戊辰	
五	小	庚辰	戊戌	
六	大	辛巳	丁卯	六月壬辰二十六日
七	大	壬午	丁酉	
八	小	癸未	丁卯	
九	大	甲申	丙申	
十	小	乙酉	丙寅	
十一	大	丙戌	乙未	
十二	小	丁亥	乙丑	

哀廿四庚午年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	戊子	甲午	冬至戊午廿五日
二	小	己丑	甲子	
三	大	庚寅	癸巳	
四	小	辛卯	癸亥	
五	大	壬辰	壬辰	
六	小	癸巳	壬戌	
七	大	甲午	辛卯	閏小辛酉　傳有二閏月公如レ越之文一此月也
八	大	乙未	庚寅	
九	小	丙申	庚申	
十	大	丁酉	己丑	
十一	大	戊戌	己未	
十二	小	己亥	己丑	

哀廿五辛未年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	庚子	戊午	冬至癸亥六日
二	小	辛丑	戊子	
三	大	壬寅	丁巳	
四	小	癸卯	丁亥	
五	大	甲辰	丙辰	五月庚辰二十五日
六	小	乙巳	丙戌	
七	大	丙午	乙卯	
八	小	丁未	乙酉	
九	大	戊申	甲寅	
十	小	己酉	甲申	
十一	大	庚戌	癸丑	
十二	小	辛亥	癸未	

哀廿六壬申年

月	大小	月建	朔	備考
正	大	壬子	壬子	冬至戊辰十七日
二	大	癸丑	壬午	
三	小	甲寅	壬子	
四	大	乙卯	辛巳	
五	大	丙辰	辛亥	
六	大	丁巳	庚辰	
七	小	戊午	庚戌	
八	大	己未	己卯	
九	小	庚申	己酉	
十	大	辛酉	戊寅	十月辛巳四日
十一	小	壬戌	戊申	
十二	大	癸亥	丁丑	

哀廿七癸酉年

月	大小	月建	朔	備考
正	小	甲子	丁未	冬至癸酉廿七日
二	大	乙丑	丙子	
三	小	丙寅	丙午	閏大乙亥 時曆四月 / 四月己亥二十五日
四	小	丁卯	乙巳	五月
五	大	戊辰	甲戌	六月
六	大	己巳	甲辰	七月
七	小	庚午	甲戌	時曆八月 / 八月甲戌一日
八	大	辛未	癸卯	閏八月乎
九	小	壬申	癸酉	
十	大	癸酉	壬寅	
十一	小	甲戌	壬申	春秋左氏傳終于此年
十二	大	乙亥	辛丑	

前漢歴志辨

男 平田鐵胤 續
大壑 平篤胤撰述 孫 同 延胤
門人 碧川好尙 攷

前漢書の律歴志なる三統歴。及び夏殷周三代の歴年を校せる説等は。甚じき妄説ども多かるを。彼邦の世々にも。其の妄説を悟り得たる人なく。世紀。通鑑。綱鑑などを撰べる倫さへに。皆其の説を信じて。然る史籍どもに。其の歴年を用ひしかば。其遂に此方に波及して。皇朝の紀年書類にも。其の謬を承たる事の何くれと見ゆるを。既にしか心著ては。徒に見過し得ざる。己が例の性にし有れば。後生のために。其説の本を正し辨へむと欲て。此擧には及べるなり。（往に今世皇國古學の長老と覺ゆる人の、一向心なるが、予が近く漢籍どもの論を専とするを、常快からず思ふ由にて、一日是の歴志の妄説多き由を語れば、詰りて云ひけらく、漢史どもの歴年によし然る妄説ありとも、其を論辨せむこと此方の學問には、然しも用なき徒事なりと云へるに、己たゞ微笑みて、深く惟ふ旨の有ればこそと答へて在けるを、側に聞居たる教子どもの、何なる旨ぞと問へるにも默止在けるは此故なりけり）さて此歴志の妄を辨ふると爲ては。玆にまづ記すべき事あり。其は東晉の葛洪字稚川の。西京雜記自序に。洪家世有劉子駿。漢書一百卷。無首尾題目。但以甲乙丙丁紀其卷數。先公傳云。歆欲撰漢書編錄漢事。未得締構而亡。故書無宗本。止雜記而已。失前後之次。無事類之辨。後好事者以意次第之。始甲終癸爲十秩。秩十卷合爲百卷。（劉子駿とは、漢の劉向が子の劉歆字子駿にて、王莽に諂ひ事へし姦儒なり、先公とは稚川翁の父葛悌を云ふ、世々丹陽句容に家して、最も豪族なるが、また代々純儒にして、稚川の祖父葛系、及び父葛悌ともに呉に仕へて、高官に至れる人々なり、委くは予が殊に著せる葛仙翁傳を見て知るべし）洪家具有其書。試以此記考校班固所作。殆是全取劉書。有小異同耳。幷固所不取。不過二萬許言。今鈔出爲二卷。名曰西京雜記。以裨漢書之闕。後洪家

遭火。書籍都盡。此兩卷在洪巾箱中、常以自隨。故得猶在。劉歆所記世人希有、縱復有者多不備足。見其首尾參錯。前後倒亂。亦不知何書。罕能全錄。恐年代稍久。歆所撰遂沒。幷洪家。此書二卷。不知出所。故序之云爾と見えたり。〔抱經堂叢書中に收たる此の記の緣起に、或以爲晉葛洪著、或以爲梁吳均僞撰、余則以此漢人所記無疑也、說苑新序、其書皆在劉向前、向校而傳之、後人因名一書爲劉向著、今此書之果出於劉歆、別無可攷、卽當以葛洪之言爲據、洪非不能自著書者、何必假名於歆、書中稱、成帝好蹴踘、群臣以爲非至尊所宜、家君作彈棊以獻、此歆謂向爲家君也、洪奈何以一小書之故至不憚父人之父求以取信於世也邪、若吳均者亦通人、其著書甚多、皆見梁書本傳、知其亦不屑託名於劉歆、且其文卽俊拔有古氣、要未可與漢西京埒、則其不出於均文甚明、隋書經籍志、載此書於舊事篇、不著姓名、新舊唐書始題葛洪、且入之地理類、似全未寓目也、夫冠以葛洪、以洪鈔而傳之、猶說苑新序之稱劉向、固亦無害、其文則非洪所自撰、凡虛文可以僞爲實事、難以空造、如梁王之集遊士爲賦、廣川王之發家藏、所得皆虛邪、至陳振孫疑向歆父子、不聞作史、此又不然、歷朝撰造裒然成編、所云百卷、殊前史官之舊、向傳之歆、々欲編錄、而未成、其見於洪之序者如此本、不謂其父子皆嘗作史也、洪以爲本之劉歆、則吾亦從而劉歆之耳と云へるは明辨にて、實に稚川翁の知音と云ふべし、〕然れば漢書は。班固が竊に人の美を取りて我が有と爲たる物なるが。中に劉歆死後の事の僅に有ると。文章の小異同有りしのみ。彼と其の女弟謂ゆる曹大家が書加たるにて。其の全書は劉歆が撰なりけり。然るに其の劉歆が撰また史記に出たる事の限りは、彼を取りて文を改め事を加へて。我が物と爲たる書なる事は。史漢の二書を並べ見む人は。誰も忽に知べき事なるが。中に曆法及び曆年の說は。史記の故實を甚く擾亂せる。彼が妄說にて。當昔より今に至り已に二千年間の後生を誑惑せる事等なり。故今その妄說の條々を抄錄して本文となし。

史記に徵して辨論すること左の如し。（但し後漢の歷志なる安帝が延光二年の尚書郎張衡周興等が議中に、劉向五紀論、推步行度、當時比諸術爲近、然猶未稽於古、及向子歆欲以合春秋、橫斷年數損夏益周、考之表紀差謬數百と云ひ、注に引たる、宋の世の治曆何承天が言に、劉歆三統法、尤復疏濶、方於四分、六千餘年、又益一日、揚雄心惑其說、採爲太玄、班固謂之最密、著漢志、二三君子、幾乎不知而妄言者歟と有るは、早く予が意を得たる說の如く聞ゆれども、其の精論は今傳はらず。）

【一】至武帝元封七年。漢興百二歲矣。太中大夫公孫卿。壺遂太史令司馬遷等言。歷紀壞廢宜改正朔。是時御史大夫兒寬。明經術。上廼詔寬曰。與博士共議。今宜何以爲正朔。服色何上。寬與博士等議皆曰。帝王必改正朔。易服色。所以明受命於天也。創業變改制不相復。推傳序文則今夏時也。臣等聞學褊陋不能明。陛下躬聖發憤昭配天地。臣愚以爲三統之制後聖復前聖者二代在前也。今二代之統絕而不序矣。唯陛下發聖德。宣考天地四時之極。則順陰陽以定大明之制。爲萬世則。

史記の歷書には此條なく。唯に至今上卽位。招致方士唐都。分其天部。而巴落下閎。運算轉歷。然後日辰之度與夏正同。乃改元と記して。下の詔文を擧たり。此は甚だ略に過たれど。其の說みな當時の正實なるが。今擧る歷志の文は精けれど。此條まづ其の僞說を胚胎せる始なり。然るは卿遂遷らが上言のこと。史記には漏たれど。此は然も有べき事なるが。是の時御史大夫兒寬に博士等と共に議せよと命せしに。相議して曰へる語中に。三統之制。後聖復前聖者。二代在前也。今二代之統。絕而不序矣。唯陛下發聖德云々。爲萬世則と有るは。此の時造れる太初歷を。劉

歆已が自作の三統曆と。同曆に混らさむと欲して。兒寬が當時經術に明なるよし聞ゆるを盾に取り。時の博士等も。皆已に三統の曆法を立べき由を上言せりと。先此に根據を設けて作れる文なり。然れば此條は。是時と云ふより以下。二百六十九字みな僞說と知るべし。（好尙云師翁の舊く記されたる草稿の中に。三統。三正。三元といふ事の起原を辨へ措かれたる物有り。因に此所に附錄して視す事左の如し。

さて曆法に三統とも三正とも三元とも稱する事あるは。天地人の三皇より初まりて。此の律法より起れる事なり。其は春秋感精符に。十一月建子。天始施之端也。謂之天統。十二月建丑。地始化之端也。謂之地統。正月建寅。人始生之端也。謂之人統。此三正律者。以前三皇爲正。謂天皇地皇人皇。以天地人爲法。周而復始。其歲首所書乃因以爲名と有るにて所知たり。（此の文は五行大義古微書を始め、諸書に引たるを校し、今用なき文をば、皆除きて引たるなり。）此は天地初發の時より既に三統の差別ありし事の傳へにて。斗柄の子に建す十一月冬至の節は。天始めて元氣を施せる端なりし故に。天皇氏は此の節を歲首と爲し。斗柄の丑に建す十二月大寒の節は。地始めて化生せる端なりし故に。地皇氏は此の節を歲首となし。斗柄寅に建す正月立春の節は。人始めて生じたる端なりし故に。人皇氏は此節を歲首に立たる義にて。是ぞ三統の名の起れる所以なる。（禮記の疏に、建子之月爲正者謂之天統、以天之昜氣始生于下、物得昜氣微稍動變、故爲天統、建丑之月爲地統者、以天氣始動物未出、唯在地中含養萌芽、故爲地統、建寅之月爲人統者、其物出于地人功當須修理、故謂之人統、統者本也、謂天地人之本也とも云へれど、此は末義なり、天地人は子丑寅に開け始まれりと言ふ語の古く聞ゆるを以ても、今已が說く旨なる事をし辨ふべし。）斯て此の後の三皇。各その一正を取りて。歲首に立たりしを。謂ゆる三代に。また各々其の一を取りて歲首を立てたり。其は禮緯稽命徵に。三皇三正伏羲建寅。神農建丑。黃帝建子。至禹建寅宗伏羲。商建丑宗神農。周建子宗黃

帝。所謂正朔三而改也。と有るにて知るべし。（五行大義に、此の三正の事を記して、凡三元者、周以建子月為天正、故以黃鐘之管配之、殷以建丑月為地正、故以林鐘之管配之、夏以建寅月為人正、故以大簇之管配之と云へるは實に然る說なれど、其の餘は後世の附會多ければ、擇びて取るべし、）また此を三元とも云へること。舊くは樂緯動聲儀に。作樂制禮時五音始于上元戊辰夜半。冬至北方子。（宋均云、戊辰土位、土為宮、宮為君、故作樂尙之以為始也、夜半子以天時之始也、）中元者人氣也。下元者地氣也と見え。五行大義に。漢書律曆志云。三元者。天施地化人事之紀也。黃鐘為天元律長九寸。林鐘為地元。律長六寸。大簇為人元。律長八寸。此象八卦宓戲氏之所以順天地通神明類萬物之情也。（この漢書の文は元より畧文なるが、今本には元字みな統とあり、異本と見えたり、）孔子云。夏正得天。此謂得天道四時之氣應八節生殺之期也。故云行夏時。秦以建亥之月為歲首。漢初因秦正朔。自魏已後。自用夏正至今無改。以得其天氣也と云へるが如し。（乾鑿度にも、孔子曰、夏之正也、此四時之正不易之道也、故三王之郊一用夏正、所以順四時法天地之道也と見えたり、夏正は卽伏羲氏の正、伏羲氏の正は卽人皇氏の正なり、五行大義に、なほ九宮太一、遁甲、元辰などみな三元ありて、各別なる由を記せる中に、元辰の三元を、起甲子初為天元盡六甲、次甲子為地元、又次甲子為人元と云へり、後世に謂ゆる、上元中元下元の三元は卽ち是なるか、元辰とは同書の別處に引きて、孔子元辰經と云へる書なるべし、）

【二】於是廼詔御史曰。廼者有司言歷未定、廣延宣問以考星度。未能讎也。蓋聞。古者黃帝合而不死。名察發斂。定淸濁起五部。建氣物分數。然則上矣。書缺樂弛朕甚難之。依違以惟未能修明。其以七年為太初元年。

好尙云此條は謂ゆる律歷志の文なるが。悉く注

解を闕れたり。然るを舊稿に。本文は少か異なれど。註釋をも記し措かれたるを。其儘此所に附錄せり。下是に效ふべし。於是廼詔御史曰。乃者有司言星度之未定也。廣延宣問以理星度。未能詹也。蓋聞昔者黃帝合而不死。名察度驗。定清濁。起五部。建氣物分數。然蓋尙矣。書缺樂弛朕甚閔焉。朕唯未能循明也。紬績日分。率應水德之勝。今日順夏正。其以七年爲元年。

此條詔御史曰と云ふより。順夏正と云ふまでは歷書の文。首尾の十字は歷志の文なり。（但し詔御史曰云々は、歷書も同文なるが、小異あり、文また穩ならねば、歷書の古きを取れるなり、）〇乃者有司言云々は。前に三人が上言せる趣なり。（詹は注家の說に、一作售也漢志作讎々即售也、韋昭云、讎比校也、鄭德云、相應爲讎也、と云へり、）〇蓋聞と云ふより以下黃帝の故事は。前に公孫卿に聞きて。武帝が常に慕ひ羨む所なる故に。言出たるなり。（是の黃帝の故事は、第□條にも、封禪書と郊祀志とを引きて、委く說くを見るべし、）〇黃帝合而不死云々は諸注家の言に。黃帝聖德。與神靈合契。升龍登仙。故曰合而不死。名節會。察寒暑。致啓閉分至。定清濁。起五部。清濁律聲之清濁也。五部木火土金水也。建氣物分數。皆敘歷之意也と云へり。〇然蓋尙矣云々は黃帝の歷法を調へ。清濁をも定めしは、然も尙しき事なる故に。書缺け樂弛たり。其をいたく閔ひ惟ふに。朕いまだ循明むること能はずとなり。〇紬績日分云々とは。注家の言に。紬績者女工紬緝之意。以言造歷算運者。猶若女工緝而織之也。應水德之勝者。蓋以爲應土德。土勝水也と云へり。然れば此もかの終始至德の日分を紬績して。五運を推算ふるに。我が漢は。秦の水德に勝つ。土德運に應ると云へる意と通えたり。（然れど終始五德傳の本書、世に傳はらざれば、委くは知がたし、）〇今日順夏正は。今より建亥之月を歲首とする事を停めて。夏正建寅之月を歲首に定めむとなり。（本書に夏正を夏至と有るは、誤寫なれば改めつ、索隱に、謂夏至冬至也と云へれど、通え難き說なり、）さて本書こゝに。

黃鐘爲レ宮。林鐘爲レ徵云々と謂へる。五十一字の律說あれど。其は律書の文の錯亂と見ゆれば取らず。（漢志に其の文なきは、錯亂を知りて删れるなるべし。）〔其以二七年一爲二元年一〕とは。元封七年を改めて元年と爲むと謂ふ由なり。

【三】遂詔二卿遂遷一與二侍郎尊大典星射姓等一議造二漢歷一。迺定二東西一立二晷儀一下二漏刻一。以追二二十八宿一相二距於四方一。擧終以定二朔晦一。分至。躔離弦望。迺以二前歷上元泰初四千六百一十七歲一至二於元封七年一復得二閼逢攝提格之歲一。中冬十一月甲子朔旦冬至日月在二建星一太歲在レ子。已得二太初本星度新正一。姓等奏。不レ能レ爲レ算。願募二治歷者一。更造二密度一各自增減以造二漢太初歷一。迺選二治歷鄧平一。及長樂司馬可。酒泉侯宜君。侍郎尊。及與二民閒治歷者一。凡二十餘人。方士唐都巴郡落下閎與焉。都分二天部一而閎運レ算轉レ歷。其法以二律起一歷曰。律容二一龠一積八十一寸則一日之分也。與レ長相終。律長九寸。百七十一分。而終復而得二甲子一。夫律陰陽九六爻象所二從出一也。故黃鐘紀二元氣一之謂レ律。律法也。莫レ不レ取レ法焉。與二鄧平所治同一。於レ是皆觀二新星度日月行一。更以算推如二閎平法一。法。一月之日二十九日。八十一分日之四十三。

此條より已下本文は、悉漢書の歷志を採れり（こ好尙云此條都て註解を闕れたれど、例の舊稿の中に少記し措かれたるもの有り。今また此所に附錄しぬ。

姓等奏云々は。聞えたるが如し。注に及ばず。（但し初めに前歷上元云々と云へる數を出して、射姓等が言に託せるは、既にまづ其の端緒を兒寛等が言に託せしを此に應ぜしめ、然て遂に三統歷に落著せしむる結構の文なるを、班固そを僞說ともえ辨へず、取りて我が物とせし故に、かく索隱の

説なくては、班固が僞説と云ふより外なし、）〇廼選治歴鄧平及與云々は。元より史記には傳なき事にて。下に引出る本志の文に據れば。謂ゆる三統の八十一分律歴は。是の時この鄧平と云へるが作れる趣なり。（なほ下に論ふを見るべし、）〇方士唐都巴郡落下閎云々は。師古注に。姓唐。名都。方術之士也。姓落下。名閎。巴郡人也と有れど。史記索隠には。按耆舊傳云。閎字長公。明曉天文。隱於落下。武帝徵待詔太史。於地中轉渾天。改顓頊歴。作太初歴。拜侍中不受也とあり。（分天部とは、謂分部二十八宿爲距度也と史記の注に云へり、）

【四】廼詔遷用鄧平所造八十一分律歴。罷廢尤疏遠者十七家。宦者淳于陵渠。復覆太初歴。晦朔弦望皆最密。日月如合璧。五星如連珠。陵渠奏狀。遂用鄧平歴。以平爲大史丞。至孝成世。劉向總六歴。列是非。作五紀論。向子歆究其微眇。作三統歴及譜。以說春秋。推法密要。故述焉。夫歴春秋者天時也。列人事。而因以天時。傳曰民受天地之中以生。所謂命也。

好尙云此條も。都て註解を缺れたり。下本文のみ出せる條々は。皆是に效ふべし。

【五】太昊帝易曰。炮犧氏之王天下也。言炮犧繼天而王。爲百王先首。德始於木。故爲帝太昊。天下號曰炮犧氏。炎帝易曰炮犧氏沒神農氏作。以火承木。故爲炎帝。天下號曰神農氏。黃帝易曰神農氏沒黃帝氏作。火生土。故爲土德。天下號曰軒轅氏。

此三氏は。漢以來の儒者の謂ゆる三皇の一說なること。太古傳に論ふ如くにて。此所には殊に辨ふべき事なし。但し易曰とは。周易に添たる謂ゆる十翼中の繫辭傳の文なり。抑々彼の傳を。史記には易大傳とも云ひて。易の末書にこそ有れ。易とは稱ふべきに非ざること。既にも論へる如くなる

物をや。(太抵かゝる亂名は、劉歆父子よりぞ始まりける。)

【六】少昊帝考德曰。少昊曰清。清者黃帝之子清陽也。是其子孫、名摯。立土生金。故爲金德。天下號曰金天氏。顓頊帝春秋外傳曰。少昊之衰。九黎亂德顓頊受之。昌意之子也。金生水故爲水德。天下號曰高陽氏。帝嚳春秋外傳曰。顓頊之所建帝嚳受之。清陽玄囂之孫也。水生木故爲木德。天下號曰高辛氏。

考德は顏師古註に。考五帝德之書也とあり。劉歆が文意その考德に。少昊曰清と有れど然らず。清とは黃帝の子清陽の事にて。少昊は其の子孫にして。名を摯と云へりと云る義にて。此は誠に當れる說なれば用ふべし。(そは羅泌が路史の餘論に委く辯じたる說あり、披き見て知るべし。)さて春秋外傳とは國語を云ふ。

【七】唐帝々系曰。帝嚳四妃陳豐生帝堯。高辛氏衰天下歸之。木生火故爲火德。天下號曰陶唐氏。讓天下於虞。卽位七十載。虞帝々系曰。顓頊生窮蟬。五世而生瞽叟。瞽叟生帝舜。堯嬗以天下。火生土。故爲土德。天下號曰有虞氏。讓天下於禹。卽位五十載。

帝系とは當昔有りし。王者の系譜を記せる書とは聞ゆれど。其の書後に傳はらず。(五行大義に引たる、帝系譜といふ物と同書なるか詳ならず。)さて上少昊より舜に至る五氏は。漢以來の儒者の謂ゆる五帝なる事も。太古傳に委曲に論へり。堯の位に卽るほどを。七十載と云るは違へり。其は竹書紀年に據るに。堯は丙子歲より世に卽始めて。百十年に當る乙卯歲に殂し。其より三年ありて。己未歲に舜始めて世に卽き。五十年と云ふ戊申歲に殂せるが。閒三年ありて。壬子歲に禹王の卽位にて有けり。

【八】伯禹帝系曰。顓頊五世而生鯀。鯀生禹。虞舜嬗以天下。土生金。故爲金德。天下號曰夏后氏。繼世十七王。四百三十二歲。

夏后氏繼世十七王は。史記夏本紀及び三代世表を按ずるに。禹。啓。太康。仲康。相。少康。杼。槐。芒。泄。不降。扃。廑。孔甲。皐。發。履癸と相繼て。竹書も同じ世數なり。（但し竹書に帝槐を帝芬とあり、史記の索隱に、槐音回、一音懷、系本作芬と有れば同人なり）、さて其の歷年は史記に載さず。竹書に據るに。伯禹の始めて位に即たる歲より。謂ゆる伐桀の歲まで計ふるに。四百三十一歲にて。劉歆が文と一歲違へれど。斯ばかりの相違は有まじき事に非ず。（こは劉歆必ず當時に傳はる一古說に據てぞ、載たりけむ）、偖かく年數はまづ合へれど。劉歆が此の年歷は。實の年歷よりは、百九十四年上へ引上せたる年數なり。其は次條に論ふを見べし。

【九】成湯書經湯誓湯伐夏桀。金生水。故爲水德。天下號曰商。後曰殷。三統上元至伐桀之歲十四萬一千四百八十歲。歲在大火房五度。故傳曰大火閼伯之星也。

書經とは尚書を云ふ。湯誓は篇名にて。殷湯王が夏桀王を伐つ時に。衆庶に示せる語なり。○三統上元至伐桀之歲云々とは。謂ゆる三統歷法の積數にて彼の一統千五百三十九歲を以て除ふに。九十一統と千四百三十一歲にて。其の千四百三十一歲は季統にて。其の伐桀の歲は己酉に當るを。即商湯が元年と爲たる說なり。（其由は次條に論ふを見るべし）押上元開闢以來の實數は。既に委く述る如くなるが。其數を知ざらむ間こそ斯る歲數にも惑ふべけれ。已に眞數を知得たる上より視れば。作者の妄意に重疊せる妄數なること。今更に論ふまでも非ずかし。○故傳曰とは左傳の（意解し難し）文なり。

【十】實紀商人後爲成湯。方即世崩。沒之時爲天子用事十三年矣。商十二月乙丑。

朔旦冬至。故書序曰。成湯既沒。太甲元年。使伊尹作伊訓。伊訓篇曰。惟太甲元年。十有二月乙丑朔。伊尹祀于先生。誕資有牧方明。言雖有成湯太丁外丙之服。以冬至越茀祀先生于方明。以配上帝。是朔旦冬之歲也。

實紀とは當時に有りし古書の名と聞えたり。十三年と云まで其の文なり。竹書に據るに。湯王が桀王を亡せるは壬戌歳にて。甲戌歳に殂せれば。實に十三年の卽世なり。但し其は歳數こそ合へれ。劉歆が年歷は旣に云ふ如く。伐桀の年を百九十四年引上たれば。己酉歳に當り。其の沒時は辛酉歳に當る。其は年表の上層下層よく照し視て其の相違を知べし（商十二月乙丑。朔旦冬至は劉歆が文なり。此は商某王某年十二月乙丑朔旦冬至と云はでは通えず不文と云ふべし。（然るは劉歆が文の如くにては、商代は年々いつも十二月は、乙丑の朔旦冬至なりしと云ふ事と成るを思ふべし。）斯て此の

語は。下に引たる書序に據れるなり。〇故書序曰云々は。尙書伊訓篇の序なり。孔安國が古文本に。成湯既沒。太甲元年伊尹作伊訓。伊訓惟元祀十有二月乙丑。伊尹祠于先王。奉嗣王祇見厥祖云々と有りて。劉歆が引たる文と異なり。抑々尙書の謂ゆる古文二十五篇は。伊訓を始め孔子の知らぬ僞書なる事は。和漢の先輩ら既に論定して。其の作者は卽ち安國と聞ゆるを。劉歆その由を得悟らず。此の三統歷譜に引く時に。其の文字を增減して。異本躰に物して。世を欺けり。（古文尙書の孔子に出でざる僞書なる由は。其の序文に會國有巫蠱事。經籍道息用不復以聞と有る巫蠱の事の、安國より後の事なるは更にも云ず、傳文中にも安國が時に合ざる事の交れるを以て、明の梅鷟が商書攷異を始め、一向にこは安國ならず、魏晉以後の僞作なりと擯斥せる類ひ多く、また清の毛奇齡が古文尙書冤詞を始め、一概に眞古文と信ずる論ひも多かれど、彼此ともに一偏の論にて、其の由來を盡さず、梅鷟が說に、史記に安國が古文本の議なきを以て、安國に出るに非ずと云ふ證

と爲たれど、其は史遷が適に記し漏せるにて、史遷も安國本に據れること、下に引く殷本紀の文、まさに安國本に取れる文なるを始め、其證多かる物をや、按ふに謂ゆる古文本、その元は安國が僞作に出しを、史遷劉歆らも引用ひ、其後の人また攙入せることと疑なくぞ所思ゆる、此は事の內に少か驚かし借なり、）然るは今傳はる安國本に。十有二月乙丑とのみ有りて。傳にも朔と云はざるを思ふに。當昔の本もしか有けむを。劉歆己が三統說の意に備へむと朔の字を增して。謬ひて朔旦冬至の日と爲たるが。唯是の一字を增たる耳にては。誑惑の力なほ足ずとや思ひけむ。其の下文をも改めて。異本夥に驗けることと疑なし。其は下に史記の文を引たるにも。數さる誑惑あるに思ひ合せて所知たり。（然るを近く淸の江聲が尙書音疏と云ふもの、後の古文は都て取らず、漢魏以上の古書に引たる尙書の文を拾ひ集めて、伏生が傳へし二十九篇に綴り合せて、一書と作たる其の趣向は然る事なれど、劉歆が今の僞文をも拾ひ出て、眞文と信じたるは、甚く劉歆に欺かれし也けり、）さて其の三統曆をもて推步するに。實にも湯王が沒年の翌年壬戌歲の十有二月は。謂ゆる甲統の第七十七章首にて乙丑の朔旦冬至に當れども。實年曆をもて推步すれば。夏の第九世帝芒が五十一年にて。丁卯蔀の第四章。丙寅の朔旦冬至に當るを。姑く彼が僞說を用ひむにも。史記の殷本紀に湯崩。太子太丁未立而卒。於是廼立太丁之弟外丙。帝外丙卽位三年崩。立外丙之弟中壬。帝中壬卽位四年崩。伊尹廼立太丁之子太甲。帝太甲元年伊尹作伊訓。肆命。徂后と有れば。其の謂ゆる乙丑朔旦冬至は。太甲元年より七年前。外丙が元年に當りて。伊訓に朔字を增たる意なく。實ふに虛たる詭妄にこそ。（劉歆が史記にかく有る事を知らざらむや、三統元より妄譔なるを、當時に信を取むため、何をがな誣會せむと思へる故に、斯の如く首を覆して、尾を出せる拙き所爲とも、自からは心著ざりし也けり、）然るに後世却りて三統の僞說を取りて。史記の外丙中壬あるを非とする僞ひ多かり。其は史記の正義に。尙書孔子序云。成湯既沒。太甲元年。不言有外丙中壬。而太史公採世本。

有外丙中壬。二書不同。當是信則傳信。疑則傳疑と云ひ。其の頭注に陳邃曰。邵子經世史。不載二人之名位。彼蓋以甲子歷推之。而知非有其在位之年次也。然則外丙中壬實未嘗立太甲直以長嫡孫承繼湯後耳など云へるは。皆劉歆に誑惑せられし徒なり。（邵子經世史とは。邵雍が經世書を云ふ、此は劉歆より衍甚しき杜撰の人にて、其の經世書はた三統譜に勝れる妄書なるを、眞曆を知ざる徒は、皆かく推法の實を得たる說と欺かれ居る故に、彼に頼りて、かゝる說をも爲たれど、實に甲子を以て往古を曆推する道は、邵雍らが得知る所に非ずかし）、さて誕資有牧方明は。安國本に奉嗣王祇見厥祖と有る文を。異古文體にかく改めし也。毛奇齡が尙書寃詞に。明の郝敬が古文尙書を信せず。律曆志なる今の本文を引て。伊訓原有誕資有牧之句。而古文遺此何也と云へるを出して。此一句非書文也。漢志據三代時氣以驗律曆。因引伊訓文。而雜此一句。此句或古語。或古禮文。先引之以證伊尹祀先王之誼。而復以越茀配享重爲解之。此史官據經作志之例。非引書體也と云へるは、其に此義を曉らざる故なり。（然るは郝敬は、古文尙書を信せぬ眼は有つれど、律曆志なる今の本文は、其の古文本を取りて、語を增減せる物なる事を知らず、曆志に引たる眞文に斯の如き句有るに、古文本に此の句なきは僞書なりと云ふ證に取れるを、毛奇齡は、郝敬が論に、古文遺此何也と云へるを實然る事とは思ひつゝも、元より一向に古文本を信ずる流なる故に、強ひて其の非を文らむと、右の一句を書の文ならず、古語か或は古禮文なりと辛くして通辯せる物なり、猶今引出たる文の下に、いと長く鹵々しき說を爲たれど、其はすべて論ふにも足ずかし）、さて言と云ふより以下は。其の伊訓に本づける劉歆が說にて　信るに足ざることと言ふも更なり。太甲が實の元年は。其の謂ゆる乙丑朔旦冬至の歲より二百年のち。辛巳歲なることと年表を視て知るべし。

【十一】後九十五歲。商十二月。甲申朔旦冬至。無餘分。是爲孟統。自伐桀至武王伐

紂。六百二十九歲。故傳曰。殷載祀六百。殷歷曰。當成湯方卽世用事十三年。十一月甲子朔旦冬至。終六府首。當周公五年。則爲距伐桀四百五十八歲少百七十一歲不盈六百二十九

後九十五歲とは。太甲元年より後九十五歲を云ふ。其は太甲元年を壬戌歲の乙丑朔旦冬至なりし歲と爲たれば。其の後九十五歲は丁酉歲にて。其の十二月は實にも三統歷にては。甲申朔旦冬至に當り。是の歲より孟統に入れり。（然れど眞古歷は更なり、殷歷にても入紀第二十乙酉部の首歲にて、乙酉朔旦冬至なるが、夏の第十一世帝不降が五十九年と云ふ歲なり、そは年表を見て知るべし、）但し是の歲に至り餘分なしと云へるは妄言なり。然るは三統歷は周歷と同く、八十一分の日法なれば終古に餘分盡ざることと。既に委細に推步せる如くなればなり。（其はなほ上第口口條に論へるを立却り視て知べし、）○自伐桀至武王伐紂六百九十二歲と云へる歲數も妄なり。其は次條に論ずるを俟べし。殷歷曰云々。殷歷とは殷代に用ひし故暦にて。孔子の修め傳へし歷法なること既に論へるが如し。斯て此は甲子朔旦冬至と云ふまで。其の殷歷の文にて。殷代に用ひし歷なる故に。殷歷とは云ふなれど。實には故歷なるが故に。十一月甲子朔旦冬至と有りしなり。（其は古歷の正月は今の正月にて、朔旦冬至今の十一月にあり、殷代の正月は今の十二月にて、其の十二月と云ふは、今の十一月なれば、上文には商十二月甲申朔旦冬至と云へるを、思ひ合せて辨ふべきなり、）さて當成湯方卽世用事十三年。十一月甲子朔旦冬至は。太昊古歷と竹書とを合せて。年表を作り稽ふるに。夏桀王が二十二年癸丑歲にて。次甲寅歲より天紀に入る甲子部首の歲なれば。甲子の朔旦冬至勿論なるが。此は伐桀より十年前にて。殷湯なほ商侯たりし八年と云ふ年なり。然れば方卽世用事とは。父に代りて。世に卽き事を用ひしを言へるにて。伐桀後の卽世を云ふに非ざること炳焉なり。但し此は紀年にては。八年といふ年なるを。殷歷に

十三年と爲たるは差へれど。斯許りの相違は有まじき事にも非ずかし。（斯て後になほ思ふに、其の殷歷の原文には、方郎世用事八年と有りしを、劉歆かの上に引たる實紀と云ふ物に、爲天子用事十三年と有るに合せて、八年を十三年と改めて、伐桀後の卽世に取なし、固より殷歷を非として、己が三統歷を推立むと欲すれば、然る姦曲の心巧なりけむも知べからず、其は下にも往々さる趣向の見ゆればなり）。終六府首云々は。劉歆が言にて殷歷を難破せる說なり。顏師古注に。府首卽蔀首と言へり。（古く用ひ來れる蔀字を、府字に替たる劉歆が意、如何云ふことを知らず。）六蔀首は乃甲子。癸卯。壬午。辛酉。庚子。己卯の六蔀にて。其の年數凡て四百六十二年なるが。其の四百六十三年は庚寅歲にて。戊午蔀の首歲なるが。此は實にも劉歆が。周公五年と立たる歲に當れり。（然れども此は三統の僞年歷にこそ有れ、眞年歷より云ふときは、殷帝乙が元年にて、周西伯もまた其の元年と云ふ年なること、年表を見て知るべし。）さて是より以下は決めて脫文有りと見えて。文義詳に聞えがたし。次條に論ずる旨を得て。其の大凡そを知り辨ふべし。

【十二】又以夏時乙丑爲甲子計其年迺孟統後五章。癸亥朔旦冬至也。以爲甲子府首皆非是。凡殷世繼嗣三十一王。六百二十九歲。四分上元至伐桀。十三萬二千一百一十三歲。其八十八紀甲子府首入伐桀後百二十七歲

初發の文意は。上の殷歷に、十一月甲子朔旦冬至と爲たるは。夏時の歷數にては。乙丑の朔旦冬至なるを。甲子と爲たりと云へるにて。是また妄說なり。然るは殷歷その正朔こそ夏歷と異れ。其の歷日は夏歷と異らず。其の夏歷やがて故歷なること。既に委く考證せる如くなれば。殷歷に甲子蔀首たる日の。夏歷に乙丑たるべき謂は。絕て無き事なるをや。其は此の日の干支一つ違ひては。甲子蔀まづ甲子蔀たらず。此蔀一つ頽れては。餘の十九蔀みな廢れて。甲子蔀癸卯蔀など云ふ。二

十の蔀名は。有まじき謂なるを。其の蔀名を以て天常を論じ。長久を志し來れるを如何とする。また此の蔀名の曆。周代以前に用ざらむには。何世にか用ひしとせむ。都に古曆道を思慮らざる妄談ならずや。（但し此は唯に思ひ慮らざる耳ならず、實は其甲子蔀癸卯蔀など云ふを、何の謂とも得知らず、其の日法推歩の道をも、實には知ざりし故に、かゝる飾怨の妄言をば發したりけむ、其は此の二十蔀の名の謂を知たる耳にても、斯の如き言は絕て云ひ出まじき事なればなり、然れば此を徵明の論と信じたる班固は更なり、古今の學者の一人も、古曆法を說明せる者の無りしも、實にうべなる事にこそ、）計二其年一迺孟統後五章云々とは。殷曆に甲子蔀首朔旦冬至と爲たる年を。三統曆にて計ふるに。孟統に入れる後の第五章。癸亥の朔旦冬至に當れば。殷曆に此を蔀首と爲たるは。是に非ずと云へるにて。實にも古曆に。三統曆を推合すれば。癸亥の朔旦冬至に當れり。斯て其癸亥を是とし。甲子を非とせるは　天地の機運に。さる相違ある實徵を得て云へる事には非ず。其の

本は周曆に。始めて八十一分の日法を用ひて。一日引上たるを是とする迄の事なりけり。（此の事のなほ委しき說は、最末條に論ふを俟て見るべし、）凡殷世繼嗣。三十一王は。史記殷本紀及び三代世表。また竹書紀年も。共に湯王より數へて。三十王なるに合ず。別に據る書の有けるにや。然て其の世を六百二十九歲と云へるは。上に云ふ如く妄誕なり。抑々殷代の正年數は天紀に入れる甲子蔀の第九年壬戌歲。これ謂ゆる伐桀の歲にて。第十年癸亥歲より殷の世となり。癸卯。壬午。辛酉。庚子。己卯の六蔀を竟て。戊午蔀に入たる六十一年庚寅歲。これ其の亡びたる歲なれば。凡て五百八年なり。然るを劉歆その伐桀の歲を。百九十五年上なる。人紀丁卯蔀の第三十九年。戊申歲に引上げ。其の次年己酉歲を。湯王が元年となし。丁卯。丙午。乙酉の四蔀を竟て。天紀の甲子、癸卯。壬午。辛酉。庚子の五蔀を經て。己卯蔀の第六十五年戊寅歲を。其の亡びたる年と爲たる故に。六百二十九歲とは成れり。（但しこは、湯王元年己酉歲を距て、二年より計へたる數なり、其の元年をも

計ふるときは、六百三十年にて、正紀年の五百八歳なるに、「百二十二年多く、かつ其の世代の相違することゝ、年表の上下を照し見て知べし。」〇四分上元至伐桀云々は。決めて劉歆が文ならず、後人の傍書せるが。本文に混れるなり。然るは四分とは。四分歷の事にて。此の歷は。後漢の章帝が元和二年より用ひ始めて。劉歆が知ざる歷法なれば。三統歷譜に載すべき由なく。殊に是また同樣の妄誕にして。其の非は。上下の論に准へても知るれば。今は其の辨を漏すになむ。

【十三】春秋歷周文王四十二年十二月丁丑朔旦冬至。孟統之二會首也。後八歲而武王伐紂。武王書經牧誓。武王伐商紂。水生木故爲木德。天下號曰周室。三統上元至伐紂之歲。十四萬二千一百九歲。々在鶉火張十三度。

三統歷の孟統第二會首は。實にも丁丑朔旦冬至にて。此を正紀年に當れば。殷武乙が二十九年庚午歲に當りて。周文王が西伯たりし四十二年よりは。六十年以前なり。是の引たる春秋歷と云ふもの。實に春秋時分の物ならむには。然る相違の有るべくも非ねば。此は疑なく僞作して引たる文なり。然れば前後漢書に。六歷の名こそ有れ。此の歷の名なく。他書にも見ざる歷名なり。(此は當時正しき紀年を載せる物の無りし故なること、上にも云ふが如し。)さて後八歲とは。謂ゆる四十二年より八歲のち。戊寅に當る歲に紂王を亡せる。其の歲は三統上元より。十四萬二千一百九歲に當る由なり。(前に湯王が伐桀の歲を、十四萬一千四百八十歲と云へるに、六百二十九歲多く、こを殷の年數とせるなり。)然るに是の歲は。實の伐紂の歲より七十二年以前にて。殷の第二十八世文丁が二年と云ふ歲なることゝ年表に著すが如し。抑々此の三統譜に謂ゆる。文王が四十二年は。正紀年にては。殷武乙が二十九年庚午歲に當る事の由を。なほ委曲に論はむに、下の第二十條に出せる文に。凡伯禽至春秋。三百八十六年とあり。春秋隱公元年は。東周の平王が四十九年己未歲なること、古今に

異論なき正年なれば。其の前年戊午歲より。三百八十六年逆推して。伯禽が元年を求むるに。癸巳歲に當るを。其の前文に。成王元年正月己巳朔。此命伯禽俾侯于魯之歲也と記して。成王が一世を三十年と云ひ。其の前文に。周公攝政七年にして。政を反せる由言へれば。周公攝政の初年は。丙戌歲に當り。其前文に。凡武王即位十一年と有れば。其の元年は乙亥に當り。其の前文乃ち次條に。武王が殷に克たる年を。自文王受命而至此十三年と言ひ。今の本文に。其の伐紂の歲を。文王が四十二年より後八歲と有れば。此の四十二年は。庚午歲に當ること論を俟たず。然るに此は劉歆が三統の僞紀年なり。（けだし此の僞紀年は、周世の七百九十六年なるを、八百六十七歲として、其の三統說に合せたる所爲なること、下に論ふが如し）然らば其の正紀年は何にして定むると言ふに周宣王以往は。竹書紀年と。史記の魯世家とに據りて之を記し。其の以來は。周本紀及び十二侯表。六國表。魯世家とを對考して。甚詳にぞ知るめる。其はまづ魯世家に。武王既崩。成王少在強葆之中。周公乃踐阼。代成王攝行政。當國使其子伯禽就封於魯。と有るに因りて。竹書の成王元年丁酉歲を。伯禽が元年と定め。其の子孫代々の紀年は。頓に魯世家の年數に從ひ。其の十三世惠公が末年は。春秋隱公元年の前年戊午歲に當れば。是より數を起して。其の上なる十二世の各年數を。遡上に當もて往くに。二世考公が元年は。周康王十一年甲申歲に當れば。伯禽が末年は。乃ち其の前年癸未に當りて。是正紀年たること論ひなし。（司馬遷が史記を撰べる當時は、竹書紀年いまだ世に顯はれざりし故に、周宣王以前の紀年は史記に漏せれど、魯世家の年數は、別に正き本書の有りしと見えて、餘の世家どもより委く、其年數をも詳に記せり、然るに後世晉代に至りて、竹書紀年始めて顯はれて、殷周以前の紀年まで、甚詳に傳れるが、期せずして史記なる魯世家の年數と、かく吻合する事は、いとも奇しく珍しき事にこそ）

【十四】文王受命九年而崩。再期在大祥。而伐紂。故書序曰。惟十有一年。武王伐紂。

太誓八百諸侯會還。歸二年乃遂伐紂克殷。㠯箕子歸。十三年也。故書序曰武王克殷。㠯箕子歸作洪範。洪範篇曰。惟十有三祀王訪于箕子。自文王受命而至此十三年。歲亦在鶉火。故傳曰。歲在鶉火。則我有周之分壄也。

前條に武王が殷に克たる戊寅歲を。文王が四十二年より後八歲と云ひ。此に其の克殷の歲を。自文王受命至此十三年と云へば。謂ゆる受命の初年は丙寅歲に當り。其より九年にして崩ずとある歲は甲戌にて。四十六年の卽位たる由なり。〇再期在大祥而伐紂云々は。文王が卒より三年の大祥を期て。紂を伐たる。其の歲は。受命より十一年に當る由にて。書序を引たれど。此は誣會なり。其はまづ文王受命とは。竹書に。紂王が三十三年の下に。王錫命西伯得專征伐と見え。其注に。受命自此年始とあり。其の歲は。西伯が四十二年辛未歲なり。斯て紂王四十一年の下に。春三月西伯昌薨と見ゆ。受命より實に九年なり。（史記周本紀に、西伯卽位五十年、受命之年稱王、後十年而崩、諡爲文王と有れど、年歷詳ならず、其の卽位の間を五十年と有れど、年數足らず、竹書に依りて計ふれば、五十二年にて、三曆由來記に論へる、乾鑿度にも合へばなり、）然れば周本紀に。武王卽位修文王緒業。九年上祭于畢。（索隱に畢星主兵、故師出而祭畢星也と云へり、）東觀兵至于盟津。諸侯皆曰。紂可伐矣。武王曰。女未知天命。未可也。乃還師歸。居二年東伐紂。十一年十二月戊午。師畢渡盟津。二月甲子昧爽武王朝至于商郊牧野。と有る九年は。乃武王が九年。紂王が五十年戊子歲にて。彼の受命の年より十八年に當り。十一年と有るも。武王が十一年にて。紂王が五十二年庚寅歲に當り。受命の年より二十年なるは。竹書紀年といと能く合へり。（但し竹書には、九年に東して、兵を孟津に觀たる事を漏して、紂王が五十二年の下に、周始伐殷、十有二月周師有事于上帝、云々とのみ言へり、）然るを劉歆その初度の出師を。文王が大祥に有りし間

の事と爲し。受命より十一年と云ふに取り成して。書序を引き。再期の出師を。受命より十三年の事と爲たるは。誣會なるに。況て此の年數にては。其年時紂王が世に當らず。武乙文丁二代に係るをや。(其は年表を照し見て知るべし、)然耳ならず。其十三年を。箕子が洪範を傳へし年と爲たるは。殊に甚し。其は箕子を以て歸れるこそ。克殷の年なれ。洪範を受たるは。武王が卽位十三年なること。其の序に惟十有三祀。王訪于箕子と有ると。本紀に。武王已克殷後二年問箕子と有るを。相發して著明けき事なるをや。(然るを世に有ゆる編年の書類、みな劉歆が年曆を正となし、史記の正義などに、太史公云、九年王觀兵十一年伐紂、則以爲武王卽位年數、與尚書甚疎矣とも云へるは、曲れる方を法と爲し、直き方を曲れりと爲たるにて、疎妄の殊に甚しき非言にぞ有ける、)

【十五】文王十五而生武王。受命九年而崩。々後四年而武王克殷。克殷之歲八十六矣。後七歲而崩。故禮記文王世子曰。文王九十七而終。武王九十三而終。凡武王卽位十一年。

文王十五而生武王は。大戴禮を取れる文なり。此の文に據れば。武王は文王に少きこと十四歲なり。斯て其の兄に伯邑考と云へるが在けり。此は文王に幾歲ばかり少かりけむ。後の三千歲を熟く歎ける大聖人に在ければ。世情も人より異に。しか甚く早かりしにや。(但し此の事は少か疑ひ無きに非ず、そは下に云ふを俟つべし、)○受命九年而崩は既に上に出たり。○崩後四年而武王克殷云云は。前條に云へる如く。克殷の年を受命より十三年と謬れる說にて。實の克殷の歲は。武王が世の十一年なれば。彼の受命の歲よりは二十年に當れり。文王十五にして。武王を生ちふ說を取り。禮記に文王九十七而終と云へるに據るときは。其の時武王八十三歲なれば。克殷の歲は九十四歲にて。是の後六年の在世を加ふれば。其の卒年は百歲なり。また武王九十三而終と有るに據るときは。文王の終れる時は。武王七十六歲。文王は其に十

四歳長じて。九十歳ならでは歳數合ず。もし是の父子の終歳。實に禮記に云ふ如くは。文王十五而生武王と有るを。十八の誤りと爲ざれば。其の歳數合ずなむ。(然るを劉歆その彼此ある異說を和會し、かつ彼の三統の數に叶へむと欲せる故に、實紀年の此を縮めて彼を延べ、彼を縮めて此を延など、種々に狡意を用ひて、今の本文をば作れるなり。)故案ふるに。竹書紀年に。武王卒年の下に。年九十四とあり。此に據れば。其の克殷の時は八十八。文王が卒せる時は武王七十七。文王は其に十四長じて。九十一歳なりしにや。若此の說用ふべくは。禮記の說を誤りと爲すべし。(此は後の人なほ考へて定むべし、然れど此はしも、専要の事には非ずかし。)さて凡武王即位十一年は。實には武王なほ西伯にして。位に即ること十一年。こは紂王が四十二年庚辰より。五十二年庚寅までなり。克殷の後六年辛卯より丙申に至る。凡て十七年の即位なりけり。

【十六】周公攝政五年。正月丁巳。朔日冬至。殷歷以爲六年戊午。距煬公七十六歲。入孟統二十九章首也。後二歲得周公七年。成王元年正月己巳朔。此命伯禽俾侯于魯之歲也。後三十年成王崩。

周公旦が攝政は。武王卒の翌年。丁酉歲より。癸卯歲まで七年の間にて。此は成王が元年世にこそ有れ。姬旦が世に非ず。其は魯世家に。武王既崩。成王少。周公乃代成王攝行政當國と有るを。竹書の紀年と合せ見て灼然かり。(尙云はゞ周本紀に、殷武庚と管叔蔡叔らが亂を起せるを、姬旦が誅伐せる事を記して、周公奉成王命と有るにても、成王が世なる事を知べきなり、但し攝政とは云へど、實は其の位を奪はむと欲する氣ありし故に、召公太公等も疑ひ、管蔡も疑ひて亂を作せるなり、此の事は既に三易由來記にも云へりき。)然るを劉歆その七年を姬旦が世となし。八年に當る歲を成王が元年として。三十年の在位と云ひ。伯禽が魯に侯たりしを。其の謂ゆる元年と爲たるは強ひ言なり。其は世家に。前文の下に。

於是卒相成王而使其子伯禽代就封於魯と有るは。即ち其の攝政の初年なるを以て知べし。然れば其の歳は。乃ち成王及び伯禽が元年たること勿論なり。（是を以て竹書の紀年は、成王の在世にて、三十七年なり、武王卒する時に、成王十三歳なりしと云ふ說に據ときは、五十歳にて殂せるか。）さて正月丁巳朔旦冬至は。周曆の推步なるが。殷曆の煮朔の。古曆に差ひ無こと。既に云ふ如くなるが。此は戊午蔀の首歳朔旦冬至にて。殷の帝乙が元年。周姬昌が三年庚寅歳に當り。周公旦が攝政五年に。前なる事五十四年なり。其は乾鑿度なる文王が言に。其の受命の年を。入戊午蔀四十二歳。と云へるにても知るべし。（此の全文は第□□條の本文に擧て既に委く論へるを見るべし。）距煬公七十六歳云とは。下の第十三條に。煬公二十四年。正月丙申。朔旦冬至とある歳に距こと七十六歳にて。謂ゆる孟統の二十九章首たる由なれど。實は天元の第二十五章首にて。殊に蔀首にぞ有ける。（なほ其の煬公の處に論ふを俟つべし。）

【十七】自周昭王以下亡年數。故據周公伯禽以下爲紀。魯公伯禽推即位四十六年。至康王十六年而薨。故傳曰。燮父禽父並事康王。言晉侯燮。魯公伯禽俱事康王也。子考公就立。酋。考公世家。即位四年。及煬公熙立。煬公二十四年正月丙申朔旦冬至。殷曆以爲丁酉。距微公七十六歲。

自周昭王以下亡年數云々とは。周史に。昭王以前康王までの年數を紀せれど。昭王以下は年數を亡へる故に。魯史の周公伯禽以下の年數に據りて。三統の譜紀を爲れる由なり。伯禽が元年は。成王元年丁酉歳なるを。六十四年上せて。癸巳歳と爲たること。年表に著せるが如し。斯て其の即位の間を四十六年と云へるは。其の子孫の世數を劉歆が意に任せて。或は延べ或は約めて。其の子考公が元年を。定記の世家より。六十五年上せる故に。伯禽が即位四十六年と成れるなり。然れば史記の世家にては。考公が元年は。康王十一年

甲申歳に當れば。伯禽が卒年は康王十年にて。成王元年に魯に侯たりしより玆に至りて。四十七年なること。年表を見て知べし。是を以て左傳に。燮父禽父竝事康王と云へる語も有るなり。（子考公就立。酋とは。伯禽卒して。其子考公就と云へるが立たる由にて。酋は異名を擧たるなり。（師古注に又記此酋者、諸說不同、而名字或異也、下皆效此とあり、）考公世家云々とは。史記魯世家を謂ふ。乃本史に。魯公伯禽卒。子考公酋立。考公四年卒。立弟熙是爲煬公とあり。（今の劉歆が文に、及煬公熙立と有る、師古注に、及者兄弟相及、非子繼父也、下皆類此と云へり、本史に立弟熙と有るは、能く通ゆる文なるに、此の如き新文こそ異しけれ。）さて煬公二十四年と云へるは杜撰なり。そは煬公が卽位は。唯六年なること。次條に引く本史の文の如くなるを。豈二十四年と云ふ歳有なむや。然らば其の朔旦冬至と云へるは如何といふに。此は古歷をして推すに。成王が十年と云ふ歳にて。天紀の第八丁酉蔀の首歳なれば。殷歷の丁酉なるに符合せり。（然るを正月丙申と有るは周歷の推步なり、）さて距微公七十六年とは。次條に微公二十六年。正月乙亥朔旦冬至と云へる。其の歳に距ること七十六歳にて。章首たる由なり。下の條々に。距某公七十六歳と云ふ者。みな是に准へて知るべし。

【十八】世家煬公卽位六十年。子幽公宰立。幽公世家卽位十四年。及微公茀立。濆。微公二十六年正月乙亥朔旦冬至。殷歷以爲丙子距獻公七十六歳。

こは本史魯世家には。煬公六年卒。子幽公宰立。幽公十四年。幽公弟濆殺幽公而自立。是爲魏公とあり。然れば考公が卒年は。康王が十四年丁亥歳。煬公が立年は。康王十五年戊子歳にて。其の卒年は。康王二十年癸巳歳なり。（考公煬公二代は、竹書紀年に記し漏せり、）然るに煬公六十年と云へるは。六年に十を乘たるにて。杜撰の甚きに非ずや。此の六十年を。普通の印本に。十六年と有るは。劉歆が眞面目に非ず。今は唐本二ッまた

狩谷望之が藏たる。皇朝に傳はる古き活字本に。六十年と有るに據れり。（然るは蘇子由が古史の魯世家は、史記を其まゝ取れる文なるに、煬公六年卒すと有れば、史記の元本は六年なりしを、劉歆が十を乗たること疑なく、且下の第二十條に凡伯禽至春秋三百八十六年と云へるにも、六十年ならでは年數足ざればなり、猶其の條に云ふを見べし。）さて史記には。魏公と有るを。微公となし。其の名は。史記に濞と有るを。茀とも出せるは。然る異本の在けるに據れる由して。己が杜撰を文らむと欲せる結構と見えたり。前後の諸公等が名の史記と異なるは。悉是に准へて察すべし。（竹書紀年には此の魏公を魯侯濞とのみ有り、君を殺して世を奪へる故に、貶して其の謚を云はざるにや、）さて微公二十六年正月乙亥云々は。史記の魏公十五年。穆王が四年壬戌歳に當れり。古暦にては。天紀の第九丙子蔀の首歳なれば。殷暦に丙子と爲たるに符合せり。然るを正月乙亥朔旦冬至と有るは。周歷の推步なり。）

【十九】世家微公即位五十年。子厲公翟立。獻擢。厲公世家即位三十七年及獻公具立。獻公十五年正月甲寅朔旦冬至。殷歷以爲乙卯距懿公七十六歲。世家獻公即位五十年。子慎公埶立。嗅。慎公世家即位三十年。及武公敖立。武公世家即位二年。子懿公被立。戲。懿公九年正月癸巳朔日冬至。殷歷以爲甲午距惠公七十六歲。

史記の世家に。魏公五十年卒。子厲公擢立。厲公三十七年卒。魯人立其弟具。是爲獻公とあり。然れば魏公が卒年は。周穆王が三十九年丁酉歳にて。厲公が元年は。穆王四十年。その卒年は。周懿王九年甲戌歳なり。然るに劉歆が擬紀年にては。穆王三十九年。厲公が元年は其の翌る四十年。其の卒年は。周共王が八年に當ること。年表にて知べし。獻公十五年正月甲寅云々は。史記の獻公四十年。竹書の懿王十三年に當れり。乃古暦の天紀第十乙卯蔀の首歳なれば。殷歷に乙卯と爲たると符

合せり。(然るを劉歆が文に、正月甲寅朔旦冬至と有るは、周歷の推步なり、)○世家獻公云々とは。史記の世家に。獻公三十二年卒。子眞公濞立。三十年眞公卒。弟敖立。是爲武公。武公九年春武公與長子括。少子戲。西朝周宣王。宣王愛戲爲魯太子。夏武公歸而卒。戲立。是爲懿公とあり。然れば獻公が元年は。周懿王が十年乙亥歲。その卒年は。周夷王七年丙午歲。その子眞公が元年は。夷王八年。その卒年は。周宣王三年丙子歲。その弟武公が元年は。宣王四年丁丑歲。その卒年は。宣王十二年乙酉歲。その子懿公が元年は。宣王十三年なり。(こは年表を照し見て知るべし、)然るを劉歆その獻公が三十二年に。十八年增して。五十年と爲し。武公が九年をば。却りて七年減じて。二年と爲たり。斯て是の武公が卒年より後の年數ども。史記と一も違ふ事なきは。春秋の世に近く。僞說を爲せば。人忽に知るが故なり。(なほ此の年數增減の由來は、次條にとり都て論ふを見べし、)さて懿公が九年は。周宣王が二十一年甲午歲にて。乃古曆の大紀第十一甲午蔀の首歲なれば。殷曆に甲午と爲たると符合せり。(然るを劉歆が文に。正月癸巳と有るは周歷の推步なり、)

○好尙云此の條の舊稿に○實の世家に。魏公五十年卒。子厲公擢立。厲公三十七年卒。魯人立其弟具。是爲獻公と見え。紀年に穆王が四十五年の下に。魯侯濆薨と有り。此は癸卯歲なり。魏公が立年甲寅歲より計ふるに。實に五十年なり。然れば厲公が立年は穆王四十六年甲辰歲なること知べし。斯て紀年に。懿王十七年の下に。魯厲公擢薨とあり。此は壬午歲なり。其の立年甲辰より計ふるに。三十九年にて。史紀と二年差へり。(然れど斯ばかりの相違は、古書には互に有べき物なり、斯て紀年に、獻公の事さへに缺漏したり、)○獻公十五年正月云々。厲公が卒年は。懿王十七年壬午なれば。獻公が立年は。懿王十八年癸未歲なり。殷曆の乙卯朔旦冬至は。懿王が十三年。魯厲公が三十五年戊寅歲なり。然るに劉歆が文に。獻公十五年と云へるは。三統の妄誕なり。○世家獻公即位五十年云々。此は實の世家には。獻公三十二年卒。子眞公濞立とあり。然るに十八年增たるは杜撰な

り。（蘇子由が古史の世家も史記に同じ。）然ては獻公が卒年は。厲王が七年甲寅歳にて。其の八年乙卯歳は愼公が立年なり。

【二十】世家懿公即位九年。兄子柏御立。柏御世家即位十一年。叔父孝公稱立。孝公世家即至二十七年子惠公皇立。惠公三十八年。正月壬申朔日冬至。殷歴以爲癸酉。距魯公七十六年。世家惠公即位四十六年。子隱公息立。凡伯禽至春秋三百八十六年。

此は史記の世家に。懿公九年。懿公兄括之子伯御。與魯人攻弑懿公。而立伯御爲君。伯御即位十一年。周宣王伐魯殺其君伯御。而立懿公弟稱於夷宮。是爲孝公。二十七年孝公卒。子弗湟立。是爲惠公。四十六年惠公卒。長庶子息攝當國行君事。是爲隱公。と有るを切約せる文なり。惠公が三十八年は。東周の平王が四十年庚戌歳にて。古暦の天紀第十二。癸酉蔀の首歳なれば。殷暦に癸酉冬至と爲たるは符合せり。（然るを劉歆が文に一日前だちて、正月壬申朔旦冬至と有るは、周歴に依れる推歩なり。）さて凡伯禽至春秋三百八十六年とは。彼伯禽が即位元年より。惠公が卒せる戊午歳までの年數を云ふ。其は隱公元年よりは。春秋の世なればなり。（惠公が卒せる戊午歳は、乃ち平王が四十八年と云ふ歳なること、年表を視て知べし。）故其の戊午歳より三百八十六年逆推すれば。殷帝乙が四年癸巳歳に至れり。魯世家の正文をもて逆推するに。三百二十二年なれば。六十四歳の過年なり。其は伯禽が即位は四十七年なるを。四十六年と爲し。武公が即位は九年なるを。二年と爲たるにて。八年減じたれど。煬公が六年に。五十四年增して六十年と爲し。獻公が三十二年に十八年增して。五十年と爲たる故に。七十二年の增なるを。此中より八年の減を復するに。仍六十四年の過有れば。三百八十六年と爲れるにて。是ぞ劉歆が僞年數なる。（蓋この增減の中に、伯禽が即位を四十六年と爲たる耳は、其の推法を思ひ得ざりし故と思はるれど、煬公獻公が年數を大きに增加し、武公が年數を減じたるは、皆奸意をも

て増減せること言ふも更なり、然るにても、史記は後に傳はらざる物と思へるにや、甚く後世を盲目に爲たる所以なりけり。）此は當時正しき紀年の書は。世に顯はれず。史記にも東周以前の年歷なきを幸として。周の王代をも。伯禽が元年と共に。上へ引延して。他の書傳等より。其の世に當らぬ星宿時日の語を拾ひ加へて誣會せるに。班固まづ欺かれて。推法密要とも。微眇とも稱せるより。古今の學者これに雷同せざる者なく。後に編年書類を撰べる徒。この僞年數に據ざる者鮮し。最も憐れむべき事にこそ。（其は彼の國の綱鑑類の史等、此方にも帝王編年紀、和漢合運、同年契など云ふ類の書ども、周の武王が元年を戊寅と云ひ、己卯と記せるは皆劉歆に眼を拔れたるにぞ有ける、

【二十一】春秋隱公。春秋卽位十一年。及桓公軌立。此元年上距伐紂四百歲。桓公春秋卽位十八年。子莊公同立。莊公春秋卽位三十二年子愍公啓方立。愍公春秋卽位

二年。及釐公申立。釐公五年正月辛亥朔旦冬至。殷歷以爲壬子。距成公七十六歲。是歲距上元十四萬二千五百七十七歲。得孟統五十三章首。故傳曰五年春王正月辛亥朔日南至。

隱公より哀公に至る。謂ゆる春秋十二公の年歷は。春秋及び左傳ありて。紀年著なるが故に。年數の僞ある事なし。然て魯世家に。隱公十一年冬。公子揮使人弑隱公。而立公子允爲君。是爲桓公とあり。（こは略文なり、次々に史記を引くもの、皆之に效ふべし。）さて桓公元年を。前に殷の文丁二年戊寅歲を。伐紂の歲と爲たるに依りて計ふるに四百十二歲なり。然るに上距伐紂四百歲と云へるは算を失せるにや。次莊公同立云々。魯世家に。桓公十八年春。公與夫人如齊。々襄公通桓公夫人。使公子彭生殺桓公。魯立太子同。是爲莊公。莊公三十二年。八月癸亥莊公卒。子開立。是爲湣公。湣公二年哀姜與慶父謀殺湣公。季友奉公子申立之、是爲釐公。釐公亦莊公少

子とあり。(十二諸侯表に、莊王元年乙酉、同四年戊子魯莊公元年、惠王十六年庚申、魯湣公元年、惠王十八年壬戌、魯僖公元年と有るに合へり。)○釐公五年正月辛亥朔旦冬至云々。此の事は春秋命歷序考に已に委く說たれば今此更に云ず。(また三曆由來記にも論へるを見るべし。)但し此の朔旦冬至、古曆にては、天紀第十三壬子蔀の首歲なれば。殷曆に壬子と爲すに符合せり。
()好尙云。此より以下注釋を缺れたり。

【二十二】春秋釐公即位三十三年。子文公興立。文公元年距辛亥朔旦冬至二十九歲。是歲閏餘十三。正小雪。閏當在十一月後。而在三月。故傳曰非禮也。後五年閏餘十。是歲亡閏而置閏。又不告朔。故經曰閏月不告朔。言亡此月也。傳曰不告朔非禮也。春秋文公即位十八年。子宣公倭立。宣公春秋即位十八年。子成公黑肱立。成公十二年正月庚寅朔旦冬至。殷歷以爲辛卯。距定公七年七十六歲。

【二十三】春秋成公即位十八年。子襄公午立。襄公二十七年距辛亥百九歲。九月乙亥朔。是建申之月也。魯史書十二月乙亥朔日有食之。傳曰。冬十一月乙亥。朔日有食之。於是辰在申。司歷過也再失閏矣。言時實行以爲十一月也。不察其進。不考之於天也。春秋襄公即位三十一年。子昭公稠立。昭公二十年春王正月。距辛亥百三十三歲。是辛亥後八章首也。正月己丑朔旦冬至失閏。故傳曰二月己丑日南至。

【二十四】春秋昭公即位三十二年及定公宋立。定公七年正月己巳朔旦冬至。殷歷以爲庚午。距元公七十六歲。春秋定公即位十五年。子哀公蔣立。自春秋盡哀十四年。

凡二百四十二年。六國春秋哀公後十三年遷于邾。子悼公曼立。悼公世家卽位三十七年。子元公嘉立。元公四年正月戊申朔旦冬至。殷歷以爲己酉。距康公七十六歳。元公世家卽位二十一年。子穆公衍立。顯穆公世家卽位三十三年。子恭公奮立。恭公世家卽位二十二年。子康公毛立。康公四年正月丁亥朔旦冬至。殷歷以爲戊子。距緡公七十六歳

【二十五】康公世家卽位九年。子景公偃立。景公世家卽位二十九年。子平公旅立。平公世家卽位二十年。子緡公賈立。緡公二十二年正月丙寅朔旦冬至。殷歷以爲丁卯。距楚元七十六歳。緡公世家卽位二十三年。子頃公讎立。頃公表十八年。秦昭王之五十一年也。秦始滅周。周凡二十六王。八百六十七歳。秦孝文王元年。楚考列王滅魯。頃公爲家人。周滅後六年也。孝文王本紀卽位一年。莊襄王卽位三年。始皇本紀卽位三十七年。二世本紀卽位三年。凡秦伯五世四十九歳。

〔一〕好尙云右の條々悉く注解を缺れたり。

【二十六】漢高祖伐秦繼周。木生火故爲火德。天下號曰漢。距上元年十四萬三千二十五歳。八年十一月乙巳朔旦冬至。楚元三年也。故殷歷以爲丙午。距緡公二十二年。七十六歳。武帝元朔六年十一月甲申朔旦冬至。殷歷以爲乙酉。距楚元三年。七十六歳。

〔一〕好尙云此條も注解を缺れたるが。漢暦の事を少か記し措れたる舊稿あり。因に此處に附錄しぬ。
漢の暦元の事。本志の末論に。當漢高皇帝受命。四十有五歳。陽在上章。陰在執徐。冬十有一月

甲子夜半朔旦冬至。日月閏積之數。皆自此始。立元正朔謂之漢曆。又上兩元而月食五星之元。並發端焉と有り。此を合せて論はむに。訢等が議に。漢興元年と云へるは。卽ち高祖が元年乙未歳にて。是より後四十五年は。文帝が後元三年庚辰歳なり。（論に陽在上章と云へるは、庚に在るを云ひ、陰在執除と云へるは、辰に在るを云ふ、卽ち庚辰の年なり。）然るに此の年の冬。十一月甲子夜半朔旦冬至を。曆元と爲たる由なるが。此の庚辰歳は。古曆丙午蔀の第三十八年にて。其の冬十一月は。乙丑の朔旦冬至にて。第三章首にこそ有れ。蔀首には非ざるを。强ひて甲子に退けて。曆元と爲たるなり。（但し此は己が發揮せる、太昊古曆の本術をもて論ずるなれば、曲士、或は文帝が當時、なほ顓頊曆を用ひつれば、其の曆には、甲子朔旦冬至なりけむなど云ふも有なむか、然れど其の顓帝曆も、本術は我が太昊古曆なること、既く三曆由來記に論へるが如し。）

【二十七】漢歷太初元年。距上元十四萬三千一百二十七歳。前十一月甲子朔旦冬至。元帝初元二年。十一月癸亥朔旦冬至。殷曆以爲甲子。以爲紀首。是歳也十月日食。非合辰之會。不得爲紀首。距元朔六年七十六歳。

好尙云。此條も注解を闕れたるが。本文に關係る事ども。別に論ひ置れたる物有り。今また此處に記せり。其は三曆由來記か。太昊古曆傳の舊稿なるべし。見む人其の心を得てよ。

〔春秋命歷序に。孔子治春秋。退修殷之故歷。使其數可傳于後。春秋宜以殷歷正之。今考之。交會不與殷歷相應と見えたるが。其は殷の故歷に修むと有るは。周曆の甚き愆りを。殷曆に校べ正せる由にこそ有れ。殷曆に改めたる由に非ざれば。其の交會の相應せざる事は。固より必然るべき謂なるをや。（此は改殷之故歷とは云ずして、修殷之故曆と有るに、よく意をつけて思ひ辨ふべきなり、我が黨の小子ら、古書を讀むに、常に此の心得をな忘れそよ。）さて其の交會

の。周曆と相應せざる趣は。前漢の歷志なる劉歆が論中に。魯の煬公二十四年。正月丙申。朔旦冬至殷曆以爲丁酉。微公二十六年。正月乙亥。朔旦冬至、殷曆以爲丙子。獻公十五年。正月甲寅。朔旦冬至。殷曆以爲乙卯。懿公九年。正月癸巳朔旦冬至。殷曆以爲甲午。惠公三十八年。正月壬申。朔旦冬至。殷曆以爲癸酉。（魯煬公二十四年は、周成王が十年丙午歲に當り、微公二十六年は、穆王が四年壬戌歲に當り、獻公十五年は懿王が十三年戊寅歲に當り、懿公九年は、宣王が二十一年甲午歲に當り、惠公三十八年は、平王が四十年庚戌歲に當る、こは己が治むる所の太昊曆を以て推求むるに、其の朔旦冬至盡く謂ゆる殷曆と符合せり、斯てこは春秋以前なり、）釐公五年、正月辛亥。朔旦冬至。殷曆以爲壬子。成公十二年、正月庚寅。朔旦冬至。殷曆以爲辛卯。定公七年正月己巳。朔旦冬至。殷曆以爲庚午。元公四年、正月戊申。朔旦冬至。殷曆以爲己酉。康公四年、正月丁亥。朔旦冬至。殷曆以爲戊子。湣公二十二年、正月丙寅。朔旦冬至。殷曆以爲丁卯。（此中に僖公成公定公は、謂ゆる春秋十二公の中の三人なり、僖公五年は、周惠王二十二年丙寅歲にて、我が神武天皇の六年に當ること、既に云へるが如し、湣公二十年は、周赧王が三十八年甲申歲に當れり、是より間なく、魯は楚考列王と云ふに滅され、周は秦に降參して滅びたり、）漢高祖八年十一月乙巳。朔旦冬至。故殷曆以爲丙午。武帝元朔六年十一月甲申。朔旦冬至。殷曆以爲乙酉。元帝初元二年十一月癸亥。朔旦冬至。殷曆以爲甲子。以爲紀首。是歲也。十月日食。非合辰之會。不得爲紀首。と所見たり。（以上は劉歆が論中に、殷曆と稱せる限りを引出たるなり、）右の殷曆以爲丁酉。殷曆以爲丙午など云へるは。殷曆に依れる干支。正月丙申。十一月乙巳など云へるは。周曆に依れる干支なること。言ふも更なるが。殷曆は。煬公二十四年の朔旦冬至を。丁酉と云へるを始め。丙子。乙卯。甲午。癸酉。壬子。辛卯。庚午。己酉。戊子。丁卯。丙午。乙酉。甲子みな蔀首四正の支にて。次第一つも錯亂なく。古曆の蔀法に符合せる蔀法を。（其は太昊古曆傳、また命曆序攷に出せる蔀法

の圖と。此の件とを合せ視て知るべし、）周暦の丙申。乙亥。甲寅。癸巳。壬申。辛亥。庚寅。己巳。戊申。丁亥。丙寅。乙巳。甲申。癸亥みな殷暦に一日前だちて。四正の支ならず。古暦の蔀法みな頽廢せり。其は周暦を作れる時しも。日月の行に。差の一日有るを覩て。然定めしに非ず、八十一分の日法を用ひし故に。其分足らず。一日前に縮れる物なり。（若それ周暦を作り始めし文王が當時、實に一日の差有りて、一日退けしならむには、其の後も必ず。差の出來ずは。有まじく、成王が時より、漢元帝が初元まで□百□十年ほどの間に、氣朔ともに唯一日の差にて止べきに非ず。三日四日計りの差の無ては、絶て應はぬ事なるをや）、然るに劉歆この周暦を是とし。殷暦を非と爲して。元帝が初元二年甲戌歳の朔旦冬至を。甲子と爲し、紀首と爲せるを。是の歳や十月に日食有れば。合辰の會に非ず。紀首と爲ことを得ずと云へるは。甲子蔀の必ず甲寅。甲戌。甲午の歳たる。古暦の蔀法を不知しにや。（然ればこそ、其の作れる三統暦は、周暦を因襲して、八十一分の日法を用ひ、

妄意に周易を誣會して暦理を說き、天統之正始施子半、地統受之於丑、人統受之寅、故暦數三統、天以甲子、地以甲辰、人以甲申、孟仲季迭用事、爲統首など辨を作りて、甲子甲辰甲申を、三正の統首とは立たりけり、前月によし日食有りとも、朔旦冬至合辰の會に少も拘はる事には非ざる物をや、また是に就て思ふに、命歸序なる、今考之云云と云へる文は、劉歆が當時の加筆の、攙入せるならむも亦知べからず。）今の因に其の論中に、殷暦を引出たる條々を論はむに三統上元至伐桀之歲、十四萬一千四百八十歲。自伐桀至武王伐紂。六百二十九歲。故傳曰。殷載祀六百。（此の長年數は、彼の三統の理屈に因りて立たる妄數にて、文王が二百七十六萬歲の類なれば、元より論ずるに足らず、伐桀より伐紂に至りて、六百二十九歲と云へるも、然る實數の本書ありて云るに非ず、是も三統に合せて推たる數也、傳曰と引たるは左傳なるが、此は當時殷代の大凡を云へるにて、實數に非ず、竹書紀年に據るに、伐桀の歲は壬戌にて、其より五百九年めの庚寅歲、これ伐紂の歲なる物をや）

醫宗仲景考序

竊聞我神代之古。天神御上。地祇治下。範鑄造化。轡策顯幽。乃將憫民之夭折。攘物之災異。於是始定治療之方。製禁厭之法。天下咸蒙恩賴。而覩効驗也。謂之方術之濫觴。醫藥之權輿。夫神祇之德。猶蒼穹之覆而不遺。洋溟之包而無外也。則根本之幹立。雖在我。而枝葉之滋蔓。有在彼者矣。是故彼外蕃之古。方術有如黃老。醫藥有如扁倉。傳至于東漢。有葛孝先翁。傷寒之論成焉。復傳至于西晉。有葛稚川翁。金匱之方出焉。布諸當世。傳諸後葉。以使人敘橫夭。免淪喪焉。二翁之德。亦偉矣。噫哉。雖然或稱張機。又號仲景。寓其名。而隱其迹焉。是玄家眞人之所以立陰功。而規輕擧也。是以古今之間。億兆之醫。一無宗其道。而宗其人。知其書。而知其迹者焉。嗚呼。天下安不果無圖觀玄冥。徹聽幽微者哉。我氣吹舍先生。撰定神典。振起古道。窮覽之書如山。著述之筆如烟。無奇祕不兼綜。無遺逸不捃拾。

夫游淵源。則涉流派。攀巓頂。則臨峡麓。於是輯考此書。題曰醫宗仲景考。議論之高。攷徵之富。果斷之明。探討之深。始可以知二翁之眞名實迹而已。先生之德。蓋可謂羽翼神祇。傳此仙眞者矣。國秀不敏。辱奉洒掃。受謦咳。雖然豈能窺墻入室。鑽至堅。仰彌高哉。幸受此書。方乃弃管。而窺麗天之明。擲蠡。而觀浸雲之瀾耳。於是相議。以請諸先生。而附於剞劂。刻於桑梓。以贈於同志之執匕投劑者焉。善讀焉者。若知其眞名實迹。而宗其宗。則亦將有宗其宗之宗者矣。謹序。

文政十年丁亥十一月朔

館林藩士　生　田　國　秀

醫宗仲景考

平篤胤輯考

門人　阿波國　松浦道輔　同校
　　　備前國　玉中春緒
　　　武藏國　川崎重恭

傷寒雜病論。金匱要略方論の二書は。其の原本一にして。今存る傷寒論は。傷寒雜病論の雜病篇を佚せるもの。金匱要略方論は。その傷寒篇を佚せる物なるが。古今億兆の醫人。その方法に從事して。醫藥の祖典と尊奉するに。其の撰者を張機字は仲景と傳へ來つれど。史籍にその傳なき事を誰も甚く遺憾に思へるに。此の頃その人を考へ得たり。其はまづ晉書列傳なる。葛洪字は稚川の傳に。洪尤好神仙導養之法。從祖玄、吳時學道得仙。號曰葛仙公。以其煉丹秘術授弟子鄭隱。洪就隱學。悉得其法焉。後以師事南海太守上黨鮑玄。玄亦內學。逆占將來。見洪深重之。以女妻洪。洪傳玄業。兼綜練醫術。凡所著撰。皆精覈是非。而才章富贍云々と見え。（葛稚川の號を抱朴子と稱へり。是をもて其の著せる子書の、內篇外篇を抱朴子と名けたり、今この考中に。其の子書と稱するもの、卽ちその抱朴子を云へり）下に其の著撰の目を擧たる中に。金匱藥方百卷。肘後要急方四卷とあり。稚川翁の此の二書を撰ばれし事は。其の子書雜應の卷に余見戴霸華陀所集金匱綠囊。崔中書黃素方。及百家雜方五百許卷。（謂ゆる金匱は戴霸が撰と聞え、綠囊は華陀が撰と聞えたり、其は華陀が方書を、青囊に收れて、秘藏せりと云ふより號たりけむ、故青囊とも諸書に見え、しか稱せる後世の醫方書も有り、次に引く肘後方序には、綠秩とも云へり、崔中書がこと詳ならず、黃素方といふも今傳はらず、金丹の卷に、崔文子肘後經あり、劉向が列仙傳に、崔文子傳を載して、赤丸黃散と云ふ二方を作り、黃散を以て疫氣を治せる事見えたり、崔中書とは此の人を云ふか、楚辭天問に、此の人の事を作り、其の王逸が注、また搜神記に、王子喬の弟子なりと云へれば甚古き人なり、○松浦道輔云く、外臺秘要方に、崔氏方とて、崔文行が方書を多く引たり、此を王燾が自序には、崔尙書とか

きたり、尚中いづれか字の誤りにて、同じ人には非じかと云へり、猶下にも論ふを見るべし、）甘胡。呂付。周始。唐通。阮河南等。各撰集暴卒備急方。或一百十。或九十四。或八十五。或四十六。世人皆爲精悉不可加也。（甘胡より下五人が撰れる書等も今傳はらず、本に唐通を甘唐通とあれど、甘は衍なり、其は肘後方の序に相ひ照して知るべし、阮河南は、本に阮南河と有れど、道輔云く誤寫なり、其は外臺祕要に引たる崔氏方の文に、阮河南蒸法三卷とあるを始め、所々に河南と見たりと云へり、然る言なり、其は舊唐書に、阮河南方十六卷阮炳撰、新唐書に、阮河南方十六卷阮炳、また阮河南藥方十七卷なども有ればなり、）余究而觀之。殊多不備諸急病。其尚未盡。又渾漫雜錯無其條貫。有所尋按不即可得。而治卒暴之候。皆用貴藥。動數十種。自非富室而居京都者。不能素儲不可卒辨也。又多令人以針治病。其灸法又不明處所分寸。而但說身中孔穴榮衞之名。自非舊醫備覽明堂流注偃側圖者。安能曉之哉。（此の文にて。甘胡より下五人が撰集せる書等の大體を觀るべし。）余所撰百卷。名曰玉函方。皆分別病名。以類相續。不相雜錯。其九十三卷。皆單行徑易約而易驗。籬陌之間顧眄皆藥。衆急之病無不畢備。家有此方可不用醫。（此の文に玉函方と云へるは、卽ち本傳に、金匱藥方百卷とある書なり、互に名の易れる由は、下に云ふを見るべし、其の九十三卷とある九十は決めて卒の字の誤寫にて、これ謂ゆる肘後方なり、其は次に引く肘後方の序と相ひ發して辨ふべし、）道輔が說に、九十は必ず師說の如くにて、其は決めて救の誤字なり、然るは其の唐音はギイ、救は唐音ギウにて、ウとイは韻通ずるより誤れるかと言へり、斯て後に、平津館叢書中なる、孫星衍が校正の本を得たるに。其の玖拾三卷とありて、孫が語に。當作救卒。卽肘後方也と云へり。玖拾の字はます／＼誤れるなれど。孫が說のよく符へるは最珍らしくこそ。偖此の校本を得て後に。今引たる文をも此かしこ訂正せり。見む人俗本に異なるを勿怪みそ。）醫多承襲世業。有名無實。但養虛聲以圖財利。寒白退士所不得使。使之者

乃多誤人。使勝理之微疾成膏肓之深謬。自閑其要。勝於迎無知之醫。且暴急之病。而違行借問。率多枉死矣とあり。（此の一節は、本書に錯亂衍文ありて通じ難ければ、今は其文を約めて引たり、本書と合せ見て知るべし。）また肘後方の自序に。余既窮覽墳索。以著述餘暇。兼綜術數。省仲景元化金匱綠秩。劉戴祕要。黃素方。近將千卷。（此の文は上に引く雜應の卷に、余見戴霸華陀所集金匱綠囊、崔中書黃素方、及百家雜方五百許卷、と云ふ文に當れど、及百家雜方五百許卷を、近將千卷の四字に約めて、劉戴祕要と云ふ語を加へたるなり、但し此の四字、本書に、金匱の上に入りたるは錯亂なり、故今改め鈔しつ、）患其混雜煩重有求難得。故周流華夏九州之中。收拾奇異。捃拾遺逸。選而集之。使種類殊分。緩急易簡。凡為百卷。名曰玉函。然非有力不能盡寫。（こは雜應卷なる、余所撰百卷、名曰玉函方、皆分別病名、以類相續、不相雜錯と云へるに當れる文なり、稚川翁の正道を問ひ、古書を尋ぬるに勞かれしこと、其本傳にも尋書問義不遠數千里、跨嶺冒涉期於必得、遂究覽典籍と見えたり、思ひ合すべし、）又見周甘唐阮諸家。各作備急。既不能窮諸病狀。兼多珍貴之藥。豈貧家野居所能立辦。又使人用鍼。自非究習醫方。素識明堂流注者。則身中榮衛尚不知其所在。安能用鍼以治之哉。是使凫雁執擊。牛羊搏噬。無以異也。雖有其方。猶不免殘害之疾。（こは雜應の卷に、甘胡呂付と云へるより、安能曉之哉、と云ふまでに當れる文なり、）余今採其要。約以為肘後救卒三卷。率多易得之藥。其不獲已須買之者。亦皆賤價草石所在皆有。兼之以灸。但言其分寸。不名孔穴。凡人覽之可了其所用。或不出乎垣籬之內。顧眄可具。苟能信之。庶免橫禍焉。（こは雜應の卷に、其九十三卷、皆單行徑易、籬陌之間顧眄皆藥、衆急之病無不畢備、家有此方可不用醫、と云へるに當れる文なり、是をもて九十の字の、疑なく卒なることを辨ふべし、既に論語にも、卒の字を五十に誤れりと云ふ例も有り、）世俗苦於貴遠賤近是古非今、恐見此方無黃帝。倉公。和鵲。俞跗之

目。不能採用。安可強乎。と云へり。今此の序文を觀るに。正に雜應卷に記せる語を。序文體に改め記れし文にて。共に世人の横夭を救はむと。懇切に諭されし文意。また二書を撰ばれし旨もいと著明に知られたり。然るに雜應卷に。戴覇とあるを。肘後方には仲景と有り。今此を考ふるに。雜應の卷に。華陀といふ姓名にて記せるを。肘後方の序には。元化と云ふ字を書たるに準へ思ふに。仲景といふも。戴覇と云へる人の字とこそ聞えたれ。(そは同じ稚川翁の文にして、かく相違ある事は、殊に深く心を止めて考ふべき事なり、華陀が字を元化と云ひしことは、史傳に見えて人あまねく知れり、)また稚川翁の本傳に。金匱藥方とあるを。雜應の卷。また肘後方の序に玉函方とあり。然れば。稚川翁の撰べる百卷の方書は。かく二名を稱し。また二名を合せて。金匱玉函方とも稱して。其の金匱てふ名は。戴覇字は仲景が方書の古名を用たると聞えたり。(そは雜應の卷に、戴覇金匱と云ひ、肘後の序には、仲景か金匱とあるにて論なし、)斯て其の方書は。全書今傳はらず。今存る金匱玉函要略といふ書は。其の金匱玉函方を。晉末に出たる。王叔和が要略せる書なり。(そは其の書の始めに、晉の太醫令王叔和集と有るにて所知たり、王叔和は、稚川翁より後の人なること、下に委しく論ふを見るべし、)然るに其の要略せる本すら。久しく湮沒して。再び世に顯れたるは。趙宋の世になむ有りける。(但し周禮疾醫職の、唐の賈公彥が疏に、張仲景金匱云、神農能嘗百藥則炎帝者也、と云ふ文あり、今の要略本に此の文なきは、賈公彥が見たるは、其の本書の殘缺などにや、)其はかの書の林億等が序文中に。翰林學士王洙。在館閣日。於蠹簡中。得仲景金匱玉函要略方三卷。上則辨傷寒。中則論雜病。下則載其方幷療婦人。乃錄而傳之士流才數家耳。以其傷寒文多節略。故斷自雜病以下。終飲食禁忌。凡二十五篇。除重複。合二百六十二方。勒成上中下三卷。依舊名曰金匱方論。と有るにて知るべし。(こを得たる時は、宋の仁宗が代なること、文獻通考及び徐鎔本の按に見えたり、)偖林億等が校正本に、題名をば金匱要略方論と題して、此の序

文に、此を得たる由を云へる所には、金匱玉函要略方と云ひ、下文には、依舊名曰金匱方論と云へるは、孰れ古名なりと云ふこと、詳ならず聞ゆれど、金匱玉函要略方といふが、元本に題せる名にて、金匱方論と云ひ、金匱要略方論など云へるは、林億等が私に略せる名と聞えたり、）稚川翁の撰べるは百卷なるを、約めて三卷と爲たるが故に。要略の字をば加たるなり。（また其の約むる時に、王叔和が自の意を攙入れて書成たりと見えて決めて稚川翁の本ならぬ文ども、多く見えたり、其は擇びて删り去るべし、）さて此を林億が序に。仲景の金匱玉函要略方と有れど。それ實は稚川翁の玉函方なるに疑なき事は。右序文の次に一字低して。仲景の金匱。錄岐黃素難之方。近將千卷。患其混雜煩重。有求難得。故周流華裔九洲之內。收合奇異。捃拾遺逸。揀選諸經筋髓。以爲方論一編。其諸救療暴病使知其次第。凡此藥石者、是諸僊之所造。服之將來固無夭橫。或治療不早。或被師誤。幸具詳焉。と有る文を熟く察て知るべし。（世の醫學者らの出せる本どもに、初發の文を、仲景の金匱錄。岐黃素難之方、と句せるは非なり、下に辨ふるを見て知るべし、）此の文まさに稚川翁の。原本に記されし小序なるを。王叔和が要略せる時に。發端の文に。彼がさかしらを加へて遺せるなり。其は何となれば。仲景の金匱と云ふより。將千卷と云ふまで十五字は。上なる肘後方の序に。省仲景元化金匱綠秩。劉戴秘要。黃素方。近將千卷。とあるに當れば。原本にしか有りけむを。まづ元化秩劉戴秘要の七字を刪去り。綠の字を錄に改めて。黃素方の三字を殘し。岐難之の三字を攙入して。錄岐黃素難之方と文して。素問難經などの方を採用して。此の書を造れる趣に誣たるなり。（然るは難經は更なり、素問にも何ばかりの方かは有る、心を平にして熟々思ふべし、此は王叔和が口氣にて、金匱要略は更なり、傷寒論、金匱玉函經などに攙入せるも、皆此の口氣を免れず、また僅に此ればかりの短文にすら、斯の如き奸文あれば、右の書等に攙入多きこと思ひやるべし、）然ればこそ。患其混雜云々と云ふより。爲方論一編と云までは。肘後方の序に。患其混雜煩重有

求難得。故周流華夏九州之中。收拾奇異。捃拾遺逸。選而集之。使種類殊分緩急易簡。云々と有ると同文にて。少しく文字の替れる耳なれ。此の文の存するに依て。要略三卷の原本。やがて稚川翁の玉函方百卷なること著明に知られたり。(然るに世々の醫學者ら、此の由を知らず、徐鎔が校本と云ふを始め、右の小序を删去たる本の有るは、最もをこなり。實は此の文これ。金匱玉函方の出自を知り、後人の攙入をも糺し察るべき證文にて、醫の爲には、金文玉章とも云ふべき物なるをや、)さて其の原本玉函方は。そのかみ古人の方論を多く採れりと聞ゆるに。右の小序。雜應卷肘後方序ともに。金匱てふ名を宗と出し。自撰の方書にも。金匱の字を冠れたるは。中にも其の撰者戴覇字は仲景を重じたりと見ゆれば。其の子書中に。其の人の傳記ありやと尋ぬるに。至理の卷に。越人救虢太子於既殞。胡巫活絕氣之蘇武。淳于能解顱以理腦。元化能刳腹以澣腸。文摯衍期以瘳危困。仲景穿胸以納赤餅。此醫家之薄技。猶能若是。豈況神仙之道。何所不爲と有るのみにて。其の時處位を知るべき文なし。(文摯より赤餅まで十六字、坊間の本に落たり、今は孫星衍が校本に從れり、徐堅が初學記に、此の文を引たるには、衍期を愆筋とあり考ふべし。)抑仲景といふ人。稚川翁のしか重むじ。且その世遠からぬ人と聞ゆるに。後漢書。三國志などに其の名だに見えず。右に擧る稚川翁の書等を除て。正しき書にては。晉書の。皇甫謐字士安が傳に載たる。釋觀の文に。士安その身の多病を歎きて。黃帝創制於九經。岐伯剖腹以蠲腸。扁鵲造虢而尸起。文摯徇命於齊王。醫和顯術於秦晉。倉公發祕於漢皇。華佗存精於獨識。仲景垂妙於定方。徒恨生不逢乎若人云々といへる耳なり。(皇甫謐は、西晉の初代武帝に仕へて、其の太康三年と云ふに、六十八歲にて卒れる人なれば、此を逆さまに推上せて計ふるに、後漢の獻帝が建安二十年に生れたる人なるを、其が作れる文にかく記せるは、仲景てふ名の物に所見たる初めにて、是より古きは有ることなし。)然れども、唯に仲景とのみ言へれば。此の文にては。姓名とも字とも詳ならず。然るに此を南陽の

張機と云ふ人の字と爲たるは。彼の傷寒論の序に。南陽の張機著とあると。王叔和が撰べる脈經に。傷寒論なる方論を採りて。張仲景と稱せるとに據て。後人の定めたる事なるが。此は實に然も有べし。(此を除きて、晉以前の古籍に、張機字は仲景と載せる書は有ることとなし、其より後の書には、しか載せるが數多あれど、古き證とはなし難し、そは下にとり總て論ふを見るべし)然るに。稚川翁の著書どもに據ときは。上にも記せる如く。戴覇字は仲景と云ひし人と聞ゆるは。最も不審しき事にぞ有りける。故爰におのれ。年ごろ思ひを潭めて考ふるに。此の人の傳の詳ならぬは。深き由ある事にて。此は別に大陰德を修する眞人の。わざと寓名を種々に稱して。其の實名を深く祕せるを。稚川翁また其の旨を得て。其の方論は採つゝも。其の法を守りて。其の實名をば顯さゞる也けり。(宜しこそ、二千載に近く、其の本傳の知られざりけれ、稚川翁の博學抱朴たるに、他人の撰せる書をとり、其の題名をさへに用ひつゝ、其の人の事實を云はざるは。心を著べき事ならずや。

但し此は己が心にこそ有れ、傷寒金匱を、稚川翁にかけて論へる人すら有ることとなし)然るはまづ。傷寒論の序に。漢長沙の守と有れど。是寓言なり。其は近く。水戸の原昌克と云ひし人の。叢桂偶記といふ書に。張仲景不詳何時人。傷寒論自序。世人多疑其僞撰。而言仲景後漢建安中之人。而官至長沙太守。是以自序爲自序者也。范曄後漢書。只有張氏爲南陽族姓之語。果其有張機字仲景。南陽人。而學同郡張伯祖。著經方大有時名。則何不與郭玉華佗等同傳。(此の昌克が說は、かの自序をも取ざる趣なれど、彼の序は實に撰者の自序なるに論なし、其は下に辨ふるを見るべし)靈帝時孫堅守長沙。(こゝに後漢書劉表が傳に、初平元年長沙太守孫堅とある文。また靈帝紀中平四年の處に。長沙太守孫堅とある文をも引て證と爲たり。)及袁術有南陽。以蘇代領長沙。(こゝには後漢書の袁術が傳、また司馬彪が戰略を引て證とせり)建安三年長沙太守張羨。率零陵桂陽二郡畔劉表。(こゝにも後漢書劉表が傳、魏志桓階が傳を委しく引て證と爲たり、劉表は荊

州太守にて、此間は長沙を併せ持たる故に、かく云へるなり。）羨卒子懌嗣爲二長沙太守一。劉表併レ之。以二韓玄一爲二長沙太守一。（こゝには魏志なる劉表傳、蜀志黃忠傳を引て證と爲たり、或る說に劉表傳の注に、英雄記曰、張羨南陽人とあるを引て、仲景は羨が族にて、表が羨を破れる後に、仲景を代らしむるかと云へれど、信るに足らず。）表卒子琮代立。遣レ使請レ降。曹操平二荊州一。辟二劉巴一爲レ椽。使レ招二納長沙零陵桂陽一。（こゝには蜀志劉巴傳を引きて證と爲たり、）曹操敗二於赤壁一。引レ軍歸レ鄴。先主表二劉表長子琦一爲二荊州刺史一。又征二四郡一。長沙太守韓玄降。先主使三諸葛亮督二零陵桂陽長沙三郡一。（こゝには蜀志諸葛亮傳を引きて證とせり、先主とは蜀の劉備がことなり、）又擢二廖立一爲二長沙太守一。（こゝには蜀志廖立傳を引て證と爲たり、）長沙既非二漢家有一。後終屬二于吳一。（こゝには蜀志建安二十年の文を引て證と爲たり、さて呂克が此の考へに似たる說、田宮の仲宣といひし人の。嗚呼矣草と云ふ物にも記せり、然れど此の考の如くは委しからず、）由レ是觀レ之。靈獻之閒。似レ無下令三仲景守二長沙一之日上也。諸書所レ記仲景不レ一。皆出二于附託一。特以二皇甫謐所說一爲レ古。其他不レ足レ言焉と云へるは。實に然る說なり。是を以て。漢の長沙の守とあるが。寓言なる事をまづ辨ふべし。（右の呂克が說は、なほ精く長かるを、今は所狹くて、右の如く約めたり、其の偶記に就きて見るべし、）さて呂克が說に。皇甫謐が所說を爲レ古と云へるは。上に引きたる釋觀文と。また皇甫謐が撰と云ひ傳ふる彼甲乙經序に。漢有二華佗。張仲景一。仲景見二侍中王仲宣一。時年二十餘。謂曰君有レ病。四十當二眉落一。眉落半年而死。令レ服二五石湯一可レ免。仲宣嫌二其言忤一受レ湯勿レ服。居三日見二仲宣一謂曰服レ湯否。仲宣曰已服。仲景曰。色候固非二服レ湯之胗一。君何輕レ命也。仲宣猶不レ言。後二十年果眉落。後一百八十七日而死。終如二其言一。雖二扁鵲。倉公一無二以加一也。華佗性惡矜レ技終以戮死。仲景論二廣伊尹湯液一爲二數十卷一用レ之多驗。近代太醫令王叔和撰二次仲景一撰論甚精。指レ事施用。とある說とを云へり。（此の文また甚く約めて引たれば、委くは本書を見るべし、仲宣とは、魏の曹操に仕へし王

桀と云ふ者の字なり、)釋觀文は然る事なれど。甲乙經を。皇甫謐が所説と爲して引用せるは非なり。そは彼の經の初めに。皇甫謐撰と有れど。此は疑なく後人の名を託せるなり。其の由は晉書の本傳に其の著述の種々を擧たる中に。此の書の目なく。且その著述に。帝王世紀。高士傳など云ふも有りて。史學に長たる人なるに。彼の自序と云ふに。伊尹撰用神農本草。以爲湯液と云ひ。仲景論廣伊尹湯液爲數十卷とも云ひて。伊尹を醫を知たる人と爲たるは。皇甫謐に有るまじき妄説なり。(山田正珍の敗鼓錄に、伊尹は殷の湯王の大臣にて、醫術を知れる人に非るを、甲乙經に右の如く云へるより、後世の愚醫輩、動すれば伊尹を以て、醫をも爲たりと説く、此は鶡冠子に、伊尹醫殷、太公醫周、范蠡醫越、管仲醫齊、と有るより附會せるならむと云ひ、丹波の元簡主の醫賸にも、此の事を論ひて、漢書藝文志、湯液經法十六卷、豈伊尹所作耶、活人書、衞生寶鑑等、伊尹湯液論、所謂湯液雖今無傳、其出於後人之依托明矣と云はれしは、共に然る説にて、醫壘元戎に、傷寒金匱要略、皆張仲景祖神農、法伊尹、體箕子作也と云へる類は論ふにも足らず、偕墨子貴義篇にも、殷湯が言に、伊尹之於我國也、譬之良醫善藥也と云へることと見ゆ、正珍の引たる鶡冠子の文は、其の世賢篇といふに見えたり、)また近代太醫令王叔和云々。といふ語もいと謂なし。然るは皇甫謐は。晉の初代武帝に仕へて。其の代に死たる人なれば。王叔和。晉の世の人とは聞ゆれど。皇甫謐が前に近代と指べき代無き物を。皇甫士安いかで然る拙文を作らむや。(若しひて此の文を採むには。王叔和を魏の世の人とや云はむ。然れども彼れが撰める脈經に、晉の太醫令王叔和撰と書たれば。晉の世の人なるに論なし)。抑この王叔和と云ふ人。傷寒金匱を撰次せるに由りて。其の名は高けれど。晉書に傳も所見も有ること無く。何時の人と云ふこと。古書に其の議なき故に。唯かの甲乙經の序に據りて。西晉の人と。人は愚に思ひ居れど。此は疑なく東晉の末世ごろに出たる人なり。(金匱玉函經の林億等が序に、王叔和西晉人、爲太醫令と云々と言ひ、李濂が醫史に、王叔和高平人

也、仕西晉爲太醫令と云へる類は、更に證なき說なり、）其は何を以て云ふなれば。稚川翁は西晉の初代。武帝が太康二年と云ふ年に生れて。八十一歲にて。東晉の穆帝が升平五年に仙去せるに。其の撰ばれし金匱玉函方を要略せるを以て。稚川翁より後の人なること著明なり。（稚川翁のことは、晉書の本傳に、徒に年八十一とのみ有りて、其の終りの年を云はざれど、己その子書に委しく徵して、太康二年の生れ、升平五年の仙去と考へ定めたり志都能石屋に委く云へり、（志都能石屋とは、予が殊に神醫道の淵源を論へる書の名なり、下これに效ふべし。）なほ言はゞ。彼が撰める脈經の自序に。古醫の姓を數擧て。其所傳異同咸悉載錄と云へる中に。葛といふ姓を擧たるは。稚川翁を除きて誰か有らむ。然れば王叔和は。稚川翁より後なる。晉末の人なること疑ひ無し。（皇甫謐は、武帝が太康三年に死たれば、王叔和はそれより百年餘りは後の人なり、甲乙經もし皇甫謐が作ならむには、王叔和が事實を載すまじきこと、是を以て辨ふべし、）さてかく時代を定めて考ふるに。

彼の甲乙經は。王叔和よりもなほ遙に後の人の。彼れが脈經の說に黨するが有りて撰れる物なり。其は晉亡びて。謂ゆる劉宋の世を經て。齊の世と革りての頃にや出來にけむ。王叔和に然ばかり遠き人ならずは。右の如き時代の誤りは有るまじき物をや。（是をもても彼の序に、仲景の事實を記せるが、皆妄なる事を辨ふべし、此の僞書出來てより以來和漢の醫學者、こゝに心つける人なく、動すれば、彼の書を引出て證とせるは、いと固陋なる事ならずや、）但し其を皇甫謐と爲たるは。彼の序に吾病風加苦聾云々。と書たるを思ふに。其の本傳に多病なりし事の見たるに思ひよせ。病て醫を學べる趣に其の撰を彼に依托し。また扁鵲が齊の桓公の色を望て。豫に其の病を察たりと云ふ事などを思ひて。仲景見侍中王仲宣云々の事をも造れりと聞ゆ。史書に其の傳を載ざらめやは。（然はあれど、彼の經の本文は。古書を採り集めたりと見えて、中には取用ふべき說も少からず、故今深く案ずるに、稚川翁の子書遐覽の卷に、其の師鄭思遠より

傳受せる書等の目を擧たる、醫書類と思はるゝ中に、甲乙經一百七十卷と載り、皇甫謐が撰と稱する甲乙經、もしくは後人此の甲乙經の殘缺本を得て其の由來をえ知らず、謾に他言の說をも攙入などして、皇甫謐が名を假りて、人の信べく取成たる物にもや有るべき、其の書の題名も精しくは、黃帝三部鍼灸甲乙經と有るを以ても、其のもとは、玄家に出たる書ならむと推量られたり、〕さて其の甲乙經に。右の妄說を載たるより以來。それに本づきて。種々の說ども出來し中に。趙宋の世に。かの林億等が校正せる傷寒論の序に。張仲景漢書無傳。見名醫錄。云。張仲景南陽人。名機。仲景其字也。擧孝廉。官至長沙太守。始受術於同郡張伯祖。時人言。識用精微過其師。所著論。其言精而奧。其法簡而詳。非淺聞寡見者所能及。自仲景于今八百餘年。惟王叔和能學之。と有るを人多く信用ふれど。まづ其の名醫錄と云ふ書。此より以前の物に聞えたる事なく。當昔の古書にては有べからず。決めて甲乙經よりも後の書なり。また長沙太守ならぬ事は。上に記せる原昌克が說にて明なり。張伯祖と云ふ人の事實も古き物に見えず。總ての事實うち符たる證なければ信られぬ事なり。〔或人々は、其の名醫錄と云ふを、唐書の藝文志に、甘伯宗名醫傳七卷の目あり、其かと云ひ、若くは梁の陶弘景が名醫別錄を云かとも云へり、よし其らの書を云ふとも、其れはた遙に後の物なれば、證と爲がたし、〕また明陶宋儀が說郛に採れる古琴疏と云ふ物に。張機字仲景。南陽人。受業于張伯祖。精于治療。一日入桐柏覓藥艸。過一病人求診。仲景曰、子之腕有獸脈何也。其人以實具對。乃嶧山穴中老猿也。仲景出囊中丸藥畀之。一服輒愈。明日其人肩一巨木至曰。此萬年桐也。聊以相報。仲景斲爲二琴。一曰古猿。一曰萬年。とあるは。彼の傷寒論の序に據りて。かゝるをかしき妄說を云ひ出したる物なり。〔そは業を張伯祖と云ふ人に受たりと云ふこと、總て宋の世頃の書に見え始め、老猿が診を求めたりと云ふ說は、かの黃帝の世に、馬師皇といひし人の許に龍の降り來て、診を請たりと云へる事など驗案て、作り出たる妄說とこそ聞えたれ、此の外

にも宋の世以來の書にては、太平廣記に、何顒妙有知人鑒、初郡張仲景總角造顒、顒謂曰、君用思精密、而韻不能高、將爲高醫矣、仲景後果有奇術云々と、彼の王粲を見て、病を指たりと云ふ妄説を記し、張果が醫説、馬端臨が文獻通考などにも其の事を記し、趙開美が仲景全書に引たる醫林列傳、李濂が醫史など、其のほか數の書どもにも其の事を載せれど、用ふべき説は有ること無し。）和漢古今の醫學者たち。然すがに。上の件の書ども。本據と爲がたきに苦みて。北に訪ひ南に走りて求めつゝ。宋の世に羅貫仲といふ者の戯作せる三國志演義。またかの明の世に徐道と云ふが寓作せる。神仙通鑑など云ふ物をさへに引き出て。其の證に備へたる倫もあるは。傍痛きわざにこそ。（三國志演義の説は、吳の孫權が臣に、張松と云ひしもの、魏の楊脩と對問の條に、脩又問曰、蜀中人物何如、松曰、文有相如之賦、武有管樂之才、醫有仲景之能、卜有君平之隱、九流三敎出乎其類拔乎其萃者、不可勝紀、豈能盡數也、と云へる是なり、此は蜀中の人物の盛なる由を、古人の其藝に勝れたるに比して云へる語なるが上に、作り誕なれば論ふに足らず、然るを方有執が傷寒條辨に、張松北見曹操、以其川中醫有仲景爲誇、以建安言之、則松亦仲景同時人と云へるは、此の演義に據て云へる説と聞ゆ、神仙通鑑の説は、其書に漢の世ごろの事を云へる所に、元嘉辛卯の冬、桓帝感寒疾、發熱不止、大醫調治無效、廣徵良醫、傳驛有擧長沙太守張機、深達軒岐、尅期召入、病經十七日、機診視曰正傷寒、擬投一劑、品味輙乃兩計、密覆得汗如雨、及旦身涼、留機爲侍中、初學陽勵公之傳、見朝政日非、曰、君疾可愈國病難醫、遂掛冠遁去、隱少室山著金匱玉函諸書、陽勵公後來引去と云へる是なり、此れをも證に引ける人あり、笑ひに堪ず。）然も有らば張機字は仲景と稱へるは。何處のいかなる人ならむと云はむに。此は葛稚川翁の從祖とある。太極左宮葛玄字孝先と云ひし人の。いまだ仙去せざりし以前に。神仙の方法を傳受して。醫方書を記せるが。（其の方書は即傷寒雜病論十六卷、また稚川翁の書等に、戴覇金匱、仲景が金匱などあ

る是なり、なほ其傳來せる由は末に云ふを見るべし。)仙道の法によりて實名を易て。わざと然る寓名を物して。世に傳へたるにぞ有りける。(葛孝先の神仙道を得たる事は、列仙通紀に引たる呉書、また晉書に見え、稚川翁の從祖たる事も、晉書および抱朴子に見え、其の傳の委き事は神仙傳、また葛仙公傳などに見えたり、總ねて志都能石屋に考へ記せるを見るべし。)其は稚川翁の神仙傳に。老子の數名を稱せる由を解して。老子數々易名字。非但一聃而已。所以爾者。按九宮及三五經。及元辰經云。人生各有尼會。到其時。若易名字以隨元氣之變。則可以延年度厄。今世有道者亦多如此。老子在周乃三百餘年之中。必有尼會非一。是以名稱多耳とあり。是を以て神仙の道に。實名を祕して。寓名を稱する法ある事を辨ふべし。(九宮、三五經、元辰經などは、神仙の古經の名なり、其子書內篇遐覽卷に、其の師鄭隱に就て覽たる書目を多く擧たる中に、九宮五卷、三五中經一卷と見え、元辰經は、道藏目錄に本命元辰曆とある書なるべし。)孝先翁固より有道の人にし有れば。此の道法に依りて。其の尼會ありし時に。始めて神傳の祕方を人間に漏し。名字を易て元氣の變に隨ひ。陰德の功業を遂たるなり。(凡て神仙の道には、陰功を立ること專要とある成業にて、其の德を行ふ趣は、左方の爲ところ、右手に知しめず、右手の爲ところ、左手に知らしめずと云ふばかりに、陰に物する行なるが故に、陰德と云ふ、其の行ひ趣のことは、稚川翁の子書對俗卷に、玉鈐經を引きて、爲道者立功爲上、除過次之、以救人危、使免禍、護人疾病、令不枉死爲上功也、欲求仙者、要當以忠孝和順仁信爲本、若德行不修、而但務求玄道無益也とも、微旨卷に、自非積善陰德、不足以感神明云々なども見え、此のなか神仙道の經經に多く開示せり。)此の仙翁の然る尼會有りしこと。何をもて知なれば。傷寒雜病論の自序に。余宗族素多。向餘二百。建安紀年以來。猶未十稔。其死亡者三分有二。傷寒十居其七。感往昔之淪喪。傷橫夭之莫救。乃勤求古訓。博采衆方。

云々と有るにて知るべし。(此の建安紀年を、山田正珍ぬしの傷寒論集成に、明の李濂が醫史に、張機字仲景、漢靈帝時擧孝廉、官至長沙太守と云へるを引きて、由是觀之建安者傳寫之誤也、若彼建安獻帝年號、與下文感往昔之文不合也、考後漢書五行志、自建寧四年、至光和二年相去僅九年、大疫三流行、與所謂未十稔之文合若符契とあれど非なり、舊のまゝ建安にて宜し、然るを正珍ぬし彼の醫史に依れるは、此れまた仲景の本傳の詳ならぬに苦みてなり、彼李濂が說は、かつて據なき杜撰を拾へりとは知られざりしか、)然るは。建安は二十五年續きたるが。後漢書獻帝紀に。建安二十二年の是歲大疫すと見え。其五行志にも此の事を載し。其の註に。魏文帝與吳質書曰。昔年疾疫新故多離其災。魏陳思王常說疫氣云。家々有僵尸之痛。室々有號泣之哀。或闔門而殪。或擧族而喪者と云へり。即ち此時の事なり。(附後方なる稚川翁の語に、貴勝雅言總呼傷寒、世俗號爲時行と見え、千金方にも、小品方を引きて、傷寒雅士之辭、云天行溫疫、是田舍間號耳とあれば、傷寒とは疫を云へり、)孝先翁は。上古に謂ゆる葛天氏の末裔にて。先祖より丹陽の豪族なるが。稚川翁の父祖たち代々吳に仕へて。大官を受たりしかば。其の宗族の多有けむこと著く。かつ內篇道意の卷に。吳の太帝が時の事を記して。吳曾有大疫。死者過半とも有り。孝先翁は。太帝が招請をうけて。其の頃かしこに留りて在しかば。建安紀年より。其の大疫の年までに。其の宗族の多く疫にて死たりけむを。未十稔云々と云へりと聞ゆ。是をもて下文に。感往昔之淪喪云々。と語を結べるなり。甚よく符へるに非ずや。(紀年とは、十二年爲一紀とも云へば、建安の末年ごろを廣く云へる語なり、此を元年の事として、漢書武帝紀に、元狩元年以天瑞紀元、とあるを引きて說をなす人あれど非なり、さるは廣韻に、紀極也會也と見えて、已に從ふ字なるに、豈元年に用ひむや、然れば此は、建安の末年頃より、と云ふ義に見むに難なし、)故是を以て。戴覇とも仲景とも。張機字仲景とも數名を稱し。漢長沙守とさへ寓言して不分明しく。醫方書の事に就ては。深

〻、其の實名を祕し。其の德功をのみ世に布分せるなり。（また彼の雜應卷に、崔中書が黄素方と有を肘後の序には、其の名を云はず、然るに隋書の經籍志に、張仲景方十五卷と有る下に、仲景後漢人、梁有黄素藥方二十五卷亡と註し、醫方論七卷と有る下に、梁有張仲景辨傷寒十卷、療傷寒身驗方三卷、張仲景評病要方一卷亡ぶと註せるを思ふに、梁の七錄には、黄素方を仲景の書と爲たること著し、然れば崔中書と云へるも、上に論へる崔文子ならで、孝先翁の寓名ならむも知るべからず、新唐書に、謝泰黄素方二十五卷、と有るは同名異書なり、其は上の黄素方は、隋の世に既に亡たればなり、此に就てまた案ふに、劉戴が祕要方と云ふも、孝先翁の書には非じか、其は上に擧たる隋志の文に、張仲景評病要方、肘後百一方に、張仲景諸要方など、名の似通ひて聞ゆるを思ふべし、張機と云ふ名を著せる書は、傷寒論の外に、舊唐書經籍志道家部に、玄書通義十卷張機撰、また新唐書神仙家部にもかく見え、宋の藝文志に、張機金石制藥法一卷など見えたり、）さて其數名の中に。張氏をしも稱れるは。厄を免る丶古傳の因緣ある事なるにや。（若くは二十八宿の中に、張宿は主天厨飲食賞賚之事、又主長養萬物、と天文の書どもに有る謂などに依る事なるか、）既く戰國の時に。范睢と云ひし人、魏國にて厄難に遭ける時に。其の處を遁れて名姓を更め。張祿と稱ること史記に見え。漢の王符が潛夫論に。留侯張良韓公族姬姓也。秦始皇滅韓。良弟死不葬。良散家貲千萬爲韓報讎。擊始皇於博浪沙中。誤推副車。秦索賊急。良乃變姓爲張匿於下邳云々。皇甫謐が高士傳に。初良易姓爲張。自匿下邳云々。と有るに思ひ合されたり。（史記漢書の傳には、良乃更名姓とのみ有りて、もと姬姓なりしが、張と爲れる事は記さず、偖この張良、また玄學の偉人なりし故に、其の法を用ひて、張姓とは變れるなり、）また南陽とも云へるは。彼處は殊に張氏多有しかば。其の族姓の如く以成して。實名を匿せる物なり。（南陽に張氏の族類おほき事は、後漢書に、張氏は爲南陽族姓と見え、潛夫論に古より張姓の多かりし事を云ひて、至漢張姓滋多、閭里無不

有張者と有るにても知るべし、或る説に、華佗が密に獄を逃れて名姓を更め、張機字仲景と稱せるかと云へるは、據なき非説なれど、名姓を更めたらむとしも云へるは、余が意を得たる説にては有るなり、また何にか有りけむ小説の中に、身を忍ぶ者の姓名を隱して、張氏を稱する事を記せる物ありきと覺ゆれど、其の書名を忘れたり、(松浦道輔云く、西土の俗に、微賤の者を廣く云ふ時に、張三李四と云ふこと、小說に多く見えたり、張は師說の如く、李は老子の姓なるに就きて、思ふに、總て人の尼會に遭ひて姓名を更るは、多く此の二姓の內を用ふる故に、此の姓の人は、出自混亂せるより轉じて、無名徒の稱と爲れるなるべし)なほ傍證を擧て云はむに。晉書の藝術傳に。鮑靚字太玄。其の學內外を兼て。飢る時は白石を煮て食せる事を載たるに。稚川翁の內篇雜應卷に。以引石散方寸匕。投一升白石子中。以水合煮之。立熟如芋子。可食以當穀也。張太玄擧家。及弟子數十人。隱居林某山中。以此法食石十餘年。皆肥健と記せり。鮑靚は孝先翁の弟子にて。

稚川翁の婦翁なり。是また有道の人なる故に。これも姓を易て張氏を稱せるにて。卽ちその師の道に依れるなり。(鮑靚は、前生に曲陽の李家の子なりしが、九歲の時に、井に墜て死たる事を覺え居て、五歲の時に、父母に語れる人なり、稚川翁の婦翁なること、稚川翁の本傳に、鮑玄亦內學、逆占將來、見洪深重之、以女妻洪と有るにて知るべし、內學とは、神仙方術の學を云ふ、此に對して、儒者の學をば外學と云ふ、鮑靚の傳に、學兼內外とあるは、卽ちそを兼たる由なり、神仙導養の學を、內學と稱するは、甚古き事なる故に、かの素問靈樞をも、內經とは云ふなり、然るを佛法渡りて後に、佛法者その語を竊して、佛道を內と稱し、他の道を外道とぞ云ふなる、此は因に少か驚かし置なり)さて鮑靚が孝先翁の弟子なること。何を以て知なれば。神仙傳に。孝先翁の仙去する時の事を記して。語弟子張太言曰云々とある。言は玄と音近きが故に相ひ通じて書たるか。また字形の相似たれば。寫し誤れるか。何にも謂ゆる張太玄なること疑なし。(人名の字を、近音同音に

て異字を書たる例は、下に擧る葛奚を葛系とも書き、華陀が名をも、駝とも佗とも書たること、上に引たる書等のごとし、古くはなほ例數あり、偖新唐書子類の部に、張太玄が平臺百一寓言三卷の目あり、鮑玄の選なるか、）孝先翁は。呉太帝が赤烏七年八月に。八十一歳にて仙去し。（こは謂ゆる三國の時にて、蜀後主が延熙七年、魏齊王が正治五年に當れり。此の年より八十一年おし上せて考ふるに、漢桓帝が延熹七年の生れにて、彼建安は、三十歳餘りより、六十歳に近きまでの間なり、建安紀年と云へるに、よく符へるを思ふべし、孝先稚川の二翁ともに、九々八十一歳にて仙去せるは、由ある事なり、志都能石屋に云ふを見るべし、）鮑靚は。東晉の明帝が世頃に。百餘歳にて仙去しつれば。彼赤烏七年の頃は。鮑靚二十歳ばかりの時に當れり。然れば此の年頃もまた能く符合へり。（孝先翁は、左慈字元放の弟子なるが、左元放は、建安の末年頃に仙去せり、然るに仙傳類の書どもに、鮑靚を元放の弟子なりと云へる説あれど、鮑靚は、魏文帝が黄初五年頃の生れと聞ゆれば、元放の仙去せるより、十年ばかり後なる故に、時代合はず、此は孝先翁を師とせる事を訛れる説なり、右の人々の生年、また其終りの年頃の事など、志都能石屋に、諸書を引て考證せるを見るべし、）さて孝先翁の。醫方術に精練なりし事は。其の傳に。常服二餌朮一。尤長二於治病一。鬼魅皆見レ形。或遣或殺。能絶穀連年不レ饑。と有るにて明なり。（神仙の中に、治病の術を知ざるは、一人も有るまじき中に、孝元翁をしも、尤長二治病一云々と記せるは、稚川翁の密に潭く思へる旨の有ればなり、偖寓名を用ひざる以前の撰と聞えて、隋志に、狐剛子萬金訣二卷、葛仙公撰と見え、唐書に、葛仙公錄狐子方金訣二卷とあり、宋志に、葛仙公杏仁煎方、删繁要略方、集諸要妙方、備急簡要方、纂驗方、養性益壽備急方、奏聞單方反魂丹方、玄明粉方、瘰癧方など各一卷の目あり、凡て藥石方術の書と聞えたり、）さて其の仙去の以前に。從弟葛奚に。眞道未レ絶吾昇擧之後。當下生二睿哲雅素通玄之子一。遯レ世高尚曠志淸虛。振中起仙裔上矣と云へりしが。果して葛奚の孫に稚川翁を生せり。（此の事は列仙

通紀に見えたり、奚を晉書には系とあり、葛奚の子を葛悌と云ふ、其の子は卽ち稚川翁なり、是を以て、孝先翁を、吾が從祖とは云へり、但し葛奚に遺言のこと、神仙傳に載ざるは、吾が事をまだきに云ひ遺せる語なればなり、然るを幸にして通紀に殘れり。)また其の仙去の時に。鄭思遠。張泰など云ふ弟子等に。神仙の祕經を付與して。吾昔從二左元放先生一受。今付二汝等一。九天禁重。勿レ示レ非レ人。若有二至心之士一傳授。と言を遺せる事もありて。凡ならぬ神仙翁にてぞ有りける。(此の事も通紀に見えたり、鄭思遠は晉書に鄭隱とあり。思遠は其の字なり、卽ち稚川翁の子書に、吾が師鄭君と云れしは是なり、張泰とは、決めて鮑靚の寓名にて、張泰字は太玄と稱して、字をば其の儘にて、姓名ばかりを易たりけむ、但し雲笈七籤に引たる道敎相承錄には、張泰と數所に有り、然れば泰は誤字なるか。)然れば稚川翁の內學は。鄭思遠に金丹の法など諸の祕術を授かり。鮑太玄には。醫方の術を受たりけむ。其は本傳に。從祖玄。吳時學レ道得レ仙。號曰二葛仙公一。以二其煉丹祕術一。授二弟子鄭隱一。洪就レ隱學。悉得二其法一焉。後以レ師二事南海太守鮑玄一。洪傳二玄業一。兼綜二練醫術一。と載たるを以て知るべし。(鮑玄とは、卽ち鮑靚字は太玄、と云ふを略して云へるにて、顏回字は子淵を顏淵と云ひ、宰予字は子我を宰我と云へる類にて、外にも例あまた有り。)さて孝先翁の藥石方術かく由來して。稚川翁に傳へたるが。孝先翁その仙去の以前に。藥石の方書をば。旣く世に顯はし傳へてぞ有りける(其の顯はしたる年頃は、かならず魏晉の間なり、そは自序に、建安紀年以來猶未二十稔一、と有るにて推量られたり、)是を以て晉の世の初め。皇甫謐これを見て。其の釋觀の文に。仲景垂二妙於定方一とは記せるなり。然れども右の謂あるが故に。其の方書の名をも種々に題し。撰者の名をも。戴竊とも。仲景とも。張機とも著して紛錯しけむ。(方書の名を一定せざりし事は、稚川翁の書等には、仲景の金匱と有るを、傷寒論の自序には、傷寒雜病論とあり、隋書の經籍志に、張仲景方十五卷、療婦人方二卷、梁に張仲景辨傷寒十卷、黃素方二十五卷、傷寒身驗方三卷、評病要方一卷あ

り、唐書の藝文志に、張仲景藥方十五卷、傷寒卒病論十卷など見え、肘後百一方には、張仲景諸要方と云へり、猶有るべし、さて其の書どもの中に張仲景方は、皇國にも早く傳はりて、寛平の頃に、藤原の佐世朝臣の錄せる、見在書目錄に、張仲景方九卷と載たり、此はかの張仲景方十五卷とある本を九卷に合せたるか、若くは缺卷なりしか、惜きかな、其の本今の世に見在せず、偖宋の藝文志には、張仲景脈經一卷、張仲景傷寒論十卷、金匱要略方三卷、張仲景撰王叔和集、張仲景療黃經一卷、又口齒方一卷、金匱玉函八卷王叔和集などあり、）此の方書ども魏晉の世頃に。既に流布して。醫家にも廣く其の方劑を用ひたりし故に。稚川翁の內篇至理卷に。今醫家通明腎氣之丸。內補五絡之散。黃耆建中之湯。將服之者皆致肥丁とも。理中四順救霍亂。麻黃大靑主傷寒。俗人猶爲不然也なども有り。思ひ合すべし。（此はみな金匱傷寒論などに載たる方なり、唯此の中に四順湯のみ漏たれど、其は肘後方に載たり、此は四逆湯と反對したる妙方なり、また大靑とは、大靑龍湯の事と聞ゆれど、若くは肘後方なる、大靑湯ならむも知るべからず、其また傷寒を治する良方なればなり、此等の藥方、是より以前の書に所見たる事なし、古今の醫學家、かゝる事の論だに無きは何にぞや）かくの如く世に弘めては有れど。其の實名をば蘊み祕して在ける故に。其の張機字仲景と云ふは。何なる人とも。世に知る人無りし故に。史籍に傳を載べき由なし。これ陰德を行ふ神仙道の本意にして。稚川翁すなはち其の法を守りて。其の實名を顯さず。其の寓名を用ひて。戴霸とも仲景とも稱へりし故に。後人ら據もなき傳を作り。建安紀年より。今吾が文政九年まで。千六百まり數十年。その實名陰德の顯れずぞ有りける。（然ればば今かく其の實を顯す事は、謂ゆる神仙の機密を漏す所爲にて、二翁の本意には背ふ事にて、罪得べきわざのごと所思れど、今また案ふに、そは猶いまだ、神仙道を成就せざらむ間こそ、其の陰德に賴りて、其の仙位に至る法にし有れば、憚あるべけれ、此の二翁ともに、疾く神仙の大位に至りて有れば、今し後學の、その道を奉る徒としては、

二翁の恩頼を、え知らぬ世々の醫學者などの、作り出たる妄説を聞くに堪へず、畏けれど、考への及ぶ限りは、其の德を顯はして、恩頼を辱なむべき事を、吾黨に告ぐべく所思て、かくは顯はし記せるなり。）さて上に引く皇甫謐が語に。仲景垂妙於定方と云ひて。彼の方書なる藥方どもを。仲景の定めたる物と思へるは。素より仲景の孝先翁なる事をも。また其の方論の由來をも。つゆ知らざりしが故なれど。かの方論は。悉く諸神仙の所造を傳來せる物なり。然るは。上に引きて論へる。今の金匱要略方論に。仲景の金匱云々と有る稚川翁の小序に。凡此藥石者。是諸僊之所造也云々と記せるを以て。諸神仙の方論を集記せること著し。（是を以て傷寒論の自序に、勤求古訓、博采衆方といひ、また彼の小序に、收合奇異とも、揀選諸經筋髓とも云へり、然るにかの小序を妄言と爲て、徐鎔が本に刪れるは、却りて甚き妄わざにぞ有りける。）かくて其の諸仙の方論は。孝先翁の師左元放まで。次々に傳へ來つるを、受たるが多かるは。言ふも更なるが。かく論ふは、稚川翁の内篇遐覽の卷に、其の師鄭子より受たる書目を多く擧たる中に、治百病經、行氣治病經、按摩經、導引經、服食禁忌經などを初め、醫經の口訣と聞ゆる書名の多きは、鄭子これを孝先翁に受け、孝先翁はこれを、左元放に受たりと所思ゆればなり。）其の元放は。顯界の師にこそ有れ。なほ幽界に入りて。老子を始め。數の神仙に出會して。道を問へること通紀に見え。また同書に。一日遊會稽間。逍遙自適。有會稽賈人。自海中還。過一神廟。忽睹廟吏。延賈人曰。欲寄一箋與會稽山葛仙翁。即以書函擲賈人船中。函蓋如釘。拔之不動。及還會稽。以白仙翁。仙翁接書函即自發。乃東華小童君書。題曰太極左宮仙翁閣下。字皆科斗古文。人因見其書。乃知仙翁名有天闕久矣。と云ふ事も見えたり。（此の事稚川翁の神仙傳にも見たれど、脫文ありて通え難ければ、通紀を引きつ。）然れば孝先翁の方術は此等の神仙より受たるが多かるを。稚川翁其の由來をも奉はりて。彼の小序に。右の如く記し置れしこと著明なり。（東華小童君を、また東華大神靑

童君、泰一小子なども稱ひて、萬國に醫藥方術を授けたる神なる事は、扶桑國考に其の大概を云ふを見るべし、此は殊に玄妙の旨ある事にて、古今の學者の夢にも知ざる事なりかし、然れば傷寒金匱の原本は、右の科斗書なりけむも亦知るべからず。）諾しこそ。傷寒金匱の正文の淵奥幽微にして。古雅また比類無りけれ。凡て然る神仙位に至るべき大偉人には。顯界の良師の外に。幽界より祐くる神師ある事なるを。是また天親地愛の人ならでは。顯に云はざる法なる故に。世人は得知らずぞ在ける。（そは東方朔が十洲記に、術家幽其事、道法祕其師、術泄則事多疑、師顯則妙理散と見え、漢武帝內傳に、西王母の語に、非其人謂之泄天道、得其人不傳、是謂蔽天寶、非限妄傳是謂輕天老、受而不敬是謂慢天藻、泄蔽輕慢四者、取死之刀斧、延禍之車乘也とも、同道謂之天親、同心謂之地愛、爲道者當相親授とも有るを思ふべし、世の漢學者醫學者など是らの書等をば、一向に信ずること能ざるは、固陋にして見聞少く、頑愚の質を高識として、環朗洞照すべき讀書の活眼なきが故なり、此の二書の事は、三神山考に、あら〳〵辨へたるを見るべし。）さて傷寒金匱の正文は。右に云ふ如く神雅なるに。傷寒論の自序の平穩なるは。これ孝先翁の慇懃に。凡庸を諭されし文なるが故なり。然るを本文と文格相似ざるを以て。僞託なりと議する倫も有れど。彼の本文は、諸神仙の口授を其の儘に記せるが故に。自然に古雅なるを。能くも辨へざるに因ての僻說なり。（中西惟忠と云ひしは、其の著せる傷寒名數解を見るに、文法事質を照應して、後人の攙入文を見得たる事、和漢の獨步と稱すべき器なるに、彼の自序を僞託と爲たるは、正珍ぬしの云へる如く、實に鹵莽と謂ふべし。）傷寒論集成に。此の序論を解して。實是感慨憤激之所發。所謂披心腹吐情實者。非後人自序其書以希售者比也。程應旄云。古人作書大旨。多從序中提出。故善讀書者。未讀古人書。先讀古人序。從序法中。讀及全書。則微言大義。宛然在目。余讀傷寒論之自序。竟是一篇悲天憫人文字。從此處作論。蓋即孔子懼作春秋之微旨也。と云へ

るは然る言なり。(かくて此の集成に、七徴を擧て、其の攙入文を删れる説ども、大概は宜しけれど、猶盡さゞる説あり、下に辨ふるを見るべし、)そもそも稚川翁の醫學は、孝先翁の學を傳來せるが故に、其子書に、醫事を談れる語ども、傷寒論の自序を敷延せる説多く、文法また甚た類せり、故今その正文を擧て、稚川翁の子書に、醫事を談れる條どもを、相ひ應ずる事どもを分注して證さむとす。(但し其の分註せる文は、こゝに專とある語をのみ摘記せること、云ふも更なり、委くは本書を見るべし、)論曰。余毎覽越人入虢之診、望齊侯之色、未嘗不慨然歎其才秀也。(越人とは扁鵲が名なり、此の二事ともに、史記の扁鵲傳に見えたり、稚川翁また、越人の術を稱歎せること、其の子書に往々見えたる中に、廣譬卷に、絶明者覩機理於玄微之未形、故越人見齊桓不振之徵未覺之疾と云々と云へり、)怪當今居世之士。曾不留神醫藥。精究方術。上以療君臣之疾。下以救貧賤之厄。中以保身長全。以養其生。(集成に、醫藥方術互文言之と解たれど、醫藥方術各別にて、ま

た互に相ひ合せて病を治する、是古への道なるが、方術は本にて醫藥は末なり、其は至理の卷に、此醫家越人救太子於既殞、胡巫活絶氣之蘇武、之薄伎、猶能若是、豈況神仙之道と云ひ、道意卷に、要於防身却害、當修守形之防禁、佩天文之符劍耳、然思玄執一、含景環身、可以辟邪惡度不祥、而不能延壽命消體疾也、任自然無方術者、未必不有終其天年者也、然不可以值暴鬼之横枉、大疫之流行、則無以却之矣、夫儲甲冑蓄蓑笠者、蓋以為兵為雨也、若幸無攻戰、時不沈陰、則有與無正同耳、若矢石霧合、飛鋒烟交、則知裸體者之困矣、洪雨河傾、素雪彌天、則覺路立者之劇矣、不可以誤晩學之後人、謂方術之無益也、と有るを以て知るべし、なほ末に論ふをも見よ、)但競逐榮勢。企踵權豪。孜々汲々。惟名利是務。崇飾其末。忽棄其本。華其外而悴其内。皮之不存。毛將安附焉。(勤求の卷に、凡人之所汲々者、勢利嗜欲也、苟我身之不全、雖高官重權金玉成山、妍艶萬計、非吾有也、是以上士先營長

生之事、長生定可以任意、若未昇玄去世、可且地仙人間、若彭祖老子、止人中數百歲、不失人理之懽、然後徐々登遐、亦盛事也、然決須好師、師不足奉、亦無由成也とあり、）卒然遭邪風之氣。嬰非常之疾。患及禍至。而方震慄。降志屈節。欽望巫祝。告窮歸天。束手受敗。齎百年之壽命。持至貴之重器。委付凡醫。恣其所措。咄嗟嗚呼（道意卷に、勞逸過度、而碎首以請命、變起膏肓、祭禱以求痊、當風臥濕、而謝罪於靈祇、飲食失節、而委禍於鬼魅、俗所謂率皆妖僞、轉相誑惑、久而彌甚、既不能修療病之術、又不能返其大迷、不務藥石之救、惟專祝祭之謬、祈禱無已、問卜不倦、巫祝小人妄說禍祟、疾病危急、富室竭其財儲、貧人假舉倍息、田宅割裂、以訖盡云々、雜應卷に、醫多承襲世業、有名無實、但養虛聲、以圖財利、寒白退士所不可得使、使之者乃多誤人、使腠理之微疾成膏肓之深禍、乃至不救、自閑其要、勝於迎無智之醫云々など見えたり、）厥身已斃神明消滅。變爲異物。幽潛重泉。

徒爲啼泣。痛夫。舉世昏迷莫能覺悟。不惜其命、若是輕生。彼何榮勢之云哉。（勤求卷に、深入九泉之下、長夜罔極、始爲螻蟻之糧、終與塵埃合體、令人怛然心熱不覺咄嗟、若心有求生之志、何可不棄置不急之事以修玄妙之業哉云云、）而進不能愛人知人。退不能愛身知己。遇災値禍。身居厄地。蒙々昧々。惷若遊魂。哀乎。趨世之士馳競浮華。不固根本。忘軀徇物。危若氷谷至於是也。（雜應卷に、但患居人間者、志不得專、所修無恒、又苦懈怠不勤、故不得不有疹疾耳、若徒有信道之心、而無益己之業、年命在孤虛之下、體有損傷之危、是以古之初爲道者、莫不兼修醫術以救近禍焉、凡庸道士不識此理、恃其所聞者、大至不關治病之方、又不能專行內事以却病痛、及病無以攻療、乃更不如凡人之專湯藥者、所謂進不得邯鄲之步、退又失壽陵之義者也云々、）余宗族素多。向餘二百。建安紀年以來。猶未十稔。其死亡者。三分有二。傷寒十居其七。感往昔之淪喪。傷橫夭之莫救。乃勤求

古訓。博采衆方。爲傷寒雜病論合十六卷。(此文の義は既に論へりき、但し原本に、博采衆方と云ふ下に、撰用素問九卷、八十一難、陰陽大論、胎臚藥錄、并平脉辨證、といふ語あれど、此は王叔和此の本論に、己が攙入せる文の張本にせむと、加筆せる文なること、金匱玉函方なる小序の初發を易たるに思ひ合せても知るべし、然るは、本論の正文を熟々察るに序にかく云ふばかり。然る書等の說を撰用せる方法は有ること無く、能く此等の書に符りと見ゆる說どもは、吾も人も攙入文と見決めらるゝ文のみなり、委くは予が別に撰べる傷寒論考文に論へるを見るべし、(雖未能盡愈諸病。庶可以見病知源、若能尋余所集思過半矣。(此より下に、夫天布五行云々、と云ふ長文あるを、集成に、皆是繁衍叢脞之言、全係王叔和撰次之語、非仲景氏舊也、諺所謂貂不足狗尾續者已、何者思過半句、既爲一篇結尾、而復別起一段議論、是徵也云々と、七徵を舉て辨じたる、六徵は宜なれど、此の第一徵は當らず、其は下文の下に引く、稚川翁の文を見て知るべし、)玄冥幽微變化難極。自非才高識妙、豈能探其理致哉。(集成に、此の文をさへに捨たるは非なり、此は上に尋余所集思過半矣、と遜退の辭を用ひ、其の意を返して、玄冥幽微の極め難き變化に至りては、才高く識の妙なる人に非ずては、豈よく其の理致を探らむやと、我が淺陋なる由を述て、上に越人を稱して、才秀と云へりし語を結べる文なり此は稚川翁の子書の自序の末に、麤言較略以示一隅、冀悱憤之徒省之、可以思過半矣、豈爲暗塞必能窮微暢遠乎、云々とあると、意は異なれど、文格は同じきなり、)是ぞ余が信ずる所の正文なる、其の論および文法まで。稚川翁の子書と。符節を合せたるが如し。豈これ小緣の事ならむや。此は幽き由ありて。孝先翁の名にこそ稱はね。實は其の方法を祖述せるが故なり。(然は有れど、雜應卷には。戴覇金匱と云ひ、肘後方の序には、仲景金匱と書きて、異名同人を相ひ發せしめ、其の玉函方に至りて、其の藥石を諸仙の所造と云ひ、神仙傳には、厄會あれば名を易ふる法を書し、其の子書及び神仙傳に、鮑靚を張太玄と書きて其の

由を云はず、孝先翁に尤長ニ於治病一と載して其の意を寓し、其の方書の古名を用ひつゝ、其の人の傳を記さず、其の書を金匱玉函方と號けて、謂ゆる金匱玉函に祕せず、世に布行し與へたるは、引きて放たず、千載の後に、思ふて之を索隱せしむる法にて、此また神仙道の、幽き旨ある事なるかも、明の趙開美が本の金匱要略なる、元の鄧珍が序に、鄧珍群隱を索めて善本を得たるを、梓に勒して弘むる由を云ひて、張茂先嘗言、神物終當レ有レ合、是書也、安知レ不三有レ所レ待、而合二顯於今一也、故不二敢祕一、特勒二諸梓一與二四方一共レ之、と云へる意ばへいさゝか無きにしも非ず、さは有れ、かゝる語はし、凡醫輩の眞醫道に情なき際は、馬耳風に見過してぞ有るめる。）さて上の件の方書どもの。今に傳はりたる由來の大概は。上に言へる如く。其の方論もと神仙より出て。孝先翁に傳はり。孝先翁はじめて之を方策に記載して。金匱とも。傷寒雜病論とも。張仲景藥方とも。張仲景方とも。張仲景諸要方とも號たるが。（この諸書名の出所は、既に注へれば今更に云はず、なほ辨傷寒、傷寒身驗方、療婦人方、評病要方などの目あれど、此等は其の全書の名ならず聞ゆれば、今論ふかぎりに非ず、さて初發に出せる稚川翁の本傳に、金匱藥方とある名は、卽ち孝先翁の方書の名を、其儘に用ひたるに違なきこと、今擧る目に、金匱とも藥方とも有るにて知るべし。）金匱と題せる方書は。張太玄より稚川翁に傳はり。傷寒雜病論と題せる以下は。早く魏晉の間より。世に流布してぞ在ける。（是を以て、梁の陶弘景が書に、張仲景諸要方と引き、隋志に、張仲景方と擧げ、其の世の巢元方が病源候論に引きて、其の方を仲景とは稱されど、書中に、仲景義最玄深非二愚淺能解一と云へれば、元方が此を見たる事も知らる、此の後の物にも、往々は其の名ども見えたり。）中にも。傷寒論の名高く聞えて。唐の世までは。全く傳はり來にけり。（然れども、孫思邈の千金祕要方に、江南諸師祕二仲景傷寒方法一不レ傳と云へれば、此を記せる頃までは、未其の書をば見ざりしと聞ゆるを、後に其の翼方を著せるに、其の九十の二卷に、仲景方を收たるを思へば、思邈も晩年に及りてぞ見る事

を得たりけむ。)こゝに其の天寶中に。王燾が著せる外臺祕要方に。出張仲景傷寒論といふ方藥を多く載たるが。其の方法大かた。今傳はる金匱玉函要略なる。方論に符ふを觀れば。王燾その原本の傷寒雜病論より。采り載たる物なること論なし。然るに其のち。其の雜病篇みな亡び失せて。傷寒篇のみ傳はりて。今存る傷寒論十卷すなはち是なり、(唐より後には、全書傳はらざりつと思はるゝ、其は宋の林億等が、金匱要略の序に、張仲景、爲傷寒雜病論合十六卷、今世但傳傷寒論十卷、雜病未見其書、或於諸家方中載其一二矣と云へり。)斯て稚川翁に傳はれる。金匱と題せる方書は。稚川翁それに。諸家の方をも增益して。百卷と成して。金匱藥方とも。玉函方とも。金匱玉函方とも題たるを。(但し其の百卷を、肘後方の自序に、非有力不能盡寫とあるに依れば、卷秩長大なりとは聞ゆれど、其の子書外篇を、五十卷に著せりと有る本、今に傳はるを觀るに自敍の卷とも、五十一卷ありて、刊本四冊、十行二十字に書きて、二百十張あり、さて其の卷を分たる中には、一張に足ざるを一卷とせるがあり、此れに準へて思ふに、百卷とある玉函方の卷帙も、大抵は推量られたり、神仙傳十卷、內篇二十卷と云ふも、大抵それに倍せる一卷なり、然れば其の百卷は、その子書全部ほどなる卷帙に、やゝ多かりけむ、然見るときは、今存る傷寒論、金匱要略を合せては、然しも甚多き缺は非じとぞ思ふ、そは隋志に、稚川翁の書に、王函煎方五卷といふ目あるをも思ふに、小字卷に爲たらむには、然ばかりの本にも調へつべし。)東晉の末に王叔和出て。その百卷は更なり。原本の傷寒雜病論をも得て。其の原本を撰次し。金匱玉函方をば要略して。世に弘通せる物なること。上に論へるが如し。(其の原本を彼れが撰次せる事は、今存る傷寒論の初めに、晉太醫令王叔和撰次とあり、玉函方を要略せる事は、今存る要略方にも、晉太醫令王叔和集、とあるにて知るべし、然れども、其の要略の本も、宋の仁宗が時に、始めて世に出たること、上に云へるが如し。)然して其の要略撰次せる時しも。己が例の脈經風なる。臆說を多く攙入して。張仲景に誣たるにぞ有りけ

る。(序なれば云ふ、かの脈經と云ふ物は、古人の正說を除きて、王叔和が說と見ゆる限りは見るに足ざる愚說どもにて、其の古人の名を稱せるにも、僞托多かり、用心して見るべし、實に仲景の診脈法は、其の正文中に考ふるに、正脈十に過ぎず、其の則の皓乎たること、靑天白日の如くなるを、王叔和その旨を得知らずて、然る愚說をば物せる也けり、此は別に辨論せるものあり)然るに傷寒雜病論の、雜病篇は早く亡び。金匱玉函方の傷寒篇は。宋の林億等に斷棄られて。二書共に多く缺逸たれど。其の遺佚を合せて。また彼の金匱玉函經と題せる本。また諸書に引たる文を按し。然して王叔和が攙入を刪り去る時は。再神仙の方法。二翁の醫術の眞面目をも知らるゝ事にて。こよなき醫道の賜物なり。然れば其を傳へたる王叔和が功も、少か無にしも非ず。(かの金匱玉函經と題せる本も、昔の王叔和撰次と有りて、攙入もまた多かり、案ふに此は、稚川翁の金匱玉函方なる、傷寒篇を別たる故に、其の名を用ひたりと見ゆ、そは傷寒雜病論の傷寒篇を別たると同し例なり、然れど其は、唐以前の事と見えて、外臺祕要に其の名見えたり、さて林億が此の經の疏に、細考前後、乃王叔和撰次之書、緣仲景有金匱錄、故以金匱玉函名、取寶而藏之義也と云へれど、其の名は稚川翁の負けたるなり、其は既に論へり)さて彼の要略本なる雜病篇ども。其の攙文を去りて。熟々その正文を察るに、信に金匱玉函に、祕藏すべき方論なること。言ふも更なるが。何の篇も。王叔和に略せられし條々多く。方法足らず遺憾きを。此はかの肘後救卒方を採りて補佐と爲べし。(此の方書を撰ばれし旨趣は、發端にその自序を引きて、委曲に論へるを見るべし)抑この方書の名を。本傳には。肘後要急方とあるを。自序の文には。肘後救卒と稱し。題名には。肘後備急方とあり。諸書に肘後方とも。卒救方とも有るは。其の稿本に名を種々に題し置れたるが傳れる物なり。(こは著述を以て任ずる人は、誰も其覺え有るべき事にこそ、此の書皇朝へも早く傳はりて、見在書目錄に、葛氏肘後方一卷、葛氏肘後方三、肘後百一方九、肘後方九など見え、和名鈔に、葛氏方と

て引れたるも是なるべし、其の本ども今傳はらず。)さて此の書を採用するに就ては。殊に心得べき事ども多かり。然るは此の書もと三卷にて。稚川翁の撰集せるより。齊と云ひし世まで。二百年餘り傳はり來しを。其の世の廢帝が永元二年と云ふ年に。陶弘景と云ひし人。其の本を得たるに。(此の人また神仙道の人にて、號を隱居と云へりし故に陶隱居と云ふ、梁といふ代まで世に在し人なる故に、なべては梁人と云ふなり、十歲の時に、稚川翁の神仙傳を見て、是より道に入り、種々の著述ある中にも、眞誥、名醫別錄を始め、有用の書ども多かり、委くは志都能石屋に記せるを見るべし。)八十六篇有りけるを。熟檢するに。一條たるべき篇の。二條と成れる類ひも多有しかば。其の錯亂を訂正し。其の配合すべきを配合銓次せるに。七十九篇と成れりしを。尙別に二十二篇を添へ。合せて百一篇と成して。肘後百一方と號けて。舊の如く三卷と爲し。其の添たる方どもは。朱書を以て甄別せりとぞ。當時既に錯亂して寫し傳たりしなり。(此は陶氏の凡例に、尋二葛氏舊方一、至レ今已二百許年、播二於海内一、因而濟者其效實多、余今重以該レ要、庶亦傳二之千祀一、豈止二於空衞二我躬一乎といひ、舊方都有二八十六首一、撿二其四蛇兩犬一、不レ假二殊題一、喉舌之間、亦非二異處一、入レ塚御レ氣、不レ足二專名一、雜治一條、猶是諸病部類、强致二殊分一、復成二失例一、今乃配合爲二七十九首一、於二本文一究具、都無二忖減一、復添二二十二首一、或因二葛一事一、增構成レ篇、或補二葛所一レ遺、準レ文更撰、具如二後錄一、復勞在二傷寒前一、霍亂置二耳目後一、陰易之事、乃出二雜治中一、兼題與二篇名一不二盡相符一、卒急之時、難二於尋撿一、今亦改二其銓次一、庶歷然易レ曉、また其自序に、抱朴此製、實爲二深益一、然尙闕漏未レ盡、輒更採集補闕、凡一百一首、以二朱書一甄別、爲二肘後百一方一、於二雜病單治一、略爲二周遍一矣、太歲庚辰と記し、また凡例に、今以二內疾一爲二上卷一、外發爲二中卷一、他犯爲二下卷一、上卷三十五首、中卷三十五首、下卷三十一首と云るに據りて記せり。)さて齊の永元二年より。六百年ばかり有りて。宋と號ひし世に。僣號して遼と稱せる國の。乾統と云ひし年間に。始めて板に刊たる本の有りしを。同じ宋

世に僣號して。金と稱せる國の。皇統四年と云ける年に（宋は此の時高宗と云へるが、紹興十四年と云ふ年に當れり、）楊用道と云ふ者これを得て。また諸書より同類の方を撫ひ採りて附方と爲し。此を附廣肘後方と名けたり。（右は楊用道が序に記せる趣に據て云ふなり、委くは本書を見るべし）然るに。其の後世々の亂れに。其の本また湮沒して絕たるが如く。人知らず成にけるを。元と號ひし世の。至元二年といふ年に。烏侯といふ者。偶にこれを得て。珍重して板に刻たるを。（右は、段成已といふ人の、序に記せる趣を採て記せり、金の皇統四年より、至元二年まで、其の間百二十年餘りを歷たり）明の世になりて。萬曆三年に。そを刻り改めたるが。今の世にある本の原本にて。其は上に云へる如く。彼の楊用道が支度の本なり。（今皇國の坊間に行はるゝ所の板本は、延享二年に、香川修德が門人、沼晉と云ふ人の、校合して彫たる本なるが、其の校合いと疎し、其の心して見辨ふべし（偖まづ如此く。此の書の出來を糾し置て。こゝに其の本文を論ふべし。其はまづ陶弘景が校合したりし時は。稚川翁在世間の頃より。僅に二百許年を歷たるに。然ばかり錯亂ありし事は。既く寫し誤めたりし物也。（さるは、稚川翁の撰述せる時に、陶氏が云ふばかりの錯亂は、爲らるまじき謂なればなり、）然るを陶氏が深く惜みて。校合增補せるより。遼の乾統年間に板に刊れるまで。六百年ばかりの間。また寫本にて傳はり來つる間に。葛方の墨書と。陶方の朱書と。參互に混雜し。或は文を脫し。又は後人の攙入にも係りたる物なり。（乾統より後は、其の板本を次々再刻するなれば、楊用道が附方こそ有れ、脫漏は無き謂なり、此は具に、楊氏が自序をよみ見て知るべし）さて乾統以前の本に。既に脫漏ありし證は。陶氏の訂本は。上に云へる如く。凡て百一篇なるに。今世に傳はれる本は。目錄七十三まで有るが中に。三十八。三十九。四十四。四十五。四十六の五篇の目錄缺たるが。三十八。三十九二篇の法方は。三十六。三十七の法方に混雜して殘りたれど。四十四。四十五。四十六の三篇は。目錄本文ともに缺失たるを以て知るべし。（是を以て今傳は

る所は七十篇なり、百一篇のうち、三十一篇失たるなり惜むべし。)さて其殘れる本篇の中にも。脫落せる法方多かめれど。其は今知べき由なし。然れど。後人の補入加筆は知べき謂あり。そは扁鵲法。華佗法。張仲景諸要方など。其の餘の人名を記せる法方も多かる。其の名どもは悉く稚川翁の本色に非ず。此より後なる人。また陶氏が。其の方法の出所を考へて。書加たるが。本文に錯れるなり。(かくて陶氏の案文に、扁鵲法の事を、魏の大夫傳中、正一眞人所說、扁鵲受長桑公子法、尋此傳出世、在葛後二十許年云々と云ひて、方後に、此扁鵲方法、また扁鵲法同是など記せる所もあるは、稚川翁のいと早く、師傳を受て在りし事に心著ざるなり、翁の方書に、人名を擧ざる心定の事は、其の序に、世俗苦於貴遠賤近是古非今、恐見此方無黃帝、倉公、扁鵲、兪跗之目、不能採用、安可强乎と有るにて知るべし、此は其の方の源は神仙にいで、師傳に出たるが故に、さる名をば擧ざるなり。) また葛氏。葛氏效方。隱居。隱居效方など云へること。數十所に見えたるは。陶氏が朱書を墨書に替たる後は。葛方陶方その甄別詳ならざる故に。後人たま〳〵他に據ありて。其の甄別の知られたる限をば、傍に其の姓字を標して。自己の記號と爲たる本を。後に過りて本文に寫し入たるなり。(古書に、さる例いと多き事なり。)また中に。何くれと法語を記して。餘具大方中。また某々諸湯。及某々諸散。竝有大方中。また有鎭心定氣諸丸。在大方中。また宜按大方。非單方所及など云へるは。素より陶氏の文にて。此は肘後方の單方なるに對して。その效驗方なるを大方と云へるなり。其は自序に。余別撰效驗方五卷。具論諸病證候。因藥變通。而竝是大治。非窮居所資。若華軒鼎室亦宜修省耳。と云へるを以て知るべし。(稚川翁の肘後方を撰べるも、元より其の意なりし事は、その自序に、玉函の事を、非有力不能盡寫といひ、肘後救卒三卷の事を、率多易得之藥、其不獲已須買之者也、亦皆賤價草石、所在皆有云云、凡人覽之、可了其所用、或不出垣籬之內、顧眄可具云々と有るにて知る、蓋しそは諸神

仙の本意を承りて、孝先翁の方書に載られたる、方法の例を祖述せるなり、然るは、彼の傷寒金匱なる正方の、多くは單方とも云ふばかりの少味にて、十味以上なるは、一方も有ること無く、其の藥石はた得易く、賤價なる物等なるを思ふべし、然れば、彼の二書の攙入を始め、諸書に得易からぬ藥石を用ひたる、十味以上の藥方を、仲景方と云へるが多かるは、皆な後人の妄說なる事を辨ふべし、但しそは、其の方の十味以上なる、また藥石の貴賤を以て知るのみならず、其の方を組たる趣、またその分量藥製の趣などを察ても、眞僞は直に知るゝ事なれど、其は此に盡し難し、かくて、彼此思ひ合するに、稚川翁の肘後方を撰ぶに、右の如く構へられし事は、孝先翁の方書のさる古例に依られたる事疑ひなし）是ら肘後方を採用すべき要語なれば。此の旨を得て。其の方法を撰びて。傷寒金匱に缺たるを補ひ。尚足ざるは。千金外臺を始め。後世の方書の。よく古法に合ふ方論を撫ひて。採用するぞ醫方學の要務なるべき。（然れども慢に多方を貪るに非ず、そは獨嘯菴が說に、從ニ事於古醫道ニ者、未レ必ニ多讀レ書、枕ニ傷寒論ニ足レリ矣、と云へるは然る事なれど、古方は多く缺失たるが故に、其の遺逸せる方法を、他書に撫はずは有るべからず、但し此は西戎に傳はれる方法の論にこそ有れ、本朝に傳はれる、神方の事に於ては、殊なる尊き來由ありて、門人松浦道輔が勞き記せる物ども有り）或る人此の說を聞て詰けらく。稚川翁の文を觀るに。救卒方は。凡人の爲に撰び。金匱玉函方は。醫人の爲に撰める趣なるを。其の凡人に授與せる方法を採用して。醫人の用ふる方法に備へむ事は。いと不足ことならずや。答ふ。醫人に授與せる大治の方を。凡人の用ふる事こそ難からめ。凡そ醫術は。易簡にして。能く效あるを上策と爲れば。凡人の用ひて效あるを醫人の採用せむには。倍その効驗を奏すべきに。何の不足ことか有るべき。（しか云ふ徒、自己こそは醫人と思ふべけれ、凡骨を換たる道家の人の上よりは、なほ庸人なるをや、醫人ならぬ庸人にも志ありて、なま〳〵の醫人には大きに勝りたる見ある人も在ぬべし）後世躬づから良醫なりと

誇かなる徒がら殊更に岐衢に就て。神の醫道の淵源を忘れ。醫術方藥を漸々に難艱ならしめ。遂に西洋風の小智を振ひて。迂拘なる方藥を神とも神と信尊み。其の方論に拘々たる藪醫さへ。世に多く殖蕃らむと將なるは。忌はしき事にこそ。（阿波禮その藪醫ら豈知むや、方法ます〳〵巧夫を極むれば、然る世と共に、病狀また倍々難艱を生ずる神理の存る事を、今此の眞理を述むは、事長きが上に容易ければ、此に云ず、別に論ふべし、）また或る人難じて。近く或る說に。傷寒雜病論中。文辭簡奧者。係古經之文。其他言涉迂拘。而文氣卑弱。世人以爲叔和所羼入。逐條更定刪改字句。以爲復仲景之舊。惑亂後人。莫此爲甚。視諸叔和。其功罪之輕重。果奈何也と云ひて。攙入を去るを非とせり。此の說は如何と云へるに。答けらく。其は唯に古書を要じて。篋底に珍玩せむには。然も有べけれど。今取りて。治療に施し用ふる者の省るべき說に非ず。然るは其の舊を存して尊重する。羼入の腐語。それ治病に何の益かは有る。謂ゆる方法尋按の時に當りて。徒に雜錯の煩を爲すのみなる物をや。（〇因に云ふ、王叔和が姓名のこと、傷寒後條辨に、氏族略と云ふを引て、王叔は姬姓、周襄王之子王叔虎之後也、とあるを見れば、王叔氏にて、和は其の名と聞えたり、然るに王氏と書き、叔和と書く人あるは疎なり、）抑かの二翁よ。吾その古を是とし。其の遠きを貴びて崇重するに非ず。其の傳ふる道の。我が大神の道より出て精に入り。其の功業また。神の古道に因循せるが故に。此を取れり。（是らの說は決めて不審み思ふ人々多からむ、委くは志都能石屋に說くを見るべし、）然れば。其の說よし。二翁の眞訣を重ぬとも。古道に徵し。實用に驗して應ざらむに。誰を憚りて。其の章句の際に拘々たらむ。是余が二翁を崇信する要言なり。況て王叔和が攙奸疑なきに於てをや。余や苟くも神の古道を講明するを以て自任じ。一部の醫門斷定の書をも作りて。後來の醫を爲す者に。醫道の淵源を知しめむと欲すれば。固より然る凡見に拘はる事なし。（凡仲景方の攙入文を論へる書、西戎にては、方有執が條辨、愈嘉言が尙論編など猶有れど、皇國人

の英斷に及ず、そは傷寒名數解、同劉氏傳、同特解、同集成、金匱要略補注など、要とある物なり、余それらの書を折衷し集めて、なほ考證せる傷寒論考文あり〕稚川翁の言く。良匠能與二人規矩一。不レ能レ使二人必巧一也。明師能授二人方書一。不レ能レ使二人必爲一也と。まことや二翁は。藥石方術を兼綜たる良匠明師にして。規矩たる方書を世に授與せれど。其の攙入を去ざる限りは。古面目を見こと能はず。且その功業も著明ならず。是を以て古今億兆の醫病兩家。その恩賴を蒙ざるは鮮れど。世にさる良匠明師とも知らず。神方中興の醫宗とも知らず。殊に方術醫藥は。車の兩輪の如く。方術かつ本なる事をも得知らず。孝先翁の名は更なり。稚川翁の名をだに。知ざる醫人らの多かるは。豈に慷慨き事ならずや。猶委くは西蕃太古傳。及び志都能石屋に論ふを見るべし。〔但し方術醫藥は車の兩輪の如く、相放るまじき道なる事の大意を云はゞ、我が神典に、大名牟遲命、與二少毘古那命一、定二療病方一、定二禁厭法一矣、百姓至レ今咸蒙二其恩賴一而皆有二效驗一云々、とある由緒に依りて、典藥寮に、醫師呪禁師を置れ、唐土の醫道も、其の源は我が神の道より出たるが故に。方術醫藥相ひ放れず、唐の六典に、大醫署に、呪禁師を置て、その方術の趣をも載せり、傷寒論の序に、留二神醫藥一、精二究方術一とあるが、古への道なること、是を以て知るべし、然れば醫を爲す者は、まづ神仙の道を窺ひて、未病を治むる方術を知り、然して已病を治むる醫藥に及ぶべきなり、未病は常なり、已病は變なり、常を治むる道を知ざる者、豈變を治むる道を知らむや、然るを唯に醫藥をのみ知りて、謬りに執匕に任じ、醫師の名を群愚に盜み、財利を圖るに汲々として、司命の職と稱し、君父にも憚ること無く其の藥を薦む、豈仁術と云ふべけむや〕

文政九年七月記

附錄

或る人告て云く、或る人この仲景考を見て、此は近く出たる金匱要略輯義といふ書に、既に論じ置たる事なるを、篤胤が始めて考へ出たる如く云へるは、腹ぐろなる事なりと謗れり、いかに其輯義

を見たまひつやと言ふに、己大きに驚き、その書かつて見たること無ればこそ、年ごろ此の事にも心を止めて、かく考へ定めつるを、思ひきや、既に同じ心に考へ定めたりつる人の有らむとは、早く其の書を求め讀てこそと答へて、やがて其の書を求め得て讀見るに、余が考へとは甚く異なり、唯その綜槩の條に、仲景金匱玉函、究其目之所繇、晉書葛洪傳云、洪著金匱藥方百卷、據肘後方及抱朴子、自云、所撰百卷、名曰玉函方、則二者必是一書、由是觀之、金匱玉函、原是葛洪所命書、卽唐人尊宗仲景者、遂取而爲之標題、以珍祕不出之故、著錄失其目歟、林億金匱玉函經疏云、緣仲景有金匱錄、故以金匱玉函名、取寶而藏之義也、案仲景金匱、他書無其目、唯宋本及愈橋本、趙開美本、林序後有一小序云、仲景金匱錄云々、僅出于此、予每疑之、然宋本已載之、則此必唐末作要略者所撰、其文原于肘後方序、及抱朴子、味其旨趣、汎濫不經、亦是道流之筆耳と云ふ說と、彼の小序の所に、徐か本删之爲是、と云ふ語の有るのみにて、余が今の考へと、同日に語るべき論に非ず、然るに或る人、こを余と同說なりと云へるは、稚川翁の謂ゆる遠を貴び、近を賤み、古を是とし、今を非とする輕薄家の、彼れをも此れをも孰く讀ずて、しふねき姦意より出たる誹謗とこそ察はるれ、然れども、輯義に此の說ある事を知りたるは、其の或る人の語に依れゝば、予が說と背へる由を少か論さむに、まづ金匱玉函と云ふ名を、葛洪所命書とあるは、然る說なれど、唐人尊崇仲景者、遂取而爲之標題云々と有るは、予が考證せるとは甚く乖へり、金匱はもと仲景方書の一名なるを、稚川翁また他の方書をも採用して、なほ金匱の字をも用ひて、金匱玉函方と題られたる物なること、本文に云へるが如し、また仲景金匱、他書無其目云々、と有るは如何ぞや、肘後方の序に、仲景金匱とあるを忘れられしか、かくて彼の宋本なる小序を、肘後方の序、また抱朴子などに原づきて、唐末に要略を作れる者の所撰と定めたるは、いと疎漏なり、余が考證せるを見て知るべし、殊にその要略せる時代を、唐末と云へるは、更に據

なき說なり、彼の小序は、稚川翁の文なれば、固より道流の筆なるに論なけれど、昧二其旨趣一汎濫不經なりとて、徐鎔が本に刪れるを是と爲られしは、輯義の撰者もいまだ、醫藥の道の、玄家に出たる事をば、悟り得られざるが故なれば、論ふかぎりに非ずかし、然は有れど、金匱傷寒論ありし以來、和漢古今に、千萬づの醫學者の中に、肘後方の序、抱朴子などを取り出て論へるは、一人も有りし事を聞ず、然るに今唯この輯義のみ、此議あるはいと希しき事識にぞ有りける。」

追つぎの考へ

此ノ仲景考ヲ板ニ彫リ畢テ後ニ、道輔マタ消息シテ、傷寒論中ニ、心下痞鞕ト云ヒ、或ハ小腹鞕滿、マタ大便鞕ナド多ク有ル鞕ハ、實ニハ心下痞堅、大便堅、小腹堅滿ナド有ルベキ文ナリ、鞕ト堅トハ字義異ニシテ、鞕ノ字ハモノ遠シ、是ヲ以テ金匱要略方、金匱玉函經トモニ、右同文ヲミナ堅ト書タリ、此レニツキテ思フニ、傷寒論ニ鞕トアルハ、呉ノ孫堅ガ諱ヲ避タルナリ、然レバ仲景ハ、葛孝先ノ變名ト云フ證ニ備フベシ、呉ハ孫堅、孫策、孫權ト續キテ、堅ハ漢ノ初平二年ニ卒シタレド、孝先ハ其ノ後主ニ仕ヘテアル故ニ、右ノ字ヲ避ルコト禮ナリ、マタ序文中ニ、企二踵權豪一トアリテ、權ノ字ヲ避ザルハ、孫權ガ在世ナレバナリ、諱ハ古クハ死後ニノミ諱ム例ナリ、偖カク見ルトキハ、長沙ノ大守ト云フモ當レルニ似タリ、サルハ長沙郡ハ、建安二十年ヨリ後ハ呉ニ屬セルコト、叢桂偶記ニ、長沙既非二漢家有一、後終屬二于呉一ト云ヘル下ニ引タル文ノ如シ、サテ三國鼎足ノ時ニ、呉ニ臣タル者、漢ノ長沙ト書コトハ、猶獻帝ノ正朔ヲ奉ジ居レバナリ、是ヲ以テモ、師說ニ、仲景スナハチ孝先翁ニテ呉人ナルガ、傷寒論ヲ其ノ世ニ著ハシ、金匱玉函要略ナドノ元本ハ、稚川翁ノ著ナリト云ハレシ考ヘノ、諱ザルコトヲ辨フベシ、其ハ稚川翁ハ晉人ナル故ニ、堅ノ字ヲバ避ザルナリ、ト言ヒ遣セタリ、此ハイト委シキ說ナリカシ、

醫宗仲景考跋

靈幸はふ神の御世に。大なむち少なむぢの大神たち。くすりしの道と。かしりの術とをはじめ給ひしより。皇大御國はさらなり。潮なわの凝成れる。諸えみしの千萬國も。この二柱の御靈のふゆを蒙らざるは無きを。やまとのからの。世々のくすりしたち。謂ゆる。本經。内經。傷寒。金匱の書らを學びて。神農。黃帝。仲景など言ふ人々をのみ。此道の祖と崇めて。その書等の出たるもとは。上の二柱の大神たちの。御惠みによる事としも知らざるは。天照す日の大き御光を。かたじけなしとは仰ぎも奉らで。闇にひとつの燈し火得たるを。上なき物に思ひたらむがごとく。極めて貴きをば。然しも尊しと思はざる。世の常のならひにこそ。爰にわが氣吹廼屋の平の宇斯なも。上つ御世のみふみを見し明らめ。神の御道を說ほどこらし給ふいとま。外つ國々の醫藥のわざも。皆此二ばしらの御恩賴によりて。事始まれる故よしをさへに曉り得まして。かき著されし說のこゝら有るを。かの大神たちのいましつる。靜の石屋になぞらへて。やがて其の名をとりてぞ。書の名には題られける。されど其の石屋はしも。堅石の千引石にて。石戸破る手力なくては。ゆるがし出べき物ならねば。學びの兄弟あひ議りて。文政の十年といふとし。其の戸をし細めに開けて。まをし出せるこれの一くだりよ。然るは世のくすしら。仲景はいつの世ごろに。在ける人としも詳にしらず。また其の傳へし書のもとは。何ちふ神に出たりとも辨へで。かりこものみだり說のみ。言ひしらふが心苦しき故にぞ有りける。見む人いかてまづ。この小石をさゝげ讀みて。いかし石屋の奧處にいり立ち。醫師のみちの奇靈なるいはれを覺り。しかして後に。世の人の病をくすゝる術にしも。行ひ至らむよしもがな。と思ふこゝろの眞ごとをし。書のしりへに恐々ながら記せるは。志都の石屋の戸の邊に巢だちし。鳥が啼く吾嬬をのこ。

源の川崎重恭

金匱玉函經解

校正例言

○稿本有初中後三種。其本文注意不同者亦多矣。今以後者爲正。然其本闕而不備。故取中者補之。中者不備則取初者。又有初稿爲原文而注之後稿爲攙入而刪之者。是似宜不取而全捨之則所不忍也。又其初稿與後稿義異而初稿亦難捨者並載諸卷末。

○原文次序文字異同据約說正文與玉函要論。而間有能考文義加以愚意少爲改正者。是雖僣妄之甚亦所不得已也。伏願翁之神靈其恕焉。

○註文多是折衷先輩諸家者也。或又有全據舊說者。而不舉其名此大凡之例也。而一二有舉人名書名者。雖似違例不忍妄改。皆存舊而不敢私焉。

○約說正文分篇爲九。曰辨陰陽寒熱。曰太陽。曰少陽。曰陽明。曰少陰。曰太陰。曰厥陰。曰壞病。曰差後是也。篇中亦分細目。如綱領。轉屬。挾飲。發黃。自愈。難治等類是也。其中復分項強。下利。喘嘔等甚屬煩冗。今取其大綱。

○諸稿本題目不一。曰傷寒雜病論約說。曰仲景方論纂要。曰傷寒論解。未知從何爲是。今以其見於著撰書目者舊矣。取金匱玉函經解之名。

○晚年之稿本自翁之適秋田留而在彼地云。今難得見之。故不能取此尤可惜也。唯待他日得其本而訂正而已。

文久紀元辛酉五月　源季玆謹記

金匱玉函經解卷之一

辨陰陽寒熱篇第一

【一】夫病（汎指諸病而言）有發熱而惡寒者發於陽也。（猶言凡病有發熱惡寒者陽證、）無熱而惡寒者發於陰也。（猶言凡病無熱惡寒者陽證

○此章本論全編之大綱領所以定三陰三陽之位辨寒熱虛實之分不可不明也。夫外邪之岐而爲寒熱兩途者固非邪氣有二也、皆由其人虛實而已、所謂陰陽二字指其人固有寒熱虛實之殊而言、三陽皆屬實熱三陰皆屬虛寒可以見矣、其發於陽之始謂之太陽、發於陰之始謂之少陰太陽終乎陽明少陰終乎厥陰。少陽與太陰皆其間證而已、此章就其病發之始而言所以稱發也、外臺秘要曰夫病發熱而惡寒者發於陽無熱而惡寒者發於陰發於陽者可攻其外發於陰者宜溫其內發外以桂枝溫裡宜四逆其所載雖不知據何書幸足以窺仲景氏之微意矣、）

【二】病人身大熱（陽皮膚之表有翕々之熱、乾姜附子湯條可參考）大熱大寒之大當爲太音讀猶言甚非大小之大也、論中有微熱微惡寒而無小熱小惡寒者可以見矣、）反欲得近衣者熱在皮膚寒在骨髓也。（皮膚示淺之詞骨髓示深之詞卽表熱裡寒之證、其證實陰而疑於陽俗謂之眞寒假熱之證乃四逆輩之所主也、）身大寒（謂皮膚之表有惛寒厥冷等證）反不欲近衣者寒在骨髓熱在皮膚也（謂表寒裡熱之證其證實陽而疑於陰俗謂之眞熱假寒之證乃白虎湯之所主也。）論中之言極明白無所容疑雖然驗諸事實以近衣與不近衣而辨寒熱之在表裏者殊難矣、眞寒假熱眞熱假寒譬之猶熱湯與冷酒也、熱湯則雖烙手足爛口舌然暫時置之則反其本性而爲冷水是眞寒而假熱也、冷酒則雖口舌覺冷然入胸腹則漸々生熱而如火體如焚煩渴引飮是眞熱而假寒也、諸病之眞寒假熱亦如是矣、故不求其本則難得正治之法能考本論而驗諸事實則寒熱之眞假萬無一失矣其法雖有大熱舌上潤澤而有津液者是裡寒之候卽眞寒假熱也、雖惛寒厥冷舌上乾燥生芒刺者是裡熱

之候卽眞熱假寒也。若不レ知二此理一四逆承氣誤レ所レ投苟通二此理一消黃萎附得レ所二其施一其效至速矣）

太陽病篇第二

【三】太陽之爲レ病（猶レ言二太陽病之病狀者一也蓋太陽病之所レ位也病ハ邪氣也乃外感之所レ得也故中間挿二之爲二二字一以判三病位與二邪氣一焉、）脈浮（邪氣在二肌表一之診千金方曰凡脈浮之與レ沈以判三其病在二陰陽表裡一也）頭項强痛（謂二頭痛項强一此蓋文之一體猶レ稱二耳目聾瞑一也蓋此太陽病之主證故爪蒂散條云病如二桂枝證一頭不レ痛項不レ强是可二以徵一矣項頸後也凡論中稱二太陽一者不レ論二中風傷寒一以二此脈此證一爲二準的一）而惡寒（嗇々然憎レ寒也雖レ不レ當レ風而自然寒矣○惡風者見二風至一則惡矣得三以居二密室之內幃帳之中一則坦然自舒也而惡風者係レ表惡寒者屬レ裡是亦不レ可レ不レ辨也○用二而字一間二惡寒一者凡太陽病有二惡寒者一有下不二惡寒一者上如二上三候一則太陽病之所レ必惡寒則枝證而非二其所一レ必也故非レ兼二脈浮或頭痛或項背强等之證一者不レ爲二陽病治法一是所下以挿二而字一間上之也○太陽病有二傷寒一有二中風一此條統而論レ之故惟云二脈浮一而未レ分二其緊與一レ緩也其所謂惡寒亦該二惡風一而言レ之也惡風輕惡寒重舍レ輕取レ重所レ謂擧レ大而小從レ之者也其唯稱二惡寒一而不レ言二發熱一者以下太陽傷寒之初證有中或已發熱或未二發熱一之異上也

【四】太陽病（首章所レ揭云々之證是也後稱二太陽病一者皆傚レ此）發熱（爲二中風之正候一故置二諸證首一也、）汗出惡風（對二傷寒無レ汗惡寒一言レ之○惡風之解見二于首章惡寒之下一）脈緩者（當レ作二浮緩一可レ看對二傷寒之脈緊一而言蓋熱邪之熱緩慢而無二凝滯一故見二此脈一）名爲二中風一（中當也又與二傷字一無レ別卽謂二傷風一亦可也此條承二上綱領章一論二太陽中風之脈證一也其不レ言二脈浮頭項强痛一者承二上章一略レ之也此後稱二中風者一指二此脈證一二兼見者一而言○中風之證本主レ熱熱屬レ火爲二炎上一其勢發二達于外一而翕々發熱津液爲二湧溢一而汗出以レ爲二熱邪一故始終以レ燥二津液一爲二證之主一以レ例論レ之邪之初在二太陽一也爲二翕々發熱中在二少陽一也爲二身熱一爲二往來寒熱一終在二陽明一也爲二潮熱一爲二內熱一是經二歷三陽一而次第乾二燥津液一遂爲二胃實之候一故此證雖下偶有二誤汗吐下之法但至下耗二損津液一而速中其裏實上耳覃入二陰

位ニ而爲ニ虛寒之證一者或希由レ是察レ之中風爲ニ熱邪之候一照然而明矣

【五】太陽病或已發熱（或者未レ定之辭盖傷寒之證邪熱凝伏而難レ發故用ニ已字示ニ難レ發之熱稍發一也）或未發熱（未者期レ後之辭也盖雖ニ邪熱伏而難レ發非下終不ニ發熱一者上今之無レ熱其未レ發者也。）必惡寒（必者定然之謂傷寒初候不レ論ニ熱之發未發一惡寒則必有故必レ之也於レ熱則或レ之於レ寒則必レ之可レ見此證之主レ寒而客レ熱矣亦猶下中風之證主ニ發熱一而客中惡風上也）體痛（傷寒者主レ寒々屬レ水々爲ニ凝滯一故其氣凝結而不ニ發達一爲ニ惡寒一爲ニ體痛一此二者爲ニ傷寒之主證一）嘔逆（有レ聲物出此嘔也逆者形ニ容嘔之劇一之辭此證盖胃中之氣被ニ寒外束一不レ能ニ發越一之所レ致實少陽之正證其在太陽是兼證已葛根加半夏湯條可ニ參考一）脈緊者（當レ作ニ浮緊一可レ看卽緩之反所レ謂緊急之脈也寒邪之勢凝結而不ニ舒散一故見ニ此脈一）名爲ニ傷寒一（此亦承ニ綱領章一論ニ太陽病傷寒之脈證一也故亦不レ及ニ脈浮頭項強痛也此後曰ニ傷寒一者皆指ニ此脈證一一二兼見者一而言ヽ傷寒之證本爲ニ寒邪一故其候始ニ于惡寒一而終于厥冷一是盖津液爲ニ寒邪一澁滯凝結而不レ行身體枯燥遂至ニ裡寒之候一矣故此證儻誤ニ汗下之法一則津液頓竭發ニ搔衣摸床之證一不レ可ニ復救一由レ是察レ之傷寒之證寒邪之候而與ニ中風熱邪之證一異者昭然而明矣

【六】太陽病頭痛（前章不レ言ニ頭痛一而此擧ニ頭痛一者使レ知ミ頭痛爲ニ中風發病之候一盖氣逐レ血而上攻之所レ致也）發熱（熱氣翕然外發按其身上灼然者爲ニ發熱一盖氣急鬱結之所レ致也）汗出（非レ言ニ淋漓而出一也一言ニ肌膚滋潤微似有ト汗盖氣急而逐レ水者也）惡風者（蓋以ニ鬱結一氣不レ行之證也）桂枝湯主レ之（此太陽中風之總章表虛者也其不レ言ニ脈浮緩一者承ニ前章一省レ之也此證氣急而血從レ之證也故以ニ桂枝一爲ニ主藥一以ニ芍藥一爲ニ佐藥一卽伴ニ大棗一而以行レ血緩レ血伴ニ甘草一而以復ニ逆氣一伴ニ生姜一而以逐レ氣也（凡論中曰レ主レ之者言ニ其正證一也曰レ宜者雖レ非ニ正證一始與レ之以試ニ其消息一者也曰レ與者濟ニ一時之急一也論中以ニ此三例一推レ之則的證符合不レ竢レ言而明矣

桂枝湯方（方第一。）此方以ニ桂枝一爲ニ主藥一故名曰ニ桂枝湯一也。）

桂枝（去皮）生薑（切）芍藥（各三兩）甘草（二兩炙）大

棗(十二枚擘)

右五味㕮咀(謂製藥爲飲片蓋古人製藥不用刀切唯於臼中擣碎令之如口齒咬細而后用之是以謂之㕮咀若夫生姜大棗類其質濕潤不能㕮咀因以切之擘之耳、)三味(桂芍甘)以水七升微火煑(欲令藥氣不殘也)取三升去滓適寒温(言得其寒温之能稱其口也)服一升服已須臾(服服用也已畢也須臾者不久貌品字箋云俄頃也)歠熱稀粥(言薄粥稀疏也)一升餘以助藥力(桂枝本爲解肌非發散劑故假熱稀粥助藥力以奏解肌之功也觀麻黃湯靑龍湯及葛根湯禁熱稀粥而可見矣、)温覆令一時許遍身漐々(和潤而欲汗之貌)微似有汗者益佳(似嗣也卽微々似續有汗之謂蓋此二字最爲要緊有影有形之謂也)不可令如水流離(言汗出之過當也○離與漓通用)病必不除(凡發汗之法以邪氣鬱表用發散劑解其邪耳雖麻黃青龍之劑非發汗令如水流離也唯達其表氣而便汗自出耳非邪隨汗而出也故非因汗多少而占邪去與不去唯因表氣達與不達以知病愈與不愈耳若不知此理強發汗多則邪氣反不去津液爲之耗竭遂爲亡陽之證不可不戒也)若一服汗出病差停後服不必盡劑若一服不汗更服依前法又不汗後服當小促(雖再服以不汗故也)其間半日許令三服盡(半日許之間服盡三升也)服一劑盡病證猶在者更作服(作服之服非飲服之服言一劑三分之一也)若汗不出者乃服至二三劑(桂枝全料謂之一劑三分之一謂之一服一服卽汗不出再服無汗服至二三劑汗出病愈爲期也後世見服藥得效者反令多服無效者卽疑藥誤又後易方無往不誤矣○凡治法有逐機焉有持重焉逐機者言隨病證變逐其機而轉其方也持重者言病證不變自若如舊則守其方而不移也論中雖無其目其例則有此條所論乃持重之法也方證相對而病不愈者非方無功邪勢盛而藥力未達也不可以其奏功之遲易之速進數劑而藥力達則病當愈也是謂持重法矣若其證變遷則雖未服盡一服當易其方是謂逐機法矣不知此理則不能窮理療之妙學者宜察焉)禁生冷(不炙烹物)粘滑(膏粱滋味凡油膩之物)肉麪(鳥獸魚介肉及

麪之類)五辛(葱韮蒜蓼芥也)酒酪(酒及乳酪)臭惡(臭氣可厭之物)等物(生冷冷胃粘滑肉麪酒酪皆補滋邪氣使氣不達五辛飄散正氣臭惡之物逆氣有病則此等之物皆宜禁之諸方皆倣之

【七】桂枝湯本爲解肌(桂枝湯解散肌表邪氣之劑非發表之劑故其脈當浮緩汗當出也)若其人脈浮緊發熱無汗者(此傷寒麻黃湯之證也非桂枝湯之所宜也)不可與之也(是辨中風傷寒之兩岐者斤々甚明白學者當守其矩則而勿倉卒焉)當須識此勿令誤也(識與誌同記也卽默而識之之識言當常々用心以記其事勿忘勿怠而不可使有一忽之失誤)

【八】太陽病(當有頭痛之證)項背强(强因血也蓋以氣急而血迫于項背有此證矣葛根治之)几々(以項背强之故俯仰不自如之貌也凡强血氣爲主者有几々狀可辨別矣○几音殊几引頸之貌几短羽鳥也短羽之鳥不能飛騰動則先伸引其頸爾項背强者動亦如之故假以形容之)無汗(表有瘀水者必無汗此所以本方有麻黃也麻黃伴桂枝能發表瘀水也)惡風者(氣不循于表之證也桂枝能達之也)葛根湯主之(此章太陽病桂枝證而血氣上攻殊甚且表有瘀水之證也故加葛根以治血氣迫于項背而强几々加麻黃以治表之瘀水也)

葛根湯方(○方第二)

葛根(四兩)桂枝(去皮)芍藥　生姜(切各三兩)大棗(十二枚擘)甘草(二兩炙)　麻黃(三兩去節○或作四兩)

右七味以水一斗先煑麻黃葛根減二升去白沫內諸藥煑取三升去滓溫服一升覆取微似汗不須歠粥(以方中有麻黃不假粥力而能發汗)

【九】太陽病項背强几々而反汗出惡風者(汗出惡風四字中含蓄桂枝證也○當無汗之證而汗出故曰反蓋對葛根湯之無汗而言之)桂枝加葛根湯主之(項强本桂枝湯之證也何以言之廿四章云病如桂枝證頭不强是可以徵矣而加之以背强几々之證則其病深一等也凡太陽病項背俱强者葛根湯之正證法當無汗而反汗出者桂枝湯之主也桂枝湯證而有項背强几々葛根證故桂枝湯中加葛根一味而

治二其項背强一者欲レ令下學者定二其部位一而不上レ誤二其
治一也）
桂枝加葛根湯方（○方第三）
於二桂枝湯方內一加二葛根二兩一
右六味以水一斗先煮二葛根一減二二升一去二上沫一內二
諸藥一煮取二三升一去レ滓溫二服一升一覆取二微似汗一餘
如二桂枝法一將息（與二消息一通盖言保護之進退也）
【十】太陽病（此傷寒之正證表有二瘀水一者也不レ言二脈
浮緊一者以二上章悉一レ之也）頭痛發熱（頭痛者必擧二發
熱一項背强急者不レ擧二發熱一）體痛（體痛陰陽俱有之
證其無二發熱頭痛一而脈沈微者此爲二陰證附子湯眞
武湯等之所レ主也）惡寒無汗而喘者（表閉而水氣不レ
利故表有二瘀水一而汗不レ出以二汗不一レ出而致二此喘一然
則此喘本爲二兼證非一レ所レ必也故閒二而字一以分レ之
雖二無一レ喘者一既已有二主證一則可レ與レ之矣不レ可レ泥二
喘之有無一也葢喘者水氣內攻而逆行之徵也）麻黃湯
主レ之（麻黃開レ表而通二水氣一桂枝下二逆氣杏仁治三
表水逆二于咽一甘草緩二急迫一也○凡中風傷寒二一道外
證相混其所レ異者汗之有無與二脈之緩緊一已此條闕二
脈浮緊之狀一擧二無汗之證一者猶下桂枝證擧二汗出一

闕二脈狀一之例上凡言二汗有無一則闕二脈緩緊一言二脈緩
緊一則闕二汗有無一此其例矣）
麻黃湯方（○方第四）
麻黃（三兩去節）杏仁（七十箇去二皮尖一）　桂枝（二兩
去皮）甘草（一兩炙）
右四味以二水九升一先煮二麻黃一減二二升一去二上沫一
（沫令二人煩一根節能止レ汗此所二以先煮去一レ沫也）內二
諸藥一煮取二二升半一去レ滓溫服二八合一覆取二微似汗一
（麻黃湯之峻與レ不レ峻在二溫覆與一レ不二溫覆一也葢此
方爲二純陽之劑一過二於發汗一如二單刀直入之將用一レ之
若當一戰成レ功不レ當則不レ戢而召レ禍故可レ一而不レ
可レ再如二汗後不一レ解當下以二桂枝湯一代上此方爲二仲景
開レ表逐レ邪發レ汗第一峻藥也）不レ須レ啜レ粥（麻黃
有二專攻之能一故不レ須二啜レ粥之助一○仲景氏用麻黃
桂枝二味甚有二深理一不レ通二曉此理一則不レ能レ窺二仲
景運用之妙一矣夫麻黃以竅通氣爲二主治一故達レ表則
能發レ汗達レ裡則能利レ水然其達レ表不レ假二桂枝和レ
表解肌之力一則不レ能レ逞二其功一也故麻黃爲二表達一
用之則必配以二桂枝一若爲二裡達一用レ之則不下假二桂
枝一以爲中之配上仲景氏用二麻黃桂枝一之深理葢在二於

此一用二麻黃一有二增減一者雖レ依二發汗之多少一假二桂枝一者不レ過二二兩一焉乃觀二麻黃湯大青龍湯葛根湯之類一可レ見桂枝爲二之佐使一和レ表解レ肌而逞二麻黃之力一矣麻黃達レ裡而開二水道一通レ竅利レ水則不レ假二桂枝一也乃觀二麻杏甘石湯越婢湯麻附細湯之類一可レ見不レ依二桂枝□□解肌一而足三獨逞二其力一矣凡藥材主能以二本編一推考而足矣）

【十二】太陽病脈浮緊無レ汗發熱身疼痛（此麻黃湯之主證也先言レ無レ汗而發熱身疼痛次レ之者此證以レ無レ汗爲二主證一而發熱身疼痛皆因レ無レ汗所レ致也凡擧二緊脈一者皆有二水氣之變一云二浮緊一則表有レ水亦云二沈緊一則裡有二水變無汗是水氣之變也）八九日不レ解表證仍在（云二八九日一則其已經二發汗一可レ知矣而其病自若仍在也）此當レ發二其汗一（其者指二無汗一而言レ之此證以レ無レ汗爲二主證一之故也）麻黃湯主レ之服レ藥已須臾（藥者麻黃湯也服已者服二盡一劑之藥一也曰レ湯曰レ藥皆一劑之義而非二一服之謂一也須臾本作二微除一誤也其說見二于集成一）其人發煩目瞑劇者必衄（服二麻黃湯一已卒暴發煩悶目瞑者則是邪氣與二藥氣一相搏血氣逆行失二其常度一也此所レ謂瞑眩而邪得レ汗將レ解之兆也若其瞑眩劇者必致二衄血一也蓋邪氣湊二上部一而然也雖レ衄無レ害〇瞑者集韻曰目不レ明也）衄乃解（衄則邪熱隨レ血散故云衄乃解也）

△太陽病脈浮緊發熱身無汗（以上麻黃湯證也然此條不レ謂レ無レ汗而謂二身無一レ汗則知頭面有レ汗而身特無レ汗雖二身無一レ汗頭面有レ汗則是亦邪氣將レ解而湊二上部一也〇一說曰諸本身字下無二疼字一蓋脫落也當レ補レ之若無二疼字一則與二但頭汗出證一奚擇焉兩說今難レ定暫兩存而俟二後生一焉）自衄者愈（自衄者承下前章服二麻黃湯一而衄者上而言也衄而頭痛微止者自愈之衄也世謂二之衄汗一或謂二之紅汗一也衄而病證依然者不レ愈之衄也可レ發二其汗一麻黃湯主之〇和蘭之俗凡傷寒熱甚者刺絡取レ血其熱乃解若其自衄者謂二之天然刺絡一也景岳全書曰今西北人凡傷寒熱入二血分一而不レ解者悉刺二兩手膕中一出レ血謂二之打汗一蓋寒隨レ血去亦紅汗之類也此暗符二自衄者愈之語一可レ見天下一理萬國同情矣）

△傷寒脈浮緊（以上五字中含二蓄麻黃湯之證一也）不二發汗一（與二不汗出一自別此謂レ未レ與二發汗之劑一也蓋醫之誤也）因致レ衄者（當下與二麻黃湯一發汗上之證而反

不ニ發汗一之故致ニ此衄一也因字可レ見矣）麻黄湯主レ之（此承ニ上條一論ニ衄而不レ解者以示ニ其治法一也蓋口章言衄家不レ可レ發レ汗口口章言亡血家不レ可レ發レ汗而此用ニ麻黄湯一何也曰久衄之家亡血已多故不レ可レ汗今綠ニ當レ汗不レ汗熱毒蘊結而成ニ衄血一當レ分ニ其津液一乃愈蓋發ニ其汗一則熱越而出血自止也）

（與陽明合病）

【十二】太陽與ニ陽明一合病（太陽ハ指ニ前第八條葛根湯證項背強几々無汗惡風者一而言レ之陽明指下其所ニ交見一陽明輕證一二上而言也何以知ニ其輕證一以下其治ニ太陽病一陽明病不レ治而自治上言レ之也二病同時均病此言ニ合病一也）而下利者（太陽表證無ニ下利之證一陽明熱實大便鞕不レ可ニ下利一二證俱不レ可ニ下利一之證而所ニ以有ニ下利一者何也蓋陽明病汗出甚多水氣必外漏今此病與ニ葛根湯之證一合病則表閉無レ汗可レ知也故其可ニ外漏一瘀水內攻下走而致ニ下利一也若欲レ治ニ此下利一左レ解ニ太陽病一也）葛根陽主レ之（葛根湯非レ治ニ下利一攻ニ其表之凝結一使ニ邪氣達ニ之於表一則瘀水不ニ內攻一下利自止也若此下利不レ止則胃中津液爲レ利涸渴爲レ熱乾燥遂爲ニ承氣之證一矣）不ニ下利一（可レ觀下利此非ニ太陽陽明合病之正證一故不ニ下利一者亦有レ之）但嘔者葛根加半夏湯主レ之（此證若不ニ下利一則其當ニ下利一水氣逆行而致レ嘔也故加ニ半夏一逐ニ逆氣一以達ニ之於表一也○太陽少陽合病亦有ニ下利若嘔證一其證相似而易レ誤宜下照ニ黄芩湯條一辨中其別上焉）

葛根加半夏湯方（○方第五）

於ニ葛根湯方內一加ニ半夏洗半升一

右八味以ニ水一斗一先煮ニ葛根麻黄一減ニ二升一去ニ白沫一內ニ諸藥一煮取ニ三升一去レ滓溫服ニ一升一覆取ニ微似汗一

【十三】太陽與ニ陽明一合病（此卽葛根湯之所レ主也）喘而胸滿者（滿卽懣々與レ悶同音通胸滿卽言ニ胸中滿悶一也因レ喘胸滿也故下ニ而字一以間レ之治亦治レ喘不レ治ニ胸滿一也而喘因レ無レ汗也所ニ以因レ無レ汗而喘一者於ニ麻黄湯正證之下一具レ之可ニ合考一矣）不レ可レ下（此病有ニ陽明之證一而如ニ當レ下者一然有ニ太陽麻黄之證一故云不レ可レ下也治法先誘ニ諸其表於發汗一然後下レ之者也觀ニ第五十二條一云陽明病脈浮無レ汗而喘者發レ汗則愈宜ニ麻黄湯可レ見矣）宜ニ麻黄湯一（凡云レ

宜者權宜時變大詳也此證如可下而不可下又胸滿有柴胡之疑途權宜其證用之故云宜也）

挾內熱

【十四】太陽病脈浮緊發熱惡寒身體疼痛（以上卽此麻黃湯證脈浮緊下當有頭痛二字玉函脈經煩躁下有頭痛二字矣○按此證當有喘何以言之此證實此麻黃湯證而一等重者也而彼證云無汗而喘此證亦云不汗出且方內有杏仁則其有喘可知矣而不言其喘者讓于彼證而略于此者也耳）不汗出而煩躁者（因不汗出煩躁也故而字間之含蓄雖服麻黃湯、不汗出之意也○不汗出與無汗別也不汗出者汗欲出未能出也何以知之煩躁是也服桂枝湯反煩不解乃發汗微除其人發煩者其證候同而其源異桂麻之證被攻藥所致此證因外襲所致俱欲外發未能出者也○躁也者手足躁動不靜也冠煩字者以示其躁之劇也○凡煩躁者寒熱之別此湯所主治之煩躁屬熱吳茱萸湯之煩躁屬寒也）大青龍湯主之（雖以麻黃湯證與麻黃湯不嘗不汗出反發煩躁者此以外閉甚之故不嘗蓄瘀水更生伏熱而其邪與栄氣相搏血氣爲之急而所致雖重用麻黃湯非所能發故與此湯以峻發之則汗出而邪散煩躁隨愈也蓋此方麻黃湯倍麻黃以 其力加石羔大棗生姜者也石羔以解伏熱大棗以緩血氣之急生姜助桂枝達氣且外閉則水氣必不行于裡故大棗以行水氣也）若脈微弱汗出惡風者不可服之（言若雖有發熱頭痛身體疼痛煩躁之證若其人汗出惡風脈微弱者乃少陰亡陽之象與通脈四逆湯之裡寒外熱吳茱萸湯之煩躁附子湯之身痛同類是皆眞寒假熱之病而非大青龍湯所主也故云不可服之）服之則厥逆筋惕肉瞤此爲逆也（若誤服之則發如斯之危候是此謂逆治也當此時惟伏苓四逆湯可以僥倖萬一而已世醫或以爲眞武湯者非也誤治厥逆未嘗見用眞武湯也甘草有無可以考矣

大青龍湯方（○方第六）

石膏（如鷄子大碎）大棗（十二枚擘）生姜（三兩切）麻黃（六兩去節）杏仁（四十箇去皮尖） 桂枝（二兩去皮）甘草（二兩炙）

右七味以水九升先煮麻黃減二升去上沫

內二諸藥一煮取二三升一去レ滓溫服二一升一取二微似汗一汗出多者溫粉（熬溫之米粉也）撲之（後漢書華陀傳曰體有二不快一起作二一禽之戲一怡而汗出因以著レ粉義與二本論一同）一服汗者停二後服一（此湯爲二發汗重劑一故愼重如レ此）汗多亡陽遂虛惡風煩躁不レ得レ眠也（乃乾姜附子湯證不二復眞武證一也）

【十五】傷寒脈浮緩（前條乃傷寒之脈而其證劇者也此則中風之脈而其證劇者也與二之大青龍湯一者舍レ脈而取レ證也內經云九候雖レ全形肉脫者死之類是亦舍レ脈而取レ證也）身不疼（傷寒之證身當レ疼而不レ疼故擧レ之以示二其異一也）但重（因レ不二汗出一而身自重也○眞武湯四肢逆沈重疼痛桂枝附子湯身體疼煩不レ能二自轉側一柴胡加龍骨牡蠣湯一身盡重不レ可二轉側一者皆是身重也不レ可レ不レ辨也）乍有二輕時一（因二外襲一致二此身重一非二水之所レ致故自然外發則有二輕時一也若但欲レ寐身重無二輕時一是少陰證也）無二少陰證一者（前章所レ謂脈微弱汗出惡風者是也身重亦似二少陰證一故云レ無二少陰證一而明下太陽病與二少陰病一疑途上也）大青龍湯發レ之（此條承二前章一論二其有レ異證者一故唯言二其異者一而不レ言二同者一雖二則不レ言乎其發熱惡寒不二汗出一而煩躁者含二畜其中一古文之簡乃爾此條獨云レ發レ之者明二大青龍湯發汗之神劑一也）

挾停飲

【十六】傷寒表未レ解（謂下已經二發汗一而脈浮緊頭痛發熱惡寒之證仍在上也仲景書中凡有下裡證兼二表證一者上則以二表未レ解三字一該レ之）未解本作二不解一今從二千金一作二未解一且以三此論方爲二發汗後證一而改レ之）心下有二水氣一（此水氣非下外邪薄二於裡一所上レ致舊來所レ在之宿水也蓋此明二咳以下諸證候之因一也）乾嘔發熱而咳（乾嘔發熱示二傷寒之邪仍在一レ表也唯有二乾嘔一而不二嘔逆一熱亦已發邪勢不レ劇然咳而見二裡水之證一是非下傷寒逆邪薄二於裡一而所上レ致心下舊所レ在之水因二表邪一動上攻而致二此咳一也故以二而字一間レ之不二嘗咳一下文所レ擧之或證皆因二外襲一而氣逆心下水動所レ爲之證也○有レ聲而無レ物此言二乾嘔一也）或渴或利或噎（有レ水者必渴其水下走則下利上行則致レ噎也○噎本作レ噎今從二宗俊父說一而改レ之）或小便不レ利小腹滿（因二小便不一レ利其水留滯而爲二小腹滿一也不利下當レ有二而字一以言表有二邪

氣心下有宿水小便不利則不得外出又不能上走留滯而爲小腹滿也）或喘者（若水氣上行則喘也夫水之爲病不一故擧或以下諸證承正證而以盡其變也或者未定之謂言兼證如是者與否者皆用此方也○喘上玉函有微字）小青龍湯主之（小青龍湯驅邪逐水之劑而不主發散也方中有芍藥又用乾姜不用生姜其意可考矣○此湯證與小柴胡湯證相似有不同者此湯無往來寒熱胸脇滿硬痛之證但有乾嘔發熱而咳此則爲表未解水渟心下也雖有或爲之證與小柴胡相似終無半表半裏之證爲異耳○此證與小柴胡湯眞武湯之證彷彿相似勿必差忒宜三方相照以知其異焉○此方解肌之劑而兼利水之方者夫小柴胡湯眞武湯及此湯但治畜水之證其用粗相似而其所主則各々不同凡傷寒表不解心下畜水飲者不先和其表而逐其寒則不能行水氣乃此湯之所主也若邪急裡陰有水氣者不急救而去其寒則不能利水氣乃眞武湯之所主也其邪在表裡間水氣不行者不和其表裡則不能散水氣乃小柴胡湯之所主也此三方一主於表一主於裡一主於表裡間俱利水飲之治法也宜三方相照以知其異焉蓋此方兼治氣鬱閉而心下有畜水者之聖劑也

小青龍湯方（○方第七）

五味子（半升）半夏（半升洗）麻黃（去節）芍藥
細辛　乾姜　桂枝（去皮）甘草（各三兩炙）
右八味以水一斗先煮麻黃減二升去上沫內諸藥煮取三升去滓溫服一升

【十七】傷寒心下有水氣（此條承上章示其異證且明其治例也）咳而微喘（因咳水氣迫于胸發此喘而字可見焉）發熱不渴（發熱則水隨散必當渴而不渴者此內有水寒故雖發熱猶不渴也蓋欲示服湯之後發渴而先擧之也耳渴者兼證而不渴者正證也故前條云或渴是也）小青龍湯主之服湯已渴者（服已者服盡一劑也）此寒去欲解也（寒即所謂水氣指心下停飲而言埋中丸條胃上有寒四逆湯條膈下有寒飲等皆爾雖然論中寒字又有以痰而言者如瓜蔕散條胸有寒即是也○言服小青龍湯之後發渴者此心下之畜水解去之徵也以渴之故勿與白虎湯等以治其渴

俟二津液回一其渴自止也服二白口花湯一之後卒發レ渴者亦同一例也）

【十八】太陽中風（以二頭痛發熱汗出惡風等之證一言レ之）下利嘔逆（是此人固有二畜水一而其水下走則爲二下利一上走則爲二嘔逆一也）表解者乃可レ攻レ之（裡有二畜水一則不レ可レ不レ攻レ之然其表未レ解者不レ可レ攻レ之先與二桂枝湯一以解二其表一表解已後當レ攻二其畜水一也）其人漐々汗出（此言與二桂枝湯一而發レ之汗出之狀也）發作有レ時頭痛（其人者指下病二中風一之人上而言レ之發作有レ時者該二汗出頭痛一而言レ之非レ云二汗出而已發作有レ時也言若其人雖レ有二汗出頭痛之證一若發作有レ時而汗出頭痛者此非二表證未レ解之汗出頭痛一以三水飮聚二于心下一之故血氣迫而所レ致之汗出頭痛也若夫表證之汗出頭痛者常有二其證亦有二惡風一而非三發作有レ時者一故於二下文一又云三汗出不二惡寒一而以明レ非二其表證之汗出頭痛一也）心下痞堅滿（此水飮聚二于心下一之的證）引二脇下一痛（從二心下一引及二于脇下一而痛也）乾嘔短氣（乾嘔者氣迫二于上一而所レ致短氣者水氣實而閉二氣道一之所レ致也○（短氣）不二惡寒一者（欲レ詳二汗出惡風之非二于表證一而言レ之丁寧告戒可レ謂レ至矣）此表解裡爲レ未レ和也十棗湯主レ之（南涯曰此方非下解二外邪一瀨上逐二心胸水一已此病人表邪解裡水未レ散故用二此方一也芫花大戟甘遂以驅レ水大棗以緩二血氣之急一也〕又曰自二胸脇一而及二心下一者大陷胸湯主レ之自二心下一及二脇下一者十棗湯主レ之○正珍曰小青龍湯五苓散皆治二表未レ解不レ可レ攻レ裡之飮證一十棗湯五苓散治二表已解而有二痞鞕滿痛之裡未レ和也其鞕滿痛與二惟滿微痛亦自有レ別矣若惟痞鞕而不レ痛嘔逆而下利者乃大柴胡湯證也〕此章小青龍湯證之劇者而所レ謂懸飮者也）

十棗湯方（○方第八○一名朱雀湯以二其大棗之赤一立二之名號二）○一稿本方名作二朱雀湯一注云方名通稱二十棗湯一今據二外臺祕要一復二古名一者也

芫花（熬）甘遂　大戟

右三味等分各別擣爲レ散以二水一升半一先煮二大棗肥者十枚一取二八合一去レ滓內二藥末一强人服二一錢匕一（强人羸人之稱皆指二其平常一之辭也）羸人服二半錢一溫服レ之平旦服若下少病不レ除者明日更服加二半錢一得二快下利一後糜粥（取二糜爛過熟易レ化而有二

能補之意)自養（邪之所湊其氣必虛以毒藥攻邪必傷及脾胃使無中和甘緩之品爲主宰則邪氣盡而大命亦隨之矣故選十棗之大而肥者以君之以顧其脾胃以緩其峻毒得快利後糜粥自養以使穀氣內充以使邪不復作

【十九】傷寒厥而心下悸者（金匱曰水停心下甚者則悸然則悸以挾停水之所致也）宜先治水當服茯苓甘草湯却治其厥不爾水漬入胃（當爲腸字解之如胃中有燥屎亦然其實腸胃一府唯就其廣狹大細以殊其名已）必作利也（此條承上條重論邪實在胸中之厥兼挾停水而心下悸者故厥一字含蓄上條所謂脈乍結與心下滿而煩飢不能食猶大青龍湯之後條五苓散之後條皆承上條而省略其脈證也夫邪結在胸中之厥非裡虛陰盛危急之厥而其所兼挾之悸乃停水所致其人小便必不利觀小柴胡條可以見矣是以不先與茯苓甘草湯以治其水則停水漬入大腸中必作下利故先治其水而后更與瓜蔕散以治其厥也蓋以示治有緩急也素問云小大不利治其標是也）

茯苓甘草湯方（〇方第）

茯苓（二兩〇或作三兩）桂枝（二兩去皮）生姜（三兩切）甘草（二兩炙）

右四味以水四升煮取二升去滓分溫三服

【二十】太陽病發汗後（以表證已解之後言之血氣急亦可知矣）大汗出（汗出不止所謂如水流漓是也蓋此血氣急而水外攻也）胃中乾（以大汗出之故胃中津液內竭而乾矣蓋示煩躁不眠欲飲水之因之語也）煩躁不得眠（津液內竭之故也〇挈以上十七字係以與水而愈者與五苓散之證而示大汗出胃中水竭之證有二治法也）欲得飲水者（津液亡而渴故引水飲欲救胃中之乾也此蓋人身自然之良能蘭人所謂人身中有一大良醫者即是也〇飲水二字古人一定熟語皆泛稱飲物者而非必言冷水也若果冷水則不曰水而曰冷水文蛤散條可徵矣可見單稱水者非復涼冷之水也是本篇中稱水又稱冷水者之別也）少々與飲之（若犯少々之禁飲水過多則其水停畜心下而發水入則吐之逆證也故叔和曰令胃氣和則愈（言表證解而致此證者與水則胃氣和而自愈不

藥而可也○若有此證而其脈洪大口舌乾燥雖與水尙不愈者乃熱伏於裡之候此白虎加人參湯之主也）若（大汗出煩躁不得眠欲得飮水而）脈浮（此脈與微熱此雖發汗後表證仍未解之候也）小便不利（因大汗出而胃中乾水竭而爲此證也）微熱（以表證仍在也）消渴者（言其所飮之水皆消盡而渴不爲之止愈飮愈渴也譬如暑天灌水於地爾）五苓散主之（桂枝以和肌表四物各合力而潤燥救津液兼利水也○本方證與白虎加人參湯證相似而不易辨別彼口舌乾燥此則口舌滋潤唯是爲別而彼此有緩急之異耳）

五苓散方（○方）

猪苓（十八銖去皮）澤瀉（一兩六銖）白朮（十八銖）茯苓（十八銖）桂枝（半兩去皮）

右五味擣爲散（此方不煎服而散服者除桂枝外四味皆氣味淡薄故爲散而取其氣味全存也若煎服則其效或減焉）以白飮（白飮謂白米飮也謂之白飮與白粉白酒同義矣）和服方寸匕（正方一寸之匙抄散不落爲度）日三服多飮煖水汗出愈（假煖水之力以助藥力也猶桂枝湯啜熱稀粥之例焉○凡利水之劑皆有潤燥之功津液亡則內燥故潤其燥則津液隨生小水隨利夫潤燥之劑用之於津液不足者則生之用之於小便不利者則通之故此方專在于潤燥而不拘小便不利也比白虎加人參湯之潤燥則自有輕重之別夏月傷暑發熱煩渴者五苓散白虎加人參湯能治之者以有潤燥生液之功豈拘小便利不利乎世醫唯知五苓散利小便而不知潤燥生液和解表裡也蓋知其一而不知其二者也○本方有猪茯二苓而謂之五苓者何也五苓非取彼二苓而名之者矣古書或作伏靈言老松靈氣伏結而成也蓋因聲近譌作苓耳此方五味而稱五靈者卽謂五味而神靈也猶稱二神丸或三聖丸之例也）

【二十一】發汗已（已者言發汗汗出畢也非謂病罷也）脈浮數（表邪未盡也）煩渴者（謂渴之甚非且煩渴且渴也蓋亦因汗出所致也白虎加人參湯之煩則其脈洪大此則其脈浮數淺深可見也）五苓散主之（此承上條論其有異證者也小便不利微熱六字含畜在中義與第□□條第□□條同焉上條脈但浮而不數此條脈浮而數是其異者也其脈

雖有小異內因不異故均以五苓散主之○本方治桂枝湯之證而煩渴小便不利也發汗已脈浮數者乃桂枝湯之所之也前條云發汗雖半日許復煩脈浮數者可更發汗宜桂枝湯也而其有煩渴者此湯之所主也與桂枝湯不同其主者可見矣)

【二十二】傷寒(泛指太陽病不必拘麻黃桂枝二湯之證也)汗出而(猶前章云發汗已也○挈以上五字為綱係五苓散證與茯苓甘草湯證以為目故而字間之蓋此條亦承上二條以略其脈證特舉其異證不渴者以示其治法也故此三字中含蓄脈浮或浮數小便不利微熱等之證也)渴者五苓散主之(言汗出而後脈浮或浮數小便不利有微熱而渴者此因汗出而津液內竭之所致則此五苓散主之也若)不渴者茯苓甘草湯主之(言汗出而後有脈浮或浮數小便不利微熱等之證者當渴而不渴者此以氣上逆而水聚心下之故也茯苓甘草湯主之桂枝甘草以發散上逆之氣茯苓導水生姜逐氣此方較苓桂朮甘湯則有朮生薑之異可䆒考焉)

【二十三】中風發熱六七日不解而煩(言太陽中風之證雖與桂枝湯發散之其邪不解及六七日而反加煩也蓋此以津液內竭之故也○發熱二字中含蓄脈浮緩汗出惡風等之證也)有表裡證(前條所謂脈浮小便不利微熱消渴等之證是也)欲飲水(此亦因汗出而津液內竭之所致也)水入則吐者(渴而飲水過多其水停畜心下與今所飲之水相扞格而不容也水停心下則當不渴而反欲飲水者蓋此五苓散之變證而血氣尤急劇者也前條云欲得飲水者少々與飲之犯此戒而與水過多故為此逆證也)名曰水逆(乾姜黃芩黃連人參湯章所謂寒格更逆吐下之逆字義同與火逆之逆義異矣)五苓散主之(此條亦承上諸條只略諸條脈證以從簡省特舉其異者以示其治也言太陽病發汗汗出至六七日仍不解反加煩小便不利渴欲飲水水入則吐之證者此以汗後有微渴飲水過度水停不行之所致故用五苓散以發未盡之表邪且利其停水則愈)

上宗

【二十四】病如桂枝證(謂發熱汗出惡風蓋此條論痓病之有熱頗似太陽中風之證者也謂之如有

明其似外感而更不外感也）頭不痛項不強其
脈微浮胸下痞鞕（乃心氣鬱結之外候）氣上衝咽喉
不得息者（後世所謂痰喘壅盛是也夫鬱結久則血
脈稠粘不能健運令人痰喘壅盛矣）此為胸有
寒也（痰也痰即血之糟粕成於肺中出於喉門者
是也非留飲也其謂之寒者以業既離血不復
温養之具也蓋古昔未有痰字故或稱之寒或
謂之唾濁或謂出濁唾或謂吐涎沫皆今之
所謂痰也痰之說當就集成而見矣）當吐之
宜瓜蒂散（邪在上焦因勢利導應從上越當
用內經高者因而越之之法故以瓜蒂散吐之
使邪從上越則胸中之氣自和平矣）

瓜蒂散方（〇方第）

瓜蒂（一分熬黃）赤小豆（一分）

右二味各別擣篩為散已合治之取一錢匕以香
豉一合用熱湯七合煮作稀糜去滓取汁和散
温頓服之不吐者少々加得快吐乃止（凡用瓜
蒂吐者大便必寫間有止寫而不吐者故其表未
解者吐亦在所禁也）諸亡血虛家不可與瓜蒂
散

【二十五】病如發於陰無熱而惡寒手足寒脈弦遲飲
食入口則吐心中温々（即慍々古字通用也）欲吐
復不能吐者胸中實也當吐之宜瓜蒂散

【二十六】病人手足厥冷脈乍結者（結本作緊今依辨
可吐篇千金翼改之）邪結在胸中（乍結者謂病者
其脈素不結今發手足厥冷而乍結者結即代也非
炙甘草湯證血液不充之結即有物塞於胸中之
所致故吐以瓜蒂散以達其鬱閉則愈蓋本節與
前條併係邪氣實于上焦陽氣為是所閉塞而
不能通達四末之證非清穀下利脈微欲絕之寒
厥也）心下滿而煩饑不能食者病在胸中當須
吐之宜瓜蒂散（〇心下滿以下別是一證不可
與上文混視唯以其均可吐之證合而論之蓋
證異而因同者故亦吐之以瓜蒂散也仲景氏家法
乃爾）

少陽病篇第三

半表半裡柴胡諸證

【二十七】本太陽病不解轉入少陽者脇下堅滿乾嘔
不欲飲食往來寒熱尚未吐下脈沈緊者與小柴
胡湯（〇脈沈緊當是脈沈弦沈緊是□實在胸當

吐之診也惟脈沈弦方與上文之義相屬始可與小柴胡湯當攻之)

小柴胡湯方(〇方第)

柴胡(半斤)黄芩(三兩)人參(三兩)半夏(半升洗)甘草(三兩炙)大棗(十二枚擘)生薑(三兩切)

各七味以水一斗二升煮取六升去滓再煎(大小柴胡半夏瀉心生姜瀉心甘草瀉心旋復代赭諸方皆去滓再煎者以上諸湯皆有嘔噦等證嘔家不欲溷濁之物強與之必吐故半煮去滓再煎以投取其氣全而不溷濁可謂和羹調鼎之段矣)取三升温服一升日三服

【二十八】傷寒中風五六日(言其病或自麻黄湯而來或自桂枝湯而來謂不拘其始也)凡擧日數者非言此日而必見此證也以日數本其病位辨其正變緩急遲疾審明其治法也以下云五六日者爲小柴胡湯之位可知也(本作傷寒五六日中風今依全書依例而改之曰傷寒中風醫反下之云々此例也)往來寒熱(熱往則寒來寒往則熱來互而發者也而此證主熱而寒隨之者也故不云寒熱往來而云往來寒熱也則熱多而寒少也試諸事實亦復爾蓋此氣之□而氣往于內則熱止正氣來于外則爲熱水氣外襲而血氣不暢之證也若熱因循不解而實則遂爲潮熱之證也)胸脇苦滿(苦困也滿悶也悶而加苦字甚之之詞猶苦患苦痛之苦也此蓋水襲氣而迫于胸脇之證也夫水外襲則氣實故爲熱若夫不熱則爲雷鳴也卽柴胡黄芩之所主也雖小柴胡之證多端也乎此症實是本因而可爲目的之證也餘證皆因此而發矣)嘿々不欲飲食(嘿々一作默々亦同焉言不好言語也不欲飲食者考之於論中曰本太陽病不解轉入少陽者脇下堅滿乾嘔不能食則不欲食與不能食辭雖不同實則一證之輕重也耳此亦以水襲氣而鬱滯于胸之故所致也)心煩喜嘔(外襲則氣逆而迫于心故致此煩也甘草主之〇喜與熹通喜嘔者謂數嘔吐也因外襲而胸脇滿心下亦畜水飲氣逆而所致也半夏生姜主之〇以上證實是少陽小柴胡湯之正證而論中單稱柴胡證者則指以上之證而言之故以喜嘔者小柴胡湯主之之意可讀之矣如下文所論之兼證亦皆所生於胸脇苦滿而非正證故下七或字以分之治胸脇苦

滿一則不レ治而皆自愈者也耳〕此章不レ擧レ脈者本方之脈以レ時而有二變革一而不二一定一也故不レ擧レ之要欲レ令二人思而得一レ之者耳〕或胸中煩而不レ嘔（胸中煩卽上文所レ謂心煩也卽承レ彼而言レ之而間亦有二不レ嘔者一是變證也故曰或間二而字一別レ之猶レ言下雖レ有二心煩之證一反不上レ嘔也蓋嘔者胸中有二畜水一而氣迫之所レ致故方中有二半夏生姜一焉若夫雖二其無一レ嘔者一乎既有二胸脇苦滿之證一則胸脇有二水氣一則胸下有二水氣一亦可レ知矣胸下有二水氣一而不レ嘔者其證未レ盛而未レ迫者也耳至二其病進一則發レ嘔乎必矣是所下以雖レ無レ嘔乎不上レ去二半夏生姜一也）或渴（水氣在二于胸脇間一則當不渴而或有二渴者一蓋以三熱氣在二于裡一也然是客證而不レ爲レ主故無二治レ渴之藥一也）或腹中痛（所レ畜之水飲及二于腹中一血氣爲レ之閉則爲二此證一也若夫劇則急痛而疑二似于小建中湯之證一也）或脇下痞堅（脇滿延及二于脇下一至二其劇一則爲二痞堅一也蓋此水氣滯而所レ致與二大柴胡湯十棗湯之痞堅一同レ因矣然本方之證未レ結二于心下一也支結者茈胡桂枝湯心下痞堅者大柴胡湯之主也）或心下悸小便不利（留飮迫二于心下一故爲レ悸以三裡有レ熱之故小便不利也）

或不レ渴身有二微熱一（有二身熱一則必渴今不渴者以レ有二水氣一也）或咳者（水氣上攻則或有レ致レ咳也）小柴胡湯主レ之（或以下數證便是所レ兼之客證不レ問二其兼與一レ不レ兼皆在三一小柴胡所二得而主一也主者適然主一之辭也凡傷寒中風有二往來寒熱胸脇苦滿嘿嘿不レ欲二飮食一心煩喜嘔等之證則雖レ有二或以下之證一決然非二餘方之證一也故主二小柴胡湯一不レ疑也此方利二胸脇間之邪一妙劑而柴胡黃芩利二胸脇一而以解二裡熱一人參甘草以行二緩血氣一逆迫半夏生姜逐二留飮一而以下二逆氣一大棗伴二柴胡一而以利二胸脇一伴二人參甘草一而以緩二血氣一伴二半夏生姜一而以佐下逐二留飮一之力上也凡本論用二柴胡一之諸方及後世之方有二柴胡一者一無レ有下以二此方一不レ爲レ祖者上矣皆自二此方一推考レ之則無二方意之難レ解者亦有一矣

【二十九】傷寒四五日（此條承二上章或渴或不レ渴之文一而明二小柴胡湯之變證一者也而本自二太陽病葛根湯證二轉來而較二之于上章一則其病劇而急者也故上章云五六日此章云四五日而以明二其緩急一也蓋其擧二日數一者言二其大凡一而示二病位一也耳）身熱（同二于白虎湯之身熱一焉非二表證發熱仍存者一也可レ見此證

劇而急矣凡云身熱則與發熱不同發熱者表則有翕々之狀身熱者表則不見有熱而身中有熱勢而按其胸腹則肌熱如灼脣口必乾燥也手足不熱假令雖熱必有休止也故下文云手足溫而明其如常也蓋此因外襲之身熱也）惡風頸項強（以下自葛根湯證轉來之故仍存彼湯之證也然其證少陽較重而既有欲進陽明部位之勢故治少陽而不治太陽病也）脇下滿（以下入少陽部位之初雖其證劇滿而未至于堅滿也蓋此小柴胡之正證）手足溫而渴者（手足溫有二義矣一者以有身熱惡風等之證而渴之故疑于白虎湯之證矣故云手足溫而以別於白虎湯證之或手足冷而渴者也一者今舉身熱而不言手足溫冷則嫌於身獨有熱而手足共冷故言手足溫而以明之矣若夫手足冷而渴者其熱伏於裡之徵卽白虎湯之證也）小柴胡湯主之（雖小柴胡湯之正證不悉具以其轉入少陽部位故用小柴胡治之也

【三十】傷寒五六日已發汗而復下之胸脇滿微結（卽是胸脇苦滿結謂鬱結之結病人自覺者已非醫之所按而得也如梔子豉湯條心中結痛之結亦然）小便不利渴而不嘔但頭汗出往來寒熱心煩者此爲未解也（（一）傷寒五六日已經汗下之後則邪當解今胸脇滿微結往來寒熱者卽邪猶在半表半裡之間爲未解也小便不利而渴者汗下後亡津液內燥也若熱消津液令小便不利而渴者其人必嘔今渴而不嘔知非裡熱也）小柴胡湯主之（本作柴胡桂枝乾姜湯今從宗俊父說改之其說就集成可觀矣

【三十一】傷寒（承前條亦指少陽病也故此二字中含畜小柴胡之證一二也）腹中急痛者（謂腹中急迫而痛非俄然之謂蓋此承前章腹中痛之語而辨小建中湯之疑似也）先與小建中湯（腹中急痛以疑似于小建中湯之證故先與之先字有試意權用之義下得甚懇切）不差者小柴胡湯主之（與小建中湯急痛如初不少退者是水氣外襲所致而非小建中湯裡急之證故與之不差也小柴胡湯以逐其外襲驅其水氣則急痛自愈矣（一）此條雖似小建中湯證而實小柴胡證者後章示似小柴胡湯證而實小建中湯正證者也）

【三十二】傷寒二三日（此條亦承二柴胡本條或胸中煩而不レ嘔或心下悸之文而辨小建中湯疑似也○外臺作二一二日一）心中悸而煩者（心中心胸之間非二必心臟之中一也而悸乎煩乎雖レ似二柴胡證一別無二一少陽正證一則知其非二少陽病一也況二三日亦未至柴胡部位日數乎然則此其人因薄弱而感邪之證明矣夫人虛則血滯而不行血滯則裡氣亦急欲レ發不レ能レ發逆而至レ動レ血也氣動レ血則悸此自然之理也其煩者因レ悸而所レ致故間二而字一以示レ之也○若夫小柴胡之證而心中悸而煩者其留飲之所レ致如三具說二于本章之下一矣）小建中湯主レ之（與二此方一以行二滯血一緩二急迫一則其證自愈矣

小建中湯方（○方第　○此方也即桂枝湯倍二芍藥一加二膠飴一也名曰二建中一者中字與二理中之中一同焉謂二腹中腸胃所一レ在也建建立也言此湯能建二立中氣一也

桂枝（三兩去レ皮）甘草（二兩炙）大棗（十二枚擘）芍藥（六兩）生姜（三兩切）膠飴（一升）

右六味以二水七升一先煑二五味一取二三升一去レ滓內二膠飴一更上二微火一消解溫服二一升一日三服○嘔家（言內素有二留滯一而不レ喜レ甘若食レ甘則嘔者非レ如二□章所レ謂嘔逆一也）不レ可レ用二建中湯一以レ甜故也（此與二酒客不レ可レ與二桂枝湯一同意若強與レ之則愈益使二人嘔一也雖然大建中方則主レ嘔與レ之以三其有二蜀椒乾姜一也若能知此意加減以投則亦何害之有豈惟一小建中爲レ然乎諸方皆爾）

【三十三】食穀欲レ嘔者屬二中焦一也（食レ穀欲レ嘔者胃中虛寒而飲水淤畜故也吳茱萸之溫レ中生姜之逐レ飲爲レ之故也○中焦本作二陽明一今從二山田先生說一改レ之蓋對二下文上焦之句一言レ之）吳茱萸湯主レ之得レ湯反劇者屬二上焦一也（一下第□□條云傷寒胸中有レ熱胃中有二邪氣一腹中痛欲二嘔吐一者黃連湯主レ之由レ是觀レ之屬二上焦一者乃胸中有レ熱之謂當レ與二小柴胡湯一者也下第□□指二小柴胡湯一以爲下治二上焦一之方上亦可二以徵一矣□方見二於少陰篇一）

熱入血室

【三十四】婦人中風發熱惡寒得レ之七八日經水適來（言經水不レ期而來也字典云適然猶二偶然一也）脈遲身涼胸脇下滿如二結胸狀一譫語者（以上之諸證邪氣陷二入乎血室一而震二盪其血一故也）此爲三熱入二血

室也（謂胞卽子宮也以衝任之脈盛於此則月事以時下故名之曰血室）當刺期門（甲乙經云期門肝募也在第二肋端不容傍一寸五分上直兩乳蓋以洩胸脇下滿之邪也猶刺風池風府以泄太陽病頭項强之邪）隨其實而瀉之（指邪實而言也（）此證熱雖除脈雖遲然有讝語而不議湯藥者以經水下則血室之熱從而自解也第□□條云太陽病云々自衄者愈又九十五條云太陽病云々其人如狂血自下々者愈三十六條云婦人傷寒經水適來云々必自愈可見血下則熱隨血自解不復假湯藥而愈（）陽明篇亦有熱入血室條宜參考焉

【三十五】婦人中風七八日經水適斷續得寒熱發作有時者此爲熱入血室其血必結故使如瘧狀發作有時小柴胡湯主之（（）前條及後條論病中經水適來者此條論月事中得病經水未可斷而斷者也其因雖不同其熱入血室則一矣惡寒發熱而如瘧狀者桂枝麻黃各半湯桂枝二麻黃一湯等之證也寒熱往來而如瘧狀者小柴胡湯之證也　此條及下條幷無胸脇下滿故不刺期門也）

【三十六】婦人傷寒發熱經水適來晝日明了暮則讝語如見鬼狀者（邪陷血室而震盪其血之所致穢氣上而乘心也）此爲熱入血室無犯胃氣（以讝語見鬼之似承氣證恐下之故辨之無與母通母者禁止之詞）及上二焦（期門屬上焦之穴柴胡治上焦之方故謂之上二焦也柴胡證云胸脇苦滿心煩喜嘔可見柴胡爲治上焦之方也三十三章云食穀欲嘔者屬陽明也吳茱萸湯主之得湯反劇者屬上焦也可見柴胡之嘔乃爲屬上焦之嘔也期門刺法與小柴胡湯幷非攻擊之術而謂之犯者以其攻無事也）心自愈（以經水適來則血室之熱隨血而解故不及湯劑也婦人傷寒此證最多男子亦有之（）凡有血之證往來寒熱經水適斷來讝語如見鬼狀者以外證爲主而以血證爲客也小腹堅滿小便自利如狂發狂者以血證爲主而以餘證爲客也故大小柴胡二湯者以熱爲本根桃核承氣湯抵當湯以血爲本根此血證讝語發狂疑似之別也）

與太陽合併病

【三十七】太陽與少陽合病（受病之始有心煩嘿々不欲飲食心下痞等少陽之證而兼脈浮頭痛項

強惡寒等太陽之證也）自下利者（南涯曰太陽少陽之正證俱不二下利一合病自下利也黃芩之下利必有ㇾ痞矣）與二黃芩湯一（特解曰與者謂先與二此湯一以觀二其後證如何一之辭也何則有餘證足爲二下利一而下利者當下審二其下利一以施中其治上也今太陽與二少陽一合病而下利者其熱在二心胸中一而不ㇾ能ㇾ攝二其下一故致二此下利一故其治法不ㇾ治二其大表一又不ㇾ治二其下利一而但治下其熱在二心胸中一者上而其大表證與二其下利一自治者也（南涯曰本方證血氣欝二滯上一而不二下行一者也蓋本二此說一焉）若嘔者黃芩加半夏生姜湯主之（前證而兼ㇾ嘔者此湯主ㇾ之蓋嘔者以ㇾ有二留飮上逆一也故加二半夏生姜一也○特解曰太陽與二少陽一之合病者其氣當二上逆一者也其有ㇾ嘔者固其所也無二可ㇾ疑者一故云ㇾ主也○南涯曰少陽合病者主二下利一也與二陽明合病一異也陽明合病下利則不ㇾ嘔嘔則不二下利一是其別也）

黃芩陽方（○方第）

黃芩（三兩）芍藥（二兩）大棗（十二枚擘）甘草（二兩炙）

右四味以二水一斗一煮取二三升一去ㇾ滓溫服二一升一日再夜一服

黃芩加半夏生姜湯方（○方第）

於二黃芩湯方內一加二半夏（洗）升半生姜（切）三兩一（○或作二一兩半一）

右六味以二水一斗一煮取二三升一去ㇾ滓溫服二一升一日再夜一服

【三十八】傷寒（汎指ㇾ疫而言ㇾ之）胸中有ㇾ熱（言胸中慍々悶々而煩如ㇾ有ㇾ熱之狀一蓋此欲二嘔吐一之證因而外邪薄二于裡一欝二滯于胸中一而氣不ㇾ得ㇾ暢二於上一之所ㇾ致也黃連湯主ㇾ之矣）胃中有二邪氣一（言其人固有ㇾ之寒邪卽寒飮也腹中痛者爲ㇾ之故也）腹中痛（因下胃中有二邪氣一而血氣不上ㇾ循爲二此痛一也○南涯曰腹中痛者有二小建中湯小柴胡湯之疑途一小柴胡湯者嘔而不ㇾ吐小建中湯者不ㇾ嘔不ㇾ吐此湯之證欲二嘔吐一者是其別也）欲二嘔吐一者（言欲二嘔吐一而不二嘔吐一胸中慍々悶々也此以下熱氣欝二滯于胸中一而不ㇾ得ㇾ暢二於上一之故氣逆而心下所ㇾ有之留飮惟有下欲二上攻一之機上而不二上攻一也若夫上攻則爲二嘔吐一也○正珍曰上擧ㇾ因下說ㇾ證形影聲響但欲二嘔吐一是外入邪熱而其腹中痛係二固有之宿寒一非二一因一也）黃連

湯主之（南涯曰此湯無黃芩故不痞不下利加桂者逐其邪也。此章者觸黃芩湯之類而在于此者也）

黃連湯方（○方第）

黃連（三兩）桂枝（三兩去皮）人參（二兩）半夏（半升洗）乾姜（三兩）大棗（十二枚擘）甘草（三兩炙）

右七味以水一斗煮取六升去滓溫服一升晝三服夜二服

【三十九】太陽與少陽併病（乃屬柴胡桂枝湯證）心下痞堅頸項強而眩者（是併病所兼客證也。）前第二十九章云傷寒四五日身熱惡風頸項強脇下滿手足溫而渴者小柴胡湯主之乃知此章亦小柴胡證矣若夫刺法者兼施之術耳）當刺大椎（甲乙經曰在第一椎陷者中刺入五分）肺俞（甲乙經曰在第三椎下兩傍各一寸五分刺入三分留七呼□二穴以泄頸項之鬱也）肝俞（甲乙經曰在第九椎下兩傍各一寸五分針入三分留六呼。以泄心下之壅也）愼勿下之（□結胸證有心下堅而項亦強者大陷胸丸下之則愈此條見證略同而不痛不滿其非結胸可知矣故曰勿下之又□□□□太陽少陽併病而反下之成結胸此其所以禁下也）

【四十】傷寒六七日（此承小柴胡之本章而辨其證自桂枝湯轉來而表證未去延日作支結者之治法也小柴胡證云五六日此云六七日則雖似其地位深證亦重而實則淺者也故其地位雖進而不能作結胸總止于心下支結也小柴胡證其地位進則直作結胸或作熱實之證矣比于柴胡桂枝湯其重可知矣）發熱微惡寒（表證仍在也然以既已薄于裡之故惡寒則微也）支節煩疼（支節猶云肢節古字通也。煩疼謂疼之甚與煩渴煩驚之煩同與微嘔之微反對為文也）微嘔（以未專于柴胡證之故嘔亦微也雖微乎嘔此柴胡之正證卽水氣結于胸脇心下有留飲而所致則此一證中含畜苦滿之證也）心下支結（謂非心下有堅狀按之而濡心下有結聚而其結聚支引左右也較之結胸遂其沈堅卽下條之微結也微言其勢支言其狀蓋此柴桂湯之眼目證也）外證未去者（猶云外證欲去而未去者也卽言上之發熱微惡寒等之證未祛也）柴胡桂枝湯主之（云主之者此章所舉之證似有多途者故云主之以斷

其無多途也○是太陽之邪傳於少陽也故取桂枝之半以散太陽未盡之邪取柴胡之半以散少陽嘔結之病而不名桂枝柴胡湯者以太陽外證雖未去而病機已見於少陽裡也故以柴胡冠桂枝之上意在解少陽為主而散太陽為兼也）

柴胡桂枝湯方（○方第）

桂枝（一兩半去皮）芍藥（一兩半）柴胡（四兩）黄芩（一兩半）人參（一兩）半夏（二合半）甘草（一兩炙）大棗（六枚擘）生薑（一兩半）

右九味以水七升煮取三升去滓溫服一升

與陽明合併

【四十一】傷寒（此亦承小柴胡本章指少陽病而言之也何以知之以下文柴胡證仍在及與小柴胡湯嘔不止之文知之也○此二字本作太陽病過經五字蓋傳寫之誤也今依例徵于柴胡證仍在之本文而改之說別有之）十餘日（謂傷寒柴胡證荏苒不解而延及十日以上也與下章云十一二日義不遠也）反二三下之（小柴胡證而二三度下之非其治也故云反蓋此庸醫之所為也）後四五日柴胡證仍在者（謂小柴胡證庸醫誤下之後其證依然仍在也可見本此小柴胡湯之證矣）先與小柴胡湯（小柴胡證而醫誤下之雖治為逆柴胡證仍在故復與小柴胡湯也○先字無意但對初服小柴胡湯而其病不解添出心下急鬱々微煩之證之後用大柴胡湯而言之耳或謂姑與小柴胡見其動靜也或謂投方之不苟且也俱非也）嘔不止（本所在之嘔與小柴胡湯仍不止也蓋此三字中含畜他所固有之柴胡證亦仍不止之意也觀下文為未解也之語可見矣）心下急（急者急縮之急謂心下拘急也蓋此血滯之證也若更至劇則血遂凝而為痞堅也○凡論中下急字者皆言急縮也而其證無有不屬于血之凝滯者不可不知矣大柴胡方中有芍藥亦為之故也若此急或不緩或劇者合芍藥甘草湯而奏奇效也蓋是東郭翁之所教我也○說腹部之形狀而不說其脈狀有深意而存焉此使讀者思而得之也）鬱々微煩者（鬱々云默々之劇也云微煩則雖如輕於小柴胡之心煩乎以邪熱深入將實于裡之故其煩却如微而實劇也此四字蓋形容熱之鬱蒸而言之○

心下急以下七字實是大柴胡湯之適證而深切著明下得甚妙也讀者勿平々看過之而往來寒熱胸脇苦滿默々不レ欲二飲食一心煩喜嘔者所三其固有二之證也）爲レ未レ解也（以二小柴胡證仍在之故一雖レ與レ之其證不二實不レ止且加レ之見下心下急鬱々微煩將二熱實一之機上故云爲レ未レ解也）與二大柴胡湯一下レ之則愈（此方於二小柴胡湯方內一去二人參甘草一加二芍藥枳實大黃一者也故方意於二此去加中一可レ求レ之也柴胡黃芩半夏生姜大棗主治如三具說二於小柴胡湯方意一矣既有二內實之機一不レ可レ不レ下此所三以加二枳實大黃一也然有二柴胡證尙盛一則未レ可二專下一故柴胡劑中加二大黃一僅二兩也其所三以去二人參甘草一者何也云々）

大柴胡湯方（〇方第）

柴胡（半斤）黃芩（三兩）芍藥（三兩）半夏（半升洗）生姜（三兩切）枳實（四枚炙）大棗（十二枚擘）大黃（二兩）

右八味以二水一斗二升一煮取二六升一去レ滓再煎取二三升一溫服二一升一日三服

【四十二】傷寒發熱汗出（謂二發レ之得レ汗非二自汗之謂一生姜瀉心條傷汗出解之語可レ見矣）不解（謂二病之不ヲレ解非二表不レ解之謂一芍藥甘草附子湯及茯苓四逆湯條病不レ解之語可レ見矣）心下痞堅嘔吐而不二下利一者（此章特稱レ不二下利一者蓋對下桂枝人參湯甘草瀉心湯生姜瀉心湯赤石脂禹餘糧湯諸證皆有二痞堅一且下利上言也〇不字從二金鑑說一而補レ之）大柴胡湯主レ之（言傷寒發汗後唯惡寒罷而發熱不二爲レ汗解一心下痞堅嘔吐而不二下利一者此爲二熱邪內攻爲レ實蓋少陽陽明併病也故與二大柴胡湯一下レ之則愈宜下與二前條一互參看上大抵痞證率屬二心氣自結一而不レ關二外來之邪一但此一條是爲二外邪入レ裡心氣爲レ之鬱結一故不レ用二瀉心一而取二大柴胡一其因不レ同也且此證既有二痞堅一而不レ作二結胸一者以三其人原無二停飲一故也

【四十三】傷寒（此承二大柴胡湯條一而明二其熱既結實之治法一也）十一二日不レ解（示二陽證之至極一也凡本論之例擧二其日數者一示二大凡一之辭不レ可二必拘一也不レ解者謂荏苒如レ此雖レ引レ日其病仍不レ解也〇本作二十三日一今從二東郭翁說一而改レ之）胸脇滿而嘔（胸脇滿者卽云二胸脇苦滿一也因二胸脇苦滿一而致二此嘔一故間二而字一別レ之也蓋此二證以二柴胡證之本證一

之故擧之而以略餘證也)日晡所發潮熱(日晡者云申時也所是不定之辭猶言申時前後也蓋此時而發潮熱他時熱不潮者其實未劇也)而微利(發潮熱則大便當堅而反致微利下也後生恐認此微利而以爲虛寒之利故云發潮熱而下文重云潮熱者實也而以示非虛寒之利下也卽吳有可所謂熱結傍流是也○而字上有已字今依玉函從正珍說而删之)潮熱者實也(潮熱者或謂熱如潮信以時來也然則日晡所發熱亦以時來也何以分熱狀古人命名也密矣若以時命之則何不云潮熱非潮信之義可以知也蓋潮也者取充實之義也潮熱之發則身熱手足胸背腹中無所熱之不充滿也蓋是實熱也故云潮熱者實也○此句之上下有七句三十九字所謂煩碎宂長難通之文今從東郭翁宗俊父兩師之說而删之說別有之也)大柴胡加芒消湯主之(以大柴胡湯治大柴胡湯之證加芒消以爍其燥屎得快利而愈也○方名本無大字今從惟忠劉棟靜齋東郭南涯等之說而斷而爲大柴胡湯說別有之

大柴胡加芒消湯方(○方第)

於大柴胡湯方内加芒消六兩餘依前法服不解更服

辨轉屬

【四十四】傷寒脈弦細頭痛發熱者屬少陽(屬者太陽轉屬少陽而未純之辭故仍有頭痛發熱之表也而爲少陽者何也以其脈弦細也如是者宜與柴胡桂枝湯蓋以其爲併病也)少陽不可發汗發汗則譫語此屬胃胃和則愈(言若誤認其頭汗發熱以爲太陽傷寒麻黃湯以發其汗則津液內竭大便燥結令人譫語此爲屬胃宜與小承氣湯以和胃氣胃氣和則愈)胃不和則煩而躁(若其胃不和則不但譫語又令人煩而躁也如此則當與大承氣湯也)

【四十五】傷寒發熱無汗嘔不能食(此爲少陽病小柴胡湯證也)而反汗出濈々然者是轉屬陽明也(乃少陽々明併病也當與大柴胡柴胡加芒消等湯潤下焉)

【四十六】傷寒嘔多雖有陽明證不可攻之(嘔多爲少陽未解少陽者汗吐下皆所禁故不可攻之陽明篇云陽明病脇下堅滿不大便而嘔舌上白胎者

可與小柴胡湯是也）

【四十七】傷寒六七日無大熱（無翕々發熱也）其人煩躁者此爲陽去入陰也（陰陽乃表裡之別稱謂其邪去表入裡也所謂胃家實之陽明者內經所謂三陰也故指自表轉陽明胃家實云入陰也蓋存舊習焉）

陽明病篇第四

綱領

【四十八】陽明之爲病胃家實是也（○陽明者指裡而言蓋邪之中人始于太陽中于少陽終于陽明自表而裡自輕而重勢之必然也實謂邪實乃腹滿便結病故曰胃家實凡平人腸胃素虛有邪陷之則成三陰下利嘔吐諸寒證腸胃素實有邪陷之則成陽明腹滿便結譫言妄語身熱自汗諸實熱證是非邪之有寒熱皆從其人固有之虛實而化也譬諸練糸之可以黃可以黑其本雖同末則大異也）

轉屬

【四十九】本太陽初得病時發其汗汗先出不徹（除也言汗發不對病不除也）因轉屬陽明也（凡傷寒中風既離於太陽而純于陽明或少陽此之爲轉入也既轉而未純此之爲轉屬轉係皆併病也）

表未盡

【五十】傷寒不大便六七日頭痛有熱（唯有蒸々之熱而無惡寒之謂所謂煩熱是也）小便赤者與承氣湯（六七日大便不通而有熱則熱實之機既已有之然頭痛而熱未潮有外證之疑途故以小便之清濁分別表裡也大小調胃三承氣之中隨其證而欲使辨用故不指言也不言主之而曰與亦爲之也小便赤三字依千金翼而補之蓋對下文清者言之也）其小便反清者（反字依外臺而補之）知不在裏仍在表也（裡證之病人小便赤黃今小便反清者表未解必矣）當須發汗宜桂枝湯（言傷寒不大便六七日頭痛煩熱小便赤澁者雖未及潮熱譫語手足濈然汗出等然而其已轉入陽明者無疑宜承氣以下之此證雖有頭痛之似表乎然惡寒已罷則非表證之頭痛乃屬裡之頭痛如十棗湯之頭痛亦然雖然若其小便反清白者是熱尚在表而未入裡之候卽有不大便煩熱等證先宜

以桂枝湯發之俟其小便渾赤而後可下之也
蓋此證不用麻黃湯用桂枝湯者以非惡寒發
熱而脈浮緊悉具者也)

【五十一】陽明病脈遲汗出多而發熱(從金鑑之說謹而
補之)微惡寒者表未解也可發汗宜桂枝湯
(陽明病脈當數大今脈遲汗出多設不發熱惡寒
者是太陽表邪已解矣今發熱微惡寒是表猶未盡解
也故宜桂枝湯解肌以發其汗使初入陽明之
表邪仍還表而出也)

【五十二】陽明病(不惡寒惡熱大便堅皆陽明證也故
有此等證者每以陽明稱之)脈浮無汗而喘者
發汗則愈宜麻黃湯(是太陽之邪未悉入陽明猶
在表也故從太陽傷寒治之)

【五十三】病人(謂病太陽經中風傷寒之人也)煩
熱(太陽也故脈浮虛而宜汗散也)汗出則解復如
瘧狀日晡所發熱者(謂熱之往來猶瘧之作輟有
時而不爽非寒熱交作也〇發熱潮熱也)屬陽明
也脈實者當下之(脈實乃沈實對下文浮虛)脈
浮虛者當發汗(脈浮虛者即浮緩之義爲風邪猶
在太陽之表〇一證而治法逈別全以脈爲憑此亦
從脈而不從證之法)下之與大承氣湯發汗
宜桂枝湯(〇言太陽病煩熱者發汗々出則解汗後
不齊不解反如瘧狀潮熱者轉屬陽明也其脈沈
實者轉而純也故承氣下之若脈浮緩者轉而未純也
當先與桂枝以發太未盡之表也)

【五十四】陽明病發潮熱大便溏小便自可胸脇滿不
去者與小柴胡湯(〇陽明病發潮熱者大便當堅
小便當數亦今反大便溏小便可者知其人藏府有虛
寒而邪未實也況胸脇滿不去者是邪猶在少陽
而未全歸于裡也故先與小柴胡湯以解之于中
位也若與柴胡不解當與柴胡加芒消湯蓋與
彼條證全同而因稍有異宜參考矣)

【五十五】陽明病脇下堅滿(所謂脇下痞堅者也)不
大便而嘔舌上白胎者(胎與炲通用炲煤也蓋炲者
火煙所生而傷寒舌胎亦是熱氣所生於義尤爲深
切著明)可與小柴胡湯(此亦陽明兼少陽之
證也其脇下堅滿不大便而嘔自是大柴胡湯證而其
用小柴胡者以舌上白胎猶帶表寒故也若胎
不滑而濇則所謂舌上乾燥而煩欲飲水數升謂
裡熱已耗及津液此湯不可主矣蓋上章雖潮熱而

大便反溏小便自可也此雖二不大便一而未レ見二潮熱一舌上白胎者皆爲下陽明熱邪未レ實二于胃一在中表裏之間上與二小柴胡湯一以和二解之一）

内熱

【五十六】傷寒脈浮滑而表有レ寒（以二時々惡風背微寒及厥冷等證一言）裏有レ熱（以二脈滑大讝語腹滿發熱汗出身重而喘咽燥口苦等證一言）白虎湯主レ之（此條擧レ因略レ章者也　此條本作二表有レ熱裡有レ寒從二先輩數家說一改レ之）

白虎湯方（〇）方第）

石膏（一斤碎）知母（六兩）甘草（二兩炙）粳米（六合）

右四味以二水一斗二升一煮取レ米熟去レ米内レ藥煮取二六升一去レ滓分二六服一日三服（〇原文煎法甚粗不レ合二他方之精一因攷二于外臺祕要一改レ之）

【五十七】傷寒脈滑而厥者裡有レ熱也白虎湯主レ之（〇滑爲二陽脈一裡熱可レ知雖レ厥是熱厥也然内無二腹滿痛不大便之證一是雖レ有レ熱而裡未レ實不レ可レ下而可レ清故以二白虎湯一主レ之所レ謂舍レ證而治レ脈是也（〇凡厥逆脈沈微者爲レ寒用二四逆一脈滑大者爲レ熱用二白虎一）

【五十八】傷寒若發汗（正珍曰金鑑云傷寒之下當二若汗二字一蓋發汗較二吐下一更傷二津液一爲レ多也此說得レ之矣宜レ補二若發汗三字一今從レ之依レ例補レ之例者何也第百四十六章云已發汗若吐若下第百五十一條云更發汗更下更吐第二百九條云若發汗若吐若下是也）若吐若下後（特解曰此章明似レ有二表裡兩證一而但是裡證者反是深劇大多疑惑之證而不レ可二名狀一然以熱結在レ裡爲レ主求レ之則諸疑惑之證不レ足二復辨一也）七八日不レ解（云二病之不一レ解非狀レ云二前證不一レ解也觀二後字一可レ見矣七八日者明二其地位之已深一之辭至二七八日一而熱結在レ裡是其常也）熱結在レ裡（此法語而此章之證因也以二熱結在一レ裡之故致二下文所レ擧種々之證一也）表裡俱熱（特解曰此云二表裡俱熱一者擧レ目也下云時々惡風大渴舌上乾燥而煩欲レ飮二水數升一者擧二其詳一也）時々惡風（特解曰是擧二表熱一而以辨レ非二其表不一レ解者一也若其表不レ解者其表必發熱而其熱無二間斷一其惡風常在者也而今此證表無二大熱一而有二間斷一時々惡風是非二其表不レ解者一也（〇正珍曰此條時々惡風與二次條背微惡

寒一皆因二内熱薫蒸一汗出肌疎所レ致是以不レ常而時時不レ顯二然於全身一而微二於背一其非二表不レ解之惡風寒一可レ知也亦猶下陽明之腹滿常痛與二太陰之腹滿時痛一之異上也先輩或以爲二表未レ解非也正珍尙有二詳說一極是也）大渴舌上乾燥而煩欲レ飮二水數升一者（特解曰是擧二裡熱一也南涯曰吐下後津液亡以二裡有レ熱大渴引二水飮一舌上乾燥口不レ燥是津液亡之候也○正珍曰此傷寒表邪熾盛不下爲二發汗若吐下一解上云々今云此已下已に正文にとれる故略）白虎湯主レ之（特解曰言傷寒若吐若下後七八日不レ解而急劇其狀如二壞病一而不レ可レ名狀一其地位亦已在二深處一是於レ法爲二熱結在レ裡之所レ致也而其證表裡俱熱其表熱則有二間斷一時々惡風其裡熱則大渴舌上乾燥而心煩欲レ飮二水數升一者是的然白虎之證也不三復容二疑惑一故云白虎湯主レ之也○本作二白虎加人參湯一今從二玉函六脈經千金及翼外臺一而改レ之以下二章倣レ之南涯有レ說焉）

【五十九】傷寒（此章承二前章一而擧下其不レ因二于發汗吐下一轉二于白虎湯之地位一者上而且明レ有二其異證一也）無二大熱一口燥渴（特解曰其表雖レ有レ熱而但似二身熱之易者一而無二復表證翕々發熱之狀一若其裡熱之狀則其口乾燥又且大渴是其裡熱如レ熱者也是熱結在レ裡之候也）心煩背微惡寒者（南涯曰邪氣薄レ裡致二心煩一困二心煩一而致二背惡寒一也○金鑑曰傷寒身無二大熱一不レ煩不レ渴口中和背微惡寒附子湯主レ之屬二少陰病一也今傷寒身無二大熱一知熱漸去レ表入レ裡也口燥渴心煩知熱已入二陽明一也雖レ有二背微惡寒一證一似二乎少陰一但少陰證口中和今口燥渴是口中不レ和也背惡寒乃陽明内熱熏二蒸於背一汗出肌疎故微惡レ之也）白虎湯主レ之

【六十】傷寒脈浮發熱無レ汗其表不レ解者不レ可レ與二白虎湯一（言下雖レ有二白虎湯證一其表證仍不レ解者不上レ可レ與レ之金鑑曰其表不レ解者雖レ有二燥渴一乃大青龍湯證不レ可レ與二白虎湯一）渴欲レ飮レ水無二表證一者（無二表證一謂二惡寒頭身疼痛皆除一也）白虎湯主レ之（南涯曰前兩章擧惡風惡寒似二表證一故擧二此條一而以辨レ非二表證一也

【六十一】服二桂枝湯一大汗出後（曰レ後則汗已自止可レ知矣）大煩渴（謂二渴之甚一所レ謂欲レ飮二水數升一者是也蓋以二大汗出津液脫之故也○本論用二煩字一之

例有主用有兼用如煩。心煩。胸煩。内煩。微煩皆主煩言之若夫煩躁煩渴。煩疼。煩熱。煩胸。煩滿。皆不以煩爲主蓋所兼及之客證已判爲二證非也故煩字在句首者皆帶說之詞而輕其有句尾者皆主用之證而諸煩字可例而知也)不解(非言煩渴不解焉大汗出後其病不解發大煩渴之義也○再按雖飲水數升其渴不解之義歟)脈洪大者(大煩渴脈洪大者是熱邪已伏裡之徵也)白虎加人參湯主之(此熱邪熾盛銷鑠津之證也宜急挫其熱以救津液之垂竭乃此方之所主治也○此證其所以異乎猪苓五苓者以脈之洪大與小便快利也

白虎加人參湯方(○方第)

於白虎湯方內加人參三兩餘依白虎法

三陽合病

【六十二】三陽合病(南涯曰此病人以爲少陽則有腹滿疑證以爲太陽則有身重以爲陽明則有遺尿是以爲合病也)腹滿身重難以轉側(南涯曰以邪熱伏于裡之故血氣不循水聚而腹滿也以腹滿之身重以身重之故難以轉側也而此證腹滿非主證故不用逐水之藥也)口不仁而面垢)口中不仁者以邪熱乾涸津液之故渴而口中乾燥生胎是以言語不利且不知食味也面垢者本節陽證則面色當赤而反以帶黑色如垢言之也蓋以血氣凝滯不循環之故爲此證也　正珍曰或口不能言語或口不覺寒熱痛痒或口不能辨五味皆謂之口中不仁凡病證曰不仁痛痒並不知覺今譬諸不仁人路視人患難恝然無介于心是以謂之不仁也)譫語遺尿(特解曰邪熱盛於內而正氣不能攝其內故使之遺尿也上文所說實是邪熱極劇之惡證而劇方甚難矣然若其人自汗出者是表已解而邪熱伏于裡之候則斷然主白虎湯以挫其壯熱也故下文若自汗出者白虎湯主之十字當移于此而看焉)發汗則譫語甚)前證若誤發汗則津液益越出大便燥結而譫語益甚也)下之則額上生汗手足逆冷(南涯曰以譫語爲熱實下之則病急迫而致逆冷也身重難轉側遺尿湯證是不可下證也)正珍曰中濕篇云濕家下之額上汗出微喘小便不利者死可見下後額上汗出者果爲虛寒危之證矣)若自汗出者白虎湯主之

（此十字當レ在二于遺尿句下一而以下古人爲二文法一所上拘故綴二於條末一焉○言三陽合病而腹滿身重難二以轉側一口不仁而面垢讝語遺尿自汗出者是表證已解而熱氣伏二于裡一表見二陰寒之狀一也白虎湯主レ之）

【六十三】陽明病脈浮而緊（太陽也）咽燥口苦（少陽之證也）腹滿而喘發熱汗出不二惡寒一反惡熱（陽明也）身重（以上之證是乃內熱結在レ裡而無二燥屎一之證與二前三陽合病章一同焉宜下與二白虎湯一以挫中其熱上也）若發汗則躁心中憒々而反讝語（言上文宜二白虎湯一之證若誤二認其脈之浮一以爲二表未レ解而發二其汗一則津液越出大便爲レ堅令二人煩躁心亂而反讝語一乃承氣證也謂二之反一者以下其發汗不二徒無レ益反使中之增劇上也○憒々者謂二心亂一也）若加二溫鍼一必怵惕煩躁不レ得レ眠（言上文宜二白虎湯一之證若加二溫針一則致二火逆一怵惕煩燥不レ得レ眠所レ謂太陽傷寒者加二溫針一必驚是也乃桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣湯桂枝甘草龍骨牡蠣湯證也○怵惕者恐懼貌也）若下レ之則胃中空虛客氣動レ膈（卽心中懊憹之因也）心中懊憹（解見二于壞病篇餘熱內伏條一）舌上白胎者梔子豉湯主レ之（言上文宜二白虎湯一之證若認二其腹滿汗出惡熱一以爲レ有二燥屎一而下レ之則胃中空虛客氣動膈令二人心中懊憹一懊憹而舌上白胎者餘熱上逆之所レ爲與二第二百三章一同證也故與二梔子豉湯一以解二其餘熱一則愈）若（下レ之之後）渴欲レ飮レ水口乾舌燥者白虎加人參湯主レ之（此卽上文白虎湯之證仍不レ已也雖レ然依二誤下一而損二其津液一故加二人參一以兼生二津液一也）若（下レ之之後）脈浮發熱渴欲レ飮レ水小便不利者猪苓湯主レ之（言三陽合病白虎湯之證若誤下レ之之後病不レ解仍存二脈浮發熱等之證渴欲レ飮レ水小便不利者一此內有二停水一之所レ致也與二此湯一以利二其停水一則餘熱隨而解矣○梔子梔湯方見二壞病篇一）

猪苓湯方（○方第）

滑石（碎）茯苓　猪苓（去皮）澤瀉　阿膠（各一兩）

右五味以二水四升一先煮二四味一取二二升一去レ滓內二阿膠一烊消溫服七合日三服

【六十四】陽明病汗出多而渴者不レ可レ與二猪苓湯一以二汗多胃中燥一猪苓湯復利二其小便一故也（此承下前條陽明病用二猪苓湯一證上發レ之□言陽明病汗出多而渴者雖二小便不利一不レ可レ與二猪苓湯一蓋汗與二小便一同

是一液故汗多者小便必不レ利津液內竭也非ニ蓄而不レ利一也此證宜レ與ニ白虎加人參湯一）

内案承氣諸證

【六十五】陽明病（是擧下太陽病傷寒既服ニ麻黃湯大靑龍湯等一而後其病不レ解遂進入爲中陽明大承氣湯之證上也觀下下文云ニ外欲レ解與ニ外未解一也之語上可レ見矣）其脈遲（對ニ表證之脈浮數一而以明ニ陽明胃實之脈狀一也雖レ云レ遲按レ之則必實也）雖ニ汗出一而不ニ惡寒一（汗出者當ニ惡寒而今反不ニ惡寒一故間ニ而字一以明レ之此蓋外欲レ解之一徵也）其身必重短氣腹滿而喘（南涯曰以ニ熱氣內實而水氣不レ能ニ外行一之故腹滿短氣身必重也喘者因ニ短氣腹滿一水氣上攻而致也是以水氣迫爲レ主而喘不レ爲レ主故無ニ治レ喘之藥一也）有ニ潮熱一此外欲レ解可レ攻ニ其裏一也（欲者欲レ解未レ解之辭也上文所レ擧汗出雖ニ是爲ニ外證一乎不ニ惡寒一且有ニ潮熱之實候一則其外證既將ニ自解一之候也故當ニ斷然攻ニ其裡一不レ須ニ復疑一矣故云レ可レ攻ニ其裏一也雖レ然未ニ斷爲ニ大承氣湯證一但云レ可レ攻ニ其裡一也而以明レ有下亦可レ議ニ調胃承氣小承氣二湯一之疑途上也若夫此證而更得ニ但手足濈然汗出餘所無レ汗等大便已堅之候一而後始用ニ大承氣湯一也仲景氏之用方不レ苟也且如レ此矣）手足濈然汗出者（南涯曰熱實而其汗濈々然如レ油手足出一身不レ出也成本濈然之下有ニ而字一非也）此大便已堅也（猶レ言手足濈然汗出者是熱實胃中燥之候則其大便之堅不レ可ニ復疑一矣）大承氣湯主レ之（言本太陽病汗出不ニ惡寒一其人身重短氣腹滿而喘其脈遲有ニ潮熱一者此外欲レ解而將レ實ニ于胃一之候也三承氣之內可ニ撰用一也若其人更加ニ手足濈然汗出之證一者是其熱實ニ于胃一而劇大便已堅之候也當下斷然主ニ大承氣湯一而勿上疑レ之也）若汗多微發熱惡寒者外未レ解也（言若其人雖ニ脈遲身重短氣腹滿者汗出多微發熱惡寒者是外未レ解之候矣微者該ニ發熱惡寒一而言レ之也）其熱不潮（南涯曰微發熱故云レ不レ潮也）未レ可レ與ニ承氣湯一（汗出多微惡寒微發熱而其熱不レ潮則雖ニ脈遲身重短氣腹滿而喘之陽明證一然而是外未レ解者也猶未レ可下與ニ三承氣湯一以攻中其裡上也當先解表之劑外解已而後須ニ其表熱變爲ニ潮熱一然後始可レ議ニ三承氣湯一也）若腹大滿不レ通者）大滿者對ニ上文腹滿一而言ニ其滿之大一也不レ通者言ニ大便不通一也觀ニ

玉函口作二腹大滿而不大便一可レ見矣）可レ與二小承氣湯一（言若雖二汗多微惡寒發熱等之外證仍未一レ解而其熱未レ潮者其腹滿大劇而且大便不レ通者以二一時之權法可レ與二小承氣湯一謹勿レ令下與二大承氣湯一大泄下上若令二大泄下一則恐遂虛二其裡一使所二仍在一之表證內攻是可レ爲二大誡一故云勿レ令二大泄下一也故其治法當下以二一時之權法一先與二小承氣湯一取中一快下上而後却用其本方解表之劑其表已解然後又却攻二其裡之陽明證一大承氣湯主レ之也）勿レ令二大泄下一（特解云勿者誡辭也言陽明病汗出多微發熱惡寒而身重短氣其脈遲者若腹大滿而大便不レ通則是外有二表證一而內有二陽明證一者也於レ法當先與解表之劑以須其表熱變爲潮熱也、然今腹大滿而大便不レ通則其證大劇而難レ須二其外證之解一故以二一時之權法一與二小承氣湯一以觀二其後證如何一而復隨二其證一而處二其方一而可也謹勿レ令下與二大承氣湯一大泄下上）

大承氣湯方（〇方第口承氣猶レ云二順氣一也）

大黃（四兩酒洗）枳實（五枚炙）厚朴（半斤去皮炙）芒消（三合）

右四味以二水一斗一先煮二二物一取二五升一去レ滓內二大黃一更煮取二二升一去レ滓內二芒消一更上二微火一一兩沸分溫再服得レ下餘勿レ服

小承氣湯方（〇方第）

大黃（四兩）枳實（三枚大者炙）厚朴（二兩去皮炙）

右三味以二水四升一煮取二一升二合一去レ滓分溫二服初服當二更衣一（錢潢曰凡貴人大便後必換二所レ服之衣一故稱二大便一曰二更衣一（〇正珍曰指二大便一曰二更衣一蓋醜穢之物不レ欲二斥言一也指二登厠一而曰二更衣一王充論衡有二明文一曰更衣之室可レ謂レ臭矣可二以徵一矣）不レ爾者盡飲レ之若更衣勿レ服レ之（用二下劑一之不二苟且一如レ此雖レ然毒不レ盡者豈可レ拘二此服法一乎

〇吳子曰云々

【六十六】陽明病潮熱大便微堅者可レ與二大承氣湯一不レ堅者不レ可レ與レ之（言潮熱者實也得二大便微堅者便可攻之若便不レ堅者則熱未レ成レ實微有二潮熱一亦不レ可レ攻焉）若不大便六七日恐有二燥屎一（燥屎乃日外所レ食之精粕牢結而乾二著腸內一者大便乃現今所レ食之精粕潤輭而直二下肛門一者欲レ知レ之法少々與二小承氣湯一々入二腹中一轉矢氣者此有二燥屎一也乃

可レ攻レ之（以レ藥探レ之又一法也蓋小承氣湯藥性緩不レ能二宣泄一必推二轉燥屎之氣一也〇轉矢氣者放屁也矢與レ屎通用蓋放屁者糟粕新故相搏之氣也平人欲レ圊或宿食者喜放屁可レ見放屁腸胃有レ物矣）若不二轉矢氣一者此但初頭堅後必溏不レ可レ攻レ之攻レ之必脹滿不レ能レ食也（言若與二小承氣湯一不二轉矢氣一是胃中無二燥屎一但腸間少堅爾止初頭堅後必溏攻レ之則虛二其胃氣一致二腹脹滿不一レ能レ食也若誤攻レ之之後果然致二此證一者是腹胃之虛寒當二急溫一レ之所レ謂下利腹脹滿宜二四逆湯一者是也）

【六十七】得レ病二三日脈弱（其熱不二熾盛一可レ知也）無二太陽及柴胡證一煩躁心下堅（其邪已入二陽明部位一可レ知也〇太陽不レ言レ藥以レ有二桂枝麻黃之不同一也少陽言レ藥以三專主二柴胡一也凡以レ此爲レ文者皆互發也）不大便至二四五日一其人雖二能食一當下以二少承氣湯一少々（不レ過二三四合一之謂對二下文一升一而言此祇通二胃氣一而已又用レ藥之一法（與微和レ之令中小安上若少々與レ之而不得屎延至二五六日一者與二小承氣湯一升一（至字下五字從二劉棟說一與字下小字從二宗俊父說一補レ之）若其小便少者雖二不大便六七日一不レ能レ食未レ定レ成也（言屎未定堅也）攻レ之必溏須二小便利屎定堅一乃可レ攻レ之宜二大承氣湯一（〇季玆曰此條多補レ字而不レ言三其所二以補一レ之且注文甚疎蓋以三初稿未二全備一故如レ是耳）

【六十八】傷寒若吐若下後不レ解（是擧下傷寒若吐若下後其病不レ解至二于陽明胃實極劇之證一者與中或陷二于陰位極劇之證一而至二于死證一者上而明二其差別一也）不大便五六日上至二十餘日一（南涯曰不大便五六日以上至二十餘日一見二陽實之證一且發二潮熱一也）日晡所發二潮熱一不二惡寒一（但日晡所發二潮熱一耳此實熱已定故不二惡寒一也）獨語如レ見二鬼狀一（南涯曰病人恍惚目如レ見二鬼物一也獨語比二譫語一則其證較無二對者一而語曰二獨語一也〇不大便潮熱不二惡寒一此確然陽明證也而加レ之以二此證一其極劇可レ知矣）若劇者發則不レ識レ人（劇者前證之劇也發者前證發作之時也言前證發作有レ時若劇則不レ識レ人不レ發則否也蓋此章以二發作有一レ時言レ之則其證尙未レ劇也微二此于事實一而觀レ之有下此證至二于其極劇者則循衣撮空怵惕不レ安直視獨語如レ見二鬼狀一等之證當在而昏冒不レ知レ人至二于十數日一者上余亦向患二此劇證一而

所自驗也）循衣撮空怵惕不安（怵惕煩躁不安臥
循所著之衣爲撮空爲取物之狀等並正氣昏
冒之狀也○）微喘直視（目睛不瞤動謂之直視
也）脈弦者生（弦者對濇而言脈有力而不失神
也本章所擧急劇而以死證亦有之之故唯據證
難處劑故□□認而因脈以弦與濇辨死生得
弦脈而知其可生斷然用大承氣湯不疑矣○大
承氣湯主之六字當接于此看之）脈濇者死（本
章所擧之證而其脈微濇者此死證無所施治也○
濇者對弦而言濇滯無力而失神也○特解曰前證
而其脈濇者是其內已極虛而又有內實之劇證然
其所病者即大承氣湯的證也今若與大承氣湯以
攻其內實則是以虛加於其虛者其斃可立而
俟也若不與大承氣湯而攻內實則亦爲此內
實之劇證可斃故曰濇者死也）大承氣湯主之）此
六字屬法弦者生之句下可見矣○季玆曰初稿之
本此下有若一服利則止後服八字一稿本無者蓋
删之也今從之）

【六十九】陽明病讝語有潮熱而煩（煩字本作反因
聲近而誤也今從宗俊父之說改之）不能食者
胃中必有燥屎五六枚也（○胃唯是容受水穀之
所而非燥屎所留也水穀之作穢物必在入腸之
後也今謂胃中有燥屎者何也凡陽明病大便不
通者皆由邪之聚胃中也屎雖則在腸中使之
堅且燥者實由邪之入胃且也腸胃原是一府胃爲
本腸爲末固非他物故擧胃隷腸概言胃中有
燥屎已○以腹診言之此證診其腹則必有糞塊
如著餅或如杏核鷄卵者應於手也如是者
宜以大承氣湯下之）大承氣湯主之若能食者
但堅爾（言若其不煩且能食者但堅而已與小承氣
湯可也）

【七十】病人不大便五六日繞臍痛（燥屎在腸胃結滯
故也）煩躁（實熱鬱悶之所致也）發作有時者
（日晡以發潮熱言之）此有燥屎故使不大便
也（不言大承氣湯者省文也此接上文而言亦
宜大承氣湯明矣）

【七十一】病人小便不利大便乍堅乍易時有微熱喘冒
不能臥者有燥屎也宜大承氣湯（小便不利大
便乍堅乍易者燥屎橫道爲之障礙也況微熱喘冒
不能臥是煩躁讝狂之漸乎雖無滿痛亦必有燥屎

故宜大承氣湯下之）

【七十二】陽明病（此三字包陽明諸證）發熱汗多者急下之宜大承氣湯（陽明病不大便發熱汗多者熱迫津液將竭雖無內實亦當急下之以全津液爲務也）

【七十三】發汗不解腹滿痛者急下之宜大承氣湯（發汗病不解反腹滿痛者是邪熱傳入胃之過也是須急下之□病人雖表不解腹滿痛者不得不下之百四十七條曰本先下之而反汗之爲逆若先下之治不爲逆是也）

【七十四】腹滿不減不足言（雖略減而仍腹滿也）當下之宜大承氣湯（若腹滿時減非內實也則不可下金匱要略曰腹滿時減復如故此爲寒當與溫藥若滿不痛者虛也宜厚朴生姜半夏甘草人參湯）

【七十五】傷寒腹滿按之不痛者爲虛（厚朴生姜半夏甘草人參湯證）痛者爲實當下之舌黃未下者下之黃自去宜大承氣湯（此承上二條以辨腹滿之虛實也凡腹滿之證虛者可按實者不可按故實者當下之若舌有黃胎而未經下者則實熱結於中焦下之則實熱除而黃胎自去）

【七十六】傷寒六七日目中不了了睛不和（邪熱內甚上熏於目也了了猶瞭瞭也睛不和者睛不活動也）無表裏證（表也者謂太陽及少陽之證裏也者謂三陰之證也□鶴日裏衍也乎）大便難身微熱者此爲實也急下之宜大承氣湯（□目中不了了而睛和者陰證也雖外無陽證惟微熱內無滿痛祇大便堅亦爲熱實故曰此爲實也）

【七十七】陽明病下之心中懊憹而煩胃中有燥屎者（其候者腹大滿不大便小便數等）可攻宜大承氣湯（下後心中懊憹而煩者虛煩也當與梔子豉湯若胃中有燥屎者非虛煩也可與大承氣湯下之）其人（二字依玉函補）腹微滿初頭堅後必溏不可攻之（其人腹微滿初頭堅後溏此無燥屎此熱不在胃而在上也故不可攻）

【七十八】大下後六七日不大便煩不解（熱未退也）腹滿者（胃實之候）此有燥屎也宜大承氣湯（雖大下之之後未盡仍當下之）

【七十九】汗出讝語者以有燥屎在胃中此爲實也（實字本作風今從宗俊父說改之）須下之過經

乃可レ下レ之（過經者邪氣過ニ去經脈之表一而既轉入ニ乎陽或陽明ニ之辭故ニ於少陽及陽明ニ毎々稱レ之蓋表解之謂也過者字典云越也超也經者經脈之經與ニ發汗則動レ經及經脈動惕久而爲レ痿之經ニ同焉皆指レ表之辭對ニ臟府之裡一爲レ言□季兹曰一稿本云經者經絡之經而素問所レ謂一日巨陽二日陽明三日少陽四日大陰五日少陰六日厥陰受レ之是也卽過經者延過其六經傳變之日ニ而久不レ愈之辭也今按少陽大柴胡及柴胡加芒消條與ニ下第□□條一本有ニ過經之語一而別稿本並刪レ之然則此條亦宜レ屬ニ刪去一也而陽明篇但存ニ初稿本一無ニ晩年訂正之本一故姑存レ舊以不ニ敢私改レ之）以ニ表虛裡實一故也（虛實二字當下作ニ邪氣之去來ニ看上焉）下レ之則愈宜ニ大承氣湯下ニ之（言陽明病汗出讝語者此燥屎在ニ胃中一爲レ實也須レ下レ之雖レ然表證未ニ盡解一者不レ可レ下レ之惟其表虛裡實下レ之則愈宜ニ大承氣湯一也）下レ之若早語言必亂（若下レ之早語言必亂以ニ表未レ虛裡未ニ實故也）

【八十】陽明病讝語發ニ潮熱一脈滑而疾者承氣湯主レ之（言陽明病讝語發熱不大便脈滑而疾者此爲ニ裡實一承氣湯主レ之蓋本文雖レ不レ及ニ不大便一脈證既已若レ斯則其大便者可ニ從而知一也○不レ言ニ大小一者要在ニ隨レ證辨用一也　諸本作ニ小承氣一今從ニ脈經千金翼二）因與ニ承氣湯一升一湯入ニ腹中一轉矢氣者（是有ニ燥屎一也）更服ニ一升二（可レ下レ之）若不ニ轉矢氣（是無ニ燥屎一也二）更與フ之（如レ是者宜下與ニ柴胡加芒消湯輩一以和上之也）

【八十一】傷寒四五日脈沈而喘滿（同懣悶也）沈爲レ在レ裡（脈沈者爲ニ邪氣在レ裡）而反發ニ其汗一津液越出（越者猶レ言レ發也字典注云散也）大便爲レ難（難者求而不レ得之辭津液越出胃中乾燥此爲屎既爲レ堅故也）表虛裡實久則讝語（至ニ其久一則發ニ讝語一以ニ穢氣犯ニ神明一也宜下用ニ大小承氣一下上之

【八十二】陽明病其人多汗以ニ津液外出胃中燥一大便必堅々則讝語小承氣湯主レ之（多汗讝語下證急矣以其人汗出既多津液外耗故不レ宜ニ大下一但當下略與ニ小承氣湯一和中其胃氣上讝語自止）若一服讝語止者更莫ニ復服一（若過服反傷ニ津液一也蓋此章八十章所レ謂微者也）

【八十三】大陽病若吐若下若發汗後微煩小便數大便因堅者（因字當レ著レ眼大便之堅蓋汗吐下已傷ニ津液一

而又小便太多故爾徴堅非寒邪也故）與小承氣湯和之愈

【八十四】下利讝語者有燥屎也宜小承氣湯（〇）其下利之物必稠粘臭穢知熱與宿食合而爲之也此可訣其有燥屎也於此推之可知燥屎不在大便堅與不堅而在裡之急與不急便之臭與不臭也少陰篇云少陰病自利清水色純青心下必痛口乾燥者急下之宜大承氣湯辨可下篇曰下利心下堅者急下之宜大承氣湯下利脈遲而滑者内實也宜大承氣湯下利不欲食者有宿食故也當下之宜大承氣湯是也雖然讝語間有屬虛寒者不可概以爲胃實燥屎也□□□條云讝語脈短者死第百條云陽明病讝語脈反澁者重虛也是也）

【八十五】太陽病三日發其汗不解（謂發汗及乎三日仍未解也不解者邪氣之不解也非表之不解也外臺作病不解者得此意焉）蒸蒸然發熱者屬胃也（猶釜甑之蒸物熱氣蒸騰從内達外氣蒸濕潤之狀非若翕翕發熱之在皮膚其熱蒸蒸勢必其汗濈濈矣妙哉形容乎蓋此即大便堅之兆故曰屬胃也）調胃承氣湯主之（熱雖聚於胃而未見潮熱讝語等證主以調胃承氣湯者於下法内從乎中治以其日未深也）

調胃承氣湯方（〇）方第

大黄四兩　芒消（半斤）　甘草（二兩炙）

右三味以水三升煮取一升去滓内芒消更上火微煮令沸少々溫服之

【八十六】傷寒十二日不解（此承柴胡加芒消湯章而示同日數而邪轉入于陽明部而下利者之治法也故讝語亦不異也蓋彼少陽部此陽明部則此條深於彼條一等者也〇十二日本作十三日今從東郭父説而改之）讝語者以有熱也（以有熱也者據證之言而有者對無之辭雖外無熱據其讝語以徵内之有熱也〇讝語者以熱迫于心也）而反下利者（讝語是内有熱之候則大便當堅而今下利故云反也）調胃承氣湯主之（此證胃氣固不和之人感邪作薄延日而雖遂傳入于陽明部其人以胃氣不之調之故其邪熱不結而反爲下利也故與此湯以調和胃氣追邪也此仲景氏治胃氣固不和人之陽明證之法也〇此章本有後人之攙簡數

句一而無レ益二於治術一之文也故今刪レ之）

【八十七】陽明病不レ吐不レ下心煩者（謂下未レ經二吐下一而心煩上也其爲二熱盛案煩一可レ知也）可レ與二調胃承氣湯一（病人嘔吐而心煩者少陽柴胡證也下利而心煩者少陰猪膚湯證也今不レ吐不レ下而心煩乃陽明熱煩但未レ至二譫語便祕腹滿大渴引飲諸候一故先與二調胃承氣湯一以解二內熱一也蓋一時權用之方耳）

津液內竭

【八十八】陽明病自汗出若發汗小便不利者（本作二自利一今從二宗俊父說一改レ之）此爲二津液內竭一（亦亡也）雖レ堅（謂二大便堅一也）不レ可レ攻レ之當須三自欲二大便一（須待也言必待二其自欲二大便一而後用二此法一）宜二蜜煎導而通一レ之若土瓜根及大猪膽汁皆可レ爲レ導（言陽明病自汗出若發汗之後小便不利者雖二大便堅一此因二汗出多一津液內竭腸胃乾燥非二結熱一也故不レ可レ攻レ之宜三以レ藥外治而導二引之一）

蜜煎方（○方第）

食蜜（七合）

右一味於二銅器內一微火煎レ之稍凝如二飴狀一攪レ之勿レ令二焦著一候レ可レ丸併手捻作レ挺（謂兩手合併而捻レ之欲二剛柔得一レ所也○挺與二挺鋌一古字通用）令二頭銳大如レ指長二寸許一當二熱時一急作冷則堅以二穀道中一（○）萬氏家抄卷三蜜導法凡諸祕結不レ通或兼二他症一又老弱虛極可レ用レ藥者用レ蜜入二皂角末少許一同熬至蜜老乘レ熱捻如二棗核大一納二入穀道中一良久即通）

土瓜根方（闕○外臺引二古今錄驗一療二大小便不通一方取二生土瓜根一擣取レ汁以レ水解レ之於二筒中一吹內二下部一即通○又證類本草引二肘后方一治二小便不通及關格一方生土瓜根擣取レ汁以二少水一解レ之筒中吹二下部一取レ通）

猪膽汁方（○方第）

大猪膽一枚瀉汁和少許法醋以灌穀道內如一食頃當大便出

噦而腹滿

【八十九】傷寒噦而腹滿（噦後世所レ謂吃逆也靈樞雜病篇云噦以レ草刺レ鼻使レ嚏々而已無レ息而疾迎引レ之立已大驚レ之亦可也是也或爲二咳逆一或爲二乾嘔一皆非也）問二其前後一（前部小便也後部大便也）問本作レ視今依二玉函一改レ之）知二何部不一レ利利レ之卽

愈（○傷寒噦而不腹滿者爲正氣虛吳茱萸湯證也噦而腹滿者爲邪氣實問其二便何部不利前部與猪苓湯後部與調胃承氣湯素問標本病傳論曰先病而後生中滿者治其標又曰小大不利治其標此條亦不拘噦而專主腹滿者蓋先發其急者也○噦有胃寒有胃熱胃寒之噦多難治胃熱之噦易治矣）

熱入血室

【九十】陽明病下血讝語者此爲熱入血室但頭汗出者當刺期門隨其實而瀉之濈然汗出則愈（此論婦人陽明病熱入血室者也病狀如是當必自愈以熱隨血而下也詳見少陽篇若其但頭汗出者瘀熱在裡而不得越故也當刺期門以瀉其實熱則熱得發越遍身濈然汗出而愈其不用茵蔯蒿湯者以未及腹滿煩渴小便不利等自無發黃之勢也○少陽篇婦人中風刺期門者以胸脇下滿也此條刺期門者以瘀熱在裡也）

發黃

【九十一】陽明病發熱汗出者此爲熱越不能發黃也（陽明病發勢汗出而渴者白虎加人參湯證也若發熱汗多而不渴者是爲有燥屎大承氣湯證也二證俱不能發黃以其熱發揚也○越猶言發）但頭汗出身無汗劑頸而還（瘀熱不得越上蒸攻頭也）小便不利渴引水漿者（因瘀熱蒸津液也）此爲瘀熱在裏（此頭汗以下證之因○瘀蓋與菸通用菸鬱也瘀熱即鬱熱也）身必發黃（其瘀熱外薄肌膚而鬱蒸也）茵蔯蒿湯主之（與此湯以通大便則鬱熱從解也）

茵蔯蒿湯方（方第）

茵蔯（六兩）　梔子（十四枚擘）　大黃（二兩去皮）

右三味以水一斗二升先煮茵蔯減六升去滓内二味煮取三升去滓分溫三服

【九十二】傷寒七八日身黃如橘子色小便不利復微滿者茵蔯蒿湯主之（此乃前條證而加腹微滿一證者蓋瘀熱在裡而大便堅故已）

【九十三】傷寒身黃發熱者梔子蘗皮湯主之（茵蔯蒿湯證瘀熱在裡而外無表熱且小便不利腹有微滿此則不然外有發熱而無小便不利腹滿至於身黃則一也蓋茵蔯蒿湯主裡鬱蘗皮湯主表鬱）

梔子蘗皮湯方（○方第）

梔子（十四枚擘） 甘草（一兩炙）黃蘗（二兩）
右三味以二水四升一煮取二一升一去レ滓分溫再服
【九十四】傷寒瘀熱在レ裡身必發レ黃麻黃連軺赤小豆湯主レ之（此乃茵蔯蒿湯證輕者無二腹滿小便不利證一故治方亦輕比二之梔子蘗皮湯證一無二發熱一爲レ異矣）

麻黃連軺赤小豆湯方（○方第）
麻黃（二兩去節）連軺（二兩連翹根是）生姜（二兩切）杏仁（四十箇去皮尖）赤小豆（一升）大棗（十二枚擘）甘草（二兩炙）生梓白皮（切一升）
右八味以二潦水（雨水所積也）一斗一先煮二麻黃一再沸去二上沫一內二諸藥一煮取二三升一去レ滓分溫三服半日服盡（○此方欲二黃從レ汗解一茵蔯蒿湯欲二黃從レ下解一乃有レ表無レ表之分也）

挾畜血

【九十五】太陽病不レ解（言雖レ發レ汗其病尚不レ解也）其人如レ狂（謂二之如レ狂者狂而未レ甚之辭無レ歎而歌無レ憂而哭之類其狀類二風癲一與二陽明病譫語煩躁發狂者一不レ同世俗所レ謂血證病之劇者與下下條所レ謂發狂少陽篇所レ謂獨語如レ見二鬼狀一之證上相同而有二輕重一也蓋熱迫二血分一血熱相搏而爲二此證一也）血自下（熱入二于血分一而急迫劇也故不レ假二藥力一而血自下）下者愈（血自下則熱邪隨レ血而解故云下者愈猶二麻黃湯之證自衄者愈之例一但有二上下之別一耳）若不爾者可攻之（此七字決然不レ可レ無也而無レ之者缺文也耳否則下文尚未レ可レ攻一句無二照應一也故今謹而補レ之蓋言若血不二自下一則以二挑核承氣湯一可レ下レ之也）其外不レ解者尚未レ可レ攻（熱入二于血分一則其血被レ搏而凝結可レ知矣其血已凝結則不レ可レ不レ下然有二外證一者攻レ之則恐內攻故云レ未レ可レ攻也）外解已但小腹急結者乃可レ攻レ之（言外症已解但小腹急結者熱實血凝之狀定矣於レ是乃攻二其凝結一可也○急結者謂二拘攣急縮而凝結一非二急卒而結之謂一也○小腹之小本作レ少誤寫也今從二玉函一而改レ之蓋臍上曰二大腹一臍下曰二小腹一素問藏氣法時論有二明文一可レ徵）矣宜二桃核承氣湯一（此方調胃承氣湯減二芒消一而加二桃仁桂枝一者也故以二解熱一爲レ血若夫血爲レ主者抵當湯之主也）

桃核承氣湯方（方第）
桃仁（五十箇去皮尖）大黃（四兩）桂枝（二兩去皮）甘草（二兩炙）芒消（二兩）右五味以二水七升一煮取二二

升半去滓內芒消更上火微沸下火溫服五合日三服當微利

【九十六】太陽病六七日（此亦以既經發汗若吐下之後言之何以知之以表證仍在之文知之也）表證仍在（言頭痛發熱惡寒等證仍在也）脈沈而微反不結胸（表證仍在其脈微而沈當變為結胸大陷胸湯條云脈沈而緊可見結胸其脈多沈今此證當結胸而不結胸故曰反也蓋此沈脈初不沈先已見微而稍沈與云脈沈微不同也是瘀血脈而非結胸之脈也故間而字以別之○太陷胸湯之證其病狀靜而與脈狀頗相似者也本方及桃核承氣之證其病頗躁而與脈狀相反者也）其人發狂者小腹當堅滿（發狂者是熱犯血分乘心之證也熱入于血分則其血腐敗血腐敗則必結于小腹故曰小腹當堅滿也○一稿本云有瘀血者必凝結于小腹云々）小便自利者下血乃愈（小便不利則小腹堅滿是其常也今小腹雖堅滿小便快利如常者可以決畜血無疑而下之矣）抵當湯主之（此章比桃核承氣湯一等重者也彼則小腹急結此則小腹堅滿彼則如狂此則發狂其劇易可以考矣蓋抵當湯以治瘀血為主桃核承氣湯以解熱為主逐血攻血之功以抵當湯為勝矣）

抵當湯方（○）方第　（○水蛭一名至掌至與抵同音通用所謂抵當即抵掌之訛而實為水蛭之異稱矣此方以水蛭為君所以命曰抵掌湯已若其不直曰水蛭湯者蓋汚穢之物不欲斥言殊取其異稱以為方名猶如不言人尿湯而言白通湯矣）水蛭（三十箇熬）蝱蟲（三十箇去翅足熬）桃核（二十箇去皮尖）大黃（三兩酒洗或作酒浸）

右四味以水五升煮取三升去滓溫服一升不可更服

【九十七】太陽病身黃（偏身俱黃也）其脈沈結小腹堅（契以上十二字而以為綱係以小便利與不利以別瘀血之發黃與瘀熱之發黃辨茵蔯蒿湯與抵當湯之疑途也）小便不利者此為無血也（即瘀熱在於裡之發黃可與茵蔯蒿湯下之也）小便自利其人如狂者血證諦也（諦審也○雖身黃脈沈結小腹堅等之證似于茵蔯蒿湯之證而小便自利其人如狂是血證之正候也故云血證諦也）抵當湯主之

【九十八】陽明證(以其久不大便而言)其人喜忘者必有畜血(喜忘謂數忘也畜與蓄同蓄積也○素問調經論曰血幷於下亂而喜忘此下本有久瘀血所以喜忘也)宜抵當湯下之(言病人久不大便喜忘前言往事者以下焦有久瘀血而爲熱邪所催上迫心識智爲之昏故不狂則忘也抵當湯下之則愈也)

【九十九】傷寒有熱而小腹滿應小便不利(五苓散證也)今反利者爲有血也當下之不可餘藥宜抵當丸(○此證也輕於抵當湯一等故無發狂如狂等證唯滿而不堅方亦爲四分之一作丸使之徐下也)

抵當丸方(○方第)

前方四味擣分爲四丸以水一升煮一丸取七合服之晬時(周時也從今旦至明旦)當下血若不下者更服

難治

【百】陽明病(此三字本作明日叉而接第八十章爲一章今從宗俊父說改之分爲二章)不大便脈反微濇者裡虛也爲難治(言陽明病不大便者其脈當滑疾今反微濇者此爲裡虛故爲難治也

少陰病篇第五(○)凡外邪之中人其人素屬實熱者則發爲太陽其人素屬虛寒者則發爲少陰寒熱雖不同均是外寒初證也已)

【百一】少陰之爲病脈微細但惡寒(所謂辨陰陽寒熱篇無熱惡寒是也故次章云少陰病始得之反發熱適脈四逆湯章云少陰病反不惡寒可見無熱惡寒乃爲少陰本證矣惡寒二字從□□)欲寐也(此邪從其虛寒而化故其脈微細但惡寒而欲寐也宜與麻黃附子甘草湯微發其汗也)

【百二】少陰病(謂脈微細但惡寒欲寐也)始得之(始得之而卽觀稱少陰病可見非陽經傳邪亦非直入中藏乃本經之自惑也)反發熱(兼見太陽證也病發於本部者當無熱而熱故曰反此以其人裡虛而外實也)脈沈者麻黃附子細辛湯主之(與此湯溫而散之則瘳蓋此證太陽少陽合病也○若與此湯不差身體疼痛下利淸穀者與四逆湯其裡焉仍宜與□□□□章參考)

麻黃附子細辛湯方(○方第)

麻黃(二兩去皮)細辛(二兩)附子(一枚炮去皮破

八片)

右三味以水一斗先煮麻黃減二升去上沫內諸藥煮取三升去滓溫服一升日三服

【百三】少陰病得之二三日麻黃附子甘草湯微發汗(少陰病得之二三日寒邪在肌表而未入于裡故微發汗蓋上條兼太陽之發熱故用細辛以代桂枝此條無發熱故不用細辛而用甘草意在預扶其裡也若其二三日與此湯不愈延至四五日則必帶裡證玄武湯條曰少陰病二三日不已至四五日腹痛小便不利四肢沈重疼痛自下利者此爲有水氣其人或咳或小便利或下利或嘔者玄武湯主之是也)以二三日無裡證(以其未見自利嘔吐等證言之)又說少陰病二三日寒邪在肌表而不入于裡故微發汗此亦通)故微發汗也(以字以下明所以微發汗矣)

麻黃附子甘草湯方(□□方第)

麻黃(二兩去節)甘草(二兩炙)附子(一枚炮去皮破八片)

右三味以水七升先煮麻黃一兩沸去上沫內諸藥煮取三升去滓溫服一升日三服

【百四】病發熱頭痛(太陽表證也)脈反沈(發熱頭痛表證之狀脈當浮而沈故曰反也)此太陽表證而得少陰裡脈也即太陽少陰之合病也屬麻黃附子細辛湯證也(此證若誤認發熱頭痛之表證而不論脈之浮沈攻其表則爲□□所謂欬而下利譫語小便難之險證可謹可誡矣(若不差)既已服藥而無効之辭猶言發熱頭痛脈反沈服麻黃附子細辛湯而其病仍不差矣)身體疼痛(服麻黃附子細辛湯而其證不嘗不差反加以身體疼痛是其病進也蓋此條疼痛與第百七十八條疼痛不同彼表證故以桂枝湯救之此則裡證而血滯不行氣逆而不伸之證也故用四逆湯救之)當救其裏宜四逆湯(此證無下利清穀四肢厥冷等之證故不爲四逆湯之正證也故曰宜不曰主之)

【百五】少陰病(此三字中該脈沈細而微之診見但欲寐之診却不發熱而單背惡寒此少陰裡證之確據也全篇亦視此句爲標的)得之一二日口中和(前條承無裡證文發之)其背微惡寒者(爲陰陽俱有之證如陽明病無大熱口燥渴心煩背微惡寒者乃白虎加人參湯證也此條乃少陰陽虛之背惡寒也)當

炙レ之（此蓋前條麻黃附子甘草湯證所謂無二裡證一者也故以二艾火一扶二其陽氣一而逐二外寒一耳）

陽明內實似少陰

【百六】少陰病得レ之二三日口燥咽乾者急下之宜大承氣湯（此以下三條幷是陽明病有燥屎者而實非二少陰證一今冒以二少陰病三字一者以其有二無熱欲レ寐等證一也與二太陰篇桂枝加大黃湯一例同○凡承氣證以二脈滑數一爲レ法第□□□條云脈滑而數者有二宿食一也當レ下レ之宜二大承氣湯一第八十□條云陽明病讝語發二潮熱一脈滑而疾者小承氣湯主レ之合而考レ之以下三證其脈滑數者可レ知レ之也）

【百七】少陰病自利清水色純靑（淸圊也猶レ言二下水一與二淸穀淸便淸血淸膿血之淸一同非二淸濁之淸一也若是淸濁之淸則其色當二淸白一而不レ當二純靑一也言二之水一者以三所レ下皆汚水無二糟粕一也）心下必痛（似二結胸一蓋彼有二堅滿一而此無二堅滿一其別可レ知也）口乾燥者急下レ之宜二大承氣湯一

【百八】少陰病六七日腹滿不大便者（胃中有二燥屎一也）急下レ之宜二大承氣湯一

似內實

【百九】少陰病脈沈者（乃脈微細而沈也微細二字含二蓄在二少陰病三字中一也）急溫レ之宜二四逆湯一（本節不レ說二病證一而獨說レ脈者蓋承二上三條一而發レ之也不レ可レ下レ之急溫レ之可也乃知上三條雖三名曰二少陰一其脈不レ沈可レ知矣○凡四逆證以二脈沈微及遲一爲レ法觀二第百四條第百十七條第百廿條一可レ看矣）

骨節痛

【百十】少陰病身體痛手足寒（乃厥冷兼見二厥陰證一也）骨節痛脈沈者附子湯主レ之（○身體骨節疼痛者寒邪盛之所レ致表裡俱有之證也如太陽病脈浮發熱惡寒身痛手足熱骨節是爲二表寒一當下主二麻黃湯一發表以散中其寒上此條乃裡寒之身體疼痛也故主二附子湯一溫レ裡以散レ寒也蓋少陰厥陰合病矣）

附子湯方（○方第）

附子（二枚炮去皮破八片）茯苓（三兩）人參（二兩）白朮（四兩）芍藥（三兩）

右五味以二水八升一煑取二三升一去レ滓溫服二一升一日三服

挾寒飲

【百十一】少陰病（以二無熱惡寒脈微細一言レ之）吐利手

足逆冷煩躁欲死者（以上見裡證也蓋少陰兼厥陰者如不合病則是併病已）呉茱萸湯主之（少陽篇云食穀欲嘔者呉茱萸湯主之次章云乾嘔吐涎沫頭痛者呉茱萸湯主之此條以嘔爲主者諦矣若原其因則胃中虛寒而飲水淤蓄陽氣爲之被閉乃厥逆者也下利清穀而手足厥冷煩躁欲死者四逆之主也嘔吐而下利手足厥冷煩躁欲死者呉茱萸湯之主也故呉茱萸湯以吐爲主也四逆湯以利爲主也是下利二證之別不可不識也）

呉茱萸湯方（方第）

呉茱萸（一升洗）人參（三兩）大棗（十二枚擘）生姜（六兩切）

右四味以水七升煮取二升去滓温服七合日三服

【百十二】乾嘔吐涎沫（乃是吐痰也）而復頭痛者（寒氣上攻也○乾嘔吐涎沫者是裡寒也裡寒不可有頭痛故曰復○而復二字依玉函補之）呉茱萸湯主之（○此胃虛寒而飲水淤蓄者與次章膈下有寒飲乾嘔與四逆湯差後病篇大病差後喜唾久不了々胃上有寒宜理中丸者同胃寒有飲之證故與呉茱萸湯以温胃逐水也蓋此證今世所謂痰厥頭痛者外臺第八卷載痰厥頭痛方八首至於後世則有元人李杲半夏白朮天麻湯方載在蘭室祕藏蓋皆呉茱萸湯之支流餘裔耳）

【百十三】少陰病（以無熱惡寒言之）飲食入口則吐心中温々欲吐復不能吐始得之（猶言自病發也）手足寒（卽厥冷四逆湯通脈四逆湯白通加猪膽汁湯共有之證也雖彼則下利清穀脈微欲絕而此則無下利脈微等候故雖有厥冷不用姜附也）脈弦遲者此胸中實不可下也（此證以有似十棗湯證故誡之也）當吐之（此以邪氣實于胸中而陽氣爲之所閉也下之爲逆當以瓜蔕散吐之素問所謂其高者因而越之是也第一十六條云病人手足厥冷脈乍緊者邪結在胸中心下滿而煩飢不能食者病在胸中當須宜瓜蔕散蓋與本節同因而殊證者耳○凡嘔吐證小柴胡湯之心煩喜嘔黃連湯之欲嘔吐乾姜黃連黃芩人參湯之食入口卽吐金匱大黃甘草湯之食已卽吐皆胸中有熱也呉茱萸湯之食穀欲嘔中焦有寒也本節此邪氣實胸中而陽氣爲

之所レ閉故不レ論二其寒熱一吐以達二其鬱閉一也）若膈下（本作二膈上一今依二不可吐篇之文一從二宗俊父說一謹改レ之（有二寒飲一乾嘔者不レ可レ吐也當レ溫レ之宜二四逆湯一（言若其人手足厥冷飲食不レ吐而惟乾嘔者此爲三膈下有二寒飲一蓋脾胃虛冷不レ能レ轉二化水漿一之所レ致故不レ可レ吐以二四逆湯一急溫レ之中焦得レ溫而寒飲自散也○篤曰膈下有二寒飲一而嘔者此吳茱萸湯之證而非二四逆證一也云レ宜二四逆一者此章本此无レ方之章而方者依二當レ溫レ之之語一叔和之所レ加乎學者須二沈思一矣）

下利諸證

【百十四】少陰病下利脈微者白通湯主レ之（○三陰病下利有二大同小異數證一不レ可レ不レ詳也凡三陰病寒邪縱肆陽氣爲是所二鬱閉一下利脈微者乃白通湯所レ主也其劇者白通加猪膽汁湯所レ主也寒邪太盛陽氣虛脫下利淸穀者四逆湯所レ主也其劇者通脈四逆湯所レ主也若夫玄武湯則有二水氣一而下利者乃用レ之白通之用二蔥白一加二猪膽一而不レ取二甘草一豈非二爲レ閉之故一乎四逆之一主二扶陽一豈非二爲レ脫之故一乎玄武用二苓朮一豈非二爲レ水之故一乎）若利不レ止厥逆無レ脈乾嘔煩者（是寒邪更甚氣閉極劇以二白通湯力不レ及也此證蓋少陰兼二厥陰一者也）白通加猪膽汁湯主レ之（此前方加二猪膽一以開二其氣閉一蓋以下猪膽能喚二起元氣一開中通閉塞上也今人治下卒患急病氣閉脈伏不レ省二人事一者上每用二熊膽一屢奏二奇効一與二仲景氏加猪膽之旨一暗合冥契矣）服レ湯脈暴出者死（猶下油盡將レ滅一被二挑剔一忽明而終滅上故爲二死徵一矣○友松子曰云々）微續者生（猶下爲二霜雪一所二抑屈一之草得二春陽之氣一徐々甲折上故爲レ生也）

白通湯方（○方第）

蔥白（四莖）乾姜（一兩）附子（一枚生用去皮破八片）人尿（五合）

右四味以二水三升一煑取二一升一去レ滓內二人尿一（一說文人尿穢物不レ可三以薦二大人君子一今以二竹瀝一代用蓋取二諸性之相近一也）分溫再服

白通加猪膽汁湯方（○方第）

於二白通湯方內一猪膽汁一合一

右如二前方一煑去レ滓內二猪膽汁一與二人尿一和令二相得一分溫再服（霍亂篇通脈四逆加猪膽汁湯條云無猪膽以二羊膽一代レ之蓋以三諸獸膽性用不二甚相遠一也今

則可下以二熊膽一代上焉）

【百十五】下利淸穀不レ可レ攻レ表汗出必脹滿（下利淸穀裡寒爲レ甚可下與二四逆湯一溫上之雖レ有二表證一不レ可レ發レ汗々出則表裏俱虛而中氣不レ能二宣通一故令二人脹滿一亦四逆湯證也宜下與二次條一參考上）

【百十六】下利復脹滿（以二裡虛而氣不レ能二宣通一也）身體疼痛者（爲二表未一レ解也）先溫二其裡一（利止裡和而後）乃攻二其表一（攻者言二專治一也下同）溫レ裡宜二四逆湯一攻レ表宜二桂枝湯一（百七十八條曰傷寒醫下レ之續得下利淸穀不レ止身疼痛者急當レ救レ裡後身疼痛淸便自調者急當レ救レ表救レ裡宜二四逆湯一救レ表宜二桂枝湯一）

【百十七】脈浮而遲表熱裡寒下利淸穀者四逆湯主レ之（表熱裡寒者明二其因一之辭謂下外有二太陽表熱一內有中太陰裡寒上如二前條一亦然大抵表裡俱病者先治レ表而後治レ裡今以二下利淸穀之急一故先救二其裡一也）

四逆湯方（〇方第）

附子（一枚生用去皮破八片）乾姜（一兩半）甘草（二兩炙）

右三味以二水三升一煮取二一升二合一去レ滓分溫再服

【百十八】大汗出熱不レ去內拘急（內者言二腹內一也）四肢疼下利又厥逆而惡寒者四逆湯主レ之（大汗出熱不レ去內拘急四肢疼此一證下利厥逆而惡寒此一證二證雖レ似レ異要レ之等是陽亡レ表寒盛二於裡一之所レ致也故二證均主二四逆湯一溫レ經以勝レ寒回レ陽以斂レ汗也〇脈經無二又字一若據レ之則合爲二一證一也此證而脈微欲レ絕者通脈四逆湯之所レ主也）

【百十九】大汗若大下利而厥冷者四逆湯主レ之（大汗大下利內外雖レ殊其亡二津液一損二陽氣一則一也陽虛陰勝故生二厥逆一與二四逆湯一固レ陽退レ陰）

【百二十】少陰病下利淸穀裡寒外熱（說二其因一也非レ說二其證一也）手足厥逆脈微欲レ絕身反不二惡寒一（少陰病雖レ不二發熱一當二惡寒一而不二惡寒一故曰レ反）其人面色赤（陽越）或腹痛或咽痛或利止脈不レ出者通脈四逆湯主レ之（此亦少陰厥陰兼病者寒邪太盛陽氣虛脫也蓋四逆湯證一等深劇者也此證雖三外有二發熱一非三表有二實邪一乃後世方書所レ謂無根虛火泛上者也此湯以救二其虛脫一則瘥或以下則所レ兼客證已）

通脈四逆湯方（〇方第）

甘草（二兩炙）附子（大者一枚生用去皮破八片）乾姜

（三兩強八可四兩）
右三味以二水三升一煑取二一升二合一去レ滓分溫再服
其脈卽出者愈（微而欲レ絕之脈卽以レ漸而出也不下
與二暴出之自レ無而忽有一同上故爲レ生也○此方治下陽
氣虛脫而脈氣不レ能レ通二達于四末一四肢厥逆脈微
欲レ絕者上故名曰二通脈四逆湯一也）
【百二十一】下利淸穀裏寒外熱汗出而厥者通脈四逆湯
主レ之（此證其脈微欲レ絕蓋寒邪太盛陽氣虛脫也
宜下與二前條一參考上）
【百二十二】少陰病二三日不レ已（謂二其病不一レ差）至二四
五日一腹痛小便不利四肢沈重自下利者此爲レ有二水
氣一（腹痛以下皆屬下有二停水一之證上）其人或欬或小
便自利或不下利（不字從二山田先生說一補レ之蓋對二
上文自下利一言レ之）或嘔者玄武湯主レ之（四或字
之證皆此兼證言或如レ是者與二否者一皆在三一玄武湯
所二得而療一也○太陽病有二水氣一者桂枝加白朮茯苓
湯五苓散小靑龍湯所レ主也今此證少陰病而有二水
氣一故附子爲レ主以療二少陰證一芍藥以止二腹痛一白朮
茯苓生姜三味以利二停水一也此方亦治二太陽病發汗
後仍發熱心下悸頭眩身瞤動振々欲レ擗レ地者一亦以二
汗後中虛而飮水停畜一故也）玄武湯方（○方第□□
□一此方本曰二玄武湯一是以二附子色黑一也宋板改
作二眞武一避二其王宣帝諱一也○季玆曰原稿作二眞武
湯一而玉函要論作二玄武湯一蓋是本二于玉函經及千金
等一者也今從レ之作二玄武一夫玄改レ眞宋代之私事在二
皇國一何可レ避二西戎王之名一乎）
附子（一枚炮去皮破八片）芍藥（三兩）茯苓（三兩）白
朮（二兩或作三兩）生姜（三兩切）
右五味以二水八升一煑取二三升一去レ滓溫服二七合一日
三服
【百二十三】少陰病下利六七日欬而嘔渴（欬而又嘔且
渴也）心煩不レ得レ眠者猪膚湯主レ之（本作二猪苓湯一
今從二宗俊父之說一改レ之蓋傳寫之誤也）
【百二十四】少陰病下利咽痛（通脈四逆湯亦有之證宜二
參考一）胸滿心煩者（謂胸中懮々而困心中鬱々而熱
也○咽痛以下皆上焦有レ熱之候）猪膚湯主レ之（此是
少陰異證而胸中有二假熱一者雖レ似下黃連湯胸中有レ
熱胃中有レ寒證上然外證大異內寒甚二於彼一而下利故
雖レ有二胸悶心煩一非二實熱而然一卽與二白通加猪膽汁
湯之心煩一同因者也故雖レ有二心煩一非二苓連苦寒所一レ

宜況調胃承氣類乎是以用二猪膚白蜜白粉等其性平
而能解熱者一以調レ中解レ熱也）

猪膚湯方（〇方第）

猪膚（一斤）

右一味以二水一斗一煮取二五升一去レ滓加二白蜜一升白
粉五合熬香一和令相得溫分六服

咽痛

【百二十五】少陰病二三日咽痛者可レ與二甘草湯一不レ差
者與二桔梗湯一

甘草湯方（〇方第）

甘草（二兩）

右一味以二水三升一煮取二一升半一去レ滓溫服七合日
二服

桔梗湯方（〇方第）

桔梗（一兩）甘草（二兩□□外臺作三兩）右二味以二
水三升一煮取二一升一去レ滓分溫再服（〇二方甘草宜
生用而不レ炙宜二熟察一焉）

【百二十六】少陰病咽中傷生レ瘡（咽痛不レ愈若劇者咽
中爲レ痛所レ傷漸乃生レ瘡不レ能二言語一聲音不レ出所二
必然一也）不レ能二語言一聲不レ出者苦酒湯主レ之

苦酒湯方（〇方第）

半夏（十四枚洗破如二棗核大一）鷄子（一枚去レ黃內二
上苦酒於鷄子殼中一）

右二味內二半夏於苦酒中一以二鷄子殼一置二刀環中一
安二火上一令二三沸一去レ滓少々含嚥レ之不レ差更作（〇
此等方法必有二深意一疑卽古所レ云禁方也〇二於字
本作レ著今從二宗俊父說一改レ之）

【百二十七】少陰病咽中痛者半夏散及湯主レ之（此亦
治二咽痛一之一方意者病因有レ異已）

半夏散及湯方（〇方第）

半夏（洗）桂枝（去皮）甘草（炙）

右三味等分各別擣篩已合治レ之白飮和服二方寸匕一
日三服若不レ能二散服一者以二水一升一煎七沸內二散兩
方寸匕一更煮三沸下レ火令二小冷一少々嚥レ之（〇甘草
湯以下治二咽喉一五方蓋雜病論中之方不レ可三獨屬二
少陰病一也此因三前章有二咽痛一證一叔和氏遂以二咽
痛一爲二少陰一候一妄冠二少陰病三字一以附二載於此一
已非レ謂レ不レ爲二仲景氏方一也）

太陰病篇第六

【百二十八】太陰之爲レ病腹滿而吐（有レ物自二胃中反出

也)食不下(胃脘不肯容也)自利益甚(承少陰之
自利不甚言之)時腹自痛(謂有時自痛時者何
以得寒則痛得暖則止也自者何以得內無燥
屎也蓋陽明之腹滿痛由內有燥屎故不得寒而
發不得暖而止所以不同也可見時自二字不
苟下焉故後亦論之曰腹滿時痛者屬太陰也其義
益明矣以上之證蓋寒邪在裡臟腑失職故也)若下
之必胸下痞堅(此太陰裡虛邪從寒化之證也當
以理中四逆輩溫之○此滿痛固屬虛寒而與陽
明實熱證大有攻救之別焉而粗工見其腹滿痛
以為陽明滿痛妄攻下之則裡虛益甚而心氣為之
鬱結為胸下痞堅卽百八十四條曰病發於陰而反
下之因為痞是也○太陰病誤下胸下痞堅者宜用
附子粳米湯○史記倉公傳云氣鬲病使人煩滿食不
下時嘔沫義與本文同焉)

【百二十九】太陰病脈浮者可發汗宜桂枝湯(此太
陽太陰合病以內寒不甚故先治其表若至於下
利清穀宜先救其裡而後解其表也蓋此亦從
脈不從證也)

【百三十】本太陽病醫反下之因而腹滿時痛者屬太
陰也桂枝加芍藥湯主之(言太陽病本當發汗而
反下之以虛其裡因而腹滿時痛者此轉屬太陰
也是其太陽猶未解而內更生太陰虛滿證以謂之
屬乃太陰太陽併病也與此湯以解表和裡矣)太
實痛者桂枝加芍藥大黃湯主之(言本太陽病醫誤下
之因而大滿大實痛者是表邪熾盛併其裡以作陽
明胃實乃太陽々明併病也故與此湯以解表攻裡
○前證腹滿時痛表證誤下所生之病而非表邪入
裡而然故惟滿而不實時痛而不常痛後證則表邪
傳入之所致非太陰之證故屬太陰三字在前證
下雖然二證俱有表之未解故以桂枝為主同
得之下後而俱有腹滿痛此所以辨其異也

桂枝加芍藥湯方(○方第)
於桂枝湯方內倍芍藥三兩
右以水七升煮取三升去滓分溫三服

桂枝加芍藥大黃湯方(　方第)
於桂枝加芍藥湯方內加大黃二兩
右以水七升煮取三升去滓溫服一升日三服

【百三十一】自利不渴者屬太陰(謂少陰轉屬太陰乃
少陰太陰併病也○未經汗吐下而成者蓋其藏有

寒之候）以ニ其或有一レ寒故也（明下所ニ以自利不一レ渴之故上也一藏字泛指ニ藏腑一而言）當レ溫レ之宜ニ四逆輩一（謂ニ溫熱之湯皆可ニ選用一也（）大抵自利而渴者裡有レ熱也下利篇云下利欲レ飲レ水者以レ有レ熱也白頭翁湯主レ之是也若自利不レ渴則爲ニ裡有一レ寒也今自利不レ渴知爲ニ太陰本臟有一レ寒也故當レ溫レ之然自利渴證間有ニ津液內亡而然者一惟其人小便不利亦屬ニ虛寒一也正珍嘗療ニ下利煩渴小便不利者一每用ニ四逆一屢收ニ全功一若徒以レ渴爲レ熱不レ渴爲レ寒則未レ爲レ盡レ善矣所レ謂自利不レ渴爲レ有レ寒者殊語ニ其常一已若至ニ其變證一則未ニ必盡然一也）

【百三十二】傷寒脈結代（成子曰動而中止能自還者名曰レ結不レ能ニ自還一者名曰レ代由ニ血氣虛衰不一レ能ニ相續一也（）東郭曰元氣不足而見ニ此脈一則屬ニ于不治一此所レ說之結代者言下心下之動氣波ニ及于胸中一而其動應ニ于脈一而其狀髣ニ髴于小建中湯之動悸一者上也蓋其由ニ血氣虛薄一而虛火上炎水中有レ火蒸而水分之動亢者也）心動悸者（正珍曰悸字下當レ有ニ者字一蓋脫レ之也今從レ之玉函作ニ心中驚悸一）炙甘草湯主レ之（金鑑曰心動悸者謂ニ心下築々惕々然動而不ニ自安一也若因ニ汗下一者多レ虛不レ因ニ汗下一者多レ熱欲レ飲レ水小便不利者屬ニ飲厥一而下利者屬レ寒今病傷寒不レ因ニ吐下一而心動悸又無ニ飲熱寒虛之證一但據ニ結代不足之陰脈一即主以ニ炙甘草湯一者以其人平日血氣衰微不レ任ニ寒邪一故脈不レ能ニ續行一也此時雖レ有ニ傷寒之表未一レ罷亦在レ所レ不レ顧以レ補ニ血氣一爲レ急也）

炙甘草湯方（○方第）

甘草（四兩炙）人參（二兩）生姜（三兩切）生地黃（一斤）桂枝（三兩去皮）阿膠（二兩）麥門冬（半升去心）麻仁（半升）大棗（三十枚擘）

右九味以ニ淸酒七升水八升一先煮ニ八味一取ニ三升一去レ滓內レ膠烊盡溫服一升日三服一名復脈湯

【百三十三】傷寒（泛稱レ疫而言非ニ太陽傷寒一也蓋此證上焦陽虛氣逆之證也）脈浮自汗出（不レ俟ニ藥力一汗自出故云ニ自汗出一蓋氣逆而逐レ水也）小便數（言ニ小便不ニ快利一與ニ小便難一粗同蓋以ニ上焦虛而不一レ能レ制レ下故也氣逆水自下之證也）心煩（言ニ心中煩悶一也蓋上焦虛而氣逆迫ニ湊于心胸一之徵也）微惡寒（陽虛之惡寒也然兼ニ心煩一者不レ可レ用ニ附子一也以下做レ之世醫或以ニ此章一爲ニ附子之證一者未ニ深考一

而已）脚攣急（上焦陽虛而氣不伸於下故血滯而爲此證也蓋此一證決非桂枝證矣凡辨證必於獨異處著眼矣）反與桂枝湯欲攻其表此誤也（攻者治邪之謂也言頻用之欲速其奏功故汗吐下和皆可通謂攻矣世醫概以吐下爲攻非古義也○言以上之證先與甘草乾姜湯以治脈浮以下至微惡寒之證愈後與芍藥甘草湯治脚攣急此治之法也而醫者誤認脈浮自汗等證之似表證而非者不審其心煩攣急小便數等之裡證與桂枝湯欲攻其表爲誤治也○以上之證世醫或以爲姜附輩之證或以爲白虎湯之證倶非矣）得之便厥（之者桂枝湯也○本論唯稱厥者謂足冷也下文觀足溫之語亦可見矣蓋此因錯攻其表而氣○四逆血益結滯而所致也便厥者卒然足冷也○凡厥字含畜有所結滯壅塞而所循環之血氣不行自失血色卒然暴作之意也說文云厥者逆氣也屰也本論用厥字之處皆以此義可解之）咽中乾（以誤攻其表之故益虛其上焦假熱薰蒸而咽中乾燥也）煩躁（此證始則心煩後則煩躁其爲主證可知矣蓋心煩者煩爲主躁者燥爲主也○躁者騷也加煩字者示其騷之劇也）吐逆者（無聲物出曰之吐加逆字者示劇之辭蓋因氣逆所致之證也作甘草乾姜湯與之以復其陽（言上文上焦陽虛氣逆之證今方錯誤其似表者以發之故有卒然厥躁煩吐逆咽中乾等之變因與甘草乾姜湯急追之毒緩則元陽之氣隨而復足亦溫也與之者示一時之權用之辭含蓄若以甘草乾姜湯不緩則與四逆湯以芍藥甘草湯不愈則與芍藥甘草附子湯之意矣蓋甘草乾姜湯者四逆湯之變方也世醫或以爲四逆湯之祖方者非矣）若厥愈足溫者更作芍藥甘草湯與之其脚卽伸（與甘草乾姜湯厥愈足溫乾姜非治攣之藥故攣急自若於是芍藥以退筋脈之毒則攣卽伸是乃逐機之法也世之醫流云々

○此二方倶仲景氏所始製故各置作字以分古方也

甘草乾姜湯方（○方第）

甘草（四兩炙）乾姜（二兩）

右二味以水三升煮取一升五合去滓分溫再服

芍藥甘草湯方（○方第）

芍藥　甘草（炙各二兩）
右二味以水三升煮取一升半去滓分溫再服

厥陰病篇第七

【百三十四】病者手足厥冷言我不結胸（本作結胸今從宗後父說改之蓋結厥同音因誤爲結冷再誤爲結胸耳）小腹滿按之痛者此冷結在膀胱當灸關元也（當灸二字亦從宗後父說補之次百三十五條百三十六條須參考矣○關灸之穴甲乙經曰關元在臍下三寸刺入二寸留七呼灸七壯又云胞轉小腹關元主之又云奔豚寒氣入小腹時欲嘔關元主之觀之考之當灸二字脫簡無疑也）金匱云婦人懷娠六七日小腹如扇子藏開故也當以附子湯溫其藏此證亦當用附子四逆輩）

【百三十五】傷寒脈促（數小之脈也此證雖裡虛其末劇可知矣）手足厥逆者可灸之（灸可以挽回陽氣繼以四逆輩可也

【百三十六】下利手足厥冷無脈者（此乃白通加猪膽汁陽證）灸之（兼灸氣海關元等）不溫若脈不還反微喘者死

【百三十七】傷寒五六日不結胸腹濡脈虛復厥者不可下此爲亡血下之死

【百三十八】傷寒脈微而厥至七八日膚冷其人躁無暫安時者此爲藏厥非蚘厥也（藏厥者不治以易氣絕也○非蚘厥也四字千金翼作死一字可以徵矣○一說文云藏厥用附子理中湯及灸法其厥不回者死）蚘厥者其人當吐蚘今病者靜而復時煩者此爲藏寒（卽胃寒也古書有指府爲藏者不可拘泥也）蚘上入其膈故煩（此說所以上文時煩者也）須臾復止（言煩止也）得食而嘔又煩者蚘聞食臭出（此說所以蚘厥吐蚘者也）烏梅丸主之（○蚘厥雖厥而煩吐蚘已則靜不若藏厥而躁無暫安時也病人藏寒胃虛蚘動上膈聞食臭出因而吐蚘與烏梅丸溫藏安蟲

烏梅丸方（○方箋）

烏梅（三百枚）細辛（六兩）乾姜（十兩）黃連（十六兩）當歸（四兩）附子（六兩炮去皮）蜀椒（四兩出汗）桂枝（六兩去皮）黃蘗（六兩）人參（六兩）
右十味異擣篩合治之以苦酒漬烏梅一宿去核蒸之五斗米下飯熟擣成泥和藥令相得內臼中與蜜杵二千下丸如梧桐子大先食飲服十丸

日三服稍加至二十九一禁二生冷滑物臭食等一（○此條論與レ方皆非二仲景氏一也雖レ非二仲景氏一蓋ニ於療ニ病故採二用之一蓋千金方治二久痢一方亦同二于此一疑是唐以降之方至下作二其劑一者上當レ有二取捨一耳）

【百三十九】凡厥者陰陽氣不二相順接一（謂血氣否塞不レ能二升降一所レ謂天地不レ交否是也正珍嘗考和蘭解體之書人身血行之道二矣其一起二于心臟一以頒二行周身一是之謂二動脈一其一起二于動血脈所レ盡之處一受二動脈之血一逆行而還入二于心一是之謂二靜血脈一更出更入如二環無一レ端若有二一所否塞一則出者不レ入入者不レ出厥逆於レ是乎發脈動於レ是乎絶遂乃至二乎死一所レ謂陰陽二字蓋動脈靜脈是也）便爲レ厥々者手足逆冷是也（此條疑是後人註文已雖レ非二仲景氏之言一所二以逆冷一因頗說得故採二用之一）

難治

【百四十】傷寒脈遲發熱（二字從二宗俊父說一補レ之應下下文反與二黃芩湯一徹二其熱一之語上蓋黃芩湯本治二太易少易合病一之方豈用下之於無二發熱者上乎）六七日而反與二黃芩湯一徹二其熱一（與レ撤通除去也）脈遲爲レ寒今與二黃芩湯一復除二其熱一腹中應レ冷當不レ能レ食（當下人參湯加二附子一與上レ之）今反能食此名二除中一必死（除中者謂中氣被二翦除一也除中反能食者胃氣將レ絶引レ食以自救故也凡人將レ死而反強食者是也）

【百四十一】傷寒發熱下利厥逆躁不レ得レ臥者死（此即陰證之極裡寒外熱之證也雖レ言レ死豈束レ手忍レ見二其死一乎與二通脈四逆湯一可レ僥二倖萬一一矣）

【百四十二】傷寒發熱下利至甚厥不レ止者死（不レ止者以二服藥無一レ効言レ之）

【百四十三】傷寒六七日小便不利（本作二不利便一今從二宗俊父說一改レ之）發熱而利其人汗出不レ止者死（此亡易也）

【百四十四】下利後脈絶手足厥冷晬時（周時也）脈還手足溫者生脈不レ還不レ溫者死（此條蓋以二通脈四逆湯服後一言レ之○不溫二字依二玉函千金一補レ之）

【百四十五】傷寒下利日十餘行脈反實者死（傷寒下利日十餘行正氣虛也其脈當レ虛今反實者邪氣盛也正虛邪盛故主レ死也素問玉機眞藏論曰泄而脈大脫血而脈實皆難レ治是也）

金匱玉函經解卷之二

壞病篇第八（壞敗壞之謂言下因レ歷二誤治一而無中六部正證可二指名一者上也如汗後亡陽動レ經渴躁譫語下後虛煩結胸痞氣吐後內煩腹滿溫針後吐衄驚狂之類紛紜錯出者俱是爲二前治一所レ壞也若雖レ經二誤治一尙見二六部證一者當下就二六部篇中一求中治法上此篇所レ載諸證亦雖下不レ外二夫六部一方亦有中可二同用一者上而以二其脈證或不二端的一故別立レ篇耳又或有下雖レ當二發汗若吐若下一之證而行甲之其病不乙解又有下雖レ非レ經二誤治一俱自作二此篇所レ述諸證一者上此其人素或有レ虧或挾二停滯一而然也亦觸レ類而口于此篇一又有下汗後成二吐下後壞病一吐下後成二發汗後壞病一者上知レ此者不レ拘二其前治一但隨二其脈證一治レ之可也）

【百四十六】太陽病（言二中風桂枝證一也何以知レ之以二下又桂枝不レ中レ與レ之之文一知レ之也雖レ言二太陽病一唯非レ限二太陽病一耳餘二陽三陽之病亦復爾如二口章一可二以見一矣）三日已發レ汗（言下自二病發日一至二三日一已行中發汗之法、也凡太陽病發汗之法始得レ之之日先發二其汗一周時觀レ之若病不レ除則明日再發二其汗一又病仍不レ除則明日三發二其汗一此之爲レ度故曰太陽病三日已發汗也蓋此中風之證當レ用二桂枝解肌之劑一而三日已發汗者其用二麻黃之峻劑一可レ知此逆治所三以爲二壞病一也）若吐若下若溫鍼仍不レ解者此爲二壞病一（言當レ解レ肌之證而誤發二汗之一病不レ解故行二吐下溫鍼等之法一而病猶不レ解〇溫鍼者古昔發汗之法今世不レ可二得而考一〇一說云用二溫鍼一灸レ之也然乎否）桂枝不二復中一レ與レ之也（不中猶レ言二不當一也也字斷而未レ斷之辭含下諸雖二一被一レ壞而其脈證仍不レ變者尙宜レ用二桂枝湯一之意上也）觀二其脈證一（不レ得レ專下以二其現證一處中其方上歷三觀其今脈與二今證一也）知二犯何逆一（言レ辨三知犯二何誤逆一也）隨レ證而治レ之（不レ拘二其初起證一隨二當時所在之逆證一而治レ之蓋此、句語活而義甚廣矣）

【百四十七】本先發汗而復下レ之（復與二下文反汗之反一同レ意猶レ言レ誤也〇先字從二惟忠說一補レ之）此爲レ逆也若先發汗治不レ爲レ逆（言本應二先汗一而反下此爲レ逆也若先汗而後下治不レ爲レ逆也）本先下レ之而反汗レ之爲レ逆若先下レ之治不レ爲レ逆（言若裡急二於表一本應二先下一而反汗レ之此爲レ逆也若先下而

後汗治不爲逆也○一說治傷寒之法表證急者卽宜汗裡急卽宜下不可拘拘於先汗而後下也汗下得宜治不爲逆也○雖不言及吐自在其中也）

【百四十八】少陽病若已發汗溫鍼柴胡證罷此爲壞病（謂正證自敗不可以少陽陽明等目名焉）知犯何逆以法治之（乃隨證治之之謂）

表邪未解

【百四十九】太陽病初服桂枝湯反煩不解者（煩不可情狀而因悶擾撓謂之煩也增韵訓煩爲悶頗得之蓋此證氣爲主欲發而不能發之所致也）先刺風池（甲乙經曰在項上入髮際一寸大筋宛宛中）風府（同書云在顱顖後髮際陷者中）却與桂枝湯則愈（太陽病桂枝正證服桂枝則當愈若不解者可更作服今初服不惟不解而反發煩者是邪太盛之故藥力未達欲發不能發益窘迫而所致也故宜先行刺法使鬱氣解散而却與桂枝湯則自然汗出而解矣）若形如瘧一日再發者（再也者不過一二之辭）汗出必解宜桂枝二麻黃一湯（此證比桂枝麻黃各半湯則爲輕證也各半湯曰如瘧狀一日二三度發曰面色熱此證曰日再發曰汗出其輕重判然故彼以和解發散各半之劑投之此湯則和解中少兼發散以達表氣乃桂枝湯二分麻黃湯一分也○此章本爲二章今從宗俊父說刪錯亂之文合而爲一章矣）

桂枝二麻黃一湯方

麻黃（十六銖去節） 杏仁（十六箇去皮尖）芍藥（一兩六銖） 桂枝（一兩十七銖去皮） 甘草（一兩二銖炙） 大棗（五枚擘） 生薑（一兩六銖切）

右七味以水五升先煮麻黃一二沸去上沫內諸藥煮取二升去滓溫服一升日再服將息如前法

【百五十】太陽病（以下傷寒之證醫已行發汗之後言之何以知之以下文亡陽二字及不復發其汗知之也）發熱而惡寒熱多寒少一日二三度發脈浮緊者可更發汗也（此醫雖發之餘邪猶盛而未欲解者）宜桂枝二越婢一湯（桂枝湯以和表裡越婢方中麻黃石羔能達外表逐水氣散蓄寒也凡表虛蓄水之證邪氣凝而不散者得此方而渙然氷釋）若脈微弱者此亡陽也（亡者同失陽者指元氣言之人

之所二藉而運用營爲一者表裡上下左右前後其活潑溫煖咸是一元氣之發也人苟無レ此則死矣猶天之有二太陽一而四時行焉百物生焉體中之物莫レ貴レ焉故謂二之ヲ陽一也非二指レ表指レ熱之陽一也故論中唯有二亡陽一而無二亡陰一也○亡字本作レ無者誤也今從二宗俊父說一而改レ之）不レ可三復發二其汗一（言若又有三以上病證一而其脈反微弱者是其人資質虛弱爲二過汗一所レ誤而陽爲レ之亡者也表邪雖レ未レ解不レ可レ發レ汗也大青龍湯條云脈微弱汗出惡風者不ト可レ服脈微弱之不レ可レ發レ汗是明徵也宜下與二桂枝加附子湯一且解且扶上焉○桂枝二麻黃一湯者其證輕矣桂枝二越婢一湯者其證重矣桂枝麻黃各半湯者其證在二輕重之閒一也而三方皆治下熱邪無二漸進之勢一自如不レ解經レ日似二瘧狀一者上也□□□點十六字從二宗俊父說一補レ之）

桂枝二越婢一湯方（○方第）

桂枝（十八銖去皮）芍藥（十八銖）麻黃（十八銖）甘草（十八銖炙）大棗（四枚擘）生薑（一兩二銖切）石膏（二十四銖碎綿裹）

右七味以二水五升一先煮二麻黃一一二沸去二上沫一內二諸藥一煮取二二升一去レ滓溫服二一升一

【百五十一】太陽病（言二傷寒之證一也何以知レ之以下其用二麻黃一與中不汗出上知レ之也）得レ之八九日（擧二以上八字一爲レ綱係以下欲レ愈者與二未レ欲レ解者與陰陽俱虛者一之三證上以辨二其治法一也本論往々有二此文法一如二□□條□□條一是也不レ可レ不レ知也）如二瘧狀一（以二休作有レ時言潮熱亦雖二休作有レ時無二惡寒一爲レ異也□□□□章云發作有レ時如二瘧狀一可二以徵一矣邪氣之留不レ解往々有二如レ此者一此蓋以二若發汗若下若吐而病乃不レ解之故也何以知レ之以下下文不レ可二更發汗更下更吐之文上知レ之也）發熱惡寒熱多寒少一日二三度發（發熱之中且惡寒熱多而寒少其發作也日至二二度一而與二少陽病往來寒熱一頗異故曰レ如二瘧狀一此以二其二三度發作一言レ之）其人不レ嘔（此以三其異二於往來寒熱一言レ之且示三裡無二邪熱一之辭如二乾姜附子湯桂枝附子湯二章一並云不レ嘔不レ渴亦復然）一日二三度發六字本在二續自下句一下者錯誤也耳）淸便續自可（淸便卽兩便也言其兩便自レ初スレハ至レ今無三復有二可レ言之事一也○淸與レ圊古字通用圊通二兩便ヲ一之處則廁也又本論中有二以レ淸爲レ通者一如二淸膿血一是也○續字本作レ欲今依二辨不可發汗病

篇及脈徑改之）脈微緩者爲欲愈也（言太陽病傷寒之證得之八九日間若發汗若下若吐而病仍不解如瘧狀發熱惡寒熱多寒少一日二三度發其人不嘔兩便無可言之事脈之浮緊變爲微緩者是餘邪稍衰而無入裡之勢欲自解者也雖不藥自愈也）面色反有熱色者未欲解也（面有熱色者上衝仍在也此表邪猶留而未欲解也）以其不能得小汗其身必痒（汗欲出不得出怫鬱于肌表周身發痒也）宜桂枝麻黄各半湯（言如上文所論之證者雖欲自愈之候若其人面有熱色者邪氣仍在上衝之勢又汗欲出不得出之故怫鬱于肌表而周身必發痒也此證以桂枝則寛以麻黄則猛倶未其宜故合二方之半以取其不寛不猛也○面色以下之文在于結句者傳寫之誤也今改之）脈微而惡寒者此爲陰陽倶虚不可更發汗更吐更下也（言若又無以上諸證唯脈微而惡寒者此雖經發汗或吐或下而解然經日數之間表裡之氣皆爲之虧乏者也輕者可與芍藥甘草附子湯重者可與乾姜附子湯也不可更發汗吐下也○所謂陰陽指表裡而言之

桂枝麻黄各半湯方（○方第）

桂枝（一兩十六銖去皮）芍藥（一兩）生薑（切一兩）麻黄（一兩去節）大棗（四枚擘）甘草（一兩炙）杏仁（二十四箇湯浸去皮尖）

右七味以水五升先煮麻黄一二沸去上沫内諸藥煮取一升八合去滓溫服六合頓服將息如桂枝法（○後之合方者濫觴于此也耶）

【百五十二】太陽病（中風之證）外證未解（謂發熱頭痛惡寒等證仍在也）脈浮弱者（浮弱乃浮緩也對浮緊言之）當以汗解宜桂枝湯（此章亦論太陽病發汗後當解而不解者也故不言不解而言未解所以示其已經發汗也以其已經發汗之故無意於復發汗唯欲以解肌治之故曰以汗解不言發汗也）

【百五十三】太陽病外證未解者不可下也（此亦已經發汗而表猶未解者也凡表證未解無論已汗未汗雖有可下之證而非在急下之例者均不可下）下之爲逆（逆者爲病在外而反攻其内於治法爲不順也逆則變生而邪氣乘虚内陷結胸痞堅下利喘汗脈促胸滿等證作矣故先

解外邪）欲解外者宜桂枝湯（桂枝湯方後曰服一劑盡病證猶在者更作服若作服若汗不出者乃服至二三劑是所以更行桂枝湯也）

【百五十四】傷寒發汗已（服麻黃湯以發之之謂也）解半日許復煩脈浮數者（已服麻黃湯發之而其病解半日許而復發如此之證者是表邪未盡退而復集也○煩者猶言悶也悶之輕爲煩々之重爲悶故言煩悶而不言悶煩猶言疼痛而不言痛疼矣）可更發汗（對上文發汗言之）宜桂枝湯（其不用麻黃湯者以其津液前已爲發汗所傷不堪再任麻黃故宜桂枝更汗可也）若此證而加渴則五苓散之證也）

【百五十五】太陽病下之後（言誤下之後也然治不可泥下後今云下之後者爲審病途也）其氣上衝者（云氣者以無形而上衝也凡論中舉上衝則曰衝心曰衝胸曰衝咽喉皆有所衝之位而非病在其地也今云上衝不舉其衝位者以病仍在表不劇也即指頭項強痛言之第廿四條云病如桂枝證頭不痛項不強可以見所謂上衝果是頭項強痛之謂矣○百八十五章云太陽病脈浮而動數醫反下之動數變遲陽氣內陷心下因堅則爲結胸此條上衝二字蓋對彼內陷言之）可與桂枝湯（太陽中風外證未解之時而誤下之則胃氣虛損邪氣乘之當內陷而爲痞爲結觀結胸諸章可以見又下陷而成協熱下利觀百七十七章可以見矣以下後而其氣上衝則知外邪未陷胸未痞結當仍與桂枝湯從外解也云與之說見于第五章矣）若不上衝者不可與之（有其證則與之無其證則不與是不拘下後所以隨證也）

發汗後諸證

【百五十六】發汗後（言中風桂枝證而與桂枝湯外證已解之後也何以知其爲桂枝證以下文不可更行桂枝湯之文知之也凡本論文例書汗後吐後下後者皆以前證悉去而言之也）不可更行桂枝湯（更行猶言再用此證裡水伏熱之所致非桂枝湯所能發故曰不可更行也蓋此七字當屬于無大熱者下看之）汗出而喘（此證曰發汗後則表水已洩去可知矣而其汗出者何也是裡有伏熱而外蒸之所致也其喘者裡水未去

而上攻迫二于氣道一也而字閒レ之者對二無汗而喘之文一言レ之也）無二大熱一者（非二全無レ熱之謂一以三熱伏二于裡一而表無二翕々之熱一謂也○此證似二桂枝加厚朴杏子湯證一然彼者以二表證未レ解而下レ之下後桂枝證猶在而喘此者雖二表已解一乎裡水伏熱所レ致之喘也彼此有二表裡之異一亦與二葛根黄芩黄連湯證一相似而彼下後下利不レ止此汗後彼喘而汗出此汗出而喘彼以レ喘爲レ主此以レ汗爲レ主所二以治法有一レ異也若無レ汗而喘且有二大熱一者乃麻黄湯證也）可レ與二麻黄杏仁甘草石膏湯一（此方原二於麻黄湯一去二桂枝一代二石羔一者麻黄湯治二無レ汗而喘一此方治二汗出而喘一其所レ異者唯在二桂枝石羔彼此有無一焉蓋彼表閉而瘀水迫二于裡一而喘者故假二桂枝外發之力一而麻黄達二于表一發汗則其喘自止此表已解而裡水伏熱所レ致之喘也故不レ用レ假二桂枝外發之力一也則麻黄杏仁相伴而利二氣道一止レ喘甘草以緩二逆氣一加二石羔一以消二伏熱一則汗止喘自定矣○此方表證已解而伏熱不レ去因二汗出一而喘無二大熱一者雖レ非二汗下後一亦宜二詳而用一レ之○可レ與者含シテ二蓄表解則而與可也不レ解則不可也之意一而使レ知レ有二白虎湯之後治一也）

麻黄杏仁甘草石膏湯方（○方第）

麻黄（四兩去節）杏仁（五十箇去皮尖）甘草（二兩炙）石膏（半斤碎綿裹）

右四味以二水七升一先煮二麻黄一減二二升一去二上沫一内二諸藥一煮取二二升一去レ滓溫服二一升一

【百五十七】發汗後腹脹滿者（發汗後外無二表證一止有二腹脹滿一證一而已蓋此證因發汗亡二津液一血氣爲レ之留滯而不レ行水飲亦不二消化一而爲レ脹爲レ滿也若夫吐後之腹脹滿者則調胃承氣湯之所レ主也）厚朴生薑半夏人參湯主レ之（厚朴以散二裡氣一人參甘草以緩レ急行二滯血一半夏生姜以消二留飲一也○季茲按一稿本云發汗後無二表證一裏無二別術一止有二腹滿一事一者知非二裡實一由胃中津液不レ足氣滿不レ通壅而爲レ滿與二此湯一和レ藏而補レ虛降レ氣蓋虛氣留滯之脹滿較二實者一自不二堅痛一○季茲曰此解亦難レ捨故竝存焉）

厚朴生薑甘草半夏人參湯方（○方第）

厚朴（半斤炙去皮）生薑（半斤切）甘草（二兩炙）半夏（半升洗）人參（一兩）

右五味以二水一斗一煮取二三升一去レ滓溫服二一升一日

三服

【百五十八】發汗後（曰後則表已解可知矣）惡寒者虛故也（言發汗後表解不熱但惡寒者此因發汗而虛之所致卽芍藥甘草附子湯之主也何與彼章可參考矣）不惡寒但熱者實也（此乃所謂惡熱而與發熱不同外證雖無熱候然其人自惡熱也蓋是發汗而乾胃中津液之所致異于上文芍藥甘草附子湯之虛證故曰實也實字對上文虛字而言之非言便祕之實汗後不啻虛證實亦有焉同一汗後而虛實不同者則視其人之胃氣素寒素熱而氣隨之轉也可見治病觀其人之本氣爲主熱字上千金翼有惡字是也乎）當和胃氣與調胃承氣湯（此發汗後亡胃中津液之證也故與此湯大黃以瀉其實芒消以潤其燥甘草以調胃三味各相助而以和胃氣也其云與者示一時之權與之辭（此條曰虛故也曰實也一主附子一主大黃雖補瀉異治至其救津液則一也）

【百五十九】發汗後身疼痛（外證疼痛發汗則必愈今發汗後反致疼痛者非前證之乃存者觀後字可見矣此以發汗後亡津液之故血氣窘迫而血滯難暢之所致也故脈亦沈微也諸家皆以爲前證仍存者此關于本篇文例也）脈沈遲者（此血滯氣難暢之脈狀也可見此章所謂疼痛者此血滯氣難暢之疼痛也若夫外襲不發汗之疼痛則以表有水之故其脈見或浮若浮緊也）桂枝加芍藥生薑人參湯主之（芍藥伴桂枝大棗而行血氣生姜伴桂枝而達鬱氣伴大棗而逐水飲人參以解滯血甘草以緩窘迫也其不用附子者以其證不劇也此證疼痛不解則有爲附子湯之證者與彼證可參考矣）

（季茲曰原稿不載方今依例附于左

桂枝加芍藥生姜人參湯方）　方第）

於桂枝湯方內芍藥生姜各增一兩加人參三兩

右六味以水一斗二升煮取三升去滓溫服一升

【百六十】太陽病發其汗遂漏而不止（此辨太陽病桂枝證誤用麻黃輩發之不啻不解藥氣已盡汗仍不止反致陽虛者漏不止者乃言如水流漓也）其人惡風（是中風固有之證今復稱之者示雖汗大洩表未解也）小便難（言出不快也蓋汗多

于表水氣竭于裡故也）四肢微急難以屈伸者（因津液虛脫而血氣不循環之謂也）桂枝加附子湯主之（加附子佐桂枝湯之力治微急難屈伸者此症非病之自然因汗多所致故僅加一枚也此方及桂枝去芍藥加附子湯同加附子而芍藥之有無如何此方之證皆汗後急狀而血滯氣不行所以有芍藥也去芍藥加附子湯之證皆後逆狀而血不滯氣逆而已所以去芍藥也○千金以此療產後風虛汗出不止小便難四肢微急難以屈伸者可謂能活用古方者也）

桂枝加附子湯方（○方第）

於桂枝湯方內加附子（一枚炮去皮破八片）

右六味以水七升煮取三升去滓溫服一升將息如桂枝法

【百六十一】發汗過多（言服發汗之藥汗出甚多也）其人叉手自冒心（交兩手以冒心胸也○字彙曰叉兩手相錯也冒覆也）心下悸（此因發汗過多而氣上逆之證非水飲停畜而發者何以知之由水悸者不好按之今欲得按而按之則悸自安是其氣逆所致之徵也○悸者心動也後世醫家謂之怔忡俗呼爲動氣者是也而所以其動者以邪留著于心室邊而障礙血之出入心室爲之攣急而爲此證也凡悸雖無不係于心室及動血脈之攣急者其因種々不同焉具論於各證之下矣如此證者汗出多而血液脫故氣上逆湊於心下而所致也）欲得按者（按之則如少安故欲得按也）桂枝甘草湯主之（此悸以因氣之上逆之故治氣則悸自治焉故桂枝以達氣之可達甘草以緩逆氣也）

桂枝甘草湯方（○方第）

桂枝（四兩去皮）甘草（二兩炙）

右二味以水三升煮取一升去滓頓服

【百六十二】發汗後（曰發汗後則前證皆去而血氣急亦可知矣）其人臍下悸者（此是下焦之陽從來不足而復爲發汗過多見傷水飲停畜而下焦之動脈觸于此而爲攣急者也蓋悸在臍下則氣逆水將上攻之狀也故曰欲作奔豚焉）欲作奔豚（奔一作賁々與憤同豚者豬之小者其性善噴故有憤豚之稱也蓋氣自少腹上衝心胸若憤豚然故假以爲病名也）茯苓桂枝甘草大棗湯主之（此

症比桂枝甘草湯則其悸在臍下而畜水虛亦爲甚也故桂枝甘草湯方中加茯苓大棗以利水止悸且大棗佐甘草以緩其急桂枝甘草大棗各相助而以緩其欲作賁豚之逆氣也其煮之以甘爛水者蓋取其甘淡和緩能收輯穆之功也　此證與茯苓甘草湯證亦可參考矣

茯苓桂枝甘草大棗湯方（〇方第）

茯苓（半斤）桂枝（四兩去皮）甘草（二兩炙〇或作三兩）大棗（十五枚擘）

右四味以甘爛水（爛與煉同下文所謂以杓揚之是也謂之甘煉者言煉之使甘也）一斗先煮茯苓減二升內諸藥煮取三升去滓溫服一升日三服〇作甘爛水法取水二斗置大盆內以杓揚之水上有珠子五六千顆相逐取用之（甘爛水勞水也孫思邈贈解靈樞半夏湯曰治五勞七傷羸弱之病煎藥宜以陳蘆勞水取其水不強其火不盛也可謂能識得古意者也）

【百六十三】發汗（以用發汗劑而發其汗汗出止之後言之也發汗後則亡津液而血氣急亦可知矣）病不解（不復常之謂非表不解也如後章發汗若下之病仍不解煩躁者亦復爾）反惡寒者虛故也（傷寒發汗則惡寒必止今發汗後則尤當不惡寒而致惡寒故云反也此非外襲惡寒發汗後虛而所致也故云虛故也虛也者何也因發汗亡津液而陽氣脫是也以陽氣脫之故血滯不能循環致此症也）芍藥甘草附子湯主之（附子復陽氣且助芍藥以令循環滯血甘草以緩血氣之急焉〇凡發汗汗漏而不止而惡風者屬表虛乃桂枝加附子湯之所之也發汗後汗止而惡寒者係裏虛乃此湯之所之也發汗後汗止與不止判表裡別宜相照以知其別焉）此方就四逆湯中去乾姜而加芍藥四逆湯主表裡虛寒此湯則主治裡陰虛寒故比四逆湯則專於治裡然其邪寅緣不治則表裡俱虛寒遂爲四逆湯之證今觀代乾姜以芍藥則其證之經重自見矣〇又此湯於芍藥甘草湯各減一兩而加附子一枚則爲芍藥甘草湯之重證亦通）

芍藥甘草附子湯方（〇方第）

芍藥（三兩）甘草（三兩炙）附子（一枚炮去皮破八片）

右三味以二水五升一煮取二一升五合一去レ滓分溫三服

【百六十四】發汗若下レ之(汗後下後俱亡二津液一則其血氣急亦可レ知矣)病仍不レ解(非レ謂二表不レ解不レ復レ當之謂也若夫表不レ解之煩躁乃大青龍湯所レ主豈反用二茯苓四逆一乎而此證或發汗或下レ之之後不二仍不二復レ當已亡レ陽而反變二于四逆湯證一且加二煩躁一者也何以言レ之以レ用二四逆湯一知レ之豈唯煩躁一證而有下用二茯苓四逆一之理上哉然則有二四肢厥逆等四逆湯之正證一必矣而本文無二其證一者蓋脫文也故今補レ之)四肢厥逆(此四逆湯本方之正證而於二此章一不レ可レ無レ之之證也蓋以二血氣逆一之故有二此症一焉)煩躁者(此與二乾姜附子湯之煩躁一同亡陽之症但彼ハ是汗下俱犯ス之症此ハ則或汗或下犯二其一一者彼血氣脫欲レ循不レ能レ循之所レ致此血氣逆而水犯二血分一之所レ致而其證稍異矣大青龍湯方後所レ謂汗多亡陽遂虛惡風煩躁者是也「蓋大青龍證所レ不二汗出一之煩躁者乃未レ經二汗下一之煩躁屬レ實勿レ誤二混スルコト之一)茯苓四逆湯主レ之(四逆湯本方以治二其正證一人參茯苓以治二水犯二血分一是以厥逆愈煩躁治矣○千金方婦人產後病淡竹茹湯方後曰若有二人參一入二一兩一若無クハ內二茯苓一兩半一亦佳蓋人參茯苓俱治二心煩悶及心虛驚悸一安二定精神一是此等證者以下水氣犯二血分一之證ナルヲ上故也

茯苓四逆湯方(○方第)

茯苓(四兩)人參(一兩)附子(一枚生用去皮破八片)甘草(二兩炙)乾姜(一兩半)

右五味以二水五升一煮取二三升一去レ滓溫服二七合一日三服

△發汗多若重發レ汗者亡二其陽一(謂レ損二失スルヲ元氣一)讝語(心不二知覺一口發二妄言一也)脈短者死(短乃微弱爲二亡陽之診一故爲二死證一)脈自和者不レ死(凡病人讝語其脈洪大滑數者是脈與レ證不二相齟齬一是以謂二之和一也非二無病之平脈一也如二百十條調和一亦復爲レ爾○言發汗過多之後讝語其脈短者此亡陽之候故爲二死症一若雖二發汗過多之後讝語一其脈洪大滑數者此邪熱熾二乎內一之候其陽不レ亡故爲レ不レ死也宜レ與二承氣湯等一矣

【百六十五】太陽病發汗汗々出不レ解(非レ謂二表不レ解病不レ解之謂ナリ)其人仍發熱(太陽病發汗如レ法則發熱當レ止而仍如レ此者此非二表未レ解之發熱一以二汗出多

亡陽之故虛火炎上之發熱後世所謂眞寒假熱者也）心下悸頭眩（因亡陽而水飲停畜血氣亦爲之動搖上攻則爲頭眩迫于心則爲悸也）身瞤動振々欲擗地者（言身體瞤動手足振矣蓋是經中陽虛而水氣乘之之證也苓桂朮甘湯章所謂發汗則動經身爲振々搖是也又與大青龍湯章可參考矣○擗與躄通用卽倒也）玄武湯主之（言太陽病以麻黃青龍輩大發汗其人充實者當汗出復常也若其人虛弱者汗出表證罷而病仍不解發熱心下悸頭眩一身瞤動欲仆地此以汗出多而亡陽故表裡上下俱虛而畜水飲血氣亦爲之動搖之候具焉故與此湯以復其陽循血氣以行其水也）

停飲

【百六十六】服桂枝湯（以有頭項強痛翕々發熱等桂枝證也此證蓋太陽中風之證而挾停飲者也何以知之以曰仍頭項強痛翕々發熱知其太陽中風之證以無汗心下滿微痛小便不利知其挾停飲之證也）或下之（以有心下滿微痛等之證之故誤下之也乎）仍頭項強痛翕々發熱（觀仍字可知本有此等之證矣○翕盛也翕々者熇熇然而熱也若含羽所覆言熱在表也）無汗（以水氣結滯于心下也凡無汗者必水氣之變也不可不知麻黃湯之無汗可考但彼者以表有水氣無汗此者以水氣在心下無汗彼此有表裡之異矣）心下滿而微痛小便不利者（水氣結滯于心下之候也）桂枝加茯苓白朮湯主之（言太陽中風而水氣結滯于心下之證邪多爲□□難發散然醫認其表證耳服桂枝湯本方或認心下滿以下之證下之其證依然仍在者以俱不得其治法也治之之法桂枝湯「方中加茯苓白朮以解外加白朮茯苓以利停飲「且解表」則可得全効也苓桂朮甘湯可參考五苓散之心下痞亦同一根源也○此方本作桂枝去桂者誤也今從宗俊父說改之）

桂枝加茯苓白朮湯方（　方第）

於桂枝湯方內加茯苓白朮各三兩

右七味以水八升煮取三升去滓溫服一升小便利則愈

【百六十七】傷寒若發汗若吐若下後心下逆滿（因若汗若吐若下而外襲之邪雖解矣陽氣爲之受傷而

不克運化水漿停而爲此證者也與桂枝加苓朮湯證之心下滿微痛同而彼微痛此不痛雖不痛乎比之於彼證則甚者也故下逆字而以示之也）氣上衝胸（此氣逆之證而頭眩之因也）起則頭眩（頭眩謂頭旋也此蓋因氣逆所致而非自然證故起則頭眩坐則否其證殊于眞武湯）脈沈緊（緊脈帶沈則是裡證而非表證也）者茯苓桂枝白朮甘草湯主之（桂枝甘草以治氣逆茯苓白朮以利心下之水飮也○此十二字本書在振々搖之下欲易解移此）發汗則動經（經者謂經脈也）身爲振々搖（言以上之證若誤認其氣逆之證似身爲振々搖（言以上之證若誤認其氣逆之證似發汗則可愈者爲表邪未解發其汗則經脈爲之被動爲身搖肉瞤振々欲仆證乃眞武所主也）

茯苓桂枝白朮甘草湯方（　方第）

茯苓（四兩）桂枝（三兩去皮）白朮（二兩）甘草（二兩炙）右四味以水六升煮取三升去滓分溫三服

〔水逆〕

【百六十八】病在陽（謂發於陽而身熱也）應以汗解之反以冷水潠之（與噀同含水噴之也）若灌之（漑之也）其熱被劫（即迫脅之意）不得去須臾益煩皮上粟起（水寒外束膚熱乍凝故也）意欲飮水而反不渴者（熱入不深故也）服文蛤散（此條亦外攻水逆之病邪氣爲水寒所束不能發外鬱遏皮肉消耗津液故須臾益煩蓋非表邪熾盛之所致是以不用驅散之劑與文蛤潤其中也非攻邪之主劑也故云服云與而不云主蓋權用之方已）若不差者與五苓散（○文蛤證似渴而不能飮五苓證渴而能飮文蛤證小便能利五苓證小便不利其異可見矣（　服文蛤散不差與五苓散者猶與小建中湯不差與小柴胡湯先與小柴胡湯不解與大柴胡湯例也）

文蛤散方（　方第）

文蛤（五兩）

右一味爲散以沸湯和一方寸匕服湯用五合

〔火逆〕

【百六十九】太陽傷寒者（即是麻黃湯所主）加溫鍼必驚也（必者懸斷之辭也　此條火逆總綱也）

（下所謂燒鍼是也燒鍼者燒熱其鍼而取汗也）

【百七十】發汗後（此三字據要略補之）燒鍼令其

汗ニ（燒針者卽溫針也燒ニ熱シテ其針ニ而取レ汗也其者指ニ發汗後ニ而言レ之也發汗後復以ニ燒針ニ汗レ之此過汗也過汗則氣逆而血不レ迫亦可レ知矣）鍼處被レ寒（燒針非レ可レ用ニ風寒之病ニ）（針處孔穴不レ閉巳被ニ寒邪ニ所レ侵矣）核起而赤者必發ニ奔豚ニ（以ニ極暴之衝ニ發レ汗過多上焦爲レ之乾涸腎水上救而以作ニ此證ニ矣必者決定之辭）氣從ニ小腹ニ上衝レ心者（此卽水氣突撞爲ニ奔豚ニ之候蓋此六字屬ニ于核起而赤之句下ニ可レ看焉〔〕季玆曰一稿本以ニ針處被寒巳下十三字ニ爲ニ注文ニ一稿本幷ニ氣從以下七字ニ爲ニ攙入スル今依ニ初稿本ニ存レ之）灸ニ其核上ニ各一壯（溫ニ散寒邪ニ也〔〕季玆曰一稿本以ニ此七字ニ爲ニ注文ニ）與ニ桂枝加桂湯ニ（燒針取レ汗此火逆其火氣內攻而氣上衝レ心不レ爲ニ驚狂ニ故與ニ桂枝湯ニ上衝劇而不レ能ニ外發ニ故加ニ桂枝ニ以增ニ其力ニ也）

桂枝加桂湯方（〔〕方第）

於ニ桂枝湯方內ニ倍加ニ桂枝二兩ニ

右五味以ニ水七升ニ煑取ニ三升ニ去レ滓溫服ニ一升ニ

【百七十一】傷寒脈浮（〔〕本節ノ此論下麻黃湯證而被ニ火逆ニ既汗出之後爲ルニ壞病ニ者上後章論下柴胡證而被ニ火逆ニ爲ニ壞證ニ者上也何以知ニ麻黃證而其既汗出之後ニ也以レ言ニ傷寒脈浮ニ知ニ其麻黃證ニ以レ無ニ水氣之變ニ知ニ其既汗出之後ニ也後章柴胡證之火逆而用ニ柴胡湯ニ此章麻黃湯之火逆而用ニ桂枝湯ニ其法胡反者何也凡仲景氏之法雖ニ麻黃湯之壞證ニ其後治多用ニ桂枝湯ニ此例也且夫後章柴胡證仍在□□者不レ爾也乎）醫以レ火迫ニ劫之ニ（血氣逆可レ知矣〔〕古昔火功之術種々不レ同有ニ艾火ニ有ニ溫針ニ又有ニ燒瓦ニ玉函云燒レ瓦熨ニ其背ニ者是也證類本草謂ニ之溫石ニ又謂ニ燒塼ニ今俗所レ用溫石卽是也耳而此等之術本爲ニ寒痺不仁等ニ而設不レ可ミ以施ニ諸風寒之發汗ニ者也觀ニ素問云風寒客ニ於人使ニ人毫毛畢直皮膚閉而爲ニ熱當ニ是之時ニ可ニ汗而發ニ也或痺不仁腫痛可ニ湯熨及火灸刺而去ニ之可レ見矣而時醫或有下施ニ於諸風寒之病ニ者上故當時有ニ其逆ニ是所下以仲景氏之設ニ其法ニ而以救中其逆上也）必驚狂（因ニ火逆ニ氣血內攻氣逆而血迫ニ于心ニ故驚狂也）臥起不レ安者（乍臥乍起不レ能レ久之狀煩之劇證而氣逆之候也）桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣湯主レ之（病本在レ表以ニ桂枝湯ニ欲レ發ニ散セムト之ニ芍藥不レ宜ニ發散ニ故去レ之蜀漆以逐ニ所レ迫之血ニ

牡蠣龍骨治驚狂也）本方者血氣獨逆而迫者主之柴胡加龍骨牡蠣湯者水氣血氣俱迫者主之也）

桂枝去芍藥加蜀漆牡蠣龍骨湯方（　方第）

於桂枝湯方內去芍藥加蜀漆（洗去腥）三兩

牡蠣（熬）五兩龍骨四兩

右七味以水一斗二升先煮蜀漆減二升內諸藥煮取三升去滓溫服一升

【百七十二】傷寒八九日下之後（此章論下雖小柴胡湯證延及于八九日既至于大柴胡之地位未為大柴胡證之時而醫下之後復以火迫刼之其證不會不解加煩驚以下之變證者也故云八九日而以明其既大柴胡湯之地位云下之而以明煩胸以下證之因也（）後字依外臺祕要而補之）復以火迫刼之（從宗俊父說而補之之說具於難注矣）胸滿（即胸中滿之略言而示柴胡證仍在之辭也故此二字中含畜此他之柴胡證而言之蓋胸中滿者此水氣迫于胸脇之證如詳說□□□章矣）煩驚（驚而加煩字者與煩渴煩疼之煩同甚之詞分為二證非也此以火逆之故血氣逆而迫于心之所致也）小便不利（熱結水氣故小便不利也）讝語（以血氣逆而迫於心之故煩驚且讝語也）一身盡重不可轉側者（水血氣俱迫于上而不循環故蒸氣不得外洩滯而致身重依一身盡重而不得自轉側也故治本證柴胡及血逆之證則不治而自愈矣）柴胡加龍骨牡蠣湯主之）此方小柴胡加龍骨牡蠣湯也小柴胡湯以治其本證龍骨牡蠣以治血逆而迫于心也

柴胡加龍骨牡蠣湯方（　方第）

於小柴胡湯方內加龍骨牡蠣

右九味以水一斗二升煮取六升去滓再煎取三升溫服一升日三服

【百七十三】火逆（行燒針燒瓦等之術而致變證者凡云之火逆也）因燒鍼（煩燥之因而示血氣之變也）煩躁者（燒針術雖今不傳依云針處被寒核起而赤則其暴可知矣凡風寒之邪雖其以湯發汗者其服法甚嚴也而以燒針之暴術強發之故汗出過多血氣內攻迫于心而致此逆證也□□□章云發汗過多其人叉手冒心心下悸欲得按者桂枝甘草湯主之由此考之此條亦為發汗過多之證可知有叉手冒心々下悸等之證亦可知矣而

彼氣獨迫之證此則以血亦迫致躁也躁而冠煩字者甚之詞也耳分爲二證者非也）桂枝甘草龍骨牡蠣湯主之（以血氣內攻迫于心故龍骨牡蠣以治其血桂枝甘草以逐其氣也）

桂枝甘草龍骨牡蠣湯方（　方第）

桂枝（一兩去皮）甘草（二兩炙）龍骨（二兩）牡蠣（二兩熬）

右四味以水五升煮取二升半去滓溫服八合日三服

吐後諸證

【百七十四】太陽病吐之（此間似當有闕文）但太陽病（以下雖吐之後表證仍存言之）當惡寒今反不惡寒不欲近衣此爲吐之內煩也（言太陽病雖吐之後表未解者當惡寒而今反不惡寒不欲近衣者是惡熱也此由吐之後表解裡不解內生煩熱也蓋氣汗煩熱々在表大靑龍湯證也有汗煩熱々在裡白虎湯證也吐下後心中懊憹無汗煩熱大便雖堅熱猶在內梔子豉湯證也有汗煩熱大便已堅熱悉入府調胃承氣湯證也今因吐後內生煩熱是爲氣液已傷之虛煩非未經汗下之實煩也以上之法皆不可[illegible]惟宜竹葉石膏湯於益氣生津中淸熱寧煩可也）

△傷寒吐後腹脹滿者與調胃承氣湯（傷寒行吐方之後諸證皆去唯胃中不和其腹脹滿者藥毒遺害也調胃承氣可以解藥毒和胃若夫汗□□後之脹滿則否故治法不同也觀□□□□條可看矣）

【百七十五】太陽病十餘日心下溫々（一即慍々古字通用乃爲煩憒溫悶之貌）欲吐而胸中痛（言欲吐時痛而常不痛也）大便反溏（溏者瀉下也反字義甚重矣）腹微滿鬱々微煩先此時而極吐下者與調胃承氣湯（言太陽病表證已罷十餘日心下慍々欲吐之時胸中痛大便不溏者此爲邪傳少陽小柴胡湯證也今其人大便當不溏而反溏鬱々微煩者知醫先此時而極吐下極吐下者必用瓜蔕巴豆類故傷動腸胃以致下利也然是藥毒未解之下利非虛寒下利又非太陽病外證未除而數下之遂致虛寒之利也故與調胃承氣湯以和其胃則愈矣）若不爾者（言未極吐下也）不可與（言不因極吐下而有此證則虛寒之溏腹滿煩也雖有似柴胡證者非實熱也其脈當

微弱結代宜以理中四逆輩溫之不可與調胃承氣湯也)但欲嘔胸中痛微溏者非柴胡證(若但欲嘔胸中痛大便微溏者似柴胡證而非柴胡證以其大便溏之故知其極吐下又知其非柴胡證也○黃芩加半夏生姜湯證也)以嘔故(以嘔當作以溏應上文反溏語)知極吐下也

下後諸證

【百七十六】太陽病外證未除(言頭痛發熱惡風寒等證未除也○東郭子曰未除者有其證荏苒延日之意矣)而數下之(外證未除者雖有可吐之證先解其外而後乃始下之是法也而今醫其外證未除而反下之是誤治也氣逆可知矣○特解曰云數下之者已一下之不止復再下之後更三下之也以言表熱之當攻者反不攻之而其裡之不當攻者反數攻之是失治法之甚也)遂協熱而利(正珍曰協玉函作挾爲正字蓋借音而通矣挾熱者乃內寒挾外熱之謂其謂之挾者示寒之爲急也先輩不知皆以協字本義解之協乃互相和同之謂寒熱氷炭豈有互相和同之理乎可謂妄矣)利下不止(曰利下而不曰下利者非別有意承上文協熱而利之利字而疊語者也古書往々有此文例先輩雖或有說皆不足據也○南涯曰此利非氣不行而水自下爲熱被逐而利故曰協熱而利所以無黃芩也)心下痞堅表裡不解者(錢潢曰表不解者以外證未除而言也裡不解者以協熱下利心下痞堅而言之)桂枝人參湯主之(此方治水血凝于心下氣逆劇表裡有熱人參以解其凝血朮以逐水乾姜甘草以復其逆氣桂枝發其熱氣也)

桂枝人參湯方(發祕曰此方也即人參湯增甘草一兩加桂枝四兩者故名曰桂枝人參湯其不稱人參加桂湯者亦是古方非仲景氏所新加者以示其爲古方也○方第)

桂枝(四兩去皮) 人參(三兩) 白朮(三兩) 乾姜(三兩) 甘草(四兩炙)

右五味以水九升先煮四味取五升去滓內桂更煮取三升去滓溫服一升日再夜一服

【百七十七】傷寒醫下之(太陽傷寒麻黃湯證醫誤下之也何以言之以身疼痛之表證仍存言之也)續

得下利（下之後下利連日不止也仲景之法陽明胃實之證而表證未盡解者先治表而後下之況於太陽麻黃湯證乎司命者豈可不謹乎）淸穀不止（言水穀共不消化而相併而淸也）身疼痛者（此雖下之後表證仍在也）急當救裡（言大氏病雖有裡證而表未和則先表而後裡也而醫誤下之續得下利淸穀不止者寒其裡也比之他證則急矣雖有通身疼痛之表未除以先急救裡爲法也○正珍曰此症重於協熱利一等矣彼惟下利而此則加以淸穀彼則桂枝人參湯以雙解表裡此則急用四逆偏救其裡輕重緩急自有其分矣○表證疼痛麻黃湯證而非桂枝湯證而此證用桂枝者何也云々）後身疼痛淸便自調者急當救表（言用四逆湯而以救裡之後俟便利自調仍身疼痛不止者此表證耳仍存也急再以救其表爲法也）救裡宜四逆湯救表宜桂枝湯（○此證若不救其裡而反攻其表則虚寒益甚而爲腹脹滿之證矣例云下利淸穀不可攻表汗出必脹滿是也）

【百七十八】太陽病桂枝證醫反下之（桂枝證而下之反其治法也）利遂不止（因誤治致此逆故藥氣雖盡其下利遂不止也○挈以上十四字爲綱條以脈促者與喘而汗出者之二證以辨其治法也論中往々有此文法不可不察也）脈促者表未解也（促迫也速也短也戚也卽數小之脈也○）太陽病桂枝證醫反下之續得下利其脈緩者變爲數此爲表不解而裡更虛也謂之協熱利桂枝人參湯之證也夫因下之而利遂不止爲中焦虛寒所致也其脈當遲澁々乃促急故爲表分餘熱未解也）喘而汗出者（喘正證以無汗爲目的今以汗出考之此喘因誤下餘熱內攻迫于胸中之證而其中亦急迫所致也以而字間汗出者明此汗非表不解之汗而實爲因喘之汗矣○言太陽病桂枝證若下之々後利遂不止喘而汗出無表證者此爲餘熱內攻上焦所致與麻杏甘石湯證略同但彼汗出而喘此因喘而汗出彼以汗爲主此以喘爲主所以治法有異也雖則有異其爲上焦之熱乃一也故並用寒藥以淸解上焦也）葛根黃芩黃連湯主之（葛根甘草以治喘汗之病芩連以逐致下利之毒也凡芩連之證下利則必

有胸中熱心下痞今雖未至作痞然以喘汗出考之非胸中無熱也○下後表未解而微喘者乃次章桂枝加厚朴杏子湯之所主也）

葛根黃芩黃連湯方（○方第）

葛根（半斤）黃芩（三兩　或作二兩）黃連（三兩）甘草（二兩炙）

右四味以水八升先煑葛根減二升內諸藥煮取二升去滓分溫再服（○季玆曰一稿本表未解也之下補桂枝人參湯主之七字方名黃連下補甘草二字今從別稿本不補者）

【百七十九】太陽病（言中風桂枝證也何以言之以下下文曰表未解仍主桂枝湯知之）下之（桂枝湯證而下之此誤下也本論凡書汗後吐後下後者皆以前證悉去而言之此條不言後字者前證不去也此本論屬辭之文例也）微喘者表未解故也（太陽病桂枝證雖醫反下之其證猶未已而加微喘者此本當發之證而反不發散因誤下之而不嘗表未解反少虛其裡是以其當發散水氣內陷與裡氣迫而逆于咽所致也）

桂枝加厚朴杏子湯方（○方第）

於桂枝湯方內加厚朴（炙去皮）三兩杏仁（去皮尖）五十箇

右七味以水七升微火煮取三升去滓溫服一升覆取微似汗

【百八十】太陽病下之後（太陽而下之治逆也而言下後則氣逆可知矣○凡吐下後舉內變汗後舉外變是本論之文例也）其脈促（因下脈見短以表證未解帶數也凡太陽病表邪未解而下之則見此脈也前章云太陽病下之脈促者表未解也「又□□□章云太陽病下之其脈促不結胸者此爲欲解也」之語可見矣是桂枝湯證誤下之則見促脈之例也若麻黃湯證誤下之則邪氣直入少陰其脈沈細也）胸滿者（胸滿卽胸中滿悶也蓋困誤下外出之陽氣內陷迫湊于胸中而所致也若此證而水結則爲結胸卽大陷胸湯之所主也觀百八十五章可見矣今不堅痛無水結之狀脈促者病仍在表者也故表解則胸滿自散所以用桂枝湯也）桂枝去芍藥湯主之（若裡有水氣而致此證則必脇痛或嘔逆小柴胡湯主之又有表有瘀水而胸滿者必有喘麻黃湯主之今此胸滿表分未解之餘

熱延及胸膈而致之故仍用桂枝湯發之惟芍藥非胸滿之所宜故去之此胸滿以氣迫于胸中之證凡治胸滿之諸方皆無芍藥非其所宜可知矣且有芍藥則以桂枝發散之力亦不專一也凡發散之劑不用芍藥者芍藥有治血分之功觀桂枝湯有治惡寒頭痛疼痛之効可見矣此以有芍藥也上衝者與桂枝湯其病在筋脈而上衝其證劇則腹痛或拘攣或煩悸西有加芍藥湯及小建中湯今此胸滿非筋脈中之證故去芍藥專發散之力也）若微惡寒者桂枝去芍藥加附子湯主之（言上文桂枝去芍藥湯證而若兼微惡寒者此非外襲之惡寒因下劑所致之惡寒而氣虛血滯之證所謂陽虛寒也故云微惡寒而分之所以加附子也外襲之惡寒者不主惡寒以下云微惡寒者亦非表證也○芍藥甘草附子湯條同證而有芍藥去加之別如何芍藥甘草附子湯發汗變證卽急之證也此條下後變證卽逆之證也急逆之證異其治方是古之法也桂枝加附子湯發汗之變病故有芍藥附子瀉心湯下後之變病故無芍藥急逆之異其意一也）

桂枝去芍藥湯方（〇方第）

於桂枝湯方內去芍藥餘如桂枝法

桂枝去芍藥加附子湯方（〇方第）

於桂枝去芍藥湯方內加附子（炮去皮破八片）一枚餘如桂枝法

【百八十一】下之後復發汗必振寒脈微細者以內外俱虛也（必者十而八九然之謂也下則虛其內發汗則虛其外其邪雖解乎表裡之陽俱虛所以振々寒慄而脈微細也宜與姜附之劑急補其虛也

【百八十二】下之後復發汗（本論曰本先下之而反汗之爲逆可見此治之逆「治」矣）晝日煩躁不得眠（下之汗之表裡津液爲之虛脫氣血欲循不能循因致此煩躁不眠也與茯苓四逆湯之煩躁相似而彼血氣逆而水犯血分之所致比此證則重彼此俱大青龍湯方後所謂汗多亡陽遂虛惡風煩躁不得眠者是也（〇）與梔子豉湯之虛煩不得眠者不可誤混也）夜而安靜（晝則人氣動故煩躁悶擾不得安眠夜則人氣靜故纔得安眠也婦人熱入血室晝日明了暮則譫語與此條相反矣）不嘔不渴無表證脈沈微（不嘔不渴示其裡無熱邪之辭蓋對煩躁之似裡熱而言如桂枝附子

湯證不嘔不渴桂枝麻黃各半湯章不嘔皆然煩躁專屬陽證而今無少陽主證之嘔陽明主證之渴太陽主證之身熱而其脈沈微其非陽證之煩躁明矣）身無大熱者（言皮膚之表無有翕々之熱惟有微熱也○大晉泰詳見于第二章之註本章及麻黃杏仁甘草石羔湯條并稱身無大熱大陷胸湯白虎加人參湯并單稱無大熱而無身字皆承第二章身大熱之文而言故雖省身字亦自通矣）乾姜附子湯主之（此方與四逆湯近似而無下利厥冷脈欲絕等證故不用甘草又與茯苓四逆湯證相似而有異也乾姜行氣附子行血二味相助而以溫復表裡之陽虛也蓋治法一專扶陽而不敢攻其邪若正勝而邪自退者也上條論汗下俱犯後之常證此條論其有變證如此者也其所以異於前條者無振寒而反有煩躁所謂眞寒假熱者也

結胸痞諸證

【百八十三】夫病發於陽（邪在陽部之謂也）而反下之（發病之始非可下之時而下之故曰反）熱入因作結胸（謂熱毒結聚於心胸也此由病發於陽而早下之熱氣乘虛而否結不散也蓋結胸之爲結正唯在心下而非通全腹而然故不得名曰結腹而隸諸胸部以命結胸己亦猶以胃隸腸稱云胃中有燥屎假立之名以別彼痞耳）病發於陰（邪在陰部之謂也）而反下之（非始終可下之證而下之故曰反與上文反下之義迥別也）因作痞（否也氣結而否塞之名也無脹無痛但心下妨悶而不知飢亦不欲食也非若結胸之有物而且堅且痛也）所以成結胸者以下之太早故也（○陽言結胸陰言痞互文言其實陰陽皆有痞有結胸也言熱入而不言寒入者以結胸得諸外來之邪痞得諸心氣之結也言所以成結胸而不言所以成痞者以結胸多得諸下早而痞則不必然也其所謂病發於陽而反下之因作痞者如太陰篇首條是也蓋痞與結胸同是心下之病惟由其氣結與水結以別之名已（傷寒不可下而反下之熱入因作結胸者是理之常固不足怪也其邪自解於外而內更生痞病者何也蓋以裡邪有盛不盛下劑有峻不峻今邪自解於外而內更生痞病者以邪氣本微而

攻之太峻也從來寒熱之證一朝變爲虛寒者皆由此而來以熱入二字冠之結胸而不冠痞者自有深意存焉)

【百八十四】太陽病(此條辨太陽中風證邪勢急而其熱將鬱于裡轉于茵蔯蒿湯證而既見其機者醫下之太早是以邪氣內陷而爲結胸者與遂以爲茵蔯蒿湯之證者也何以知中風證以脈浮頭痛發熱知之也)脈浮而動數頭痛發熱(以上是中風之正候也云脈浮而動數虛字而形容數脈之有邪勢之辭也耳)微頭汗出(此其熱將瘀于裡之候也〇頭本作盜者因音同而訛也說於考文詳之焉宗俊父曰盜汗二字恐六朝以降之名非漢時語內經中亦云之寢汗而云盜汗者未有之也此說是也然以有此盜汗字微字以下至也十三字爲後人之語而域之者未深思也今從此說依例而改之例也者何也云々)而反惡寒者(微頭汗出者此既將熱瘀之候則當不惡寒而惡寒故云而反以明之也)表未解也(脈浮而又有頭痛發熱惡寒由此觀之則雖有頭汗表證未解也)醫反下之(表證未解者下之爲逆若誤下之則其邪必內攻也而醫下之故云反也)動數變遲陽氣內陷心下因堅則爲結胸也(陽氣者謂在表之邪氣陽表也氣邪也文蛤散條云病在陽應以汗解此以表稱陽者也非所謂亡陽之陽甘草瀉心湯條云客氣上逆此以邪稱氣者也非所謂胃氣之氣也因誤下而在表之邪氣內陷則其熱必伏結水心下因堅所以之名結胸者以水氣爲邪所團結而在胸脇之間也)大陷胸湯主之(以上此論病發於陽而誤下之則爲結胸之顚末也)若不結胸(猶言表證未解而下之則在表之邪內陷而爲結胸此其常也而今雖下之不結胸矣)但頭汗出劑頸而還(其汗之出也以頸爲分界而頸以下則無有汗之謂矣劑乃質劑之劑假以譬頭之與身各分其證矣〇劑爲分界之義尙詳于集成矣)小便不利者身必發黃也(言若下後不結胸但頭汗出劑頸而還小便不利者此爲熱不得發越壅閟在裡之候身必發黃也此乃茵蔯蒿湯之主也可見此證本欲閟熱之證矣

大陷胸湯方(〇方第)

大黃(六兩)芒消(一升)甘遂(一錢匕)

右三味以水六升先煮大黃取二升去滓內芒消煮一兩沸內甘遂末溫服一升得快利止後服

【百八十五】傷寒六七日（此條結胸之正證而不因誤治自柴胡證轉來者也故其所說皆舉柴胡之證加乎一等者之狀而論之也柴胡之證曰五六日此證進一等故曰六七日也）結胸熱實（熱實於胸而結水氣是結胸也蓋柴胡之胸脇苦滿進一等作此證也）脈沈而緊（柴胡之脈則沈緊此證進一等故沈而緊也沈而緊者沈爲主而兼緊故間而字以明與柴胡之直曰沈緊至不同也蓋沈在裡之脈緊者水氣實之脈也）心下痛按之如石堅者（所結於胸之熱實水氣波及于心下而滿痛也其如石堅者以結實之甚也甘遂以主之）大陷胸湯主之（此條結胸之正證也故芒消以化結實甘遂以逐水氣大黃以下之也○結胸者外不見熱頭汗不出也表有熱或頭汗出者是血氣外發之狀而非大陷胸湯之證也）

【百八十六】傷寒十餘日（此條承大柴胡湯之本章而論其熱結在裡作彼證者與水結于胸脇而作結胸者之差別也）熱結在裡（熱結者對下文水結而言之裡者指陽明部位而言之則對下文胸脇而言也○熱結在裡之候如何次章所謂不大便舌上燥而渴是也）復往來寒熱者（傷寒十餘日者熱結在裡是其常也然則當不往來寒熱而今往來寒熱故曰復也蓋病仍未離少陽部位可知矣）與大柴胡湯（此乃少陽々明之合病故與此湯兼治二者也）但結胸無大熱者（大者對小之辭其人雖身無翕々熱有小熱之謂也觀下章小有潮熱之小字可見矣）此爲水結在胸脇也（此八字釋所以名結胸之義以示其病因胸脇二字該膈上膈下而言也後人認之爲一種水結胸矣果爾其治亦應用別方豈均以一大陷胸療之乎夫結胸者水飲與熱邪結而所作也故大陷胸方中均是有逐水利飲之甘遂乎）大陷胸湯主之）

【百八十七】太陽病重發汗者復下之（此承前太陽病脈浮云々之章而舉發病之初既已將熱實之證而醫以其有表證雖再三發汗之其病不解因復下之而仍不解不啻不解表邪內陷遂爲結胸者也○復者又也）不大便五六日（此熱實之

候也以此語承復下之下者明雖下之其大便不通之義也○此證初汗下之間當經二三日而不大便五六日合而數之則得病之後既經八九日者也）舌上燥而渴（熱結于裡而乾津液故有此證也然不如白虎承氣之劇者以滯水之證之故也潮熱之小亦可思矣）日晡所小有潮熱（未申之時云之日晡也所者卽書云多歷年所之所也）從心下至小腹堅滿而痛不可近者（結胸之證水氣結實于胸脇乎固也觀水結胸脇之語可見矣而諸條不云胸滿胸痛等之證者何也結胸二字該之也其擧心下及小腹堅滿痛等之證者此皆以從結胸所波及之證之故殊表之也）大陷胸湯主之（本論中說結胸者凡四章此證殊劇證矣）

【百八十八】小結胸者正在心下按之則痛脈浮滑者小陷胸湯主之（○凡結胸證雖有輕重之異俱不可不下但其脈浮滑故與小陷胸湯以和解之也蓋結胸者不啻心下併及兩脇下所謂水結在胸脇及婦人中風胸脇下滿如結胸狀可見矣此則不然正唯在心下且不按則不痛實結胸之小者已故名曰小結胸也小結胸與痞其證極相似矣按之則痛不欲近手者小結胸也按之則痛雖痛其人反覺小安欲得按者否也何也結胸雖小其因屬水也痞雖大其本屬氣故也

小陷胸湯方（○方第）

黃連（一兩）半夏（半升洗）括樓實（大者一枚）

右三味以水六升先煮括樓取三升去滓內諸藥煮取三升去滓分溫三服

【百八十九】寒實結胸（對熱實而言所謂無熱證是也非有寒證如婦人中風熱入血室條熱除而身涼亦唯謂無熱耳非有寒涼也實乃胃家實之實大便不通是也）無熱證者與三物小白散（本作與三物小陷胸湯白散亦可服今依玉函宋板注從師道父說改之○言結胸無熱證而不大便者宜與白散攻下若有熱者不宜丸散宜以湯下之）

三物小白散方（○方第）

桔梗（三分）巴豆（一分去皮心熬黑研如脂）貝母（三分）

右三味爲散內巴豆更於臼中杵之以白飲和

服强人半錢匕（謂一錢匕之半也）羸者減之病在膈上必吐在膈下必利不利進熱粥一坏利過不止進冷粥一杯（冷物能解毒故也）

△太陽少陽併病而反下之成結胸心下堅下利不止水漿不下其人必心煩（此條言太陽少陽併病當先解其外而反下之則熱邪乘虛而入因成結胸也大抵結胸之證大便多堅或者不痛此之爲常所謂熱實寒實是也故用大黄芒消以蕩滌之此則下利不止水漿不下而煩亦結胸中之變局也此爲下後腸胃受傷而其裡不得成實但水結在胸脇之所致乃十棗湯證也）

【百九十】傷寒五六日（此明柴胡湯之地位也）嘔而發熱者（柴胡湯地位而嘔是柴胡湯之正證也然則當往來寒熱而反發熱故云而以別之也蓋柴胡之變證也○發熱下宋板有者字非也今從玉函經）柴胡湯證具（柴胡湯證者言胸脇苦滿嘿々不欲飲食等之證也此證柴胡之地位則當往來寒熱而反發熱則有可疑於他證者矣故云柴胡湯證具而以明之也）而以他藥下之（此證當以柴胡湯主之而醫以他快藥下之是誤治也故云而也○挈以上四句而以爲綱係以下之後其證當變而不變柴胡證仍在者與或爲結胸者或爲痞者而以辨其治法也）柴胡證仍在者復與柴胡湯（復者謂復其初也柴胡湯證而誤下之則其證當變而不變柴胡證依然仍在如是者復於其初以與柴胡湯也）必蒸々而振却發熱汗出而解（此吳子所謂戰汗也蒸々身熱汗欲出之狀也振者振々然動搖之皃即寒戰也言膚體蒸々然却發熱汗出而邪氣解矣凡病人已經數日之後藥能中其膏肓則間有振寒發熱而解者豈唯下後爲然乎亦唯一柴胡湯爲然乎）若心下滿而堅痛者此爲結胸也（言柴胡證若下之後柴胡之證爲胸脇苦滿者頓爲劇甚心下緊滿石堅而痛不可觸近者此因誤下作結胸也乃大陷胸湯之所主也柴胡不中與之）但滿而不痛者此爲痞（若下之後如大陷胸之證心下雖滿而不堅痛者是亦非柴胡之證又非大陷胸之證是爲痞矣若心下滿以下亦是少陽病誤下後之變證亦宜接以他藥下之句下而看之）柴胡不復中與也（此一句該結胸與痞而言之也非於痞耳言之也○復字對上文復與柴胡

湯之復字而言之末皈作柴胡不中與之者非也今從玉函）嘔而腸鳴下利者（瀉心之方凡有六方而各々於治痞則一也此章云宜半夏瀉心湯則有此正證可知矣而無之者蓋脱文也若夫無此證而痞一證則假令雖下後乎氣痞而乃大黃々連瀉心湯之證也而今斷云宜半夏瀉心湯則決而不可無此證焉）宜半夏瀉心湯（不云主之而云宜者何也柴胡證及大陷胸湯證之始證時有可疑於半夏瀉心湯之證者故權用半夏瀉心湯以觀其後證如何也）

半夏瀉心湯方（○方第□□□○方名取諸輸寫心氣之鬱結故瀉心諸方皆以芩連苦味者為主○瀉與瀉借音通用○一本云結胸者有水為邪熱所團結故堅滿而痛是以用甘遂破水之藥痞者心氣鬱結而不能堅痛也故唯滿而不痛無水故也所以用芩連行氣之劑矣）

半夏（半升洗）黃芩（三兩）黃連（一兩）乾薑（三兩）人參（三兩）大棗（十二板擘）甘草（三兩炙）

右七味以水一斗煮取六升去滓再煎取三升溫服一升日三服

【百九十一】傷寒汗出解之後（言傷寒麻黃湯之證已行發汗之法表證從汗出而悉解之後也）胃中不和（猶言胃中之氣不和循矣蓋此心下痞堅乾噫食臭之證固而法語也特解云夫胃中之和與不和是不可見者也然而為治之道自非知其衆證之所歸者則茫洋不知所適從而不可得而處其方故必舉其法語以總括其衆證之所歸會者以示學者以其方法也）心下痞堅（心下則胃之所位胃中之氣不和循則其氣鬱滯而為痞々劇則血亦凝故為堅矣）乾噫食臭（特解云心下痞堅之證其途固非一二必有乾噫食臭之證然後可以為胃中不和之所致也是噫氣也而云乾噫者以別噫氣有食臭而吐其食物及吐出濁水者故云乾噫者○方子曰噫飽食息也食臭㬉氣也平人過飽傷食則噫食臭病人初瘥胃氣尚弱化輸未強雖無過飽猶之過飽而然也○成子曰金匱曰中焦氣未和不能消穀故令噫也是加生姜在此證也）脇下有水氣（此其人因中焦氣未和循而所畜之水飲而非外水內攻者則腹中雷鳴下利之證因也若此水因外襲而結于胸脇則為柴胡證矣）腹中

雷鳴下利者（正珍曰此證傷寒愈後藏氣尙弱飮食難消化之所致胃中脇下互文言之其實胃中亦有水脇下亦不和也○以氣血迫于上之故水不能獨持雷鳴下走而以爲下利也是以不爲柴胡之證也○「南涯曰脇下之水氣雷鳴下降而致下利也○胃中不和故心下痞堅乾噫食臭也脇下有水氣故腹中雷鳴下利也」）生薑瀉心湯主之（徐子曰三瀉之藥大半皆本於小柴胡湯故其所治多與柴胡證相同○又曰方中諸藥一々對證内中又有一藥治兩證者亦有兩藥合治一證者錯綜變化攻補兼施寒熱互用學者能於此等方講求其理而推廣之則操縱在我矣○南涯曰半夏瀉心生姜瀉心甘草瀉心之三證有小柴胡湯之別小柴胡湯者水氣爲主者也故作寒熱作胸脇滿不雷鳴不下利也瀉心湯者血氣爲主故心下痞堅而水氣下降作雷鳴作下利胸脇不滿無往來寒熱此其別也○芩連以循氣于上下人參以行凝血乾姜以治氣逆生姜以和胃氣□□逐降水氣之逆）

生薑瀉心湯方（　方第）

生薑（四兩切）甘草（三兩炙）人參（三兩）乾姜（一兩）黃芩（三兩）半夏（半升洗）黃連（一兩）大棗（十二枚擘）

右八味以水一斗煮取六升去滓再煎取三升溫服一升日三服

【百九十二】傷寒發汗若吐若下解後（是言傷寒表證發汗之或上實證吐之或裡證下之々後前證已解而無復餘證者也）心下痞堅（血凝而氣不行之證固矣雖氣不行乎無下利之證此本方所以獨有人參而無黃芩也）噫氣不除者（心下痞堅而有噫氣者是於法爲胃中不和伏飮爲逆之證生姜瀉心湯之主也是以與生姜瀉心湯而仍心下痞堅噫氣不除者何也以其證相似而實則反也觀無下利腸鳴等之證可見其異矣○正珍曰不除二字示其已用生姜瀉心之意也如第百三十四條第三十一條不差之語可見矣）旋復花代赭石湯主之（南涯曰生姜瀉心湯不經吐下而有瘀水故到下利此病人或吐或下而無瘀水故不下利是二方之別也）

旋復花代赭石湯方（○方第）

旋復花（三兩）人參（二兩）生姜（五兩切）代赭

石（一兩）甘草（三兩炙）半夏（半升洗）大棗（十二枚擘）

右七味以水一斗煮取六升去滓再煎取三升温服一升日三服

【百九十三】傷寒中風醫反下之（中風傷寒之初證其表未解者俱不可下之而醫下之是誤治也故云反也以此誤治之故爲下文所擧之證矣然則此誤下是此章之證因也）其人下利日數十行（此下利非病之自然因誤下胃中虛水穀不消化而所致之下利也蓋此證以例言之則當擧于腹中雷鳴之下而擧於此者何也欲明醫誤下之後續得下利之義而承之于醫反下之之下矣）水穀不化（正珍曰言其所飲食之物客滯於胃中而不消化之義若其重者必發乾噫食臭生姜瀉心湯證是也先輩或以下利淸穀爲解大誤也素靈中往々稱淸穀爲穀不化其文雖同證則不一謹莫混同焉〇水字依外臺從正珍說而補之）腹中雷鳴（以胃氣不和循之故畜水飲其水走于腸中而以爲雷名也）心下痞堅而滿（南涯曰此滿非邪薄裡之所致之滿醫誤下之因下利劇上攻爲痞因致此滿故以而字間之以示其意也）乾嘔心煩不得安（南涯曰是急迫之所致也加甘草以在此證之故也甘草瀉心湯主之七字屬于此看之）醫見心下痞謂病不盡復下之其痞益甚（特解云曰見者以明其麤也曰謂者以示其臆度從事也以譏不審推其見證以定其主證而誤認心下痞堅以爲未盡之熱入裡而結之所致而不審推穀不化腹中雷鳴之故而復下之其痞益甚也何則元以其下之々故胃中虛使之然而今復下之以益成其虛故其痞益甚也）此非結熱但胃中虛客氣上逆故使堅也（此者指心下痞堅而滿而言之也言以此心下痞堅勿誤爲熱結心下是但因誤下胃中虛而客氣上逆鬱心下而痞堅者不足深疑也所以謂之客氣者以其客滯之氣也）甘草瀉心湯主之（此七字句當移于心煩不得安之句下而看之云々）

甘草瀉心湯方（〇方第）

甘草（四兩炙）黃芩（三兩）乾姜（三兩）半夏（半升洗）黃連（一兩）人參（三兩）大棗（十二枚擘）

右七味以水一斗煮取六升去滓再煎取三升温服一升日三服

【百九十四】脈浮而緊（乃傷寒初發麻黃湯之脈候也）而反下之則作痞按之自濡（謂不堅不痛但氣痞不快者也○濡與輭古字通用）但氣痞耳（此論下後諸證皆解但覺氣痞不快者也脈浮而緊是邪在表之診而反下之其人有留飲則成結胸無飲則作痞々者心氣鬱結之名故下文承之云但氣痞耳口病人言我心下痞而按之則不堅者也故以大黃々連二味湯漬與之取其氣薄而不事攻下其但漬而不煮者其用之妙不可思議也）大黃々連瀉心湯主之（南涯曰大黃々連不能解痞當有黃芩附子瀉心湯有黃芩一兩由此觀之脫黃芩也明矣）

大黃々連瀉心湯方（○方第）

大黃（二兩）黃連（一兩）

右二味以麻沸湯（謂沸時泛沫如麻子也）二升漬之須臾絞去滓分温再服（以麻沸湯漬服者取其氣薄而泄虛熱

【百九十五】傷寒大下後復發其汗（此本麻黃湯證當用麻黃湯發汗而反大下之下而後發其汗是逆治也故云復也何以知本麻黃湯證冒首云傷寒與下文云表未解也知之矣）心下痞（此因誤下虛氣湊于心下所致所謂氣痞而與三瀉心之痞不同焉何以言之以用大黃々連瀉心湯言之）惡寒者表未解也（南涯曰此惡寒非下後所致者初起所在之惡寒未已也）不可攻痞當先解表（南涯曰雖已發汗惡寒不已者外襲未解也攻其痞則恐表邪反薄裡其痞益甚故先解表而後攻也）解表宜桂枝湯（方有執曰解猶救也解表與發表不同傷寒病初之表當發解故曰宜桂枝湯）攻痞宜大黃々連瀉心湯

【百九十六】心下痞而復惡寒汗出者附子瀉心湯主之（此乃大黃々連瀉心湯之證而兼陽虛者非表有熱邪之惡寒汗出故唯惡寒而不發熱瀉心以解痞附子以復陽也

附子瀉心湯方（○方第）

大黃（二兩）黃連（一兩）黃芩（一兩）附子（二枚炮去皮破別煮取汁）

右四味以麻沸湯二升漬是亦用麻沸湯義同于前

矣）漬之須臾絞去滓內附子汁分溫再服（〇本方更精附子用煎三味用泡扶陽欲其熱而性重開痞欲其生而性輕也、〇大黃瀉心治心氣痞結而不堅者附子瀉心治大黃瀉心證而挾陽虛者半夏瀉心治大黃瀉心證而一等重按之堅滿者生姜瀉心治半夏瀉心證而挾飲食者甘草瀉心治生姜瀉心證挾胃虛者證方雖各有異主其外邪已解而中氣自結者則一也）

【百九十七】傷寒服湯藥而下利不止（傷寒者泛指疫言之此下利蓋下章所謂寒下而其人裡固有寒而受病之初下利倶併起矣醫用對證之湯藥傷寒之邪雖已解而其下利仍不止也間而字者以明此意也、〇而字本無之今依玉函而補之）心下痞堅（其下利不啻不止續而心下痞堅也）服瀉心湯已（下利心下痞堅則半夏瀉心湯之證也然則此云瀉心湯者指半夏瀉心湯可知矣〇已者畢也）復似他藥下之利不止（雖服半夏瀉心湯已其下利不止而心下仍痞堅也如此者法當與人參湯而醫以爲病不盡熱結于心下而以他丸散下之其下利仍不止也〇正珍曰上文既云湯藥又云他藥則知他藥者指巴豆甘遂等丸散之詞而非復指上文湯藥也）醫以理中與之利益甚（理中者即人參湯也〇正珍曰以誤下之故其裡愈虛而下利愈不止於是醫始以理中與之而其利益甚者何也蓋一誤下而利者雖利未至滑脫以中虛未甚也理中可得而療也再三誤下則虛而又虛終至滑脫無度非復理中之所能及故得之其利益甚也非有妨害而然惟緩不及事也）赤石脂禹餘糧湯主之（正珍曰用此二味以澁滑固脫庶可以止之也）若不止者當利其小便（若雖服赤石脂禹餘糧湯而其下利仍不止者當與滲藥以利其小便下利隨而自愈焉〇正珍曰此證始不用附子者以其得之誤下而不清穀且無厥逆脈微之候與彼眞寒自利者自不同也〇元鱗曰此條爲庸醫對病不能明察其證苟且投方下利不止忙乎不知其所下手者設之故下一醫字以擧粗工之所爲如此且示其治法有三等〇若本作復今依玉函而改之）

赤石脂禹餘糧湯方（〇方第）

赤石脂（一斤碎）禹餘糧（一斤碎）

右二味以水六升煮取二升去滓分溫三服

【百九十八】以二本下レ之故心下痞與二瀉心湯一痞不レ解其人煩渴而口燥小便不利者（爲二水飲內蓄津液不レ行也）五苓散主レ之（前章所謂當レ利二其小便一之法方也蓋此所レ出二於余悲按一也）

寒格吐下

【百九十九】傷寒本自寒下（其人腹中本有二寒冷一而自下利也）醫復吐二下之一（復反也本有レ寒而自下利者當レ與二溫藥一也而醫以二寒藥一吐而復下レ之是爲二大逆一也故云レ復也）寒格更逆二吐下一（逆者迎也言其人本有レ寒而下利而醫反吐下是以腹中之寒與二吐下之寒藥一相扞格不レ容上爲レ吐下爲レ下是寒格迎二吐下一也猶レ言レ重二吐下一焉）若食入レ口卽吐者（以三寒格而迎爲二吐下一故逆氣上衝上則稍變レ熱下則愈虛寒是以兩氣在二心胸中一故食入レ口則吐而不レ容也）乾姜黃芩黃連人參湯主レ之（一金匱曰食已卽吐者用二大黃甘草湯一然則飮食有レ間而吐者多因二虛寒一其入レ口卽時吐出者多因二上焦有一レ熱故用二芩連解熱之品一主レ之也）

乾姜黃芩黃連人參湯方（一 方第）

乾姜　黃芩　黃連　人參（各三兩）

右四味以二水六升一煮取二二升一去レ滓分溫再服

餘熱內伏諸證

【二百】發汗吐下後（曰レ後則前證皆去可レ知矣雖二前證皆去一乎汗吐下俱犯之後則亡二津液一亦可レ知矣不レ用二若字一者發汗吐下悉致レ之也用二若字一者用レ彼不レ用レ此之辭也）虛煩不レ得レ眠（凡傷寒發汗吐下後諸證皆去但胸中煩不レ得レ眠者是雖二大邪已去一內亡二津液一故餘熱內陷而迫二湊于心中一之所レ致蓋是無形之熱氣獨迫而水血不レ凝與二結胸痞堅水凝實而煩者一自別彼心下堅痛此心下不レ堅不レ痛觀下□曰中按レ之心下濡者爲上虛煩可レ見矣故曰二虛煩一而別レ之（一）不レ得レ眠者卽臥起不レ安之互詞也）若劇者必反覆顚倒（若其煩至劇則爲二反覆顚倒一反者仰レ身而反也覆者伏レ身而偃也顚倒者宛轉偃仆也皆言二其煩悶不レ可レ忍之狀一）心中懊憹（憹卽惱字古通蓋心中慍々懊々欲レ嘔不レ嘔之狀）梔子豉湯主レ之（煩而不レ得レ眠之證若證レ汗大汗出後煩躁不レ得レ眠欲レ得レ飮レ水者乃津液內竭胃中乾燥之所レ致少々與レ水以滋二潤之一則愈若其證而微熱消渴小便不レ利者五苓散之主也今此證惟煩而不レ渴知三其非二胃燥一也若

汗下後煩躁不得眠不嘔不渴無表證其脈沈微者便是眞虛宜以乾姜附子湯茯苓四逆湯輩急溫之愼不可與梔子豉湯也　若少氣者梔子甘草豉湯主之（若有虛煩不得眠反覆轉倒心中懊憹等之證而少氣者此氣急迫上而所致也故加甘草以緩急迫也○少氣者言呼吸微弱如欲絕也素問云一呼脈一動一吸脈一動曰少氣是也與短氣異矣短氣者必有水少氣者無水惟氣而已）　若嘔者梔子生姜豉湯主之（若有虛煩不得眠反覆顚倒心中懊憹等之證而兼嘔者此氣逆也生姜以逐逆氣也其不用半夏者以無留飮也

梔子豉湯方（○方第）

梔子（十四箇擘）香豉（四合綿裹）

右二味以水四升先煮梔子得二升半去滓內豉煮取一升半去滓分爲二服

梔子甘草豉湯方（○方第）

於梔子豉湯方內加甘草（炙）二兩

右三味以水四升先煮梔子甘草取二升半內豉煮取一升半去滓分二服

梔子生姜豉湯方（○方第）

於梔子豉湯方內加生姜（切）五兩

右三味以水四升先煮梔子甘草取二升半內豉煮取一升半去滓分二服

【二百一】發汗若下之而煩熱（謂熱之甚猶煩疼煩渴之煩甚之之詞已非謂胸煩身熱也）　胸中窒者（謂上焦鬱結而不快也○窒音質塞也）　梔子豉湯主之（此虛煩見異證者比前證則輕發汗若下之其治未極汗吐下故其證不劇以熱不伏之故不反覆顚倒不心中懊憹也然其因不殊故亦用此湯也○凡梔子豉湯之證當以舌上有胎小便黃赤心中懊憹結痛或窒塞爲準的也）

【二百二】陽明病下之其外有熱手足溫不結胸心中懊憹飢不能食但頭汗出者梔子豉湯主之（此陽明病下後大邪已去而餘熱少伏於內而不得越者與梔子豉湯以解餘熱則愈）　若胃中虛冷不能食者飮水則噦（此證宜附子理中湯溫之非梔子豉湯證也）

【二百三】傷寒五六日大下之後（傷寒五六日是小柴胡湯病位也小柴胡湯病位而大下之故致心中結痛之證也）　身熱不去（柴胡證本有身熱今大下之身

熱仍如此故曰不去也）心中結痛者（此下後餘熱內伏鬱結于心中而所致也）未欲解也（心中結痛身熱不去此邪氣未去之證故云未欲解也）梔子豉湯主之（身熱伏而結實則爲結胸今身熱在外雖作結痛水不結故以本方主之）

【二百四】下利後更煩（本有煩不爲利除而轉甚也）按之心下濡者（下後無物也）爲虛煩也宜梔子豉湯（○凡傷寒發汗吐下後諸證皆去但心煩者是大邪已去正氣暴虛而餘熱內伏故也是雖言虛煩其實非眞虛亦惟一時假虛已梔子豉以解餘熱則愈）

【二百五】傷寒下後（前證已去）心煩（卽前章所謂同于虛煩也蓋熱鬱胸中之所致也）腹滿（因下後內虛而裡氣滿不通故爲此證也與厚朴生姜半夏人參湯之腹滿同一虛脹已是以雖滿不堅痛此所以其不用消黃等也）梔子厚朴枳實湯主之（此證虛煩而兼腹滿者然比前虛煩則輕故於梔子豉湯方內去香豉加厚朴枳實以主之梔子以解鬱熱厚朴散裡氣伴枳實而消滿豁結也○或人曰此方於小承氣湯方內去大黃加梔子者也小承氣湯治熱實腹中爲滿之方也此方治熱鬱胸中裡氣爲之不利因爲腹滿者大黃梔子共治熱之劑然其所主各々不同學者不可不審也亦通）

梔子厚朴枳實湯方（○方第□□□瀨穆曰方名後人脫枳實二字今從之）

梔子（十四箇擘）厚朴（四兩炙去皮）枳實（四兩水浸炙令黃）

右三味以水三升半煮取一升半去滓分二服

【二百六】傷寒醫以丸藥大下之（凡傷寒有熱者雖有可下證不可以丸藥下之宜以湯藥下之例云有熱者當以湯下之醫反以丸藥下之非其治也可以見矣而醫以丸藥大下之此非其治故身熱不去更加煩也然比不可下證而以湯藥誤下之則以丸藥下之害少也何也以丸之力緩而不若湯故也）身熱不去（此證本有熱雖以丸藥大下之其熱不去故曰身熱不去）微煩者（以丸藥下之其害不劇故煩亦微也雖微於因下而虛熱鬱于胸中者也而更

氣亦迫于心也）梔子乾姜湯主之（其煩微而無心中結痛及懊憹等證故去香豉加乾姜以解鬱熱以復氣虛也）

梔子乾姜湯方（○方第）

梔子（十四箇擘）乾姜（二兩）

右二味以水三升半煮取一升半去滓分二服

【二百七】凡用梔子湯病人舊微溏者（溏淖也言大便濡甚也）不可與服之（言病人平素大便不堅微溏者則內有水寒也故凡用梔子之湯不問梔子豉湯梔子甘草豉湯梔子生姜豉湯梔子厚朴湯梔子乾姜湯不可妄與之以梔子寒藥恐致胃寒下利也）

自愈候

【二百八】凡病（廣該三陽諸證言之）若發汗若吐若下（三若字當作或字看）若亡血亡津液（若字當作倘字看○亡血亡津液上文汗吐下之所致然則發汗吐下謂其所自也亡血亡津液謂其成也如用麻黃湯致衂用抵當湯桃核承氣類以下血所謂亡血也如下條大下後復發汗致小便不利所謂亡津液也）陰陽自和者必自愈（陰陽指表裡言之也言既有其病而施其治雖則或有致一時之虛者然以表裡既和之故不必俟補而其虛自復也兩自字當加意玩味焉）

【二百九】大下之後復發汗小便不利者亡津液故也（大下之後復發其汗重亡津液小便當少以水液內竭故也）勿治之（勿者峻禁之辭禁拘小便不利而用通利劑以治之也陽明篇云陽明病汗出多而渴者不可與猪苓湯宜與此條參考）必自愈（須俟津液回而小便利必自愈矣）

難治

△傷寒吐下復發汗虛煩脈甚微眩冒經脈動惕者久而成痿（如委棄而不爲我用之意○此證其未成痿者眞武湯主之至其久而成痿則爲難治矣）此證總因汗出過多大傷津液而成當用補氣補血益筋壯骨之藥經年始可愈也）

病者脇下素有痞連在臍傍（是其平素所有俗謂痞積者是也）痛引小腹入陰筋者（是其觸事發動成者）此名藏結死（所以名之藏結者以其藏氣爲之結塞不通也蓋此證與厥陰篇所謂冷結在膀胱小腹滿痛者頗相類宜急灸關元飲以

附子湯輩上也)

大病差後諸證篇第九

陰陽易

【二百十】傷寒陰陽易之爲レ病其人身體重少氣少腹裡急或引二陰中一拘攣熱上衝レ胸頭重不レ欲レ擧眼中生レ花膝脛拘急者燒褌散主レ之

燒褌散方(〇方第)

婦人中褌近レ隱處取燒作レ灰

右一味水服二方寸匕一日三服小便卽利陰頭微腫此爲レ愈矣婦人病取二男子褌一燒服

勞復差後

【二百十一】大病差後勞復者枳實梔子湯主レ之

枳實梔子湯方(〇方第)

枳實(三枚炙) 梔子(十四箇擘)豉(一升綿裹)

右三味以二清漿水七升一空煮取二四升一內二枳實梔子一煮取二二升一下レ豉更煮五六沸去レ滓溫分再服覆令二微似汗一若有二宿食一者內二大黃一如二博碁子一五六枚服レ之愈

【二百十二】大病差後(此四字本作二少陰病得レ之二三日以上一在二于少陰篇一今從二宗俊父說一改入二于此篇二)心中煩不レ得レ眠者黃連阿膠湯主レ之(此梔子豉湯證之輕者大病差後胸中有二餘熱一而煩也惟病後血液未レ充不レ可三徒解二其熱一故以二芍藥雞子黃阿膠三物一復二其血液一芩連以治二胸中熱煩一也〇肘後方時氣病起勞復篇云大病差後虛煩不レ得レ眠眼中痛疼懊憹黃連四兩芍藥二兩黃芩一兩阿膠三小挺水六升煮取二三升一分三服亦可レ內二鷄子黃二枚一〇宗俊父之說蓋本レ此)

黃連阿膠湯方(〇方第)

黃連(四兩) 黃芩(二兩) 芍藥(二兩)雞子黃(二枚) 阿膠(三兩一云三挺)

右五味以二水六升一先煮二三物一取二二升一去レ滓內レ膠烊盡小冷內二鷄子黃一攪令二相得一溫服二七合一日三服

【二百十三】傷寒差以後更發熱者小柴胡湯主レ之脈浮者以レ汗解レ之脈沈實者以レ下解レ之

【二百十四】大病差後從レ腰以下有二水氣一者牡蠣澤瀉散主レ之

牡蠣澤瀉散方(〇方第)

牡蠣(熬) 蜀漆(煖水洗去腥) 葶藶子(熬) 商陸

根（熬）括樓根　海藻（洗去鹹）澤瀉（各等分）
右七味異擣下篩爲レ散更於ニ臼中一治レ之白飲和服ニ
方寸匕一日三服小便利止ニ後服一
【二百十五】大病差後喜唾久不ニ了々一者胃上有レ寒當下
以ニ丸藥一溫上之宜ニ理中丸一
理中丸方（〇方第）
人參　白朮　乾姜　甘草（炙各三兩）
右四味擣篩蜜和爲レ丸如ニ雞子黃許大一以ニ沸湯數合
一和ニ一丸一研碎溫服レ之日三服夜二服
【二百十六】傷寒解後虛羸少氣々逆欲レ吐者竹葉石膏
湯主レ之
竹葉石膏湯方（〇方第）
竹葉（二把）石膏（一斤）粳米（半升）人參（三
兩　或作二兩）
半夏（半升洗）麥門冬（一升去心）甘草（二兩炙）
右七味以ニ水一斗一煮取ニ六升一去レ滓內ニ粳米一煮レ米
熟湯成去レ米溫服ニ一升一日三服
【二百十七】病人脈已解而日暮微煩以ニ病新差人強與レ
穀脾胃氣尚弱不レ能レ消レ穀故令ニ微煩一損レ穀則愈
【二百十八】病後勞復發熱者麥門冬湯主レ之

麥門冬湯方（〇方第）
麥門冬（七斤）半夏（一升）人參（二兩）粳米（三
合）
大棗（十二枚）甘草（二兩炙）
右六味以ニ水一斗六升一煮取ニ六升一溫服ニ一升一日三
服夜一服
太陽病（所レ謂脈浮頭項強痛汗出等）發熱而渴不ニ惡寒
一者名（從ニ宗俊父說一補レ之）爲ニ溫病一（此論ニ太陽病
表虛表實之外別有ニ一種溫病者一使ニ之不ニ混也素問
陰陽應象大論云冬傷ニ於寒一春必病レ溫靈樞論疾診尺
篇云冬傷ニ於寒一春生ニ癉熱一又金匱眞言論云夫精者
身之本也故冬藏ニ於精一者春不レ病レ溫合ニ三篇一觀レ
之則病レ溫者因レ傷ニ於寒一而傷ニ於寒一者因レ不レ藏レ
精也名ニ其溫病一者以下寒毒留ニ連於內一至ニ於春溫之
時一發動作上病也蓋得ニ之漸ニ漬於涸陰冱寒之中一而
不三自覺ニ其被レ襲者也非ニ一朝一夕之故一也故其發
也亦復有レ漸矣非下夫傷寒中風得ニ諸一時之虛一者之
比上也是以唯熱而不ニ惡寒一又所ニ以稱ニ癉熱一也癉之
爲レ言單也但熱而無ニ惡寒一之謂觀ニ癉瘧消癉脾癉之
類一而可レ見也病源候論曰冬時嚴寒人有レ觸ニ冒スルコト之一

寒氣入肌至春得暖氣而發則頭痛壯熱謂之溫病今仲景氏冠之以太陽病者一以其發動之初言之一以其頭項強痛言之以別夫陽明病之必自惡寒發熱而來者也）

右在第五章之次

凡服桂枝湯吐者其後必吐膿血也（言凡病桂枝湯之症而服之吐而不受者裡內有鬱熱故也桂枝湯甘湯之劑也若強服之則內熱與桂枝之溫相搏而必吐膿血也與下膿血其義相近俱裡內有鬱熱之候唯有上下之分是爲異耳當照厥陰篇清膿血而考焉）若酒客病（言平素好飲之人雖有可用桂枝湯之證）不可與桂枝湯得之則嘔（大抵酒客如此而未必然也且方有桂枝之證也何避之亦桂枝湯之例也）以酒客不喜甘故也（宜減去甘棗二物以投之）喘家（言平素有喘之人也）作桂枝湯加厚朴杏子佳（喘家若患中風桂枝證則必發喘似麻黃湯證然其喘則平素之所疾而其邪則爲桂枝證故桂枝湯中加厚朴杏子兼制其喘也佳者僅可之辭是亦非正證救一時之急耳故不言枝々加厚朴杏仁湯主之而言加厚朴杏子佳矣

右在第七章之次

傷寒四五日腹中若轉氣下趣小腹者（謂腹中雷鳴也）此欲自利也（此乃心下有水漬入腸中以作利之兆「蓋承厥而心下悸之條發之也」但語有腹鳴者必下蓋喩之於事之必有前兆而言乃此條之意金匱云腹中寒氣雷鳴切痛附子粳米湯主之此條證亦宜用粳米湯生姜瀉心證曰脇下有水腹中雷鳴下利同是有水而雷鳴也雖然證則有痛不痛之別也故彼湯不可用）

太陽病小便不利者（本無不字蓋脫也病源傷寒悸候引此文作小便不利今據之從宗俊父說補之）以飲水多必心下悸（小柴胡條云心下悸小便不利眞武條云心下悸頭眩又云有水氣茯苓甘草湯條云厥而心下悸宜先治水金匱云食少飲多水停心下甚者則悸合而考之飲水多而悸者以水停心下小便不利也）小便少者必苦裡急也（小便少乃不利之甚者膀胱爲之塡滿故苦小腹裡急也裡急謂腹裏拘急也蓋茯苓甘草湯證也○此章辨凡小便不利之由也亦可謂停飲諸條之總章

矣）

右二章在第十九章之次

太陽病發熱汗出「復」惡寒（此太陽中風也）不嘔（爲其裡未受邪也）但心下痞者此以醫下之也（如是者當先與桂枝以解表々解已而後與大黃々連瀉心湯以治其痞例見壞病篇第）若不下其人復不惡寒而渴者宜五苓散（言太陽病發熱汗出則當惡寒而反不惡寒而渴小便不利其人雖不經誤下心下痞小便不利者此爲表邪挾停飲津液不行也與五苓散發汗散水則愈倘與第二十條及第百九十九條參考以可知矣唯百九十九條則經下之故心下痞此則不經下而痞之異已雖然其至爲水飲內畜津液不行者則一也○此章差誤多加以叔和攙入之文故雖宗俊父之具眼爲有闕文不作解今就玉函之文正而删攙入之文解之其詳悉于餘論焉○再按此條似二十條之注文全文出叔和者明也參考五苓散諸章可知其無用長物矣○此證雖不言小便不利以其用五苓散與渴知之○右在第廿三條之次）

咽喉（言咽喉則口舌在其中也）乾燥者不可發汗（津液不足卽心腎血精之虛也雖有可汗之證汗之則津液益枯有上文之變證故戒人矣○口舌咽喉之乾燥有白虎加人參大承氣大陷胸五苓已椒藶黃丸溫經小建中桔梗湯白散證等但五苓散渴而口燥煩小便不利者徵用發汗已然不言咽喉乾燥則其爲輕證可知矣）

淋家（謂平時患淋之人）不可發汗發汗則便血（淋之爲病也小便淋瀝不能快利者非癃也其因在精道之失常也精道乃動靜二血脈之支別起於腎臟下行入于精囊動靜二血脈乃一身來往之血道矣精道則當交接之時受彼動血二脈之血傳到精囊始化成精而寫出者也非腎臟所藏物也故淋家發汗則精道失守精囊曠職遺夫動血二脈之血妄動妄行所以溺血其理於是乎明矣○動血二脈之詳載在於解體新書中矣）

瘡家（謂平素患瘡之人蓋非謂疥癬之疾指大膿大血癰疽潰瘍楊梅結毒痘疹馬刀俠癭之屬也）雖身疼痛（傷寒之表證也）不可發汗汗出則痙（言瘡家氣虛血少營衞衰薄雖或有傷寒身體疼痛

等表證亦愼不可輕發其汗若悞發其汗則變逆而爲痓矣)

衄家(謂平素患衄血之人非傷寒後如前條之衄也○衄鼻出血也)不可發汗々出必額上陷(額上非卽額也額骨堅硬豈得卽陷蓋額以上之顖門也○外臺作額上脈急而緊無陷字一說云是頗似妥怙焉顖門之說恐未必是也)脈急緊直視不能眴(目自動也與瞤通)不得眠(○平素善衄之人頭中之陽已屬不足故發其汗則頭中之陽大虛生變逆如是矣乾姜附子湯蓋可以僥倖萬一也)

亡血家(如嘔血下血崩漏産後金瘡破傷風類是也○亡者失也非滅也)不可發汗發汗則寒慄而振(靈樞云奪血者無汗奪汗者無血亡血發汗則陰陽俱虛故寒慄而振々○寒慄而振乃乾姜附子湯之證矣)

汗家(謂平素好汗出之人也)重發汗必恍惚(心神搖蕩而不能自持也○一說言不分明亦通焉)心亂(心虛意亂而不得自主也)小便已陰疼與禹餘糧丸(方本闕○一說曰卽赤石脂禹餘糧湯耳意在收濇小便以養心氣氣足而血生矣且有鎭安心神之義也是否質之高明如理中湯可以製丸也○又一說曰可行桂枝加附子湯)

病人有寒(言腸胃虛寒而外見表證大陰篇所謂自利不渴者屬太陰以其藏有寒故也當溫之宜服四逆輩是也)復發汗(復與覆古字通用反也蓋言誤也)胃中冷必吐蚘(言病人素有虛寒證反發其汗則陽氣愈微胃中冷甚蚘不得安走上焦陽分從胃脘出口也○一說宜理中湯送烏梅丸可也金書引活人書曰先服理中丸次服烏梅丸○又一說曰理中湯或附子理中湯證也)

太陽病十日以去(以已通用以去猶以往也凡言日數者擧大概而明病之正變也曰一二三日者表證也曰四五日者表裡證混出也曰五六日者裡證也曰六七日者裡證而有內實之證也曰八九日者內實而裡證未解也曰十餘日者內實也是其正證而其變不可窮急者五六日而見八九日之證六七日而見十餘日之證緩者八九日而表證不解十餘日而表證仍在以有此緩急之變擧日數大概示其正變也不可深泥焉提以上七字以辨其已

解者與傳及於少陽者也）其脈浮細而嗜臥者（細者脈無方幅也嗜臥者好平臥也脈無幅則筋脈弛肢體乃惰怠因好平臥此非病變也）外已解也（言太陽病十日以往發汗後脈細而嗜臥他無所苦者此外邪已解不須藥而可也少陰篇云少陰之爲病脈微細但欲寐也與此條稍似而大異也彼在於發病之始而言此在於十日以後而言彼脈微細而此浮細彼欲寐而此嗜臥自有差別不可混也○外者對內之辭於內指之則表裏俱言之外此證所謂外也者即指太陽少陽之部位而言之何者本文明言十日以去則已經太陽少陽之部位而陽明內實之時可知矣表裏內外說者混爲一者非也各有所指豈徒異其辭乎）設胸滿脇痛者（設者虛假之辭猶若言前證而若胸滿脇痛者是雖表邪已解微邪仍傳及於少陽部位也故與小柴胡湯然非小柴胡湯之正候具備者故云與而不云主之凡云與者與而觀其後變有轉方之道也此證亦復爾）與小柴胡湯

右八章在第廿六條之次

傷寒中風（指太陽之傷寒中風言凡論中傷寒中風兼擧者皆然）有柴胡證但見一證便是也不必悉具（言凡柴胡湯正證中往來寒熱一證也胸脇苦滿一證也默々不欲飮食一證也心煩喜嘔一證也病人於此四證中但見一證者當先服柴胡湯也不必須其他悉具矣徵之論中亦復爾有但認胸滿脇痛而施者有但認胸脇滿不去而施者有但認脇下堅滿不大便而嘔而施者有但認嘔而發熱而施者有但認寒熱如瘧而施者可以見矣

少陽中風（二字係外邪總證非傷寒中風之中風也）兩耳無所聞目赤（熱攻上焦也乃少陽兼證猶小柴胡條或以下諸證也）胸中滿而煩者不可吐下吐下則悸而驚（○此證宜小柴胡湯以和解之不可吐下若誤吐下則有變證若斯者若吐下後悸而驚者乃賁豚之漸宜與茯苓桂枝甘草大棗湯輩以輯穩焉

右在第三十三條之次

服柴胡湯已（畢也）渴者屬陽明也（少陽々明之病機在嘔渴中分渴則轉屬陽明嘔則在少陽如嘔多雖有陽明證不可攻之因病未離少陽也服柴胡湯渴當止若服柴胡湯已加渴

者是熱入二胃府一耗レ津消レ水此屬二陽明胃府一也)以レ
法治レ之(凡論中治レ渴方種々不レ同宜下求二其全證一以與中主方上而其屬二陽明一者專在二白虎加人參湯一也
若其頭汗出身無レ汗小便不利而渴者此爲二陽明發黃
之機一乃茵蔯蒿湯證也可レ見以レ法治レ之一語自有二
深意一存焉)

右在二第四十七條之次一

二陽(太陽與二陽明一也)併病太陽證罷但發二潮熱一手
足漐々汗出大便難而讝語者下レ之則愈宜二大承氣
湯一(此俟二其表之已除一而後攻二其裡一者也)

右在二第六十七條之次一

結胸者項亦強(結胸證心下堅滿而甚則背反張如二痓ノ
狀一項亦强故曰レ亦也)如二柔痓狀一(金匱曰剛痓爲レ
病胸滿口禁臥不レ著レ席脚攣急必齘齒可レ與二大承氣
湯一由レ之考レ之本節柔當レ作レ剛)下レ之則和宜二大
陷胸丸一(○凡結胸有レ熱者宜レ用二大陷胸湯一下レ之
其無レ熱者宜下用二大陷胸丸一下上レ之□□□云過經讝
語者以レ有レ熱也當二以レ湯下レ之而醫以二丸藥一下レ之
非二其治一也可レ見下丸方本爲二無レ熱者一而設上矣)大
陷胸丸方即以二大陷胸湯一爲レ丸者也

結胸證其脈浮大者(凡脈大者皆邪熱熾盛之診兼レ浮
爲二表實一兼レ沈多二裡實一如二白虎加人參湯一其脈洪
大可レ見矣若浮而無レ力者即是芤脈爲二虛實之候一
不レ可二與レ大混一也)不レ可レ下下レ之則死(結胸之病
不レ可レ不レ下但其脈浮大是尙在レ表知熱結未レ實故
不レ可レ下宜下與二小陷胸湯一以和中解之上若誤下レ之
未レ盡之表邪復乘レ虛入レ裡誤而又誤結而又結病熱
彌深正氣愈虛則死)

結胸證悉具(表證皆去而脈不二浮大一心下堅滿而痛其
脈沈緊者是也)煩躁者亦死(結胸原是非二輕證一加
以二煩躁一不死何俟(○)亦字承二前章下レ之則死一而言レ
之)

右在二第百八十八條之次一

以上前稿取レ之而後稿不レ取者記二于此一以存二鷄肋一

○第三十章

傷寒五六日(此條擧下初太陽證之時已發汗後至二于柴
胡之地位一而復下レ之血液爲レ之涸竭雖レ有二結胸之
機一不二結胸一其證唯與二結胸一相類而其實不レ同者上
而以明二其治法一也(○)凡擧二日數一者不レ過レ擧二其病
所レ在之地位一故凡讀二仲景之書一者苟得二其病所レ在

之地位一則不三必拘二病所ㇾ在之地位一在三先知二其藥方之地位何如一也又在下診二其脈證一以知中其淺深上也故苟知二其病所ㇾ在之地位一則於二其日數一是筌蹄之於二魚兎一也獲二魚兎一而忘二筌蹄一得二病之地位一而忘二其日數一是爲ㇾ得二診ㇾ病之道一也其要在二學者之意悟一之也）已發汗（云ㇾ已則不ㇾ至二于傷寒五六日小柴胡之地位一之前已發汗之義也非二小柴胡之地位而發汗之義一也）而復下ㇾ之（不ㇾ至二于小柴胡之地位一之前已發汗而至二于小柴胡之地位一而復下ㇾ之下義也而字以可ㇾ見矣此不ㇾ可ㇾ下之時而下ㇾ之是以爲此類結胸之證也）胸脇滿微結（胸脇滿者即柴胡證胸脇苦滿而稍輕也以ㇾ不ㇾ云ㇾ苦可ㇾ知矣微結者謂三微結二於心下一也先云二胸脇滿一而次云二微結一者先見二胸脇滿一而稍見二微結一或以二胸脇滿一爲二主證一而微結爲二傍證一也是明ㇾ非二結胸證一也而冠二微字一者則比下柴桂湯證之支結之支二引左右一而易ㇾ診則其結在二于腹底一而以按ㇾ之容易難ㇾ得ㇾ言ㇾ之也故以下微結上有二心下二字一之意上可ㇾ見矣而此證胸腹必有ㇾ動而其動多在二于左邊一矣）小便不利渴而不ㇾ嘔（非二邪熱之使一然也蓋因三汗下迥二竭津液一而爲二此證一也耳括樓主之不ㇾ嘔者無二留飮一之徵也所三以無二半夏一也）但頭汗出（所謂劑頸還齊所ㇾ無ㇾ汗是也因「水氣」外襲而氣急上攻爲二此證一也蓋不二結胸一之候也）往來寒熱（此證與二胸脇滿一外襲之證如ㇾ說二于小柴胡湯之本章一矣）心煩者（此證之雖ㇾ非二主證一外襲則氣逆而心煩也甘草主ㇾ之）此爲ㇾ未ㇾ解也（在二以上之證一則此邪仍在二于少陽部位一而未ㇾ解之候也）

柴胡桂枝乾姜湯主ㇾ之（此方無二逐水之藥一非二大小柴胡之類一以ㇾ證可ㇾ考）

〇第四十三章

傷寒十餘日（本作二十三日一今從二宗俊父說一改ㇾ之）不ㇾ解胸脇滿而嘔日晡所發二潮熱（熱也發也必有ㇾ時矣猶二潮汐之來去以ㇾ時也所二以名曰一潮也蓋此裏實之候所三以用二芒消一也）而微利此本柴胡證而不ㇾ得ㇾ利今反利者知醫以二丸藥一下ㇾ之非二其治一也潮熱者實也柴胡加芒消湯主ㇾ之（〇言傷寒十餘日不ㇾ解胸脇苦悶而嘔且日晡所發二潮熱一者是少陽病之帶二陽明一者乃大柴胡之所ㇾ主也於ㇾ法當ㇾ不三下利二而今反下利者知先二此時一醫以二丸藥一迅下ㇾ之非二其治一

也迅下則水雖去而燥屎不去故凡內有燥屎而發身熱者非湯藥下之則不解今反下之用丸藥所以其熱不解徒動藏府而致微利也恐醫以下後之利為虛寒自利之病故復指之曰潮熱者實也是亦可再以湯下之也○此證不用大柴胡者因其先經丸藥攻下而續自微利也故唯加芒消潤燥以取利是又下中兼和之意也○陽明篇云陽明病發潮熱大便溏小便自可胸脇滿不去者小柴胡湯主之其證全與本條同但此則由攻下而致微利彼則不由攻下而自溏故芒消猶有所畏況大黃乎是以雖有潮熱不敢以攻之也）

○第八十六章

傷寒十餘日（本作十三日今從宗俊父說改之）不解過經譫語者（陽明胃熱之候也）以有熱也當以湯下之（言傷寒十餘日不解表證已罷而譫語者此以熱邪也以湯下之此其治法也蓋對下文以丸藥下之非其治也之文而言之也○湯指調胃承氣而言之猶言當以調胃承氣下之也）若小便利者大便當堅（小便不利則其水走胃而有下利者今小便利則無下利之由故云大便當堅也○小便利者大便當堅之言難以為徵或有脫文乎）而反下利脈調和者（譫語是實熱之候則大便當堅而今下利故云反也譫語雖實熱之候而反下利故有疑于虛寒之下利譫語矣是以徵諸脈亦與譫語實熱之候相調和而不反蓋調和二字一以脈證不相乖言之一對微厥而言之其實當沈而數滑也非云平人無病之調和也又見□□□條）知醫以丸藥下之非其治也（脈與譫語不相反與下利之證相反則此下利非虛寒之下利他醫以丸藥下之後續下利者也耳夫實熱之證而譫語者當以湯下之而反以丸藥下之故云非其治也）若自下利者脈當微厥今反和者此為內實也（若虛寒之證而自利者其脈當微厥而今反與譫語實熱之候相調和之脈則此非內虛有寒而所致之下利雖內則實乎因以丸藥下之々下利也○脈微厥即脈調和之反也微微少之微非脈狀也厥缺也缺盡之義對調和而言之也○初稿本厥作結注云結字諸本作厥今從宗俊父說改之謂微弱而結代也）調胃承氣湯主之（此章所說因此調胃承氣湯之證而雖醫以丸藥下

之其熱不レ解不二啻不一レ解更加二續テ下利之證一而調承之證仍依然故以二調胃承氣湯一主レ之也）

○第九十五章

太陽病不レ解熱結二膀胱（邪氣鬱二結於下焦膀胱部分一之謂下文所レ謂小腹急結便其外候已非下直指二膀胱一府一言上之也抵當湯證所レ謂其人發狂者以熱在二下焦一小腹當二堅滿一下血乃愈者可二以相徵一也蓋不レ言二血室一而言二膀胱一其專爲二男子一設明矣）其人如レ狂（凡邪氣鬱二於頭中一則致頭痛項強衄血鬱二於胸中一則致二胸悶心煩嘔吐一結二於胃中一則大便不レ通穢氣上而乘レ心令二人如一レ狂結二於下焦一亦爲二如レ此之證一矣）血自下（不レ言二小便一者以レ有二此三字一也然下文小腹急結處包二小便自利句一焉）下者愈其外不レ解者尚未レ可レ攻當三先解二其外一（宜桂枝湯）外解已但少腹急結者（有形之血苛積也抵當湯條所レ謂堅滿即是耳○上文言三熱結二膀胱一而不レ言二小腹急結一下文言二小腹急結一而不レ言三熱結二膀胱一本論錯綜之妙如レ是）乃可レ攻レ之宜二桃核承氣湯一（○言太陽病雖レ行二發汗之法一其病尚不レ解小腹急痛其人如レ狂此邪氣結二下焦膀胱地位一血氣爲レ此不レ行停而爲レ瘀是以瘀氣上而乘レ心令二人如一レ狂雖二則如一レ狂血自下者不レ須レ藥而愈以二血下則邪熱隨レ血而解一也如下□□□條云二自衄者愈一□□□條云中婦人經水適來云々必自愈上皆是也若血不レ下者當下以二桃核承氣湯一攻上之雖レ然其人外證不レ解猶有二惡寒頭痛脈浮等候一者不レ可二妄下一レ之當先與二桂枝湯一以解二其外一外已解而但少腹急結者乃可レ攻レ之矣）

○第九十六章

太陽病六七日（言下經二攻下一後上何以知レ之以二仍在二字及不結胸四字一知レ之也下篇云病發二於陽一而反下レ之熱入因作二結胸一可レ見結胸必是下後之病矣）表證仍在脈微而沈反不二結胸一其人發狂者以三熱在二下焦一（此下焦本有二積血一之人適病二傷寒一而其熱乘二瘀血一穢氣上而乘レ心令二人發狂一者也雖二丈夫一亦有二積血之疾一第不レ及二婦人最多一已）腹當二堅滿一小便自利者下レ血乃愈抵當湯主レ之

○第五十八章

傷寒脈浮發熱無レ汗其表不レ解者（不レ渴者宜二麻黄湯一渴者宜二五苓散一也）不レ可レ與二白虎湯一渴欲レ飲レ水無二表證一者（謂二惡寒頭身疼痛皆除一也）白

虎加人參湯主レ之（○白虎湯與二白虎加人參湯一均レ之陽明解熱之劑唯於二渴不渴上一而判矣凡陽明病大渴引飮者多汗亡二津液一故也是以必加二之人參一以復二其津液一也若其不二煩渴一者津液不レ虧故無レ取二乎人參一也）

○第五十九章

傷寒無二大熱一口燥渴心煩背微惡寒者（與二次章時々惡風一皆內熱熏蒸汗出肌疎所レ致是以不レ顯二然於全身一而微二於背一不レ常而時々其非二表不レ解之惡風寒一可レ知也亦猶下陽明之腹滿常痛與二太陰之腹滿時痛一之異上也）白虎加人參湯主レ之（傷寒身無二大熱一不レ煩不レ渴口中和背微惡寒附子湯主レ之屬二少陰病一也今傷寒身無二大熱一知熱漸去レ表入レ裡也口燥渴心煩知熱已入二陽明一也雖レ有二背微惡寒一證一似二乎少陰一但少陰證口中和今口燥渴是口中不レ和也背惡寒乃陽明內熱熏二蒸於背一汗出肌疎故微惡レ之也非二陽虛惡寒一主二白虎湯一以直走二陽明一大淸二其熱一加二人參一者有レ意三以顧二肌疎一也）

○第六十章

傷寒若發汗（此三字依二金鑑說一補レ之）若吐若下後七八日不レ解熱結在レ裡表裡俱熱（此八字時々惡風以下證ノ之因也）時々惡風（前條惡寒之下可二參考一矣）大渴舌上乾燥而煩欲レ飮二水數升一者（此傷寒表邪熾盛不下爲二發汗若吐若下ノ一解セ上入レ裡而結者也雖レ然未レ至レ成二胃實一故其熱熏二蒸于表裡一使二人且熱且渴一邪熱結而爲レ實者則無二大渴一也其致二時々惡風一者亦復以レ未レ成二結實ヲ一故也）白虎加人參湯主レ之

○第百三十三章

傷寒脈浮自汗出小便數心煩微惡寒（以上俱似二桂枝證一）脚攣急（裡虛之象只此一證決非二桂枝證一矣凡辨證必於二獨異處一著レ眼）反與二桂枝一欲レ攻二其表一此誤也（言自二脈浮一至二脚攣急一卽少陰病而大靑龍章所謂若脈微弱汗出惡風之大同少異者故脈唯言二浮之似レ表而不レ言二其爲レ緊爲一レ緩證唯言二微惡寒之似レ表而不レ言二發熱頭痛一當レ知其汗出惡寒者乃與二附子瀉心之惡寒汗出者一同爲二陽虛之病一故此證雖レ有二脈浮惡寒之似一レ表者一決不レ可レ攻レ表唯宜下與二姜附扶陽劑以溫上レ之也）得レ之便厥（眞寒也）咽中乾煩躁（假熱也）吐逆者作二乾姜附子湯一（正珍曰本作二甘

草乾姜湯一大非也彼湯治下肺痿多ニ涎唾一者上之方安能挽ニ回陽氣將レ盡者一乎今從レ之）與レ之以復ニ其陽一（其不レ用ニ四逆呉茱萸類一者何桂枝之發徒伐ニ表氣一而裡氣受レ傷不レ深雖レ有ニ吐逆一未レ及ニ下利淸穀之甚一故也耳）若厥愈足温者更作ニ芍藥甘草湯一與レ之其脚卽伸（此湯卽純陰之劑以復ニ其陰一也陰陽兩和而脚伸矣此證始則心煩後則煩燥其爲ニ主證一可レ知矣且嘔家不レ欲レ甜其非ニ四逆所一レ宜亦可レ知矣雖レ然此證而兼ニ下利淸穀一必温以ニ四逆一可也不レ可ニ復泥一レ嘔矣）

○第百七十六章 五カ

傷寒十餘日（此條承ニ大柴胡湯之本章一而辨ニ其似而非者一又承ニ前章一而以明ニ調胃承氣湯之異證一也○）傷寒本作ニ太陽病過經五字一今改レ之說如レ述ニ於大柴胡湯本章一矣）心下温々欲レ吐而胸中痛（欲レ吐而不レ吐因ニ氣逆一而致ニ胸痛一非ニ病在一レ胸而痛者一而字可ニ以考一以上之證此熱實迫ニ于上一之劇也）大便反溏（心下慍々以下此逆滿之證則大便當レ堅而今溏故云レ反也）腹微滿（以下血氣迫ニ于上一之劇上之故腹中之水不レ能ニ消化一而或溏又爲ニ腹滿一也）鬱々微煩者（熱實而氣迫ニ于心一故煩也）與ニ調胃承氣湯一（此條實此調胃承氣湯之正證則不レ可レ云レ與云レ主レ之可也）此非ニ柴胡證一也（柴胡湯者指ニ大柴胡湯一也可レ見單稱ニ柴胡證一者獨非レ云ニ小柴胡湯一也此證欲レ吐而胸中痛鬱々微煩者似ニ于大柴胡湯證之嘔不レ止心下急鬱々微煩一而心下温々大便溏不レ同又欲レ吐而胸中痛大便溏腹微滿者似ニ于汗出不レ解心下痞堅嘔吐而下利而心下慍々鬱々微煩不レ同故辨レ之云非ニ柴胡湯證一也○此章本有ニ後人之攙入數句一而無レ益ニ於治術一之文也故今刪レ之諸家從レ文而注レ文可レ謂レ無ニ活見一矣說於ニ難注一悉レ之也又按此條去ニ攙入之文一則實此金科玉繩也而靜齋東郭以爲レ非ニ正文一而不レ取亦可レ謂ニ過猶レ不レ及者一耳）

以上稿本有兩種而是非難決者集記于簡末以備後孝矣蓋後稿當是定說則如前稿似宜不存也然玉函要論係在病牀之稿而或有同於前稿者則所不能不並採而已

季　玆　記

金匱玉函經解卷之三

痙病篇第十（○圖南先生曰痙病其人素津液乏損血者所中風寒而所成矣邪本與中風傷寒二病無異唯其人津液乏損血之後身體枯燥而傷於風寒則筋脈拘急形體強硬而爲痙也○又曰痙乃太陽中風傷寒之病而其人血液不足不能潤養筋脈者（アツ云者ト所トノ間ニ感於天時之燥氣而所病也ナドノ語ナクテハト、ノハズ）所謂太陽病發汗太多因致痙及瘡家雖身疼痛不可發汗汗出則痙是也（「間亦有其人血液乾燥而感於外邪病者」此ハ千金之説妄也ノ語ニヨツテ加フ）唯其如斯故其爲證必項背強急甚者則反張若夫所謂剛痙乃分虛實之名蓋取諸説卦所謂立天之道曰陰與陽立地之道曰柔與剛之文也表實麻黄湯之證而有頭動搖口噤背反張證謂之剛痙葛根湯主之又云素問至眞要大論云諸痙項強皆屬於濕仲景所論則異焉仲景所論則後世之燥證也千金方及諸注家皆謂太陽中風重感於寒濕則變痙吁果如是則風濕而已豈「令人項背強急者」乎不思之甚）

（千金方云太陽中風重感於寒濕則變痙）

○宗俊父曰千金之説妄甚矣痙亦風寒邪之所爲也而今不爲傷寒中風而爲痙病者何也此其人血津乾燥之處受邪而痙也

アツ云痙ヲ燥證也ト云ハ師道父先達也

アツ云易ノ文ヲ引玉フコト恐クハ附會ニヤアタリ侍ランコハタヾ金鑑ノ説ノ如ク以強有力曰剛痙以強而无力曰柔痙ナドヤウニ穩ニ心得侍ルベキニヤモシソレ此文ヲ引玉ハヾ恐クハ爲後學惡智爲其鑿也博識ヨク附會スナドノソシリヲ受玉フコトヤ侍ハン穴カシコ山田先生ノ靈ヘ）

（アツ云令ヨリ者ニ至ル七字得言痙ノ三字ニ作ルベキニヤ已ニ素問ニ諸痙項強屬濕トアリテ其因異也トイヘドモ亦ヨク令人項背強急シカルヲ豈得言風濕豈令人項背強急者乎トアナカシコ）

太陽病發熱（此表證脈當浮然今反）脈沈而細（正珍曰脈沈當作浮不則少陰病麻黄附子細辛湯同證○按脈沈爲是論曰脈沈爲無血血液乏之故沈而細○程應旄曰脈在太陽更有獨而無同以頭面搖口噤背反張之證合之沈而細之脈則雖有太陽發熱等

證而不致爲傷寒所涸乃可定其名曰痓也)

汗出不惡寒(令惡風言)者名曰柔痓(○此表虛之證圖南先生曰不字於義未穩恐衍當刪去病源作汗出而惡寒無不字一本出下而字是也又曰此則桂枝湯證瀰者蓋自誤治而來○劉棟曰以汗出反不惡寒爲徵○折義曰汗出者邪傷表淺輕故亦不惡寒也想角弓反張亦應徵剛者勁強也「陽也柔者耎弱也「陰也故汗出不惡寒者名曰柔痓無汗惡寒者名曰剛痓猶以無汗有汗分中風傷寒也)

無汗反惡寒者名曰剛痓也(○此表實之證圖南先生曰此則麻黃湯證發瀰者蓋從誤治而來者也○穆曰此以血虛津液少故發熱無汗反惡寒也此惡寒者非傷於寒者惡寒之類猶產後血虛者惡寒之類也血液燥故)

太陽病發汗太多因致痓(○圖南先生曰發汗太多氣血錯亂因而發瀰者也○又曰此條與下文瘡家云々條言痓病之因可見痓是血燥損液而所傷於風寒之所致金鑑以桂枝加附子湯附此條是也○沈目南曰太陽病是當發汗散邪然過汗則傷津液氣血經筋無食筋枯攣縮則爲痓矣○此亦發一例非燥氣而已太陽中風亦大發汗亡津液則致痓○金鑑曰太陽病當發汗若發汗大過腠理大開表氣不固邪氣乘虛而入因成痓者乃內虛所召入也宜以桂枝加附子湯主之固表温經也由此推之凡病出汗過多新產金瘡破傷風出血過多而變生此證者皆其類也)

瘡家雖身疼痛不可發汗(言用麻黃葛根青龍湯等而不可發其汗也然則何劑主之假令其證有身疼痛表實麻黃之證桂枝湯建中湯主之也)汗出則痓(○直解云瘡家則過於亡血雖有身疼表證亦不可發汗若汗之是重虛其陽陽虛必作痓也)

夫風病下之則痓腹發汗必拘急(正珍曰傷寒論無此條可刪○風者指外邪六氣而言其人素津液乏故不大便醫不詳其證誤實熱而下之多亡陽故然)

病身熱足寒頸項強急惡寒時頭熱面赤目赤獨頭面搖卒口噤背反張者痓病也(○虢州曰此一條認痓病之大綱領宜先詳之凡論痓諸條添此數證而看則義自分明矣而獨字以上之證太陽病也獨字以下盡是痓

病之證也○圖南先生曰據此條文考之所謂痙病者後世所謂癇證而不問傷寒與雜病凡治法一失邪氣因而乘心則兼發者破傷風子癇等皆然仲景氏特論太陽病誤治發癇者以立剛柔二證故人不察其眞妄爲風病重感於濕之病又或以爲汗多血虛皆非也若爲誤治虛血之所致猶可直爲血證大非也）

太陽病其證備（劉棟曰指桂枝湯證而言）身體強几几然（拘急之貌）脈反沈遲（圖南先生曰太陽病其脈應浮類今則不然所以稱反也）此爲痙括蔞桂枝湯主之（○虢州曰此證必有自汗惡風之證者也用此湯痙病表證而屬表虛者也裡虛者難用也○折義曰几几然當加葛根今加括蔞者用以潤和其筋脈也○此條證東奧之地多有之此則前之柔痙而屬表虛其人壯實因一時津液之虛燥氣客之而發者也○正珍曰按括蔞桂枝湯當作葛根若夫括蔞桂枝湯決非治痙之方意是喝病首章治方錯亂在此者耳又曰此章比桂枝加葛根湯一等重者也彼則項背几几此則身體几几彼則其脈浮緩此則沈遲輕重自可辨矣○篤胤曰山田先生之說雖似可從熟考之則非矣此證身體強几几然者比之加葛根湯實一等重者也雖然彼則純外邪者此則血液乾燥脈不緊而見沈遲之虛候則自不能無其差別也且夫未至欲作剛痙之劇則葛根豈夫得不過當乎至下章欲作剛痙之劇而始用葛根此尚不得止之權用耳此證以柔痙表虛之證之故主之以桂枝加括蔞潤和其筋脈者實是正當之解也先生又謂次證之用葛根如是危急之證葛根安能得療乎當大承氣吁果如是則至胸滿口噤臥不著席脚攣急齘齒之劇證則以何等之方爲的中哉爲大承氣亦不足乎若夫言本方此喝病首章治方者強解之甚決不可從殊不知彼章其脈以下至齒燥廿五字者此後人之攙入乎先生而有如斯過也者噫豈可不怪乎）

括樓桂枝湯方（○方第）

於桂枝湯方內加括樓根二兩（徐彬論注作三兩○虢州曰一說作五兩是也）

右六味以水九升煑取三升分溫三服取微汗不出食頃啜熱粥發之（太陽之邪○夫仲景之桂枝湯者太陽中風汗出脈浮緩榮衛虛而津液不足者用之

爲主今加以括蔞根者潤其燥邪通津液故也)

太陽病無汗(前證有汗明矣)而小便反少(前證亦當有之)氣上衝胸(表邪甚也)口噤不得語欲作剛痙葛根湯主之(○錢州曰此條文甚簡古太陽傷寒麻黃證小便當自如常而今反小者明此爲燥氣被傷表邪實裡氣不和故氣上衝心胸如此者必欲將痙已發痙則難治將於其未發用葛根湯而治之○葛根湯者風藥中之潤劑故用以潤燥也○秋氏曰夫爲麻黃湯之方也太陽傷寒無汗脈浮緊榮衞邪實而表氣固者用之發之蓋剛痙者以痙病中之爲表實故以麻黃湯發表邪加以葛根者爲潤津液也不用括樓者由其力緩也○圖南先生曰按葛根湯當作大承氣湯蓋前條主治之文誤寫入此葛根湯固是輕劑安能療危急如此之病乎○篤胤曰辨前章下○方見于太陽病篇)

剛痙爲病(本無剛字今據脈經玉函又一本補之)胸滿(今心腹脹滿而言也宗俊父曰卽上章氣上衝胸之劇者是蓋痙之裡證屬陽明者也○直解云氣上冲胸之互文亦通)口噤臥不著席(反張一等劇者也○直解云反張之互詞)脚攣急(卽身體強之變證耳筋乾故也)其人必齘齒(直解云齘切齒也噤之甚者則切也)可與大承氣湯(此條承上文剛痙柔痙桂枝加括樓葛根湯而言其證已深入爲陽明胃實證者也夫痙病之表證者必頭面動搖此證無表證但裡實而已故曰可與大承氣湯○圖南先生曰此證也邪勢暴急卒然內陷者故見云々諸證論云結胸者項亦強如剛痙狀下之則和宜大陷胸丸可見結胸與此證均是內陷之暴邪證狀亦相似矣故急下之以和焉所異者因彼則有水此則無水已是均同用下法而方不同之故也古今注家多疑此條者皆因傷寒論云○方見于陽明病篇○喩昌曰仲景之用此方其說甚長乃死裡求生之法也云々可與二字甚治臨證酌而用之初非定法也云々學者欲爲深造端在斯矣)

濕病篇第十一(○濕乃山嵐瘴氣雨濕氣霧露氣卑濕氣皆是也但濕不能獨傷人必也隨風寒之氣然後敢中之故有寒濕風濕之稱其謂之風濕者以汗出惡風故也猶中風傷寒之義○李茲曰此注本在傷寒論桂枝附子湯條今取入于此看者勿訝焉)

太陽病關節疼痛而煩(煩熱也)脈沈而細(一本玉函脈

徑千金翼幷作レ綏圖南先生曰似レ是）者此名二中濕一中濕之候（二中濕本作二濕痺一今據二玉函脈經千金翼一改レ之○程應旄曰痺之爲レ言著也濕流二關節一著而不レ行又云蓋周身陽氣總被二陰濕一所レ遏一利二其小便一使二濕邪有一レ所レ去而陽氣自得二疏通一固與二風寒表治迥別也）小便不利（濕止不レ流）大便反快但當レ利二其小便一（伏令甘草湯令桂朮甘湯）（宗俊父曰此證有レ汗者桂枝湯加朮無レ汗者麻黃湯加朮若渴者五苓散蓋朮能利二小便一也○此證之病足脛煩痛酸疼者熱有中濕之候者陽分髀外酸疼者荊防敗毒散加黃芩主レ之陰分內側「アッ云○點九字不レ可レ讀」「アッ云內側下加煩痛二字義明矣」者除濕湯主レ之最有レ驗○喩昌曰濕上甚爲レ熱其人小便必不レ利蓋膀胱之氣化爲二濕熱一所レ壅而以不レ行也經云治レ濕不レ利二小便一非二其治一也可レ見治二上甚之濕熱一利二小便一卽爲二第二義一矣然有二陽實陽虛二候一陽實者小便色赤而痛利二其小便一則上焦遏鬱之陽氣通二其濕熱一自下注而出矣陽虛者小便色白不レ時淋滴而多汗一切利二小便一之藥卽不レ得レ施若誤施レ之卽犯二虛レ々之戒一不レ可レ不レ辨也）

濕家之爲レ病（篤胤曰猶レ言二病レ濕人之病狀者一家字與二喘家嘔家之家一稍異）一身盡疼（比二于關節疼痛一則甚○盡疼一作二疼煩一）發熱身色如二熏黃一也（圖南先生曰此梔子蘗皮湯之證也而此證中濕之病而瘀熱不レ得レ越而發レ黃者乃濕病中之兼證也蓋此條叔和所レ補注家不レ知以二發黃一爲二濕病正候一非也）

濕家其人但頭汗出背強（濕邪著二于脊背一故也蓋桂枝加朮附陽證）欲レ得二被覆一「向火」（千金翼無是也○裡氣不足故惡寒甚也（金鑑曰乃一時濕盛生レ寒非レ如二傷寒之惡寒一也）若下レ之則噦（篤胤曰此五字亦係二于下證丹田有レ熱胸上有レ寒證一而言レ之仲景氏之文法乃爾諸先達未レ達二此旨一多爲二蠶々附會之說一皆不レ可レ從焉）或胸滿小便不利舌上如レ胎者（或字傷寒論ナシ）（程氏曰此證舌上不レ應レ有レ胎然而有二如レ胎者則以三陽熱被レ下盡陷二入丹田之下焦一而胸上唯有二寒濁之氣一鬱蒸而結成非二熱胎一也故曰レ如レ胎也）以二丹田有レ寒胸上一（論作中）（○アッ云上トイヘハソノホトリト云程ノコト中トイヘバ定ル處アリ我ハ上ニツカン蓋中焦ヲ兼テ言ナリ）有レ熱（本作二丹田有熱胸上有寒一今從二金鑑一○虢州曰黃

連湯主之此治胸上有熱丹田有寒之劑也下利不食烏梅丸嘔吐下利稠粘者乾姜黃連黃芩人參湯主之○汪珍曰此文義錯亂不可強解姑存疑焉渴欲得飲而不能飲(傷寒論作水)則口燥也(篤胤曰以字以下明胸滿小便不利者上如胎者之因也著下之則亦噦以益寒上中二焦也○燥下本有煩字今從脈經千金翼之無之)

濕家下之額上汗出微喘(中焦傷虛陽將盡之候)小便不利者(下焦傷)死若下利不止者(此三焦之傷安免死乎)亦死(○沈明宗曰誤以峻劑下之徒傷脾腎之氣陽從上脫則額上汗出而喘陰從下脫則二便滑利不止故皆主死○李瑋西曰前云濕家當利小便以濕氣內瘀小便原自不利宜用藥利之此下後裡虛小便自利液脫而死不可一例概也「此說非也」)

風濕相搏(搏與薄借音通用逼迫也凡濕之傷人必與風寒之氣相逼迫而後中之是以謂之風濕相搏也)一身盡疼痛(表虛桂枝加朮湯表實麻黃加朮湯虢州曰宜小劑與之)法當汗出而解汗之病不愈者何也(篤云自問自答)汗大出者但風氣去濕氣在是故不愈也微似汗出者風濕俱去也(○徐彬曰風性急遽當驅濕性滯當漸解汗多出則驟風去而濕不去故不愈若發之微則出之緩々則風濕俱去矣○篤胤曰此章雖屬後人之攙入也然有益於治病故今省迂遠之文採用)

病人喘頭痛鼻塞而煩其脈大(此濕氣殘者也故濕家脈當沈細爲濕氣內流「アッ」云爲以下五字文義不相屬今脈大者此陽也則濕不流內而外有表也在頭中者桂枝麻黃各半加朮湯主之尤宜小劑此條成氏解爲是○金鑑曰濕家外證身痛甚者羌活勝濕湯內證發黃甚者因陳五苓散喘甚大云々)自能飲食腹中和無病病在頭中寒濕(虢州曰當作風濕)故鼻塞內藥鼻中則愈(令嚏而以宣泄頭中濕邪此亦治濕之一法○虢州曰通關散○喩昌曰以鼻竅爲腦之門戶故即從鼻中行其宜利之法乃最神最捷之法也重著身熱足寒時頭熱面赤目赤皆濕上甚爲熱之明徵○金鑑曰所納之藥如瓜蒂散之類)

濕家身煩疼可與麻黃加朮湯發其汗爲宜愼不可以火攻之(發字以下十二字アッハケヅル)(津液燥則必發痙○虢州曰身煩疼者當有無汗而

惡寒ニ脈沈細有レ力此爲ニ表實一此主レ之若惡風有レ汗者宜ニ桂枝加朮湯一○仲景氏方中無ニ桂枝加朮湯一內藤氏對ニ麻黃加朮湯一而桂枝湯中加レ朮以治ニ此證表虛一○按此寒濕之證而寒鬱表陽生熱而後熱濕兩停）

麻黃加朮湯方（○方第百）

於ニ麻黃湯方內一加ニ朮四兩一（○卽君藥也）

右五味以ニ水九升一先煮ニ麻黃一減ニ二升一去ニ上沫一內ニ諸藥一煮取ニ二升半一去レ滓溫服八合覆取微以汗

（○喩昌曰此治熱濕兩停表裡兼治之方也身煩者熱也身疼者濕也云々傷寒矢汗而發黃用ニ麻黃連翹小豆湯一分ニ解濕熱一亦是此意）

病者一身盡疼發熱日晡所レ劇者名ニ此風濕一（○金鑑曰濕家一身盡痛風濕亦一身盡痛然濕家痛則重著不レ能ニ轉側一風濕痛則輕掣不レ可ニ屈伸一此痛之有レ別者也濕家發熱蚤暮不レ分ニ微甚一風濕之熱日晡所必劇蓋以濕無ニ來去一而風有ニ休作一故名ニ風濕一也○秋氏云此條今世多有レ之日晡所者陽盡移于陰之時濕邪屬陰故日晡濕邪旺劇也世醫與ニ人參養胃湯八解散柴苓湯之屬一此證亦有下陽虛而無ニ濕邪一者上桂枝加附子湯之證也）

風濕脈浮（浮者風脈汗出必來然不レ數而兼レ之以ニ或緩或細一（○ケヅルベシ）身重（濕邪之的證）汗出（表虛也）惡風者（不ニ惡寒一此風濕之候○趙良曰風濕在ニ皮毛之表一故不レ作レ疼）桂枝加朮湯主レ之

桂枝加朮湯方（○新立方）（アツガワザ也）

於ニ桂枝湯方內一加ニ朮四兩一（○分量效ニ麻黃加朮湯之例ニ）

右以ニ水七升微火一煮取ニ三升一去レ滓適寒溫服一升將息如ニ桂枝法一（○煎法亦倣ニ麻黃加朮湯例一取ニ本方桂枝湯之煎法ニ）

風濕相搏身體疼煩（脈經作痛）不レ能ニ自轉側一（與ニ脈浮虛而濇一是濕邪在レ經之候也）不レ嘔不レ渴（二句言ニ裡無ニ邪熱一也）脈浮虛而濇者（濕邪凝滯陽不ニ運行一不レ拘ニ于濕一而但補ニ表裡之陽一而可也）桂枝附子湯主レ之若（身體疼煩不レ能ニ自轉側一而兼レ之）大便堅（此其人素裡虛津液乏キ故也乎濕熱入レ裡津液乾燥故也乎雖レ未レ詳其因俱白朮之所レ主也）小便自利者（下焦陽虛）朮附湯主レ之（○方名據ニ脈經一改レ之○正珍曰若大便堅以下傷寒發祕不レ可ニ強解一是也）

桂枝附子湯方（○方第百）

○此方桂枝去芍藥加附子湯增ニ桂枝一兩附子二枚一

者也而治病迥殊細思レ之各當ニ其理一分兩之不レ可レ忽如レ此義亦精矣後人何得下以ニ古方一輕於加減上也)

桂枝(四兩)生姜(四兩切)附子(三枚炮去皮破八片)甘草(二兩炙)大棗(十二枚擘)

右五味以ニ水六升一煮取ニ二升一去レ滓分溫三服

朮附湯方(○方第)

朮(二兩)附子(一枚半炮去皮)甘草(一兩炙)生姜(一兩半切)大棗(六枚擘)

右五味以ニ水三升一煮取ニ一升一去レ滓分溫三服一服覺ニ身痺一(附子之瞑眩)半日許再服三服都盡其人如ニ冒狀一(ウツカリトスルコト)勿レ怪卽是朮附並走ニ皮中一逐ニ水氣一未レ得レ除レ故耳(○篤胤曰一服覺以下三十七字後人之所攙入無疑也然有レ益ニ於治病一故採用焉)

風濕相搏骨節疼煩(傷寒論作ニ煩疼一而煩疼々煩大有ニ逕庭一詳ニ于□□□章一矣)掣痛(掣者字典注云玉篇同𢷬牽也)不レ得ニ屈伸一近レ之則痛劇(以上濕證之候也)汗出短氣(上焦陽虛之候)小便不利(下焦陽虛)惡風不レ欲レ去レ衣或身微腫者(濕邪著ニ皮膚一也)甘草附子湯主レ之(此章比ニ前章一陽虛甚矣○一稿本云此比ニ前條一一等重而兼ニ水氣一者故小便不利或身微腫方中有レ朮爲レ是故也蓋氏說與ニ桂枝加附子湯證一頗相似但彼因レ亡ニ津液一致ニ小便難一此因ニ水氣一致ニ小便不利或身微腫一也難者求而不レ得之辭不利者出而不レ多之義通而言レ之均是一不利已)

甘草附子湯方(○方第)

○千金方作ニ四物附子湯一)

甘草(三兩炙○本作ニ二兩一今從ニ玉函一)白朮(三兩○本作ニ二兩一今從ニ玉函外臺一)附子(二枚炮去レ皮)桂枝(三兩去レ皮○本作ニ四兩一今從ニ多臺一)

右四味以ニ水六升一煑取ニ三升一去レ滓溫服一升日三服初服得ニ微汗一則解恐一升多者宜服ニ六七合一爲レ妙(得レ宜之辭猶レ言ニ恰好一也)

中暍篇第十二(○)仲景所謂中暍中熱卽中暑病而一病二名本自無レ異矣以ニ動靜陰陽一別ニ中暑與ニ中熱一者自ニ張潔古一而始○圖南先生曰中暍當レ作ニ中熱一蓋暍與レ熱同一音之字傳寫因誤也不レ然則下文太陽中熱者暍是也一句無レ所ニ承當一矣○又云是後世所レ謂伏暑之證非ニ眞暍一也若夫眞暍別有ニ治術一載ニ卷末一可ニ併考一(アツ云圖南ノ說非也暍是也三

字ハ後人ノ攙ナリ)

太陽中熱者(太陽者皮表受レ病之名也暑邪感二於皮膚之表一也)暍是也(篤胤曰當レ删レ之)其人汗出惡寒身熱而渴也(當二口舌乾燥而欲レ飮レ水反小便少一)金鑑曰以上之證頗似太陽溫熱之(ケヅルベシ)病但溫熱(アッ云熱當作病)無二惡寒一以二熱從レ裡生一故雖二汗出一而不二惡寒一也中暍暑邪由レ表而入故汗出而惡寒也○穆曰汗出惡寒身熱者風寒共有二此證一而所下以與二傷寒中風一異上者有レ渴也)白虎加人參湯主レ之(○此證也氣體素强之人之病是以身熱而渴蓋太陽々明之合病(○虢州曰此後人所謂動而得レ之者也勞役而所レ得其脈必浮大有レ力裡虛而內熱盛津液乏者也故曰白虎加人參湯主レ之)○此一時勞役而得レ之者後世所謂動而得レ之々陽證謂二之中熱一是也脈必浮大而有レ力後人以二弦細芤遲一爲二中暍之主脈一者誤也無二裡虛一而內熱盛津液乏之者也)(アッ云月黑子ノ說非也此證素强ノ人也ト雖暑病津液乏ノ恐アリ故ニ人參ヲ加テ津ヲマス(又云也ノ字此爲結尾之辭スベテ痙濕暍篇ノ附方盡アヤシムベシ傷寒論ノ方ナキゾ長沙ノ舊ナルベキ)○道琢氏曰脈經無二加人參三字一按云此條無下可レ用二人參一之證上脈經爲レ是也○篤胤昔日謂傷寒論亦有二此文一而無レ方則此當下與二溫病惟擧レ脈證而不レ擧レ方同例上方始見二玉函一而作二白虎湯一據レ之想レ之方者此叔和之所レ加後人亦敷二演之一而加以二加人參之三字一者也乎何以言レ之渴也之也字此應二中熱者之者字一而爲二結尾之辭一也而附レ方者論中絕無レ例也然此方實是此證之的方則不レ問下仲景氏之舊與中後人之所上レ加從レ之而可也)

太陽中暍身熱疼重(水氣在二于皮膚一○疼重本草引レ之作二頭痛一)而脈微弱(不二滑實一而但微弱蓋水濕之候○篤胤曰脈微下當レ有二落字一試補レ之則心中溫々飮食入レ口則吐者此胸中實也)此以二夏月傷二(天熱ニ傷レタル上ニ)冷水一水行二皮膚中一所レ致也一物瓜蔕湯主レ之(○喻昌曰變レ散爲レ湯而去二赤小豆酸漿水一獨用二瓜蔕一味一煎服搐二去胸中之水一則皮中之水得二以俱出一也搐中有二宣泄之義一云々一物之微其功效之神且捷者有レ如レ此矣○又云水引二皮中一乃夏月偶傷之水或過飮二冷水一或以二冷水一灌レ汗因致三水漬二皮中一過二鬱其外出之陽一以レ故身熱疼重用二瓜蔕

一物驅逐其水則陽△△而遏鬱之病解矣凡寒形飲冷則傷肺乃積漸使然此偶傷之水不過傷[肺所合之]皮毛故一搐卽通幷無藉赤小豆酸漿水之群力也卽是推之久傷取冷如風寒雨露從天氣而得之者皆足過鬱其上焦之陽又與地氣之濕從足先受宜利其小便者異治矣可無辨歟○又云治暍病止出二方一者白虎加人參湯顓治其熱以夏月之熱淫必僣而犯上傷其肺「金」耗其津液用之以救肺「金」存津液也孫思邈之生脈散李東垣之淸暑益氣湯亦旣祖之矣一者瓜蔕散顓治其濕以夏月之濕淫上甚爲熱亦先傷其肺「金」故外潰之水得以聚於皮間皮者肺之合也用以搐其胸中之水或吐或瀉而出則肺氣得以不壅而皮間之水得以下趨也何後人但宗仲景五苓散爲例如河間之通苓散子和之桂苓甘露飲非不得導濕消暑之意求其引伸瓜蔕湯之制以治上焦濕熱而淸夫肺「金」則絶無一方矣故特擧二方合論其義見無形之熱傷其肺「金」則白虎加人參湯救之有形之濕傷肺「金」則用瓜蔕湯救之各有所主也云々○虢州曰此證渴小便澁者五苓四苓辰砂五苓散之類○正珍曰此條不可解々得亦難得而施顧非仲景舊文也(アッハ正珍氏ニ從ハン)○道琢氏云此方疑後人之筆仲景之方無一物之方脈經一物之二字無然則如脈經瓜蔕散作湯用乎　此亦未穩此一方後人之筆耶一物瓜蔕此證無可用之義○(アッ云道琢氏文蛤ヲシラズヤ)○愚按此證恐括蔞桂枝湯五苓散之類乎○琢云此方附于此者誤也「アッ云ソシテドコヘツケル○劉棟云此以夏月以下十四字後人所加者不足取焉○金鑑云太陽中暍之證身熱而倦者暑也身熱疼重者濕也脈微弱者暑傷氣也以此證脈揆之乃因夏月中暑之人暴貪風凉過飲冷水々氣雖輸行於皮中不得汗瀉所致也○此說是也)

一物瓜蔕湯方(○方第)

瓜蔕(二十箇○一本十作七者非也)

右剉以水一升煮取五合去滓頓服取吐(據本草所引補之)

太陽中暍發熱惡寒身重而疼痛其脈弦細芤遲小便已洒々毛聳(陽氣外泄)手足逆冷小有勞身卽熱口開前板齒燥若發其其汗則惡寒甚(以去表邪則外

虛陽氣也）加溫鍼則發熱甚（以復助陽而火熱內攻也）下之則淋甚（以除裡熱則內虛下焦燥也○圖南先生曰此症也氣體虛弱之人之病也蓋熱邪之從虛寒而化者「是以脈則弦細若芤遲證則小便已云々手足逆冷小有勞則身熱口開齒燥也」宜用桂枝新加湯「又云小便已洒々毛聳乃是淋之外候故下文承之曰下之則淋甚」○篤胤曰圖中之文淺近卑俚斷乎非仲景氏之舊後人之攙入無疑者也何則上文既言惡寒下文有手足逆冷之大則若小便已洒々毛聳之小證豈待言乎又上文既言發熱則若小有勞身熱口開前板齒燥左于其中而含蓄焉豈亦爲待口數語哉且夫至于若連如此之數簡之文字而說脈候則仲景氏之本論絕無例之事也若夫或有口然則此證無脈候何以知其虛實哉此章雖言不及脈乎發熱身重疼手足逆冷不可汗不可溫針不可下之證則此虛證虛證則其脈微弱之類亦不待言也言脈而含於證其中言證而畜於脈其中者仲景氏之文法乃爾圖中之文凡有王叔和之口氣與平脈辨脈二篇及傷寒例併考而可見予言之不妄乎○王守泰曰中暍中暑中熱名雖不同實者一病也若冬傷於寒至夏而變爲熱病者此則過時而發自內達表之病俗謂晚發是也又非暴中暑熱新病之可比或曰新中暑病脈虛晚發熱病脈盛也○淮南子武王蔭暍人于樾下左擁之右扇之○史記禹扇暍○喩昌曰暍者中暑之稱左傳蔭暍人於樾下其名久矣後世以動而得之爲中熱靜而得之爲中暑然則道途中暍之人可謂靜而得之耶○張氏曰云々暑云々其證多與傷寒相似但證與脈不同耳傷寒雖惡寒發熱初病未至於煩渴中暍不然初病卽渴且傷寒之脈浮盛中暑之脈虛弱「或弦細芤遲者有之」經云脈盛身寒得之傷寒脈虛身熱得之傷暑此之謂也○喩昌曰夏月人身之陽以汗而外泄人身之陰以熱而內耗陰陽兩俱不足仲景於中暍病云々用藥但取甘寒生津保肺固陽益陰爲治此等關係最鉅今特挈出靈樞有云陰陽俱不足補陽則陰竭瀉陰則陽亡云々是也故仲景（是已下五字アツガ所加也）但用一寒一甘陰陽兩無偏勝之藥清解暑熱而平治之所以爲百代之宗也

百合病篇第十（○病源候論云百合病者傷寒虛勞大

病之後不㆓平復㆒變成㆓此病㆒也○金匱折義云「百合狐惑陰陽毒三病在㆓病源千金㆒則皆屬㆓之傷寒諸候中㆒宜㆓同㆑篇倶論㆒也」解㑊病是也又云百合狐惑三者亦疑矣恐後人之筆○百合狐惑陰陽毒之名內經無之以金匱爲原○百合病或云百合根專治㆓此病㆒因得㆓百合病之名㆒焉○又按此病靈素之書未㆓嘗論及㆒唯此書始見而病源候論千金方等更詳㆑之下降宋明之際無㆓一人議㆑之者㆒因思此病其昉於㆓仲景前後㆒乎而歷㆓兩晉㆒至㆓隋唐㆒乃復絕矣蓋疾病之於㆑人也亦造化耳不㆑可㆘以㆓今所㆑無圖㆗古之所㆖㆑有也○篤胤曰折義之說穩也金匱直解云々)(道琢氏云素問所謂

百合病者(之爲病千金)意欲㆑食復不㆑能㆑食常默々欲㆑臥復(千金)不㆑能㆑眠(本作㆑臥今從㆓千金㆒)欲㆑行不㆑能㆑行飲食(アツ飲食上本有㆓欲字㆒道琢氏云衍今從㆑之)或有㆓美時㆒或有㆘不㆑用㆑聞㆓食臭㆒時㆖如㆑寒無㆑寒如㆑熱無㆑熱口苦小便赤澁(千金)諸藥不㆑能㆑治(惟百合能治㆑之)(アツ云如寒無寒如熱無熱此二句似往來寒熱矣按ニ此病モシクハ瘧ノ一證ニアラズヤサスレバ陶氏柴胡百合湯其旨ヲ得タリゲ也)得㆑藥則劇吐利如㆘有㆓神靈㆒者㆖(所爲也千金)身形如㆑和其脈微數(以㆓口苦小便赤脈微數㆒爲㆑的也此證與㆓陶氏柴胡百合湯㆒得㆑徵諸方全未㆑試タガ說)○每溺時頭痛者六十日所乃愈若溺時頭不痛淅然者四十日所愈若溺快然但頭眩者二十日所愈其證或未病而預見或病四五日而出或病二十日或一月微見者各隨㆑證治㆑之」(○千金方曰斯病云々)

百合病發汗後者百合知母湯主㆑之(季玆曰稿本無㆓此條及方㆒今私據㆓原書㆒以補㆓添之㆒)

百合知母湯方(○方第)

百合(七枚擘)知母(三兩切)

右先以㆑水洗㆓百合㆒漬㆓一宿㆒當㆓白沫出㆒去㆓其水㆒更以㆓泉水二升㆒煎取㆓一升㆒去㆑滓別以㆓泉水二升㆒煎㆓知母㆒取㆓一升㆒去㆑滓後合和煎取㆓一升五合㆒分溫再服

百合病下㆑之後者滑石代赭湯主㆑之(○季玆曰此條亦以㆓原書㆒補㆑之)

百合(外臺)滑石代赭湯方(○方第)

百合(七枚擘)滑石(三兩碎綿裹)代赭石(如彈丸大一枚碎綿裹)

右先以㆑水洗㆓百合㆒漬㆓一宿㆒當㆓白沫出㆒去㆓其水㆒更

以二泉水二升一煎取二一升一去レ滓別以二泉水二升一煎二
滑石代赭一取二一升一去レ滓後合和重煎取二一升五合一
分温服
百合病吐之後者用二後方一主レ之
百合雞子湯方（○方第）
百合（七枚擘）雞子黄（一枚）
右先以レ水洗二百合一漬一宿當二白沫出一去二其水一更
以二泉水二升一煎取二一升一去レ滓内二雞子黄一攪勻煎
五分温服（○此方亦季玆所レ補也）
百合病不レ經二吐下發汗一病形如レ初者百合地黄湯主レ
之（○此條亦季玆所レ補也）
百合地黄湯方（○方第）
百合（七枚擘）生地黄汁（一斤○正脈本作二一升一是
也）
右以レ水洗百合漬一宿當二白沫出一去二其水一更以二泉
水二升一煎取二一升一去レ滓内二地黄汁一煎取二一升五
合一分温再服中病勿更服大便當如レ漆（○季玆曰煎
法今補入）
百合病一月不レ解變成レ渴者百合洗方主レ之（○琢云此
疑白虎湯之症）

百合洗方（洗方仲景方中無之タガ説）
右以二百合一升一以二水一斗一漬レ之一宿以洗レ身洗已
食二煮餅一（團子之類）勿レ以二鹽豉一也（味噌之屬鹹能
助レ渴○名古屋氏曰素問陰陽應象大論云其有レ邪者
漬レ形以爲レ汗云々如三後世治二豌豆瘡一用二升麻一拭
洗之類用化則遠矣又曰如下許胤宗用二黄耆防風湯數
十斛一置二於床下一以蒸汗張苗燒レ地加二桃葉於上一以
蒸レ汗或藥煎湯浴二洗之一皆漬レ形之法也○赤水玄珠
云自二東漢建武中南陽征レ虜染二流中國一時謂二之虜
瘡一醫者以レ蜜煎二升麻一數々拭レ之
百合病渴不差者用二後方一主レ之（用後方唐本作二括樓
牡蠣湯一是也）
括樓牡蠣湯方（○方第）
括樓根（今用天花粉）牡蠣（熬等分）（文蛤止渴牡蠣
止渴之義本草中未レ見レ之）
右爲二細末一飲服二方寸匕一日三服
百合病變發熱者百合滑石散主レ之（○渴小便不利脈沈
微弱者用レ之而可也）
百合滑石散方（○方第）
百合（一兩炙）滑石（三兩）

右爲散飲服方寸匕日三服當微利者止服熱則除（○季茲曰此方今補入○內藤氏曰百合散一方原本闕之余得小品方於本草綱目以補之小品方百合散治百合變熱者用百合一兩滑石三兩爲末飲服方寸匕微利乃良）

百合病見於陰者以陽法救之見於陽者以陰法救之（道琢曰脈經作見於陰者以陰法救之見於陽者以陽法救之爲是）見陽攻陰復發其汗此爲逆見陰攻陽乃復下之此亦爲逆（虢云此條不爲語後世注家從文注釋○又云前既曰百脈一宗有邪者何以言陽言陰乎○虢州曰百合病者微邪之涉合百脈諸經者與千金方論大同小異千金古而此書出之乎抑此書古而千金引之乎疑千金之文精而且詳不知金匱抄出千金之文矣凡此篇半眞半僞○篤胤曰百脈涉合之說腐也詳論于別卷焉故略之千金方之於此書以其精之故虢州氏疑諸此書抄出于千金乎非矣夫千金方之取古書多加增於其文而力以要人之易知矣故間或謬解其文義添蛇足者甚多今演其一而證之若夫言百合病者傷寒大病不平復變成此病則古來相傳之說而實是壞病中之一而已本文中有發汗後者下後者吐後者之語者爲之故也而思邈謬解之文增加文字而作百合病已經發汗之後更發者或作下之後更發者此豈不蛇足乎果若孫氏之說則當有可吐下發汗之方法何例于此等證之前而不論之乎抑本文惟云百合病發汗後者此以其證既具備於首章之故也猶舉太陽之爲病云々之綱領而下惟云太陽病讓之首章矣圖南先生曰百合病論治皆非仲景氏之舊蓋好事之徒弄筆耳況病名百合而其方皆用百合兒戲不齋乎○篤云先生亦不深思耳○程林曰百合花葉皆四向故能通達上下四旁其根亦衆瓣合成故名百合用以醫百合病○篤曰此亦腐說此亦腐說）

狐惑病篇第十四（○病源候論曰狐惑二、（アッ之ニ作ラン）病初得狀如傷寒或因傷寒而變成此病也此皆由濕毒所爲也○金鑑曰狐惑牙疳下疳等瘡之古名也近時惟以疳呼之云々又云狐惑者瘡之古名也○圖南先生曰狐惑之名千古潰々未有解得其義者按狐惑本毒蟲名卽狐惑一名射工又稱短狐者是也惑與蜮古字通用其蟲含砂射人其瘡

如レ狝今此病或蝕レ上或蝕レ下發熱惡寒有レ似下中ニ射工毒一者上故假以爲ニ病名一也「考徵如レ左」其名ニ狐惑一者猶下以ニ痛甚一名ニ白虎病一蓋痛之甚如ニ白虎嚙一耳○虢云古今不レ詳活人書其外注家無ニ確說一金鑑爲レ是下疳痔走馬牙疳爲ニ狐惑一（篤胤按蝕ニ於喉一爲レ或蝕ニ於陰一爲レ狐之說後人之攙入附會不レ足取焉又云類篇云心典云徐氏曰蝕ニ於喉一爲レ惑謂熱淫ニ於上一如ニ惑亂之氣感而生一レ蜮蝕ニ於陰一爲レ狐謂熱淫ニ於下一柔害幽隱如ニ狐性之陰一也之類皆信ニ攙入之妄一之誤尤不レ足レ論焉）（類篇蜮ヲイサマムシト訓ス何ニヨレルカアッ云千金藥注云射工郎溪鬼蟲也和名スナゴムシ（東國）水中ニ居リ沙ヲ含テ行人ノ影水ニウツルヲ射ルコレニ射ラルレバ卽病ム也又鬼彈アリ紀伊高野ノ麓九度山ト云處ノ水中ニアリアッ云考徵コヽニナキコソヲシケレ）

狐惑之爲レ病狀如ニ傷寒一（篤胤曰以レ有ニ頭痛惡風之證一言レ之）默々欲レ眠目不レ得レ閉臥起不レ安蝕ニ於喉一爲レ惑蝕ニ於陰一爲レ狐不レ欲ニ飲食一惡レ聞ニ食臭一其面目（外臺无）乍赤乍黑乍白（アッ云○點廿字ハ百合病ノ錯亂ヽ點十字ハ後人ノ附會弄筆不レ足レ取也）（アッ云其以下九字亦雖可怪姑存之）蝕ニ於上部一則聲喝（○一作レ嗄○正珍曰喝字典於介切嘶聲也嗄所嫁切沙去聲敗也）甘草瀉心湯主レ之（琢云金鑑此七字刪去當レ從レ之○脈經千金外臺俱作ニ瀉心湯一○虢州曰濕熱甚者爲ニ濕痺一輕少者著ニ一處一素是因ニ中焦不足一也以ニ此湯一和ニ調陰陽一兼去ニ濁邪一後世所レ稱下疳用レ之效幷小兒痘疹後多有ニ此症一）

甘草瀉心湯方

甘草（四兩○千金作三兩）黃芩　人參（○六經篇中瀉心湯誤脫ニ人參一）乾姜（各三兩）黃連（一兩）大棗（十二枚）半夏（半斤○外臺作ニ半升一是也）

右七味水一斗煮取ニ六升一去レ滓再煎溫服一升日三服（○季茲曰此方既見ニ傷寒篇中一似レ宜レ刪姑存レ舊而煎法以ニ原書一補ニ入之一）

蝕ニ於下部一（前陰）則咽乾（濕熱上攻○圖南先生曰咽乾二字可レ疑考ニ肘後文一當レ作ニ穿陷一）苦參湯淹洗之（內藤氏云內服ニ甘草瀉心湯一也○淹字據ニ脈經一補レ之○醫統正脈有ニ苦參湯之方一苦參一升以ニ水一斗一煎○史記倉公傳曰齊中大夫病レ齲臣意卽爲ニ苦參湯一日嗽三升出入五六日病已）（アッ云ケヅル）

蝕㆓於肛㆒者雄黄薫㆑之（○濕在㆓下部㆒者爲㆓下疳痔漏㆒皆是膏粱之所㆑致也甚者肛門出㆓白虫㆒○外臺作㆓雄黄㆒薫法兼主㆓䘌病㆒）

雄黄（三斤○據㆓千金外臺㆒補㆑之）

右一味爲㆑末筒瓦二枚合㆑之燒向㆑肛薫㆑之（○內藤氏曰以上二證亦內服㆓甘草瀉心湯㆒也又若云小便不利作㆑渴者猪苓散）

病者脈數（狐惑之本脈）（タガ說）無㆑熱微煩（內熱）默々但欲㆑臥（篤胤曰膿已成而邪勢衰也）汗出（篤云微々汗出也此亦以膿已成而陰衰也其理同㆓于瘍壞後之汗㆒）「初得㆑之三四日目赤如㆓鳩眼㆒（濕熱上攻○篤云如鳩眼三字疑後人之筆今姑存㆑之）七八日其（其字本作㆑目今據㆓外臺㆒）四眥（直解云龎安常作㆓周字㆒）黃（據一本脈經外臺補之）黑㆑若能食者膿已成也（宗俊父曰膿已成故無㆑熱且能食也○篤云膿已成之證而復語㆓初證㆒者何謂乎且夫若㆑言㆑如㆓鳩眼㆒則卑俚決非㆓仲景氏之舊㆒也）赤小豆當歸散主㆑之（○（タガ說）此世所謂內痔藏毒之類用㆑之效不㆑可㆓勝言㆒合㆓前甘草瀉心湯㆒而用不㆓大便㆒者加㆓大黄㆒不食者加㆓人參宿砂㆒應㆑手效（以下キコエズ）凡痔疾因飽食者可加東垣諸方有效㆒）

赤小豆當歸散方（○方第）

赤小豆（三升浸令芽出曝乾）當歸（三兩○本無㆓分量㆒今依㆓千金外臺㆒補㆑之編注作㆓十兩㆒者不㆑知㆑據㆑何矣）

右二味杵爲㆑散漿水服㆓方寸匕㆒日三服（○愚謂用㆓赤小豆㆒者非㆘但排㆓癰腫㆒去㆖膿古人以辟㆓穰疫氣㆒是疫鬼之所㆑惡也狐惑亦疫毒所㆑主也仲景用㆑之其旨精哉）

陽陰毒病篇第十五（○金鑑曰陽毒陰毒世所㆑謂痧病是也未㆑知㆓是非㆒○篤胤曰陰陽也者由㆓寒熱之外候㆒而別㆑之毒也者天地殺厲不正之疫毒也若夫言㆘以㆔毒入㆓於陰經㆒名㆓陰毒㆒以㆔毒入㆓於陽經㆒名㆗陽毒㆖則經絡家之腐說不㆑足㆑取焉若㆑言㆔傷寒初病一二日便結成㆓此病㆒亦無稽之說耳○趙獻可曰感㆓天地疫癘非常之氣㆒故因傳染所㆑謂時疫之類也老少再服字可㆑見○篤云千金方曰傷寒一二日便成㆓陽毒㆒又曰傷寒初病一二日便結成㆓陰毒㆒此說果然乎否本文以㆔言不㆑及㆑此之故吾不㆑知㆓其是非㆒矣）

陽毒之爲㆑病面赤斑々如㆓錦紋㆒（篤云以㆓邪熱怫鬱上

沖ニ之故也此蓋陽證之候）咽喉痛唾ニ膿血ー升麻鼈甲湯主レ之（不レ滿ニ七日ー者用レ之效○高陽生曰陽毒健亂四肢煩面赤生レ花作ニ點斑ー狂言妄語如ニ神鬼ー下利頻多候不レ安汗出遍身應大差魚口開張命欲レ絕有藥不辜［但與服能過七日漸須レ安］ー（タカ說）甚者斑攻內衝心熱甚而喘者死）

陰毒之爲レ病面目青（篤云此陰證之外候）身痛如レ被レ杖（卽斑々而身如レ被レ狀（杖カ）蓋互文之法）咽喉痛升麻鼈甲湯去ニ（陽熱之烈者故去之）雄黃蜀椒ー主レ之（○高陽生曰陰毒「傷寒」（イブカシ）身體重背強眼痛不レ堪任小腹痛急口青黑毒氣衝レ心轉不レ禁四肢厥冷惟思レ吐咽喉不利脈沈細若能速灸臍轉下六日看過見レ喜深○篤云去ニ其雄黃蜀椒ー之義今不レ可レ知後人言附會者甚多矣○金鑑曰陰毒去ニ雄黃蜀椒ー而陽毒用レ之雖レ似レ有ニ少理ー而試ニ之于病ー必不レ然○內藤氏曰去ニ雄黃蜀椒ー者以ニ陽氣怫鬱在レ裡不レ須レ濕レ裏故也○篤云本篇恐有ニ脫落錯亂ー觀下本方與ニ外臺千金所レ擧之方ー有上異亦可レ想也今姑擧ニ兩說俱難レ捨者ー而存レ疑云）

升麻鼈甲湯方（○）方第　肘後千金升麻湯無ニ鼈甲ー有ニ桂心ー外臺方有ニ梔子桂心ー俱八味也）

升麻（二兩）當歸（一兩）蜀椒（炒去汗一兩）甘草（二兩）鼈甲（手指大一片炙）雄黃（半兩研）

右六味以水四升煮取ニ一升ー（壯八）頓服之老少再服取汗　○（コ、ニ千金方ヲ引ベシ）

○劉棟曰右（百合狐惑陰陽毒）皆後人所レ記也中世已降有ニ百合傷寒狐惑傷寒陰陽毒之說ー皆妄造而無稽不レ足ニ以據徵ー焉故今無レ所レ取レ之也）

血痺虛勞病篇第十（○病源曰云々）

○血痺者後世所謂麻木不仁之證也而其名諸方書無レ所レ見矣所レ出之本卽此書也素問五藏生成篇曰臥出而風吹レ之血凝ニ於膚ー者爲レ痺靈樞九針論曰邪入ニ於陰ー則爲ニ血痺ー此也仲景立ニ此名ー也蓋取レ此也而痺之爲レ言閉也靈樞刺節眞邪論曰虛邪之賊ニ傷人ー也搏ニ於筋ー則爲ニ筋攣ー口ニ於脈中ー爲ニ血閉ー是也○虛勞者於ニ內經中ー無レ所レ見病源候論始出レ之蓋隋以後之說○劉棟曰虛勞者陽虛病之名也（アツ云本書今時ノ人々ノ說ノミハ外ニ一部ダチタル書ナケレバ一二語ノ說トイヘドモ名ヲ表シ余ハ皆傷寒論ノ通リニナサマシサナクテハ紙數甚多クナル

也）（千金論云風痹淫走无定處名血痹）
血痹外證身體不仁如ニ風（脈經千金翌俱无風字）痹狀一
（金鑑曰血痹外證亦身體頑麻不レ知ニ痛癢一故曰如ニ
風痹狀一但不レ似ニ風痹歷節關節流注疼痛一也）黃耆
桂枝五物湯主レ之（○圖南先生曰血痹卽血虛不足之
病後世多用ニ地黃當歸鹿茸蓯蓉等藥一每々有レ效卽
是此證○又曰風痹乃歷節病其實非ニ風因一亦唯醫家
舊習乃爾）
黃耆桂枝五物湯方（○方第）　○毓洲曰此湯也
桂枝湯去ニ甘草一加ニ黃耆一倍ニ生薑一仲景之主意在ニ
生姜一也逐レ邪強甚且引ニ牽胃陽一而上升故也志ニ甘
草一者力緩故
黃耆　桂枝　芍藥（各三兩）大棗（十一枚）生薑（六
兩）○桂山子曰此湯桂枝中去ニ甘草一加ニ黃耆一者也
倍ニ加生姜一不レ知ニ何謂一六兩當レ作ニ三兩一）
右五味以ニ水六升一煮取ニ二升一溫服ニ七合一日三服
（○千金方有ニ人參一）
勞之爲レ病其脈浮大（辨證曰浮大而無レ力謂也是陰虛
之脈也極虛者沈細微弱之謂也是陽虛之脈也夫人身
所ニ以保レ生者陰陽焉耳陰者何有形精血是也陽者何
無形神氣是也七情傷レ神勞役傷レ精於レ是乎虛勞成
矣又脈如ニ弦緊芤動濇數一之類不レ過レ兼ニ見浮沈中一
耳）手足煩熱陰寒（下焦陽虛）精自出足痠削（謂ニ酸
疼瘦削一也）不レ能レ行（○熱字足字據ニ脈經一補レ之）
夫失精家小腹弦急陰頭寒目眩（脈經作ニ目眶痛一非也）
髮落脈極虛（○玄醫曰失精腎虛故如レ斯證隨生矣）
桂枝加龍骨牡蠣湯主レ之（方見ニ于壞病篇一○玄醫曰
今之僧尼旅儒多有ニ此證一然不レ與ニ此方一用ニ歸脾湯
補心湯等一不レ止此適所ニ以不レ考ニ仲景書一也吾師福
井處菴方有ニ牡蠣丸一與レ之甚有レ驗予試ニ數人一隨レ
手而應方見ニ類方一）
脈沈小遲名ニ脫氣一其人疾行則喘喝（張氏云喝聲鼞急
也）手足逆寒腹滿甚則溏泄食不ニ消化一也（○篤云此
章本屬レ刪然今世間見ニ此證一故亦採用）
虛勞裡急（圖南先生曰謂ニ腹裡拘急一也病源卷三虛勞
裡急候云勞傷內損故腹裡拘急也）悸衄（外臺無ニ比
二字）腹中痛夢失精四肢痠疼手足煩熱咽乾口燥
（金鑑曰此章之證概ニ虛勞之證一而言也非レ謂ニ虛勞
之證止ニ於此一也故下文有ニ諸不足之證一也）小建中
湯主レ之（○方見ニ于少陽篇一）

虚勞裡急諸不足黃耆建中湯主レ之
黃耆建中湯方（○方第　○前證兼ニ自汗表虚肺虚一者此方主レ之）
於ニ小建中湯方內一加ニ黃耆一兩一
右七味以ニ水七升一先煮ニ六味一取ニ三升一去レ滓內ニ膠飴一更上ニ微火一消解温服一升日三服
虚勞不足大渴欲飲水（以上七字據ニ千金方一補レ之）腰痛少腹拘急小便不利者八味腎氣丸主レ之（○此下焦之陰虚若陽虚停水者眞武湯甚者茯苓四逆湯陰虚停水者八味丸此湯能用得者獨薛已內科摘要之主治甚是也）
八味腎氣丸方（○方第）
乾地黃（八兩）山茱萸　薯蕷（各四兩）澤瀉　茯苓　牡丹皮（各三兩）桂枝　附子（炮各一兩）
右八味末レ之煉蜜和丸梧子大酒下十五丸日再服
虚勞虚煩不レ得レ眠酸棗湯主レ之（○虢州曰無ニ痰飲一唯煩不レ得レ眠者上焦之陰虚而津液乏故也當ニ補レ陰清レ火）
酸棗湯方（○方第）
酸棗仁（二升）知母　芎藭　茯苓（各二兩）甘草（一兩）
右五味以ニ水八升一煮ニ酸棗仁一得ニ六升一內ニ諸藥一煮取ニ三升一分温三服
肺痿肺癰肺脹欬嗽上氣篇第十（○肺痿者勞證中之一證後世所レ稱之勞欬是也痿之爲レ言萎蓋肺藏萎弱之謂也○肺癰者肺氣壅而不レ通也卽癰與レ壅古字通用二證皆因ニ上焦畜熱一而所レ病也○欬嗽上氣者今所レ謂促迫也蓋以ニ欬則氣上衝逆一言レ之）
肺痿之爲レ病寸口脈數而虚其人欬口中反有ニ濁唾涎沫一此熱在上焦者因欬所病也若口中辟々燥欬唾膿血卽胸中隱々痛脈反滑數實者此爲ニ肺癰一始萌可レ救膿成則死
○喻昌曰此云寸口脈數云滑數云數虚數實皆指ニ左右三部一統言非レ如ニ氣口獨主ニ右關之上一也其人咳口中反有ニ濁唾涎沫一頃之遍レ地者爲ニ肺痿一言咳而口中不ニ乾燥一也若咳而口中辟々燥則是肺已結レ癰火熱之毒出ニ現於口一欬聲上下觸ニ動其癰一胸中卽隱々而痛其脈必見ニ滑數有レ力邪氣方盛一之徵也數實之脈以レ之分ニ別肺痿肺癰一是則肺痿當レ補肺癰當レ瀉隱ニ然言表一夫人身之氣稟ニ命於肺一肺氣清肅則周

身之氣莫レ不ニ服從而順行一肺氣壅濁則周身之氣易レ致ニ橫逆一而犯レ上故肺癰者肺氣壅而不レ通也肺痿者肺氣委而不レ振也肺癰由ニ內蓄之熱一乘ニ乎肺一而熏灼肺中之血爲レ之凝遂成レ癰肺脹而脊骨昂聳至咳聲濁痰如レ膠發熱畏寒日晡尤甚面紅鼻燥胸生ニ甲錯一始能辨ニ其表裡攻下一間有レ癰小氣壯胃強善食其膿不ニ從レ口出一或順趨ニ肛門一或旁穿ニ脇肋一仍可レ得レ生然不レ過ニ十中二三一耳金匱治法最精用レ力全在ニ未レ成レ膿之先一今人施ニ於既成レ膿之後一其有レ濟乎肺痿者由ニ胃中津液一不レ輸ニ於肺一肺失レ所レ養枯燥然後成レ之蓋此或腠理素疎無レ故而大發汗或中氣素餒頻吐或殫成ニ消中一飲レ水而渴不解泉竭自中或腸枯便秘強求ニ其快一漏卮難レ繼津液坐耗於レ是爍肺熱肺管爲之窒而咳痰冲擊連聲［痰始一應］金匱治法非レ不ニ彰明一然在ニ肺癰一門一難レ解其精意而圖其大要生ニ胃液一潤ニ肺燥一下ニ逆氣一開ニ積痰一止ニ濁唾一補ニ眞氣一以通ニ肺管一散ニ肺熱一以復ニ清肅一此辨證用藥之大略也（一、點八字過度二字ニ作ルアツ）

上氣面浮腫肩息其脈浮大不治又加レ利尤甚

上氣喘而躁者屬ニ肺脹一欲レ作ニ風水一發汗則愈

□素問評熱病論曰有下病ニ腎風一者上面胕痝然壅ニ害於言一不レ當レ刺不レ當レ刺而刺後五日其氣必至至必少氣時熱時熱從ニ胸背上一至レ頭汗出手熱口乾苦渴小便黃目下腫腹中鳴身重難ニ以行一月事不レ來煩而不レ能レ食不レ能ニ正偃一正偃則欬病名曰ニ風水一邪之所レ湊其氣必虛陰虛者陽必湊レ之故少氣時熱而汗出也小便黃者少腹中有レ熱也不レ能ニ正偃一者胃中不レ和也正偃則欬甚上迫レ肺也諸有ニ水氣一者微腫先見ニ於目下一也眞氣上逆故口苦舌乾臥不レ得ニ正偃一正偃則欬出ニ清水一也諸水病者故不レ得レ臥臥則驚驚則欬甚也一□又平人氣象論曰風足脛腫曰レ水○喩昌曰上氣之候至ニ於面目浮腫鼻有ニ息音一是其肺氣壅遏レ上而不レ下加以ニ其脈浮大一氣力方外出無ニ法可レ令ニ內還而下趨一故云不レ治也加レ利則上下交爭更何以堪レ之肺脹而發ニ其汗一者卽內經開ニ鬼門一之法一汗而令ニ風邪先泄ニ於肌表一水無ニ風戰一自順趨而從レ下出也）

肺痿吐ニ涎沫一而不レ欬不レ渴者（內無ニ熱毒一故也）其人必遺尿小便數「所ニ以然一者以ニ上虛不レ能レ制レ下故也」二（此十三字舊注也今誤而混ニ本文一○千金ニヨッテ文ヲ改ム）此爲ニ肺中（冷飲アリトス）冷一（無レ欬

疑胃之誤）必眩（喩昌曰陰氣上巓侮其陽氣故也）多涎唾（喩昌曰陰寒之氣凝滯津液故也）甘草乾姜湯以渴（散）之（温之外臺脈經作温其藏）（虢州曰此肺痿之類證似肺痿而非肺痿實胃寒也）若服湯已渴者屬消渴（胃陽不上升○喩昌曰始先不渴服温藥即轉渴者明是消渴飲一溲二之證消渴又與癰疽同類更當消息之矣

甘草乾姜湯方（○方第

甘草（四兩炙）乾姜（二兩炮（千金无）○集驗肘後有大棗十二枚）

右㕮咀以水三升煮取一升五合去滓分温再服

欬而上氣喉中如水鷄聲者（秋氏曰此今喘病也蓋喘息者兼本上焦有熱之人中外來之風寒而寒包內熱則發故先不散外邪則不治金鑑曰水鷄聲者謂水與氣相觸之聲在喉中連々不絕也○本草云鼃所謂蛤子即今水雞是也）射干麻黄湯主之（○如字者字據千金外臺補之）

射干麻黄湯方（○方第○汪機曰此湯治外寒包內熱喇喘胸高喉中如水雞聲其用與華蓋散同但此邪稍甚故此治法亦宜散外寒為主）

射干（十三枚一云三兩）麻黄　生姜（各四兩）款冬花
紫花（各三兩）細辛（二兩）五味子（半升○千金作一升）大棗（七枚）半夏（大者八枚洗一云半升○千金作一升）

右九味以水一斗二升（千金外臺作東流水）先煮麻黄兩沸去上沫內諸藥煮取三升分温三服（虢州曰內熱表邪俱微連綿久不愈者用之可也）

顏逆（○黑氏云孫眞人以後以欬逆為噦非也○欬逆者言惟欬也逆字添字也如嘔吐吐逆之類注家以為欬而氣逆上非也不可從也）上氣時々唾濁但坐不得臥（本作眠今從千金外臺改之道琢氏云是照上坐也）皂莢丸主之（○金鑑曰欬逆上氣喉中有水雞聲者是寒飲衝肺射干麻黄湯證也欬逆上氣咽喉不利者是火氣衝肺麥門冬湯證也今欬逆上氣惟時々唾濁痰涎多也但坐不得臥氣逆甚也此痰氣為病非寒飲亦非火氣主之以皂莢丸者宜導其痰通達其氣也佐棗膏之甘以藥性慓悍緩其勢也）

皂莢丸方（○方第　　皂莢非漢種無奏效○秋宜曰此藥丸治上焦實痰禁銅者皂莢本草云

去レ垢云去ニ穢濁一也）
皂莢（八兩刮去皮用酥炙）
右一味末レ之蜜丸梧子大以ニ棗膏一和レ湯服ニ三丸一日三服夜一服（○喩昌曰火熱之毒結ニ聚於肺一表レ之裡レ之淸レ之溫レ之曾不ニ少應一堅不レ可レ攻者又用ニ此丸一豆大三粒朝三服暮一服呑適病處如ニ棘針徧刺一四面環攻如レ是多日庶幾無ニ堅不一レ入聿成ニ蕩洗之功一不レ可下以ニ藥之微賤一而少上レ之胸中手不レ可レ及卽謂爲ニ代針丸可矣）

欬而大逆上氣胸滿（咽）喉中不利如水鷄聲其脈浮者（喩昌曰上氣而作ニ水鷄聲一乃是痰礙ニ其氣一氣觸ニ其痰一風寒入レ肺之一驗耳發レ表下レ氣潤レ燥開レ痰四法萃ニ於一方一用以分ニ解其邪一不レ使ニ之合一此因レ證定レ藥之一法也若咳而其脈亦浮則外邪居多全以ニ外散一爲レ主用法卽於ニ小靑龍湯中一去ニ桂枝芍藥甘草一加ニ厚朴石膏小麥一　○此射干麻黃湯證一等重者也）厚朴麻黃湯主レ之（加ニ大逆上氣咽喉不利八字一之辨悉ニ餘論一）脈沈者澤漆湯主レ之（圖南先生曰此厚朴麻黃湯證而其脈沈者而有ニ裡水一之證也故用ニ澤漆一○喩昌曰脈浮爲レ在レ表脈沈爲レ在レ裡表裡二字與ニ傷寒之表裡一大殊卽指ニ肺之表裡一而言レ之）

厚朴麻黃湯方（○方第）（千金作廣石膏湯）
厚朴（五兩）麻黃（四兩）杏仁（半升）石膏（如ニ鷄子大一○卽半斤也千金作ニ二兩一非也）半夏（半升）細辛　乾姜（各二兩）五味子（半升）小麥（一升）
右九味以ニ水一斗二升一先煑ニ小麥一熟去レ滓內ニ諸藥一煮取ニ三升一溫服ニ一升一日三服

澤漆湯方（○方第）
澤漆（三斤以ニ東流水五斗一煮取ニ一斗五升一）紫參（○千金方作ニ紫菀一）生薑　白前（各五兩）桂枝　人參　甘草（各三兩）
右九味㕮咀內ニ澤漆汁中一煮取ニ五升一溫服ニ五合一至レ夜盡

肺癰（名古屋曰所ニ以爲ニ肺癰一者有ニ喘逆炎上肺中閉塞也）喘不レ得レ臥者（虢州曰肺癰脈數滑寒熱往來呼吸短息喘而不レ能ニ側臥一此未成膿之時也當ニ此時一則當レ用下强去ニ邪氣一之藥上）葶藶大棗瀉肺湯主レ之

葶藶大棗瀉肺湯方（○方第）
葶藶（瀉上焦實熱）（熬令ニ黃色一擣丸如ニ彈丸大一○千金作ニ三兩爲レ末四字一）大棗（十二枚○千金方作ニ二十枚一）

右先以水三升煮取二升去滓內葶藶煮取一升頓服（○圖南先生曰今無葶藶代以羅蔔子雖稍緩而不及長服有效）

欬而胸滿振寒脈數（有力）咽乾不渴（血分之熱故不渴）時時（據千金加之）出濁唾腥臭久々吐膿如粳米粥（據千金加之）者爲肺癰（喩昌曰以上七證乃肺癰之明徵用此方深入其徂開通其壅遏或上或下因勢利導誠先著也此方於其將成膿未成膿之時遂爲買力庶不犯膿成則死之遲悞豈不超乎）桔梗白散主之（○此方本作桔梗湯今據外臺從山田先生之說而改之○方見于壞病篇即三物小白散也）

欬而上氣（篤云言上氣而不能制胸脇脹悶而苦者也）此爲肺脹（今喘哮也丹溪不知肺脹者哮喘之古名而妄以爲屬於血以立論夏月陽火盛而肋胸膈中之內熱至於秋冷氣催則外寒內熱二者相搏而發喘故有外邪輕而內熱甚者有外邪甚內熱輕者有外邪內熱倶盛者宜隨其輕重治之）其人喘目如脫狀（與桂枝知母湯章當併考言不耐苦痛）脈浮大者越婢加半夏湯主之（○秋宜修云肺脹即今喘哮也三者皆因上焦有熱也熱在氣分爲肺痿在血分爲肺癰今此病熱只在胸中又外中風寒邪二者相搏而發喘上氣者是爲肺脹也）

越婢加朮湯方（○方第　○本方見于）

於越婢湯方內加半夏（半升）

右六味以水六升先煮麻黃減二升去上沫內諸藥煮取三升分溫三服

肺脹欬而上氣煩躁（千金作咽）而喘脈浮者（脈惟浮而不大內熱尠者但外邪而已）心下有水（道琢氏云心下有水之徵證其心下必悸者也）小青龍（千金作麻黃湯）加石膏湯主之（○金鑑曰此承上章互詳脈證以明其治也肺脹欬而上氣煩躁而喘脈浮是外傷風寒內有水主小青龍湯發汗則愈加石膏者因多一煩躁證也）

小青龍加石膏湯方（○方第　○舊注千金證治同外更加脇下痛引缺盆）

於小青龍湯方內加石膏二兩（千金方作四兩）

右九味以水一斗先煮麻黃減二升去沫內諸藥煮取三升

胸痺病（今云ムナムシノ一證也中藏經云痺閉也）篇

第（○胸痺之名內經及後世之方書無㆑所㆑見夫痺者閉也痛也又痞也蓋此後世所謂胸滿病也胸中痺塞滿而不㆑利或痛短氣者是也○正珍曰痺之爲㆑言閉也閉塞而痛謂㆓之痺㆒詳見㆓行餘醫言㆒）

胸痺之病喘息欬唾胸背（脈經作痺）痛短氣括樓薤白白酒湯主㆑之

○成無己曰短氣者氣短而不㆑能㆓相續㆒者是矣似㆑喘而非㆑喘若㆑有㆓氣上衝㆒而實非㆓氣上衝㆒也喘者張㆑口擡㆑肩搖㆑身滾㆑肚謂㆓之喘㆒也氣上衝者腹裡之氣時々上衝也所謂短氣者呼吸雖㆑數而不㆑能㆓相續㆒似㆑喘而不㆑搖㆑肩似㆓呻吟㆒而無㆑痛者短氣也

○劉棟曰凡其氣息促者爲㆓短氣㆒微弱者爲㆓少氣㆒此短氣少氣之別也○平人ナニトモナキ人カ但胸滿チフサカツテイキトウシト云ハ此屬實也實也ト云中ニ陽微陰弦ノ脈ヲ不見コト含テアリ脈トハ云ハ沈實沈弦按有力テ少シモ虛ナイト云コトコモツテアル也扨短氣ト少氣ト能ク分別スヘシ短氣ハ呼吸急促ニシテイキドウシクセハシキコト也少氣ハ引キツヽケテモノ言フコトナラヌ也少氣ハ屬虛短氣ハ屬實然トモ又屬虛モアリ能ク分別スベシ（アツ云成氏注平人云々ノ注本前章ノ注並ニカキイレ也）

○季茲曰此注不㆑用㆓漢文㆒與㆓餘條㆒異㆑例且据㆓首書㆒則非㆓翁之說㆒然姑仍㆑舊存㆑之）

括樓薤白白酒湯方（○方第）

括樓實（治留飲結痰）（一枚擣）薤白（半升）白酒（七升○千金作白截（音再）酢醬○斯方吉益（アヤシムヽシ）山脇二氏以爲㆓酢醬㆒也吉益氏爲㆑酒也

右三味同煮取㆓二升㆒分溫再服（○季茲曰煎法今補）

胸痺不㆑得㆑臥心痛徹㆑背者（虢州曰上氣前證强徹㆑背如㆓突出㆒痛痰飲上衝是其的當也）括樓薤白半夏湯主㆑之（○名古屋氏曰不㆑得㆑臥心痛者氣逆也故前方加㆓半夏㆒以下㆓逆氣㆒也）

括樓薤白半夏湯方（○方第）

括樓實（一枚擣）薤白（三兩）半夏（半升）白酒（一斗一作一升）

右四味同煮取四升溫服一升日三服

胸痺心中痞（痞字下本有㆓留字㆒今從㆓千金㆒刪㆑之○虢州曰留字下恐脫㆓飲字㆒○正脈留作㆑氣「作㆓心中痞氣々結在㆑胸）氣結在㆑胸々滿脇下逆槍㆑心枳實薤白桂枝湯主㆑之（○本有㆓人參湯亦主之々六字並方㆒正

珍曰當ニ刪去一千金方此六字無爲ㇾ是道琢父曰或曰
傷寒論無ニ此例一）
枳實薤白桂枝湯方（〇方第）
枳實（四枚）厚朴（瀉實泄滿）（四兩）薤白（去上焦之
熱痰）（半斤）桂枝（一兩）括樓（去上焦熱痰）（一枚）
右五味以ニ水五升一先煑ニ枳實厚朴一取ニ二升一去ㇾ滓
內ニ諸藥一煑數沸分溫三服（〇煮法係季玆所補）

胸痺胸中氣塞短氣橘皮枳實生姜湯主ㇾ之
橘皮枳實生姜湯方（〇方第）
橘皮（一斤）枳實（三兩）生姜（半斤）右三味以ニ水五
升一煮取ニ二升一分溫再服（〇此方及後之二方亦季玆
所ㇾ補也）

胸痺緩急者薏苡附子湯（散カ）主ㇾ之（〇正珍曰緩急
也者卽謂ニ急劇一也緩附字助字無ㇾ有ㇾ意也史記倉公
傳云文帝四年中人上書言意以形罪當傳西之長安意
有ニ五女一隨而泣意怒罵曰生子不ㇾ生ㇾ男緩急無ㇾ可ㇾ
使於ㇾ是少女緹縈傷ニ父之言一乃隨ㇾ父西又游狹傳且
緩急人之所ニ時有一也袁絲傳一旦有ニ緩急一寧足ㇾ恃
乎是也）
薏苡附子散方（〇方第）
薏苡仁（十五兩）大附子（十枚炮）
右二味杵爲ㇾ散服ニ方寸匕一日三服

心中痞（直解云卽胸痺也）諸逆（正珍云謂ニ水逆火逆等
諸逆治一也）心懸痛桂枝生姜枳實湯主ㇾ之（〇外臺云
仲景傷寒論心下懸痛諸逆大虛者桂枝生姜枳實湯
主ㇾ之與ニ今本一異也恐改ㇾ之乎）
桂枝生姜枳實湯方（〇方第）
桂枝　生薑（各三兩）枳實（五枚）
右三味以ニ水六升一煮取ニ三升一分溫三服

心痛徹ㇾ背々痛徹ㇾ心烏頭赤石脂丸主ㇾ之（直解曰寒邪
客ニ上焦一近ニ於前一則心痛而徹ㇾ背々痛而徹ㇾ心故
用ニ辛熱之劑一以散ニ寒邪一行ニ結氣一〇心典云取ニ赤
石脂一者所ニ以安ニ心氣一也）（此條劉棟以爲本文者是
也又云此證危急也
赤石脂丸方（〇方第　〇此方疑非ニ仲景氏方一今
姑存ㇾ之）
蜀椒（一兩一法二分）烏頭（一分炮）附子（半兩炮一
法一分）乾姜（一兩一法一分）赤石脂（一兩一法二分）
右五味末ㇾ之蜜丸如ニ梧子大一先ㇾ食服ニ一丸一日三服
不ㇾ知稍加服（〇直解云按上焦必有ニ沈寒一在ㇾ胃而
虫動ニ於膈一故用ニ烏附石脂一以溫ㇾ胃乾姜蜀椒以殺ㇾ

虫與上八方不侔也○名古屋子曰短氣之證内經仲景之言多屬虛寒者故後世爲治者亦因之戴復菴曰短乏者下氣不接下呼吸不來語言無力宜補虛四柱飲木香減半加黄芪山藥各一錢若不勝熱藥及痰多之人當易熟附子作生附在人活法餘皆倣此藥輕病重四柱飲不足取効宜於本方去木香加炒川椒十五粒更不効則用椒附湯上焦乾燥不勝熱藥者宜於椒附湯中加人參一錢尋常病當用姜附而或上盛燥熱不可服者唯此最良（）季茲曰名古屋氏說與本方不相涉宜删去之今姑存舊以俟他日）

腹滿寒疝宿食病篇第（○虢州曰腹滿後世之鼓脹々滿也係中焦又云疝名諸書多雖載之仲景所謂寒疝者卽疝之總名也○正珍曰疝說文云腹痛也字彙云陰病也正字通云腎病也又字彙正字通康熙字典並引釋名心痛曰疝々詵也洗々然上入而痛也又世俗以氣積如山爲解俱不盡疝疾之狀○素問長刺節論曰病在少腹々痛不得大小便病名曰疝得之寒云々○此病因發於寒邪故名寒疝也○疝氣二字見史記倉公傳）

腹滿時減々（依脈經補之）復如故此爲寒當與温藥（○金鑑云温藥者厚朴生姜甘草半夏人參湯也疑温藥字下脫此方云々○正珍曰此太陰病宜附子乾姜劑又曰附子粳米湯○季茲曰此條前本有一條卽陽明篇第□□□章宜不贅之故敢删去矣又此條首書云本是傷寒論之文然則宜在前卷而彼脫之故今載于此云）

病腹滿（裡證）發熱（裡熱發達於表者也）十日脈浮而數飲食如故（非胃家實之腹滿故能食也）若腹滿痛者厚朴七物湯主之（若以下據千金脈經補之○劉棟曰此條舉寒疝病之例也○正珍曰千金注引仲景千金外臺脈經俱作三物）

厚朴七物湯方（○方第　（○虢州曰此方桂枝湯去芍藥合小承氣也蓋其證實熱者當用之屬實者感風寒而腹滿者之主方也○劉子廉云此則表裡双解之劑如太陰篇桂枝加大黄湯之類也）

厚朴（半斤）甘草　大黄（各三兩）大棗（十枚）枳實（五枚）桂枝（二兩）生姜（五兩）

右七味以水一斗煮取四升温服七合日三服

腹中寒氣（千金外臺作寒氣脹滿按脹滿二字當補寒

作寒非也）雷鳴（留飲之所致也）切痛（寒邪之所致也）胸脇逆滿嘔吐（篤云腹中陰寒奔迫上攻胸脇以及於胃也）附子粳米湯主之

附子粳米湯方（○方第　○集驗有乾姜二兩是也）

附子（一枚炮）半夏（半升）甘草（一兩）大棗（十枚）粳米（半升）

右五味以水八升煮米取熟去米內藥煮取三升去滓溫服一升日三服（○季玆曰煎法本脫今據原書與外臺以補入之）

痛而閉者厚朴三物湯主之（○金鑑云腹滿而痛下利者用理中湯所以溫其中也腹滿而痛便閉者用厚朴三物湯所以開其上也）按之心下（以當作脇）滿痛者（金鑑曰滿痛之下當有□潮熱三字）此爲實也當下之宜大柴胡湯（劉棟曰心下痛按之石鞕脈沈緊者爲熱實大陷胸湯主之按之心下滿痛者爲內實大柴胡湯主之○成无已曰大滿大實堅有燥屎非駃劑則不能泄也如不至大堅痛邪熱甚而須攻下者又非承氣湯之可投必也故大柴胡湯緩以逐邪熱也○王宇泰曰屠氏四時治要謂仲景下證具備當行大承氣必先以小承氣試之按藥劑生靈之司命也死生傷寒之瞬息也豈以試爲言哉昔鷄峰張銳療一傷寒爲熱極欲與承氣湯如有掣其肘者姑持藥以待病者忽發戰悸覆綿衾四五重稍定有汗如洗明日脫然使其藥入口則人已斃矣由是觀之則屠氏之探試雖非仲景之本旨得非麤工之龜鑑歟○大柴胡湯方見于少陽篇）

厚朴三物湯方（○方第　○此方季玆所補）

厚朴（八兩）大黃（四兩）枳實（五枚）右三味以水一斗先煮二味取五升內大黃煮取三升溫服一升以利爲度

腹滿不減減不足言（千金作不驚人）當須下之宜大承氣湯（○劉棟曰此條承上文大柴胡湯之條而言旣雖服大柴胡湯以下之而其腹滿不減雖小減而其減不足言者當須下之宜大承氣湯○季玆曰此即陽明篇第□□□章理宜刪之然今姑存舊以俟後日○大承氣湯方見于陽明篇（道琢氏云陰陽應象大論○李仲梓願精微論有痞滿燥實堅之證是也）

心胸中大寒痛（千金方胸作レ脇寒下有二大字一）嘔不レ能二飲食一（千金方痼冷條有下飲食下レ咽自知偏從二一面一下流有レ聲決々然若十八字上）腹中寒氣（千金）上衝皮起出見有二頭足一上下痛而（千金方作二而作一）不レ可二觸近一大建中湯主レ之（○名古屋曰此等雖レ無二痛字一爲レ痛宜レ知）

大建中湯方（○方第）

蜀椒（二合去汗）乾姜（四兩）人參（二兩）

右三味以二水四升一煮取二二升一去レ滓内二膠飴一升一微火煎取二一升半一分溫再服如二一炊頃一可レ飲二粥二升一後更服當二一日食二糜溫覆レ之

脇下偏痛（金鑑曰偏字當二是滿字一當レ改レ之）發熱（脈經無二此二字一）其脈緊弦此寒也（鯱州曰此寒邪「入二厥陰經」而兼有二宿食燥糞一者也假令有二虛寒一有二燥屎一可レ下レ之）以二溫藥一下レ之（本義曰溫藥附子細辛是也所二以治一レ寒也下藥大黄是也所二以下一レ實也）宜二大黄附子細辛湯一

大黄附子細辛湯方（○方第）

大黄（三兩）附子（三枚炮）細辛（二兩）

右三味以二水五升一煮取二二升一分溫三服若強人煮取二二升半一分溫三服々後如二人行四五里一進二一服一

寒疝遶レ臍痛若發則白汗出（直解曰白汗者冷汗也○正珍曰白汗晉書夏統傳云統雅善二談論一宗族勸二之仕一統勃然作レ色曰聞二君之談一不レ覺寒毛盡戴白汗四匝淮南子曰奉二一爵酒一不レ知二于色一□一石尊則白汗交流藩合而考レ之白汗卽冷汗程林得レ之又按素問有二魄汗語一借音白汗經脈別論云眞虛痟心厥氣留薄發爲二「白汗」魄汗一通評虛實論云暴癰筋緛隨分而痛魄汗不レ盡至眞要大論云少陰在泉主勝云々魄汗不レ藏○本義白汗作二白津一注云發則白津出津似レ汗非レ汗也此汗本下部虛寒陰邪逼迫外越故以二白津二字一形二容之一理至微也○白汗本作二自汗一今從二千金外臺所一レ引改レ之）手足厥冷「其脈沈弦」二（ケツリテアリ）弦（正脈作緊）者大烏頭煎主レ之）○金鑑玄脈沈緊四字下章ニ入）

烏頭煎方（○方第）

烏頭（大者五枚熬去レ皮不二㕮咀一）

右以二水三升一煮取二一升一去レ滓内二蜜二升一煎令二水氣盡一取二二升一強人服二七合一弱人服二五合一不レ差明日更服不レ可二一日再服一

寒疝腹中痛及◦(外臺作引)脇痛(外臺有及腹二字)裡急者當歸生姜羊肉湯主レ之(鯱州曰此治下寒疝兼二血虛者上)○直解云寒疝之輕者不二繞レ臍痛一若但腹痛裡急(金鑑急字下有其脈沈緊四字)是寒邪散二漫於腹脇之間一也故用二當歸生姜羊肉湯一緩劑以和レ之

當歸生姜羊肉湯方 (○方第　○千金加二芍藥二兩一名二當歸湯一治二婦人寒疝虛勞不足若產後腹中絞痛(本草十劑云補可去虛人參羊肉之屬是)

當歸(三兩)生姜(五兩)羊肉(一斤)

右三味以二水八升一煮取二三升一溫服七合日三服

寒疝腹中痛◦◦ (二字外臺作二滿一字一) 逆冷手足不仁(以上烏頭煎之證) 若身痛(鯱曰脈浮弦或惡寒發熱之意含畜在二身疼痛之中一 ○身疼痛三字千金外臺作二一身盡痛四字一) 灸刺諸藥不レ能レ治烏頭桂枝湯主レ之

烏頭桂枝湯方(○方第)

烏頭○千金十五枚要略作二五枚一依レ之則此下當レ有二五枚字一千金作二秋乾烏頭一実中者五枚除二去角一外臺曰実中大者十枚

右一味以二蜜二斤一煎減レ半去レ滓以二桂枝湯五合一解レ之得二一升一後初服二合不レ知卽服二三合一又不レ知復至二五合一其知者如二醉狀一得レ吐者爲レ中レ病(○金鑑曰以二桂枝湯五合一解レ之溶化也令レ得二一升一謂以二烏頭所レ煎之蜜五合一加二桂枝湯五合一溶化令レ得二一升一也不レ知不レ效也其知者已效也如二醉狀一外臺方散得レ吐者內寒已伸故爲レ中レ病也

下利病篇第

熱利(身有レ熱致レ利也)下重者(謂二下焦重滯一也)白頭翁湯主レ之(身熱下利腹裏拘急下部沈重後世所謂熱毒痢也白頭翁湯可三以解二其熱毒一)

白頭翁湯方(○方第)

白頭翁(三兩)黃蘗　黃連(各三兩)　秦皮(三兩)

右四味以二水七升一煮取二二升一去レ滓溫服二一升一不レ愈更服二一升一

下利欲レ飲レ水者以レ有レ熱故也白頭翁湯主レ之(自利不レ渴爲二臟寒一與二四逆湯一以溫レ臟下利飲レ水多是內有二熱邪一所レ致與二白頭翁一以涼レ中雖レ然間亦有二津液內竭而然者一 或大汗後或大下若大吐後或瘡瘍灌膿後往々有レ之概爲二熱邪所一レ致非也又因二所レ飲之冷熱一以辨二其虛実一亦非也

季玆曰雜病諸篇未レ脫レ稿者故闕略甚多且有下引ニ先輩說二三一而不レ斷ニ其得失一者上今皆仍レ舊不ニ敢私一焉但如下有ニ方名一而無ニ藥品一及有ニ藥名一而無ニ煎法一之類上皆採ニ諸金匱要略一參以ニ外臺所レ引從ニ其是者一而載レ之然其余所レ補者一々細書以分レ之

孔子聖說考卷之上稿

大壑　平篤胤遺稿　　男　平田鐵胤　續
門人　碧川好尙
　　　角田忠行　攷

〇門人碧川好尙云。此の書は。赤縣太古傳。太昊氏の條々中にて。下に出されたる本文は。悉く鶡冠子泰鴻篇に採られたるが。其の泰鴻篇は。挂巻も可畏き。泰一小子の。太昊伏羲氏に。玄道の要旨を。敎へ授け給へる眞誥なれば神僊の語り續たる古傳なること。言まくも更なり。(太昊伏羲氏は、又の名を。太昊庖犧氏とも、蒼帝とも、春皇とも、大皥氏とも、木皇とも、太眞東王父とも、木公とも、青帝とも、扶桑太帝とも云ひて、神典なる大國主神に坐し、泰一小子は、又の名を、東海王淸華小童君とも、東華大神青童君とも、方諸青童君とも、青眞小童君とも云ひて、少毘古那神に坐すこと、赤縣太古傳、三五本國攷、皇國異稱攷を始め、春秋命歷序攷、玉だすき、其の餘の書どもにも、委く考へ措れたるを見て知るべし、)さて其の神語に。神聖。上聖。有道。聖人など有るは。師翁の考に。皇美麻邇々藝命を指てのたまへり。と謂れたれば。小縁に見過すべき事に非ず。また儒學者流がもて囃す。六經を始め。諸子百家の書どもに。聖人上聖など云ふ語は。數ふるに暇あらず多かれば。其の中には。聖人の古義に符へるも無には非ねど。十に八九は。殷湯王。周文王父子等が如き。擬聖を強て言へる語のみなれば。能く撰み採るべき事にこそ。今其の古義に符へる。神聖の稱號の見えたる中にも。此の神語ばかり古きは最稀なり。然るは鶡冠子の自著に。書採れるこそ。周の末世にもせよ。確乎として拔べからざる。古傳の有しを。其儘に記せるにて。自作の語に非ること。其の篇名を。泰鴻篇と謂ひ。泰皇問泰一曰。と有にても知られたり。(四庫全書提要に曰、鶡冠子三卷、案漢書藝文志載、鶡冠子一篇、註曰、楚人居深山以鶡爲冠、劉勰文心雕龍稱、鶡冠綿綿亟發深言、韓愈集、有讀鶡冠子一首稱、其博選篇四稽五至之說、學問篇、一壺千金之語、且謂其施於國家、功德豈少、柳宗元集、有鶡冠子辨

一首、乃託爲言蠹部淺、謂其世兵篇、多同鶡冠、據司馬遷所引賈生一語、以決其僞、然古人著書、往々偶用舊文、古人引證亦往々偶隨所見、如谷神不死四語、今見老子中、而列子乃稱爲黄帝書、未可以單文孤證、遽斷其僞、惟漢志作一篇、而隋志以下皆作三卷、或後來有所附益、則未可知耳、其説雖雜刑名、而大旨本原於道德、其文亦博辨宏肆、自六朝至唐、劉勰最號知文、而韓愈號知道、二子稱之、宗元乃以爲鄙淺過矣、此本爲陸佃所註、當日已不甚顯、惟陳振孫書錄解題載其名、云々と有り、僞書に非ず、と云ふ校正は精密なれど、泰鴻篇なる、神語などのさだ無きは、古傳を重むせざる、赤縣の通癖なれば、論ふに足らず、)偖此の書に。泰鴻篇の全文を。大概掲たるは。要無き所爲なれど。神聖上聖など云ふ語のみを。摘て出すも。事足らぬ心地せられ。また註釋をも。精密く就し措れたれば。全文を擧る上は。併せ採りて載し。太古傳には。漏す事と爲しぬ。斯て聖説攷の名も。既く著述目錄には載られたれど。他し著書どもの勞きに暇無く。其の艸稿とては未だ就らずして死れき。僅に此の神語の終りに。聖の等定めとて。記し措れたる。十枚ばかりの物より餘には有こと無し。好尚負けなき所業なれど。聖説考の稱の。空しく埋れむも遺憾く思ゆれば。斯は物しつ。予も亦師翁の攷説に本づきて。諸子百家を始め。種々の書に。湯武周孔の擬聖等を。辨駁せる説ども。見るが隨に掇ひ聚めて。附錄と爲し。少か拙説をも加へたり。抑眞聖擬聖と云事。古人の説にも。邂逅には見えたれど。逆賊なる湯武等を。眞聖の如く尊尚する俗儒輩は。何くれとさだする者も多かるべく。既に諸越は。大戴禮記本命篇に。大罪有五。逆天地者、罪及五世。誣文武者、罪及四世。(盧辨註非聖人者)逆人倫者。罪及三世。誣鬼神者。罪及二世。殺人者罪止其身。故大罪有五。殺人爲下。(また文選嵆叔夜與山巨源絶交書に、毎非湯武而薄周孔、在人間不止、此事會顯世敎所不容、此甚不可一也、五臣注曰、湯與武王、以臣伐君故非之、周公孔子立禮、使人澆競、故薄之、言非薄不止、則必會明於世、

則爲禮敎之人不容我也とも見えたり、)と有る一つを以ても知るべし。然るを大皇國は。現御神の大御心と。御世々。御政事の。寬仁大度に坐すが故に。斯有る事迄の御掟は無れど。眞聖を誹謗する事は。物學ぶ人は猶更有まじき事也。また湯文武姬旦等を評論せられたるも。誹らるゝに非ず。其は下に附錄して。辨へたる如く。稚川翁も。士卒覽吾此書者。必謂吾非毀乎聖人。吾豈然哉。但欲盡物理耳。理盡事窮。則似於誇詘周孔矣。云々と論はれ。(なほかゝる類の語は、抱朴子中に多く見えたり。委くは本書に就て見るべし、)師翁も。春秋命歷序攷に。哀れ予や小人にして。今世薦紳大家の學風の。如何に云ふ事を知らず。然れど皇國人にして。彼國籍を學ぶには。固より彼の尊內卑外の義理は更なり。眞聖擬聖を分別して、擬聖の誣妄には惑ふまじき。恒の學則なくて叶はぬ事なるを。俗の周代學者たち。然る規律ある事なく。周人にして。周制を奉ずる如く。姬昌父子らが物せる事は。絕て今の世人などの。言加ふべき事に非ず。と偏執して。適にも我が如く。其非を辨ずる者有れば。甚く驚き。かつ怒りて。其說の當否をも論せず。邪說の如く云ひ誹るは。最も固陋しき事にこそ。爭で眞好古の見の高尙ならむ。薦紳大家の公議を經て。俗學者流の。心を洗ひ。耳を澄さむ由もがな。と慷慨さの餘りに謂れたる。倶に然る事なりかし。(　呂氏春秋疑似篇に、使人大迷惑者、必物之相似也、玉人之所患、患石之似玉者、相劍者之所患、患劍之似吳干者、賢主之所患、患人之博聞辯言、而似通者、亡國之主似智、亡國之臣似忠、相似之物、此愚者之所大惑、而聖人之所加慮也、と有るも同じ事にて、擬聖の眞聖に似たるは、愚人の惑ふ甚しき物なり、)斯て此の書に加へむとて。師翁の詠じ措れたる歌あり。其は。「赤縣籍にかき惑はせし聖等の。をこととまことの品定めせむ。」好尙云。是より以下。六條の解釋。皆師說也。(予が說は、好尙云、と記せり、)

【一】秦皇問泰一曰。天地人事三者孰急。泰一曰。愛精。養神。內端者。所以希天也。

吾將告汝神明之極。天地人事三者。復一也。散以八風。揆以六合。事以四時。寫以八極。照以三光。收（收一作牧）以刑德。調以五音。正以六律。分以度數。表以五色。改以二氣。致以南北。齊以晦望。受以明曆。日信出信入。南北有極度之稽也。月信死信生。進退有常數之稽也。列星不亂。其行代而不干位之稽也。大明之以定一。則萬物莫不至矣。

此の條より下六條までは。鶡冠子泰鴻篇に取りて載せり。（抑かの泰鴻篇なる、泰皇、泰一問答の事は、前後の篇と合せて、熟々讀考ふるに、文章語路いと異にして、總ての文に似ざるは、決めて鶡冠子の文に非ず、いと古く傳はり來し、古說の全文を、其の儘に加へて、一篇と爲たる物なること疑なし、然るに其の文中に、其の語卑俚にして、泰一の眞語と、重複せる語ども有るは、鶡冠子より古き世に註せる語の、本文に混淆せるにて、古書に最多かる例なり、其は鶡冠子も、早く知たりけむを、姑く存して論せざりしか、其は何も有れ、今新に此の書を撰ぶに、其の意に效ふべきにも非ざれば、己が心の及ぶ限りは、然る混淆の文を、皆删り捨て、文章相屬して、泰一の眞語と所思ゆる文の限りを採りて載しつ、）泰皇は。前文に。太昊と有るに同じ。史記秦の本紀に。古有天皇。有地皇。有泰皇。泰皇最貴。と有る所の索隱に。按天皇地皇之下。即云泰皇。當人皇也一云泰皇太昊也と見えて。其一說こそ。却りて正解なりけれ。太泰昊皇は。古書に相通じ用ふること。常の例なり。（其は太帝を泰帝と作き、昊天を皇天とも作くにて知るべし。）泰一は。人皇氏の傳として。開闢の功績を助け成せる泰一にて。神農傳に載する。泰一小子すなはち是なり。（なほ委くは、其の傳に至りて註ふを、合せ考ふべし。）此は人皇氏の條に註せる如き。道德の神眞なる故に。三才の大義を問へり。天地人事とは。天文。地理。人事なり。其は素問の氣交變大論に。黃帝問曰。五運更治。太過不及。可得聞乎。岐伯對曰。此上

帝所貴。先師傳之。臣雖不敏往聞其旨。（以上は、甚く略文して引たり、以下は然らず、上帝とは、三皇傳に委曲せる如く、昊天上帝天皇氏を云ふ、郎玄籍に謂ゆる、太上道君なり、六節藏象論に、岐伯曰、此上帝所秘、先師傳之也、と有る所の王氷註に、上帝謂上古帝君也、と註せるは、甚じき非言なり、先師は同註に、先師岐伯祖之師、僦貸季上古之理色脉者也、移精變氣論、曰、上古使僦貸季理色脉而通神明、八素經序云、天師對曰、我於僦貸季理色脉、已三世矣、言可知乎、と云へるは然る言なり、）帝曰。余聞得其人不教。是謂失道。傳非其人。慢泄天寶。余誠菲德。未足以受至道。然而衆子哀其不終。願夫子保於無窮。流於無極。余司其事。則而行之。（得其人と云より、泄天寶と云までは、黃帝以前より、世に傳はれる、天語と聞えたり、其は余聞と云ひ出たるにて知べし、猶思ひ合すべき事あり、そは漢武帝內傳なる、西王母の語にも、傳非其人、謂之泄天道、得人不傳、是謂蔽天寶、非限妄傳、是謂輕天老、受而不敬、是謂慢天藻、泄蔽輕慢四者取死之刀斧、延禍之車乘也、とも見えたり、）岐伯曰。請遂言之。上經曰。夫道者上知天文。下知地理。中知人事。可以長久。此之謂也。（著至教論にも、道上知天文、下知地理、中知人事、可以長久と見ゆ、上經とは、痿論に、下經曰、と引たる文の三あるを見るに、醫說なるが、其の註に、下經上古之經名也と云へり、然れば此なる上經は、其の上卷にて、天地及び人事を說たる、古經なりしと見えたり、）帝曰何謂也。岐伯曰本氣位也。位天者天文也。位地者地理也。通於人氣之變化者人事也。（張介賓云、三才氣位、各有所本、位天者爲天文、如陰陽五星、風雨寒暑之類是也、位地者爲地理、如方宜水土、草木昆蟲之類是也、通於人氣之變化者、爲人事、如表裏血氣、安危病治之類是也、）故大過者先天。不及者後天。所謂治化而人應之也。（運大過者、氣先天時而至、運不及者、氣後天時而至、天之治化運於上、則人之安危應於下、）と有るにて知るべし。（秦一曰。愛精。養神。內端者。所以希天

也とは。愛精。養神。內端の道は。玄學の要旨にて。其の本は。泰一小子。こゝに始めて。世に傳へたる事なるが。後出の眞人たち。次々に其の蘊奧を精説して。其の修術千端萬緒あれば。此に盡し難けれど。聊言むに。愛精とは云へど。生涯泄精を絶するの謂に非ず。愛惜する義なり。そは老子の訣言に。房中之事。能生人能殺人。故知而能用者。可以養命。況服藥者乎。男不可無女。女不可無男。不可強而閉之。若強而閉之。則意不能不動。意動則神勞。神勞則損壽。若夢與鬼交。其精自泄。則一洩當十也。と有るにて知べし。(後世道士の著せる諸書に、男女の道を絶する説も多く見ゆるは、悉く西方の邪法に效へる妖説なり、神仙の道には、此を絶する説なきこと、抱朴子にも委く見えたり、此事に就ては、記さまほしき事ども多く有れど、其は別に撰める物あり、)養神とは。我が固有の性神を。身體の中府に安養して。離遊せしめざるを言ふ。そは胎息經に。胎從伏氣中結。(幻眞註、臍下三寸爲氣海、亦爲下丹田、修道者、常伏其氣臍下、守其神

於身內、神氣相合而生玄胎也、玄胎既結、乃自生身、即爲內丹不死之道也、)氣從有胎中息。(神爲氣子、氣爲神母、神氣相逐、如形與影、胎母既結、即神子自息、即元氣之不散也、)氣入身來爲之生。神去離形爲之死。(身者神之舍、神者身之主也、舍安靜、則神即居之、舍躁動、則神去之、神去氣散、安可得生、是以人耳目手足、皆不能自運、必假神以御之、學道養生之人、常拘其神、以爲神主、主既不去、宅豈崩壞也、)知神氣可以長生。固守虛無以養神氣。(我命在我、不在天地、神氣人不能知、至道能知也、知者但能虛心絶慮、保氣養精、不爲外境愛欲所牽、恬淡以養神氣、即長生之道畢矣、)神行即氣行。神住即氣住。(所謂意是氣馬、行止相隨者也、欲使元氣不離身、則即先拘守至神、神不離身、則氣亦不散、自然內實、不饑不渴也、)若欲長生神氣相住。(相住者、即是神氣不相離也、邪氣不盡不爲仙、元氣即正氣也、常滅食節欲、使元氣內運、元氣壯、則邪氣自消矣、)心不動念無來無去不入。

自然背往。(神與レ氣在ニ母腹中一、本是一體之物、及ニ生下一爲ニ外境愛欲一所レ牽、未ニ甞一一息暫歸ニ於本一、人知ニ此道一、背泯ニ絶情念一勿レ使ニ神氣出入去來一、能不レ忘、久而習レ之、神自住矣、)勤而行レ之。是眞道路矣。(修眞之道備ニ盡於斯一、凡胎息用功後、關節開通、毛髮疎暢、卽但鼻中微々引レ氣、相ニ從四肢百毛孔中一出往而不レ返也、後氣續到但引レ之、而不レ吐也、切ニ々於徐々一、雖レ云レ引而不レ吐、所レ引亦不レ入ニ於喉中一微々而散、如レ此內氣亦下流散矣、)とあり。是全文なるが。此の目早く。稚川翁の子書に見えて。文章の古雅なるは。古神仙の遺經なるに論なく。幻眞の註。また說得て妙なり。(なほ養神行氣の術ゐ、また別に委く集記せる物あり、)さて內端とは。內は內心なり。端は端正端直など云ふ端の義にて。內心を正直ならしむる由なり。是また老子の語に。勿レ謂ニ闇昧一。神見ニ我形一。勿レ謂ニ小語一。鬼聞ニ我聲一。故天不レ欺レ人。示レ之以レ影。地不レ欺レ人。示レ之以レ響。人生ニ天地氣中一。動作喘息皆應ニ於天一。爲レ善爲レ惡。天皆鑒レ之とあり。此內端を敎へたる語なり。(唯に外行を文りて人に恥ず、屋漏にも恥ずと云ふは、後世學の論なり、古神眞の玄德を修する則は然らず、假令人に恥ぢ、屋漏に恥ること有りとも、天地鬼神に質して愧ること無きを、內端と云ふ、)所ニ以希レ天也とは、愛精養神內端を修する事は。終に天宮玄都に昇りて。神位に至らむ事を希ふ所以なり。と言へる義なり。(內端のことも、猶言まほしき古語の多かれど、是また別に記せる物有れば、其の大約を云ふのみ、)さて此の一節は。泰皇氏の。天地人事の急務を問へるに應じて。まづ人事の第一義を示し。なほ次々に。三才の要旨を廣演せるは。深き神慮ある事とは所思ゆれど。其の神意は測り難し。(然れど、試にしひて言はゞ、稚川翁の子書勤求の卷に、凡人之所ニ汲々一者、勢利嗜欲也、苟我身之不レ全、雖ニ高官重權、金玉成レ山、妍艷萬計一、非ニ我有一也、是以上士、先營ニ長生之事一、長生定可ニ以任レ意、若未ニ昇レ玄去レ世、可三且地ニ仙人間一、若ニ彭祖老子一、止ニ人中一數百歲、不レ失ニ人理之懽一然後徐々登遐、亦盛事也、然決須ニ好師一、師不レ足レ奉、亦無レ由レ成、と云れたる意ばへにや、猶よく考ふべし、)こ

吾將レ告二汝神明之極一と云るより。萬物莫レ不レ至矣。と云ふまでは。天地造化の道の要旨を説たり。告二神明之極一とは。天神地祇の。世界をかく成立し。終古に。其の道の行はるゝ極旨を告むとなり。天地人事三者復一也とは。天は覆ひ地は載せ。天道は圓。地道は方と異り。人事は。其の天地に象を取ると言へども。實には其の本。一元氣の運動より起りて。一。二を生じ。二。三を生じて。三才始れる故に。道の本元は復一なり。と云へる義なり。（なほ太一傳の、道生レ一、一生レ二、二生レ三とある所に、委く説たるを見るべし。）散以二八風一は。八風とは。爾雅釋天に。東風謂二之谷風一。（詩云、習々谷風、）南風謂二之凱風一。（詩云、凱風自レ南、）西風謂二之泰風一。（詩云、泰風有レ隧、）北風謂二之涼風一。（詩云、北風其涼、）淮南子地形訓に。何謂二八風一。東北曰二炎風一。東方曰二條風一。東南曰二景風一。南方曰二巨風一。西南曰二涼風一。西方曰二飂風一。西北曰二麗風一。北方曰二寒風一などあり。（八風の名は、なほ讖緯の書ども、素問、靈樞、呂氏春秋、その餘の諸書にも多く見ゆれど、其の名互に大同小異なり、其をみな抄し出むこと、煩ければ漏しつ、抑風の名は、國により處によりても、違ふ物にし有れば、然る相違の有るべき物なり。）揆以二六合一は。陸佃が註に。揆言レ總二之六合之内一也。と云へるが如し。（六合は、四方上下なり。）事以二四時一は。增韻に事營也。とあるに從れり。（また釋名に、事偉也、偉立也、凡所レ立之功也、と有るに依りて、事にと訓むも惡からじ、）寫以二八極一は。陸佃註に。寫言レ放二之八極之外一也と云へり。（八極の事は、三皇傳の總論に、淮南子の文を委く引たるを見べし。）照以二三光一は。三光は日月星なり。牧以二刑德一は。春生じて冬藏むるを言ひ。調以二五音一は。天下の音を調ふるに。宮商角徵羽の五音を以てし。正以二六律一は。其の音を正すに。黃鍾。大簇。姑洗。蕤賓。夷則。無射の六律を以すとなり。（五音をまた五聲とも云ふ、此の六律を陽聲と云ひ、大呂、應鍾、南呂、林鍾、仲呂、夾鍾を、六呂と云ひ、陰聲と云ふ、此の律呂を合せては、十二律と云ふ、委くは、左傳昭公二十年十二月の註疏、禮記月令の註疏、などにて

見べし、猶黃帝傳にも云ふを見よ）○分以度數は。謂ゆる天地の度數なり。表以五色は。世に表はれて著明なるは。靑赤黃白黑の五色なるを言ひ。改以二氣は。陸佃が註に。亭之以溫涼。毒之以寒暑。と云へるが如し。（また或は、陰陽を云るならむも知べからず。）致以南北は。大地或は北し。或は南して。四時暑寒を爲す由なるべく。（大地の、或は北に上り、或は南に下りて、暑寒を爲す由は、三皇傳の末に、尙書考靈曜を引きて、旣く論へるが如し、）齊以晦望は。月の晦望して。十二月を齊ふるを言ひ。受以明曆は。受は疑なく授の誤字にて。日月星辰運行に依りて。曆を知しむる義なるべし。（陸佃云、曆謂日月星辰、蓋四則至矣、而其道無乎不在、在此爲此、在彼爲彼、故八風得以散、六合得以揆、四時得以事、八極得以寫、三光得以照、五音得以調、六律得以正、刑德得以牧、度數得以分、五色得以表、二氣得以改、南北得以致、晦望得以齊、明曆得以受、然則道之所在、於彼乎、於此乎、其亦無所不在乎、故曰天地人事三者復一也、）日信出

信入。南北有極度之稽也は。同書王鈇篇に。鶡冠子曰。天者誠其日德也。日誠出誠入。南北有極。（冬日至而北夏日至而南）故莫弗以爲法と云へるは。此の本文を弘めしなり。（本文の陸佃が註に、此申致以南北之儀、冬至日在牽牛、夏至日在東井、其長短有度、と云へるは然る言なり、）月信死信生。天者信其月刑也。月信死信生。終則有始。（朔而後魄生、望而後魄死、）故莫弗以爲政と云へるは。此の本文を弘めしなり。（本文の陸佃が註に、此申齊以晦望之義、二五而盈、三五而闕、其損益有數と云へり、）○列星不亂。其行代而不干。位之稽也は。（陸佃が注に、此の申受以明曆之義、五位二十八舍、各有常次と云へり、）王鈇の篇に。天者明星其稽也。（明星大星也、二十八舍之類、）列星不亂。各以序行。故小大莫弗以爲章。（小星不見陵、）天者因時其則也。四時當名代而不干。（彼謝此代而無侵越、）故莫弗以爲必然。天者一法其同也。前後左右古今自如。（奈何杞人之憂其崩墜也、）故莫弗以爲常。天誠信明因一。（誠

誠其日德、信々其月刑、明々星其稽、因々時其則、一々法其同、)不為衆父。(為衆父々、)易一故莫能與爭先。(南華曰、一而不可不易者道也、)易一非一。(一不足以圍之、)故不可尊增。成鳩得一。故莫不仰制焉。(所謂候王得一、為天下貞者也、)と云へるは。此の本文を弘めて。其の道の大元を。成鳩氏の神德に歸せるなり。(成鳩氏とは、天皇氏を云ふこと、其の傳に既に委曲せるを見べし、)鶡冠子が此の語の。田藝衡が評に。奇理躍出鬼斧青㝠と言ひ。本文の陸深が評に。語再見。而句悠颺更爽と言へり。(此の外に、諸人の評語多かれど、其は皆洩しつ、)今この陸深が評を按ずるに。本文の語を再見と云へるは。今引たる鶡冠子が語は。第九王鈇篇にあり。本文は。第十泰鴻篇に出たるがゆゑに。再見と謂へるなれど。實には此なる泰一の語。これ本文にて。王鈇篇なる鶡冠子の語は。此の泰一の語を。布延せるなれば。前に出たれど。却りて再見なり。此の由來を深く思ふべし。(上にも云へる如く、鶡冠子が學は、泰鴻篇なる、泰一の語に基して、立たる學なれど、惜きかな、其の泰鴻篇の語中に、鶡冠子以前の人の注評混淆して、眞僞ある事を辨へず、悉く取りて、泰一の眞語と為して、一學を立たる故に、其の眞に據りて云へる説は今引たる文の如く圓妙なれど、其の僞を僞と知らず、其によりて云へる説には、同じ鶡冠子が語とは、所思ざる計りの語ども有り、此は此の書を熟く讀まむ人は、自づからに、誰も知るべき事なれば、其の由來を少か驚かし置のみ、抑道の議は、古語に徵して祖述すべく、臆説すべき事に非ざれば、其の祖述する道義に所見ありて、書に著さむと為るには、必ず先つその祖説を擧て、其より説出して、其の説千變萬化に支流すと云へども、終に祖説に會するを、能く體裁を得たりと云ふ、天元紀大論に、黄帝曰、善言始者、必會於終、善言近者必知其遠、とある是なり、然るに鶡冠子、さる神眞の古語を得て、其學それに基しつゝも、其の泰一語中に、後の註評の淆れる事を辨へず、かつ自語を先にし、神語を後に出せるが故に、其の書を讀て、泰鴻篇に至らざる間は、其の臆説の

如く聞ゆめり、他書にかつて所見なき、泰一の神語を、表し出せる功は大なれど、此は聊か議せざること能はず、但し然る不體裁は、此の子書のみに非ず、老、列、墨、莊、文、華の諸子も、其の失無きに非ず、）天明三以定一。則萬物莫不至矣は。三とは。春夏秋の三時を云ひ。一とは冬の一時を云ふ。其は古註に。三時生長。一時煞刑。四時而定。天地盡矣と云るにて知るべし。（此の文上に連けて、本文と爲たるは誤なり、そは上文に、天明三云々、と有ると同意にして、語の平なるを以て知られたり、但し天地盡、と云ふ語の有べくも非ざれば、此は疑なく本は、天地之道盡矣とありて、天地の道を說盡せる由の注なりけむを、之道の二字を寫し落せるなり、）萬物みな。四時に。草木の榮枯する趣に同じき故に。莫不至とは言へり。

【二】夫物之始也傾々。至其有也錄々。至其成形。端々王々。自若則清。動之則濁。神聖踐承翼之位。以與神皇合德。按圖正端。以至天極。兩治四致。間以上息。歸時離氣以成萬業。一來一往。視衡低仰。五官六府。分之有道。無鉤無繩。渾沌不分。大象不成事無經法。精神相薄乃傷百族。偸氣相時後功可立。先定其利待物自至。素次以法。物至輙合。法者天地之正器也。用法不正。玄德不成。上聖者。與天地接結交連而。不解者也。

前節に。天地の道を說き。此に人事を說たり。物之始也と言ひ出たるは。物類の始を云へる如く聞ゆれども。人の成生する始めを云へり。傾々は。陸佃註に。未正之貌と云へるが如し。○至其有也錄々は。註に未能拔於常流之中。故曰錄々と言へり。（漢書の蕭曹贊に、當時錄々未有奇節、とある師古注に、錄々猶鹿々也、言在凡鹿之中也と云ひ、灌夫傳に、此特帝在、即錄々の註に、猶碌々也と云へり、）○至其成形端々王々は。註に。端々傾々之反。王々錄々之反とあり。

○自若則淸。動之則濁は。玄家の諸書に。謂ゆる靜心恬淡の祖語なり。(陸佃註に、人心譬如槃水、莫動則平、不撓則淸、微風過之、則不可以得水形之正矣、と云へるが如し、)○神聖踐承翼之位。以與神皇合德は。陸佃註に。承翼之位蓋天位也。前後曰承。左右曰翼也。神皇蓋昊天也と云へり。然る言なり。昊天とは。天日を云へば。神聖は。天日と德を合する物ぞ。と言へる意なり。○按圖正端。以至天極とは。此の圖は何物の圖と云こと詳ならず。若くは謂ゆる河圖を云ふか。其は至天極と云へる文勢。自づから彼の圖を按じ。初發に謂ゆる內端の道を修して。其の天極太一の。無爲なる道に至る。と云へる如く所聞ればなり。(天極は、本書に無極とありて、無或作天、と有るに從へり、此の本文陸佃注を欠たり、後人なほ能く考ふべし、)○兩治四致。閒以止息は。兩治四致の語。己いまだ解釋すること能はず。後人の考へを俟なり。(陸佃注に、兩治上下察也、四致、普遍四方也とあれど、信がたく所思ゆ、)閒以上息とは。時々に止息の法を以て、行氣するを言へり。(陸佃注に、隨緣、越感無所不周、如上所謂可謂至矣、然而動息則靜、語息則嘿、豈常離此寂然之地哉と云へり。)○歸時離氣以成萬業とは、其の行ひ春夏秋冬某々の時に應じ。氣に隨ひて。背ふこと無く物すれば。萬業成就すと云へる意なり。(陸佃注に、離附也と云るが如し、)一來一往。視衡低仰とは。時氣の。彼來り此往く趣を視ること。物の輕重に隨ひて。衡の低仰を察する如く。懇懃に察して。萬業を成す由なり。○五官六府。分之有道とは。腹內の謂ゆる。五藏六府の官能を。分ち知るに道あり。と言るなり。(此邊の陸佃註、すべて取べき說は一事もなし、)○無鉤無繩。渾沌不分とは。鉤は矩を言ひ。繩は規を云ふ。五藏六府の形狀官能を知るに。規矩なくては。渾沌として分らず。と言ふ義なり。○大象不成事無經法とは。大象は。攝生の大體にて。發端に謂ゆる。愛精養神內端を云ふ。是の大體成ざれば。攝生の事に經法無しとなり。○精神相薄乃傷百族は。上古天眞論に。上古聖人之敎下也。皆謂之虛邪賊風避之

有時。（張介賓云、此上古聖人之教民遠害也、虚邪謂風從衝後來者、主殺主害、故聖人之畏虚邪、如避矢石然。此治外之道也、）恬惔虚無、眞氣從之。精神內守病安從來。（恬安靜也、惔朴素也、虚湛然無物也無窨然莫測也、恬惔者、泊然不願乎其外、虚無者漠然無所動於中、所以眞氣無不從精神無不守、又何病之足慮哉、此治內之道也、）と有るに相發して考ふるに、百族とは、四肢百骸など言ふに同く、身體の諸器を云ひ。愛精養神の道を知らで。精神を耗し。相薄き者は。賊風虚邪の類に。百骸を傷はる。（陸佃が註に、精神相戰、百族爲之不寧と說たるは、薄迫也、と云ふ義に見たるにて非なり、薄入聲厚之對也、と云へる訓を取べし。）偸氣相時後功可立とは。抱朴子釋滯卷に。得胎息者。能不以鼻口噓吸。如在胞胎之中。則道成矣。（上に引たる、胎息經の旨におなじ。）初學行氣。鼻中引氣而閉之陰。以心數至一百二十。乃以口微吐之。及引之皆不欲令己耳聞其有出入之聲。常令入多出少。以鴻毛著鼻口之上。吐氣而鴻毛不動爲候也。漸自轉增其心數。久可以至千。至千則老者更少。日還一日矣。（これ卽ち氣を偸む法なり、中にも、令入多出少、と云ふこと、偸氣の要文なり、遵生八牋に引たる。蘂珠洞微と云ふ物に、息之出也、天地盜我元陽之氣、息之入也我盜天地之氣、若能眞人潛測、心息相依以歸根、則息盜天地之氣矣と云へり、）夫行氣當以生炁之時。勿以死炁之時也。故曰。僊人服六氣。此之謂也。一日一夜有十二時。其從半夜以至日中。六時爲生炁。午後以至夜半。六時爲死氣。死氣之時行氣無益也。（これ卽ち時を相する法の一端なり、口訣なほ多かり、道書どもを見て知るべし、）行氣或可以治百病。或可以入瘟疫。或可以禁蛇虎。或可以止瘡血。或可以居水中。或可以行水上。或可以辟饑渴。或可以延年命。其大要胎息而已。これ卽謂ゆる氣を偸むに。時を相して後に。其の功用を爲す趣なり。（なほ行氣の術を得て後に立べき功用の多かれど、此は別に抄せる物あれば、此にはたゞ、其の大要をのみ引出たり、）○先

づ定其利待物自至とは。上件の如く。まづ其の身體の利を定むれば。其の玄德自然にしきて。天下に及び。迎へずして。物自づからに至る。其の時を待となり。〇素次以法。物至輙合とは。素は中庸に。君子素其位而行。不願乎其外。素富貴行乎富貴。素貧賤行乎貧賤。素夷狄行乎夷狄。素患難行乎患難。君子無入而不自得焉。とある素と同義にて。次に處ては。と言むが如し。(然れば字書どもに、素猶見在也、と註せるも然る言なり、斯て此の中庸の語は、今の本文を、説延たるなり) 以法とは。天地の道に因る由なり。物至輙合は。物至りて。我が玄德に合ふ義なり。〇法者天地之正器也とは。天地の道は不易なるを。人事は法をこゝに取る故に。天地之正器とは言へり。〇用法不正玄德不成とは。天地の道に法ること正からねば。我が玄德は成らずと言へるにて。老子に。營魄抱一能無離乎。(葛質輻註云、營營窟也、魄體魄也、一者魂也、禮記云、魂氣歸天、體魄下降、魂魄二字自斯然矣、淮南子云、精神者天之有也、骨骸者地之有也此直以魂爲精神、以魄爲骨骸、淮南所云精神者、即禮記所云魄者、皆老子所云一者也、人以體魄爲營窟、固擁合抱而神不離舍、五十五章云善抱者不脫、) 專氣致柔能嬰兒乎。(專團聚也、易云、坤其靜也專、其動也闢、淮南子精神訓、夫血氣專於五藏不外越、則胷腹充而嗜欲省矣。五十三章云、骨弱筋柔、嬰兒、莊子庚桑楚作兒子、嬰兒兒子、雖無異義、嬰婦人胸前之嬰、纔上句抱字可見、) 滌除玄覽能無疵乎。(玄覽玄鑑也、淮南子云、執玄鑑於心照物明白無疵、不辨他人是非也、莊子人間世云、達之人於無疵、以上三節寫自修事、) 愛民治國能無爲乎。天門開闔能爲雌乎。明白四達能無知乎(以上三節、寫治人事、而愛民治國句、承營魄抱一句、天門開闔句、承專氣致柔句、明白四達句、承滌除玄覽句焉、)生之畜之。生而不有。爲而不恃。長而不宰是謂玄德。(天門耳目鼻口也、耳之於聲、目之於色、鼻之於臭、口之於味、其心以爲不然者、闔而不納、以爲然者開而納之、世間纔有然不然之事、口將從辨

之、而一切付之不言、此謂之爲雌、凡門之開闔、雄鷄報晨夕、能爲雌者、不言之敎也、莊子天運云、其心以爲不然者、天門不開矣、愛民治國如抱一無離、開闔不言、如嬰兒、明白四達如玄鑑、皆推自修之德、而及天下也、生以爲生、畜以爲畜、非所謂玄也、逐件不以爲然、豈非玄德乎、）と有るは。即此の本文を委說せるなり。（上聖者。與天地接結交連、而不可解者也とは。老子に。善閉無關鍵。而不可開。善結無繩約。而不可解。是以聖人常善救人。故無棄人。常善無棄物。是謂襲明。（休文云、聖人兼愛人物、不辨是非、不別賢愚、是謂襲明之德、襲襲裼之襲、掩美也、襲明猶言韜光、莊子所云葆光者也、）と有るは、此の語を祖述せるなり。

【三】是故有道南面執政。以衛神明。左右前後靜侍中央。開原流洋。精微往來。鴻鴻（一本作傾々）繩々。內持以維。外紐以經。行以理執。紀以終始。同一殊職。立爲明官。五范四時。以類相從。味玄生色。音聲相衡。

此より以下は。有道にして。天下を治むる樣を告敎ふるなり。（南面執政。以衛神明とは。神明は。天神地祇を總て稱ふ語なれど。此にては天日を云へり。其は史記封禪書に。東北神明之舍。西方神明之墓也。と有る註に。張晏曰。神明日也。日出東方謂陽谷。日沒於西也。墓濛谷也と有にて知べし。（此の註に據るに、封禪書の本文に、東北とある北は、必方の誤字なり、是本より東北と有なむには、下文は必西南と有るべきに、西方と有れば、本は東方と有しを、東北と誤寫せること疑なし、張晏註の濛谷を、今本に、北谷と有れど、此は漢書の註に依りて改めつ、斯て漢書の師古註に、此の張晏が說を非也とて、云へる說は却りて非なり）さて易說卦傳の古註に。離者明也。萬物皆相見。南方之卦也。聖人南面而聽天下。嚮明而治。蓋取諸此也。とある（此等の文を、俗の學者等は、說卦傳の本文として釋來つれ

ど、此は帝出乎震、齊乎巽、相見乎離、云々と有る文の註なり、亦得て在べし、）正義に、以離爲象日之卦、故爲明也、日出而萬物皆相見也、故聖人南面而聽天下、嚮明而治也、故云蓋取諸此也と有り（こは要となき文を略し、意を取りて引たり、）然れど、太昊氏八卦を作れるは、泰一に、天地人事の極を闡しより後の事なれば、離卦に取ると云へるは、本末違へり、其は此の本文の意は、有道の政を執るには、天日神明に法を取りて、南方は、日の盛なる極にし有れば、其の盛德を衞りて、南面に座せよと言へる義なるを、太昊氏八卦を作る時に、其の告に從りて、離を南方の卦と爲し。君王の面する方と定めたるなり（此は太昊氏の泰一に。三才の道を問へる事實の、八卦を作れるよりは、以前なる事の趣を、詳に辨へ知たらむには、疑ひ有まじき物なり、）惜しか定たるより。遙後に至りて。太古より王者の南面し來れる事と。卦象の旨とを打合せて、右の古註を始め。卦象に取りて。王者の南面を定たりと謂ひて。右のごと註せるなり。故是を以て。本末違へりとは

論ふなり。（凡て古學は、和漢ともに、事實の本末を能く辨へずては、末に至りて、甚き相違の出來る物なれば、かゝる事はし、殊に其の本末を索むるを要と爲べし、）左右前後。靜侍中央とは。何處にまれ、住する處を中央として、天日の東に出て、南に高く西に沒し。北に隱るゝ有狀を。左右前後に法と爲て、政むる義なり（說卦傳に、帝出乎震、齊乎巽、相見乎離、致役乎坤、說言乎兌、戰乎乾、勞乎坎、成言乎艮、と有るは、謂ゆる後天の卦位によりて、今云ふ義を、小ざかしく說たるなり、）開原流洋精微往來とは、右の如く。道の大原を開立して、世に流洋せしめ。精微に。其の道に往來稽索して。政むる由と聞えたり。（猶後生の追考を俟なり、）傾々繩々。內持以維。外紐以綱とは、傾々側貌。繩々正貌と。陸佃が註せる如し。維は。四維の維、綱は三綱の綱。紐は字書に。結也束也と云へる義なり。（人の四維は、禮義廉恥、三綱とは、君爲臣綱、父爲子綱、夫爲妻綱、とある類なり、）さて文意は。政を執るに。或は傾々。或は繩々たらば。我が內を

持するに。四維の類なる內德を以てし。外を紲び治むるに。三綱の類なる敎へを以す。と言ふ義なり。行以理執。紀以終始とは。其の行ひは道理を以て固く執り。紀むるに。其の言行の終始を。一貫ならしむる由なり。同一殊職。立爲明官とは。君民もと同一の人なれど。職を殊にし。立て明官と爲たれば。其の道を明に辨ふべき物ぞ。と云へる義と聞えたり。五范四時以類相從とは。范は字書に。與範同しとあり。陸佃が註に。五范五音也。と云へるは然る言にて。四時以類相從こと。下節に所見たるが如し。味玄生色とは。味玄は幽玄と云ふが如し。凡そ遠くして。至極する所なきは。其の色玄なり。大淸の味玄よりして。草木の華を始め。品々の色を生ずるを云ふ。（陸佃註に、春夏之華、發於玄冬、と說たるは非なり。）音聲相衡とは。音と聲と。調を相に平衡ならしむと言ひて。下文を與せり。其の音聲の事は。禮記の樂記。及び史記の樂書に。凡音者生人心者也。情動於中。故形於聲。（鄭玄云、宮商角徵羽、雜比曰音、單出曰聲、形猶見也、）聲成文謂之音。（皇侃云、單聲不足、雜五聲、使交錯成文、乃謂爲音也、）是故治世之音。安以樂。其政和。亂世之音怨以怒。其政乖。亡國之音哀以思。其民困。聲音之道與政通矣。（史記正義云、政和則聲音安樂、政乖則聲音怨怒、是聲音之道與政通矣、）宮爲君。商爲臣。角爲民。徵爲事。羽爲物。五者不亂則無怗懘之音矣。（月令註、鄭玄云、宮屬土、土居中央總四方、君象也、商屬金、以其次宮、臣之象也、角屬木、以其淸濁中、民之象也、徵屬火、以其徵淸、事之象也、羽屬水者以其最淸、物之象也、凡淸濁者尊、淸者卑、怗懘敗、不和之貌也、）宮亂則荒。其君驕。商亂則陂。其臣壞。角亂則憂。其民怨。徵亂則哀。其事勤。羽亂則危。其財匱。五者皆亂。迭相陵。謂之慢。如此則國之滅亡無日矣。（史記索隱云、無日猶言無一日也、以言、君臣凌慢如此、則國之滅亡、朝夕可待也、）なほ音聲の事に就ては。心得べき事ども多かり。樂記樂書律曆志は更なり。諸樂書を見て知べし。

【四】東方者萬物之立止焉。故調以レ角。南方者萬物華羽焉。故調以レ徵。西方者萬物成レ章焉。故調以レ商。北方者萬物錄臧焉。故調以レ羽。中央者大一之位。百神仰レ制焉。故調以レ宮。

東方者萬物之立止焉は。陸佃註に。止猶レ植也。と云へるは然る言にて。東方は萬物の立植たること。目前の事實に顯然として。諸書にも多く其の說あるを。上にも下にも引出るが如し。(但し此の本文は、東方の德を稱せる、諸說の祖語なる事は、云ふも更なり、)故調以レ角は。本書に角を徵とあり。故調以レ徵は。徵を羽とあり。故調以レ羽は。羽を角とあり。此は共に。書寫の錯亂なり。故今正して記せり。(陸佃註に、徵屬ニ南方一、而今此言ニ於東方一者、蓋言ミ以調ニ東方一而已、非レ謂レ分ニ配東方一也、下皆效レ此と云へるは、說得たること聞ゆれども、是より以前に、既く五聲を五方に配する議の有なむには、然る事も有まじきに非ざれど、此は泰一小子の、始めて泰皇氏に、五聲の分配を說く所にし有れば、然る事の有べくも非ず、もし此の時に、陸佃註の如き謂にて、本書の如く說たらむには、後の世までも、其の分配にて說來るべき物をや、)漢書の律曆志に。五聲者宮商角徵羽也。角觸也、物觸レ地而出戴ニ芒角一也。徵祉也。物盛大而蕃祉也。商章也。物成孰可ニ章度一也。羽宇也。物聚臧宇ニ覆之一也。宮中也。居ニ中央一暢ニ四方一唱レ始施レ生爲ニ四聲綱一也。夫聲中ニ於宮一觸ニ於角一祉ニ於徵一章ニ於商一宇ニ於羽一故四聲爲ニ宮紀一也と有るは。本文の義を布延せる說の。傳はれる物と見えたり。故此に引きて。本文の註と爲しつ。(なほ同志に、協ニ之五行一、則角爲レ木、五常爲レ仁、五事爲レ貌、商爲レ金爲レ義爲レ言、徵爲レ火爲レ禮爲レ視、羽爲レ水爲レ智爲レ聽、宮爲レ土爲レ信爲レ思、と云へるを始め、五聲に關かる說々多かり、就て見べし、)さて中央者大一之位。百神仰レ制焉。と有る大一は。彼の上皇大一を云ふ。泰皇氏の問に答ふる泰一小子に。泰一と書き。上皇大一をば。大一と書たるは。其の差別を知しむる鷃冠子の深き用心なり。(凡て著述は、此の意ばへ、肝要なるを、他書の撰者

は、然る用心なく、上皇に稱する大一、人皇に稱する太一、小子に稱する泰一ともに、太一と書たる故に、後の書ども、淮南子、及び史記を始め、大一、太一、泰一混淆して、何れを某と、辨へ難くなも成りにける。）此の大一の。上皇大一なる事は。彼の傳に引たりし。春秋元命包の文に。中宮天極星。其一明者。大一常居也。故爲北辰。亦爲紫微宮。天神圖法。陰陽開閉。皆在此中也。宣氣立精爲神垣也と有るを。此の本文と。相照して辨ふべし。（猶かの上皇大一傳、及び三皇傳の總論に註せるを、合せ考ふべし。）

【五】以木華物天下盡木也。使居東方主春。以火照物天下盡火也。使居南方主夏。以金割物天下盡金也。使居西方主秋。以水沉物天下盡水也。使居北方主冬。土爲大都天下盡土也。使居中央守地。天下盡人也。以天子爲正。調其氣。和其味。聽其聲。正其形。迭往觀今。故業可循也。

此の節は。以木華物天下盡木也。と云へる類ひの文ども。言狀いと異しく、予は能く其の意を解得ざれど。強て思ふに。木は家居を作るを始め。華餝の用を爲し。火は闇きを照し。金は硬きを割き。水は汚きを清め。土は大都と爲りて。萬物を載する功あり。天下の人盡く。木火金水土の恩德を受け。かつ天下に多き物等なり。と言へる意と聞えたり。（此らの事ども、陸佃も解し得ずて、例の如く注を缺たり、後人なほ能く考ふべし。）さて此の中に金と云へるは。黄金の事には非ず。鐵を云へり。其は割物とあるにて知べし。然れば彼國にても、神眞の貴重して。五行に列ねて。其の德を稱し傳へしは。鐵にぞ有ける。（また此に依りて按ずるに、彼國の古へにも、うち任せて金と云ひしは、鐵なりしを、後に世降ちて、漸々に、黄金を貴重する事となりて、金と云へば、彼にうち任せたる名となりし故に、別に鐵字を作り、仍次々に、種々金に从ふ字を、制り出けむこと知られた

り、）さて木火金水土を。おの〳〵使居某方主某。と云へるは。陸佃に。此言大一司天。而分任五方。又以天子治之。と釋たるは。其の註中の明解なるが。其の説なほ足らず。其は上皇大一は更なり。なほ元始天尊。太上天皇氏などの分任せるにて。中にも天皇氏の。宗と領れる事になりける。（凡てかゝる事どもはし、上に元始天尊、上皇大一在れども、太上天帝の、もはら事を行へる趣は、三皇傳に委く註し辨へたるを見べし）但し此の本文にては。直にその木火金水土を。某々の方に居住せしめて。四時大地を主しめたる趣に聞ゆれども。此は古語の幽妙なるが。辭足らず聞ゆるにて。實には其の神々を。その方々に分任せる義なり。（某々の神々を、其の方々に分任すれば、其の主る物、かならず其の神に屬して、其の方々に分る道理なる故に、其の物を云ひて、其の神を云ず、然れど使居東方主春とやうに、直に其の物を、實神と爲て語れるが、古語の幽玄妙處にて、我が神典には、かゝる文法殊に多かり、然るに此の本文の語ざま、其に似たるは、秦一小子、すなはち我が神國より、渡り坐せる神なるが故に、自づから如此ぞ任ける。）然らば其の分任をうけて。其の神々の住する處々は。何所ならむと言ふに。天柱五岳の立たる處々是なるが。此の神々は、謂ゆる五行の五帝にて。我が神典なる。風火金水土の神等なること。三皇傳及び。天柱五岳餘論に委曲に説たるが如し。（神典の正説をもて云ときは、五行は風火金水土なり、然るに彼の國にて、五行の中に、木を入るゝ事は、東方扶桑の神木を尊めるが故なり、然れど其の理を説くに至りては、風木とて、風の理をこめて説こと常なり、然れば彼の五帝の中に、木神蒼帝と云をば、風神と心得むに、子細なき事なり、此は上にも往々云へるが、なほ下にも往々説くを見るべし、天柱五岳の處々、及び此の五帝の神靈、太微宮にも分居するが、謂ゆる五帝座にて、上皇大一天皇太帝の佐と爲て、世に幸はふ趣などの事は、是また三皇傳、及び天柱五岳餘論に就て見よとぞ、）（さて天下盡人也。以天子為正とは。天下には何處の國にも。盡く人は在れども、其の人多き人の中に。行ひの正き

は。天子こそ有れ。と云へる義なり。然るに彼の國に。此れより古く。天子と云ふ語は有こと無く。かの磐古氏。三皇。次なる六皇などを。王とも皇とも帝とも稱へれど。天子とは稱せず。其は天子と稱せむには。必しか稱すべき實事なくては稱ふまじき。古語の例は然る物にて。此は殊に泰一の眞告なれば。然る虚語の有べきに非ず。(かの國にて、後に王を天子と稱する由緒を、孝經の援神契に、天覆地載、謂二之天子一、上法二斗極一と云ひ、白虎通に、天子者爵稱也、爵所三以稱二天子一者何、王者父レ天母レ地、爲二天之子一也、鉤命訣曰、天子爵稱也、帝王之德有二優劣一、所三以俱稱二天子一者何、以下其俱命二於天一、而王、治中五千里内上也、尙書曰、天子作二民父母一、以爲二天下主一と云へるなど、皆その本據を求めて得ず、强て作れる說等なること、古史傳また靈能眞柱にも、既く云へりき、)故考ふるに。太昊伏犧氏の。彼の國に出て。教を立たる當時は。下に辨ふる如く。我が神代にては。天日高邇々藝命天降坐して。御世治看せるを。國津神たち皆。天都神之御子と白して。仕奉れる頃なり。

然れば此に泰一の。天子と稱せるは。即ちわが大御國の眞天子。邇々藝命の御事になも有りける。泰皇泰一ともに。御國より渡れる神眞なれば。然も有べき事なり。(邇々藝命を、天神之御子と白すは、天津日の大御神の、宇都之御子にて、天降坐せればなり、此よりして、世々の天皇命を、天津神之御子と申し、また漢文には、天子とも白すなり、委くは古史傳に云へるを見よ、)さて漢土にて。王を天子と稱する事を。春秋元命包。帝王世紀などに。神農氏の始めて稱せる由言へるを。前には然も有ぬべく思へれど。後に能く思へば。神農氏も。泰一小子に道を問へる。有道の人にし有れば。然る無實の借號は。稱すまじき物なり。(然れば此は、神農氏などよりは、遙に後世なる王等の、故實を辨へざるが、古くも天子と云ふ語の有るを見て、慢りに借號し始めてぞ有けらし、)偖かく考へ定めて。以二天子一爲レ正云々の語を思ふに。天神之御子の。天下治め給ふ趣いと正ければ。循ひ奉るべき物ぞと言へる意にて。謂二其氣一とは。その御行ひ正しき故に。天地の神相うづなひて。氣候

の調へるを言ひ。和其味とは。氣候の調へる故に。果穀の風味の和熟するを云ひ。聴其聲とは。かの聲音の平衡なるや否を聴くを言ひ。正其形とは。其の威儀禮容は更なり。居住の形も正整なるを言ひ。迭往觀今故業可循也とは、陸佃註に、天下一致、來不異古。往不異今。却而觀之、則其業可循也。と云へるが如し（本書近迭篇に鶡冠子曰欲知來者察往、欲知古者察今云々、師未發軔而兵可迭也とあるは、此の語に基づけりと見ゆ、陸佃註に、前却曰迭と云へり、）偖まづ斯の如く、天子の世を治め給ふ樣を說きて。次節に其道を順考して。彼の國を敎導すべき則を告たるなり。

【六】順愛之政殊類相通。逆愛之政同類相亡。故聖人立天爲父。建地爲母。同地一期以使一人也。范者非務使云必。氾錯之天地之間。而人被其和。故聖知神方調於無形。而物莫不從。天受藻華。以爲神明之根者也。地受時令。以爲萬物之原者也。天地人事三者畢此矣。

老子の語に。聖人無常心以百姓心爲心。善者吾善之。不善者吾亦善之。德善。信者吾信之。不信者吾亦信之。德信。聖人在天下慄々。爲天下渾其心。百姓皆注其耳目。聖人皆孩之。（休文云、聖人虛其心、故無常心、姓一心、百姓百殊、聖人兼受之、古者同德者同姓、晉語云、黃帝二十五子、得姓者十四人、而爲十二姓、同姓則同德、同德則同心、同心則同志、第二章云、知善之爲善斯不善已、聖人無分別心、民之善不善、皆以爲善、而善不善咸服、民之信不信皆以爲信、而信不信咸服、聖人在天下、其猶江海乎、而百姓爲川谷、或淸或濁、江海兼受之、或善或不善、聖人兼受之、渾其心注其耳目、渾字注字皆从水、寫聖人爲江海、百姓爲川谷也、）孔子の語に。凡聖人能以天下爲一家。以中國爲一家。非意之。必知其情。從於其

義一。明二於其利一。達二於其患一。然後爲レ之。と言へるは。共に此の本文の旨より出て。順愛の政を祖述せるなり。此に相反するは。逆愛の政にて。同姓同類をも相亡ふなり。

〇同知一期より。人被二其和一と云までの意は。陸佃註に。此言聖人蓋知二一期一。以使二一人一。而惟是心焉。氾二錯之天地之間一。而人被二其和一也。非三務使二之必同一。故曰一人之情千萬人情是也。と云へるが如し。〇故聖知二神方一調二於無形一。而物莫レ不レ從とは。聖人は能く天神地祇の方を知りて。其の無形の氣を調ふる故に。物として從はずと云こと莫しとなり。(謂ゆる鬼神の情狀を識ると云は此の事なり、列子黄帝篇に、黄帝與二炎帝一戰二於阪泉之野一、帥二熊羆狼豹貙虎一爲二前驅一、鵰鶡鷹鳶爲二旗幟一、此以レ力使二禽獸一者也、然則禽獸之心奚爲異レ人、形音與レ人異、而不知二接レ之之道一焉、聖人無レ所レ不レ知、無レ所レ不レ通、故得二引而使一レ之焉、禽獸之智有二自然與レ人童者一、其齊欲レ攝レ生、亦不レ假二智於人一也、牝牡相偶、母子相親、避レ平依レ險、違レ寒就レ温、居則有レ群、行則有レ列、小者居レ內、壯者居レ外、飲則相攜、食則鳴群、太古之時則與レ人同處、與レ人並行、帝王之時始驚駭散亂矣、逮二於末世一、隱伏逃竄以避二患害一と云ひ、また太古神聖之人、備知二萬物情態一、悉解二異類音聲一、會而聚レ之、訓而愛レ之、同二於人民一、故先會二鬼神魑魅一、次達二八方人民一、末聚二禽獸蟲蛾一、言三血氣之類、心智不二殊遠一也、神聖知二其如一レ此、故其所二教訓一者、無レ所二遺逸一焉、と見え、また我が神代にも、顯幽いまだ定まらざりし間は、皇神と鳥獸の言語し事の、數多見えたるをも、熟々思ひ合すべし、)天受二藻華一以爲二神明之根一者也。地受二時令一以爲二萬物之原一者也とは。(此の一節四句は、もと對句と見ゆるを、今本に、令之の二字なきは、脫たりと所思れば、今其の二字を補へり、)天は六合の藻華を受て。神明の出る根原たり。地は其の時令を受て。萬物を生成する根原たる由なり。(藻華は陸佃註に、對レ質曰レ藻、對レ實曰レ華、藻文也、藻如二草之藻一、華如二木之華一、と云へるが如し、)天地人事三者、畢レ此矣とは。陸佃註に、其道如二上所一レ謂。則天地人事。豈有レ出二於此一乎と云へるは。信に

然る言にて。天地人事の大較要旨。悉く上件の節節に洩るゝ事なく。書契ありし以來。今の淸代に至り。數億部の漢籍ありと言へども。天地人事の較要正旨を。説得つと所思ゆる説は。みな此の泰一の説を布延せる物と云むも。强言に非ずと知べし。(然るは、泰皇伏義氏以前は、おきて論せず、伏犧氏の、泰一小子に道を問ひて、彼の蠢化の民に敎へを立し以來は、其の道の正統を傳へし玄學は、更にも云ず、其の派出せる儒墨を始め、諸子百家、何れも、道の正旨を說くに至りては、其の僞を嚳らむと欲するも、伏義氏の道を日賓と爲ざるは無し、然るに其の道はも、天に代りて、泰一小子と、心を合せて立たる道なるが故に、自づからに然有べき道理なること、先づ此に心得おきて、次々に論ひもて往く節々を、平心に熟く辨へば、自づからに炳焉ならむ物ぞ、)さて上の節々に。神聖踐承翼之位云々。上聖者與天地接結云々。有道南面執政云々。聖人立天爲父。立地爲母云々。聖知神方云々と有るに就て。泰皇氏以前を惟ふに。三皇は國土を造立するに。彼の國をしばしの居住とは爲つれど。其の頃なほ人種は無りし故に。帝王など云ふ趣に非ざれば叶はず。(然れば三皇はたゞ、彼の國地を造立せむ爲に、しばし降れる神眞とは云べけれど、彼の國を治たる帝王とは云べからず。)また次々に出たる。狟神氏より。柏皇氏まで六氏の頃には。人種も漸々に生出たれど。其はた右の語どもに叶へる治法ならず。唯に長立て世を肇めたる神人等なり。然れば彼の國に。上の件々の語の如く。法を立て世を治めたる神聖は。伏義氏以前に出ざること灼然なり。(然れど、右の如く例に引き出て、此に法を取べき由を告たるは、必しか稱すべき神聖の、早く在ける事は疑ひなし。)故考ふるに。泰一の稱ゆる神聖。上聖。有道。聖人は。皇國の神聖を申せるにて。是また邇邇藝命の御事にぞ有りける。其は神聖踐承翼之位。以與神皇合德とは。天位を承繼ぎて。天日と德を合する由なれば。上聖者與天地接結云々と有るは。天日と其德の合する故にて。聖人立天爲父立地爲母と有るも。是の故なるか。斯の如く正しき天位を承繼たる。神聖の眞天子は。我

が邇々藝命を除きて。漢土は更なり。萬國に有こと無きを以て此を知れり。(然るは上にも云へる如く、泰一の語は、盡く眞説の直語にして、後世の儒者らが、此の眞語を竊して、後世の王等を、己が引々に、此の如く稱する類には非ざる義を、平心に思ひ辨へて、今論ふ旨を曉りてよ、此の旨を曉り得むには、泰一の謂ゆる、神聖、上聖、聖人は、邇々藝命を除きて、他に無こと、自づからに啓發せむ物ぞ、)然れば。聖知神方調於無形。而物莫不從と有るも。邇々藝命は。天照大御神の御子に坐して。其の天日嗣を承傳へて。天降坐つれば。其の道を受給へる事は。神典に見たる如くにて。天神地祇の情狀を知りて。政を爲し給へる故に。無形の氣も。四時に調ひ。物として從ひ奉らずと言こと莫りけむは。必しか有べき事なり。(古語に、天皇命の御德を稱へて、天地の神祐うづなふと云ひ、山川もよりて事ふる、など申せる類は、皆此の義を以て申せり、易文言傳に、夫大人者、與天地合其德、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶、先天而天弗

違、後天而奉天時、天且弗違、而況於人乎、況於鬼神乎、とあるは、卽この意ばへを云へり、大人とは帝王を云へば、此に聖人と云へると、意異ならず、)また有道南面執政、以衛神明云々とは。其の天降ます時しも。日神その御靈代の御鏡を授け賜ひて。吾兒視此鏡。當猶視吾。と敕ひし謂に依りて。後の御世まで。御同殿に齋ひて。白地にも。御背に爲給ふこと無りしを惟ふに。天日は皇祖の御國なる故に。敢て御後には爲給はずて。南に向ひ。北を後に負て御坐せるを。南面して神明を衛るとぞ言けむ。(然れば此を、天子南面の故實と云ふべし、神明とは、卽ち天日の事なる由は既に云へりき、天子は白地にも、大御神の御靈を、御後に爲給はざる故實は、禁秘御抄を拜讀して、知り辨ふべし、)かく稽へ聚むれば。泰一小子の道を傳ふるに。聖人を稱せる事は。邇々藝命の。日神の御道を御傳へ坐して。世を治め給ふ御業に法を取りて。治むべき事なれ。と言ふ意なること論ひ無し。(然れど予が此の説はも、和漢に學問の事ありし以來、誰も得心づかぬ新説にし有れ

ば、忽には得信ずて、論ふ徒も多かるべし、若しか論ひ破らむと欲する人あらばまづ太昊泰一の、皇國より出たる神眞なりと云ふ說を破り、然して後に、我が天皇命の御大祖を除きて、外に天子と稱すべき神聖を索め出し、其の後に、今論ふ說を論破してよ、然せぬ限りは、しぶしぶながらに、予が此の說を信ずる外なし」」好尙云。師翁の此の言に據りて思ふに。古賀侗庵ぬしの。殷鑒論と云ふ書に。（此の書岡より寫本にて、僅に二十葉ばかり有り、昌平の古賀ぬしの著されし由なるが、卷中一と所も其の名を載さず、師翁も不審く思はれて、屋代通賢ぬしをして、實否を古賀ぬしに尋られしに、年若き頃は、斯有る筋の事も記せしかど、今は廢したり、平田氏の見たりしとは、恥かしき事なり、と對へられしとぞ、實にも諸越の國俗の薄惡なるを誹り、また戎人の動すれば物每に、誇誕傲慢なる事を議論せられ、就ては皇大御國の國美をも擧られたる趣、允當にして、世の俗儒輩の、総て及ぶ處に非ず、」我神武開天闢地。垂萬世之丕基。安寧。懿德諸帝。無爲之治。不宰之功。崇神德威光被。遠夷賓服。仁德勞來輔翼。無一物不獲其所。天智經文緯武。同符神武。皆古聖人也。乃天下後世咸被其覆載生成之澤。而人或不知其爲聖。此尤聖德之盛。所謂蕩々乎民無能名焉。帝之力於我何有者。猗歟休矣と見えたり。（かく論はれたる中に、天智天皇は、儒家にこそ、中興の聖主など稱すれど、神の御國の物學びたる徒より云へば、痛く擬聖の風を好ませ給ひて、皇神の道を、擾亂し給ふ御所爲のみ多く、假初にも聖主など云すべき天皇には坐まさず、其のよし歷朝詔詞解一の卷、また古史徵開題記にも、委曲に、論辨せられたるを見るべし」此は信に然る事にて。神代は更なり。人の世と成ても。打任せて。神聖聖人など云ふ稱號を負せ奉れる天皇の。有しと謂事も聞えず。たゞ延喜の聖代などは。書籍にも見え。人も云事なるが。（右にも云る如く、古くは天智天皇を聖主と稱し、後の世となりても、後三條天皇を初め、其の餘の天皇をも聖帝聖主と云へる事、錄記物語にて、往々は見たりしが、謂ゆる擬聖の風を慕はせ給ひし天皇をのみ云へる語な

れば、眞聖の有りしと云ふ考證とは爲しがたし、其の文煩しければ、逐一に記し出ず、）斯く炳焉く論はれしは。最々感たし。然るに聖人とし云へば。諸越にのみ出たりこと心得たる人の多かるはいかにぞや。其の出たる聖人も。擬聖のみ多く。眞聖は少き事。般鑑論にも。夫堯舜禪代唐人嗟稱。以爲二亘レ古無一レ匹者一。虞夏之後莫三能踵二行一。踵行者。不レ過二莽操懿裕逆篡之徒一。假以濟二其姦一而已と有り。なほ下に次々辨へられたるを見るべし。偖鵶冠子泰鴻篇の全文は。悉く解終られたるが、此より下に高く揭げたるは。謂ゆる眞聖賢の證文とこ擬聖を駁せられたる條々なり。見む人誤る事勿れ。抑聖人と云ふは。漢土にて。尊み畏むべき人を稱するに。級々有るが中の一號にて。聖は說文に。聖通也從レ耳呈聲。通論曰。通而先識曰レ聖。於レ文耳呈爲レ聖。从レ耳非レ任レ耳也。心通二萬物之情一。若二耳之通一レ聲也。と有るは本義にて。（なほ字書どもに說々多く、白虎通に、禮辨名記曰、五人曰レ茂、十人曰レ選、百人曰レ俊、千人曰レ英、倍レ英曰レ賢、萬人曰レ傑、萬傑曰レ聖、など有れど、聖の故實には合はず、

また風俗通にも、是に似たる說見えたり、）其の古說は。素問の上古天眞論に。上古有二眞人者一提二挈天地一。把二握陰陽一。呼二吸精氣一。獨立守レ神。肌肉若レ一。故能壽二敝天地一。無レ有二終時一。此其道生。（王氷云、眞人、謂二成レ道之人一也、夫眞人之身、隱見莫レ測、其爲レ小也、入二於無間一、其爲レ大也徧二於空境一、其變化也出二入天地內外一、莫レ見二迹順一、至眞以表二道成之證一、凡如レ此者、故能提二挈天地一、把二握陰陽一也、眞人心合二於氣一、氣合二於神一、故呼二吸精氣一、獨立守レ神、肌膚若二氷雪一、綽約如二處子一、體同二於道一、壽與レ道同、故能無レ有二終時一、而壽二敝天地一、敝盡也、惟至道生、乃能如レ是、）なほ諸子の類に、眞人の德を稱せる語、いと多かる中にも、淮南子精神訓は、諸書の說を網羅して、能く其の趣を說得たり、文長ければ、此に擧ること能はず、就て見べし、莊子には、眞人を神人とも云へり、逍遙游に、神人無レ功、至人無レ己、聖人無レ名、など云へる是なり、なほ有り、）

〇好尙云。眞人の事。文子道原篇に。夫道者。陶二冶萬物一終始無レ形。寂然不レ動。大通混冥。深閎廣大。不レ可レ爲レ外。折レ毫剖レ芒。不レ可レ爲レ內。

無環堵之宇。而生有無之總名也。眞人體之是以虛無。平易。淸靜。柔弱。純粹。素樸。不與物雜。至德天地之道。故謂之眞人。眞人者大己而小天下。貴治身而賤治人。不以物滑和。不以欲亂情。隱其名姓。有道卽隱。無道卽見。爲無爲事無事。知不知也。懷天道抱天心。噓吸陰陽。吐故納新。與隱俱閉。與陽俱開。與剛柔卷舒。與陰陽俛仰。無所樂。無所苦。無所喜。無所怒。萬物玄同。無非無是云々。また呂氏春秋先已篇に。精氣日新。邪氣盡去。反其天年。此之謂眞人。高誘注に。眞德之人と云ひ。莊子大宗師篇にも。古之眞人不知悅生。不知惡死。其出不訢。其入不距。翛然而往翛然而來而已矣。不忘其所始。不求其所終。受而喜之。忘而復之。是之謂不以心捐道。不以人助天。是之謂眞人また刻意篇に。純素之道。唯神是守。守而勿失與神爲一。一之精通合於天倫。野語有之曰。衆人重利。廉士重名。賢士尚志。聖人貴精。故素也者。謂其無所與雜也。純也者。謂其不虧其神也。能體純素。謂之眞人。など見えたり。なほ淮南子俶眞訓。其の餘の古書どもに多く有れど。悉くは記しがたし。

中古之時有至人者。淳德全道。和於陰陽。調於四時。去世離俗。積精全神。游行天地之間。視聽八遠之外。此蓋益其壽命而强者也。亦歸於眞人。至其至道。故曰至人。然以此淳朴之德。至彼妙用之道。和謂同和。調謂調適。言至人動靜必適中於四時生長收藏之令。參同於陰陽寒暑升降之宜。心遠世紛。身離俗染。故能積精而復全神。神全故游行天地之間。視聽八遠之外。庚桑楚曰。神全之人不慮而通。不謀而當。精照無外。志凝宇宙。若天地然。雖遠際八荒之外。近在眉睫之內。來於我者。吾必盡知之。夫如是者神全。故所以能益其壽命。而强。亦歸眞人之道也。 なほ莊子齊物論。淮南子精神訓に。至人の德を委く說たりて見べし。其の文繁きが故に。此に抄すること能はず。〕子華子神氣篇に。古之至人探幾而鉤深。與天通心。淸明在躬。與帝同功。是以進爲而在上。則至精之感流通而無礙。以上行而際浮。以下

行而極憂。以旁行而塞於四表。不言而從化。不召而效證。以其所以感之者內也。など有り。（好尚云。列子黃帝篇に。夫至人者。上闚青天。下潛黃泉。揮斥八極。神氣不變とも。また力命篇に。黃帝之書云。至人居若死。動若械。亦不知所以居。亦不知所以不居。亦不知所以動。亦不知所以不動。亦不以衆人之觀。易其情貌。亦不以衆人之不觀。不易其情貌。獨往獨來獨出獨入。孰能礙之。淮南子原道訓に。至人之治也。掩其聰明。滅其文章。依道廢智。與民同于公。去其誘慕。除其嗜欲。損其思慮。約其所守。則察。寡其所求則得。高誘注に。至人至德之人也と見えたり。（また五行大義、論諸人篇に、至人者、眞直爲素、守一不移、善惡不能迴其慮、榮辱不能動其心、故曰至人、など有れど、大概大同小異なり、なほ古書どもに多く見えなり、）

其次有聖人者。處天地之和。從八風之理。適嗜欲於世俗之間。無恚愼之心。行不欲離於世。擧不欲觀於俗。外不勞形於事。內無思想之患。以恬愉爲務。以自得爲功。形體不敝。精神不散。亦可以百數。（聖人志深於道、故適於嗜欲、心全廣愛、故不有恚嗔、是以常德不離、歿身不殆、聖人擧事行止、雖常在時俗之間、然其見爲、則與時俗有異爾、何者、貴法道之清淨也、聖人爲無異事無事、是以內無思想、外不勞形、恬靜也、愉悅也、法道之清淨、適性而動、故悅而自得也、外不勞形、內無思想、故形體不敝、精神保全、神守不離、故年登百數、此蓋全性之所致爾、敝疲敝也、また應象大論に、聖人爲無爲之事、樂恬憺之能、從欲、快志於虛無之守、故壽命無窮、與天地終、此聖人之治身也、とも見えたり。）

○好尚云。論衡實知篇に。儒者論聖人。以爲前知千歲。後知萬世。有獨見之明獨聽之聰。事來則名。不學則知。不問自曉。故稱聖則神矣。などども有り。

其次有賢人者。法則天地。象似日月。辨列星辰。逆從陰陽。分別四時。將從上古合同於道。亦可使益壽。而有極時。（次聖人者、謂之賢人、

然自強不レ息、精ニ了百端一、將ニ從上古一、合ニ同於道一、上古知レ道之人、年度ニ百歲一而去、故云可レ使レ益レ壽、而有ニ極時一也、○張介賓云、將隨也、極盡也と云へり。）と見ゆ。此は玄家に相傳せる古說と聞えて。老子。子華子。文子。列子。墨子。尸子。莊子。鬼谷子。韓非子。呂覽。淮南子。など互に語の精粗は有れど。右四等の德を稱ふこと。大約そ右の如くなり。（今其の文どもを、逐一に引出むも易けれど、所狹き態なれば、總て洩せり、不審しく思はむ人は、其の諸子に就て見べし、○因に記す、文子微明篇に、昔者中黃子曰、天有ニ五方一、地有ニ五行一、聲有ニ五音一、物有ニ五味一、色有ニ五章一、人有ニ五位一、故天地之間、有ニ二十五人一也とて、神人、眞人、道人、至人、聖人、德人、賢人を始め、小人まで、人を二十五等に別たるに、今傳はる本は、甚く錯亂しつと見えて文足らず、其さま熟くは知がたし。中黃子とは、黃帝の、就て道を問へる道人なり、然れば此の說もと據ある事とは聞えたり、五行大義論諸人の篇に、文子の此の文を引きて、釋せる說あり、就て見べし、文も今の文子と違へること有り。）なほ儒籍にて言はば。孔子家語五儀解に。哀公が。庸人士人君子賢人聖人を問へるに。孔子の逐一に對たる。其の聖賢の說に。公曰。何謂ニ賢人一。孔子曰。所レ謂賢人者。德不レ踰レ閑。行中ニ規繩一。言足ニ以法ニ於天下一。而不レ傷ニ於身一。道足ニ以化ニ於百姓一。而不レ傷ニ於本一。富則天下無ニ宛財一。施則天下不レ病レ貧。此賢者也。（註者云く、閑法也、本亦身也、宛當レ作レ菀、音鬱、積也と云へり、素問に謂ゆる賢人の說と、語こそ異れ、其の意義の歸る所は、大凡そ同じ趣きなり。）公曰何謂ニ聖人一。孔子曰所レ謂聖人者。德合ニ於天地一。變通無レ方。窮ニ萬事之終始一。協ニ庶品之自然一。敷ニ其大道一。而遂成ニ情性一。明竝ニ日月一。化行若レ神。下民不レ知ニ其德一。覩者不レ識ニ其鄰一。此謂ニ聖人一也。（白虎通に、聖人者何、聖者通也、道也、聲也、道無レ所レ不レ通、明無レ所レ不レ照、聞レ聲知レ情、與ニ天地一合レ德、日月合レ明、四時合レ序、鬼神合ニ吉凶一と有るは、此の說と全く同じ趣なり。）公曰善哉。非ニ子之賢一。寡人不レ得レ聞ニ此言一也とあり。孔子の此の聖賢の說は。荀子の哀公篇。大戴禮記の哀公問五義にも出たるが。其の前後を云むには。荀子は周末なれば古く。大戴禮

は漢なれば此に次ぎ。孔子家語は。魏の王肅が集記なれば。最後なり。然るに今家語を取りて。荀子大戴禮を取ざるは何如と云ふに。家語は後の集記なれど。古説を擧け。上の二書は。其の古説を翻按せる後儒の誣説なればなり。（然るは荀子の文も、賢人の説は此と同けれど、聖人の説に、所レ謂大聖者、知通二乎大道一、應レ變而不レ窮、辨二乎萬物之情性一者也、大道者、所三以變化遂成二萬物一也、情性者、所三以理二然不取舍一也、是故其事大辨二乎天地一、明察二乎日月一、總二要萬物於風雨一、繆々肫々其事不レ可レ循、若二天之嗣一、其事不レ可レ識、百姓淺然不レ識二其鄰一若レ此則可レ謂二大聖一矣とあり、此の文を、上に擧る家語の文と參考するに、彼は聖人の徳を云こと神妙にて、能く古神聖の事實に叶ひて、語もまた平易なるを、此は神聖の徳を讃する語を、大道と、情性を譯する語に取り成たり、其は大道者と云より、其事不レ可レ識、と云までの文に、心を著て見べし、元これ聖徳を讃する語なるを、横に大道情性の事に竊み移せる故に、語意ともに平易ならず、通えぬ語と成れるが上に、專要たる大聖の徳を稱せる文は、知通二乎大道一、應レ變而不レ窮、辨二乎萬物之情性一者也、百姓淺然不レ識二其鄰一と云ふ語のみ殘れり、豈是にて、大聖の徳を盡さむや、按ふに此は、荀郷が、例の後儒意に、古説に聖徳を讃せる語の、神妙に渉るを嫌ひて、己が意と、古説を翻按して、此の愚説を造言せること疑なし、大戴禮は、此より後にて荀子を取り、少か言を加たる耳なれば、論に及ばず、猶下に論ふを見べし。）家語は。集記せる時こそ後なれ。其説の古なる由は。易の文言傳に。夫大人者。與二天地一合二其德一。與二日月一合二其明一。與二四時一合二其序一。與二鬼神一合二其吉凶一。先レ天而天弗レ違。後レ天而奉二天時一。天且弗レ違。而況於レ人乎。況於二鬼神一乎。と有ると義同じきを以て知るべし。（易に大人と云へるは、凡て在位の聖人を云ふ、そは乾鑿度に、大人者、聖人之在位者也、と有るにて知るべし、是を以て、上に引て分註せる白虎通に、此の文言傳と、同義の事を大人と云はず、聖人と云るにて辨ふべし。）

（一）好尙云、此は乾鑿度の證文も有りて、實に師説の如し、然れど漢籍に多く大人と有るには、其の父および、父の兄弟、また母をも稱せる事、清

の注繼培が、潜夫論考績篇に、大人不考功、と有る下に、古書どもを數多徵引して、委く注せり、言長ければ記さず、本書に就て見べし、）
禮記の中庸に。唯天下至誠。爲能盡其性。能盡其性。則能盡人之性。能盡人之性。則能盡物之性。能盡物之性。則可以贊天地之化育。可以贊天地之化育。則可以與天地參矣。と有るは。右の文言傳を譯せるに似たる文なり。（大戴禮、曾子天圓の篇に、夫子曰、毛蟲之精者曰麟、羽蟲之精者曰鳳。介蟲之精者曰龜、鱗蟲之精者曰龍、倮蟲之精者曰聖人、玆四者、所以聖人役之也、是故聖人爲天地主、爲山川主、爲鬼神主、爲宗廟主、云々と有るも、能く物の性を盡せるよしなり。）なほ禮運に。聖人參於天地。並於鬼神。以治政也と言ひ。後ながら春秋繁露に。致無爲。而習俗大化。可謂仁聖矣。潜夫論に。夫聖人爲天口。賢人爲聖譯。是故聖人之言天之心也。賢人之所說聖人之意也。と有るなど。皆古義に合ひて、素問及び。家語なる聖賢の說と相悖らず。（抑今存る家語は、漢志に、孔子家語二十七篇、とある本に非ず、かの王肅が禮記、及び大戴禮を抄撮し、諸子をも採集して、古書の家語に擬せる物なる事は、人も論へる如くなれど、中には今傳はらぬ古書に採れり、と見ゆる古說も、少からず交れり、今擧る文も、即その一なり、此は必ず荀子に載せる說の、元書を得て記せるなり、其は文言傳に能く符ひ、かつ白虎通とも、同說なればなり、）さて右の古說どもを本據と爲て、後世の儒者らが書等に。聖と稱せる倫を察るに。相應ざる徒多かり。故今聖賢の大要を記さむに。伏犧は固より。神聖たるに論なく。神農黃帝神聖と稱ふには合はねど。聖人たるに論なく。王符が謂ゆる。天口に叶へり。是より降りて。在位なりし。唐堯虞舜夏禹など。右三皇の古道を順考して。政を爲たる、謂ゆる聖譯なれば。純聖とは稱ひ難く。古說の賢人と云ふに熟く符へり。然れど推ては。聖と稱せむも。甚き難めの有まじき人々なり。然れど孔子も。堯舜を聖乎とは言へり。（孔語を集記せる物の中に、論語は古きを、其の中に、大哉堯之爲君也云々、巍々乎、舜禹之有天下也、云々など言へれど、聖と稱せる語は一つもなし、然るに中庸に、

子曰舜其大孝也與徳爲聖人、尊爲天子、富有四海之内、宗廟饗之、子孫保之、故大徳必得其位、必得其祿、必得其名、必得其壽、大徳必受命と有るは、中庸の撰者は、謂ゆる子思にまれ、子夏にまれ、此の子曰は、疑なく後人の託言なり、其は舜をうち任せて、聖人と云へること、論語と合はず、かつ、大徳は、必天命を受て、尊富の位を極め、祿名壽をも必得ると云こと、孟軻などの勸化語に似て、孔子の語氣ならず、若し果して此の語の如くは、孔子は何が故に天命を受けず、生涯東西南北の人にて、困窮せるや、若くは然る大徳無りしと云むか、若しか言むには、儒學立難からむか、心を平々にして、熟く思ふべし、）其は雍也の篇に。子貢曰如有博施於民。而能濟衆何如。可謂仁乎。子曰何事於仁。必也聖乎。堯舜其猶病諸。とある是なり。乎者疑而未定之辭。病心有所不足也と。朱熹の註せる如くにて。孔語の心は。仁は。必ずや聖人乎。と所思ゆる堯舜だにも行ふ事を病めりと言へる意なり。（また一義あり、そは白虎通に、聖乎堯舜爲句、其由病諸爲句、按由與猶同じとあり、此は抱經堂本の末に見えたり、舊く猶を由と作たる本も有けり、此の説に從たらむも、堯舜をうち任せて、聖と云へるに非ず、聖賢の間、疑ひて定めざる語勢なりかし、）

（一好尙云、古き諸子どもに、堯舜の所爲を難めたる事、一つ二つ云むに、韓非子忠孝の篇に、皆以堯舜之道爲是、而法之、是以有亂君、有曲父、堯舜或反君臣之義、亂後世之敎者也、堯爲人君而君其臣、舜爲人臣而臣其君、而天下譽之、此天下所以至今不治者也、臣之所聞曰、臣事君、子事父、妻事夫、三者順則天下治、三者逆則天下亂、此天下之常道也、明王賢臣而弗易也、則人主雖不肖、臣不敢侵也、瞽瞍爲舜父、而舜放之、象爲舜弟、而殺之、放父殺弟不可謂仁、妻帝二女、而取天下、不可謂義、仁義無有、不可謂明、詩云普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣、信若詩之言也、孝子之事父也、非競取父之家也、忠臣之事君也、非競取君之國也、夫爲人子、而常譽他人之親、曰、某子之親、夜寢早起、強力

生財、以養子孫臣妾、是誹謗其親者也、爲人臣、常譽先王之德厚、而願之、是誹謗其君者也、此所以亂也と見え、また外儲說右上篇に、堯欲傳天下於舜、鯀諫曰、不祥哉、孰以天下、而傳之於匹夫乎、堯不聽、擧兵、而誅殺鯀於羽山之郊、共工又諫曰孰以天下、而傳之於匹夫乎、堯不聽、又擧兵、而誅共工於幽州之都、於是天下莫敢言無傳天下於舜、などもあり、此の事呂覽行論篇にも見えたれど、大に異なり、委くは本書を見るべし、また博物志、外國の篇に、三苗國、昔唐堯以天下讓於虞、三苗之民非之、帝殺有苗之民、叛浮入南海、爲三苗國ともあり、今按ふに、堯舜の王位を禪讓の事、鯀共工等が、斯く諫めしは、信に然る事なり、其は此の二王などこそ、表のみを飾り、世人を權謀れる心は有まじけれど、後代に至りては、其の君の位を簒ふにも、此の禪讓の事を祖述して、姦術を施し、名聲を天下に賣る者、夥しく成ぬれば、韓非子が謂ゆる、國を亂る起原にして、其毒を、後代に流せる事淺からず、世に此の二王を、比倫なき聖賢の如謂へれど、我帝道唯一の道を以て、理らむには、聖及び賢など、稱すべき王に非ず、鯀共工等が諫めしこそ、却りて皇神の道には近かりけれ、當時西戎も、皇國に比べては、神代なれば、然すがに、眞の道の存れるにて、いと〳〵尊し、然るを鯀共工氏ともに、彼國にては、四凶と唱へて、尙書史記を始め、諸子どもに、倫なき惡人の趣に書なせるは、心得がたし、尙書に共工を、靜言庸違象恭滔天といひ、鯀は洪水を理めて、九載まで、績用成らざりし事は有れど、其のみにて、共工を幽州に流し、鯀を羽山に殛せる迄の事にも有まじ、如何にも、不審き事なり、若くは禪讓の事を諫めしが、甚く其の心に逆ひたる故なるか、猶後人の後按を俟つべし、また虛實は知らねど、韓非子にも、舜偪堯、禹偪舜と云ひ、史記五帝本紀の正義に引たる竹書に、昔堯德衰、爲舜所囚、また舜囚堯、復偃塞丹朱、使不得與父相見、と見え、史通疑古篇に引たる、汲冢書に、舜放堯于平陽、また雜說篇に引たる、汲冢瑣語にも、舜放堯于平陽と見えたり、此は甚く異なる傳へ

なり）

また禹王に並べて。商湯及び周の文武を、三王と稱し。聖人と稱すれど。禹こそは。孔子も吾無間然矣。と云へる如く好人なれ。

（好尚云、禹王は、上の堯舜二氏にも勝りて、聖の稱號にも、愧ざる程の人なり、此を以て天帝も、洪範九疇を錫ひたりけり、其の委き事は、赤縣太古傳に就て見るべし）

湯文武は姦雄にして。聖賢の風格に僞巧せる徒なるを。豈聖人としも言むや。また武王が弟の周公旦をも。聖人と稱すれど。是また文武と同じ心の。善からぬ人なり。（此等の事どもは、黄帝傳の末に、委く論へれば、此には唯大凡そを云のみ）抑堯舜湯文武姫旦などを。聖人と稱せるは。孔子始めて儒道を唱へ出て。堯舜を祖述し。文武を憲章し。姫旦が新制を法と爲たる故に。其の後に強ひて。此れ等を聖と稱する事始れりと思はる。（然るは堯舜禹など、好人には在つれど、其の道は、三皇五帝より次々に、傳來せる古道を守れる耳にて、天地と德を合せ、日月と明を合せ、四時と其の序を合せ。鬼神と其の吉凶を合すと云ふべき、伏犧、神農、黄帝などの如き大德は、何處にか有る、心を平にして、能く思ふべし、堯舜禹すら、聖人と稱ふに合ざれば、況て商湯周文武姫旦が倫は、賢人と云ふにも足らず、然るは其の行狀の迹を察し、上に引く賢人の古説に、合ふや合ずや、能く按へて辨ふべし）信には聖とは。道德兼備して。神明に通じ。恬憺無爲にして。鬼神の情狀を知る人の稱なるを。國賊逆臣たる湯武の倫に。竊み稱する事と成れる故に。老子わざと。絶聖棄智。民利百倍と言ひ。莊子も怒りて。聖人不死。大盜不止とも。絶聖棄智大盜乃止。とも云へり是豈古説の聖人を云むや。商湯周文武姫旦が輩を云へり。（其は二子ともに、古聖人の大德を稱して、其の道を唱へつゝ、斯の如き口言を發せるは、世俗に謂ゆる聖人は、盜人の魁なる故に、其の徒の道を捨て、古聖の道に從べき由を說たるなり、然れば老莊の二子に、聖人と云へるに、二樣有る事を、能く心得て讀べし）

（好尚云。師翁も論はれたる如く。古く聖人の稱號を竊めるは。殷の湯王天乙なるが。夏の桀王を

討亡ぼせし時の事を。呂氏春秋離俗覽に。湯將伐桀。因卞隨而謀。卞隨辭曰、非吾事也。湯曰孰可。卞隨曰吾不知也。湯又因務光而謀。務光曰。非吾事也。湯曰。孰可。務光曰吾不知也。湯曰伊尹何如。務光曰强力忍詬。(高誘注曰詬辱也、)吾不知其他也　湯遂與伊尹謀夏伐桀克之。以讓卞隨。卞隨辭曰。后之伐桀也謀乎我。必以我爲賊也。勝桀而讓我。必以我爲貪也。吾生乎亂世。而無道之人再來詬我。吾不忍數聞也。乃自投於潁水而死。(以湯伐桀故謂之無道之人也、以受湯之讓爲貪辱也、不忍聞之、故投水而死、)湯又讓於務光曰。智者謀之。武者遂之。(遂成也、)仁者居之。古之道也。吾子胡不位之。請相吾子。(胡何、何不位天子之位也、言巳請爲吾子爲相、)務光辭曰。廢上非義也。(上天子謂桀、廢之非禮義也、)殺民非仁也。(戰伐殺民非仁心、)人犯其難我享其利。非廉也。吾聞之。非其義不受其利。無道之世不踐其土。況於尊我乎。吾不忍久見也。乃負石而沈於募水と云ひ。

(此の事莊子讓王の篇にも見えたり、また韓非子說林上篇に、湯以伐桀、而恐天下言己爲貪也、因乃讓天下於務光、而恐務光之受之也、乃使人說務光曰湯殺君而欲傳惡聲于子、故讓天下於子、務光因自投於河、とも見えたり、孰か是なる事を知らず、)鶡冠子備知篇にも。湯武放弑利其子。好義者以爲無道。而好利之人以爲賢とも云へり。(然るに陸佃此の下に注して、此言何謂也、若予所學、則唯好義者、以爲有道、と謂へるは、擬聖を眞聖と思へる誤りなり、)務光も。上を廢するは義に非ず、民を殺すは仁に非ず。と誹謗れる如く。擬聖の逆賊なる事云も更なり。また呂覽異用篇に。湯見祝網者置四面。(置設)其祝曰。從天墜者。從地出者。從四方來者。皆離吾網。湯曰嘻盡之矣。非桀其孰爲此也。湯收其三面。(舊校云、收一作放、)置其一面。更敎祝曰。昔蛛蝥作網罟。今之人學紓。(紓緩紓、疑與杼通、注訓爲緩、非是、)欲左者左。欲右者右。欲高者高。欲下者下。吾取其犯命者。漢南之國聞之曰。湯之德

及禽獸矣。四十國歸之。人置四面未必得鳥。湯去其三面置其一面。以網其四十國。非徒網鳥也。とも有れど、是また名聲を天下に賣り。蒼生の耳目を眩惑せる所爲にて。桀王を放伐せる。權謀の嚆矢なる事疑ひなし。なほ伐桀の事は。史記尚書は更なり。逸周書。古き諸子を始め。師翁の赤縣太古傳。西籍慨論にも。辨へ措れたれば。就て見るべし。偖また伊尹の事。班固が古今人表に。第二等に列して賢人となし。孟軻は。伊尹者任之聖者也とも云ひ。尚書僞古文に。伊訓とて。宜々しく載たれど。湯王と同腹の人なり。今其の證文を記し出むに。墨子尚賢下篇に。昔伊尹爲莘氏女師僕。使爲庖人。湯得而舉之。立爲三公と見え。また呂氏春秋愼大覽に。湯憂天下之不寧。欲令伊尹往視曠夏。恐其不信。湯由親自射伊尹。(恐夏不信伊尹、故由揚言、而親自射伊尹、示伊尹有罪而亡、令夏信之也、梁伯子云、曠空也、盧云曠夏似言間夏、湯令伊尹爲間於夏、而恐其不信、故親射之、諸子書有言、尹與末喜此而亡夏者、此出戰國

荒唐之言、觀此下云、往視曠夏、聽於末嬉、云々、亦卽此意、是明明以伊尹爲間諜也、)伊尹奔夏。三年反報于亳。(亳湯都、)曰。桀迷惑於末嬉。好彼琬琰。(琬當作婉、婉婉順阿意之人、)不恤其衆。衆志不堪。上下相疾。民心積怨。皆曰。上天弗恤。夏命其卒。(卒卒盡也、)湯與伊尹盟。以示必滅夏。また孫子用間篇に。昔殷之興也。伊摯在夏。(魏武帝注曰伊尹也、)周之興也呂牙在殷。(呂望也、)故明君賢將。能以上智爲間者。必成大功と見え。鬼谷子忤合の篇に。伊尹五就湯。五就桀。然后合于湯。呂尚三入殷朝。三就文王。然後合于文王とも有り。(なほ後漢書崔駰傳の注引新序に、伊尹蒙恥辱、負鼎俎以干湯、韓子難言篇に、上古有湯至聖也、伊尹至智也、夫至智說至聖、然且七十說而不受、身執鼎俎爲庖宰、昵近習親而湯乃僅知其賢而用之、說苑雜言篇に、伊尹有莘氏媵臣也、負鼎俎調五味、而佐天子、則其遇成湯也、呂氏春秋本味篇に、伊尹長而賢、湯聞伊尹、使人請之有侁氏、有侁氏不可、伊尹亦欲歸湯、湯

於レ是請取レ婦爲レ婚、有侁氏喜以二伊尹一媵レ女、湯得二伊尹一、明日設レ朝而見レ之、說レ湯以二至味一、湯曰可二得而爲一乎、對曰君之國小、不レ足二以具一レ之、爲二天子一然後可レ具、など見えたり、今悉く擧るに遑有らず、然るに孟子萬章篇に、萬章問曰、人有レ言、伊尹以二割烹一要レ湯有諸、孟子曰否不レ然、吾聞其以二堯舜之道一要レ湯、未レ聞レ以二割烹一也、と有れど信がたし、其の餘の諸子ども、右に記せる如くなるが上に、孟軻は動すれば、擬聖を眞聖に爲むと欲する姦意にて、例の口に出任せの勸化語なり、惑ふ事勿れ、）今此等の事どもを攷へ渉すに、有莘氏の媵臣と云ひ。鼎爼を負て湯王を干すと云ひ。また桀王の信ぜざらむ事を懼れて。僞りて。伊尹に恥辱を蒙らし。桀王に媚び諂ひ仕へしめて。其の消息を窺ひ。忠直なる龍逢の徒を殺させたる所爲。上に出されたる賢人の古說に比すれば。天壤懸絕とも云べく。殊に間者に用ひたるは。孫子が謂ゆる。生間者反報也。と有るに當り。（明の黄献臣と云ける人の解に、擇二多能之人外愚而中明一、使三自通二於親信之臣一、因窺二覘乎敵國之事一、

歸以告レ我、是謂二生間一、と解たるが如し、伊尹の事迹に、最能く似たり、）今更咎むべきには非れども。兵を詭道と云る中に。用間は。權謀の根本にて。尋常の人の爲行ふすら。愧べき事なるに。況て聖賢など稱ふべき人の所業に非ず。斯く卑劣奸曲なる事をも、成し果すべき性質なる故に。務光が。彊力忍レ詢と云へるも。允當の答なる事を思ふべし。また明の孫瑴が古微書。尙書中候の下に。按二管子曰。女華者桀之所レ愛也。湯事レ之以二千金一。曲逆者桀之所レ善也。湯事レ之以二千金一。內則有二女華之陰一。外則有二曲逆之陽一。陰陽之議合而得レ成二其天子一。此湯之陰謀也。黄居子曰。信二斯言一。則伊尹與二妺嬉一。比而亡レ夏。固不レ謬矣。陰謀之端。乃開二于聖人一乎。雖レ然非二聖人一。亦不レ可三以用二陰謀一と有るも然る事也。都て伐桀の始末。尙書史記などに記せる趣も。心得がたき事どもの有るを按ふに。（心得がたしと云は、湯誓に、天命殛レ之、また予畏二上帝一不二敢不一レ正、また致二天之罰一、又不レ從二誓言一、予則孥二戮汝一罔レ有レ攸赦、など有る文なるが、此の天とも、上帝とも云は、謂ゆる

天皇氏にて、また皇天上帝とも、天皇太帝とも、太上道君とも云て、我が神典なる、伊邪那岐大神なり、鬼神新論に論はれたる如く、天津神の、世中の事を主宰り給ふと云ことを、好き口實として、奸曲き輩、何事も上帝の命、天命と誣詐り、おのが罪を文る云ひ種となしぬ、さるは、殷湯王が、夏氏有罪、予畏上帝不敢不正と云ひて、その君を放し、周武王は、今予發惟恭行天之罪と云ひて、その君を弑し、新の王莽は、漢の天下を奪ひ取りて、皇天上帝、隆顯大佑云々、神明詔告屬予、以天下兆民など云へる是なり、と云れたるを思ふべし、また不從誓言、予則孥戮汝、罔有攸赦と、衆庶に斯く嚴重に誥たるは、伐桀の事、素より臣として君を放らす、逆賊の所爲なれば、衆庶の意にもふさはしからず、君に射向ふ事を、好まざる故なるべし、然なくば、斯まで誥ずとも有べく、獨夫と稱するばかりの桀王ならむには、軍するにも及ぶまじ、其の從卒も少からず、威勢も彊かりしこと、此文にても知られたり、後世に至り、儒者の囀り種に、桀紂々々と云如く、惡王には非るべし、論語に、子貢が謂ゆる、君子惡居下流、天下之惡皆歸焉、と云る意ばへ無きにしも非ず、深く事迹を考へて知るべし、）載し洩せる事には。なほ奸曲き所爲の多かるべく。其は君を放てる逆賊の張本なるを。聖人賢人など誣る、腐儒の集錄せる籍なれば。其名に拘るべき事實を。多く省ける事疑ひなし。（汲冢周書、殷祝解に、湯將放桀于中野、士民聞湯在野、皆委貨扶老攜幼奔、國中虛、桀請湯曰、國所以爲國者、以有家、家所以爲家者、以有人也、今國無家無人矣、君有人、請致國、君之有也、湯曰否、昔大帝作道、明教士民、今君王滅道殘政、士民惑矣、吾爲王明之、士民復致於桀曰、以薄之居、濟民之賤、何必君更、桀與其屬五百人、南徙千里、止於不齊、民往奔湯於中野、桀復請湯言、君之有也、湯曰否、我爲君王明之、士民復重請之、桀與其屬五百人徙於魯、魯士民復奔湯、桀又曰、國君之有也、吾則外人有言、彼以吾道是邪、我將爲之、湯曰、此君王之士也、君王之民也、委之何、湯不能止

桀、湯曰欲レ從者從レ君、桀與二其屬五百人一、去居二南巢一、湯放レ桀而復レ薄、三千諸侯大會、湯退再拜、從二諸侯之位一、湯曰此天子位。有道者可二以處一之、天下非二一家之有一也、有道者之有也、故天下者唯有道者理レ之、唯有道者紀レ之、唯有道者宜二久處一レ之、湯以レ此讓、三千諸侯莫二敢卽一レ位、然後湯卽二天子之位一、與二諸侯一誓曰、陰勝レ陽、卽謂二之變一、而天弗レ施、雌勝レ雄、卽謂二之亂一、而人弗レ行、故諸侯之治政、在二諸侯之大夫治與一レ從、と有る下の孔晁注に、逆二天道一故不レ施、雌勝レ雄、女陵レ男之異、逆二人道一、故不レ行焉と云るは、然る事なるが、臣として君を放らすは、是また臣道に逆ふの第一なるを、少かも其論無きは、擬聖の所爲に、眩惑せられたるものなり、此の逸周書の傳などを見れば、いと質直なる所も有る王にて、惡むべき節もあらざるをや、后の人猶能く考ふべし。）因に云ふ。伊尹が其の君太甲を廢退せる事。先達の議論區々にして枚擧するに暇あらずと云へども。偶稚川翁の論辨有れば。其を採りて本文と爲し。予が別に記せる。抱朴子集證の文を略抄して。視す事左の如し。（但し集證は、李善が文選の注に效ひ。專と本文の出處を探索せるのみにて、別に和解を下さず、見む人其の心を得て有るべし。）抱朴子良規の卷に。周公之攝二王位一。（○史記魯世家、曰、武王既崩、成王少在二强葆之中一、周公恐二天下聞二武王崩一而畔上、周公乃踐レ阼、代二成王一、攝二行政一當レ國、竹書紀年曰、成王元年命二冢宰周文公一、總二百官一、また七年周公復二政于王一。）伊尹之黜二太甲一。（○竹書紀年曰、太甲元年、伊尹放二太甲于桐一、乃自立、殷本紀曰、帝太甲既立三年、不明暴虐、不レ遵二湯法一亂レ德、於レ是伊尹放二之於桐宮一、三年伊尹攝二行政一當レ國、以朝二諸侯一。）霍光之廢二昌邑一。（○漢書昌邑王傳曰、王受二皇帝璽綬一、襲二尊號一、卽レ位二十七日、行淫亂、大將軍光與二群臣一議、白二考昭皇后一、廢レ賀歸二故國一、賜二湯沐邑二千戶一、又霍光傳曰、光曰、皇太后詔廢、安得二天子一、迺卽持二其手一、解二脫其璽組一、奉二上太后一、扶レ王下レ殿出二金馬門一、群臣隨送、王西面拜曰、愚戇不レ任二漢事一、起就二乘輿一、副車大將軍光送至二昌邑邸一、光謝曰王行自絕二於天一、臣等駑怯不レ能二殺レ身報一レ德、臣寧

負王、不敢負社稷、願王自愛、臣長不復見左右云々、なほ委くは、光が傳を見るべし、）孫綝之退少帝。（一）呉志綝傳曰、使光祿勳孟宗告廟廢亮、召群司議曰、少帝荒病昏亂、不可以處大位、承宗廟、以告先帝廢之、諸君若有不同者下異議、皆震怖曰、唯將軍令、綝遣中書郎李崇、奪亮璽綬以亮罪狀、班告遠近、尚書桓彝不肯署名、綝怒殺之、）謂之舍道用權。以安社稷。（此は俗儒の常言にて、擬聖の罪を隱さむと欲する誣言なり、惑ふ事勿れ、）然周公之放逐。狼跋流言載路。（一）魯世家曰、周公代成王、攝行政當國、管叔及其群弟、流言於國曰、周公將不利於成王云々、放逐とは、紀年に、成王元年周文公出居于東、と有るを云ひ、狼跋とは、毛詩狼跋の序に、周公攝政遠則四國流言、近則王不知、周大夫美其不失其聖也、と見えて、流言の爲に東に居り、都て進退の危きを云へりと聞ゆ、狼跋の詩も、其の意を作れるなり、）伊尹終於受戮。大霧三日。（〇）紀年曰、太甲七年王潛出自桐、殺伊尹、天大霧三日、乃立其子伊陟伊奮、命復其父之田宅、而中分之。また論衡感類篇、引百兩篇曰、伊尹死大霧三日、又初學記天部引、帝王世紀曰、帝沃丁八年伊尹卒、年百有餘歲、大霧三日、沃丁葬以天子之禮、祀以大牢、親自臨喪三年、以報大德焉云々、按に大霧三日と有る故よし、詳ならず、徐文靖が竹書統箋曰、按竹書紀年、事々與經史扶同、獨太甲潛出自桐殺尹、一事敢立異議、不顧事之有無者、彼見夫三晉處晉君于端氏、田和遷康公于海上、往々托伊尹放太甲之美名、明示其可以潛爲之謀而殺之、故設爲太甲殺尹之說、所以寒奸臣之胆、而壯衰君之氣也、と云るは、見所無きに非ず、また沈約が此下に注して、此の文與前後不類、蓋後世所益とも云へり、）霍光幾於及身家亦尋滅（〇）漢書光傳曰、宣帝始立謁見高廟、大將軍光從驂乘。上內嚴憚之、若有芒刺在背後、及光身死、而宗族竟誅、故俗傳之曰、威震主者不畜、霍氏之禍萌於驂乘云々。なほ委き事は、傳に就て見るべし、霍光の人と爲り、實に斯そ有けむ、孫綝桑蔭未移首足異所。（一）綝

傳曰、永安元年十二月戊辰臘會、綝稱疾、休彊起之、使者十餘輩、綝不得已將入、衆止焉、綝曰國家屢有命不可辭、遂入、尋而火起、綝求出、休曰外兵自多、不足煩丞相也、綝起離席、奉布目左右縛之、綝叩頭曰、願徙交州、休曰卿何以不徙滕胤呂據、綝復曰、願沒爲官奴、休曰何不以胤據爲奴乎、遂斬之、以綝首令其衆曰、諸與綝同謀皆赦、闓棄船欲北降、追殺之夷三族、發孫峻棺取其印綬、綝死時年二十八、)皆笑音末絶而號跳已及矣。夫危而不持。安用彼相。(○論語季氏篇曰、危而不持、顚而不扶、則將焉用彼相矣、)爭臣七人無道可救。(○韓詩外傳十曰、天子有爭臣七人、雖無道不失其天下、)致令王莽之徒生其姦變。外引舊事以飾非。內包豺狼之禍心。(○此の事漢書王莽傳に委し、事長ければ漏しぬ、班固が其の贊に、莽誦六藝以文姦言、潛夫論忠貴篇曰、動爲姦詐、託之經義、迷罔百姓、欺誣天地、自以我密人莫之知、皇天從上鑒其姦、神明自幽照其態、豈有誤哉、と云事も見えたり、)由於伊霍基斯亂也。將來君子宜深鑒玆矣。(○王莽傳上曰、昔殷太甲幼少不明、伊尹放諸桐宮、而居攝、以興殷道、周成王幼少、周公屛成王而居攝、以成周道、是以殷有翼翼之化、周有刑錯之功、今太皇太后比遭家之不造、委任安漢公、宰尹群僚、衡平天下、遭孺子幼少、未能共上下、是以太皇太后則天明命、詔安漢公、居攝踐祚、將以成聖漢之業、與唐虞三代比隆也、云々、また霍光傳曰、昌邑王賀卽位、行淫亂、光憂懣、獨以問所親故吏大司農田延年、延年曰、將軍爲國柱石、何不建白太后、更選賢而立之、光曰今欲如是、於古嘗有此否、延年曰、伊尹相殷廢太甲、以安宗廟、後世稱其忠、將軍若能行此、亦漢之伊尹也、云々とも有り、猶下に論ふべし、)夫廢立之事。小順大逆不可長也。召王之譎已見貶抑。(○僖公二十八年左傳曰、仲尼曰、以臣召君、不可以訓、故書曰、天王狩于河陽、言非其地也、杜注曰、河陽實以屬晉、非王狩地、論語憲問篇曰、子曰、晉文公譎而不正、)況乃退主惡其可乎。此等皆計行事

成。徐乃受殃者耳云々。何必奪至尊之璽紱。危所奉之見主哉。（文選東京賦薛綜注曰、至尊天子也、また西京賦注曰、天子印曰璽、紱綬也、）夫君天也父也。（宣公四年左傳曰、君天也、潛夫論釋難篇曰愛君猶父母也、御覽引物理論曰、天者君也、）君而可廢。則天亦可改。父亦可易也。功蓋世者不賞。威震主者自危。（史記淮陰侯傳、蒯徹曰、臣聞勇略震主者身危、而功蓋天下者不賞、）此徒戰勝攻取勛勞無二者。是猶鳥盡而弓棄。兎訖而犬烹。（淮陰侯傳曰、狡兎死良狗烹、高鳥盡良弓藏、）況乎廢退其君。而欲後主之愛己。是奚異夫爲人子。而擧其所生。捐之山谷。而取他人養之。而云我能爲伯瑜曾參之孝。（説苑建本篇曰伯俞有過、其母笞之、泣、其母曰、他日笞子、未嘗見泣、今泣何也、對曰、他日俞得罪笞、嘗痛、今母之力不能使痛、是以泣、史記仲尼弟子傳曰、曾參字子輿、孔子以爲能通孝道、故授之業作孝經、）但吾親不中奉事。故棄去之。雖日享三牲。昏定晨省。豈能見憐信邪。（孝經曰、日用三牲之養、正義曰、

三牲牛羊豕也、また曲禮曰、昏定而晨省、鄭注曰、定安其牀衽也、省問其安否何如、また孝經曰、子曰不愛其親、而愛他人者謂之悖德、不敬其親、而敬他人者謂之悖禮、）霍光之徒雖當時增班進爵。賞賜無量。皆以計見祟。（漢書光傳曰、孝宣皇帝下詔曰、夫褒有德賞元功、古今通誼也、大司馬大將軍光、宿衞忠正、宣德明恩守節秉誼、以安宗廟、其以河北東武陽益封光萬七千戶、與故所食、凡二萬戶、賞賜前後黃金七千斤、錢六千萬、雜繒三萬疋、奴婢百七十人、馬二千疋云々、なほ委くは本書に就て見るべし、）豈斯人之誠心哉。夫納棄妻而論前壻之惡。買僕虜而毀故主之暴。凡人庸夫猶不平之。（好尙云、此の論寔に謂れたり、是に據りて思ふに、史記の樂毅傳、燕惠王に報じ遺る書に、臣聞古之君子、交絕不出惡聲、忠臣去國、不潔其名、臣雖不佞、數奉敎於君子矣云々、張守節正義に、君子之人交絕、不說己長而談彼短、また言不潔己名行而咎於君、若箕子不忍言殷惡是也、また索隱にも、言忠臣去離本國、

不自潔其名、云己無罪、故禮曰、大夫去其國、不說人以無罪是也、と有るは、然る事なり、戰國の士には、最も感たき明言にて、湯王伊尹等が所爲とは、日を同くしても談るべからず、）何者重傷其類。自然情也。故樂羊以安忍見疏（魏策曰、樂羊爲魏將而攻中山、其子在中山、中山之君烹其子而遺之羹、樂羊坐於幕下而啜之、盡一杯、文侯謂覩斯贊曰、樂羊以我之故、食其子之肉、贊對曰、其子之肉尙食之、其誰不食。樂羊既罷中山、文侯賞其功而疑其心、）而秦西以過厚見親。（韓非子說林篇曰、孟孫獵得麑、使秦西巴載之持歸、其母隨之而啼、秦西巴弗忍而與之、孟孫歸至而求麑、答曰余弗忍而與其母、孟孫大怒逐之居三月復召以爲其子傅、其御曰、曩將罪之、今召以爲子傅、何也、孟孫曰、夫不忍麑、又且忍吾子乎、）而世人誠謂湯武。爲是。而伊霍爲賢。此乃相勸爲逆者也。（實にも稚川翁の諭されたる如く、古今の學者の通弊なり、赤縣のみならず、此の毒皇國へも、既く東漸して沈湎せざる者はほとほと稀なり、猶下こ云ふを俟つべし、）又見廢之君。未必悉非也。或輔翼少主。作威作福。罪大惡積。慮於爲後患。及尙持勢。因而易之以延近局之禍。規定策之功。計在自利。未必爲國也。取威既重。殺生決口。見廢之主神器去矣。（後漢書崔駰傳曰、竊神器之萬機、章懷注曰、神器帝王之位、）下流之罪莫不歸焉。（論衡語增篇曰、孔子曰君子惡居下流、天下之惡皆歸焉、）雖知其然。孰敢形言。無東牟朱虛以致其計。（史記齊悼惠王世家曰、哀王三年其弟章入宿衞於漢、呂太后封爲朱虛侯、以呂祿女妻之、後四年封章弟興居、爲東牟侯、皆宿衞長安中、朱虛侯年二十有氣力、忿劉氏不得職、後諸呂憚朱虛侯、雖大臣皆依朱虛侯、劉氏爲益強、其明年高后崩、呂祿呂產欲爲亂、朱虛侯章知其謀、乃使人陰出告其兄齊王、欲令發兵西、朱虛侯東牟侯爲內應以誅諸呂、）無南史董狐以證其罪。（襄公二十五年左傳曰、大史書曰、崔予弑其君、崔子殺之、其弟嗣書、而死者二人、其弟又書乃舍之、南史氏聞大史盡死、

執簡以往、聞既書矣乃還、〇宣公二年左傳曰、大史書曰、趙盾弑其君、以示於朝、宣子曰不然、對曰子爲正卿、亡不越竟反不討賊、非子而誰、孔子曰董狐古之良史也、書法不隱、趙宣子古之良大夫也、爲法受惡、）將來今日誰又理之。獨見者乃能追。覺桀紂之惡不若是其惡。湯武之事。不若是其美也。方策所載（杜預左傳序曰、周禮有史官、掌邦國四方之事、諸侯亦各有國史、大事書之於策、）莫不尊君卑臣。强幹弱枝。春秋之義天不可讎。（〇宣公四年左傳曰、君天也天可逃乎、）大聖著經。資父事君。（〇孝經曰、子曰資於事父以事母、其愛同、資於事父以事君、其敬同、）民生在三。奉之如一。而許廢立之事。開不道之端。下陵上替。難以訓矣。俗儒沉淪鮑肆。困於詭辨。方論湯武爲食馬肝。（〇史記儒林傳曰、景帝曰食肉不食馬肝、不爲不知味、言學者無言湯武受命、不爲愚遂罷、是後學者莫敢明受命放殺者、漢書儒林傳師古注曰、馬肝有毒、食之憙殺人、幸得無食、言湯武爲殺、是背經義、故

以爲喩也）以彈斯事者。爲不知權之爲變。貴於起善而不犯順。不謂反理而叛義正也。而前代立言者。不折之以大道。使有此情者。加夫立剡鋒之端。登方崩之山。非所以延年長世。遠危之術。雖策命暫隆。弘賞暴集。無異乎犧牛之被紋繡。淵魚之愛莽麥。（〇韻會曰、莽草名、有毒出幽州、人或擣和食、置水中魚皆死、）渴者之資口於雲日之酒。（〇魯語韋昭注曰、鴆鳥名也、一名運日、好尚云、運雲同音通ずべし、）飢者之取飽於鬱肉漏脯也。（〇廣韻云、鬱腐臭也、漏脯の義詳ならず、後の人考ふべし、）而屬筆者皆共褒之。以爲美談。以不容誅之罪。爲知變。使人於悒而永慨者也。或諫余以此言。爲傷聖人。必見譏貶。余答曰。舜禹歷試內外。然後受終文祖。（〇內外に試みたる事、尙書に見えたり、孔傳曰、終謂堯終帝位之事、また陸元朗釋文云、王云文祖廟名、）雖有好傷聖人者。豈能傷哉。昔嚴延年廷奏霍光爲不道。于時上下肅然。無以折也。（〇漢書酷吏傳曰、嚴延年字次卿、少學法律丞相府、歸爲

郡吏曰選除補御史椽、是時大將軍霍光廢昌邑王、尊立宣帝、宣帝初卽位、延年劾奏、光擅廢立、亡人臣禮不道、奏雖寢、然朝廷肅焉、敬憚延年、）況吾爲世之誡、無所指斥、何慮乎常言、也とあり。委くは集證に就て見るべし。さて右の如く雅川翁の論はれしは。實に然る事にて。今更言加ふべくも非ず。中にも舍道用權以安社稷と云ひ。また不知權之爲變と云ひ。また俗儒沉淪鮑肆、困於詭辨。方論湯武爲食馬肝。と有るなどを辨られたるは。最も愉快なる事なり。（其は前代立言者、不折之以大道、使有此情者、加夫立刻鋒之端、云々と有るは、潭く後世を誡められし辭にて、辱しとも尊しとも、云む方なし。）猶食馬肝とは。眞聖と稱する時は。放伐の懼れ有り。聖人に非ずと云へは。經義に悖り。進退谷れるが故に。引て發たず。半表半裏の議論にて。笑ふにも猶餘り有り。抑權道と說紛らすは。放伐の罪を覆むと欲する遁れ辭にて古今の書に甚多し。（但し孟軻が遊說して、諸侯を勸化せる辭にも、是に似たる事多し、煩しければ漏しぬ、委くは本書に就て見るべし。）斯て師翁の西籍慨論に。伊尹が所爲は。甚く後世へ毒を流したる物なり。其の毒と云は。然無だに下として上の隙を覗ひ。王位を覬覦する。戎國一躰の風俗故。後世の奸曲なる奴等。伊尹が此の所爲を引出て口實と爲し。王たる者に。少かの過あるか。然らぬも。其の弱きをば押こめて。己れ其の位を簒へる事。數ふるに暇非ず。此の風俗遂に東漸して。皇國に及び。攝政基經公の。陽成天皇を廢し奉られたるも。此の伊尹が所爲に習はれたるものなり。と謂れし。（宋人か明人か、史記の頭注に、陳越石曰、臣之忠有幸而忠者也、君之立有幸而立者也、殷之君臣皆幸而成者、嘻泥々接踵、羿々比肩、君可放乎哉、其後新取于西、魏取于東、司馬之有天下、其始也、未嘗不伊不周、其後也、未嘗不羿不浞、皆取伊尹以爲嚆矢也、孟子曰無伊尹之志則簒也、有旨哉と有るは、いかゝ有らむ、）また鈴能屋翁の古事記傳。列木宮の巻に。或人問けらく。武烈天皇崩り坐て後。袁富杼命を。迎へ立て奉れる間のさまを以て見るに。

當時大伴金村大連を始めて。いと賢く忠なる臣連たちは。無きに非ざりしに。此の天皇の御所行の。さばかりいみじく。暴く惡く坐々しを。いさゝかも議れること無くして。御世の限り。御心の隨に荒び賜へるを。徒に居て見過しゝはいかにぞや。答。善くもあれ惡くもあれ。君をば臣の計奉ること無きは。是ぞ古への道の勝れたるにて。君と臣との義の。永く全くして。頽れず廢れざる道には有ける。然るを君惡ければ。臣として左右に計るを美き事にするは。外國の道にして。實には逆なる爲なれば。中々に諸の亂の本なるをや。（君のしわざの甚惡きを、臣として議ることなくして、爲給ふまゝに見過すは、さしあたりては、愚にして、不忠なるに似たれども然らず、君の惡行は、其の生涯を過ざれば、世の人の苦むも限りありて、なほ暫のほどなるを、君臣の道の亂れは、永き世までに、其の弊害かぎりなし、陽成院天皇、御所行惡くましく〳〵しによりて、藤原基經大臣の、下し奉られしは、國のため世のため、賢く忠なる如くに聞ゆれども、古の道に非ず、外國のしわざにして、いとも可畏く、此れより天皇の御稜威は、漸に衰へ坐て、臣の勢いよ〳〵強盛になれるにあらずや）と論はれたるが如し。なほ皇位を尊み重せられし事は。歷朝詔詞解。孝謙天皇崩り坐せし下に。皇太子令旨。如聞。道鏡法師。竊挾舐粳之心。爲日久矣。陵土未乾。奸謀發覺。是則神祇所護。社稷攸祐。今顧先聖厚恩。不得依法入刑。故任造下野國藥師寺別當發遣。宜知之。云々。抑此道鏡は。古へ今にたゞひもなき。おふけなき。惡き穢き奴にし有れば。極刑に行ひて。其の屍を寸々に屠散しても。猶飽足まじきに。高野天皇世に坐ましゝ程は。少かも下より議らふ事なく。天皇の御心に從ひ奉りて。崩坐て後に至りてすら。宥めて。斯くいと輕く行ひ給へるは。偏に。先の天皇を重みし奉り給ひて。深く顧み思し召したる大御心にて。かにもかくにも。天皇の御所行を。傍より議り奉る事なく。可畏み從ひ奉り。崩坐ての後までも。猶かく有けるは。古への正しき道の。然すがに遺れる御所行にて。最も最も有がたく。貴き御事なりかし。と見えたり。然るを

固陋なる學者たち。此の事を許して。流刑に宥められしは。政刑を失ひ給へるなど謂も有よしなれど。其は皇神の道の尊き事を辨へざる非事なり。湯文武周公らが擬聖は更にも言はず。これに效ふ徒いかに天下の大綱を亂る者に非ずや。(然るになほも湯武らを、眞聖なりと尊奉する腐儒ありて、論ふべき事あらば、幾たびも問へ、答ふべし、)然れば聖賢の眞僞。しばしも辨へ知らずば有るべからず。(なほ因々、に辨ふるを見るべし、)

孔子聖說考卷之下稿

門人　碧川好尚　補訂
大壑　平篤胤遺稿　男　平田鐵胤　續攷
門人　角田忠行

○好尚云、斯て此の後聖人の稱號を竊めるは。周文王武王周公旦の三人なるが。殷の天下を簒ひ。紂王を弑せるは逆賊の所爲なりと云ふ事。既く縣居翁。鈴能屋翁の著されたる書どもに炳焉く(また古き諸子百家の中にも、種々見え、史記儒林傳なる黄生が論、蘇軾が、武王は聖人に非ずと云る論、また皇國人にも此を逆賊なりと云へるは、圓龜の大華と云ふ人の、和漢明辨など古く、近くは薩摩の八田知紀ぬしの、桃岡雜記、經義大意、土佐の寺村成相ぬしの山狐論、上總の飽富神社神主献榮ぬしの正道論など云ものも有り、其の餘にも、少かづゝ記せるものは、數ふるに暇あらず、)また羑里に囚れて在し時。周曆及び周易を作爲したるも。伐紂の權謀姦術なるが。周曆の事は。師翁の三曆由來記。春秋命歷叙考に。委く論辯せられ。

周易の事は。三易由來記。「太昊古易傳」に。備に考へ徴されたれば。今更言加ふべくも非ず。(なほ都ての事は、赤縣太古傳、三五本國考、鬼神新論、玉襷などにも、種々論はれたるを見るべし、)然ればとて。此の三人を。此書に洩さむも。事足らぬ心地すれば師翁の西籍概論に。辨へられたる數條を採りて。標出せり。見む人其の旨を得て有るべし。(此の書は、師翁のいまだ三十歳にも足らぬ時、漢學の大概を講ぜられしを、門人等の、其の儘に筆記せる物なれば、言葉も卑賤く、議論も純精ならず、引書訂正も整はず、甚く疏漏なる書なり、今引抄するに就ては、少か言葉をも綴り直し、其の據られたる本書どもを視し、予が拙論をも加へたり、見む人本書と異なるを、怪む事勿れ、)其の説に。さて殷の末世。三十代の王を辛と云ふ。是れ謂ゆる紂王なるが。是また桀王の如く。何くれと暴虐なり。此の時西伯昌と云人有り　即周文王なるが。紂王の三公と云をも勤め居り。紂王に背き。諸侯を懷けて。我麾下と成せり。甚く奸智有りて。紂が惡行を徼幸し。自は其の表を僞り飾りて。眞聖の如く欺き。人の歸伏する如く勉めし故。(周本紀に、西伯遵二后稷、公劉之業一、則二古公、公季之法一、篤レ仁敬レ老慈レ少、禮二下賢者一、日中不レ暇食、以待レ士、士以レ此多歸レ之とあり、)其の時崇侯虎と云者。紂王に告て云く。西伯積レ善累レ德。諸侯皆嚮レ之。將レ不レ利二於帝一。と云たるに。紂王は實にもと思ひ。羑里の庫に囚へ置ること。百日ばかり。(史記魯仲連傳に、昔者九侯、鄂侯、文王、紂之三公也、九侯有レ子而好、獻二之於紂一、紂以爲レ惡、醢二九侯一、鄂侯爭レ之、彊辨レ之疾、故脯二鄂侯一、文王聞レ之喟然而歎、故拘二之羑里之庫一、百日欲レ令二之死一と有るに据られたり、また彼の易暦を作爲したるは、即ち此の時なり)西伯が臣に。大顚。閎夭。散宜生など云者ども。計を運らし。美女名馬。其の外種々珍き物取集へ。紂王に獻じ。其の罪を贖ふに。紂王は好色の事なれば。心を和め甚く悅び。美女のみにても。西伯が罪は　釋すに足れるを。況て種々の物を獻るをや。と云て。其の罪をゆるすのみならず。悅の餘り。弓矢斧鉞を與へ。征伐を心の儘にせしむ。是則紂王の愚鈍闇昧なる

所也。（此等の事、周本紀に委く見えたるが、なほ淮南子道應訓にも、文王砥德修政三年、而天下二分歸之、紂聞而患之曰、余夙興夜寐與之競行、則苦心勞形、縱而置之、恐代余一人、崇侯虎曰、周伯昌行仁義而善謀、太子發勇敢而不疑、中子旦恭儉而知時、若與之從則不堪其殃、縱而赦之、身必危亡、冠雖弊必加於頭、及未成請圖之、屈商乃拘文王於羑里、於是散宜生乃以千金、求天下之珍怪、得騶虞鷄斯之乘、玄玉百珏、大貝百朋、玄豹、黃羆、靑犴、白虎、文皮千合、以獻於紂、因費仲而通、紂見而說之、乃免其身、殺牛而賜之、文王歸、乃爲玉門築靈臺、相女童擊鐘鼓、以待紂之失也、紂聞之曰、周伯昌改道易行、吾無憂矣、乃爲炮烙、剖比干、剔孕婦、殺諫者、文王乃遂其謀、とも見えたり、是に就て周本紀頭注に、何孟春曰、以西伯之聖、紂因西伯、而閎夭之徒、以有莘美女獻紂、紂大悅、乃赦西伯、或曰西伯之聖、閎夭之徒之賢、乃以不正之賂而求贖、有此事乎、嗚呼紂之不可理回久矣、此聖人權道所係也、謂有此事可也、と有るは、例の俗儒の通論にて、採るに足らず、また方孝孺曰、羑里之事不經見、史所稱、獻美女善馬之說、皆好事者意構之詞、恐非其實也、と有るも、臆說と爲たるは、卑劣なる論なり。）西伯は。赦されて國に歸り、吾惡事を。紂王に告たる。崇侯虎を討亡し。倍表を飾り人を懷け。或は兵を用ひて諸侯を懼し。國をも廣めたる由なり。本紀に、明年伐犬戎。明年伐密須。明年敗耆國。明年伐邘。明年伐崇侯虎。西伯歸乃陰修德行善。諸侯多叛紂而往歸西伯。西伯滋大。紂由是稍失權重。と有るが如し。（同紀頭注に、方孝孺曰、崇侯之事遠不可知其詳矣、吾意其人必比凶黨惡、不供職于天子、而使害其興圖、故西伯伐之、必不以其譖己也、不然、西伯嘗伐犬戎密及耆矣、則此西國者、又豈皆譖西伯者耶と有るも、聖人の稱號に誣されし愚論なり。）偖其の頃呂尙と云者有り。固より紂王に事へしが。用ひられざるを憤り。世を遁れて痛く困窮し。年老て。七十餘りなれど。謀略の卓絕れたる者故。諸侯に遊說し

たれど。心の協ふ者無ければ。陰謀をも施す事能はず。（抱朴子逸民篇曰、呂尙之未遇文王也、亦嘗隱於窮賤、凡人易之、老婦逐之、賣傭不售、屠釣無獲、嘗無一人慕之、○秦策曰、太公望齊之逐夫、朝歌之廢屠、子良之逐臣、文王用之而王、○說苑尊賢曰、太公望故老婦之出夫也、朝歌之屠佐也、棘津迎客之舍人也、など見えたり、なほ多し、）然るに西伯。殷の王位を簒はむとする心を悟り。其に事へて業を遂しめ。己も驥尾に附て。世に出むと計り。其と無く西伯に逢ひ。謀略を談りて。取入り用ひられむと。竊に巧みて。渭水と云ふ河の邊に。魚を釣るに託して。西伯が獵に出るを俟て居たり。則齊世家に。以漁釣奸周西伯。と有るは此事なり。偖西伯は。獵に出むとして卜したるに。今日の獲虎にあらず。熊に非ず。必王と成る輔を得むと云に。果して渭水の邊に。凡庸とは見えぬ老人。餘念も無く釣を垂れて居たり。西伯は。川柳が句に。「釣れますかなど、文王側へ寄り。と云へる如く。（此の呂望が事ども、史記は更なり、楚辭、呂氏春秋、韓詩外傳、說苑、六韜、戰國策、淮南子などに、委しく見えたり、煩はしければ抄し出ず、）言をかくれば、老夫とは思ひの外。是も川柳に。「魚を釣るとは嘘八百の親仁也。と云る如く。年老たれど、中々に膽魂の逞き者故。紂が王位を簒ふ慮は。云々と談れり。西伯は大に悅びて曰く。吾先君太公の時より。聖人を得べし。其時周は興るならむと云傳ふ。定めて吾子なるべし。吾太公。子を望める事久し。其の義を以て。太公望と稱すべしと云ひ。我と同じ車に載せて歸り。立て師と爲し。猶敬ひて。是を師とし。是を尙び。是を父と爲すと云義を以て。師尙父と尊び。重く用ひて。事を謀りし由なり。則本書に。西伯脫羑里歸。與呂尙陰謀。修德以傾商政。其事多兵權與奇計。故後世之言兵及周之陰權。皆宗太公爲本謀。云々。天下三分。其二歸周者。太公之謀計居多。と有るを能考ふべし。其謀計とは。謂ゆる軍法なるか。と思ふに然らず。後世の眞言宗。日蓮宗などの。賊法師どもが爲す業に。同き事と見えたり。思ひ合すべき事の多かる中に。史記の頭注に。光縉曰。按太公

金匱云。武王伐殷。丁侯不朝。尙父乃畫丁侯射之。丁侯病。遣使請臣。尙父乃以甲乙日拔其頭箭。丙丁日拔目箭。戊巳日拔腹箭。庚辛日拔股箭。壬癸日拔足箭。丁侯病乃愈。四庚聞乃懼。越裳氏獻白雉。據此則。太公祇一妖魔惟誕之術耳。安足信哉。太史公世家中。凡曰陰謀陰權等字。俱非太公本色と云るは。允當なる論なり。如何にも謀略など稱すべき。美談には非ず。彼賊法師等の爲す呪ひ。又魔法など云ものと同じき所爲なり。猶思ひ合すべきは。論衡に太公陰謀食小兒以丹。令身純赤。長大敎言殷亡。殷民見兒身赤以爲天神。及言殷亡。皆謂商滅。兵至牧野晨擧脂燭。姦謀惑民權掩不備。周之所諱也と云ひ。また韓非子に。文王資費仲而遊於紂之傍。令之間紂而亂其心。と云ひ。また周有玉版。紂令膠鬲索之。文王不予。費仲來求。因予之。是膠鬲賢而。費仲無道也。周惡賢者之得志也。故予費仲と云ふ事も有り。斯く奸術を行ひて。時の至るを待たる事。淮南子に。文王爲玉門築靈臺。以待紂之失と有るを思ひ符すべし。斯有る事を。俗の儒者は。蔽ひ隱して謂紛らし。聖人ともてはやせる。其の下心の卑劣なるを曉るべし。斯て紂王の臣に。祖伊と云ふ者。西伯が右の如く奸術を運らし。國を弘むるを惡み。卽て禍の至らむ事を懼れ。紂王に。身の行ひを愼むべき由を諫むれども。闇昧なるが故に。其の言を用ひず。（此等の事、委く殷の本紀に見えたり。）益々暴逆甚しけれど。紂王が親族に。微子。比干。箕子など云忠臣有て。輔佐せるにより。西伯は。未だ革命の時の至らざるを知て。忠誠らしく表を飾り。其期を俟て居たり。論語に。三分天下有其二。以服事於殷。周之德可謂至德而已。と孔子の褒めたるは此事なり。其を。讃岐丸龜の殷人大華が。和漢明辨と云書に。論語は實に孔子の善敎を記したる書なるに。此の語は大不經なりと云て。其の評に。天下者殷之天下也。西伯者臣也。雖尺土莫非殷之地。雖一民莫非殷之人。周之初者岐之下而已。而至有其二者。蠶食而有之與。儻諸侯臣從而有之與。不出此二之者也。紂豈妄與地哉。蠶食有二也。其貪暴過

於秦政。秦與六國敵國。然猶惡其貪暴。有虎狼之號。況蠶食君之地乎。雖諸侯之地。天子在上則天子之地也。蠶食天子之地。非叛而何。史記有西伯與呂尚圖而。傾諸侯之趣。以是觀之。以奇謀臣於諸侯明矣。何以聽其不臣。至德稱之乎。假令全有天下。有不可服事其君之理哉。我邦之君臣主義。彼邦主地。其隔殊遠也。と云へるは盡く道理に協へる論なり。(葛花にも此の書は新刻物なり、余も見たりき、漢文にかけるが、文はいと〳〵拙くて、云に足らざれども、論は甚面白し、但し皇國の勝れたる由を擧て稱たる事ども、皆古の事をば知らざるものと見えて、たゞ今の世の事につきて云れば、古意には協はぬ事多し、漢國の非を云へるは、皆よく當れり、と見えたり、)然れども。孔子の斯く西伯を稱美せるは。故有事なり。孔子は。周の世に生れたる人故。謂ゆる國惡を云に忍びず。暫く時世に阿り諂へるにも有べく。必其本意には有まじけれど。謂ざるにしくはなし。例の愼み深き孔子には如何なり。然れば孔語なりとも。取捨すべき事なりかし。

斯て西伯は。時節の至るを俟ける間に。年老て死むとする時。其の子姬發に云へるは。見善勿怠。時至勿疑。と敎へを遺せるを。上に引たる辭どもと。攷へ合すべし。偖姬發は。父の志を繼ぎ。太公望を師として奸術を學び。(西伯父子が呂尚に權謀兵術を學びたる事、六韜に委く出たり。然れど其の書實錄に非ず、後人の呂望に依託して、作れる物なる事、四庫全書提要を初め、古人も多く論へるが如し、然はあれど、西伯父子が、呂尚に奸術を學べることは、古書どもに數多記し傳へて、少かも疑ひなし、)弟姬旦と心を合せ。紂王が隙を窺ひ居たるに。紂王は更に悟らず。暴逆猶益甚しければ。彼三仁と稱する。微子。比干。箕子。も或は去り。或は殺されたりき。姬發は。紂王の惡行。ます〳〵酷きを待伺ひ。西伯が遺敎に。時至勿疑と云ひたる如く。更に疑はず。兵を集め。殷有重罪。不可以不伐と云ひ。自專にせぬと云の心にて。西伯が木主を車に載せ。王號を稱して文王と爲し。吾は太子發と稱し。自四萬五千人に將として。誓詞を立て。諸侯に。紂王が惡行を

數へ聞かせ。今予發維行天之罰。勉哉。所不勉爾身有戮。など愪して。殷の都に討入ぬ。（委くは周本紀に就て見るべし、）其の時に。伯夷叔齊と云者。西伯能く人を懐くる故。實に善人と心得て居たるに。右の如く。叛逆を發せるに驚きて。武王が馬を叩き諫て云く。父死不葬。爰及干戈。可謂孝乎。以臣弑君。可謂仁乎と云たるに。武王が左右の者ども。既に殺さむとす。時に太公望が。是は義人なり。殺す事勿れと云て。去らしめたりと有り。此は眞に善人也。（史記伯夷傳、また莊子讓王篇にも、委く見えたり、）斯て紂王も、武王が攻來るを聞て。兵士七十萬人を發し。拒ぎ戰ひたるに。一戰に敗北して走り反り。鹿臺に登り。自火中に飛入て燔死す。武王は紂王が燔死たる所に至り。自弓を射ること三度。車より下て。劍を拔て是を撃ち。黄鉞を以て。紂王が頭を斬て。大白の旗に懸け。また妲己と今一人の愛妾の。縊れて死たるをも。右の如く爲し。其の頭を。小白の旗に懸けたり。此の時に。微子は降參し。箕子が囚れを釋し。諫めて殺されし比干が墓を封じ。紂王が子の、武庚祿父をも封じて。殷の先祖の祀を續かしめ。諸侯と叔爲したれども。叛かむ事を恐れ。吾弟の。管叔鮮。蔡叔度と云者を相て。殷の舊都を治めさせ。自王と爲り。太公望周公旦を始め。功臣等を諸侯に封じ、其功勞を賞したりき。（此れ等の事、本紀は更なり、汲冢周書克殷解にも、委く見えたり、楮抱經堂叢書本の周書校注に、梁云、此篇乃六國時僞撰、竄入周書者也、三代以上無弑君之事、詎聖如武王、而躬行大逆乎、紂之死武之不幸也、賈子連語篇言、紂鬭死、紂之官衞輿紂軀、棄玉門之外、民之觀者皆進蹴之、武王使人帷而守之、夫倉卒之際尚使人帷守、寧忍親戮其身、戕及骨肉邪、射擊斬懸必無之事、論衡恢國篇亦辨之と云ひ、また周本紀頭注に、方孝孺曰、牧野之兵非武王之志也、聖人之不幸也、當是時使紂悔過遷善、武王必不興師而踰孟津、及紂兵已北、使紂不死而降、武王必將封之以百里之邑、俾奉其宗廟、必不忍加兵于其身也、況紂已死乎、吾意武王見紂之死也、不踊而哭、則命商之群臣、以禮葬之矣、豈復

有餘怒及其既死之身乎、漢高祖・魏文帝、皆中材之主、然高祖猶能不殺子嬰、文帝猶能奉山陽終其身、曾謂武王聖人、而忍其君至此乎、吾是以知、斬首三射之說、乃戰國之妄言、遷信而紀之謬也、と有るも武王の罪を覆ひ隱して、眞聖と爲まく欲する、奸意の論なれば、採に足らず。）斯て武王は。周公旦等と相計りて。己が叛逆の罪を覆ひ隱し。また向後人に奪はるまじき爲に。文王が羑里に於て。作爲したる易の。天道天命を彌々伸べ廣め。尚書に見えたる。種々の文を造り。（尚書は、清人閻若璩が尚書疏證、江聲が尚書集注音疏、段玉裁が尚書撰異、王鳴盛が尚書後按などに就て見るべし。）其の託言と爲したる事。鬼神新論。三易由來記に。備に辨へたるが如し。實に文武周公旦が思慮の。遠く深き事古今希なり（鈴廼屋翁の葛花に、中にも周公旦といひし者、殊にこざかしきをのこにて、彌々私智を用ひて、物を定むることを好みしを、國内の人、皆其を善事に思ひつゝ、悉く其の風俗と爲れりし故に、周の代に至て、上古の傳へ事は大かた失ぬ、然れどなほまれまれには、はし〳〵遺れる事共も有つれども、皆例の虛誕と云なして、一向に取あぐる人も無く成ぬるは、いと惡き國俗になむ有ける、と見え、また小林文康と云人の記せる、眞澄の鏡と云書に、天命は聖人どもの、己が罪を隱さむ爲と、己が子孫を續けむ爲とにかまへし、智術の巧ごとなり、其の趣は、己が君の物を奪ひ取りて、天の命ずる所ぞとほこり、己が物を、臣に奪はるまじき爲に、君を亡するは、天命に背くといましむ、この汚き天命を、強て押立むとして論ふこそ、反りて國を亂す枉言なれ、と云るをも思ひ合すべし、）殷の世の續きたる事。三十代。五百八年。此の亡びたる年は。紂王の五十二年。庚寅の歲なり。（此年代の委き事は、春秋命歷敍考、また夏殷周年表をも合せ見て知るべし。）然るに伯夷叔齊は。武王が紂王を滅して自立し。國中の諸侯。其を王とし尊ぶを見て。周の粟を食ふ事を恥かしく思ひ。首陽山に隱れ。蕨を掘て食ひ居けるに。斯く周代と成ては。國中の物。皆周の有なりと云て食はず。死むとする時に。歌を作れり。其歌に。登彼西山

分。采二其薇一矣。以レ暴易レ暴不レ知二其非一矣。神農虞夏忽焉沒兮。我安適歸矣。于嗟徂兮。命之衰矣。と歌ひて。遂に餓死せるが。戎人にしては。實に奇特なる人なり。孔子も稱美して。古の賢人なりとも。仁を求めて仁を得たりとも。また不レ降二其志一。不レ辱二其身一伯夷叔齊乎。とも褒めたり。また吾師翁の。此の兩人が像をかける繪の贊に。ことへぐ。から國人のきたなけきふるまひは。今更論ふべくもあらず。其が中に。伯夷叔齊といひけむ人の。武王が軍を止めしは。少か君と臣とのわきためを。おもむじたるに似たり。然れど首陽の山にして。飯にうゑて死れるは。豊受の神の御靈や蒙らさりけむ。可畏きや。何處の國にしても。我が天津神皇の大御敎へを仰がましかば。自らあかき心となりなましものを。「折はやす。春の早蕨長閑なる。天つ日影ゆ。萌出にけり。と謂れ。また赤縣人の評には。まづ唐の韓退之が。伯夷の頌といふ文に。士之特立獨行。適二於義一而已。不レ顧二人之是非一。皆豪傑之士。信レ道篤。而自知明者也。一家非レ之。力行而不レ惑者寡矣。至二於一國一州非レ之。力行而不レ惑者一。蓋天下一人而已矣。至レ若二擧世非一レ之。力行而不レ惑者。則千百年乃一人而已耳。若二伯夷一者。窮二天地一亘二萬世一。而不レ顧者也云々。當二殷之亡周之興一云々。武王周公聖人也。率二天下之賢士。與二天下之諸侯一。而往攻レ之。未三嘗聞二有レ非レ之者一也。彼伯夷叔齊者。乃獨以爲二不可一。殷既滅矣。天下宗レ周。彼二子者。獨恥レ食二其粟一。餓死而不レ顧。繇レ是而言。夫豈有レ求而爲哉。信レ道篤而自知明者也。今世之所レ謂士者。一凡人譽レ之。則自以爲レ有レ餘。一凡人沮レ之。則自以爲レ不レ足。彼獨非二聖人一。自是如レ此云々。余故曰。若二伯夷一者。特立獨行。窮二天地一亘二萬世一。而不レ顧者也。また朱子が評に。孟子曰。聖人百世之師也。伯夷是也。故聞二伯夷之風一者。頑夫廉。懦夫有レ立レ志。奮二乎百世之上一。百世之下。聞者莫レ不二興起一也。夫孟子之於二伯夷一。其論レ之詳也。或以爲二聖之清一云々。此論乃以二百世之師一歸レ之。而孔子反不レ與焉何哉。孔子道大德中而無レ迹。故學レ之者。沒レ身鑽仰而不レ足。伯夷志潔行高。而迹著。故慕レ之者。一日感慨而有レ餘也。然則伯夷之功不レ

爲レ小レ也。と云へる。倶に然る評論なり。此の餘にも。王直が伯夷十辨を初め。種々の論有れども。大抵武王が君を弑せる罪を。宜なる事にせむとて。作れる説どもにて。論ふに足らず。然るを皇國の儒者にも。此を然る事として。伯夷を非としたるは。物部徂徠。伊藤東涯などなり。赤縣人は。己が國の聖人等が事なるに據りて。然謂ふも謂れ無きに非ねど。其の戎人すら。朱子韓愈が如き者あり。皇國の儒者として。何なる禍神の爲に。耳を塞かれしにや。いとも心得がたき學者なりかし。事有る時は。武王が姦術に效ひて。吾大君に。射向ひ奉る心有むも知るべからず。(此の徂徠等が事に就て思ふに。鈴能屋翁の葛花に、儒者は、聖人の道の下にのみ居て、他を知らざる故に、其非を見ること能はず。余はいと不敏なれども、幸に神の御靈によりて、皇神の道の高きに居て見る故に、聖人の非は、いとよく見えたり、矮人といへども、高山の巓にのぼれば、いかなる長人をも見下すにあらずや、と有るは、實に然る事なり、)さて武王は。紂王を滅して後二

年。九十年歳にて死し。其の子誦と云ふが。十三歳にて。代りて王となれり。成王と云は是なり。是に就て玉勝間に。周の武王。歳九十三にして。みまかれりし時。其の子の成王。いまだ十三歳なりと記せり。然れば成王は。武王が。八十一の時の子にぞ有ける。古へ人は。しか健なりし事は論ひ無れども。猶いかにぞやおぼゆる事は。此の王早く子どもは。數多有つれば。子孫絶むの危ぶみも無きに。猶うませたるは。然るいみじき老の世までも。なほ好色心の止ざりし也けり。聖人といふ者も然る者にや有けむ。と記されしは。實に然る事なり。此の成王が次にも子有り。また武王が父の文王も。年老るまで數多有り。左傳に。管蔡郕霍魯衞毛聃郜雍曹滕畢原酆郇。文之昭也と有れば。此十六國の君に封じたるは。皆文王が子にて。此の上に。武王と今ひとり。伯邑考と云ふ。武王が兄も有りしかば。十八人なり。また女子も。十八と十五人は有べければ。都て四五十人の子なり。猶不測なるは。男は若き女に逢へば。七十八十になりても。子を生せたる者有り。然れば文王も。

多く妾の有りしなるべく。また文王の妻の大姒と云へるは。武王が殷を滅ぼせし時。弟どもを。國國に封せし中に。康叔封と。冉季載といふ同母の弟有り。是は幼稚なりし故に。封せられず。此の時武王は。九十一歳なり。然るに其二人の弟は。漸く十四五歳と思はる。年數を逆推するに。大姒が百歳已上の子なり。女の百有餘歳にて。子を產たるは最珍し。斯有る事も。人は何氣なく見過せど。心を留て見れば。奇く珍き事なり。(此等の事ども、史記周本紀、及び年表、世家は更なり、通鑑綱鑑の類に委く見えたり、所狹ければ抄し出ず。)五雜俎人部に。此の類の事ども。抄し集めて擧たるに。大姒の事は洩せり。世の學者は。聖人とし云へば聞懼して。佛者の佛を信ずる如くなるが。好色の心は。凡人に等しきものなり。さて成王が世となりては。幼弱なる故。周公旦は。己が封せられし魯國には行かで。自ら王の席に居り。成王を輔佐し。政事を專にして。旣に其の位を簒はむとし。傍よりも然思はれしかば。召公奭に太公望を始め。また紂王が子の武庚に附措たる。

管叔、蔡叔。其の餘も。周公を疑ひて流言せり。中にも管蔡は。周公旦が罪を訪むとして。彼武庚を挾み。亂を作せり。其は此二人が自力にては。周公旦に勝こと能はざるを知れる故。武庚を挾み。事を計らへば。彼殷を慕ふ者共。多く附屬すべきを考へ。また武庚は。紂王が仇を報ずべく思ふ砌なれば。管蔡が叛逆を幸として。同心せしなり。(尙書に謂ゆる、大誥を作れるは此時なり、)於是周公軍を興して打向ひ。其の兄管叔と武庚を殺し。蔡叔を追放ち。武庚が所領を二つに別ち。末弟康叔を。衞と云國に封じ。紂王の兄微子を。宋と云國に立。殷の祠を嗣しめたり。凡二年ほどもかゝりて。其の邊を一先治めし由なり。(委く史記の世家に見えたり、)是に據りて、或人ながら。蘇軾が。武王を論せし文中に。武王非ニ聖人一也。昔孔子盡レ罪ニ湯武一。顧自以爲。殷之子孫而周人也。故不ニ敢然數致レ意焉云々。伯夷叔齊之於ニ武王一也。蓋謂ニ之殺レ君。至ニ恥レ之不レ食ニ其粟一。而孔子予レ之。其罪ニ武王一也甚矣。此孔子之家法也云々。而孟軻始亂レ之曰。吾聞武王誅ニ獨夫紂一。未レ聞レ弑レ君

也。自是學者。以湯武為聖人之正。若當然者。背孔子之罪人也云々。殺其父封其子。其子非人也則可。使其子而果人也。則必死之云々。武王親以黄鉞斬紂。使武庚受封而不叛。豈復人也哉。故武庚之必叛。不待智者而後知也。武王之封武庚。蓋亦不得已焉耳。殷有天下六百年云々。紂雖無道。其故家遺俗未盡滅也。三分天下有其二。殷不伐周。而周伐之。誅其君夷其社稷。諸侯必有不悦者。故封武庚以慰之。此豈武王之意哉。故曰武王非聖人也。と云へるは然る事なり。(王直曰、史遷歴言文王武王志在傾商、累年伺間、備極形容、文字既工盪入耳目、學古之士无所折衷、則或而是之、曰武王之事不可以已、而夷齊則為萬世立君臣之大義也、呂黎韓公之論是已、其偏信者、則曰、夷齊于武王、謂之弑君、孔子取之、蓋深罪武王也、眉山蘇公之論是已、嗚呼此事、孔孟未嘗言、而史遷安得此歟と有るは、謂ゆる靴を隔て痒きを掻、とも云べき拙論なりかし、)實にも。武王が紂王を亡したるを非として。從はぬ國多かりしなり。其は康王の時まで。殷を慕ひ周に服せざりし國。四十餘國有しよし尚書に見ゆ。多士。多方。無佚篇などは。其を諭さむとして作れる文なり。其の文中に。商王士。また有殷多士。また殷逋播臣など有て。周の臣民の列と為ず。殊更其の心を採れる様なり。斯ても猶殷を慕ひて。周に服せざりし國々の人をば。天命を知らぬ。頑民と號けたれど。殷より見れば。直に其の頑民。即て忠義の民なり。是に據りて思ふに。紂王を。武王が言に。獨夫と種せるは。眞ならぬ明徴なり。斯て周に從はざる事。四十餘年なりしに。康王の時に。始て歸せし由なり。其の壯者已に老い。老たる者已に死したるに據りて。遂に從ひしなるべし。と論はれたり。此は信に大略なるが。俗儒輩は。聖人なりと云ふ。文武周公三人の議論を浅さむも如何なれば。概論の儘に記せり。なほ委くは。尚書。史記。汲冢周書を初め。其の餘の古書どもに就て見るべし。(また後の世の書にも、右乃擬聖等を辨駁せる議論の、適當せるも少からねば、皇蕃の差別無く廣く見聞して、論ひ得たり、と所思

ゆる事どもは、補ひ綴り賜はれかしと、竊に乞願ふのみ。）

さて右等の聖人どもの。古說の聖に符ざる故に。後人の慢りに作れる新說と見えて。禮記の樂記に。知禮樂之情者能作。識禮樂之文者能述。作者之謂聖。述者之謂明。明聖者述作之謂也。と云へる說を載たり。（正義に、聖者通達物理、故作者之謂聖、則堯舜禹湯是也、明者辨說是非、故述者之謂明、則子游子夏之屬是也と云ひ、白虎通に、惠云作謂著作、作者之謂聖、其語本諸易、後儒訓作爲起失之、と見えたり。）此は右の故實に合はざる說ながら。當昔早く。斯ざまの新說をも用ひしと聞えて。湯武周公は更なり。管子大匡篇に。施伯と云ふ者の語に。夫管仲天下之大聖也と云ひ。小稱篇に。齊桓公が言にも。管仲を聖人と稱し。墨子公孟篇に。跌鼻と云ふ者の語に。墨翟を先生聖人也とも。また墨翟が言に。箕子。微子。爲天下之聖人と云ひ。戰國魏策に。武侯が語に。吳起をも聖人と稱せる事あり。此類なほ數ふるに暇あらず。（戰國策は、二周六國みな滅びて後に、秦にて記せる書なりと云ふ說、さも有べく、管子は管仲が自記には非ず、其より後の世人の、彼が政事の趣を能く聞知り、かつ管仲が自記せる物をも得て、書取りけむと覺ゆる書なり、然れど、戰國以前の古書なる事は論ひなし。）かく言もて來しほどに。聖人の品を彌降しに降して。彼の孟子に。伯夷聖之淸者也。伊尹聖之任者也　柳下惠聖之和者也。孔子聖之時者也。また伯夷。伊尹。孔子。皆古聖人也など言へり。然れば聖賢と云ふ稱に就ても。古說後說の別ありて。其の後說には。一事に卓たる者を。聖と稱せること。此の孟軻が語にて知るべし。（是を以て、抱朴子辨問卷に、世人以人所尤長、衆所不及者、便謂之聖、故善圍棊之無比者、則謂之棊聖、故嚴子卿、馬綏明、于今有棊聖之名焉、善史書之絕時者、則謂之書聖、故皇象、胡昭、於今有書聖之名焉、善圖畫之過人者、則謂之畫聖、故衞協、張墨、於今有畫聖之名焉、善刻削之尤巧者、則謂之木聖、故張衡、馬鈞、於今有木聖之名焉、故孟子謂、伯夷淸之聖者也、柳下惠和之聖者也、伊尹任之聖者也、吾試推演而論之、則聖非一事、夫班輸倕狄機械之聖也、附

扁和緩治疾之聖也、子韋、甘均占侯之聖也、史蘇、辛廖卜筮之聖也、夏育、杜回筋力之聖也、荊軻、聶政勇敢之聖也、飛廉、夸父輕速之聖也、子野延州、知音之聖也、孫呉韓白用兵之聖也、聖者人事之極號也、不獨於文學而已矣、莊周云、盗有聖人之道五焉、妄意而知人之藏者明也、先人而不疑者勇也、後出而不懼者義也、知可否之宜者知也、分財均同者仁也、不得此道而成天下大盗者、未之有也と云へり、此は聖の古義を俛まで知つゝも、儒者らが聖人の易賣するを、傍いたく思へる故に、詰れる語なり、(儒道にても。孔子の當時は。古義を執りて。上に引たる。哀公問の如く說きて。容易には聖賢を許さず。其の祖述せる堯舜をさへに。聖乎といひ。固より自も。聖には居らず。其の弟子なる子貢に。夫子聖者歟。何其多能也と大宰が問へるに。天縱之將聖。とは言へれど。聖也と言放たざるは。他に向きて。然は言放ち難き。聖の古義を。思ひ合せし答なるべし。(夫子之不可及也、猶天之不可階而升也とも、他人之賢者丘陵也、猶可踰也、仲尼日月也、無得而踰焉、とも云へるばかり服せれど、聖人とは言得ざりけり、)但し孔子の語に、若聖與仁。則吾豈敢云々。と云へる語勢を視るに。聖を以て自居せる如くも聞ゆれど。然には非ず。白虎通に。聖人未沒時。寧知其聖乎。曰知之。論語曰。大宰問子貢曰。夫子聖者歟。孔子曰大宰知我乎。と有るは誤なり。然るは孔子の。大宰知我乎と云へるは。大宰が聖を知れりと云るに非ず。何其多能也と云へる語を承たり。故に吾少也賤。故多能鄙事。とは云へり。(白虎通に、また聖人亦自知聖乎、曰知之、孔子曰、文王既沒、文不在茲乎、と云へれど、是も聖に自居せる語には非ず、文王既く沒しては有れど。其の文道をば、己れ學び得て持たり、然れば文王在天の靈、我を守りて、匡人ら予を何如とも爲こと得能はじ、と云へるなり、其は論語の、此の章を能く見て知べし、但し此は因に少か論ふのみ、

○好尙云。列子仲尼篇に。商大宰見孔子曰。丘聖者歟。孔子曰聖則丘何敢。然則丘博學多識者也。商大宰曰。三王聖者歟。孔子曰三王善任智勇者。聖則丘不知。曰五帝聖者歟。孔子曰。五帝善任

仁義一者。聖則丘弗レ知。曰三皇聖者歟。孔子曰。三皇善任因レ時者。聖則丘弗レ知。（張湛注に、孔丘之博學、湯武之干戈、堯舜之揖讓、羲農之簡朴、此皆聖人因レ世、應レ務之麁迹、非下所二以爲一レ聖者上、所三以爲二聖者一、固非二言迹之所一レ逮者上也、）商大宰大駭曰。然則孰者爲レ聖。孔子動容有レ間曰。西方之人有二聖者一焉。不レ治而不レ亂。不レ言而自信。不レ化而自行。蕩々乎民無二能名一焉。丘疑二其爲一レ聖。弗レ知眞爲レ聖歟。眞不レ聖歟。商大宰嘿然。心計曰。孔丘欺レ我哉と有り。此は論語の大宰の語に據りて。列禦寇の寓言せるが。聖の行狀を述たる趣。上に引出られたる古説に符へるは。同じく玄家に出たる傳へなればなり。

然れば其の世に。孔子を聖と稱せる語の。諸書に見ゆるは。聖の本義を知ざる庸人ども。其の多能に驚きて然も稱し。或は孟軻。荀卿等ごとき。其の好む所に阿ねる。末流の門徒らが。推して稱せる聖なれば。右の古説には合ずと知べし。（孟子に公孫丑と云ふもの、夫子既聖矣乎と問へるに、孟軻答へて、惡是何言也昔者子貢問二於孔子一曰、夫子聖矣乎、孔子曰聖則吾不レ能、我學不レ厭、而教不レ倦也、子貢曰、學不レ厭智也、教不レ倦仁也、仁且智、夫子既聖矣、夫聖孔子不レ居、是何言也と云る説有れど、此は孔子を聖と云むと爲て、構へ出たる説と聞ゆ、そは學不レ厭教不レ倦ばかりの智仁を以て、聖と云むには、今世にも然る聖人は、百を以ても計ふべし、大かた聖人の品を卑く爲たるは、孟軻より弘まれり、其は此の語に連けて子夏、子游、子張などを、皆有二聖人之一體一と云ひ、冉牛、閔子、顏淵を、聖人の體を具へて微なりと云ひ、伯夷、伊尹、柳下惠をも、皆古聖人也と云ひ、吾所レ願則學二孔子一也、と云へるを以ても想ひ像るべし、）

こ好尙云。孟軻荀卿は更なり。秦漢以來の儒學者。孔子を。實の聖人なりと尊び敬ふを。孔子の靈。幽より視て。如何に思はむ。其は孟子（盡心篇下）に。孔子曰。惡二似而非者一。惡レ莠。恐二其亂一レ苗也。惡二佞一。恐二其亂一レ義也。惡二利口一。恐二其亂一レ信也。惡二鄭聲一。恐二其亂一レ樂也。惡レ紫。恐二其亂一レ朱也。惡二鄉原一。恐二其亂一レ德也と見え。孟子も。（離婁下篇、）聲聞過レ情君子恥レ之。（趙注に人無二本行一、暴得二善

聲、令聞過其情、故君子恥之、)とも謂へれば。返す〳〵孔子の本意に非る事疑ひなし。猶下に委く辨へたるを見るべし。

然れど。然る雷同の説は何にも有れ。子を見ること父にしかず。弟子を見ること師に若されば。孔丘氏の事は。其師老子の定めを用ふべし。其は史記に。孔子始めて入門して。禮を問へる時のことを記して。老子曰。子所言者。其人與骨皆已朽矣。獨其言在耳。且君子得其時則駕。不得其時則蓬累而行。(索隱云、蓬累猶扶持也、頭戴物兩手扶之而行、謂之蓬累也、蓬蓋也累隨也、)吾聞之。良賈深藏若虛。君子盛德容貌若愚。去子之驕氣與多欲態色與淫志。是皆無益於子之身。吾所以告子若是而已。(正義曰姿態之容色與淫欲之志、皆無益於夫子、須去除也、)孔子去謂弟子曰鳥吾知其能飛。魚吾知其能游。獸吾知其能走。走者可以爲罔。游者可以爲綸。飛者可以爲矰。至於龍、吾不能知其乘風雲而上天。吾今日見老子。其猶龍邪とあり。(なほ莊子、また神仙傳などに、孔子の、老子にをり〳〵其の驕氣態色を叱せられし事見えたり、文の繁きが厭はしくて抄さず、)

)好術云。老子に見えし事。孔子世家には。魯南宮敬叔言魯君曰。請與孔子適周。(索隱曰、莊子云、孔子年五十一、南見老聃、蓋系家亦依此爲說、而不究其旨、遂倶誤也、何者孔子適周、豈訪禮之時卽在十七耶、且孔子見老聃云、甚矣、道之難行也、此非十七之人語也、乃旣仕之後言耳、)魯君與之一乘車。兩馬。一豎子。倶適周問禮。蓋見老子云々。辭去而老子送之曰。吾聞富貴者。送人以財。仁人者送人以言。吾不能富貴。竊仁人之號。送子以言曰。聰明深察而近於死者。好議人者也。博辨廣大危其身者。發人之惡者也。爲人子者。毋以有己。爲人臣者。毋以有己と有り。(索隱にも論へる如く、孔子周に適くは、必十七八の年齡に非ず、莊子天運篇に、孔子行年五十有一而不聞道、乃南之沛見老聃、老聃曰、子來乎、吾聞子北方之賢者也、子亦得道乎、孔子曰未得也、老子曰、子惡乎求之哉、曰吾求之於度數、五年而未得也、老子曰、子又惡乎求之哉、曰吾求之於陰陽、

十有二年而未レ得、老子曰然、また孔子謂二老聃一曰、丘治二詩書禮樂易春秋六經一、自以爲レ久矣、孰知二其故一矣、以奸者七十二君、論二先王之道一、而明二周召之迹一、一君無レ所二鉤用一、甚矣、夫人之難レ說也、道之難レ明耶、云々とも有れば、司馬貞が論へる如く、十七八歳の語勢に非ず、莊子に據りて、五十一と定むべし、然るに莊子は寓言にして、事實は採らざる者多きよしなれど、然らず、其は羅泌が路史炎帝記に、莊に據りて、學二於老龍吉一と有る下の、羅苹が注に、夫寓言者、謂レ寓二其理於言一、借レ事以寄二吾之理一爾、非二鑿空造端之說一也、と云へるは、實に然る事にて、呂氏春秋を始め、餘の諸子にも、莊子の事實を採れるもの少からず、校へ見て辨ふべし、また老子を龍に比したる事、莊子には、孔子見二老聃一而語二仁義一、老聃曰夫播レ糠眯レ目、則天地四方易レ位矣、蚊虻噆レ膚則通昔不レ寐矣、夫仁義憯然乃憤二吾心一、亂莫レ大レ焉、孔子見二老聃一、歸三日不レ談、弟子問曰、夫子見二老聃一、亦將何規哉、孔子曰、吾乃今於レ是乎見レ龍、龍合而成レ體、散而成レ章、乘二乎雲氣一、而養二乎陰陽一、予口張而不レ能レ嗋、予又何規二老聃一哉と有り、史記と少か異なれば、記し出したり、また神仙傳に、孔子の易を讀しを、老子の見て、聖人讀レ之可也、汝曷爲讀レ之、と叱れる事見えたれど、三易由來記に委く論辯せられたれば、此處には漏しつ、〕また孔子の。老子に學びたる事は。韓詩外傳五卷に。仲尼學二乎老聃一。未レ遭二此師一則功名不レ能レ著二乎天下一。名號不レ能レ傳二乎後世一者也。（新序雜事篇、潜夫論讃學篇にも、是と同じ事見えたり、外傳を其の儘採りて記せりと聞ゆ、〕と云ひ。白虎通辟雍條にも。孔子師二老聃一とも。論語學而篇に。竊比二於我老彭一とも。（此の老彭を、論語釋文に引たる鄭玄注に、老聃、彭祖なりと云へるは然る事なり、然るに何晏集解に、包曰老彭殷賢大夫、好述二古事一と云ひ、朱熹も此の說に據れる、ともに誤ならむ、古く班固が古今人表に、彭祖を二等に出し、殊に老彭を三等に出したるは、大戴禮虞戴德篇に、商老彭と稱し、また此の孔語などに本づける說と聞ゆるが、是より後は、班固が說によりて、此の老彭を一人と爲したる者も少からず、清の梁

玉縄が人表攷に、案彭祖乃彭姓之祖、與老彭爲二人、故表列彭祖二等、老彭三等、潜夫論讃學曰、顓頊師老彭、大戴禮虞戴德稱商老彭云々、俱可取證と有る是なり、猶多かるべし、其は大戴禮、潜夫論にも見えたれば、古今人表の老彭は、一人なるべけれど、此の論語のは、老聃、彭祖なるべし、其は上にも下にも云如く、孔氏の學乎老聃とも、師老聃とも、吾聞諸老聃とも云へる語は、諸書に許多有るを、學乎老彭、また師老彭など云語は、有こと無きを以て、然は云ふなり、また皇侃義疏に、老彭彭祖也、年八百歳、故曰老彭と有るも、集解と同じ、また正義に、王弼云、老是老聃、彭是彭祖と云ひ、朱註に、竊比尊之之辭、我親之之辭と云へる、共に然る事なり、なほ此事下に論ふ旨と、校べ合せて辨ふべし、)禮記曾子問篇に。吾聞諸老聃とも。(此語數條に出たるが、鄭玄注に、老聃古壽考者之號也、與孔子同時と有るは、老子には非る趣にて、いと心得がたき註なり、)家語觀周篇に。孔子謂南宮敬叔曰。吾聞老聃、博古知今。通禮樂之原。明道德之歸。則吾師也。今將往矣。(王肅註に、老聃老子、博古知今而好道云々、なほ老子に、種々の事を問へる條々多けれど、煩しければ漏しつ、)とも見えて。老子の弟子なる事。少か疑ふべき節も無きに。古今の學者等、誣說を作爲して門人には非ざる趣に論へる者。少からぬ由なり。其の故は。老子は道德の高く貴き事。比倫なき先生には有れど。(其の著せる道德經は更なり、太上老君と稱して、玄家に尊崇する事、列子、莊子、文子、韓非子、淮南子を始め、博く仙籍を見て知るべし、)儒道よりは。異端と卑しむる。神仙なる事を嫌ひて。然は云へるにこそ。(今其を少か云むに、史記の頭註に盧舜治曰、往稱孔子問禮於老聃、後世遂謂孔子、爲聃之弟子、雖韓昌黎、亦云、予竊謂、問禮必以其爲知禮也、聃崇尚虛无、蔑棄六籍、其不知禮可知、況禮制於先王、而周公集其太成、魯周公之封國也、孔子爲魯人、而韓宣子謂、周禮盡在魯、則近取之足矣、何必遠求於聃哉、然則何以稱問禮於老聃、蓋以其不知禮故、就而問之耳、制

字有同義、曰詰、曰訊曰鞫、皆謂之問、孔子問、孔子問禮於老聃、蓋以禮詰聃、訊聃鞫聃、欲其心服而反之禮也、但不知當時所問者、謂何耳、と云へるは、牽強諏會の愚說と云ふべし、）

此を聖の古說と合せ考へば。孔子の聖か否かは。誰も自づからに知なむ物ぞ。また然る孔子の博識多能なるに。老子をかく懼りし趣を以て。老子の大德を觀るべし。在位の人ならで。古說の聖に叶へるは。夏殷周三代の間に。老子を除きて有こと無し。此に就て思へば。論語に。子曰。聖人吾不得而見之。得見君子者斯可矣。と有るは。老子を見ざる。昔日の語にぞ有ける。（朱熹が注に、聖人神明不測之號と云へり、信に此の注の如きは、眞聖人の德にて、老子の玄德是に符へり、其は其の遺書どもを見て知べし、孔子固より、生ながらの事識には非ざりし故に、老子に見えざる間は、其の世に眞聖人なしと思ひてぞ在けらし、列子仲尼篇に、仲尼閒居、而有憂色、顏回援琴歌、孔子聞曰若奚獨樂、回曰、夫子奚獨憂、孔子曰先言爾志、曰、吾昔聞之夫子曰、樂天知命、故不憂、回所以樂也、孔子愀然有間曰、有此言哉、此吾昔日之言爾、請以今言爲正也、云々と有るに准へて。論語中にも昔日の語多きこと知べし、）抱朴子塞難卷に。仲尼既敬問伯陽。又自以下知魚鳥而不識龍。喩老氏於龍。

（好尙云。說苑辨物篇に。神龍能爲高。能爲下。能爲大能爲小。能爲幽能爲明。能爲短能爲長。昭乎其高也。淵乎其下也。薄乎天光高乎其著也。一有一亡忽微哉。斐然成章。虛無則精以和。動作則靈以化。於戲允哉君子。辟神也と有りて。老子の玄德の卓越たるを。此の物に譬へたるは。實に然る事なり。

蓋其心服之辭。非空言也。與顏回所言。瞻之在前。忽然在後。鑽之彌堅。仰之彌高無以異也と言れしは。實に然る言なり。作者之謂聖。と云ふ說より此を云ときは。周公孔子は。實に儒道の作者なれば。儒聖と稱はむは然も有べし。古說の眞聖には。梯立しても。至り得まじき倫なりかし。（然れば、彼の荻生茂卿と云ひし儒者の書に、周孔を聖と稱する事を、作者の稱に釋たるは、當れる說なれ

ど、聖と云ふを、總て其の義に見たるは委しからず。）莊子天地篇に。子貢が楚に南遊して。圃畦を爲る丈人に叱られし事實を記せる文中に。爲圃者曰。子奚爲者邪。曰孔丘之徒也。爲圃者曰。子非夫博學以擬聖。於于以蓋衆。獨弦哀歌。以賣名聲於天下者乎。と有るは。謂なき語には非ずかし。（於于夸誕貌、蓋厭也、獨弦哀歌、言倡而無和也と、註する者の云へるが如し。）

○好尚云。文子上禮篇に。至夏殷之世。嗜欲達於物。聰明誘於外。性命失其眞。施及周室。澆醇散樸。離道以爲僞。險德以爲形。智巧萌生。狙學以擬聖。華誣以脅衆。琢飾詩書以賈名譽。各欲以行其智僞。以容於世。而失大宗之本。故世有喪性命。衰漸所由來久矣。と有をも思ひ合すべし。

（）好尚云。聖說攷とて。師翁の記し措れたる物は。上に一字高く揭けたる件々より餘には。少かも有る事なし。初發にも謂へる如く。諸子百家の中より。聖說に關係る事ども拾ひ出て。附錄と爲し。予が拙說をも加へて。視す事左の如し。

抱朴子辨問篇曰。或曰。聖人之道不得枝分葉散。必總而兼之。然後爲聖。余答之曰。孔子門徒達者七十二。（（）世家曰、弟子蓋三千焉、身通六藝者七十有二人、）而各得聖人之一體。（（）孟子公孫丑上曰、昔者竊聞之、子夏子游子張皆有聖人之一體、冉牛閔子顏淵則具體而微、）是聖事有剖判也。又云顏淵具體而微。是聖事有厚薄也。又易曰。有聖人之道四焉。以言者尚其辭。以動者尚其變。以制器者尚其象。以卜筮者尚其占。（見繫辭上傳、）此則聖道可分之明證也。何爲善於道德。以致神仙者。獨不可謂之爲得道之聖。苟不有得道之聖。則周孔不得爲治世之聖乎。既非一矣。何以當責使相兼乎。且夫周孔蓋是高才。大學之深遠者耳。小小之伎猶多不閑。使之跳丸弄劍。踰鋒投狹。履絙登幢。擿盤緣案。（（）跳丸と云より已下、聞えたる儘なれば注を下さず、兒童の戲に似て、今日口を糊する徒の爲す伎なり、然れど、凡人の目を驚すもの少からず、）跟挂萬仞之峻峭。（（）列子黃帝篇に、列禦寇爲伯昏無人射、無人曰、當與汝登高山、履危石臨百仞之淵、若能射乎、

於是無人逐登高山、履危石、臨百仞之淵、背逡巡足二分垂在外、揖禦寇而進之、禦寇伏地汗流至踵云々、稚川翁此の事に本づきて謂れしか詳ならず、)游泳呂梁之不測。(列子黄帝篇曰、孔子觀於呂梁、懸水三十仞、流沫三十里、黿鼉魚鼈之所不能游也、見一丈夫游之、以為有苦而欲死者也、使弟子並流而承之、數百步而出、被髮行歌而游於塘下、)手扛千鈞。足蹈驚飇。暴虎檻豹。攬飛捷矢。(呂氏春秋忠廉篇曰、吳王欲殺王子慶忌、吾嘗以六馬逐之江上矣、而不能及、射之矢左右滿把而不能中云々、と有る倫ひを云ふ、また足蹈驚飇とは、迅速なるを云ひ、暴虎檻豹とは、膳巴提便臣が、虎の舌を握りて刺殺し、島津義弘侯の、朝鮮にて虎狩を為られたる事などを思へば、皇國人には珍しからぬ事にや檻とは禽獸を飼おく所なり、)

凡人為之而周孔不能。況過於是乎。他人之所念慮。蚤蝨之所首向。隔牆之朱紫。林下之草芥。匣匱之書籍。地中之寶藏。豐林邃藪之鳥獸。重淵洪潭之魚鼈。令周孔委曲其采色。分別其物名。經列其多少。審實其有無。未必能盡知。

好尚云。此等の事。聖人と云ども知る事能はず。然れど扁鵲が。上池の水を以て。長桑君の神藥を服し。墻を隔て、彼邊の人を見るに。則神に通じ。病を視れば。盡く五藏の癥結を見たるよし史記に見えたり。稚川翁も。斯有る事を思ひて論れたるなるべし論衡實知篇にも、使一人立於牆東。令之出聲。使聖人聽之牆西。能知其黑白短長。鄉里姓字所自從出乎。溝有流壍。澤有枯骨。髮首陋亡肌肉腐絕。使人詢之能知其農商老少。若所犯而坐死乎。非聖人無知。其知無以知也。知無以知。非聞不能知也。不能知則賢聖所共病也。と有るをも思ひ合すべし。

況遠於此者乎。聖人不食則饑。不飲則渴。灼之則熱。凍之則寒。撻之則痛。刃之則傷。歲久則老矣。損傷則病矣。氣絕則死矣。此是其所與凡人無異者。甚多。

○好尚云。然るを神仙は大に異なり。粗下に論ふを見るべし。

而其所ニ以不レ同者至少矣。所ニ以過ニ絶人一者。唯在ニ於才長思遠。口給筆高。德全行潔。强訓博聞之事一耳。

○好尙云。此の數事。稚川翁は。行ひ遂られしか。遂られざりしか。其は知らず。斯客易げに云れたれど。行ひ得ること信に難し。儒聖と稱すべき孔丘氏は然も有べし。其の後和漢數千人の儒學者に。有りや無しや。

亦安能無ニ事不レ兼邪。既已著ニ作典謨一。（○好尙云、尙書所レ謂二典三謨之類也、）安レ上治レ民。復欲レ使下之兩知ニ僊道一。長生不レ死。以レ此貴ニ聖人一。何其多乎。吾聞至言逆ニ俗耳一。眞語必違ニ衆儒一。士卒覽ニ吾此書一者必謂。吾非ニ毀乎聖人一。吾豈然哉。但欲レ盡ニ物理一耳。理盡事窮。則似レ於レ謗ニ訕周孔一矣。

○好尙云。此の件信に感ずるに餘り有り。稚川翁固より。眞聖人を非毀するの意なし。其は眞擬の差別無く。打任せて。聖人と謂るゝが如くなれど。其の等級の多かる事。上の件に見えたるが如し。皇國も赤縣も。俗儒の聖人を尊尙する事。實に天より墜たる如く。神靈不測の物も知らざる事無し。と云へるが。傍痛く思はれて。物理を窮め盡さむと。此の論辨を吐れたるなり。師翁の聖說も。右と等しく。少か誹謗るゝに非ず。三皇は更にも云ず。五帝の（好尙云、此の三皇は、天皇氏、地皇氏、人皇氏を云ひ、五帝は、禮記の月令に出せる五帝なり）眞聖をも尊崇せらるゝこと。是れ亦俗儒の其の名に服し畏れて。尊尙せる類に非ず。或人師に。赤縣學の稽式を問へるに。祖ニ述三皇一宗ニ三墳之既隱一。憲ニ章五帝一。探ニ五典之僅存一。と答へられたるを以ても。眞聖を重せらるゝ事知られたり。赤縣も山跡も。三千歲に近き今の世まで。此の通弊に誑惑せざる者。僅に數人のみなるは。禍神に。世人の耳も眼も塞がれたるにて。慷慨き事の至極と云ふべし。實に稚川翁は。劉向が說苑敬愼篇に。人皆趨レ彼。我獨守レ此。衆人惑々我獨不レ從。と云る學則とこそ謂べけれ。また師翁も。此の翁の學則に效はれて。聖說攷は記されたるなるべし。孔丘氏も。必也正レ名乎と云へるが如く。眞聖擬聖を分別して。擬聖の陰謀逆賊なる事を辨駁し。眞聖の確乎たる正道に從はむ事を。

返す〳〵想ふべし。

世人謂聖人從天而隊。神靈之物無所不知。無所不能。甚於服畏其名。不敢復料之以事。謂爲聖人所不能。則人無復能之者也。聖人所不知。則人無復知之者也。不可笑哉。今具以近事校之想。可以悟也。完山之鳥賣生送死之聲。孔子不知之。便可復謂顏回只可偏解之乎。(一)好尙云、本文恐有誤、家語顏回篇曰、孔子在衞、昧旦晨興、顏回侍側、聞哭者之聲甚哀、子曰回汝知此何所哭乎、對曰回以、此哭聲非但爲死者而已、又有生離別者也、子曰何以知之、對曰、回聞桓山之鳥生四子焉。羽翼既成、將分于四海、其母悲鳴而送之、哀聲有似於此、謂其往而不返也、回竊以音類而知之、孔子使人問哭者、果曰父死家貧賣子以葬、與之長決、子曰、回也善於識音矣、)聞太山婦人之哭。問之乃知虎食其家三人。又不知此婦人何以不徙去之意。須答乃悟。(一)檀弓下曰、孔子過泰山側、有婦人哭於墓者而哀、夫子式而聽之、使子路問之曰、子之哭也、壹似重有憂者、而曰然、昔者吾舅死於虎、吾夫又死焉、今吾子又死焉、夫子曰何爲不去也、曰無苛政、夫子曰小子識之、苛政猛於虎也、)見羅雀者純得黃口。不辯其意問之乃覺。(一)說苑敬愼篇曰、孔子見羅者、其所得者皆黃口也、孔子曰、黃口盡得大爵獨不得何也、羅者對曰、黃口從大爵者、不得、大爵從黃口者可得、孔子顧謂弟子曰、君子愼所從、不得其人、則有羅網之患、)及欲葬母。不知父墓所在。須人語之既定。(世家曰、孔子母死、及殯五父之衢、蓋其愼也、郰人輓父之母、誨孔子父墓、然後往合葬於防焉、また檀弓上鄭注曰、孔子之父郰叔梁紇、與顏氏之女徵在野合、而生孔子、徵在恥焉不告、欲有所就而問之、孔子亦爲親隱焉、曼父之母與徵在爲鄰、相善者、)墓崩又不知之。弟子語之。乃泫然流涕。(一)檀弓上曰、孔子既得合葬於防、曰吾聞之古也墓而不墳、今丘也東西南北之人也、不可以弗識也、於是封之崇四尺、孔子先反、門人後雨甚至、孔子問焉曰、爾來何遲也、曰防墓崩、孔子不應三、孔子泫然流涕曰、吾聞之古不修墓、)又疑顏淵之盜食。乃假言欲祭先人。

卜撥塵之虛僞。(○呂氏春秋任數篇曰、孔子窮乎陳蔡之間、藜羹不斟、七日不嘗粒晝寢、顏回索米、得而爨之幾熟、孔子望見、顏回攫其甑中而食之、選間食熟、謁孔子而進食、孔子佯爲不見之、孔子起曰、今者夢見先君、食潔而後饋、顏回對曰不可、嚮者煤炱入甑中、棄食不祥、回攫而飯之、孔子歎曰、所信者目也、而目猶不可信、所恃者心也、而心猶不足恃、弟子記之、知人固不易矣、故知非難也、孔子之所以知人難也、)廏焚。又不知傷人馬否、(○事見論語鄉黨篇、)顏淵後。便謂之已死。(○孔子狀類陽虎、匡人拘焉五日、顏淵後、子曰吾以汝爲死矣、顏淵曰、子在回何敢死、)又周流七十餘國。而不能逆知人之必不用之也。(○解在下、)而栖々(○藏本作栖々、)遑々。席不暇温。(○漢書敘傳上曰、棲々皇々孔席不煖、師古注曰、言志在明道、不暇安居、)又不知匡人當圍之。而由其途。(○世家曰、孔子將適陳、過匡、顏刻爲僕、以其策指之曰、昔吾入此、由彼缺也、匡人聞之、以爲魯之陽虎、陽虎嘗暴匡人、匡人於是遂止孔子、孔子狀類陽虎、拘焉五日と見

えたり、此は其の本道より往べきに、顏刻が敎へたるまゝ、陽虎の入しが如く、其垣の缺れより、孔子も入りしが故に、匡人も、陽虎として拘へしならむ、委くは琴操に見えたり。(問老子以古禮。(○旣解上卷、)禮有所不解也。問郯子以鳥官。(此事在昭公十七年左傳、)宮有所不識也。行不知津。而使人問之。又不知所問之人必譏之。而不告其路。(○見論語微子篇、)若爾可知不問也。下車逐歌鳳者。而不知彼之不住也(○同上、)見南子。而不知其無益也。(○見雍也篇、)諸若此類不可具擧。但不知僊法。何足怪哉。又俗儒云聖人所不能。則餘人皆不能。則宕人水居。(○出所未詳、)梁母火化。(○神僊通紀曰、梁母盱眙人也、孀居無子、舍逆旅于平原亭、客來板憩咸若還家、不異住客還錢多少、未嘗有言、客住經月、亦無所厭、躬衣襦食之外。所得施諸貧病、曾有一少年住經月、擧動異于寗(常カ)人、臨去云、我是東海小童母、亦不知小童何人也、宋蒼梧王元徽四年丙辰、馬耳山道士徐道盛、蹔至蒙陰於蜂城、西過一靑羊車、車自住見一小童、喚云徐道士前來、

道盛行進、去車三步許、又見二童、年十二三許、齊著黃衣、絳裹頭上角髻容止端正、世無比也、車中人遣一童子傳語云、我是平原客舍梁母也、今被太上召云々、待對在近、我心憂勞便當乘煙三清、此三子見遷玄都國、擧手謝云、太平相見馳車騰遊極目而沒、道盛還逆旅訪之、正是梁母度世日相見也と有り、傳中乘煙三清の語を採りて、大化と謂れたるか、委くは知がたし、また雲笈七籤（○未知出何書）子伯耐至熱。仲都堪酷寒。（○神仙傳曰、王仲都漢人也、一云道士、學道於梁山、遇太白眞人、授以虹丹、能禦寒暑。已二百許年、漢元帝召至京師、試其方術、嘗以嚴冬之月、從帝而遊、令仲都單衣乘驅馬車、於上林昆明池、環水馳走、帝御狐裘而猶覺寒、仲都貌無變色、背上氣蒸焦々然、又當盛夏、曝之日中、圍以十爐火、口不稱熱、身不流汗、後亦仙去、桓君山著新論、稱其人）左慈兵解而不死。（○神仙傳曰、左慈字元放、廬江人也、精思於天柱山中、得石室中九丹金液經、能變化萬端不可勝記、魏曹公惡之、使引出市殺之、須臾忽

失慈所在、公令普逐之、如見便殺、後有人、見知便斬以獻公、公大喜及至視之、乃一束茅、驗其尸、亦亡處所云々、）甘始休糧以經歲。（○神仙傳曰、甘始者太原人也、善行氣不飲食、行房中之事、依容成元素之法、更演益之、爲一卷、用之甚有近效、治病不用針灸湯藥、在世百餘歲、乃入王屋山仙去、）范軼見斫而不入。（○事跡未詳、）鼈令流尸而更生。（○說郛引寰宇記曰、蜀始稱王者、自名蠶叢、蜀之後□名杜宇、號望帝、有荊人鼈靈死、其屍浮水上、至汶山下、又復生、望帝見之、用爲相、以已之德不如鼈靈、讓位鼈靈、立號開明、望帝自逃之、）少千執百鬼。（○未知出何書）長房縮地脈。（○後漢書方術傳下曰、費長房者汝南人也、曾爲市掾、また神仙傳曰、房有神術、能縮地脈。千里存在目前、宛然放之復舒如舊也、）仲甫假形於晨鳧。（○神仙傳曰、李仲甫者、豐邑中益里人也、少學道於王君、服水丹有效、仲甫有相識人、居相去五百餘里、常以張羅自業、一旦張羅得一鳥、視之乃仲甫也、語畢別去、是日仲甫已復至家、在民間三百餘

年、後入西岳山、去不復還也、）張楷吹噓起雲霧（〇初學記天部下引、謝承後漢書曰、張楷字公超、性好道術、能作五里霧〇）未聞周孔能爲斯事也。俗人或曰周孔皆能爲此。但不爲耳。吾答之曰。必不求之於明文而指之以空言者。吾便可謂。周孔能振翮翻飛。翺翔八極興雲致雨。移山拔井。但不爲耳。一不以記籍見事爲據者。復何限哉。必若所云者。吾亦可以言。周孔皆已昇僊。但以此法。不可以訓世。恐人皆知不死之可得。皆必悉委供養。廢進官而登危。浮深以修斯道。是爲家無復子孫。國無復臣吏。忠孝並喪。大倫必亂。故周孔密自爲之。而祕不告人。外託終亡之形。內有上僊之實。如此則子亦將何以難吾乎。亦又未必不然也。云々と見えたり。（なほ此篇の文最長けれど皆神仙道に與る事にて、聖說には要となき事なれば洩しぬ、實に稚川翁の言に、世の人謂ふ、聖人天よりして墜つ、神靈の物知らざる所無く、能はざる所無しと云へる事の、僞りなるよしを、熟辨ふべし
〇）好尙云。此處に追次て載せるは。謂ゆる墨子なるが。孔丘子の事跡に有用なれば。抄し出せるなり。然れど此の論悉く。謂得たりとには非ず。其の取捨は。見む人の心に任すべし。並ての世の人は。楊墨とし云へば。異端の道と稱して。少かも採用ふべき書に非ず。と爲る由なれど。其は孔丘氏を難詰したる語に。拘泥せる俗儒の辯論にて。謂ふに足らず。史記の自敍。司馬談が六家の要指を論じて。墨者儉而難遵。是以其事不可徧循。然其彊本節用。不可廢也。夫世異時移。事業不必同。故曰儉而難遵。要曰彊本節用。則人給家足之道也。此墨子之所長。雖百家弗能廢也。と論へる如く。採用すべき程も。多く見えたり。（〇四庫全書提要に、墨家者流史罕著錄、蓋以孟子所闢、無人肎居其名、然特在彼法之中、能自嗇其身、而時々利濟於物、亦有足以自立者、故其教得列於九流、而其書亦至今不泯耳、なども云へり）中にも鬼神の有なる事を。懇切に辨へたるは。他し書にも所見なき程の明論にて。いと〱感たし。なほ下にも論ふを俟べし。

墨子非儒篇曰。齊景公問晏子曰。孔子爲人何如。

晏子不對。公又復問不對。景公曰。以孔丘語寡人者衆矣。俱以賢人也。今寡人問之。而子不對何也。晏子對曰。嬰不肖不足以知賢人。雖然嬰聞。所謂賢人者。入人之國。必務合其君臣之親。而弭其上下之怨。孔丘之荊。知白公之謀。而奉之以石乞。君身幾滅而白公僇。（〇經訓堂叢書本畢沅校注曰、孔叢詰墨云、白公亂在哀公十六年秋也、孔子已卒十旬、〇好尚云、此校注實に然る事なり。白公亂哀公十六年の傳に委く見えたれど、文長ければ渡しつ、なほ詰墨篇に、墨子雖欲謗毀聖人、虚造妄言。奈此年世不相値何と云へる、俱に然る事なり、）嬰聞賢人得上不虚。得下不危。言聽於君必利人。教行下必於上。是以言明而易知也。行易而從也。行義可明乎民。謀慮可通乎君臣。今孔丘深慮同謀以奉賊。勞思盡知以行邪。勸下亂上。教臣殺君（〇孔叢引殺作弒、）非賢人之行也。入人之國。而與人之賊。非義之類也。知人不忠。趣之爲亂。（〇趣讀促）非仁義之也。（〇脫字、）逃人而後謀。避人而后言。行義不可明於民。謀慮不可通君臣。嬰不知孔丘之有異白公也。是以不對。景公曰嗚呼貺寡人者衆矣。（〇貺當爲況、此俗寫、）非夫子。則吾終身。不知孔丘之與白公同也。孔丘之齊見景公。景公說欲封之以尼谿。以告晏子。晏子曰不可。夫儒浩居而自順者也。（〇盧云、晏子外篇與此多同、浩居作浩裾、沅案、史記作倨傲自順、）不可以教下。

〇好尚云。浩居而自順、と有るに據りて。熟按ふに。孔丘氏は。眞に儒聖と稱して。難なき人なれば。然も無りしか知らねども、其の後に至りては。此の弊風に傚へる儒學者。夥しく見えたり。其の時代遠からぬ孟軻を初め。（諸國に遊説して、驕言を發し、其の王どもを誑惑したる趣。孟子に委く見えたれば漏しぬ、）孔丘氏の末葉なり。と云へる後漢の孔融。或は禰衡など、此の風殊に甚し。後漢書孔融傳に。融爲義郎。時黄巾寇數州。而北海最爲賊衝。董卓乃諷三府。同擧融爲北海相。融到郡。收合士民。起兵講武。馳檄飛翰。引謀州郡。賊張饒等。羣輩二十萬。衆從冀州還。融逆擊。爲饒所敗。乃收散兵。保朱虚縣。稍復鳩集吏民爲黄巾所誤者。男女四萬餘人、更

置城邑。立學校。表顯儒術と見え。また建安元年爲袁譚所攻。自春至夏。戰士所餘。裁數百人。流矢雨集。戈矛內接。融隱几讀書。（一）章注曰隱憑也、）談笑自若。城夜陷。乃奔東山。妻子爲譚所虜。また曹操既積嫌忌。而郗慮復搆成其罪。遂令丞相軍謀祭酒路粹。枉狀奏融。曰少府孔融。昔在北海。見王室不靜。而招合徒衆。欲規不軌。云我大聖之後。而見滅於宋。有天下者。何必卯金刀。及與孫權使語謗訕朝廷。又前與白衣禰衡。跌蕩放言。（（一）章注曰、跌蕩無儀檢也、放縱也、）云。父之於子當有何親。論其本意。實爲情欲發耳。子之於母。亦復奚爲。譬如寄物缻中。出則離矣。既而與衡更相贊揚。衡謂融曰。仲尼不死。融答曰。顏回復生。大逆不道宜極重誅。書奏下獄棄市。時年五十六妻子皆被誅とも。また抱朴子淸鑒篇に。孔融邊讓。文學邈俗。而並不達治務。所在敗績。とも有り。（なほ文心雕龍詔策篇に、孔融之守北海。文敎麗而罕於理。乃治體乖也、また續筆叢丹鉛新錄に、宋書引諸葛孔明之言曰、來敏亂郡、過于孔文擧、此事不經見、當表出之、蓋孔文擧名過其實、淸談廢事已有晉人之風、使遇孔明、必遭李平廖立之罰、後人稱之只以才學耳、なども見えたり、）さて禰衡が事。後漢書文苑傳下に。禰衡字正平。平原般人也。少有才辯。而氣尙剛傲。好矯時慢物。唯善魯國孔融。及弘農楊脩。常稱曰。大兒孔文擧。小兒楊德祖。餘子碌々。莫足數也。融亦深愛其才。衡始弱冠而融年四十。遂與爲交友。上疏薦之曰。竊見處士平原禰衡。年二十四。字正平。淑質貞亮。英才卓礫。初涉藝文。升堂覩奧。目所一見。輒誦於口。耳所暫聞。不忘於心。性與道合。思若有神。忠果正直。志懷霜雪。見善若驚。疾惡如讎。任座抗行。史魚厲節。殆無以過也。鷙鳥累百不如一鶚。使衡立朝。必有可觀。飛辯騁辭。溢氣坌涌。解疑釋結。臨敵有餘。云々と有り。其の後曹操。劉表が所へも往けるが。謂ゆる意氣剛傲にして。容態悖逆。恣言多きが故に。容れらるる事能はず。斯て後に江夏太守。黃祖の許に在けるが。遂に殺されたり

き。時に年二十六なり。また抱朴子彈禰篇に。衡游ニ許下一。自ニ公卿國士一以下。衡初不レ稱ニ其官一。皆名レ之云ニ阿某一。或以レ姓呼レ之爲ニ某兒一。呼ニ孔融一爲ニ大兒一。呼ニ楊脩一爲ニ小兒一。荀彧猶强可ニ與語一。(文苑傳には、或問レ衡曰、荀文若云何、衡曰文若可ニ借レ面弔一レ喪、章注曰、典略曰、衡見レ荀、儀容但有レ貌耳、故可レ弔レ喪と有り、少か異なり、)過レ此以往。皆木梗泥偶。似レ人而無ニ人氣一。皆酒甕飯囊耳。百官大會。衡時在レ坐。忽顰蹙悽愴。哀歎忼慨。或譏レ之曰。英豪樂集非レ所レ歎也。衡顧眄。歷ニ視稠衆一而答曰。在ニ此積尸列柩之間一。仁人安能不レ悲乎。曹公嘗切レ齒欲レ殺レ之。然復無ニ正有ニ入レ法應レ死之罪一。又惜レ有下殺ニ儒生一之名上。乃謫作ニ鼓吏一。衡驕傲轉甚。一州人莫レ不ニ憎恚一。而表亦不ニ復堪一。欲レ殺レ之。或諫以爲。曹公名爲ニ嚴酷一。猶能容忍。衡少有ニ虛名一。若一朝殺レ之。則天下游士。莫下復擬ニ足於荊楚一者上也。表遂遣レ之云々。(此下本書數行を缺たり、惜むべし、)衡密願ニ榮顯一。是以高游ニ鳳林一。不レ能レ幽ニ翳蒿萊一。然修レ己駁刺。(好尙云、本文有ニ脫誤一、)迷而不レ覺。故開レ口見レ憎。擧レ足

蹈レ禍。賣ニ如レ此之佞倆一。亦何理容ニ於天下一。而得ニ其死一哉。猶下梟鳴狐嚾。人皆不レ喜。音響不レ改。易レ處何益。許下人物之海也。文擧爲ニ之主一。到ニ於此一不レ安。已可レ知矣。而復走投ニ荊楚間一。終陷ニ極害一。此乃衡懵蔽之効也とも論はれたり。また行品篇に。士有下顏貌修麗。風表閑雅。望レ之溢レ目。接レ之適レ意。威儀如ニ龍虎一。盤旋成中規矩上。然心蔽神否。才無レ所レ堪。心中所レ有。盡附ニ皮膚一。入不レ能レ宰レ民。出不レ能レ用レ兵。治レ事則事廢。銜レ命則命辱。動靜無レ宜出處莫レ可、と有るも、孔融等が事跡に似たり。都て其の爲す所迂遠にして。事情に達せず、兵を用ふる時は。臨機の智慮少かも無く。謂ゆる干羽を兩階に舞して、逐鹿の姦を止めむと欲する類ひなれば。所在敗績せるは。然も有べき事なりかし。(なほ本文に、流矢雨集戈矛內接、融隱レ几讀レ書、談笑自若、と有るは何事ぞや、己が名聲の高きを恃み、敵の斯まで間近く、攻來べしとは思はざりしか、狂人とも頑愚とも、云むかたなき所爲なりかし、唯に兵機を知らざるのみならず、治務にも達せざりしこと、上に見えたるが

如し、諺に、盤旋して以走盜を追ひ、揖讓して以火災を救ふと云へるは、融等が徒の事なりかし、）然るに浮華藻麗の文才有りて。蒼生の耳目を誑惑し。賢者とか。儒聖とか稱すべき。虎皮羊質の空行を爲しける故に。名聲甚高く成れり。是却て虛名なるが。虛名としも知らざる頑民等は。隨從せる者も少からぬ由なり。其少からぬは。謂ゆる靡穀の遊民の。蕃殖せる起原なれば。諸葛亮も。郡を。亂ると謂へる。實に然る事なり。

熊澤了海が言カクベシ

遂に二人ともに。殺害せられたるは。倨傲自順ひ。都ての人の耳目に悖逆る。梟鳴狐嚾の驕慢なる。傲言を放てる過なれば。死を自招けるにて。天の降せる災に非ざる事炳焉し。返す／＼學者たる者の。愼み畏るべき事にこそ。また晉の世に至りては。此に加ふるに。老莊の糟粕を嘗たる者ども。道士の號を竊み。世を遁れたる趣にもてなし。仁義忠孝の大道を屑とせず。人に倨り高ぶり。彼の竹林の七賢など稱する。放蕩無賴の輩のみ。多く成りもて來にしは。儒と道との末弊にて。云ふにも足らず。（概論七賢ノ論註ニカクベシ）

好レ樂（墨子也）而淫レ人不レ可レ使二親治一。立レ命而怠レ事。不レ可レ使レ守レ職。宗レ喪循レ哀。（○孔叢史記宗作レ崇、）不レ可レ使レ慈レ民。

○好尙云。命を立る事の惡き由は。非命篇に委く見えたり。赤縣人の。恒に天命と云雖して。都ての事の遁れ辭なり。實の天命も。無きには非れども。十に八九は託言なれば。墨子晏子の非れるも。宜なる事なり。猶舊く自爲す業を。天命に託せる事の非なる由は。鬼神新論に。委く辨へられたるを見るべし。

機服勉容。（○盧云、晏子作下異二于服一勉中于容上）不レ可レ使レ導レ衆。孔丘盛容脩飾以蠱レ世。弦歌鼓舞以聚レ徒、

○好尙云。莊子盜跖篇に。盜跖曰。此夫魯國之巧僞人。孔丘非耶。爲レ我告レ之。爾作レ言造レ語。妄稱二文武一。冠二枝木之冠一。帶二死牛之脅一。多辭繆說。不レ耕而食。不レ織而衣。搖レ脣鼓レ舌。擅生二是非一。以迷二天下之主一。使下天下學士不上レ反二其本一。妄作二孝弟一而。徼二倖於封侯富貴一者也。また今子縫衣淺帶。

矯言僞行。以迷惑天下之主而欲求富貴焉とも有り。此は固より寓言にて。事實を徵するには足ざれども。當時孔丘氏の行ふ道を。破斥する者も多かりしかば。晏子墨子の非れるは更なり。莊子も。斯く寓言せるにこそ。孔丘氏の行の。實に然りとには非ねど。其の末派の儒に至りては。盛容脩飾して。衆人を眩惑し。財利を射る徒の多かる事。世々の書どもを見て知るべし。（和漢ともに、後代と成りて、殊更儒道を尊ぶ人の心にこそ、孔丘氏孟軻などを誹謗る事は、有まじき事とも思ふべけれ、漢魏已前は更なり、今の世にても、其の流れを學ばぬ者は、儒をも諸子百家の一流とこそ思へ、別て尊ぶ心なし。孔子も、子產晏子には、兄とし事へし由なれば、小童の如く思ひて、非れるも理ならずや、殊に先輩にも有けり、

繁登降之禮以示儀。務趨翔之節以勸衆。儒學不可使議世。（○晏子儒作博、議作儀、）勞思不可以補民。（○三字舊脫、盧据晏子增、）絫壽不能盡其學。當年不能行其禮。積財不能贍其樂。繁飾邪術以營世君。（○說文云、營惑也家語云營惑諸侯、高誘注淮南子曰、營惑也、營同營、營與眴音相近、）盛爲聲樂以淫遇民。（○當爲愚民、）其道不可以期世。其學不可以導衆。（○孔叢作家非、）今君封之以利齊俗。（○史記云、君欲用之以移齊俗、作移是、）非所以導國先衆。公曰（○二字舊脫、据孔叢增、）善。於是厚其（○二字舊脫、盧据晏子增、）禮。留其封敬見而不問其道。

○好尙云。晏子春秋外篇には。仲尼之齊見景公。景公說之。欲封之以爾稽。以告晏子。晏子對曰不可。彼浩裾自順不可以敎下。好樂綏於民。不可使親治。立命而建事。不可守職。厚葬破民貧國。久喪道哀。費日不可使子民。行之難者在內而傳者無其外。故異於服勉於容。不可以道衆而馴百姓。自大賢之滅周室之卑也。威儀加多而民行滋薄。聲樂繁充而世德滋衰。今孔丘盛聲樂以侈世。飾弦歌鼓舞以聚徒。繁登降之禮。趨翔之節以觀衆。博學不可以儀世。勞思不可以補民。兼壽不能彈其敎。當年不能究其禮。積財不能贍其樂。繁飾

邪術以營世君。盛爲聲樂以淫愚其民也。不可以示其教也。不可以導民。今欲封之以移齊國之俗。非所以道衆存民也。公曰善。于是厚其禮而留其敬。見不問其道。仲尼迺行と有り。事實大概同じけれど。少か委しき所。また異なる所も有れば。校べ訂して。其の宜きを採るべし。(なほ史記孔子世家に見えたる處も、少か異なれども、下に引出て記せれば、此處には洩しつ、また太史公自序に、儒者博而寡要、勞而少功、是以其事難盡從、然其序君臣父子之禮、列夫婦長幼之別、不可易也、以爲人主天下之儀表也、主倡而臣和、主先而臣隨、如此則主勞而臣逸、至於大道之要、去健羨絀聰明、釋此而任術、夫神大用則竭、形大勞則敝、形神騷動、欲與天地長久非所聞也、また夫儒者以六藝爲法、六藝經傳以千萬數、累世不能通其學、當年不能究其禮、故曰博而寡要、勞而少功、若夫列君臣父子之禮、序夫婦長幼之別、雖百家弗能易也、と云へり、思ひ合すべし、さて上件究其禮、など有る禮は、眞の禮に非ず、其

は昭公二十五年左傳に、子大叔見趙簡子、簡子問揖讓周旋之禮焉、對曰是儀也、非禮也云々と有る如く、禮の末節にて、多端猥雜なる事、三禮を初め、諸書に委く見えたるが如し、なほ禮の本義は。予が別に集錄せる、鄭子產□十□條に論へるを見るべし)抑、齊景公が。孔丘氏を封せむと云へるを。晏子の沮みし由は、上に記せる如くなるが。なほ故有る事なり。淮南子齊俗訓に。魯國服儒者之禮。行孔子之術。地削名卑。不能親近來遠。胡貉匈奴之國。縱體拖髮。(○高注曰、拖縱也、)箕倨反言。而國不亡者。未必無禮也。豈必鄒魯之禮之謂禮乎。(○鄒、孟軻邑、魯孔子邑、)禮者實之文也。仁者恩之効也。故禮因人情。而爲之節文。而仁發恲以見容。(○恲色也、)禮不過實。仁不溢恩也。治世之道也。古者非不知繁升降槃還之禮也。蹀采齊肆夏之容也。(○采齊肆夏皆樂名也、)以爲曠日。煩民。而無所用。故制禮足以佐實喩意而已矣。古者非不能陳鍾鼓盛筦簫。揚干戚奮羽旄。以爲費財亂政。制樂足以合歡宣意而已。喜不羨於

吾非不能竭國麋民、虛府殫財。含珠鱗施。綸組節束。（○鱗施玉田也綸絮也束縛也、）追送死也。以爲窮民絶業。而無益於槁骨腐肉也。故葬薶。足以收斂蓋藏而已。亂國則不然。言與行相悖。情與貌相反。禮飾以煩。樂優以淫。崇侈以害生。久喪以招行。是以風俗濁於世。而誹譽萌於朝。是故聖人廢而不用也。義者循理而行宜也。禮者體情制文者也。義者宜也。禮者體也。昔有扈氏爲義而亡（○有扈夏啓之庶兄、以堯舜擧賢、禹獨與子故伐啓、啓亡之、）知義而不知宜也。魯治禮而削。知禮而不知體也。（好尚云、此の文痛く約めて引たり、委くは本書に就て見るべし、）と有るは然る事にて。蒼生を疲勞し。其の心志を淫患にするを厭ひて　斯は破斥せるものなり。論語雍也篇に。孔子曰。齊一變至於魯。魯一變至於道。（包曰、言齊魯有太公周公之餘化、太公大賢、周公聖人、令其政教雖衰、若有明君興之、齊可使如魯、魯可使如大道行之時、）と云へる。儒道を以て治むる魯國の　世々次々に。弱く怯く爲れること史記の世

家を見て知るべし。（また說苑指武篇に、王孫厲謂楚文王曰、徐偃王好行仁義之道、漢東諸侯三十二國盡服矣、王若不伐、楚必事徐、王曰若信有道不可伐也、對曰大之伐小強之伐弱、猶大魚之吞小魚也、若虎之食豚也、惡有其不得理、文王遂興師、伐徐殘之、徐偃王將死曰、吾賴於文德而不明武備、好行仁義之道、而不知詐人之心、以至於此、夫古之王者其有備乎、と見え、鹽鐵論和親篇に、昔徐偃王行義而滅、好儒而削、知文而不知武、知一而不知二、と有るをも思ふべし、）さて魯國の弱く怯きは。一朝一夕の事に非ず。呂氏春秋長見篇に。呂太公望封於齊。周公旦封於魯。二君者甚相善也。相謂曰。何以治國。太公望曰。尊賢上功。周公旦曰。親親上恩。太公望曰。魯自此削矣。（○高注曰親々上恩、恩多則威武不行、威武不行故削弱也、）周公旦曰。魯雖削。有齊者亦必非呂氏也。其後齊日以大至於霸。二十四世。而田成子有齊國。（○尊賢敬德、故能霸也、上功則臣權重、故能奪君國也、）田成子恒殺簡公、

適二十四世也、）魯公以削。至於覲存（○覲裁也、）三十四世而亡。（○自魯公伯禽至頃公讎、爲楚考烈王所滅、適三十四世也、）と有り。此の二人が。後世をまだきに計れるは然る事なれど。齊國のみ劫殺の殃有りて。魯國に無くばこそ宜しけれ。其の殃同じければ。太公望の治めし趣。勝れりと云べくや。（賀茂翁の萬葉考大考の頭注に、周公旦は、儒もて魯を治めむとせしに、終に弱魯とさへ世にいひあげられて亡びき、太公望は、武もて齊を治めつれば、後もいよ〳〵勢ひ有て、長く傳へたり、と論はれたり、また魯世家に、太史公曰、余聞孔子稱曰甚矣、魯道之衰也、洙泗之間斷斷如、觀慶父及叔牙閔公之際、何其亂也、隱桓之事、襄仲殺適立庶、三家北面爲臣、親攻昭公、昭公以奔、至其揖讓之禮則從矣、而行事何其戾也、など、有をも思ふべし）總て赤縣は。文を尊び。武を卑むる風俗なる故か。禮樂の正しき國と。自許するなれど。其の正しからぬと謂ふ戎狄は。口に賤みこそすれ。治國平天下の大道は。赤縣に勝りてぞ有ける。此れに據りて思ふに。彼の般

鑒論に。夫齊州風氣中和。人性聰明。善產才賢。乃遠在三代之前。載籍缺有閒。難得而詳。若夫秦漢而還。則倫理之悖。侵伐之繁。無以異於戎狄。習俗之澆。刑法之慘。翻有甚於戎狄。猶曉々然。以中國禮義之邦。自居。非顏之厚而何也。孔子曰。有周公之才之美。使驕且吝。其餘不足觀也已。假令齊州。眞有上古之善政美俗。其矜誇虛喝。凌轢外國。如彼終不容於孔子。矧俗非古之俗。政非古之政而自驕驕人。曾不知恥。嗚呼其無義無禮甚矣。有人於此。高明之家。（○好尙云已上八字恐有誤）勳閥之冑一旦淫蕩無賴。室如懸磬。（懸磬トハ府藏空虛但有榱梁如懸磬也とあり）手持壞椀。乞食于市。方且攘臂曰。吾家之勳如此。吾家之貴盛如此。汝焉敢抗我。則人有不笑之者乎。唐人之自大。奚以異于此。とも。また西洋意大里亞等國。自古皆就歐羅巴洲。遴選賢者。立以爲君。然而禍亂不作。篡奪不萌。斯其美。比之堯舜。不多讓焉。斷非唐人所能翹企萬一也。嗚呼萬國大

矣、遠矣。吾不レ能二一一周知一、卽此一事。吾更有さ以知二他國多一レ聖人一。而齊州少レ聖人一矣。と見えたるは。實に然る事なり。（夏殷周の三代は更なり、其の後も戎狄の爲に、動すれば惱されて、戰ふと云ども勝事少なく、秦の始皇、漢の武帝が如き、力の限り攻るといへども、其の得る所失ふ所に足らす、蒙恬、蒙毅、衞靑、霍去病が徒も、遂に志を逞くする事無りき、然れども痛く敗績して、彼に對し臣と稱する程の恥辱も聞えず、また遙後に至りては、趙宋の世に、徽欽の二主、五國城に囚れて幽死し、果は蒙古に國を簒はれ、明も今の韃靖に奪はれて、卑みたる戎狄の世と成れり、然るに明の降臣等は、其の戎狄を、累代仕へし主君の如く再拜稽首して、尊び敬ふは何事ぞや、其も禮義の正しき片端にや、最も怯き事どもなりかし。）好尙云。此處に追次て記せるは。漢の桓寬が。鹽鐵論の文なるが。是また孔丘氏の事跡を揚げ。聖知に非る由を大夫等の難問せるに。儒家の文學等の答なるを。（四庫全書提要に、鹽鐵論十二卷、漢桓寬撰、寬字次公、汝南人。昭帝始元六年、詔二郡國一擧二賢良文學之士一、問二以民所一レ疾苦一、皆請レ罷二鹽鐵榷酤一、與二御史大夫桑弘羊等一、建議相詰難、寬集二其所一レ論爲レ書、凡六十篇、篇各標レ目、實則反覆問答、諸篇皆首尾相屬、後罷二榷酤一、而鹽鐵則如レ舊、故寬作二是書一、惟以二鹽鐵一爲レ名、蓋惜二其議不一レ盡行一也、蓋其著書之大旨所レ論、皆食貨之事、而言皆述二先王一稱二六經一、明嘉靖癸丑、華亭張之象爲二之註一、雖レ無レ所二發明一、而事實亦粗具二梗概一、今竝錄レ之、以備二考核一焉、と有り、此の事は、師も赤縣太古傳三卷に、鹽鐵論の書は、漢明帝が始元六年と云ける年に、文學の士を集めて、丞相御史に命せて、民間の疾苦を問しむるに、其の丞相御史より、難問を設けて問へるを、桓寬が集記せる物なり、大夫曰くと有るは、丞相御史の難問、なりとも云れたり、）是亦眞聖に非る由を視さむと。墨子の例に效ひて、抄し出たり。此の事跡どもは。旣く古き書籍にも見えたれど。斯く簡易なるは無く。また大夫等の難問の語も。棄がたくて採れるなれば。註文に。其の古書を徵引せり。見む人其の意を得てよ。

鹽鐵論大論篇曰。大夫曰。文學所稱聖知者孔子也。治魯不遂。(〇好尙云、事實見孔子世家)見逐於齊。(〇好尙云、此事上に委く記せり、然れど孔子世家に見ゆる所、少か異なる事有れば、抄略して此に出せり、齊景公欲下以尼谿田封中孔子上、晏嬰進曰、夫儒者滑稽而不可軌法、倨傲自順、不可以爲下、崇喪遂哀破產厚葬、不可以爲俗游說乞貸不可以爲國、自大賢之息周室既衰、禮樂缺有間、今孔子盛容飾、繁登降之禮、趨詳之節、云々、君欲用之以移齊俗、非所以先細民也、後景公敬見孔子、不問其禮、齊大夫欲害孔子、孔子聞之、景公曰吾老矣、弗能用也、孔子遂行反乎魯)不用於衞。(〇張之象注曰、世家曰、孔子適衞、主遽伯玉家、他日靈公問陳於孔子、孔子曰、俎豆之事則嘗聞之矣、軍旅之事未之學也、明日與孔子語、見蜚鴈、仰視之、色不在孔子、孔子遂行、復如陳、)遇圍於匡。(〇張注曰、詩傳曰、孔子行、匡人簡子將殺陽虎、孔子似之、帶甲以圍孔子舍、子路慍怒、奮戟將下、孔子止之曰、由何仁義之寡裕也、夫詩書之不習、禮樂之不講、是

丘之罪也、若吾非陽虎、而以我爲陽虎、則非丘之罪也、命也我歌子和、若子路歌、孔子和之、三終而圍罷、詩曰來游來歌、以陳盛德之和而無爲也、)困於陳蔡。(〇好尙云、莊子讓王篇曰、孔子窮於陳蔡之間、七日不火食、藜羹不糝、顏色甚憊而弦歌於室、顏回擇菜、子路子貢相與言曰、夫子再逐於魯、削迹於衞、伐樹於宋、窮於商周、圍於陳蔡、殺夫子者無罪、籍夫子者無禁、弦歌鼓琴未嘗絕音、君子之無恥也若此乎、顏回無以應、入告孔子、孔子推琴喟然而嘆曰、由與賜細人也、召而來吾語之、子路子貢入、子路曰如此者可謂窮矣、孔子曰是何言也、君子通於道之謂通、窮於道之謂窮、今丘抱仁義之道、以遭亂世之患、其何窮之爲、故內省而不窮於道、臨難而不失其德、天寒既至、霜雪既降、吾是以知松柏之茂也、陳蔡之隘於丘其幸乎、なほ此事は、諸書に多く見えたり、)夫知時不用。猶說强也。知困而不能已貪也。不知見欺而往愚也。困辱不能死恥也。若此四者。庸民之所不爲也。何況君子乎。商君以景監見。應侯以王稽進。(〇好尙云、商鞅、

茫睢が事、倶に史記の傳に見えたり、）故士因士女因媒。至其親顯非媒士之力。孔子曰進見而不以能往者。非賢士才女也。

（○）好尙云。孔丘氏の諸國に遊說して、全く用られず。生涯東西南北の人にて。困窮せる事をなほ謂はゞ。莊子天運篇に。孔子謂老聃曰。丘治詩書禮樂易春秋六經。自以爲久矣。孰知其故矣。以奸者七十二君。論先王之道。而明周召之迹。一君無所鉤用。甚矣。夫人之難說也。道之難明耶云々。また說苑至公篇に。夫子行說七十諸侯。無定處。意欲使天下之民。各得其所。而道不行。退而脩春秋ともあり。（なほ呂氏春秋遇合篇に、孔子周流海內、再干世主、如齊至衞、所見八十餘君と云ひ、史記儒林傳に、孔子閔王路廢而邪道興、於是論次詩書、修起禮樂、世以混濁莫能用、是以仲尼干七十餘君、無所遇、また孔子世家の末に、李蕭遠曰、以仲尼之才也、而器不周於魯衞、以仲尼之辨也、而言不行于定哀、以仲尼之謙也、而見忌於子西、以仲尼之仁也、而取仇於桓魋、以仲尼之智也、而屈厄於陳蔡、以仲尼之行也、而招毀於叔孫、夫道足以濟天下、而不得貴於人、言足以經萬世、而不見信於時、行足以應神明、而不能彌綸於俗、應聘七十國、而不一獲其主、驅驟於蠻夏之域、屈辱於公卿之門、其不遇也如此など見えたり、此の餘にも、陳蔡に窮厄せる事は、諸書に多く傳へたれど、悉く記すに暇有らず

文學曰。孔子生於亂世。思堯舜之道。東西南北灼頭濡足。庶幾世主之悟。悠々者皆是。君闇大夫妬。孰合有媒。（○張注曰、詩傳曰、孔子抱聖人之心、彷徨乎道德之域、逍遙乎無形之鄕、倚天理、觀人情、明始終、知得失、故興仁義、厭勢利、以持養之、于是周室微王道絕、諸侯力政、强劫弱衆暴寡、百姓靡安、莫之紀綱、禮義廢壞、人倫不理、於是孔子、自東自西自南自北、匍匐救文、）是以嫫母飾姿而矜夸。（○張注曰通作誇、）西子彷徨而無家。（○張注曰、呂氏春秋曰、人之於色也、無不知說美者、而美者未必遇也、故嫫母執乎黃帝、黃帝曰屬女德而弗忘、與女正而弗衰、

雖惡奚傷、楚辭曰、西施媞々而不得見、嫫母勃屑而日侍、語曰、嫫母衣錦西施負薪、）非不知窮厄而不見用。悼痛天下之禍。猶慈母之伏死子也。知其不可如何。然惡已。故適齊。景公欺之。適衞靈公簡之。適陳匡人圍之。適蔡桓魋害之。（○張注曰、孔子世家曰、孔子去曹適宋、與弟子習禮大樹下。宋司馬桓魋欲殺孔子、拔其樹、弟子曰可以速矣、孔子曰天生德於予、桓魋其如予何、）適楚子西謗之。（○好尙云、說苑雜言篇曰、楚昭王召孔子、將使執政、而封以書社七百。子西謂楚王曰、王之臣、用兵有如子路者乎、使諸侯、有如宰予者乎、長官五官、有如子貢者乎、昔文王處酆、武王處鎬、酆鎬之間百乘之地、伐上殺主、立爲天子、世皆曰聖王、今以孔子之賢、而有書社七百里之地、而三子佐之、非楚之利也、楚王遂止、）夫欺害聖人者愚惑也。傷毀聖人者狂狡也。狡惑之人非人也。夫何恥之有。孟子曰。觀近臣者。以所爲主。觀遠臣者以其所主。使聖人僞容苟合。不論行擇友。則何以爲孔子也。（○好尙云、孟子萬章篇曰、吾聞觀近臣、以其所爲主、觀遠臣、以其所主、若孔子主癰疽與侍人瘠環、何以爲孔子、趙註曰、近臣、當爲遠方來賢者之主。遠臣、自遠而至、當主於在朝之臣賢者、若孔子主於卑幸之臣、是爲凡人耳、何謂孔子得見稱爲聖人乎、）大夫憮然內慙。四據而不言。當此之時。順風承意之士如編。口張而不歙。舉舌而不下。闇然而懷重負而見責。大夫曰諾。膠車修逢雨。請與諸生解。

○好尙云。因に孟軻も諸國に遊說して。用ひられす。また困窮せる事を少か云むに。史記の列傳に孟軻游事齊宣王。宣王不能用。適梁。梁惠王不果所言。則見以爲。迂遠而闊於事情。而孟軻乃。述唐虞三代之德。是以所如者不合。退而與萬章之徒序詩書。述仲尼之意。作孟子七篇。また風俗通窮通篇に。孟軻游於諸侯。然終不屈道趣舍。枉尺以直尋。嘗仕於齊位至卿。後不能用。孟子去齊。尹士曰。不識王之不可以爲湯武。則是不明也。識其不可。然且至則是干祿也。千里而見王。不遇故去。三宿而後出晝。是何濡滯也。軻曰。夫尹士烏知予哉。千

里而見王。是予所欲也。不遇故去。豈予所欲哉。予不得已也。予三宿出晝。於予心猶以爲速。王庶幾改諸。王如改之。則必反予。夫出晝而王不予追也。予然後浩然。有歸志。魯平公駕將見孟子。嬖人臧倉請曰。何哉。君所謂輕身以先於匹夫者。以爲賢乎。樂正子曰。克告於君。君將爲來見也。嬖人有臧倉者。沮君君是以不果。曰行或使之。止或尼之。行止非人之所能也。吾不遇於魯侯天也。臧氏之子。焉能使予不遇哉。又絶糧於鄒薛。困殆甚とも有り。(なほ論衡逢遇篇に、夫以賢事賢君、君欲爲治、臣以賢才輔之、趨舍偶合、其遇固宜、以賢事惡君、君不欲爲治、臣以忠行佐之操志乖忤不遇固宜、或以賢聖之臣、遭欲爲治之君、而終有不遇、孔子孟軻是也、孔子絶糧陳蔡、孟軻困於齊梁、非時君主不用善也、才下知淺不能用大才也、なども云り、)○抑孔丘氏の。棲々遑々として、席煖むるに暇有らず。突煙を凝す事無く。數多の國に遊說して。儒道を勸め行はむと爲しかど。獨も甘心して用ふる者無く。其の容貌

纍々として。喪家の狗の若き形狀にて。生涯困窮して果たるは。其の道の廣大至重なるが故に。凡才の國主たる者の。受行ふ事能はざるには非らず。固より布施し行ひがたき道なる故に。甘心せざりし者の。多かりしと聞えたり。(其の事は、孔氏も自ら深く慷慨れると通えて、論語に、子曰鳳鳥不至。河不出圖、吾已矣夫とも、子曰道不行、乘桴浮于海、從我者其由與とも、或は琴操に、猗蘭操者、孔子所作也、孔子歷聘諸侯、諸侯莫能任、自衛反魯、過隱谷之中、見薌蘭獨茂、喟然嘆曰、夫蘭當爲王者香、今乃獨茂與衆草爲伍、譬猶賢者不逢時、與鄙夫爲倫也、乃止車援琴鼓之云、習々谷風、以陰以雨、之子于歸、遠送于野、何彼蒼天、不得其所、逍遙九州、無所定處、世人闇蔽、不知賢者、年紀逝邁、一身將老、自傷不逢時、託辭於薌蘭云、と有るは、倶に歎息の切なるにて、哀憐むべき事なりかし、)孔丘氏の當時は。更にも云はず。其の後世々。敎の如く行ひし人は。最々稀なりしを以ても知るべし。(上にも論へる如く、徐偃王が、少か仁

義の道を行ひて、楚の爲に滅ぼされ、儒道を用ひて治めたりし魯國の、次々に削り弱められたる事をも、考へ合すべし、其は司馬談が謂ゆる、勞して功無きのみならず、施し方に據りては、國政の妨となる事も多ければ、能く折衷して用ふべし、後世の俗儒の如く、空論空理に墓りて、實徵を試みず、文を尊び武を忽にする通弊に、惑ふこと勿れ）然れど眞實に施し行ふ時は。國政に益有る事云までも無く。彼の孔丘氏の魯に用ひられし間は。孔子世家に。定公十四年。孔子年五十六。由大司寇。行攝相事。於是誅魯大夫亂政者、少正卯、與聞國政。三月粥羔豚者。弗飾賈。男女行者別於塗。塗不拾遺。四方之客至乎邑者。不求有司。皆予之以歸。齊人聞而懼云々と有り。また齊の景公と。夾谷に會せる時の事など。委く史記及び家語にも記せるを見て知るべし。（なほ孔子の弟子なる子路が。蒲を治め、宓子賤が單父を治め、子貢が信陽令たりし時の政事、子羔が衛の刑政、皆孔子の敎を受て、國政に施し益有し事、韓非子、韓詩外傳、說苑、新序などに見えたるが

如し、其外諸書に、此の類の事跡は許多有りて、枚擧するに暇有らず、）然のみならず。倫ひ少なき博覽宏才の人にて。抱朴子勗學篇に。且夫聞商羊而戒浩瀁。（〇說苑辨物篇曰、齊有飛鳥、一足來下止于殿前、舒翅而跳、齊侯大怪之、又使聘問孔子。孔子曰此名商羊、急告民趣治溝渠、天將大雨、於是如之、天果大雨、諸國皆水齊獨以安、孔子歸弟子請問、孔子曰異哉小兒、有兩々相牽、屈一足而跳、曰天將大雨、商羊起舞、今齊獲之。亦其應也。夫謠之後、未嘗不有應隨者也。故聖人非獨守道而已也、睹物記也、即得其應矣。）訪鳥砮而洽東肅。（〇魯語下曰、仲尼在陳、有隼、集于陳侯之庭而死、楛矢貫之、石砮其長尺有咫、陳惠公使人以隼、如仲尼之館問之、仲尼曰隼之來也遠矣、此肅愼氏之矢也、昔武王克商、通道于九夷百蠻、使各以其方賄來貢、使無忘職業、於是肅愼氏貢楛矢石砮、其長尺有咫、先王欲昭其令德之致遠也、以示後人使永監焉、故銘其栝、曰肅愼氏之貢矢、以分大姬、配虞胡公、而封諸陳、古

者分同姓、以珍玉、展親也、分異姓以遠方之職貢、使無忘服也、故分陳以肅愼氏之貢、君若使有司求諸故府、其可得也、使求得之金櫝如之、）諸萍實而言色味〇（一）説苑辨物篇曰、楚昭王渡江、有物、大如斗、直觸王舟、止於舟中、昭王大怪之、使聘問孔子、孔子曰此名萍實、令剖而食之、惟霸者能獲之此吉祥也、弟子請問、孔子曰異哉、小兒謠曰、楚王渡江、得萍實、大如拳、赤如日、剖而食之、美如蜜、此楚之應也、）訊土狗而識墳羊、（一）魯語下曰、季桓子穿井獲如土缶、其中有羊焉、使問之仲尼、曰、吾穿井而獲狗、何也、對曰以丘之所聞羊也、丘聞之、木石之怪曰夔蝄蜽、水之怪曰龍罔象、土之怪曰羵羊、また搜神記墳羊作賁羊、）披靈寶而知山隱、（一）繹史孔子類記四引、靈寶要略曰、昔太上以靈寶五篇眞文、以授帝嚳、帝嚳將仙、封之於鍾山、至夏禹、巡狩度弱水、登鍾山、遂得是文、後復封之包山洞庭之室、吳王闔閭出游包山、見一人、自言、姓山名隱居、闔閭扣之乃入洞庭、取素書一卷、呈

闔閭、其文不可識、令人齎之問孔子、孔子曰丘聞童謠曰、吳王出游、觀震湖、龍威丈人山隱居、北上包山入靈墟、乃入洞庭竊禹書、天地大文不可舒、此文長傳百六、初若强取出喪國廬、闔閭乃尊事之、）因折俎而説專車〇（一）説苑辨物篇曰、吳伐越隳會稽、得骨專車、使使問孔子、曰骨何者最大、孔子曰禹致群臣會稽山、防風氏後至、禹殺而戮之、其骨節專車、此爲大矣、曰防風氏何守、孔子曰汪芒氏之君、守封嵎之山者也、在虞夏〇爲防風氏、商爲汪芒氏、於周爲長狄氏、今謂之大人、使者曰人長幾何、孔子曰僬僥氏三尺短之至也、長者不過十數之極也、使者曰善哉聖人也、）瞻離畢而分陰陽之侯〇）〇論衡明雩篇曰、孔子出使子路齎雨具、有頃天果大雨、子路問其故、孔子曰昨暮月離于畢、後日月復離畢孔子出、子路請齎雨具、孔子不聽、出果無雨、子路問其故、孔子曰昔日月離其陰、故雨、昨暮月離其陽、故不雨）由冬螽而覺閏餘之錯〇（一）哀公十二年左傳曰、冬十二月螽、季孫問諸仲尼、仲尼曰丘聞之、火

伏而後蟄者畢、今火猶西流、司歴過也、杜注曰、火心星也、火伏在今十月、猶西流、言未盡沒、故知、是九月、歴官失一閏、また家語辨物篇曰、季康子曰、所失者幾月也、孔子曰於夏、十月火既沒矣、今火見、再失閏也、）何神之。有學而已矣と云ひ。また喩蔽篇に。昔諸侯訪政。弟子問仁。仲尼答之。人々異辭。蓋因事託規。隨時所急。譬猶治病之方千百。而針灸之處無常。却寒以温。除熱以冷。期（〇藏本作其、）於救死存身而已。豈可詣者逐一道。如齊楚而不改路乎。と有にても。才器の卓絶たるを辨ふべし。（政を訪ひ、仁を問へるなどの事蹟は、論語及び、孔子世家に委く見えたれば、抄し出ず、）また鬼神の實有なる由をも悟り。大概其の情狀をも識りて。尊び敬ひたる事は。師翁の鬼神新論に。孔子曰く。君子畏天命。小人不知天命。而不畏也。また獲罪於天。無所禱也。また欺天乎。また知我者。其天乎など云へり。形なく情なき物を。いかで我を知るとは云ふべからむ。（然るを伊藤仁齋の論語古義に、此を論ひて云へるは、何謂天知之乎、曰天無心、以人心爲心、直則悦、誠則信、と云へるは、儒者にして、などて如是孔子の言行に暗きや、徂徠の徵にこれを破りて、孰謂仁齋先生非理學乎と云へるは、實にさること也、）此等の言どもを。熟考へたらむには。孔子の。天上に實物の神在て。世中の萬事を主宰り賜ふことを。よく悟りて。畏るべく。欺くまじく。天津神の心に背ては。他に禱る神はなしと。畏りたる事を思ひ得つべし。其は天津神は。譬ば諸神の君の如くに坐せばなり。（此を天帝と云はで、只に天とのみ云へるは、譬へば山川之神、其舍諸といふべきを、山川其舍諸とある、山川の字義の如く、其在所を以て云へるなり、）また只に。孔子の言と行ひとにのみ徵すとも。その實有なることは知らるべきを。今まで。然る人も聞えざるはいかにぞや。是は誰も。書籍の上の空説にのみ拘泥みて。熟く古の事實と。孔子の言行に。心留めざる故ならむか。思ふに孔子の靈。幽冥に在て。然こそは云ふ甲斐なく思ふらめ。と謂れたるが如し。（なほ同書に、禮記の祭儀に孔子の語な

りとて、人生有レ氣、有レ魂有レ魄、氣也者神之盛也、魄也者鬼之盛也、衆生必死、死必歸レ土、此謂レ鬼、魂氣歸レ天、此謂レ神、合二鬼與一レ神而享レ之、教之至也、骨肉斃二于下一、化爲二野土一、其氣發二揚于上一爲二昭明焄蒿悽愴一、此百物之情也、とあるなどを引て、人の生るゝと死るとは、陰陽二つの氣の、聚ると散るとにて、聚れば人となり、散りては元の陰陽に復る、そは薪盡て煙の騰上るが如く、何所に歸くと云ふ事なく消散るなり、死生人鬼一にして二つ、二つにして一つなり、子孫の祭をなすに及びて、來格ることは、子孫は此祖先の氣なる故、彼此もと一氣なれば、祭禮にその誠を盡すときは、同氣感じて、感格あるなりなど云へり、まづ祭儀なる人生有レ氣云々の語を、孔子の語なりと云こと信がたし、さるは論語に依て熟考ふるに、孔子はかやうに隱れたるを索め、知らざる事を云ふ人とは見えねばなり、案ふに此は、決めて後世の小ざかしき者の、孔子に託たる妄說なること論ひなし、然るは今一層この上を問ひて、しか陰陽聚りて人と生れ、氣魂魄といふ、三つの奇物を生じて、かく活動き、また陰陽消散て死るときは、其の魂は天に發揚り、魄は土に歸ることは、何の理によりて然るや、また同氣相感とやらむ、其の子孫にのみ、別て感格有ることは、如何なる理によりて然るやなど、窮問たらむには、いかにとかする、此に至りては、百千の（賴國云此上に擬の字を加ふべし）聖人、額を聚めて考へたりとも、知ること能はじをや、然てこそ孔子は、不レ知レ生焉知レ死、とは云へりけれ、とも論はれたり、實にも孔子は、宋儒等が如く、空論空理は語らぬ人なりけり）然は有れど。老子も。何くれと誡めたる如く。詩書禮樂の六經を唱へ。七十餘國に周流して。其の道を行はむと爲しは。荀子勸學篇に。不レ問而告。謂二之傲一（楊倞注曰傲喧噪也、言與二戲傲一無レ異、或曰讀爲レ嗷、口嗷々然也嗷與レ敖通、）問レ一而告レ二。謂二之囋一（囋即讚字也、謂三以レ言強讚二助之一、今讚レ禮謂二之讚唱一、古字口與レ言多通、）傲非也、囋非也と有る心ばへ。無きにしもあらず。また陳蔡に困窮せるなどは更なり。都ての行跡、上に揭られたる聖說に、符はさるのみならず

す。淮南子假眞訓に。聖人託其神於靈府、而歸於萬物之初。視於冥冥聽於無聲。冥冥之中獨見曉焉。（高注曰曉明也、）寂漠之中獨有照焉。其用之也以不用。其不用也而後能用之。其知也乃不知。其不知也而後能知之也。（また精神訓に、聖人法天順情、不拘於俗、不誘於人、以天爲父、以地爲母、陰陽爲綱、四時爲紀とも云へり、）と云ひ。管子內業篇に。中無惑意。外無邪菑。（房注曰、邪菑生於惑意、故內無惑意、則邪菑自銷也、）心全於中形全於外。不逢天菑不遇人害。謂之聖人。ともまた說花辨物篇に。管仲曰。夷吾聞之。聖人先知無形。今已有形乃知之。是夷吾善承教非聖也。など有る語にも符はず。眞聖には非る事。返す〲明なり。其を强て聖人と稱せるは。孟軻等を始め。周末の儒者の。嘩く謂出たるにて。孔丘氏の本意にあらざる事を辨ふべし。但し儒も墨も。七雄の頃より。種々に別れて。佛者が謂ゆる。如是我聞と云如く。互に正統精況と稱すれども。眞僞混殽し。一以之を貫くと云ふ。純粹なる儒生は。最少くぞ

成れりける。韓非子顯學篇に。世之顯學儒墨也。儒之所至孔丘也。墨之所至墨翟也。自孔子之死也。有子張之儒。有子思之儒。有顏氏之儒。有孟氏之儒。有漆雕氏之儒。有仲良氏之儒。有孫氏之儒。有樂正氏之儒。自墨子之死也。有相里氏之墨。有相夫氏之墨。有鄧陵氏之墨。故孔墨之後、儒分爲八。墨離爲三。取舍相反不同。而皆自謂眞孔墨。孔墨不可復生。將誰使定後世之學乎。孔子墨子俱道堯舜。而取舍不同。皆自謂眞堯舜。堯舜不復生。將誰使定儒墨之誠乎。殷周七百餘歲。虞夏二千餘歲。而不能定儒墨之眞。今乃欲審堯舜之道。於三千歲之前。意者其亦可必乎。無參驗而必之者愚也。弗能必而據之者誣也。故明據先王必定堯舜者。非愚則誣也。愚誣之學。雜反之行。明主弗受也。（漢書藝文志に、昔仲尼沒而微言絕、七十子喪而大義乖、故春秋分爲五、詩分爲四、易有數家之傳、戰國從衡、眞僞分爭、云々また唐虞之隆、殷周之盛、仲尼之業已試之、效者也、然惑者既失精微、而辟者又隨時抑揚、違離道本、苟

以譁衆、取寵、後進循之、是以五經乖折、儒學寖衰、此辟儒之患とも云ひ、儒者が其の筋を得たりと云ふ、孟子を見ても、性の善惡は更なり、都ての議論純一ならず、理屈のみ多きは何にぞや、孔丘氏に遠からぬ書にすら、斯有れば、況て其後の荀卿揚雄など、然も有べき事なりかし〕斯て間も無く。七雄の王ども。次々に滅亡して。秦の代と爲れるが。始皇はもとより。暴逆の事も多けれど。また英斷絶倫の俊傑にて。國政の趣も。大概故きを襲はず。新法を立たる事甚だ多し。此は師翁の西籍概論に。さて此の始皇が始めたる事どもは。悉く先代に變りて。何事も一層づゝ。私事をば尊く定め。種々新法を立たるに據りて。其の世の儒者ども。盧生。淳于越など。例の小賢き。聖人の理屈を云て。始皇が所業を。誹謗したるより事起り。儒生等が當時を誹るは。詩書百家の書ども。世に傳はる故の事なりと云て。秦國の記錄と。醫藥。卜筮。種樹の書のみ遺して。詩書百家を燒かせ。古を以て今を非る者は。族せむと云へるに。〔〇好尙曰、始皇本紀に、始皇置酒咸陽宮、博士七十人前爲壽。僕射周青臣進頌曰、他時秦地不過千里、賴陛下神靈明聖、平定海內、放逐蠻夷、日月所照、莫不賓服、以諸侯爲郡縣、人々自安樂、無戰爭之患、傳之萬世、自上古不及陛下威德、始皇悅、博士齊人淳于越進曰、臣聞殷周之王千餘歲、封子弟功臣、自爲枝輔、今陛下有海內、而子弟爲匹夫、卒有田常六卿之臣、無輔拂、何以相救哉、事不師古、而能長久者非所聞也、今青臣又面諛、以重陛下之過、非忠臣、始皇下其議、丞相李斯曰、五帝不相復、三代不相襲、各以治、非其相反、時變異也、今陛下創大業、建萬世之功、固非愚儒所知、且越言、乃三代之事、何足法也、異時諸侯並爭、厚招游學、今天下已定、法令出一、百姓當家、則力農工、士則學習法令辟禁、今諸生不師今而學古、以非當世、惑亂黔首、丞相臣斯昧死言、古者天下散亂、莫之能一、是以諸侯並作、語皆道古以害今、飾虛言以亂實、人善其所私學、以非上之所建立、今皇帝幷有天下、別黑白而定一、尊私學、而相與非法教、人聞令下、則各以其學議之、入則心非、出則巷議、夸主以爲名、異取以

爲高、率群下以造謗、如此弗禁、則主勢降乎上、黨與成乎下、禁之便、臣請史官非秦記皆燒之、非博士官所職、天下敢有藏詩書百家語者、悉詣守尉雜燒之、有敢偶語詩書者棄市、以古非今者族、吏見知不擧者與同罪、令下三十日不燒黥爲城旦、所不去者醫藥卜筮種樹之書、若欲有學法令、以吏爲師、制曰可、と有に據て師は論はれたるなり、)なほ議論せる儒者も有し故。遂に四百六十餘人を捕へて。盡く生ながら坑に埋めたり。此は如何にも。暴逆なる事なれど。事は故有事なり。其の趣の可笑さに就て。彼川柳點に。「秦の儒者 命なる哉と穴で云ひ。」と有るは此事なり。儒者等は。何にも天なる哉。命なる哉などは。常に云ことなれば。斯く哭泣きけむと。想像られたり。(〇)好尙云、三十五年、侯生、盧生相與謀曰、始皇爲人、天性剛戾自用、起諸侯、拜天下、意得欲從、以爲自古莫及已、專任獄吏、獄吏得親幸、博士雖七十人、特備員弗用云々、於是乃亡去、始皇聞亡、乃大怒曰、吾前收天下書、不中用者盡去之、悉召文學方術士、甚衆、欲以興太平、今聞韓衆去不報、徐市等費以巨萬計、終不得藥、徒姦利相告日聞、盧生等吾尊賜之甚厚、今乃誹謗我、以重吾不德也、諸生在咸陽者、吾使人廉問、或爲訞言以亂黔首、於是使御史悉案問諸生、諸生傳相告引乃自除、犯禁者四百六十餘人、皆阬之咸陽、使天下知之以懲後と云ひ、また漢書儒林傳に、及至秦始皇兼天下、燔詩書殺術士、六學從此缺矣、師古曰、今新豐縣溫湯之處、號愍儒鄕、溫湯西南三里有馬谷、谷之西岸有阬、古老相傳以爲秦阬儒處也、衞宏詔定古文官書序云、秦旣焚書、患苦天下不從所改更法、而諸生到者拜爲郎、前後七百人、廼密令冬種瓜於驪山阬谷中溫處、瓜實成詔博士諸生說之、人々不同、廼命就視之、爲伏機、諸生賢儒皆至焉、方相難不決、因發機從上塡之、以土皆壓、終廼無聲、此則閔儒之地、亦不謬矣と見えて、論衡語增篇にも、燔詩書起淳于越之諫、坑儒士起自諸生爲妖言、見坑者四百六十七人と有るなどに据りて論はれしなり、なほ說苑反質篇に、侯生と云者、捕へられし時、痛く始皇を諫めしに、始皇喟然として嘆じ、遂に釋して誅せ

ざりし事有れど、文長ければ記さず、此は殊勝なる事にこそ、）さて此の時。始皇が書を燔き。儒を坑に埋めたるに據りて。後世の儒者。動すれば。始皇が盡く燔き盡したる如く云を。然らずとて。千百年眼と云ふ書に。始皇之始。非不好士亦未嘗惡書云々。其焚書之令。以淳于越議封建也。また儒者を坑に塡めたるは。盧生が讒。其の世の事を議せるに據り。實は激して爲たる事なり。其は何にと謂ふに。此の時陸賈。酈食其が輩は。皆秦の代の儒者にして漢に仕へ。また陳渉が起りし時。秦の二世皇帝が。博士儒生を召て。其故を問に。春秋の義を引て對へたる者。三十餘人有しと云へり。然れば秦の時に。嘗て儒生と經學とを用ひざりしに非ず。また後に。叔孫通と云る儒者の。漢に降る時。弟子百餘人を連て居たる由なれば。儒者と書籍を。悉く廢せるに非ず。（）好尙云、史記叔孫通傳曰、陳勝起山東、使者以聞、二世召博士諸儒生問曰、楚戍卒攻蘄入陳、於公如何、博士諸生三十餘人前曰、人臣無將、將卽反、罪死無赦、願陛下急發兵擊之、集解に、瓚曰、將謂逆亂也、公羊傳曰、君親無將、將而必誅、また同傳に、叔孫通之降漢、從儒生弟子百餘人と見えたり、）然るに後世、古書の分明ならざる所有るを。秦火々々と云て。始皇が所業とするは。心得がたし。古書の闕たるは。固より闕たるなり。と備に論じたるは。實に然る事なり。必始皇が。詩書百家を惡みて、焚たるには非ず。と謂れたるは。實にさる事どもなり。斯て始皇が書を焚き。儒生を坑に埋めたるは。暴逆なる所爲なれど。故有る事なりと有るを。熟考ふるに。王充衡實知篇に。孔子將死。遺讖書曰。不知何一男子。自謂秦始皇。上我之堂。踞我之牀。顚倒我衣裳。至沙丘而亡。其後秦王兼吞天下。號始皇。巡狩至魯。觀孔子宅。乃至沙丘。道病而崩。又曰董仲舒亂我書。其後江都相董仲舒。論思春秋。造著傳記。又書曰。亡秦者胡也。其後二世胡亥。竟亡天下。用三者論之。聖人後知萬世之效也。案神怪之言。皆在讖記所表。皆效圖書。亡秦者胡。河圖之文也。孔子條暢增益。以秦神怪。或後人詐記。以明效驗。と見えたり、亡秦者胡、河圖之文也と有れば。始皇と董仲舒の事も。同書の文なるか。餘の讖緯に見えた

る語なるか知らねど。王充が云へる如く。後人の詐り記したるものなるべし。倘實ならむには。始皇は。孔丘氏の再生なるか。（身まかりし人の、再生せる事も無きに非ず、古くは晉の羊祜が金環を見識り、鮑靚が、前世に井に墮て死たる事を覺え居りし類ひ、また近く文化の末つかた、武藏國多摩郡中野村なる、勝五郎と云へる者の、再生したりし事有りしを、師翁の再生記聞と謂ふ書を著されて、委く論辯せられたる物有り、また佛家には、斯有る類ひ殊に多し、是また師翁の、古今妖魅攷に委く見えたり、其の書どもに就て見るべし。）然無くとも。孔丘氏は上にも論へる如く。端正質直にして。似て非なるものは更なり。名の正しからぬを。痛く憎める性なれば。儒聖とは稱するとも。眞聖には非ざるを。孟軻等が。諸侯に諂諛ふ奸ましき意より。强て眞聖と尊崇するを始め。末派の俗儒輩が。末迹を考索せず。群犬の聲に吼る諺の如く。喋々として。聖人と稱するは。返す返す。孔丘氏の本意に非ず。我志春秋に有りとも。また我を知るもの。それ唯春秋か。と云へるに其の書に。國惡を忌を重くし。また其の國に居ては。其の大夫をも誹らずと謂ふ。孔子の學則なるに。始皇が暴逆にもせよ。彼淳于越。盧生等が。國政を誹謗るは。儒の敎に背ける所爲なれば。（今の世にも、孔子の敎へに背けたる儒者少からず、鈴屋翁の馭戎慨言にも、おのが國を卑しめて、人の國を尊むは、却りてかの、諸越の掟にも背ける物をや、但しかの堯舜禹湯文王武王など云らむ王をば、儒者は其の道の祖なれば、尊ばむも然る事なるを、其の心より移りて、さらぬ代々の王どもをも、並て尊み、又其國をも、中華、中國、上國など云ひて、ひたすら尊むあまりに、却りて皇國をば、殊更に東夷などゝ云ひなすなるは、最も可畏く、大反逆に等しき罪人也、然れど今の御代には、書の上の詞などは、とあるもかゝるも、さして咎めさせ給はぬから、憚りもなく、口に任せ筆に任せて、かゝる狂れ言どもをさへ、謂もし書きもするなめり、抑、書と云物は天の下にひろごりて、後の世までも、傳はりゆく物にし有れば、斯有る橫さま事せむ徒は、重き御咎めも、有らまほしきわざになむ、大寶の御さだめにも、蕃國の列に置れ、其の人をも蕃客と有るうへは、必その御令にこそ從ふべ

きわざなれ、可畏も皇朝の御令に背きて、かの外國のさだめにしも從ひ云はむは、甚じき罪人にあらずや、儒者ならむからに、諸越人には非ず、皇國人にして皇國に有らむほどは、いかでか皇朝の御法に背く事を得む、と云はれ、漢字三音考にも、凡て何事にも、よし無き漢國を、一向尊尙して、皇國をば、漫りに貶しめ賤しむるを、卓見の如く意得るは、近世狂儒輩の習ひ也、抑他國を尊みて、本國を卑しむるが、孔丘氏の敎にや、返す〳〵意得ぬ事なりかしと論はれたるは、信に然る事なり）孔丘氏の靈。幽境より熟視して。いかに遺憾く思ひけむ。遂に其の慷慨の志。宥むる事能はず。秦の始皇と轉生して。天下を一統し。驕慢暴虐を逞くして。聾聵に等き儒生等を。坑殺したりと謂ふ道理の。少か無きにしも非ず。此は試みに云ふのみ。韓非子亡徵篇に。群臣爲レ學。門子好レ辨者可レ亡也。（管子も、博學にして、法令を守らざる者は、奸人之雄也、なども云へり）と有るは。淳于越の徒を誡めたるにて。普通の儒生の事には非るべし。なほ儒家の事に就ては。議論すべき事も許多有れど。聖說には。大概關係らぬ事なれば是にて筆を閣くになむ。

老子集語稿

平篤胤集記

老子曰人生天地氣中動作喘息皆應於於天地勿謂闇昧神見我形勿謂小語鬼聞我聲人爲陽善人自報之人爲陰善鬼神報之。人爲陽惡人自治之人爲陰惡鬼神治之。故天不欺人示之以影。地不欺人示之以響。爲善爲惡天皆鑒之。犯禁滿千地收其形。人有修善積德而遭凶禍者先世之餘殃也。爲惡犯禁而遇祥福者先世之餘福也。故善人行不擇時日至凶中得凶中之吉入惡中得惡中之善惡人行動擇時日至吉中反得吉中之凶入善中反得善中之惡此皆自然之符也。

老子曰人生大限百年節護者可至千歲、衆人大言。而我小語衆人多煩而我小記衆人悖暴而我不怒。不以俗事累意。不臨時俗之儀談然無爲神氣自滿以此爲不死之道天下莫我知也。

老子曰人欲求道勿起五逆六不祥大小便向西一逆。向北二逆。向日三逆。向月四逆。仰視日月星辰五逆。夜半裸形一不祥。旦起嗔心二不祥。向竈罵詈三不祥。以足內火四不祥。夫妻晝合五不祥。盜師父物六不祥。

老子曰旦起常言善事天與之福勿言奈何及禍事名請禍。愼勿牀上仰臥大凶。臥伏地大凶。飽食伏地大凶。以匙筯擊盤大凶。

老子曰大勞行房室露臥發癲病。醉勿食熱。食畢摩腹能除百病。熱食傷骨。冷食傷肺。熱無灼脣。冷無氷齒。食畢行步躊躇。則長生。食勿大言大飽血脈閉。臥欲得數轉例。冬溫夏凉愼勿冒之大醉神散越。大樂氣飛揚。大愁氣不通。久坐傷筋。久立傷骨

老子曰凡欲坐先解脫右靴履大吉。用精令人氣乏。少睡令人目盲多睡令人心煩。食美食令人洩痢。沐浴無常不吉。沐與浴不同日同日沐浴凶。說夢者凶

老子曰凡日月薄蝕。大風。大雨。虹蜺。地動。雷電。霹靂。大寒。大霧。四時節變不可交合陰陽愼之。

老子曰凡夏至後丙丁日。冬至後庚辛日。皆不可陰陽會合大凶。

老子曰凡大月十七日。小月十六日不可交會犯之

傷血脉。

老子曰凡月二十三日。五日。九日。廿日。此生日也交會令人無疾病

老子曰凡新浴遠行。及疲飽食醉。大喜大悲。男女熱病未差。女子月血新產者皆不可合陰陽。熱病新產交者死。

老子曰凡人生疾病者是風日之子。生而早死是晦日之子。在胎而傷者是朔日之子。生而母子俱死者是雷電霹靂日之子能行步有知而死者是下旬之子。兵血死者是月水盡之子。又是月蝕之子。雖胎不成者。是弦望之子。命不長者是大醉之子。常摐有疾、老子往問焉曰、先生疾甚矣、無遺敎可以語諸弟子者乎。常摐曰、子雖不問吾將語子、常摐曰、過故鄉而下車、子知之乎。老子曰過故鄉而。下車、非謂其不忘故耶。常摐曰、嘻是已、常摐曰過喬木而趨子知之乎、老子曰、過喬木而趨、非謂敬老耶、常摐曰嘻是已張其口而示老子曰、吾舌存乎、老子曰然、吾齒存乎。老子曰亡。常摐曰、子知之乎。老子曰。夫舌之存也。豈非以其柔耶。齒之亡也豈非以其剛耶、常摐曰嘻是已。天下之事已盡矣。無以復語子哉（說苑敬愼篇）

老子曰、得其所利必慮其所害。樂其所成必顧其所敗、人爲善者天報以福。人爲不善者天報以禍也（同上）

周幽王二年、西周三川皆震。伯陽父曰。周將亡矣。夫天地之氣。不失其序。若過其序、民亂之也。陽伏而不能出、陰迫而不能烝。於是有地震。今三川震、是陽失其所而塡陰也、陽溢而壯陰源必塞、國必亡、夫水土演而民用足也。土無所演民乏財用、不亡何待、昔伊雒竭而夏亡、河竭而商亡。今周德如二代之季矣。其川源塞。塞必竭。夫國必依山川、山崩川竭亡之徵也、川竭山必崩、若國亡不過十年數之紀也。天之所棄不過紀。是歲也三川竭、岐山崩、十一年幽王乃滅。周乃東遷（說苑辨物篇）

仲尼問老聃曰。甚矣道之於今難行也。吾比執道委質。以求當世之君。而不我受也。道之於今難行也。老子曰。夫說者流於聽言者亂於辭如此二者則道不可委矣。（說苑反質篇）

史記周本紀曰

幽王二年西周三川皆震（徐廣曰涇渭洛也駰按韋昭云西周鎬京地震動故三川亦動正義曰按涇渭二水在雍州北洛川一名漆沮在雍州東北南流入渭此時以王城為東周鎬京為西周）伯陽父甫曰周將亡矣（韋昭曰伯陽甫周大夫也唐固曰伯陽父周柱下史老子也）夫天地之氣不失其序若過其序民之亂之也（韋昭曰過失也言民不敢斥王者也）陽伏而不能出陰迫而不能烝（韋昭曰蒸升也陽氣在下陰氣迫之使不能升也）於是有地震今三川實震是陽失其所而鎮陰也（韋昭曰為陰所塡笮也）陽失而在陰（韋昭曰在陰下也）川源必塞源塞國必亡夫水土演而民用也（水土氣通為演々猶潤也演則生物民得用之）水土無所演民乏財用不亡何待昔伊洛竭而夏亡（禹都陽城伊洛所近也）河竭而商亡（商人都衛河水所經也）今周德若二代之季矣其川源又塞々必竭夫國必依山川山崩川竭亡國之徵也川竭前後必山崩（水泉不潤枯朽而崩也）若國亡不過十年數之紀也（數起於一終於十十則更故曰紀也）夫天之所弃不過其紀是歲也三川竭岐山崩十一年幽王乃滅周乃東遷三年幽王嬖愛襃姒々々生子伯服幽王欲廢太子太子母申候女而為后後幽王得襃姒愛之欲廢申后并去太子宜臼以襃姒為后以伯服為太子周太史伯陽讀史記曰（正義曰諸國皆有史以記事故曰史記）周亡矣昔自夏后氏之衰也有二神龍止於夏帝庭而言曰余襃之二君（虞翻曰龍自號襃之二先君也）夏帝卜殺之與去之與止之莫吉卜請其漦而藏之乃吉（韋昭曰漦龍所吐沫沫龍之精氣也）於是布幣而策告之（韋昭曰以簡策之書告龍而請其漦也）龍亡而漦在櫝而去之（〇櫝匱也）夏亡傳此器殷々亡又傳此器周比三代莫敢發之至厲王之末（虞翻曰末年王流彘之歲）發而觀之漦流于庭不可除厲王使婦人裸而譟之（譟讙呼也唐固曰羣呼曰譟）漦化為玄黿以入王後宮（索隱曰亦作蚖音元玄蚖蜇蜴也）後宮之童女妾。既齔而遭之（毀齒曰齔女七歲而毀也）既笄而孕（正義曰笄音雞禮記云女子許嫁而笄鄭玄云笄今簪）無夫而生子懼而弃之宣王之時有童女謠曰檿弧箕服實亡周國（〇山桑曰檿弧弓也箕木名服矢房也）於是宣王聞之有夫婦賣是器者宣王使執而戮之逃於道而見鄉者後宮童妾所弃妖子出於

路者(徐廣曰妖一作天天幼少也)聞其夜啼哀而収之夫婦遂亡奔於褒褒人有罪請入童妾所弃女子者於王(正義曰國語云周幽王伐有褒褒人以襃姒女焉與虢石甫比也)以贖罪弃女子出於褒是爲褒姒當幽王三年王之後宮見而愛之生子伯服竟廢申后及太子以褒姒爲后伯服爲太子(索隱曰左傳所謂携王奸命是也)太史伯陽曰禍成矣無可奈何

且宣王之時有童謠曰檿弧箕服實亡周國於是宣王聞之有夫婦鬻是器者王使執而戮之府之小妾生女而非王子也懼而棄之此人也收以奔褒褒人有獄而以爲入天之命此久矣其又可爲乎訓語有之(訓語周書)曰夏之衰也褒人之神化爲二龍以同于王庭而言曰余褒之二君也夏后卜殺之與去之與止之莫吉卜請其漦而藏之吉乃布幣焉而策告之龍亡而漦在櫝而藏之傳郊之及殷周莫之發也及厲王之末發而觀之流漦於庭不可除也王使婦人不幃而譟之化爲玄黿以入于王府府之童妾未既齔而遭之既笄而孕當宣王而生不夫而育故懼而棄之爲弧服者方戮在路夫婦哀其夜號也而取之以逸逃於褒褒人褒姁有獄而以爲入于王王遂置之而嬖是女也使至於爲后而生伯服(鄭語)

○秦莊子死(秦莊子魯大夫)孟武伯問於孔子曰古者同寮有服乎(同官爲寮)答曰然同寮有相友之義貴賤殊等不爲同官(禮爲朋友弔服而加麻然貴賤等級殊則不亦爲同官也)聞諸老聃昔者虢叔閎夭太顛散宜生南宮括五臣同寮比德以贊文武(散素旱反比毗志反○虢國叔字文王弟也閎太散南宮皆氏夭顛宜生括皆名贊佐也五臣相親比以輔佐二王)及虢叔死四人者。爲之服(爲于僞反)古之達理者行之也(爲同寮行服也)○孔叢子記義第三

○子思見老萊子(見賢遍反○老萊子楚隱者)老萊子聞穆公將相子思(相息亮反)老萊子曰若子事君將何以爲乎(問將何以輔相君也)子思曰順吾性情以道輔之無死亡焉(順吾性情言直而不阿也無死亡焉言無徒爲君死亡也)老萊子曰不可順子之性也子性剛而傲不肖又且無所死亡非人臣也子思曰不肖故人之所傲也(不肖之人固人之所以不恭敬)夫事君道行言聽則何所死亡(夫

晉扶聽吐丁反〇道行ニ於其國ー言聽ニ於其君ー則臣無レ所ニ以死亡ー也)道不レ行言不レ聽則亦不レ能レ事レ君(致レ祿而退也而)所レ謂無ニ死亡ー也（道行與レ不レ行亦是無所ニ死亡ー也)老萊子曰子不レ見ニ夫齒ー乎齒堅剛卒盡相磨舌柔順終以不レ弊（夫晉扶卒子恤反盡津忍反（卒亦終也磨猶ニ毀損ー也言強梁者不レ得ニ其死ー宜レ守ニ柔順ー也）子思曰吾不レ能レ爲レ舌故不レ能レ事レ君（言以ニ性不レ能ニ柔順ー故不レ能レ事ニ時君ー也）（孔叢子抗志第拾）

老聃曰爲ニ之於未レ有治ニ之於未レ亂（賈子新書卷二審微篇)昔者南榮跦醜ニ聖道之忘ニ於己ー故步陟ニ山川ー蠶冐楚棘彌レ道千餘百舍重繭而不ニ敢久息ー旣遇ニ老聃ー噩若ニ慈父ー雁行避レ景蘷如立跪進而后敢問見レ敎ニ一高言ー若ニ飢十日而得ニ太牢ー焉是以名達ニ天地ー行立ニ後世ー(賈子新書卷八勸學)

蹈忠而行信。終曰言不在尤之內。(王肅曰尤過)國無道。處賤不悶。(悶憂同レ上)貧而能樂。蓋老萊子之行也(太宰曰大戴禮注曰、楚人隱者也(孔子家語第三弟子行第十三)

孔子見老聃而問焉曰。甚矣道之於今難行也。吾比執道。而今委質以求當世之君而弗受也。道於今難行也。(純曰比。近也。質與贄通。見者所執以爲禮也。韋昭云。士贄以雉。委贄而退)老子曰。夫說者流於辯。(王肅曰、流、猶過也、失也)聽者亂於辭。(純曰。說苑。聽作言)知此二者。則道不可以忘也。(孔子家語第三觀周第十一)

(孔子家三の卷四葉の表老子の悟と思しきことあり考べし、)

潛夫論

顓頊師ニ老彭ー云々孔子師ニ老聃ー(讃學第一)

老子曰夫唯病レ病是以不レ病(卷二思賢第八)

老聃有レ言大丈夫處ニ其實ー不レ居ニ其華ー(卷七釋難第二十九)

博物志

老子云萬民皆付西王母唯王聖人眞人仙人道人之命上屬九天君耳(卷第九雜說上)

續博物志

老君其母曾見日精下落如流星飛入口中有娠七十二歲而生於陳國渦水李樹下剖左腋而生長一十二尺(卷第二)

老子谷神下死至用之不勤此章全是黃帝之言今在五千文內則老氏所著書恐非專已出（卷第七）武德三年晉州人吉善行於羊角山見白衣父老呼善行曰爲吾語唐天子吾爲老君卽汝祖也高祖因立廟高追尊玄元皇帝明皇親註老子令學者習之云々（同上）

後漢襄楷延熹中上疏云宮中立黃老浮屠祠陛下嗜欲不去豈獲其祚或云老子入夷狄爲浮屠浮屠不三宿桑下不欲久生恩愛精之至也天神遺以好女浮屠曰此但革囊盛血遂不盼之（卷第八）

筆叢

道家稱老子化身名號尤衆參會衆說而備錄于後老子初三皇時化身號萬法天師中三皇時化身號盤古先生亦曰有古大先生後天皇伏羲時化身號鬱華子地皇神農時化身號大成子人皇軒轅帝時化身號廣成子少皥時化號隨應子顓帝時號赤精子帝嚳時號錄圖子堯帝時號務成子帝舜時號尹壽子夏禹時化號眞行子商湯時號錫則子文王時、號燮邑子武王時號育成子成王時號經成子周王時號郭叔子漢時爲河上公右見眞仙通鑑及道經一云老子上三皇時爲玄中法師下三皇時爲金闕帝君伏羲時爲鬱華子神農時爲九靈老子祝融時爲廣壽子黃帝時爲廣成子顓頊時爲赤精子帝嚳時爲祿圖子堯時爲務成子舜時爲尹壽子夏禹時爲眞行子殷湯時爲錫則子文王時爲文邑先生一云守藏史或云在越爲范蠡在齊爲鴟夷子在吳爲陶朱公右雜見太平廣記抱朴子等與前說稍不同又化胡經云老子乘日精入淨妙夫人胎爲釋迦造天地經云摩訶迦葉往爲老子淸淨法行經亦云

老子名耳字伯陽一名雅字伯宗一名志字伯光一名石字孟公一名重字子文一名定字元陽一名元字伯始一名顯字元生一名德字伯文（玄妙篇云初生時名玄祿）周武王時爲守藏史遷柱下史至第五帝昭王二十三年過函谷關度關令尹喜後二十五年降于蜀青羊肆會尹喜同度流沙胡域至穆王時復還中夏第十四帝平王時復出關開化蘇隣諸國復還中夏二十七帝敬王十七年戊戌孔子問道於老君退有猶龍之歎第三十五帝烈王二年丁未過秦獻公問以歷數遂出散關至顯王八年庚申東遷至第三十八帝赧王九年乙卯復出散關飛昇崑崙據此則過函關與出散關自是二事老尹喜傳悉同葢過函關乃傳道尹喜出散關乃化服胡王過函關者僅一而出散關者三然過函關見史記其說要爲有徵出散關事漢前群籍無載者必後世道流增益之以求勝釋門耳世多混二事爲一詩家尤易混淆故

詳錄之以備參攷老君母玄妙二女亦尹氏化胡經稱老子投淨妙夫人體爲釋迦則玄妙淨妙皆老子母也

右筆叢壬部玉壺遐覽云々

老子曰若欲長生當須自生。房中之事能生人能殺人故知而能用者可以養命況兼服藥者乎。男不可無女。女不可無男。不可強而閉之。若強而閉之則意不能不動意動則神勞。神勞。則損壽若夢與鬼交。其精自泄。則一洩當十也。

老子曰強入弱出命當早卒弱入強出長生之術。是以夫妻有化生之道陰陽有補益之機且心爲氣主。意到卽行。故男情不動女意未來陰戶初開別有消息採其陰中之氣以助陽丹則可永保性命却老延年法之要妙。在于六字之訣。此六字各有次第。不得顚倒。言存便縮。既縮便吸。既吸便抽。既抽便閉。既閉便展。其序不亂。而功莫大焉。

一曰存者交姤之時、存心物外。雖交合不可着意。要在體交而神不交。若着意乃是神交。而眞汞易洩矣。惟不着意。縱然走失亦不多矣。但當停濁去淸耳。能久而行之不倦則汞氣自然成實矣

原本草稿以下二項全部ヲ削レリ

二曰縮者眞汞將來則縮脇提吸運氣上行氣下則泄將若泄之際如思大便狀靈柯漸々退半步汞來乃止然後。提吸口微吁氣咂定山龍取華地水咽之。樓定又吸山氣一口送下丹田直入靈柯三五次。漸々龜形長大不泄矣

二曰縮者眞汞欲來之際如急忍大便狀縮脇提吸運氣上行氣下則泄。兼存想命門靈柯漸退半步。汞來乃止。然後

三曰抽者緩々進步。不可深不可急。常抽退步。吸接津液、一抽一吸。而不可以口吸。鼻引山氣候其氣至急吸咽之。入腦爲妙、抽吸惟多爲益。玉莖自堅。神氣壯盛。快然樂矣

四曰吸者先靈柯爲受氣之管。當彼此感暢之時上以口鼻吸其津氣下以靑龍吸其液水。存想其上下一齊。俱吸勿令顚倒。能依此採取。則顏赤紅氣入靈柯。約至精室入氣海、直透泥丸。色光澤。精神自然淸爽矣

五曰閉者謂緊閉天關、天關通命門命門通腎府。若天關與命門不閉。則腦氣下降。至命門腎

害流入精室。則易泄也。若閉固。而不降于壜臺。則永無漏洩之患。精既不泄。自然堅硬可御十女不倦。

六曰展者。靈龜緩々。入爐上。採其津。攪漱我津。吸他氣一口。送下循至丹田。運入玉莖三五次。或七八九次。覺龜身森然長大築滿陰戶。號曰展龜。但覺陰戶緊窄。乃其驗也。既滿宜緩不可急躁。交之久遠。使情歡意暢美不可言。若採之既久覺容顏鎖滅。卽換新鼎。不可强行也。

明治四十五年六月十二日印刷
明治四十五年六月十五日發行

定價金貳圓也

著作權所有
不許複刻製

編輯兼發行者　東京市麴町區飯田町五丁目八番地　室松岩雄

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　出版印刷株式會社分工場

製本所　東京市京橋區南鍋町二丁目七番地　由美直之助

發行所　東京市麴町區飯田町五丁目八番地　法文館書店